THE CENTRAL REVIEW

中央公論

5-1930

五月號

45

第四十五年 第五號 第五百八號

興味と教養の二大紀行文集

谷譲次著

踊る地平線

新鮮な感覺と、ユニークな表現と、急速なテンポと、輕快な諧謔と——一言にしていへば、モダーンそのもののやうなジョーヂ・タニー氏の「新世界巡禮」である。十五ヶ國を二箇年に廻つて歩いて、然もその人情と風俗の機微を極め、或る時は中世紀の遺風に接して感激し、或る時は機械文明の最高層を觀て驚異し、また或る時は巴里に淫賣婦の身上話に耳傾け、或る時はスカンヂナビヤの野に戀を讃美する。まさにこれ各國人情の縮圖であると共に世界的教養をもたらす地理書である。一本を備へて君が書架と教養を豐富にし給へ。

四六判上製
貳圓五拾錢
送料拾八錢

ウイリアムス著
前田河廣一郎譯

ソヴエート・ロシヤ風土記

ロシヤの紹介書は汗牛充棟もたゞならないほどある。農村に關したものだけでも數へきれない。だがそれ等の多くは、官報的統計であり、觀光客的瞥見に過ぎなかつた。由來ロシヤ農村は「偉大なる謎」と呼ばれてゐた。然り「偉大なる謎」である。これが眞の實體を解くものは一人、永く彼の地にあつて土民と親しく生活を共にしたもののみである。本書は卽ちそれだ。これは、單なる紀行文や調査ではなく、農民の生活を小說よりも面白く生々と寫し出してゐる。然も著者は日本版のため新たに三章を加へた。ロシヤ農村の眞の紹介書はこれ。

四六判假製
定價壹圓
送料拾貳錢

東京市麴町區
丸ビル八五八

中央公論社發行

振替口座
東京三四番



LIQUID
POLYTAMIN



良寛習字

安田靫彦筆

新版大東京案内

死線を越えて甦生した
新東京の美しさよ！

復興祭

紀念出版

□四六判四百頁函入上製□
□特別撮影寫眞三百葉□
□石版色刷地圖四葉□
□定價壹圓八拾錢□
□郵送料 内地十八錢 其他二十四錢□

「案内」といふ言葉から「旅行案内」なんかを聯想なすつては困ります。と言つても和製ベデカでもなければツーリストビューロー式案内とも違ひます。科學者の頭腦と藝術家の第六感を通じ全面的に認識感受されたメトロポリス東京の紙上建設です。紙上探訪です。紙上散策です。紙上享樂です。輕快で的確な全東京のレヴューです。在來のあらゆる書物に飽きた方は本書を一度手にとつて御覽下さい。前人未踏の編輯法、全然新奇な寫眞、スマートな装幀等々必ずあなたの讀書慾と所有慾を唆るに違ひありません。異郷の同胞諸姉の爲には憧れの東京の移動風景です。一家一本御贈答には是非本書を！

中央公論社版　東京丸ビル　振替口座東京三四番

無條件合同の能否

——（卷頭言）——

無産政黨の大合同は天下の輿論である、所謂無條件合同の要求までを全大衆間の輿論と認むべきやには多少の疑なきに非ずとするも、這の聲の相當に強きことも明白なる事實である。而して此間に在て勞農黨と社民黨との態度は不幸にして合同の實現に對する重大なる支障だとされて居る。

社民黨は勞農黨と一緒になるのは絶對に嫌だと云ふ、合同協議會への參加だけ位は體儀としても承諾したが宜いではないかとの大衆黨側の勸誘をさへ、にべなく刎ねつけた。無條件不合同の固執である。勞農黨は率先して無條件合同を提唱しては居るが、黨内批判の自由は棄てぬと頑張り、更に又社會民主主義を以て資本主義の手先と罵り之が克服を以て先決の急務と主張して熄まない。而もその社會民主主義者に向て無條件合同を吹き掛けて居るのである。表面の宣明に拘らず全線に亙る無僞の統一に意なきは明白であらう。要するに勞農黨と社民黨とは、繰返していふ、合同の實現に對する二大障礙物である。大衆黨の人達が心配するのも又各派青年論客のヤキモキするのも無理はない。

併し客觀的立場から事態を冷靜に觀て社民勞農の二黨は結局提携乃至協働し得ぬものかどうか。

下卑た例だが一つの比喩を取る。吉原附近に私娼が跋扈して本元の遊廓が脅威を感ずる、外の理由で救世軍も亦同じく大に之に關心する。私娼の撲滅を期する點に於て遊廓營業者と救世軍とは正に其志向を同うするものである。けれども兩者の間に完全な協働を期待すべからざるは言ふまでもない。

モ一つの例を取る。救世軍の外に同じく私娼撲滅に關心する他の一團體があるとする。此團體は、救世軍が私娼と共に吉原をも併せて一擧に撲滅せんと突進するに反し、前者に嚴に後者には稍寛ならんとするの態度に出づる、之を結果から觀れば卻て吉原の繁榮を助けることになるとて、救世軍側は之を吉原の手先だと罵つたとする。併し此場合は、一時の泥仕合が如何に烈しくとも、兩者とも元來が社會風教の爲に起つたのだから、其の動機の純潔なる點に於て結局兩者を提携せしめ得ないこともない。少くとも外部の觀察者には兩者協働の可能を信ずるの權利がある。

共産主義の立場から觀て社會民主主義の行動は結果に於て資本主義の手先を勤むることになるのかも知れない。と云つて我々は、例へば安部さんを以て意識的に勤勞階級に裏切つたと考へることは出來ない。外部に現はれた結果に依り自家の主觀的判斷を標準として其人の動機を是否しては際限がない。自分の主張に熱中するの餘り反對の立場を排撃するに時に極端の言辭を弄するは致方なしとして、勞農黨と社民黨とが吉原と救世軍との關係の如きものに非る限り、所謂批判の自由は留保するとしても、同じく無産運動に奉仕する相互の誠意を少しは買つてやつてもいゝではないか。如何なる問題に付ても意見の相違はある。意見の相違に拘らず各自を同一傘下に糾合して鞏固なる組織に集らしむる唯一の原理は、相互信賴の外にはない。

社民黨と勞農黨とは、モ少し心胸を披いて相手方の誠意を見透すことに反省すべきではないか。大衆黨側の有志も亦、合同の實現に骨折る前に、眞の提携合同は相互に誠意を認むる者の間にのみ可能なることを省量せねばなるまい。

中央公論



第四十五年第五號
五月號
五百〇八號

プロレタリア戰略論

——その中心問題を究明す——

猪俣津南雄

一

戰爭は、多くの戰役・無數の戰鬪の一連續である。個々の戰鬪や戰役に勝利するための行動を科學的に規定するものが「戰術」であるならば、全體としての戰爭に勝利するための一般方略を科學的に規定するものは「戰略」である。だから

戰術は、戰略に從位する。戰略は、一貫した大××であり、全體にわたる××方向である。

プロレタリア戰略は、プロレタリア鬪爭の主要目的を決定する。主要同盟軍と豫備隊とを決定する。勢力配備の眼目を決定する。××努力の方向を決定する。

どうしてそれらは科學的に決定されるか？

マルクシズムは、プロレタリア科學として、階級鬪爭の科學である。プロレタリア戰略は、世界および各國の全××諸關係のマルクシスト的分析に基づいてのみ規定せられる。

二

戰略問題の重點は常に××××にある。この、問題の重點をなすものの解決なくして、プロレタリアートの決定的××なるものはあり得ない。

世界の歴史は、種々なる社會階級の興り且つ亡びたことを敎へる。××××の表面上の把持者が何人であるにせよ、××××の××は、社會の發展と共に、一の社會階級の手から他の社會階級の手に移動した。戰略の問題は、先づ、鬪爭的無産階級が一の政治的勢力として登場した時・處において××××は如何なる階級の掌中に握られてゐるかの問題に始まらねばならぬ。

プロレタリアートがすでに能動的な政治的勢力をなしてゐるほどの國においては、もちろんブルヂョアジーもまた一の社會階級として發達してゐるのだが、しかし必ずしもブルヂョアジーが××××を掌握してゐるとは限らない。××××は、近代的資本の所有ではなしに尙ほ半封建的な土地所有を基礎とする地主貴族階級の掌中にあることが少なくない。かゝる國にあつては、ブルヂョア民主々義××は尙ほ遂行されてゐないのである。

ブルヂョア民主主義××が完了し、ブルヂョアジーが完全に××を握つてゐる國におけるプロレタリア戰略の諸規定は最も單純である。鬪爭の主要目的は極めて明瞭であるし、プロレタリアートの××××軍は農村のプロレタリアおよび半プロレタリアであり、××××の方向は、資本家階級と勞働者階級との間を動搖する小ブルヂョア層の中立化・無力化であり、勢力配備の眼目は、プロレタリアートと半プロレタリア層との××を強固ならしめることにある。——吾々はこれを「戰略の第一型」と呼ぶであらう。

ブルヂョア民主々義革命が尚ほ遂行されず、××××は尚ほ地主貴族階級の手に握られ、ブルヂョアジーはいまだ一階級として此の××の行使に參與してゐない場合にもまた、無產階級の戰略は簡明に規定し得られる。この場合のプロレタリアートの××××軍は、農民全體でなければならぬ。即ち農村の半プロレタリア乃至は貧農層のみならず中農層をも含み、屢々富農をさへ含む所の、農民全體でなければならぬ。全農民は、こゝでは、地主貴族階級の半封建的搾取および支配と對立する限りにおいて一階級をなし、プロレタリアートが半封建的專制支配×××を目指す鬪爭の同盟軍を形成する。今や、この同盟の強固化が、勢力配備の眼目である。これとの必然的な關聯において、戰略上の××××の方向は、——小ブルヂョア層の中立化ではなしに——、反動的地主貴族と×××プロレタリアートとの間を動搖する民主々義的ブルヂョアジーの無力化でなければならぬ。そしてこの無力化に××することによつてのみ、プロレタリアートは、勞働者農民の×××民主主義的××を樹立することができ、更にこれをば無產階級××に××せしめ得るのである。——吾々はこれを「戰略の第二型」と呼ぶであらう。が、かやうにブルヂョア民主々義××を社會主義××に轉化せしめるための×××××は、特に貧農との結合を××ならしめて、中農乃至は小ブルヂョア層の一時的中立化に成功することである。この成功が、××を第二段に押し進める。

三

以上は言ふまでもなく甚だシエマ的な言ひ方であるが、此の小論の性質上、以下もまた多かれ少なかれシエマ的な言ひ方をもつて滿足しなければならぬ。

總じて歴史的發展の多樣性と「不規則」性とは、戰略の問題を複雜ならしめる。が、わけてもブルヂョア民主々義××に二つの型があること、しかもブルヂョア民主々義××がしばしば未完成のまゝにブルヂョアジーそのものによつて遺棄せられるといふことは、プロレタリア戰略論を一再ならず迷路にひき入れた。

二つの型のブルヂョア民主々義××とは、資本家型のものと、農民型のものをいふ。資本家型のものは、もちろん、一階級としてのブルヂョアジーが、半封建的地主貴族階級に代つて××××を完全に掌握して××及政治の民主主義化をなし遂げた時に完成するのだが、併し彼等のこの××獲得のための鬪爭の過程において殆ど不可避的に現はれて來る所のブルヂョアジーの妥協性と反動化とのために、ブルヂョア民主々義××は多かれ少なかれ未完成のまゝに遺棄されてあるのが普通である。從つて、今日の資本主義國にして、半封建的殘存勢力を政治的支配に參與せしめてゐない國は極く少數であるし、その國家・政治機構に封建的遺制を持たないものはむしろ例外的の少なさである。資本主義國の「模範」的なものとされ、ブルヂョア民主々義が最も徹底せしめられた國とされるイギリスでさへ、その××機構や政治機構に封建的遺制を持つのは周知のことである。

農民型のブルヂョア民主々義××は、農奴地主制からの解放、半封建的な搾取・支配形態としての地主的搾取及支配からの解放を目指し、耕作者自身による土地所有を目指すものである。從つて農民の鬪爭は、先づ地主貴族階級に向けられた。そこで地主貴族階級に代つて、自己の××を樹立せんとするブルヂョアジーは、自己の鬪爭に農民を動員し、自己の

味方につけんがために、農民の要求を支持したのであつた。だが、ブルヂョアジーが地主貴族階級と妥協し、彼等の存在と支配權とを、何等かの程度・形態において許した限り、農民の要求は蹂躙されざるを得なかつた。かくて、資本家型のブルヂョア民主々義××が未完成のままに遺棄された場合はもとより、ブルヂョアジーがすでに政治的支配の實權を握るに至つた場合——即ち彼等と半封建的勢力とのブロック支配における覇權（ヘゲモニー）を握るに至つた場合にも、農民型のブルヂョア民主々義××を××せしめることは、プロレタリアートの任務として殘されてゐる。

これだけのことを想起しておけば、プロレタリア戰略論の中心問題をつかむのは容易である。問題はかうだ——、次の如き諸條件の下においてのプロレタリア戰略は如何なるものであらねばならぬか？

一、單純にブルヂョアジーのみではなしに、ブルヂョアジーと半封建的地主階級との政治的ブロックが、××××を掌握してゐる。

二、しかし、その政治的支配のブロックにおいて、ブルヂョアジーはすでに覇權（ヘゲモニー）を握つてゐる。

三、とはいへ、たとひ副次的な、從屬的な支配者群としてにもせよ、半封建的地主階級が尙ほ存在し、×××の行使に直接參與してゐる限りにおいて、資本家型のブルヂョア民主々義××は尙ほ徹底してをらず、××・政治機構に多分の封建的遺制を殘すのみでなく、農民型のブルヂョア民主々義××は更に一層未完成であり、從つて尙ほ地主階級の半封建的搾取及び支配をうけるところの農民全體は、地主階級に對して尖銳に對立してゐる。

かゝる諸條件の下におけるプロレタリア戰略はどうかといふ問題に對しては、二つの誤つた解答が可能である。ブルヂョア民主々義××の未完成といふ一面のみに囚はれる者は、前記第二型の戰略そのまゝを解答とするであらうし、反對にブルヂョアジーがすでに政治的覇權を握つてゐるといふ決定的な條件はこれを妥當に認識し得ても、ブルヂョア民主々義××、わけても農民型のそれの未完成といふ條件を正當に評價し得ない者は、たゞ前記第一型の戰略をもつて解答とする

のみで、此の戰略を遂行するための極めて重要な前提條件を指摘することを忘れるであらう。

この問題に對しては、吾々はすでにかなりの長論文四五篇（「現代日本研究」その他に收むるもの）を草して吾々の見解を詳述してをいたから、玆にそれを繰り返すことを避け、たゞ、新らたに以下に述べんとするところのものと關係ある二三の結論のみを摘記するにとどめなければならぬ。

四

その一、農民型のブルヂョア民主々義××が未完成である限り、プロレタリアートは二つの別個の任務を併せ持つ。

第一の任務は、プロレタリアート獨自の××××××を遂行することにある。第二の任務は、未完成のブルヂョア民主主義××を完成に導くことにある。だが、ひとしく農民型の民主々義××が未完成であるにしても、ブルヂョアジーが尚ほ政權を握つてゐない段階にあつては、第一の任務が主要任務であり、これを遂行せしめるものは第二型の戰略である。――どうして主要任務であるかといへば、それの遂行によつて始めて勞働者農民の×××民主々義的××ができ、これの力によつて始めてブルヂョア民主々義××をプロレタリア××に轉化せしめ得るのだから。即ち××の第二段階級を準備し得るのだから。

しかるに、ブルヂョアジーが、――たとひ尚ほ地主階級と政治的ブロックを結んでゐるにもせよ――、すでに政治的覇權を握つてゐる段階においては、ひとしく農民型の民主々義××は未完成であるにしても、それを完成に導く任務はもはや副次的任務に過ぎなくなる。そして第二の任務――即ちプロレタリア固有の、かの獨自の任務こそが主要任務となる。それを××せしめるものは第一型の戰略である。

その二、この場合には、第一型の戰略はもはや用をなさない。――どうしてか？

(1)第二型の戰略における主要××の方向は、××××を掌握する地主貴族階級と×××プロレタリートとの間を動搖するブルヂョアジーを無力化することにあるが、この動搖たるや、未得の××を獲得せんと焦慮するブルヂョアジーのみに特有な動搖である。然るに、既に政治的覇權（ヘゲモニー）を有するブルヂョアジーは、斷じて動搖のブルヂョアジーでない。××××把持のために死をもつて戰ふブルヂョアジーである。彼等はもはや「無力化」し得るものではない。たゞ×××得るものである。

(2)從つて、勞働者農民の××の××もまた、もはや彼等の無力化によつてなし得ることではなくて、たゞ彼等×××によつてのみ可能である。そしてその遂行こそ、プロレタリアート固有の、獨自の任務ではないか。

(3)此の任務遂行に當つては、第二型の戰略における如く、農民全體を×××として賴むことは出來ぬ。富農層はもとより、中農層すらが、都市の小ブルヂョア層同樣に動搖すべきは必然である。從つて、これに打克つために、即ち彼等の中立化を確實ならしめるために、プロレタリアートは、特に貧農層との××を×めることを勢力配備の××としなければならぬ。

その三、然らば、此の場合、何故にプロレタリア固有の、獨自の任務が主要任務であり、ブルヂョア民主々義××完成の任務は副次的任務に過ぎぬといふか？　その理由——

(1)今や第二型の戰略に從つてプロレタリアート獨自の任務を遂行しなければ××××の樹立は絕對に不可能である。

(2)××××の樹立なくしては、——その力によらずしては、ブルヂョア民主々義××完成の任務の遂行すらも不可能である。

その四、ところで、第二型の戰略に從つてプロレタリア獨自の任務を遂行した時に樹立される×××こそは、無產階級××でなくて何か。それはもはや、本來の意味における勞働者農民の×××民主々義××ではあり得ない。

その五、以上を要約するならば、たとひブルヂョア民主々義××が未完成で封建遺制が強く殘存するにもせよ、政治的支配のブロックにおいてブルヂョアジーがすでに霸權(ヘゲモニー)を握れる場合には、プロレタリアートはもはや、ブルヂョア民主々義××をプロレタリア××に轉化(umschlagen)せしめるのではなしに、××を××的にプロレタリア××として××せしめねばならぬ、といふことに歸着する。そして、それは言ふまでもなく、まさにかゝる直接的な發展のための條件があるからである。しかも、さうした條件の重みは、その國の資本主義が高度の發展段階にあればあるほど大であり、その資本主義が半封建的な農民經濟を強く侵してゐればゐるほど大であり、地主の利子衣食者的ブルヂョア化と、農民の半プロレタリア化とが進んでゐればゐるほど大であり、一口に言へば、その社會における二つの基本的な矛盾群――半封建的諸關係に屬する矛盾群と、資本主義的諸關係に屬する矛盾群と――のうち、前者の矛盾群の社會的「比重」が大なるに從つてますます大である。

その六、××が直接的にプロレタリア××として發展するとすれば、戰略は當然に第一型のものでなければならぬ。だが、此の場合における第二型の戰略的鬪爭は、何等の前提なしに開始せられ得るものでは決してない。その前提として、「全農民」××の××が不可缺條件である。×××プロレタリアートは、自己の指導權を把持しつゝ、先づ農民全體と共に進まねばならぬ。そして、直接的にプロレタリア××として發展し得る××をば、まさにさうしたものとして發展せしめるために、先づ農民型の、ブルヂョア民主々義的性質×××運動を持たねばならぬ。かゝる運動は、それ自身としては、いかに發展するも決してブルヂョア民主々義××の完成をすら招來し得ぬとはいへ、プロレタリア××の導火線として全く××××××である。

吾々は、はつきりと言つた――「直接×××狀勢の展開し始める時、プロレタリアートは農民全體と共に進んでゐなければならぬ。かくして××は、ブルヂョア民主主義××として始まらねばならぬ。それは、××××の民主主義化の要求と

土地問題の民主主義的解決の要求との集中統一を意味するところの、勞働者農民×××のスローガンによつて指導せられる大衆××の展開であるであらう。この農民全體との一時的な結合が、プロレタリアートの決定的勝利への第一歩を保證する。だが、この第一歩を踏み出すことによりて早くも第二歩が準備せられねばならぬ。始まらんとする中農の動搖に備へて主要同盟者貧農との結合が緊密化されねばならぬ。……勞働者農民×××のスローガンは、始めから無產階級××のスローガンと結びつけられてゐなければならぬ……』。『××に與へられた歷史的條件の下においては、ブルヂョア民主主義××の端緒は直ちにプロレタリア××の端緒であるであらう。言ひかへればプロレタリア××の端緒は、ブルヂョア民主主義××の形態をとつて現はれるであらう。兩者は、二つの段階に引伸される代りに、一つの段階に壓縮されるであらう』(『現代日本研究』、四〇三頁、二六二頁)。

五

比較的最近に吾々が手にした重要な一文獻は、プロレタリア戰略論の中心問題の上に多くの光を投ずるものがある。一文獻とは、國際無產階級の第六回世界大會において採用された「プログラム」を言ふのだが、その一節は、無產階級××への「通過の條件と道」より見て世界の諸國を三つのグループに分類して示した。これもまた、事の性質上、むろん、たゞシエマ的に示したものに過ぎないが、その第一のグループは——、

支那、印度、等の植民地・半植民地諸國、竝びにアルゼンチン、ブラジル、等の從屬諸國である。

これらの諸國の經濟的・政治的特徴はといふに、

(1)社會主義を獨立的に××するのには尙ほ概して不十分な程度のものにもせよ、往々著大なる產業的發展を有する。

(2)經濟においても政治的上部構造においても、優勢な中世・封建的諸關係又は「アジア的生產方法」を有する。

(3)決定的な工業・商業・銀行の諸企業や、最重要な交通機關や、巨大農場や、栽培地などの集積が、外國の帝國主義的グループの掌中に握られてゐる。

かゝる諸國にあつては、無産階級××への通過は、概して、相當に長い準備段階を經て始めて××であり、ブルヂョア民主々義××の、プロレタリア××への轉化の一時期――相當に長い一時期――の結果として始めて××である。そしてその大多數のものにあつては、社會主義の成功的な××は、たゞ無産階級××の諸國よりの直接的支持がある時にのみ××である。

第二のグループは、スペイン、ポルトガル、ポーランド、ハンガリア、バルカン諸國、等。これらは――

(1)農業において、半封建的關係の著大なる殘存を持つ。

(2)社會主義の建設のための物質的前提の、或る最少限を持つ。

(3)それらを持ちつゝ、中位の資本主義發展段階にある。

(4)ブルヂョア民主主義的變革が未だ成就されてゐない。

これらの諸國の少なからぬものにおいては、ブルヂョア民主主義××の社會主義××への、多かれ少なかれ急速な「轉化」が××である。此の場合には、無産階級××は、直接的にではなく、プロレタリアートと農民の民主々義××より、プロレタリアートの社會主義××への通過の途上に始めて出現する、といふことが可能である。

だが、これらの諸國の他のものにあつては、ブルヂョア民主主義的性質の廣範圍の諸任務を伴ふところの、プロレタリア××の諸型が可能である。此の場合には、××は直接的にプロレタリア××として發展するが、その××は、プロレタリアートによる、廣汎な農業=農民運動の××を前提する。こゝでは、農業××は、異常に大なる、時としては決定的な、役割を演ずる。

第三は、アメリカ合衆國、獨逸、英吉利、等。これらの諸國は――

(1)生産諸力が強力に展開されてゐる、

(2)生産は廣汎に集中されてゐる、

(3)小經營の比重は比較的小である、

(4)すでに以前から成立してゐるブルヂョア民主主義的政治體制を持つ、

(5)これらのものによつて特徴づけられる高度發展の資本主義國である。

これらにあつては、無産階級の政治的主要要求は、無産階級××への、××の通過である。

六

吾々が、此の小論において、讀者諸君の注意を集めやうとしてゐる問題は、ブルヂョア民主々義××竝びにブルヂョア民主々義的性質の諸任務と、プロレタリア××との關係――兩者の交互關係――の問題である。そこで、右の「プログラム」において規定されたところのものを見て、最大の關心を置かねばならぬのは次の點である。即ち「プログラム」は、スペイン、ポルトガル、ポーランド、ハンガリー、バルカン諸國といふが如きものによつて代表される「中位の資本主義發展段階」の諸國の或者においてさへ、『ブルヂョア民主主義的性質の廣範圍の諸任務を伴ふところの、プロレタリア××』の可能、即ち重大なる副次的諸任務を伴ひつゝも『××が直接的にプロレタリア××として發展する』場合の存在を認めてゐることである。これは、農業における半封建的諸關係の殘存の著大なることや、國家・政治機構における封建的殘存物のあることによつて直ちに、當面の××段階をブルヂョア民主主義××の段階と考へることの如何に誤れるかを決定的に示すものである。

同時に一方、高度の資本主義的發展の諸國にあつても、ブルヂョア民主主義的性質の諸任務はある。例へば英吉利においてさへ、アンチ・モナアキーの闘爭は必要であり、現に強力に遂行されてゐる。だが、英吉利におけるそれは、戰略——戰術と區別される——の觀點からは、特別の重要性はない。

すると、プロレタリア××と、ブルヂョア民主主義××並びにブルヂョア民主々義的性質の諸任務との關係といふ觀點からは、世界の諸國は次の如き二つの範疇に大別される。

A型の諸國、——こゝでは、當面の××段階における無産階級の戰略的主要任務は、プロレタリア××の××である。(これに屬するものは、高度發展の資本主義諸國と中位發展の資本主義諸國の或るもの)。

これらの諸國にあつては、ブルヂョア民主主義的性質の諸任務は、戰略の觀點からは副次的な任務である。かゝる副次的諸任務は、

(1)、その一部の諸國にあつては特別の重要性を持たぬ。(高度發展の資本主義諸國の多くのもの)

(2)、他の一部の諸國にあつては極めて大なる重要性を持つ。(中位的な資本主義的發展段階の諸國の或るもの)

(3)、殘餘の諸國にあつては、右の兩極端の中間において種々なる程度の重要性を持つ。(高度發展の諸國の或るもの、及び中位の發展段階にある諸國の或るもの)

B型の諸國、——こゝでは、當面の××段階における無産階級の戰略的主要任務は、ブルヂョア民主主義××を、——しかしそれを可及的急速にプロレタリア××に轉化せしめる意圖の下に、——遂行することにある。(これに屬するものは中位の資本主義的發展段階にある諸國の或るもの、及び植民地・半植民地諸國並びに從屬諸國)

(1)、これらのうちの一部の諸國には、ブルジョア民主主義××のプロレタリア××への轉化のテンポを極めて急速ならしめる條件がある。

(2)、他の一部の諸國にあつては、かゝる條件がなく、從つて轉化のテンポは緩漫である。準備的段階が長い。

(3)、殘餘の諸國は、右の兩極端の中間にある。

七

右のA型とB型の二大範疇は、戰略の觀點からは、本質的な區別である。B型の諸國におけるプロレタリア戰略は、——その國が國家的獨立性を缺くものでない限り——、第二型の戰略でなければならぬ。しかるに、A型の諸國におけるそれは、第一型の戰略でなければならぬ、——たゞ、その或るものにおける戰略的鬪爭は、その××として「全農民」××の鬪爭を結びつけねばならぬ、といふまでである。

プロレタリア戰略に關して×××マルクシストの間に行はれた論爭においては、しばしば『××に關する決議』が問題になつたが、この『決議』もまた「プログラム」と同樣、××を×型に屬せしめてゐたことは明らかである。そしてそれはまさに吾々が幾度か指摘した所である。

『決議』は、次のやうに言つてゐる。

「××××××、ブルヂョア民主主義××のための客觀的前提諸條件（國家××の構造における封建主義の殘存物や農業問題の尖鋭さ）も存在し、またそれの×××××への急速なる轉化のための客觀的前提諸條件（資本の集積及びコンツエルン化の高度の水準、國家とトラストの緊密なる融合、國家資本主義體系への比較的大なる接近、ブルヂョアジーの、封建的大土地所有者との合一竝びにブロック）も存在する」。

右に用ひられてある『轉化』なる言葉は、その後に至つて歷史的にも技術的にもヨリ廣汎で正確な諸材料の集積に基づいてなされたる、ヨリ全面的な考察・攻究の所産であるところの「プログラム」において使用されてゐる嚴密な意味の『轉

化」と同一の内容を持たぬことは明らかである。それは、××××を尙ほ自己の手に收めてゐない動搖のブルヂョアジーの卽ちプロレタリアートによつて無力化（paralysieren）せしめられ得るブルジョアジーの存在することを不可缺條件とするところのブルヂョア民主主義××の場合に言ひ得る『轉化』でないことは明らかである。言ひ換へれば、勞働者農民の×××民主主義的××の樹立が前提となる場合の『轉化』でないことは明らかである。

何故かといふに、『決議』は、ブルヂョアジーの政治的地位を、はつきりと次の如く規定してゐる、——『現代××は、資本家と大地主のブロックによつて支配されてをり、しかもそのブロックにおけるヘゲモニーは、前者に、卽ち資本家に歸してゐる』。

かくして、『決議』は更に、此のブルヂョアジーが斷じて「動搖のブルヂョアジー」でないことを特に强調すべく、——『これによつて見れば、ブルヂョアジーが、たとひブルヂョア民主主義××の最初の段階においてすらも、何等かの程度において×××要素として利用し得られるかも知れぬといふやうな希望はすべて捨てられねばならぬ』と書いてゐる。これを一層具體的に力說せんがために、更にまた、次のやうにさへ書いてゐる。『支那との類比などは問題にさへもならぬ。支那は、帝國主義政策の對象物であつたし、今でもさうである。しかるに××ブルヂョアジーは、それ自身、第一等級の帝國主義權力ではないか。支那においては、『國民的』ブルヂョアジーは、××の始めには尙ほ權力を握らうと努力してゐたが、(それが動搖のブルヂョアジーだ　筆者)××においてはブルヂョアジーはすでに權力を握つてをり、封建的附加物と遺物とを持つた××機構全體をそのまま、最も深大なる程度において資本主義的搾取の組織化と防衞とのために利用してゐる』。かくて、××國家は、半封建的××物を有するにも拘らず、まさしく『ブルヂョア國家』である(一六頁)——(然るに近來、此のブルヂョア國家を特徵づけて『最高の地主』であると言ふ者が現はれた！)

これらすべての點から見て、××が決して×型の國でないことは明らかだとすれば、これにおいて××すべき××のタイ

ブが如何なるものであるかもまた自ら明らかである。そこで、『決議』は、最大級の強調をもつて前引用の一節を結ぶ。曰く『最後に、こゝでは、××の資本主義的發展の水準が極めて高度なるがために、××におけるブルジョア民主主義××は直接的に××××××に、即ち資本主義そのものに對する××に、發展するといふ事情が、最大の役割を演ずるであらう。』

こゝに、「ブルジョア民主々義××が直接的に××××××に發展する」といふのは、無産階級××へ『轉化』せしめるための條件をつくり出すものとして一應成立するところの勞働者農民の×××民主々義的××を經ることなしに直接に、といふ意味に外ならぬ。即ち、さうした「中間關節的」なものゝ成立なくして直接に、といふ意味である。

で、××に存在するのは、×型の條件ではなくて×型の條件であるとすれば、プロレタリアートの任務もまた明らかである、――『××プロレタリアートは、社會×××のための闘爭を、ブルジョア民主々義××のための、××の全勞働者の闘爭におけるヘゲモニーと結びつけねばならぬ』(『決議』)。即ち、これを「プログラム」の言葉で言へば、『××が直接的にプロレタリア××として發展する……場合』であつてしかも『その××は、プロレタリアートによる、廣汎な農業＝農民運動の指導を前提する』ものであることを、『決議』は明示してゐたのであつた。

こゝにおいて戰略的中心スローガンは、決議によれば、勞働者農民の×××民主主義的××ではなくして、「勞働者農民×××並びに無産階級××」である。此の場合の『勞働者農民×××』が何を意味せねばならぬかは、「プログラム」の次の一節によつて此上もなく明瞭である、――『×××は、……種々なるスローガンを次のスローガンに結びつけねばならぬ、(一)大土地所有者の××、(二)勞働者農民×××、(但し、發達した資本主義諸國においてはそれを無産階級××の同意語として)、發達の後れてゐる諸國及び若干の植民地に於てはそれをプロレタリアートと農民の民主々義的××の同意語として)』(九八頁)。そして、前者の場合の如く、中心的スローガン『無産階級××』の同意語として、それと併用される場合の「勞

働者農民の××」は、所謂プロパガンダ・パローレと呼ばれるものである。

以上の諸點と並んで、「決議」は、××における戰略上の副次的任務としての、（プログラムの謂ゆる）ブルヂョア民主々義的性質の廣範圍の諸任務」の特別の重要性を力說するために、次のやうに書いてゐた——

『××におけるブルヂョア民主々義××の、×××××への急速なる轉化の見透しは、ブルヂョア民主々義××そのもの、問題を無くしてしまうものでは決してない。ブルヂョアジーと大土地所有者との融合の過程が如何ほど深く進んでゐやうとも、大土地所有が尙ほ此の國の政治的及び經濟的生活において甚だ重要な、又獨立の要素であることに變りはない』。

右の一節において『ブルヂョア民主々義××』とあるのは、他の前引用の諸節におけるそれと同じく、直接×××狀勢の展開の當初に×××諸勢力として登場してプロレタリアートの指導下に立つところの社會的諸層（農民全體と下層小ブルヂョアジー）及びそれの諸要求の性質に照應して斯く呼ばれてゐるものに過ぎない。その意味においてブルヂョア民主主義××の形態をとつて始まるものが、——その××が、直ちにプロレタリア××の端緒である。帝國主義ブルヂョアジー×××によつて成立する無產階級××（その支持者は貧農）に先立つて、その成立の條件をつくり出すものとして一應成立し得るところの勞働者農民の民主々義的××は、此の場合には、成立不可能である。從つて、「決議」に言はれてゐる『ブルヂョア民主々義××』は、さうした中間關節的なものにカルミネートすべき「ブルヂョア民主々義××」を意味してゐるのでは決してないのである。

最後に、『決議』が、「大土地所有」乃至は半封建的土地所有——それは地主階級存在の基礎である——の特別の重要性と、それが高度に獨立的な要因なることを强調したのは、とりも直さず、プロレタリアートの二つの別箇の任務の一つを忘却又は過小評價することを戒めたものであり、吾々の謂はゆる「第二の任務」たるそれは、たとひ副次的任務と化したにしても、決して自己の存在を失はないことを力說したものである。

現下の無産政黨合同問題批判

今中次麿

一

現下の無産政黨合同問題の經過を見るに、結局從來繰返された惱みと同じ惱みを持つて居ることが明白になつて來た。それは何であるかと言へば、社會民主主義と××主義との對立である。社會民衆黨によつて特に強く主張されて居る社會民主主義と勞農黨の合法的綱領の背後にかくされて居る××主義的指導精神の對立は、現下の無産政黨合同問題に於ける越へ難い溝となつて居る。ただこれを昨夏新勞農黨の誕生以前の經過に比較して、一つの異るところは、少くも新勞農黨がその宣言綱領に於て表明した樣に、表面的には此政黨も亦我現行取締法令の下に於ける「合法的政黨」であり、且つ「獨自の指導部」を有するところのものであつて、形式的には社會民主主義の政黨だと云へる。この新勞農黨の外形的な社會民主主義的要素が、一つには無産諸政黨の合同の可能を以前よりも一層有利になさしめたと一般には考へられるのであるが、新勞農黨の指導原理が、單純な社會民主主義でないことは、既にその各種の宣言や聲明のうちに充分に表はれて居る。

例へば昨年九月の本誌に載せられた大山郁夫氏の論文中にはいたる處に、新勞農黨が社民黨や大衆黨と異る指導原理を有することを高調しており、特に「社會民主主義への轉向でない」ことを明にしようとしてゐる（特に同誌一五四頁參看）。のみならず今次の總選擧に當つて同氏の度々述べて居られる言論のうちには「社會民主主義者の敗北」と云ふ言葉が見へる。「經濟往來」四月號の同氏の論文はその代表的のものであるが、その末尾に於ては「以上……筋書き的に、社會民主主義政黨の今度の選擧

戰に於ける敗因に就いての我々の觀察を述べた。がより詳細には、勞農黨の諸文獻を參照して頂きたいと思ふ」（六一頁）と結んである。

又現下の合同問題に關して發表せられた二月廿八日の最初の聲明書は、次の文句で結ばれてゐる。「われ等は戰線統一に常に積極的努力を拂ひ、社會民主主義幹部の如くこれを拒否するが如きことは少しもなかつた。（略）即ち我等が彼等社會民主主義者と同じ陣營に屬しながら、その陣營を階級的鬪爭體として確保し成長せしめんためには、我等は彼等の行動指導精神、議會萬能主義、階級協調主義に對し、假借なき批判を加へる事を必須の條件とする。今のわれわれは何時たりとも合同の用意を有するのみならず、近くその提唱を發する準備を有すると同時に、黨內批判の自由の確保を主張するものなることを聲明する」（東京朝日、三月一日）。

次いで三月十六日夜の勞農黨常任委員會は、一歩を前進して無條件合同の方針を決定し、全無產政黨の合同協議會を提唱することになつた。翌十七日發せられた同黨の、この政策展開に關する支部への指令にも亦、次の樣に相變らず社會民主主義との鬪爭について宣明せられてゐる。即ち「無條件合同なる表現を用ひんとするも、それは寸毫も我々の態度の變化を意味するものではなく、また我々が合同を通じて社會民主主義者と妥協せんとする意思を含むものでもなく、むしろ一層積極的に共同鬪爭の實踐を通じて、社會民主主義を克服せんとする意思を含むものである（略）合同實現を見た場合はこれまで黨外で行つて來た社會民主主義への批判を今後は益々力強く、これを黨內に於いて行ふといふ覺悟を豫め充分に持つてゐなければならぬ」（東朝、三月十九日）と揭言してある。

かく勞農黨によつて强調されて居る「社會民主主義の克服」は、自ら、勞農黨自らの無產政治戰線に於ける位置を、決定せしめる。

次で三月二十四日の勞農黨常任委員會の決定した所謂無條件合同の聲明書のうちには、「わが無產階級陣營內に幾多の社會民主主義が介在し、執拗に戰線を分裂せしめてゐるからだ。由來社會民主主義者は、戰鬪的分子との提携を拒否するのを常とする。（略）もし諸君の熱烈なる戰線統一要求が一部の社會民主主義幹部の分裂主義を粉碎しつくすならば、無產階級戰線の統一は、無論斷じて可能である」（東朝、二十六日）と述べられて居るのであるが、ここに表明された執筆者の意思のうちには、充分に、勞農黨が諸々の社會民主主義の外に立つ、社會民主主義に非ざる政黨であることが自覺されてゐる。

従つて下中氏が「例へば勞農黨は他の無産黨に對してブルジヨア第三黨であるとか、エセ無産黨であるとかの惡名を着せてゐるが、勞農黨自體議會政黨であり、合法黨であれば「社會民主主義」の名の下に、他黨排擊は許されぬ。」（三月九日無産黨合同促進協議會第二回委員會に於て――東朝、三月十一日記事）と云つた樣なことは、云ふだけやぼなことになつてくる。否それは既に昨夏新勞農黨の誕生に當つて、或は右翼社會民主主義の諸氏から、或は極左翼小兒病の諸氏から、新勞農黨へ向けられた數々の非難の叫びのうちにも見られた誤謬である。

當時千葉鋼太郎氏が、新勞農黨の立場についての克明な考察を發表されてゐるが（大衆、十月號）、同氏も指摘して居られる樣に、社會民主主義政黨と共産黨との區別は決して合法的なりや否やの點に置かれてはゐない。從つて新勞農黨が合法政黨として現下の我政治權力の認容の下に生れ出たと云ふことは、決してそれ自體が、直ちに社會民主主義への後退を意味するものではない。マルクス主義の無産運動が、必ずや政治鬪爭たるべきことを要求されて居る限り、立憲國家内の運動戰術としては、どうしても議會政策を採用せずに有利に運ぶことは出來ない。その素朴的な戰術を國家が許容せざる狀態の下に置かれてゐる限り、左翼運動と雖も亦國家の許容する合法的手段を採用せなくてはならない。そのために、左翼の議會政策として「××的議會主義」(Revolutionäre Parlamentarismus)と云ふ奇怪な用語すらドイツには生れて來た。新勞農黨の立場が正にそれであることは、上述の言論のうちから充分に觀取される。故にその立場はやはり一種の共産主義であつて、戰鬪的社會民主主義なのではない。

勞農黨が社會民主主義政黨でない限り、他の社會民主主義諸政黨との合同は六ケしい。

二

合同は指導原理の合同でなく、階級鬪爭の合同であると左翼からは高調されて居る。然し社會民主主義の右翼諸政黨と勞農黨とは、階級鬪爭の目標を同一にしてゐない。今日の我が無産政治戰線には、プロレタリア××にまで運ばうとする左翼の立場から、階級協調主義の社會的能力を過信して居る右翼の立場まで存在して居る。また、階級的意識そのもののうちに既に厚薄がある。例へば社會民衆黨が一面に團體交涉權を強調するに反して、國際主義に強度の反感を投げかけて居る。例へば勞働立法の制定に熱心であり、經濟鬪爭に力點を置く傍ら、モスコウの指令を惡罵し且つそれを恐怖する有樣は、全く既成政黨と

統一戰線を布くだけの可能性が充分である。故に指導原理を無視したところの、階級的戰線にもとづく統一は、一見合理的に感ぜられて、然も實際は問題になり得ない。

例へば本誌四月號の稻村隆一氏の主張さるる如く、「こうした狀勢を前にして、勞働者農民は資本との闘爭のために大結成をしなければならない。無產政黨の合同は決して代議士を多く出すためでもない。資本との闘爭のためだ。このとき、いろいろな小理屈をつけて、統一と合同を拒否するものは、裏切りものとして大衆の闘爭の前に葬られるであらう。闘爭のために合同する。指導精神が統一されてから合同するのではない。それは知識階級の世迷言葉である。闘爭力集中のため、それこそ組合の擴大强化のため合同する。そしてその闘爭の過程から正しき指導精神と結合は創造され發展するのだ」と、そう簡單には片附けられない問題であらう。

社會民主主義と××主義との對立は、代議士を出す出さぬだけの相違ではない。いな今日では既に××主義者も或形式の下に、代議士を出してゐる。のみならずもつと主要な問題が兩者の對立を作り出してゐる。それは闘爭の目標の相違である。社會民主主義の代議士と共產主義の代議士とは、少くも代議士たる點に於て、合法的に政治權力を掌握することを以つて、同一の目標となしてゐるかに見へる。然しそれは全然皮相的な外形である。社會民主主義の代議士には、合法的なる政治權力の掌握が目標とされて居ることは云ふまでもないが、これに反して××主義の代議士の目的とするところは、××主義的な非議會的階級闘爭の戰線の、議會内に延長された一部分を擔任することである。彼等にとつては、議會を通じての權力獲得が目的ではない。こう云ふ二個の不純な分子が、どうして統一した戰線を築くことが出來よう。

例へば選擧戰術にしても、社會民主主義から云へば、出來るだけ多數の代議士を獲得することが目標となる。然し他のものにあつては、選擧を通じての階級的團結の强化擴大が目標となる。故に當選も只その目的のためにのみ必要とされるに止まる。

又議會戰術の上から云ふならば、益々一致し難い分裂を惹起することになる。一方では勞働立法の促進が純眞な意味で問題にされ、議會内に於ける地盤の强化擴大が問題とされて居るときに、他方ではそれは他のある目的の手段に過ぎないことになつてくる。その他あらゆる日常闘爭に於ける兩者の抗爭は明白である。かゝる異分子が統一せられたる組織のうちに結合しようと云ふことは、一に何れかの指導原理が、何れかの指導原理を克服することを目的とする場合にのみ可能である。換言すれ

ば外部的な理論闘爭を内面的な理論闘爭、即ち所謂「黨外批判」を「黨内批判」に移すと云ふまでである。勞農黨が二月二十八日の條件附合同論を修正して、三月二十四日の無條件合同論に移行して行つたと云ふことは、よく見れば實に豫定せられたる行動であり、普通に考へて見ても、左翼の統一戰線論からくる必然の歩みであり、惡く見るなら、それは黨幹部の政策的錯誤に對する修正にしか外ならない。それは當然の道程である。

故に今ここに各無産政黨が從來の立黨の綱領に何等かの修正を加へざる限り、勞農黨に對する社會民主主義諸政黨の對立は當然だと云ふことにある。然もここにかくの如き修正を加へざる、勞農黨をも含む全合同が完成されたと假定したら、それは必然黨内に於ける指導原理上のヘゲモニィの抗爭を現はして來なければならない。この場合、何れの指導原理にヘゲモニィの可能性が、より強大であるかと云ふ點から、また各無産政黨の合同問題に對する、積極的態度と消極的態度との相違が現はれてくるのである。例へば理論的に空虚な社會民衆黨の消極的態度と、理論的に強い勞農黨の積極的態度が正にこの觀點から説明さるべきである。

全國民衆黨と日本大衆黨の積極的な合同的態度は、然らば黨内理論抗爭上に於ける確信から出て居るものかどうかと云ふに、これは左樣に單純ではない。此の兩政黨は正しく中間派である。戰線の上でも、亦理論の上でも。これらの黨内の消極論には、明にヘゲモニィを勞農黨一派に渡したくないと云ふ意思が表はれて居る。大衆黨の三月廿九日の中央執行委員會に於いて、田所輝明氏の述べた本部側の意見として傳へらるるものの如きは、正しくこれである。曰く『現在相對的優位の地位にある場合に、合同に向つて積極的に出るのは不得策である。勞農黨については、或は戰略的の處が見られ、社民黨も目下黨内に混亂を來してゐる模樣であるから、この際考ふべき問題である。』(東京日日、三月三十一日)と云ひ、『相對的優位の地位』を落したくない希望が明瞭にされて居る。

それにも係らず、合同反對、又は社民黨と同樣な一部合同主義を、主張し得ず、全合同に向つて進まねばならぬ立場に、何故に日本大衆黨は置かれて居るのか。それは何故かと云へば、大衆黨の、社民黨に比して、より階級的な基礎からである。ここに大衆黨には、社民黨よりも、より困難な立場がつきまとふ。故に「我黨は獨立した立場に於いて、まづ全政黨を一堂に會せしめるために努力し」と云ふ説明附で、「全合同を最善の合同方針」として確定せざるを得なかつた(同上)。恐らく大衆黨は社民黨を合同に誘ふためには、最善の努力を拂ふであらうけれど

も、それだけの好意を勞農黨に寄せるか否かは疑問である。勞農黨の××主義的戰鬪主義は、何れの社會民主主義政黨にとつても苦手であることは云ふまでもない。何故にそれが苦手か？少くもそれは理論的に堅固である。のみならず戰術的にも危險な多くの武器を用意してゐる。然もかかる有利な武器を有するこの政黨が今日比較的弱小な形態の下に留め置かれて居ると云ふ理由は、一に正しく政治權力の彈壓に基いてゐる。少くもそれが最も有力な理由である。

そこで勞農黨が、さつぱりとその匿された××主義的原理を斷然拋棄して、合同に參加することが明となれば文句はない。大衆黨はこれと容易に手を握ることが出來るであらう。が然らざる限り、階級的全一體主義を必要とされて居る大衆黨としては、全有產諸政黨を誘ふて、有產大同團結を作り出し、且つこの勢力を利用することによつて勞農黨の存立を擊破し、よつて以つて自己の指導原理を正しく生かすことの外に、方法はない。

かくの如く部分的合同を提唱することが出來ず、然も同時に部分的合同が、最も安全且つ有利な方策であることを知つて居る點に、日本大衆黨の困難が存在する。それが彼をしてにえきらない態度をとらしめる。またそれが社民黨への秋波となつて現はれる。全國民衆黨に於ても亦同樣であらう。

全國民衆黨については、更に外の問題も存在して居るが、ここに説くことを差ひかへる。地方無產諸政黨の合同に於ては、最も合同の容易な條件を具備して居る。地方的に異る地盤を持つてゐると云ふ點や、また同一地方の政黨の間に於ても、協定を有利とする事情が存在してゐるからである。而してこれら政黨が、全合同の前に可能なる合同を促進することを中止して居るのは、勞農黨誘引による、完全なる全合同の實現策に外ならない。

三

政黨が階級的に全一體でなくてはならぬと云ふことは、無產政黨上の理論たるに止らない。ブルヂョア的とプロレタリア的とを問はず政黨は總て階級的全一體であり、且つ全一體に於て初めて完成される。從つて、大政黨は皆その素質を、具備してゐる。

これを既成政黨について見るに、英米及び我國の二大政黨は、その最も典型的な實例である。英の保守黨と自由黨とは、下院の創成に當つて、これを構成してゐた二つの分子を夫れ夫れ代表するものとして發達した。農業代表者としてのナイツ、商業代表者としての庶民代表、これである。前者は封建時代の經濟

的優勝階級(軍族)なのである。それが新興商業階級の政治權力の獲得に刺戟されて、立憲國家の政黨的對立の中に變形して來た。米國の自由、共和兩黨も亦、南方分離派と北方統一派をそれぞれ代表し、且つこの對立は同時に農と商との對立に外ならなかつたものである。

我が自由改進兩黨の發生も亦何等これと異るものではない。農業黨と商工黨としてそれは各々發展し、今日の政友、民政に系を引いてゐる。こう云ふ政黨創成論・同時に政黨概念の上からのみ、濱口內閣の進步的自由主義と前田中內閣の保守的反動主義との差異が明白にされる。今日の無產理論家の樣に、濱口內閣も田中內閣をも、單一のブルジョア的カテゴリイからのみ見て居たのでは、正しい國內情勢を得ることは出來ないのである。これらの問題については、別に評論したことがあるから、ここに述べぬ(福岡日日新聞、本年一月中參照)。

ただ大陸に於ては、階級的發展が複雜であつただけ、小黨分裂に陷らざるを得なかつた。最も複雜な發展が立憲國家の創成に於て經驗されたフランスに於て、最も分裂せる政黨の分野が殘された。然しこれらの場合と雖も、政權は常に大體に於て階級的分野によるコアリチオンの上に與へられ來つて居る。ドイツに於ては社會民主黨と、これに對立し中央黨を中心とするブルヂョア諸小黨の間に、政權は往來して居る。フランスに於ては民主聯盟と社會主義的左翼聯合との對立に於て大體これと同じ現象が現はれて居る。

階級的に比較的單純な發展をたどつた我が國の立憲政治下に於ては、結局、既成政黨は政友と民政の典型的な二大的對立になつてゐるのに反し、何故に獨り無產諸政黨のみが、多くの分野に對立せねばならないのであるか?

それは指導者の觀念論の結果だと見ることは、餘りにも社會科學的でない。稻村隆一氏すらが次の樣に云つて居られる。知識階級の世迷言葉を罵倒せられる口の下で、「組合大衆を見よ、彼等はインテリゲンチュア、少數幹部の對立意見におしつけられて默してゐるが、しかし彼等の要求は戰線の統一だ」(上揭)無產政黨分裂が、やはり少數幹部の意見のおしつけの故だと云ふことになつてゐる。またマルクス理論界の一方の老雄たる山川均氏までが、甚だ非唯物史觀的な口調を以つて、「けれども既に大衆の現實な必要の前には、合法政黨の組織といふ勇氣ある原則的讓步をさへも辭しなかつたこの黨(勞農黨)の指導者諸君が、更に重大なる大衆の必要たる戰線統一のためには、一そう光榮ある讓步によつて、大合同實現の途を打開されると云ふことも必ずしも望むべからざることではないだらう……」(改造、四月、

五四—五五頁）と云つて居られるのを見ると、大山、細迫、上村、河上諸氏の個人的意見でどうでもなるかの樣に解せられる。然し眞實は寧ろ、今日の無產諸政黨の組織の基礎に伏在して居る缺陷から、今日の無意義な分裂が生れて來て居るのではないか。その基礎的缺陷とは何か？ それは現下のわが何れの無產政黨も、殆んど大衆的地盤を持つてゐないと云ふことである。

わが既成政黨の今日の狀態に於ては、地盤のないところから、何のゆかりも關係もない人物が候補者に立つて、漸次自己の地盤を作り出してゆく。故に多くのそれは個人的地盤であり、有力なもの程そうである。尤も今日の如き政黨政治が漸次發達してくれば、自ら政黨の地盤と云つたものが漠然と成立する樣になる。然しそれも多く買收などと結び附いた地方有志者たちで作り出す地盤だ。そこに既成政黨の墮落的原因が伏在して居る。眞實の政黨は、政黨が地盤を作ると共に、地盤が政黨を作り出さねばならぬ。而して是を我無產諸政黨に就て見るに、どこに地盤らしい地盤があるか。のみならず、淺原氏の福岡第二區の如き個人的地盤を除いては、地盤を作るための日常鬪爭が足りない。第一次普選敗戰の原因の一は、日常鬪爭の不足にある。

全く地盤を持たない各無產政黨の幹部諸君のことだから、離合集散は自由である。如何ようにも自己の都合に向つて、政黨を利用することが出來る。如何に無產政黨の地盤が薄弱であるかは、發表された選擧費の調達に於て、明瞭に暴露されてゐる。大山氏が如何に「大衆の意思によつて行動する」することを高調されても、果して現實に幾何の大衆が大山氏に選擧費を寄進したか。大部分は、自己犧牲的出資と非階級的な友人關係からの融通ではないか。單に大山氏のみではない。總ての公表された選擧費用明細書を見て、私は寧ろ候補者諸君の犧牲獻身的態度に對し、甚だ御氣の毒の感に堪えないのである。この事實は今日の各無產政黨が、明に地盤の上に正しく立たないで、指導者の觀念の上に逆立ちして居ると云ふ事實を暴露してゐる。

いな政黨運動の故に、既に久しく苦難の過程をたどつて來た經濟的日常鬪爭のための組合的組織すらが、甚しくスポイルされた。組合運動は正しく無產政黨の母胎であり、且つその成長を哺成する母のフトコロである。もとよりそれ（組合）とこれ（政黨）とは、明確に一應區別される必要がある。けれども組合を有することは、無產政黨をして、既成ブルヂョア政黨の如き特別の地盤開拓事業を不必要としてゐる。從つて云ふまでもなく大きな組合を背景とする無產政黨は事實上、小さき組合を背景に持つそれよりも、より多數の投票を現に獲得して居る。いな背景としての組合の大はまた同時に、政黨の大でもあり得る。

かくの如き容易に得らるべき地盤があり、然もその地盤が確實である。それが確實であれば當然また支配力を發揮する。地盤が支配して、指導者が被指導者となる。これが眞實の政黨的組織であると云はれるならば、無産政黨ほどめぐまれたものはない。それだけまた現下の逆立せる無産政黨の罪惡が深刻になる。もとより未だ極度にまで發育して居ない、途上の我が無産運動は、それが自ら指導者の任務を重からしめるのは止むを得ない。然し乍ら然らば指導者たちは、その與へられた指導的任務を現に正しくつくしつつあると云はれるか？甚だ問題である。頭ばかりが先ばしつて足が地について居ないと云ふ感が深い。地方に居住するわれわれには、特に著しくこの感じがする。東京や大都會では氣がつかないのかも知れない。

地盤が確立してゐないから、黨費が出來ない。黨費が出來ないから日常闘爭がお留守になる。これでは何時まで經つても、眞の無産政黨が生れないのみならず、無産政黨の大を成し得ないし、同時にまた戰線の分裂を反復することになる。經濟闘爭の地盤としての組合に於て、有力な地盤候補地を所有してゐる現下の無産諸政黨に、政黨的地盤が成立して居ないと云ふところそは、指導者の正しい日常闘爭の不足の責任である。この責任が充されるまでは、無産政黨の全合同問題も正しい意味では完成しないのである。

無産政黨に於ける地盤の完成が、何故に無産政黨の合同に關係するか。その理由は簡單である。われわれ個々人の思惟内容は種々雜多であり得るが、大衆的動きにはそれほど多様な變化がないからである。

今、地方無産政黨と稱せられるものと全國農民組合とを除いて、現下四つの無産政黨がある。將來それが更に幾つに割れるかも分らない。然し今日のわが無産階級に屬する大衆が把持してゐる理論を推測して見るならば、四つに分つことは恐らく多過ぎるであらう。それは恐らく社會民主主義と××主義の二つで充分であらう。否今日では唯一でよいと云ふ叫びさへある。素より其外に非マルクス的な思想もあるが、今日の我國では殆んどマルクス的理論による思想的統一が出來あがつた。此點ではフランスの情勢と甚だしく異つており、寧ろドイツに近い。

從つて無産黨が正しい地盤を有するときには、共産黨の存在し得ないわが現下の情勢下に於ては、たちまち全的合同を作りあげることが出來る筈である。況んや大衆には個人的行がゝりの感情がない。

同時にまた現下の無意義な政黨的分裂を作り出したことについては、過去に於ける指導者の政策的誤謬があつたことを忘れてはならない。理論的にはそれがモスコウから排擊された所謂福本イズムであつたと傳へられて居るが、何故にモスコウが福本的分裂主義を排斥したのか？　そのことについては、更に一層の考究が必要の樣に思ふ。

理論鬪爭なしには、今日の無產政黨の正しい成長は望まれない。福本イズム崩壞以來の、理論鬪爭に對する輕視の傾向も亦決して正しい發展でない。特に現下の合同問題を中心として、著しく、指導理論への輕視の傾向が窺はれる。理論上の相違はともかくもとしての……合同、卽ち階級鬪爭のための合同……と云ふ樣な風潮が强調されてゐるけれども、理論なき正しい實踐はなく、また理論なき實踐こそ、所謂ダラク幹部の發生には好適な土壤である。

故に理論鬪爭が惡いのではなく、ただプロレタリアの階級的役割を忘れ、それを破壞するところの理論鬪爭が排斥せらるべきである。マルクスが「ヘーゲル法律哲學批判」のうちで、明白に警告を與へて居る。

「ブルヂョア社會の如何なる階級と雖も、その社會の全體のうちに融合し、それ自體のうちに生き、自らが社會全體の代表者であるかの如く考へられる、又さように認められるところの熱意的要素と、また同時に彼れらが社會全體の權利と要求そのものを眞實に戰ひとらうとして居ると考へられ得る要素とが、その階級の實踐のうちに認められなくては、その階級は××的役割を演じ得る者たることを得ない。換言すれば、彼れは(一階級)それ自體、社會的頭腦であり、且つ社會的心意でなくてはならぬ。ただ社會の全體的權利の名に於てのみ、一特殊階級が、全體的支配權を要求し得る權利がある。……………ここに初めて國民の××と、ブルヂョア社會內の一特殊階級の解放とが、同一意義を有するものとなる。」(Mehring, Aus Literalische Nachlasse, I.S. 395)

少くも無產者××の建設への××的過程は、ブルヂョアを支配的權力者として有する社會內に於ての鬪爭であるから、この對立的要素の存在を無視した戰術は、到底實踐的に成功するものではない。この意味で過去の××運動が誤謬であつたのであり、新勞農黨の合法的政黨への後退が、合理的であり、賢明な所置であつたと云へる。然るにその後退が如何に大衆にとつて不評判であつたことよ。それほど大衆は理論的に正しく指導されねばならぬ必要を持つてゐるのである(新黨樹立の手續過程にどんな不合理が橫つてゐるかは、門外漢の私には不明だが)。

如何に不評であつたにしろ、現下の我國の情勢に於て、全社會を心とし、全社會の頭を以て頭とする。既成政黨よりもより以上に——少くも左樣に一般大衆から受け容れらるる要素を全無產階級運動が持ち得なくては、政治權力獲得の爭鬪の前にブルヂョア政黨を驅逐することは出來難い。

然し成立した新勞農黨そのものが、この合理的態度を示してゐるか否かは、別問題である。いなその點になると、この政黨が最も、階級性の强調の故に、全體的考察を忘れてゐるとも云はれよう。大山氏河上博士らが、常に大衆によびかけることを忘れないのはよい。けれども、その大衆が一般的大衆を意味してゐないで、プロレタリア大衆のみを意味してゐることは片手落である。プロレタリア大衆の運動が、一般的な非プロレタア大衆にとつても亦、何等かの意味で一つの熱意を喚起するものであり得なくてはならぬ。從つて無產運動は常に、その社會の情勢とかけ離れた發展を試みることを戰術的に許されない。この公式からはみだしたものが、失敗である。學聯も三・一五も四・一六も皆こう行つた、一般的情勢を無視した誤りである。それは理論家の陷つた小兒病の反動にしか外ならない。それは自ら掘つた墓穴である。

然らば我國の情勢が今日、どの程度の運動を妥當として居るか？　この點が正しく無產政黨の指導者諸君の專門的研究を必要とされて居る點でなくてはならぬ。この觀點に於て、右翼が左翼に讓步すべきか、或は左翼が右翼に讓步すべきか？　その方法と程度とを明白にされる合同問題の歸趨も亦ここに求められねばならぬ。

無產運動が、政治的階級的全一體を構成すべきは、既に云ふまでもなき自明の理である。問題はただ、如何なる戰線へ向つて、その合同の勢力を集中すべきかの點である。この合同戰線さへ明白にされさへすれば、犧牲的精神に富める、わが賢明な指導者諸君は、直ちにその行がかりと、感情を捨てて、この戰線の上に暖き手を互に握り合はされるに違ひない。

しかし乍らこの合同的戰線を決定するものは、たとひ指導者諸君の訓練された鋭敏な觀察力ではあるとしても、わが現下の國內情勢そのものと、全無產非無產大衆の欲求そのものでなくてはならない。この意味で現下の合同問題が、政黨事務所から投げ出されて、われわれの前に橫へられんことを希望する。指導者諸君はまたその神經的にいらだたされた無產黨陣營內から出でて、一と先づ田園と巷處に歸り、あらゆる意味で貧しい大衆の、かすかなる呻き聲に、耳をそば立てる必要がある。

（四月二日）

アメリカ恐慌より世界恐慌へ

——世界經濟の危機——

橘　和　雄

一、恐慌なき資本主義的發展！

永久の繁榮、底を知らぬ繁榮。これらの言葉こそは永年ブルジョーア諸新聞が合衆國の狀態を特徵づけた形容であつた。慢性的經濟不況と勞働運動並びにソヴエートの社會主義的建設に心を惱まされたヨーロッパのブルジョーアジーは合衆國の繁榮に賴りなき望みをかけ、安心を求めて居た。彼等はアメリカの示す如き新しい資本主義的再建を夢見て居たのであつた。

全世界の改良主義者達は合衆國の繁榮に力を得た。そして勞働者階級の支配するソヴエートではなくして、資本主義的支配の確立せる合衆國へとその代表者を派遣した。彼等は資本家に說いた、「合衆國の如き恐慌を知らぬ繁榮を經驗するためには高い賃銀で充分である」と。

かくてフーヴァは一九二九年その厖大な二卷の書物において、自然的富力の豐かさと盡きせぬ需要とが合衆國永久繁榮の基調であると說明した。

だが資本主義的生產方法も常に商品生產をその基礎とする。それは無政府的商品生產による社會新陳代謝の過程をその根本に持つ。自由競爭は資本主義及び商品生產一般の基本的性質である。そして獨占は自由競爭の直接の對立物である。自由競爭はそれ自身獨占に轉化し、大規模生產を生ぜしめ、小規模生產を驅逐し、遂に巨大な金融資本による支配を確立せしめた。實に合衆國の金融資本による支配はまことに「組織化せられた資本主義」の夢想をもつて我々に迫るものがある。だが同時にこの獨占こそは、「自由競爭から生長しつゝ、自由競爭を排除せずに、その上に存在し、且つそれと並んで存在し、かくして特に尖せ

化せる、幾多の大きな矛盾、軋轢、衝突を醸するのである。」まことに「獨占とそれと併存する自由競爭との間の矛盾、金融資本の巨大なる「機能」（及び巨大なる利潤）と自由市場における「正直な」商業との間の矛盾、一方のカルテル、トラストと他方の非カルテル産業との間の矛盾こそは帝國主義の最も深刻な最も根本的な諸矛盾」（レーニン帝國主義論）でなければならぬ。

かくて過剰生産恐慌は獨占資本主義時代において益々擴大せられた規模において社會の新陳代謝を規制してゆく。「社會的生産と資本主義的占有との間の矛盾は」たゞに「個々の工場における生産の組織化と全社會における無政府狀態との間の矛盾として再生産せられる」（エンゲルス、反デューリング論）に止らず、金融資本の巨大なる獨占分野における組織化せられた資本主義と一般に無政府主義、自由競爭市場における正直な商業との間の矛盾としてその深刻さを倍加する。それ故過剰生産恐慌は獨占資本主義によつて止揚せられるものではなくして、却つて鐵の如き自然法則として永久に存在し、益々その矛盾を深刻ならしめて行くものである。

永久の繁榮、我々は如何にしてこれを××生産社會に望み得ようか！　かくの如きことを夢想する人々をば商品生産の必然的鐵則は一笑に附した。そしてこの嘲笑こそはウォール・ストリートより先づ現はれたのであつた。

帝國主義時代、殊に戰後の過剰生産の波は古典的發展過程にある景氣上向の際の過剰生産とは著しくその面影を異にする。資本主義繁榮期における恐慌の底は尚その前の好景氣の頂點を下らない。然るに戰後世界經濟は一九二七・八年に至つて漸く一九一四年の水準を突破した。從つてその好景氣の頂點は一九一四年の水準を餘り突破しない。この故に戰後世界經濟には發展なし、矛盾を解決すべき恐慌もなしと論ずることが出來るであらうか。これに對する批判も亦ウォール・ストリートより現はれた。

かくてアメリカ恐慌が吾人に與へた解決は次の如きものであつた。（マニユイルスキトE・K・K・Iプレジデュムの報告より）

一、戰後におけるブルジョーア的理論の根抵をなすアメリカ繁榮の理論、資本主義的組織を無對立、反動のものとする理論、資本主義的組織の合目的性の増大、その組織化並びにその無政府的要素を克服せんとする力についての理論、これらの理論こそは破綻に陷らざるを得なかつた。

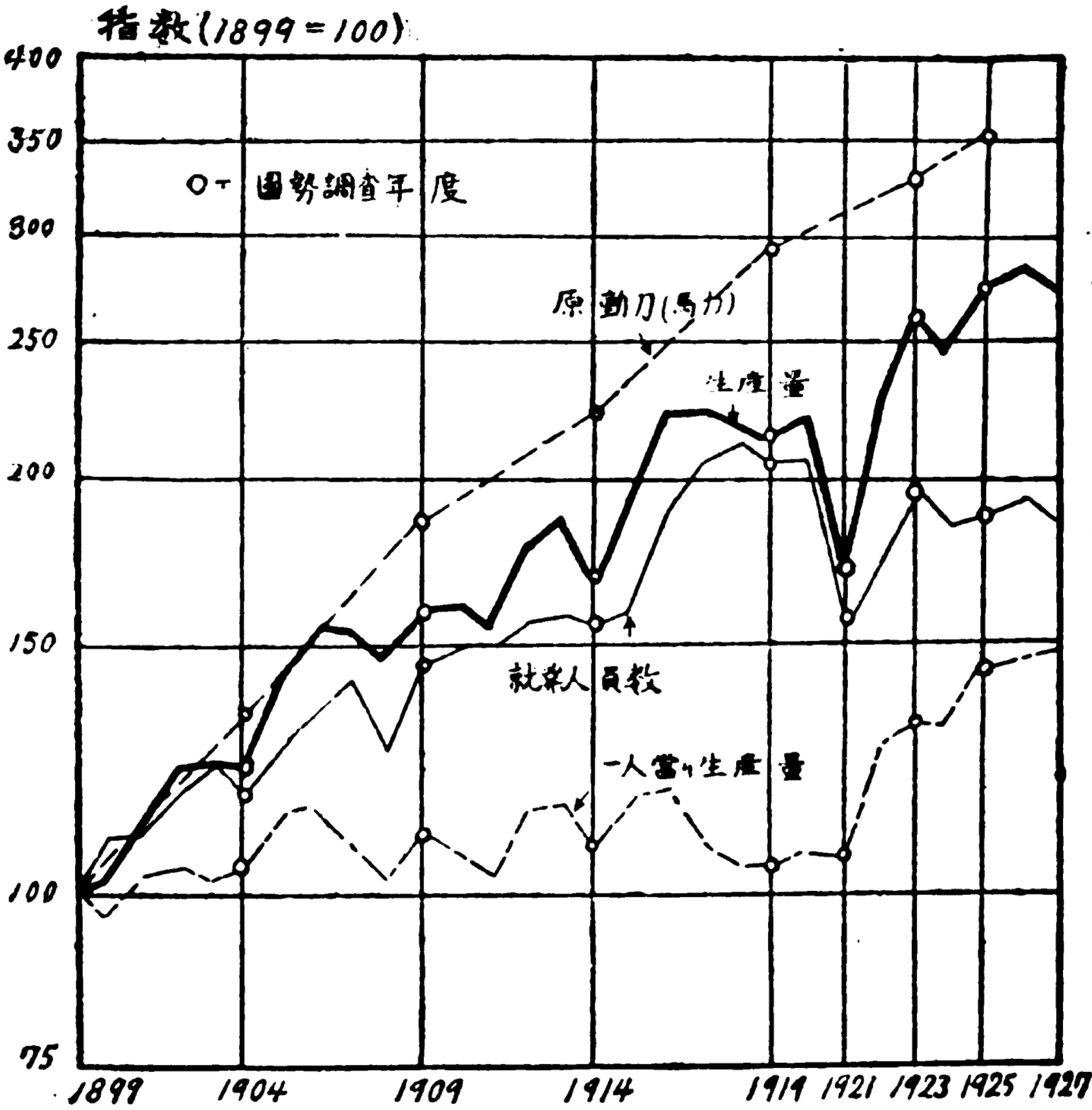
二、この繁榮論の別種をなすラウストーン＝ベバーのアメリカを除外例なりとする説も亦打ち破られた。

三、恐慌は「組織化されたる資本主義」を説く社會民主主義

的理論にも終焉を與へた。（カウツキーの、超帝國主義論とヒルフア　の公認プログラム。）

デイングの『組織化されたる資本主義』、ナフタリ及びA、D、G、B、五ケ年計畫とが。

製造工業の發展（一八九九年―一九二七年）



Hoover = Recent Economic Changes. vol 2. P. 465

四、この恐慌は更らに、帝國主義の現段階においては市場、價格、競爭、恐慌の問題は益々世界經濟の問題となり、國内においては組織化の問題が解決を與へるとする一派の議論にも終焉を與へた。アメリカの恐慌は、市場、價格、競爭、恐慌の問題が益々世界經濟の問題となると同時に各資本主義國においていづれも内的矛盾を惹起し、それは外的矛盾と並行して又はこれと相互關係において激成せられることを明かならしめた。

五、恐慌は右翼の第三期の見解の誤謬と、コミンテルンのそれの正しさとを證明し、植民地獨立説を終焉せしめた。

六、ソヴエート聯邦における五ケ年計畫の××ある實現に際して資本主義諸國における世界經濟危機の××は世界史的意義を持つものである。二つの世界組織が相互反撥し合つて居る、アメリカ的資本主義的繁榮と社會主義的建設の

二、戰後合衆國過剩生產の過程

かくて我々がアメリカ合衆國恐慌の意義を探究するに當つては、その內的矛盾の發展の過程と、世界經濟上における合衆國の地位とを分析せねばならぬ。

「恐慌は常に現存の諸矛盾を一時的に暴力をもつて解決するものであり、破壞せられた均衡を暫時回復する暴力的爆發である。」(資本論第三卷、一、二三一頁)

然らば恐慌においての一時的解決を見出さねばならぬ矛盾とは何であるか?

生產諸力と消費力との間の矛盾である。

戰後最初の不景氣時代の終期に當つて始まつた生產裝置の合理化による擴大は好景氣の時期に終了した。だが生產手段はツガンバラノウスキーの考ふる如くに自己目的として生產せられるものではない。生產手段は消費資料を生產するために存在するものでなければならぬ。かくて新しく合理化せられ、擴大せられた工場は完成品を生產し始めた。そしてそこに見出した消費力は如何なるものであつたらうか?

消費力は絕對的生產力によつて決定せられるものでもなければ絕對的消費力によつて決定せられるものでもなく、敵對的分配關係を基礎とする消費力によつて決定せられ、それは社會大衆の消費をば多少とも狹い範圍內でのみ變更し得る最少限度に制限する。」(資本論第三卷、一、二五五頁)

消費力は只に「瓦斯の膨脹力もこれに比しては問題とならぬ」生產力の發展に對應し得なかつたのみではない。戰後の合理化運動は勞働者階級と中小企業及び直接生產者階級とを生產過程において、流通過程において共に飽くなく收奪し盡して、もつて販路を著しく狹隘ならしめた。自働機をもつて特徵づけらるる勞働者階級の生產行程よりの大量的排除、フリースバンドをもつて再組織せられた工場內における勞働强度の生理的限界を越えた支出、——それは勞働日の延長と勞働强度の支出の增大とを甚だしい程度迄通約し得べき量たらしめた點で新しい合理化の時期を劃したのである。——かくて勞働者階級をかくも高度に收奪する巨大な金融資本による生產量の著しい增大は同時に勞働者階級の生產過程における犧牲を驚くべく高めると共に、おびたゞしい失業者の群を街頭に投げ出したのである。

そしてそれはヴァルガの所謂る固定的失業を生み出した。現在合衆國に存在する最少限五百萬人の失業者は、それが好景氣の時にも最早や絕對的に生產過程に收容せられ得ないと云ふ意味において古典的發展時代における產業豫備軍に對して、沒落

資本主義時代の恐慌的現象を典型的に示して居る。

（單位一〇〇〇人）

年度	合衆國人口	最大限就業可能性 %	最大限就業可能性 絶對數	現實就業	失業
1910	92.267	41.5	38.167	38.167	——
1911	93.628	41.5	38.856	38.360	496
1912	95.097	41.5	39.445	39.445	——
1913	96.512	41.6	40.149	39.882	267
1914	97.928	41.7	40.875	38.848	2.027
1915	99.343	41.9	41.585	40,106	1.479
1916	100.758	42.0	42.318	42.206	112
1917	102.173	42.1	43.016	43.016	——
1918	103.588	41.5	42.989	42.931	58
1919	105.003	40.8	42.841	42.766	75
1920	106.422	40.2	42.809	42.809	——
1921	108.445	39.8	43.161	39.508	3.653
1922	109.893	39.3	43.189	40.622	2.567
1923	111.693	38.8	43.284	43.284	——
1924	113.727	38.0	43.216	41.826	1.390
1925	115.378	37.1	42.805	42.418	387
1926	117.136	36.2	42.433	42.433	——
1927	118.628	36.2	42.943	41.477	1.466
1928	120.013	36.2	43.445	40.813	2.632

（ブルックマイヤー・エコノミック・サーヴイスの指數）

のみならず勞働者階級はカルテル保護關稅による獨占價格への貢納を餘儀なくせられた。如何に資本主義的繁榮を誇る合衆國勞働者階級の賃銀が官廳發表の保健費用の半ばにも及ばぬ遙かに低い水準にあるかは勞働局の統計自身が之を示して居る。（アメリカ合衆國勞働局發行、勞働月報、一九二九年二月を見よ。アメリカ勞働年鑑一九二九年、七七—七八頁參照。）

同時にアメリカ合衆國の全生產部門は超過利潤獲得の部門たる獨占工業部門と、極めて低率の利潤しか得て居ない無組織小企業へと分裂する傾向が益々明かとなつて來た。一九二七年の好景氣はアメリカにおける所得稅百萬弗納入者を再び急速に增大した。だが忘れてならぬことは、この增大は中小企業の破滅を條件として居ると云ふことである。株式會社所得統計によれば二四九八七七の會社は一千三十億の總所得と八十億の純所得を、二〇三〇〇六の會社は二百四十三億弗の總所得と二十三億弗の損失とを示して居る。そしてこの損失しつゝある企業は一年の賣上額十二萬弗以下の小企業である。この兩者の割合が如何に發展したかは次の數字を見よ。

年度	報告株式會社(單位一千)	報告會社百分率		純所得報告會社の純所得合計(百萬弗)	純損失報告會社の純損失合計(百萬弗)	全報告株式會社純所得(百萬弗)
		純所得獲得會社	純損失負擔會社			
1916	341	61	39	8.766	657	8.109
1917	351	66	34	10.730	630	10.100
1918	318	64	36	8.362	690	7.672
1919	320	65	35	9.411	996	8.415
1920	346	59	41	7.903	2.029	5.874
1921	356	48	52	4.336	3.878	458
1922	383	56	44	6.964	2.194	4.770
1923	399	58	42	8.322	2.014	6.308
1924	417	57	43	7.587	2.224	5.363
1925	430	59	41	9.584	1.963	7.621
1926	455	57	43	9.673	2.169	7.504
1927	453	55	45	8.068	2.311	5.757

(From, Statistical Abstruct of the United States, 1926. Statistics of Income 1925–1927)

獨占資本の超過利潤と雖も流通行程が問題たる限り、他の弱少生産部門の利潤を犧牲とするとなしには獲得し得られない。しかも獨占資本はこれを必要とする。こゝにおいて戰後のアメリカ合衆國において問題となつたのは一般的物價騰貴ではなくして、統制價格(主として獨占資本の支配する工業生産物)と自由價格(主として非組織產業、殊に農業)との間の著しいシエーレであつた。このシエーレこそは獨占資本がその超過利潤を保障するために常に存在することを必要としたものであり、緊急關税法、マクネリー・ハウゲン法案、ジョンス、ケチヤム法案等々の保障法案の否定によつてその存在を續けて來たものである。シエーレによるアメリカ農場經營の危機は次の數字に示される。

合衆國の農場生産物價格、農場經營者の支出價格、賃銀及び租税指數

(一九一〇—一四年と一〇〇とす)

年度	農場生産物に支拂はれた價格(受取價格)	農場經營者が購入商品に支拂つた價格(支拂價格)	支拂價格に對する受取價格の比率	雇傭勞働に支拂はれた賃銀	農場財産に對する租税(1914＝100)
一九一〇年度	一〇三	九八	一〇六	九七	—
一九一一、	九五	一〇一	九三	九七	—
一九一二、	九九	一〇〇	九九	一〇一	—
一九一三、	一〇〇	一〇〇	九九	一〇四	—
一九一四、	一〇二	一〇一	一〇一	一〇一	一〇〇

一九一五、	一〇〇	一〇六	九五	一〇三	一〇三
一九一六、	一一七	一三三	九五	一一三	一〇四
一九一七、	一七六	一五〇	一一八	一四〇	一〇六
一九一八、	二〇〇	一七八	一一三	一七六	一一八
一九一九、	二〇九	二〇五	一〇二	二〇六	一三〇
一九二〇、	二〇五	二〇六	九九	二三九	一五五
一九二一、	一一六	一五八	七五	一五〇	一一七
一九二二、	一二四	一五二	八一	一四八	一三三
一九二三、	一三五	一五三	八八	一六六	一四六
一九二四、	一三四	一五四	八七	一六六	一四九
一九二五、	一四七	一五九	九二	一六八	一五〇
一九二六、	一三八	一五六	八七	一七一	一五三
一九二七、	一三一	一五四	八五	一七〇	一六八

註。この結果農産物の持つ工業生産物購買力は 1919 年以来次の如く減退した。1919……102, 1920……99, 1921……75, 1922……81, 1923……89, 1924……87, 1925……92, 1926……87, 1927……85, (United States Department of Agriculture の數字 Hoover, Recent Economic Changes Vol. I. P. 76)

一九二八年末より一九二九年五月—六月へかけての農産物價格の滅亡的下落は更らにこの農業の購買力を減少せしめたことは疑ひがない。「七月以後の旱拔は辛じてこの破滅を救濟した。かくて我々は生産力と消費力との間の著しい不均衡を示す次の如き結果を得るのである。

（九一二三年—一九二五年の平均を一〇〇とす。）

	一九二二年	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年
農場經營者總所得（百萬弗）	一〇、四	一一、三	一二、〇	一二、七	一二、一	一二、五	一二、二	一二、六五
賃銀總額指數	八二、一	一〇三、四	九五、七	一〇六、九	一〇四、三	一〇三、〇	一二一、八	一〇八、六
生產量指數	八五	一〇一	九六	一〇四	一〇八	一〇六	一二二	一一三

（ヴアルガ、一九二九年第四・四半期における經濟及び經濟政策、より。）

我々は一方支拂賃銀額と農業所得と他方生産價値との間の不均衡が一定の動搖を除けば益々增大の傾向にあるのを知る。一九二九年の最初の九ケ月間の平均はこの不均衡が一二%以上に達した。かくて恐慌は避け難きものとなつて居たのである。

【註一】アメリカ合衆國恐慌を單純な投機方面における恐慌であると代辯するために一部の學者は在庫品の比較的僅少なることを主張する。しかし、連續生産、供給の安全、生産能力の增大、運輸交通機關の發達、信用制度の發達、生産期間の縮少等はいづれもこの在庫品を減少せしむる役割りを演ずる。（資本論第二卷。第六章參照）そして合衆國の發達せる經濟組織がまさにこれに適合せるものであることは申すまでもない。更らに我々は合衆國における賦拂ひ販賣制度を考察するを要する。これはまさに消費過程にまで沒入した在庫品と考へ得るのであるから。かくてそれは一度び恐慌が來襲すれば消費者の負擔においてこの在庫品の役割りを演ずるのである。

【註二】アナリストはこの過剩生産の性質をすでに取引所恐慌以前に見拔いて居た。彼れはこれを「過度の發達」と云ふ語で表はして居る。合衆國恐慌の深度を示すものはまさに生産の領域におけるその最高數字よりの減退の程度である。我々はこの生産の著しい減退を示す二三の數字を擧げてこれを特徴づけやう。

アナリスト景氣指數

	一九三〇年 二月	一九三〇年 一月	一九二九年 十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月
銑鐵生産	九六・〇	八九・九	九一・七	一〇三・七	一二三・九	一二九・七	一三六・三	一二七・四	一三三・一	一二六・三	一二〇・四	一〇八・四	一〇八・七	一〇九・六
鋼塊生産	九九・一	八六・五	七八・四	八九・一	一〇四・五	一一七・一	一三〇・二	一三〇・八	一三一・六	一二一・七	一一五・六	一一一・四	一〇七・〇	一〇三・七
貨車積載量	九二・三	九一・八	九三・三	九二・一	九八・〇	一〇一・七	一〇一・八	一〇二・一	一〇一・九	一〇二・八	一〇三・九	一〇三・九	一〇三・九	九八・二
電力生産	—	九八・〇	九七・一	九八・九	一〇三・〇	一〇三・〇	一〇四・七	一〇三・九	一〇一・七	一〇五・二	一〇三・八	一〇〇・四	一〇三・一	一〇三・一
瀝青炭生産	八四・四	九〇・九	九七・三	九一・七	九三・五	九六・〇	九六・〇	九四・七	九三・五	九五・〇	九三・六	八六・五	一〇五・三	九六・七
自動車生産	一二一・六	一〇三・九	五〇・八	八一・九	一一三・五	一二六・八	一二六・九	一四六・九	一五〇・七	一四六・〇	一四八・〇	一四七・四	一四五・七	一四四・五
綿花消費量	—	九一・九	八五・八	九三・八	一〇八・七	一〇三・六	一〇〇・四	一〇四・九	一〇八・八	一一三・五	一一〇・七	一〇七・九	一〇七・七	一二二・二
羊毛消費量	—	八六・三	八五・七	九七・〇	一一七・八	一一四・六	一一七・九	一一七・二	一〇五・六	一〇五・五	一〇七・九	一〇〇・七	一〇一・七	一〇七・三
靴生産	—	—	九二・九	一〇三・二	一一〇・六	一一一・二	一一一・五	一一一・一	一二三・一	一二四・三	一〇四・四	一〇三・四	一〇三・〇	一〇三・七
亞鉛生産	八一・八	八五・五	八五・一	八七・八	九四・二	一〇三・七	一〇五・六	一〇三・五	一〇〇・二	九九・三	九七・四	九三・八	八九・九	八五・一
結合指數	—	九三・二	八九・六	九四・二	一〇三・六	一〇五・八	一〇六・八	一〇八・五	一〇七・五	一〇八・八	一〇七・四	一〇三・〇	一〇四・九	一〇四・一

（アナリスト、一九三〇年三月七日による。）

我々はこの數字によつて、恐慌は五月の最高指數一〇八・五より十一月の九四・二、そして十二月の八九・六まで約十九%低落して居ることを知る。自動車工業はカナダを合して五月の六三六〇〇〇より十二月の一六〇〇〇〇へ約七五%の減退を示し、建築工業は七月の六億五千二百萬弗より十二月の三億弗（一九三〇年二月は約三億弗）へ五四%の減退であり、鋼は十二月に三〇%、銑鐵爐は十一月に二〇%、貨車積載量は十二月末に一三・二%の減退である。そして最も減退の著しかつた部門は自動車工業の如くに必需品たる度の薄い部門であり、こゝにおいて生産と消費との不均衡が最も端的にあらはれたと云ふことは注目すべき現象である。

この生産の減退がそれに相應する失業の増大を生じたことは當然である。聯邦準備局の大工業就業指數は次の如く變化して居る。

五月	六月	七月	八月	九月	十月
一二三	一二六	一二四	一二三	一二一	一一七

アナリストの景氣指數に從へば十一月は一一〇、十二月は更らにそれ以下へ低落した筈である。かくて四百萬人の失業者でさへ合衆國においては少數に過ぎると云ふことが明かとなるであらう。

三、沒落期世界經濟における合衆國投機の必然性

だが斯くの如き内的不均衡が存在するにも拘らず、合衆國一九二九年の巨大な取引所景氣を招來した原因は何處にあるか。合衆國金融資本の支配する生産部門の高度に發展した合理化がカルテル保護關稅と相俟つて勞働者階級及び小企業を犧牲とする高度の超過利潤を保證したこと、殊に新興産業諸部門、(化學工業、電氣機械工業、人絹工業、新運輸業、新エネルギー資源、等々)が高度の利潤を擧げ、これらの新産業部門においては國家的規模、或は國際的規模において獨占が發達して居り、これらが斯樣な超過利潤を齎したことは重要な要因として考へねばならぬ。

(註)

メロンのアルミニユーム會社は一九二六、七年に純利得四千六十萬弗(拂込資本の十四倍)を示して居る。ゼネラルモータースの一九二二—一九二七年間の利潤は左の通り。

	配當せらるべき純利益	配當并及特別配當	分配部分の百分率	貯蓄又は再投資せられた部分
1922	54.474.489弗	16.606.345弗	30.48	37.868.145弗
1923	72.008.954〃	31.659.397〃	43.97	40.349.557〃
1924	51.623.490〃	32.303.269〃	62,57	19.320.222〃
1925	116.016.277〃	69.575.212〃	59.97	46.441.065〃
1926	186.231,182〃	111.576.280〃	59.91	74.654.902〃
1927	235.104.826〃	143.945.411〃	61.23	91.159.415〃
計	715.459.222弗	405.665.914弗	56.70	309.793.309弗

(Dunn: Labour and Automobiles. P. 217 より)

一九二八年にはアメリカにおいて一億五千萬弗の資金を持つた飛行機工業のトラストが組織せられた。それはナショナルシチイ銀行の指導の下に行はれ、ゼネラル・モータース、フォード、スタンダードオイルがその他のものと結合して指導部に居り、アメリカの獨立飛行機業、自動車工業の全系列を結合して居る。

しかしこの超過利潤をもつてしてもこれらの會社の株價の最高價格に割りあてるときはそれは餘りにも低い配當たらざるを得ない。

アメリカン、パワー、エンド、ライト、　〇・六%
アメリカン、ウオター、ウアークス、　〇・五%
ゼネラルエレクトリク　一・〇%
ウエステイングハウス・エレクトリク、　一・四%
スタンダードオイル、ニユーヨーク、　一・二%
ユ、エス、スチール　二・七%

(アナリスト、一九二九年十一月二十九日)

こゝにおいて我々は、このアメリカの投機を世界恐慌への一歩として特徴づける世界經濟情勢を觀察しなければならぬ。マニユイルスキーは世界經濟恐慌の發展を決定する主要要因を

ばその恐慌の性質に從つて四つの型に分つた。一、アメリカ合衆國。二、東部中部ヨーロッパ。三、植民地、半植民地（インド、支那、南米、）四、恐慌前景氣諸國。（西ヨーロッパ、フランス、イギリス、スカンヂナヴィアの一部、××。）（マンユイルスキー EKKI、プレジデイユムの報告より。）

二、東部及び中部ヨーロッパの個々の國々（オーストリア、ポーランド）においては恐慌は合衆國におけるよりも以前から準備せられて居た。これらの國々は、遂に恐慌にまで成長せざるを得なかつた永續的不景氣を呼び起す固有の諸原因を持つて居た。そしてこれに屬するものが、以前の統一國土の小國への分裂及び封建的遺制等々による生産力の發展の阻害であり、これら諸國の世界資本による制約であり、その資源に比して著しく大きい軍隊、警察等々への支出の増大である。そして經濟的不況を招來したこれらの諸原因こそは亦いづれも政治的危機の成長の前程をも形成して居たのである。

ドイツの恐慌の現象は何處にあらはれて居るか。我々はドイツにおいてその植民地における價値實現の可能性の收奪と産業資本の利潤の大部分の外國貸附資本へ支拂ふことによる資本主義的發展の制約を考慮せねばならぬ。さればヴァルガは曰ふ「ドイツ資本主義はアメリカ等の如き好景氣と呼ばるべきものを持ち得るものではない」と。（ヴァルガ、一九二九年、第四・四半期の經濟及び經濟政策）こゝに變遷常なきドイツ景氣の推移の根底がある。しかもドイツ經濟は一九二七、八年を最高として今や景氣下向の度を速め始めた。このことは生産指數、そして特に價格態樣に明かに示されて居る。

生産指數。（一九二四年七月—一九二六年六月を一〇〇とす）

	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年
第一四半期	七七・五	一二一・八	九四・四	一二一・九	一二八・四	一二〇・六
第二〃	八六・一	一〇七・一	九一・四	一二三・五	一三一・六	一二六・一
第三〃	八六・一	一〇三・三	一〇〇・七	一二三・三	一二七・六	一二三・六
第四〃	一〇一・六	一〇四・一	一一六・七	一二六・九	一〇八・九	

（景氣變動所の指數）

價格は自由價格の一九二七・八年の一一〇より一九三〇年一月の九〇・四まで激落した。

	自由價格	統制價格
一九二九年一月	一〇一・九	一〇四・六
二月	一〇〇・九	一〇四・八
三月	一〇〇・九	一〇四・八
四月	九九・七	一〇四・八
五月	九七・二	一〇四・九
六月	九六・九	一〇四・九
七月	九六・九	一〇四・九
八月	九七・一	一〇五・一

九月	九六・六	一〇五・三
十月	九五・一	一〇五・三
十一月	九三・二	一〇五・三
十二月	九二・二	一〇五・三
一九三〇年一月	九〇・四	一〇五・〇

（景氣變動所四半期報告、第四卷第四册、一九三〇年ベルリン）

ドイツ社會民主黨首領ヒルフアーディンクの財政改革案ともなつたドイツ資本利潤率の減退の根源は外國市場、そして特に國内市場の狹隘化にその根柢を置くものである。そしてこのことをば我々は勞働者階級購買力の減退と獨立生産者の收奪とより立證し得る。

（A）プロレタリア階級購買力の減退はこれをば（イ）その價値生産物の分前への參加の減退（ロ）合理化の結果たる勞働强度の增大による失業者の增大、（ハ）所謂る實質賃銀額の不變、等々によつて示すことが出來る。（一九二九年ウイルツシヤフト、ウント、スタテイステイク誌發表の賃銀稅統計によれば、一九二六年に千七百八十萬人卽ち全賃銀勞働者中の七六％六は週賃銀二八マルク以下を得て居るにすぎない。）

（B）ドイツには合衆國の如くに農業の總所得を知る統計が存在して居ない。だが農業生産物と工業完成品との間の價格のシエーレは明確に認められ、農業購買力の最近二ヶ年間における甚しい減退が結論し得られる。

農業生産物及び工業生産物價格指數

	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年（十一月）
農業生産物價格指數	一三九・三	一三七・八	一三四・三	一三七・四
工業生産物價格指數	一四九・五	一四七・三	一五八・八	一五六・四

（ヴアルガ、一九二九年第四、四半期における經濟及び經濟政策。）

ドイツにおける生産能力と消費力との間の不斷に增大する不均衡がこのことによつて說明せられる。そしてドイツ景氣の進行は既に顯著となつた消費資料生産部門（第二生産部門）における過剩生産の存在と一九二九年の終りに到つても尙ほも進行を續けて居た生産手段生産部門との間の益々增大する不均衡として典型的な恐慌的性質を示して居る。

「消費財貨生産工業では第三・四半期において――さきに行はれた著しい生産制限への反動として――幾らか活氣を見た。だがこれも第四・四半期に入つて季節的にも亦終熄した。十二月まで上向した織物業等は……再び減退には入つた。皮革製造業はその就業度をば十一月の八二・七％より一九三〇年一月の七七・六％に縮少した。（一九二八年を一〇〇とす。）……」（景氣變動所四半期報告、第四卷、第四册、一九三〇年ベルリン。）

重工業の生産指數は依然として一九二八年の指數と同一を維

持して居る。だが石炭は既に一九三〇年一月に入つて著しく在庫品を増加し。恐慌的現象をあらはし始めた。自動車製造工業は一九二九年第三・四半期の九一・四(一九二八年を一〇〇とす)より第四・四半期の五七・五に低落し、一九三〇年一月の季節的増大にも拘らずそれは六三・四を越えぬ。機械工業の利用能力は一九三〇年一月に全能力の六二%(一九二九年十月には六六、六%)に過ぎぬと景氣變動所は報告して居る。

重工業生產指數　(單位一〇〇〇噸)

	石炭	褐炭	銑鐵	粗鋼
一九二八年十二月	一一八一九	一四一〇五	八〇三	一〇九一
一九二九年九月	一三四八〇	一四一二〇	一一〇九	一三二四
十月	一四八二五	一六〇五〇	一一五七	一三三七
十一月	一四一五七	一五六一三	一〇九一	一二八六
十二月	一三六五二	一四五一〇	一一〇〇	一二五六

(景氣變動所報告による。)

【註】ルール地域における一月の販賣額は月採掘額より四六萬噸減少し、滯貨は一七二萬三千噸に増大した。アーヘンにおいては一月末五萬六千六百噸の滯貨を見、西オベルシユレジアでは特に惡く、滯貨品は八〇%を増大して四十七萬一千噸となり、ニーデルシユレジアにおいても著しく惡く六萬八千噸となつた。(ウイルツシヤフト・ウント・スタス テデイク、一九三〇年三月一日號より)

我々はドイツ經濟の危機がこの合理化による内的矛盾の發展と外的客觀的制約とにあることを知らねばならぬ。それは景氣變動所報告の敎ふる如くに國内矛盾の發展を重要な原因 するものであつて、合衆國恐慌の久しき以前より既にあらはれ 居たものである。

三、植民地及び半植民地が既に長年經濟的不景氣より脫出し得ないことは周知の事實であり、それはこゝに偉大な政治××の基礎を準備した。それでは如何なる特殊の原因がこゝに恐慌現象を引き起したのであるか？

それは就中、封建的遺制及び屢々奴隷制の遺制に基く金融資本の略奪耕作形態の發展である。南米諸國の××的上向の急激なテムポはかくて南米諸國に二様の社會制度の結合が存在することに基因する。これ封建的遺制と奴隷制の遺制と金融資本とによる最新形態の搾取であり、これがこれら諸國における極端に尖鋭化した階級鬪爭を生み出したのである。第二の原因は所謂る專門的耕作への分化である。帝國主義者達は植民地を屈伏し、經濟的若しくは屢々武力をもつて母國工業の需要を滿たすべき生產物のみを耕作せしむる。(資本論第一巻)かくてエクアドルはカカオを、チリは硝石を、ボリヴァアは銅を、ブラジルは珈琲を、マライ諸島はゴムを、キューバは砂糖を、インドは棉花、黃麻、油脂植物、茶を、エジプトは棉花(全輸出の八〇%)等々を生產するに到つたのである。(マニュイルスキー)

斯くの如き情勢において、世界市場における景氣の變動がその產業部門に不可避的に反映することは全く明かである。それ

は植民地における數百萬人の小生産者を蹂躙するに充分である

植民地における恐慌の第三の原因は農業生産物の價格下落を遥かに凌ぐ植民地生産物價格の滅亡的下落である。指導的資本主義諸國における過剩生産は自働的に植民地原料品の過剩生産を惹起する。そして組織なき植民地生産物價格は更らに本國の帝國主義的政策によつて著しくその價格を下落せしめざるを得ない。

〔註〕

原料と完成品との年平均價格の間の差異の比率と若干輸入物價格指數と輸出物價格指數との間の差異の比率(國際聯盟發行 Memorandum on Production & Trade より)

原料又はその類似物指數＝100

	スウェーデン	アメリカ合衆國		ドイツ	アメリカ合衆國	イギリス本國	英領インド	アルゼンチン
	完成品		1923＝100		輸出品	輸出品	輸入品	輸入品
1921	+37	+22		—	+27	+42	+69	+59
1922	+33	+7		—	+22	+33	+21	+62
1923	+22	+7		—	+11	+28	+31	+52
1924	+17	+6	−2	+30	+11	+22	+17	+36
1925	+8	+6	−6	+18	+1	+19	+4	+17
1926	+9	+11	−1	+16	−4	+23	+12	+37
1927	+8	—	−3	+7	−5	+21		
1928 (上半期)	+3			+18				

(原料品の價格を100としてそれら商品名の欄にかゝげた種類の商品の價格指數との差異は各行の數字にてあらはす。(−)印はそれが原料品價格指數より低いことをあらはす。)

植民地の恐慌狀態は最近數ヶ年に生じた植民地への資本輸出の著しい減退がこれを説明する。合衆國資本輸出總額の中、一九二八年に至るまでにアジア、アフリカ及びオーストラリアに投資せられた額はヨーロッパに投資せられた額の三分の一にも及ばない。この傾向は一九二九年に入つて更らに顯著にあらはれた。

合衆國資本發行(借替へを含ます。)(最初十ヶ月の數字。)

(單位百萬弗)

	一九二九年	一九二八年	一九二七年	一九二六年	一九二五年	一九二四年	一九二三年
全額	九二六七・四	六〇四二・四	六四四八・八	五三六八・九	四九五八・八	四七五三・五	[illegible]・九
内別							
カナダ	三三三・七	二六七・四	二七四・七	一九七・五	一三三・三	一三九・三	五五・〇
其の他諸國	三七〇・三	一〇二三・三	一〇二四・七	七五五・六	七〇二・七	五八七・八	一八五・九
合衆國内	八五八六・四	四八六二・五	五一五九・四	四四五五・八	三三三四・九	三九五六・四	[illegible]・〇

(ヴアルガ前掲より。)

かくて我々はニューヨーク取引所の投機の浪が世界中の至る所に甚しい信用恐慌を惹起し、植民地を荒廢せしめたことを知るのである。

四、恐慌前景氣諸國。イギリスは最近その狀態を回復したとは云へないほど慢性的な不景氣の中に沈淪して居る。織物工業の狀態は極端に緊張して居る。(最近傳へらるるヨークシアの險悪な狀態

を見よ。）資本輸出は減退の傾向を示し、既に資本發行額と共に一九二七、八年より著しく減少した。（エコノミスト、一九二九年十二月二八日を見よ。）（資本總發行高、一九二七年三五五・一、一九二八年三六九・〇、一九二九年二八五・二――單位百萬磅。）株式價格は下落し、新規發行は減退し、同時に失業は增大し二百萬人に及んで居る。イギリス經濟の狀態を知る材料として一九二九年十月二十一―七日に行はれた短操勞働者の調査の數字をかゝげる。

ミニストリー・オブ・レバー・ギアゼット所載四萬の企業と四百萬人の勞働者（イギリス總體にて一千萬人）とについて行はれた週短操勞働日の調査

	短操勞働者百分率	週短操時間	全勞働者に換算した週短操時間
木綿工業	一三・四%	一二・七時間	一・七時間
羊毛工業	三一・三	一一・七	三・七
漂白、捺染、染色（繊維物の）	四七・六	一一・三	五・一
仕、立業	四一・一	一一・四	四・七
靴工業	五〇・七	一一・九	六・〇
化學工業	一・四	九・七	〇・一
被服工業	一三・八	一〇・七	一・四
印刷工業	一・五	一〇・一	〇・三
鐵及鋼	一三・八	一三・一	一・八
機械工業	四・九	一三・二	〇・六
造船	二・六	一六・九	〇・四

建築工業	一・五	一〇・〇	〇・六

（エコノミスト、一九二九年十二月七日、ヴアルガの引用）

漸次的な工業利潤額の增加も一九二九年に至つて停止した。（ウイルツシヤフツ・デイーンスト、一九三〇年第四册參照）イギリス工業の不均配當額はイギリスの主要工業において甚だ低い。

	一九二九年	一九二八年		一九二九年	一九二八年
釀造業	三三・一	一四・八	造船業	一〇・六	九・三
ホテル等	六・九	八・四	商業	一三・一	一一・五
鐵、鋼、石炭	一・八	一・三	茶	三・八	三・六
士地會社	八・四	二一・三	電話	七・三	三・四
自動車製造	一四・一	一六・一	繊維工業	四・三	五・〇
硝石	〇・五	〇・九	市街電車	四・八	四・三
石油	七・五	八・七	信託	八・八	七・三
ゴム	四・四	四・三	雜	一五・六	一六・三

（ウイルツシヤフツ・デイーンスト、一九三〇年、第四册）

ニューヨーク恐慌後の金融市場の緩和による工業の有利な地位にも拘らず、イギリス貿易は一九二九年末に到つて減退した。繊維工業生產品輸出額は益々減退の傾向を示し、鐵、鋼の輸出增加も生產能力と販賣市場との間の矛盾を解決し得ない。こゝにイギリス工業の、そして特に繊維工業における合理化への進出が日々勞働者の犧牲において強く叫ばれる根據を持つ。

一月より十一月に至るイギリスよりの輸出

	一九二九年	一九二八年	一九二七年
石炭（百萬噸）	五五・三	四五・九	四七・三

鐵鋼（〃）	四・三	三・九	三・八
綿絲（百萬英ポンド）	一五三・三	一五六・一	一八六・〇
綿織物（百萬平方ヤード）	三六八・一	三七六・一	三八七・一
毛織物（〃）	一四四・一	一六八・三	一五五・九
毛絲（百萬英ポンド）	五〇・八	五三・九	五六・七

（ヴアルガ、前揭より）。

慢性的な不景氣の第二の國として我々は日本を擧げることが出來る。日本は大戰終結後實に三回の大きな恐慌に見舞はれた。即ち戰後初めての世界恐慌の發端となつた一九二〇年、一九二三—二四年（震災）、一九二七年（銀行恐慌）。斯樣に日本の資本主義は戰後に到つて恐慌から恐慌へとよろめき歩いてゐるのである。そしてこの急激に相次いで襲來する恐慌原因は日本資本主義の薄弱な自然的基礎と狹隘なる國內及び海外市場とに在る。而して或る意味では一九二九—一九三〇年の世界恐慌は再び日本に最も早く襲來したとも見ることが出來る。

日本の一九二九—三〇年の恐慌を金解禁準備のための、金解禁による打撃から起つた、特殊のものと考へる說があるが、決してかゝる性質のものではない。世界的な取引所の混亂が世界的恐慌そのものでなく恐慌の原因を促進し強めるところの一要素であつたと同じく、日本においては×××は同じ役割をなし潜在的過剩生産を現實的過剩生産に發展せしめ、××を惹き起したのである。

では潜在的過剩生産はいかにして起り得たか、それは合理化の遂行、合理化の一應の完成、その結果としての過剩生産である、今次の日本の××の根本的原因の一つを合理化の一應の完成にあるとするのが、我々の見解の一つの特長である。ではいかなるところにおいて合理化は行はれたか。

我が國産業の技術的合理化の方向は、動力の方面においては蒸汽式動力機にかへるに安價な電力をもつてせんとした。あらゆる産業部門における動力の電氣はすばらしいテンポで發展し、先進國イギリスを遙かにぬき米獨に續くものがあつた。そのためには大規模の水力電氣、大仕掛けな火力發電所が設立された。電力事業の發達は電氣工業を發達せしめ、土木工事の原料としてのセメント工業の飛躍的な發展を促した。無政府的に計畫された電力事業、電氣工業、セメント工業の三部門の發達は非常に不均等であつた。技術的合理化の採用、大量生産を採用した電氣工業にはすでに過剩生産が現はれてゐた。第二にそれは作業機の方面においてはより精密な、自動機械の轉換が試みられた。この傾向は特に纖維工業において顯著であつた。しかしかかる自動機械の採用の結果は多くの勞働者の生産部面からの投げ出し、生産額の異常な増加にも拘はらず、從業勞働者の數の

絕對的の減少さへ惹き起した。

第三に新たなる産業部門、新工業の設立が盛んに行はれた。就中化學工業の發達が顯著で、特に著しいのは人絹工業の發達であつた。化學工業はじめ新工業は新技術を基礎とするが故に大なる勞働力の收容は不可能であつた。ことに內外における人絹工業の發達は我が國第一の輸出商品生絲に直接間接の影響を與へ、從つて我が農村の所得の減少を來たさしめ、農民の窮迫、國內市場の窮乏化の一因となつた。

一九二九年における日本の取引所混亂は四月の日魯漁業株式會社の株式相場の崩壞に始つた。それは日本資本家戰線の分裂に乘じたロシヤ國營漁業の進出を直接の原因とし、さらに罐詰製品のヨーロッパ販賣市場における日露兩國の市場爭奪戰により一層尖銳化せしめられた。額面の二倍以上の價格を示してゐた日魯漁業の株式は短期間に下落して遂には額面を割るにいたつた。日魯の崩壞を機として一般株式市場も惡化した。七月八月にはさらに大なる下落を示した。これらの株式における崩落と金解禁の接近とは生產と消費の間の均衡を全く破つた。滯貨が日々に增加した。物價は七月以後急激なる下落をした、特に生產財指數の下落は顯著である。

一九二九年秋におけるアメリカの恐慌は、棉花價格の下落、硫安相場の激落、生絲需要の減退、あらゆる輸出の減退といふ過程を通じて、金解禁後の我が經濟に大なる打擊を及ぼした。さらに銀價格の未曾有の下落は我が東洋における海外市場を自から縮少した。

金解禁後の物價低落及び取引の減退傾向によつて生產制限はあらゆる部門において行はれるにいたつた。製絲業に於ける運轉釜數二割封印、紡績業における法定休業の外一ヶ月二晝夜休業と一割の休錘、絹紡絲業に於ける一割二分の操短と一ヶ月二晝夜休業、セメント五割五分操短、晒粉業に於ける三月中三割の操短、製紙業に於ける三割五分の操短、肥料業(過燐酸)に於ける三割操短、ラミー業に於ける三割操短等はその顯著なものであり、その他共同販賣を行ふも鐵材、製粉等枚擧に遑がない。

操業短縮は一方では就業勞働者數を減少せしめ、他方では動力消費を減退する。かゝる一般的操短に際して電力消費は激減し、過剩電力は著しく增加する。巨額の資金を投じて無統制に開拓されし電力業は過剩生產のため全く行き詰つた。電力事業の行詰は更にセメント業にも波及する。その操短率は五割五分に上る。我が最大の電氣トラスト東京電燈は運轉資金に窮し全く行詰つてしまつた。六萬に達する株主、中小資本家を犧牲にしてでも、東電に投資する日英米三ヶ國の金融資本はそのインタ

レストを擁護せんとしつゝある。

我々は以下に我が國の恐慌の發展を現はす若干の統計をかゝげておかう。

生産指數

年	月	生絲	綿絲	石炭	セメント
大正10—14	(平均)	100	100	100	1.0 (14年)
15	〃	135	122	111	128
昭和2	〃	154	118	118	143
3	〃	158	114	120	154
4.	1	94	123	124	161
	2	96	121	116	149
	3	161	122	133	182
	4	167	128	125	184
	5	149	139	124	188
	6	110	130	118	183
	7	250	126	116	180
	8	235	125	106	175
	9	224	133	114	165
	10	228	138	122	117
	11	216	143	128	178
	12	195	143	132	151
(平	均)	177	130	118	172
5.	1	91	132	119	147
	2	90			

株價指數

年	月	重要產業株相場指數(五十種月平均)
大正10—14	(平均)	100 *
10		113
11		98
12		104
13		84
14		100
15		104
昭和2		92
3		92
4	1	87
	2	90
	3	93
	4	88
	5	85
	6	86
	7	80
	8	75
	9	76
	10	76
	11	75
	12	71
	平均	82
5	1	68
	2	68

季節的變動修正　*(三菱合資調査)

日銀勞働指數(大正十五年平均=100)

年	月	實收賃銀指數	定額賃銀指數	就業者指數
大正10—14	(平均)			
〃 10	(〃)			
11	(〃)			
12	(〃)			
13	(〃)			
14	(〃)	98.8	99.4	101.4
15	(〃)	100.0	100.0	100.0
昭和2	(〃)	102.2	99.9	94.8
3	(〃)	105.4	99.1	90.3
4	1	105.0	98.9	89.9
	2	107.2	99.0	89.9
	3	107.4	98.9	90.6
	4	104.1	98.6	92.1
	5	103.7	98.6	92.1
	6	103.7	98.5	91.7
	7	102.3	98.6	91.4
	8	101.7	98.5	91.9
	9	102.1	98.6	91.7
	10	102.5	98.5	91.5
	11	102.8	98.4	91.2
	12	104.3	98.4	90.2
	平均	103.9	98.6	91.1
5	1	100.5		88.5

(日銀調査)

フランスについては少くともニユーヨーク恐慌までは未だ恐慌的現象を確めることは出來なかつた。だがすでに自働車工業においてはフオードの競爭によつて一抹の暗影が確められた。そしてこゝにおいてもあらゆる意味の大衆消費力の制限が蓄積せられて居たことは云ふ迄もない。フランスの繁榮は物價騰貴と甚しく低い賃銀がその一因であつたとも云ひ得うる。

四、合衆國取引所恐慌の意義　一、

(世界經濟の危機)

かくの如くにして、合衆國の投機は國内產業中の中小工業殷

卸賣物價指數(明治三六—大正三平均＝100)

		總指數(20種)	生産財指數(10種)	消費財指數(10種)
大正10—14(平均)				
10	(〃)	197	202	193
11	(〃)	206	203	208
12	(〃)	209	214	203
13	(〃)	222	220	224
44	(〃)	221	214	229
15	(〃)	192	178	206
昭和2	(〃)	179	166	196
3	(〃)	174	168	186
	1	173	175	170
	2	173	175	171
	3	174	176	173
	4	176	176	175
	5	172	170	173
	6	173	171	174
	7	169	169	169
	8	168	167	169
	9	168	167	169
	10	169	159	179
	11	162	152	172
	12	156	149	163
	平均	170	167	171
5	1	151	146	157
	2	149	141	157

(三菱合資調査)

業を犠牲とする、そしてすべての他の世界の産業を犠牲とする繁榮であつたことが明かとならう。八十五億五千萬弗と云ふ一九二九年九月三十日のブローカース・ローンは既に迫りつゝあつた世界恐慌を前提とするアメリカの超過利潤を獲得する二三の部門の祝福の資金であつた。これこそ資本主義腐爛期を示す現象である。そしてこの投機によつて作り出された假空の購買力は生産と消費との間の不均衡を一時的に隱蔽し、その破綻の際における不均衡を益々増大せしめたのである。

かくて我々は合衆國の恐慌の與へた國内的意義を考察しなければならぬ。

合衆國恐慌によつて失つたものは誰であつたか？數百萬の中小資本家、官吏、俸給生活者、熟練勞働者それである。そして獨占資本主義は中小資本家をして利子をもつて滿足さすか、又は投機によつて運命をトすかの二途に據らざるを得ざらしめる。

然らば利益を得たものは誰であつたか？　勿論大資本家であつた。彼等はその企業の支配にあり餘る株式をば高い價格で賣却し、半ばの値をもつてこれを買ひ戻した。銀行シンジケート團による株式の買入れも亦第二段の小資本家の收奪にすぎない。シンジケートは最低の價格において買ひ入れ、價格を釣上げた後に、恐慌は最早や過ぎたと信じ込んだ善良な人々にその危險を轉嫁したのである。かくて銀行業者は取引所恐慌の最中にあつて立派な取引を濟ましたのである。

アナリスト並びにウォールストリート・ジャーナルの數字にすれば株式の下落は次の如き數字を示して居る。

	最高價格(九月十九日)	十一月十三日	十二月二十一日
アナリスト指數(二五種工業株)	四六九・五	二二一・〇	二五九・〇
ウォールストリート・ジャーナル指數(四四〇工業株)	三八一・二	一九八・七	二四一・〇

小資本家、官吏、農民等々はかくて五百億—六百億の値下りによつて生じたる損失の大部分を負擔したのである。

だがそれのみではない。アメリカに廣く流行して居る賦拂賣買制度は流通行程にあるべき財貨の價格下落の負擔を大衆に轉嫁した。大衆はこれによつて資本家の値下りの負擔を負ふことによつて益々その消費を制限せられてゆく。

こゝで我々はニユーヨークの破綻が示したアメリカ金融資本主義に生じた恐慌の特性を知らねばならぬ。金融資本が高度に發達した合衆國の獨占資本主義においては、我々は遂に金融恐慌を知らなかつた。そして恐慌の負擔は盡くプロレタリアートと貧しき大衆に××せられた。ヴァルガはこれこそアメリカの恐慌が古典的恐慌と區別せらる根本的な點であると云ふ。（ヴァルガ、一九二九年第四、四半期に於ける經濟及び經濟政策。）古典的恐慌においては資本家も亦恐慌による損失を負擔せざるを得なかつた。然るに金融資本家は最早や何等の損失をも負擔せず、それを利用して更らに大衆を收奪するのであると。プロレタリア階級は永續的失業と云ふ重き負擔を負つた、そして中小資本家は急激にその商品の價格を下げざるを得なかつた。しかも大資本家はその價格を少しも、若しくはそれ程下げるを要しなかつたのである。そしてこれこそ資本論の價値論の忠實なる實行であつたのだ！さればアメリカ恐慌が單純に滯貨品販路の狹隘化に導くに過ぎぬと説く金融資本レヴィアタンの××は大衆を欺く欺瞞にすぎぬ。それが大衆の消費を大衆的に制限し、大衆の飢餓と原料品の過剩と尨大な失業とを生ずることは自明である。

だが今次の恐慌においては激しい一般的な價格下落が豫想せられる。それは未だインフレーション的要素が未だ完全に排除せられないのと、販路の著しい積極的狹隘化とに基くものである。

合衆國恐慌は斯樣にして内部の矛盾を著しく激成した。そこでこの難局を所望すべきアメリカにおけるモンド・ターナー會議がフーヴァーによつて試みられた。ヤング、スローン、デユポン、フォード、等々の金融資本の代表者は、グリーン、ウール、ジョンストン、ホイトウエー、リユイス、等々と間接に會合して、傭主側が今後賃銀値下げを行はざることの代價として勞働者側は今後新しき賃銀値上げの要求運動を起さず、勞働者は問題の解決にその産業において全力をつくして共働すべきことを誓ひ、何等の爭鬪をも惹起せずして勞資關係の靜穩を維持すべきことを宣言したのである。（フーヴァーの宣言）

フォードはかくて初任給並びに勤續工の最低賃銀値上げを口實として數萬人の勞働者を街上に投げ出すことが出來た。そして更らに販賣代理店の犧牲と勞働者の犧牲とにおいて自働車價

格の引き下げを行ひ得た。

だが斯様な國内大衆の未曾有の收奪が國内販賣市場の狹隘化へ、そして國内階級對立の激化へと向はざる道理がない。

フーヴァーの産業平和はグリーン等の金融資本への露骨な奉仕を明かならしめ、改良主義者の金融資本家的、ブルジョーア的性質を益々確立すると共に、他方一般大衆の左翼化の客觀的情勢をも作つた。株式恐慌は「資本の民主化」なるものが何物であるかを大衆に明確に示した。アメリカ資本主義の民主主義的幻想は完全に破綻した。恐慌による大衆的失業と窮迫とは何物が彼等の道を開くものであるかを明かならしむるであらう。恐慌の發展が經濟的、階級・人種對立を合衆國南部地方において尖銳ならしむるであらうと云ふことは注目に價する。恐慌は既に南部の工業化を停滯せしめて居る。同時に小農の破綻とニグロ小作人の沒落とは急激に發展するであらう。安價な、從順な百%までものアメリカ人であつたあの勞働者の不平を知らない南部天地のなつかしい時代、資本家のパラダイスは既に過ぎてゆく。かくて×××組合運動には益々有利な情勢が準備せられた。

五、合衆國取引所恐慌の意義 二、
（世界經濟の危機）

我々はこゝで、アメリカ恐慌の持つ世界經濟的意義に移らねばならぬ。

ヴルガは主張する。「我々はアメリカ合衆國の恐慌が一般恐慌へと導くと主張する充分な理由を持つ」と。その理由は次の如きものがある。

一、アメリカ合衆國は既にそれ自身の經濟上の重要性よりして全資本主義的世界經濟の約五十%を構成して居る、それ故合衆國における尖銳なる恐慌は既にそれ自身殆んど世界恐慌である。

二、一連の國々は合衆國より以前に激しい恐慌に見舞はれて居る。（東ヨーロパ諸國）……

三、西ヨーロパ諸國は比較的強い上向的景氣を示して居るが、こゝにも恐慌の要素は充分培はれ、合衆國の恐慌は激しい恐慌をこれらの國々に引き起すであらう。（フランス・ベルギー、スウイス、スカンヂナヴィア等々）そしてこれに加ふるに永續的な景氣國イギリスと變遷常なきドイツがある。

四、更らに我々はその社會組織の××をもつて迫りつゝある支那經濟、金解禁の結果、アメリカ恐慌をはなれても既に恐慌に沈みつゝある永續的不景氣國××がある。そしてオーストラリア、インドの激しい不景氣がある。カナダは既に完全にアメリカ恐慌に席捲せられて居り、ブラジルは珈琲の價格下落によ

り恐慌に見舞はれ、アルゼンチンは金の輸出を禁止して、激しい爲替相場の下落を引き起した。

更らに商品の種類より見るならば、そこには農業恐慌があり、慢性的石炭恐慌があり、銀の危機があり、纎維生産物の危機がある。

しかも他方邊境の國々には信用恐慌が依然として存續して居る。』と。（ヴァルガ前掲より）

合衆國恐慌の世界恐慌への尖銳化は二つの方向を通じて可能である。（イ）合衆國への輸入の減退と（ロ）より低廉な價格による合衆國輸出の增大とこれである。前者は既に贅澤品工業において、ホテルにおいて、スイウス、オランダ、フランス等々を襲ひ、その輸出品の四六・六％を占める日本の生絲を襲つた。補償案にまで發展した日本生絲價格の激落、そして合衆國における日本生絲の消費は次の如く減少した。

輸入高　（米國絹業協會發表）

昨年三月	四三〇五四俵
本年一月	三六五六二・
二月	三六九一五・
三月	三一八五〇・

（中外商業新報、昭和五年四月五日所載）

だが合衆國恐慌の輸入貿易に及ぼす意義を贅澤品に限ることは恐慌の本質を見誤るものであることは前述の如くである。このことは原料並びに大衆消費資料における次の價格下落がこれを間接に證明する。（次頁の表参照）

一九二九年のヤング案は合衆國の海外進出の意識的轉期であつた。アメリカ恐慌がこの方面における努力を鼓舞するであらうとも云ふことは極めて當然の結果である。そして廣大な經濟領域と高率のカルテル保護關稅と輸出率の少ないことは合衆國の有力な强みである。クラインズは一〇—一一％に足らぬ輸出率もよく大工業をば一つならずその窮境より救ふであらうと述べて居る。そしてこの一—二％の增大こそは世界市場におけるその競爭國への滅亡の宣言である。のみならず合衆國は商品輸出に最も有利な武器たる資本輸出上の無比の地位を持ち、長期の信用、貸附をば工業生産品の購買者に與へ得る能力を持つてゐる。かくてスタンダードは南京政府と石油販賣の契約を結んだ。取引所投機後の合衆國の資本の剩餘はこの方面の活動の餘地を充分に與へる。低廉なる價格、長期の信用、巨大な貸附け、これこそ合衆國資本がその競爭國を世界市場において壓倒する手段である。大工業國中、大ブリテン、及び或る程度までフランスが資本輸出の武器をもつて戰ひ得るであらう。ドイツ、イタリー、日本は只價格による競爭を通じてのみこれと異れた鬪

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月11日	11月18日	11月2?日
96.12	84.87	91.-	95-	100.37	102.62	91.75	87.50	88.50	87.62
$9\frac{7}{16}$	$11\frac{5}{16}$	$10\frac{1}{2}$	$11\frac{5}{8}$	$10\frac{9}{16}$	$10\frac{1}{4}$	$9\frac{13}{16}$	$8\frac{1}{8}$	$8\frac{1}{4}$	$8\frac{1}{16}$
80.75	77.25	74.-	74.50	66.-	66.-	$51.62\frac{1}{2}$	45.25	42.-	34.25
17.62	17.-	16.75	16.37	15.75	15.62	12.75	11.62	11.37	10.87
49/6	40/9	40/6	4/1-	41/6	40/6	40/-	38/9	36/9	36/9
$10/3\frac{3}{8}$	$10/3\frac{3}{8}$	10/3	11/6	$11/5\frac{1}{4}$	12/-	$11/6\frac{3}{8}$	$10/2\frac{1}{4}$	10/2	$9\frac{1}{4}$
$22/4\frac{1}{2}$	21/9	$21/4\frac{1}{2}$	$23/1\frac{1}{2}$	$22/20\frac{1}{2}$	22/3	$2/20\frac{1}{2}$	22/1	$22/1\frac{1}{2}$	—
$22/4\frac{1}{2}$	22/-	21/3	—	23/3	23/6	$23/1\frac{1}{2}$	$22/4\frac{1}{2}$	$22/7\frac{1}{2}$	—
14/-	13/9	13/9	14/6	14/6	14/6	15/-	14/-	14/3	14/-
$14/1\frac{1}{2}$	14/-	14/-	—	10.52	10.27	10.06	9.47	9.39	9.83
10.48	10.29	10.29	10.13	18.35	18.80	18.05	17.30	17.30	17.70
19.85	19.90	19.05	18.60	—	—	—	—	—	—

und allgemeine Krise. より)

爭を續けるであらう。

かくて主要な鬪爭は合衆國と大ブリテンとの二大帝國主義國の間に展開する。廣大な植民地と銀行網とを持つイギリスと、巨大な資本の力を持つ合衆國と。合衆國は今や株式の買占め、外國の全企業の引受けによつてその地位を確保して居る。そして電氣工業と自動車工業とはその先端を進んで居る。合衆國資本は最近イギリスのゼネラル・エレクトリクの株を多數買收し、上海の電氣會社を獨占し、ドイツA・E・Gに參加した。そして遂に恐慌中に、ベルギー會社の指導の下に作業して居た國際電氣企業金融會社ソフィナをその手に入れ、十月十九日にはミラノのエディソン會社の總會に參加しモルガンとナショナルシチー銀行は一億六千萬リラに上る十一萬の新株を引き受けた。一九三〇年二月にG・EはA・E・Gと竝ぶドイツ電氣工業トラスト・シーメンスと提携した。既にG・EはA・E・Gと提携して居る。かくて我々は地球上には合衆國電氣工業以外の何者をも見ない！

合衆國資本のドイツ、オペル會社の買收、フランス、シトローエン會社への參加は自動車工業におけるこの過程を示す。

そして今や新しい合衆國帝國主義の植民時代が始まらうとして居る。植民地における米英の鬪爭は極端にまで尖銳化して來た。

				1　月	2　月	3　月
玉蜀黍	シ　カ　ゴ	ブシエル	セ　ン　ト	95.62	94.75	94.87
ゴ　ム	ロ　ン　ド　ン	1 ポンド	シリング	$10\frac{3}{8}$	$12\frac{3}{4}$	$11\frac{7}{8}$
珈　琲	ハンブルグ	50 キ ロ	マ　ル　ク	82.50	87.25	86.50
〃	ニューヨーク	1 ポンド	セ　ン　ト	18.–	18.50	17.87
カカオ	ロ　ン　ド　ン	〃	シリング	40/6	54/2	45/–
砂　糖	ハンブルグ	50 キ ロ	〃	$12/1\frac{1}{2}$	$11/0\frac{3}{4}$	$11/4\frac{1}{2}$
〃	〃	〃	〃	23/–	22/3	22/[illegible]
〃	〃	〃	〃	24/–	$22/10\frac{1}{2}$	22/[illegible]
米	ロ　ン　ド　ン	〃	〃	—	14/3	14/–
〃	〃	〃	〃	15/9	14/0	$14/1\frac{1}{2}$
棉　花	リヴアプール	1 ポンド	〃	—	10.47	10.90
〃	ニューヨーク	〃	セ　ン　ト	—	20.25	20.75

農產物價格變動表（Magyar: Agrarkrise

次第に色を濃くしつゝある世界恐慌の××はかくて最近における急激な物價下落のテムポ、株式價格の急激な下落、資本發行の減退、植民地諸國における爲替相場の危機、破產數の增大、生產の減退・滅亡的な數に上る大衆的失業等々にあらはれて居る。小麥の價格は一九二九年に一〇四より一九三〇年の一ヶ月間に一二・六%下落した。棉花は一ヶ年間に一四・七%、一ヶ月間に六%、濠洲羊毛は昨年中に三九・五%、一九三〇年の一ヶ月間に二一・二%、黄麻は一ヶ年間に二〇%、一ヶ月間に四・五%、下落した。昨年に比して生革は一五%、鞣革は一〇%、ゴムは三〇%、錫は一九%、鋼は七%の價格下落である。フランスの外國貿易にあらはれた著しい暗影をば由々しき現象として三月六日のベルリーナー・ターゲブラットは報告して居る。シトロエンの生產制限、フィヤトの生產制限、ドイツ、日本の外國貿易の不振の兆、ボンベイ捺染綿布商組合の外國綿布不買決議、インド綿布關稅引き上げ、濠洲關稅引上げ、米國關稅引上げ。かくて第三期の矛盾は著しく高まつて來た。そして聞け！日本綿業者の飽くまで世界市場に闘はんとする悲壯なる決心を。

「インド議會はイギリス國綿布に前よりと與へない程度の中譯的修正を加へて遂に自主的關稅案を通過した。……日印通商條約の精神より見るも將又その正文に照すもまことに我國を無視した仕打ちで怪しからぬことと思ふ。我が外交當局は勿論このまゝに事態を看過せぬことと信ずるが、我々當業者とても今後あらゆる機會においてこれが是正に努力せねばならぬ。……思ふにこのたび突發したインドの差別的關稅の實施は我國當

事者を騙り生地綿布より晒しに、厚地綿布より細地綿布への道程に邁進せしめるであらう、そしてその結果は當然インド綿の本邦輸入を減じ遂次米綿をもつて之に代ることとなり、ひいては一般日印貿易にも波及するところが少くないと信ずる。元來我々は國際分業を希望するものであるがかゝる事態に陥れられては否でも應でもマンチエスターの製品と白兵戰を交へぬ譯にはゆかぬこととなつた。甚だ遺憾ではあるが我々當業者に恐らく深き決心と相當の準備があることと信ずる、見來ればこの頃世界到る所で關税戰が行はれ日を逐ふて辛辣味を加へ、インドにおける差別的綿布關税の設定及び本邦綿絲に對する期限附關税の延長の如きは卽ちその最も極端なるものであるが一方から見ればかゝる難境を突破してこそ始めて我國綿業の大をなす所以であると信ずるから我々は一層の勇氣をもつて猛進すべきである」(紡績聯合會聲明)

六。矛盾の止揚

世界經濟狀勢にあらはれた迫り來る危機の存在は第十回E・K・Iプレヌム以來××的醱酵をば旣に一定の段階まで高めた。何がこれを指示するか?

第一に八月一日のプロレタリアートの××反對鬪爭であつた。

第二に××的醱酵を×すものは嵐の如き激しさをもつて進出するストライキ運動の浪である。我々は資本主義諸國において第十回プレヌム以後益々增大しゆくストライキの浪を經驗して居る。かくて大ブリテンにおいては一九二八年に一二四〇〇〇人のストライキ參加人員と一三八八〇〇〇の喪失勞働日を算へたが、一九二九年には五三二〇〇〇のストライキ參加人員と八二三〇〇〇〇日の喪失勞働日とを算へた。フランスにおいてはストライキ參加人員一九二八年の二二二〇〇〇人に對して一九二九年は四三一〇〇〇に增大して居る。日本においては昭和三年のストライキ數七五二、參加人員八〇八六六に對して昭和四年はストライキ數一三〇六、參加人員一八九一〇五に激增した。(産業勞働時報による。) だがドイツ及びイタリアにおいては一九二九年にストライキ數は減少して居る。だがこれをもつて××的醱酵の××が漸減すると考へてはならぬ。我々がストライキを考察するに當つては只にその數のみに捉はれてはならぬ。そのストライキの持つ性質が極めて重要な役割りを演ずる。ドイツにおいては明かにストライキの大工場への推移が知られ、各ストライキ當りの參加人員の增大が見られる。(第十回K・P・D大會報告より)のみならず現在のストライキは只にその企業家と

その××とに對するに止らず、改良主義的組合官僚にも向けられる。現在のあらゆるストライキは勞働と資本との間の鬪爭たるに止まらず、階級鬪爭の焦點であり、プロレタリアートの英雄的決心を要求するものである。されば現在のストライキのプロレタリアートの××的修業所としての役割りは偉大である。

だがこのストライキも未だ大資本主義諸國においてはなほ經濟運動に止つて居ると云はねばならぬ。こゝではまだ政治鬪爭への成長を語ることは不可能である。こゝになほ×××の大きな努力の領域が存するのである。だが我々はすでにこれへの第一歩たる共同戰線××を所々に見る。一九二九年のストライキ中、フランスにおいてはその一六%がこれであつた。ドイツにおいてもこの運動の進行が××せられる。オーベルのストライキはこれであつた。

若し我々が第二位以下の資本主義國に目を轉ずるならばそこに我々は政治的領域にまで進出した多くの鬪爭の××のあるを見るであらう。ルーマニアにおいて、ギリシアにおいて。オーストラリアにおいて。インドにおいてはこの運動は國民××運動と結合し、遙かに急激に政治的色彩に發展して居る。そしてストライキの性質が次第に×××的××を帶びて來たことは一般に政治的鬪爭への不可避的な進路である。

××的醱酵を×す第三の現象は失業者運動である。今や一千七百萬のプロレタリアートが飢と悲慘に委ねられて居る。これらの人々は改良主義的組合より、勞働大臣より、社會民主黨より××られた人々である。ソチアル・ファシストはあらゆる手段を盡して彼等をば勞働者階級の運動より切り離すべく努力して居る。だが彼等こそはミユラーの正體を露き、マクドナルド、トマス××××、×××の政策の眞意を示して、全階級×××をする役割りを持つものである。この意味において三月六日の國際失業者××日は歷史的意味をもつ。

第四の××的醱酵の××を示すものは世界農業恐慌と共にあらはれたところの、資本主義國及び植民地における農民の××運動への吸引である。我々はこの現象をドイツにおいて、クレチ島において、ポーランドにおいて、南イタリアにおいて××において見て來た。インドに於けるシクス運動、ハイチ、ドニカラグア、等々の土民の××。そして支那の南京、山西の鬪爭の開始は新しい××的情勢を作り出すものである。(F・K・K・I・プレジデイウム報告)

幾多のチグザクな路を經つゝも、遂には××すべき世界恐慌の波、第三期の諸矛盾はかくしてその極に××するであらう。

(一九三〇・四・六)

學生製造企業會社論

青野季吉

1.

大學――各種の專門學校もふくめて――は、今日、立派に一つの企業と化してゐる。他の種々の營利企業と公論形態は異つてゐるが、企業化してゐることには變りはない。當の大學經營者が、最早や何等か勸學的な、理想的な精神によつてでなく、純然たる企業家的精神によつて大學を經營してゐるのは勿論、そこに『青年の夢を追つて』蝟集する學生達も、その大多數、即ち大衆的に言つて見れば、投資的な精神によつて、その『登龍門』に導かれ、吸ひ寄せられてゐるのである。

大學經營者は、尤も、意識的にそれの露出を避けてゐる。そして飽くまでも大學經營の精神を、何等か勸學的な、理想的なもので粉飾しやうとしてゐる。それでなければ、大學の學問的、社會的意義の手前、自己の存在權が消滅するからである。學生はまた學生で、半ば意識的乃至無意識的に、その投資的精神を自己の眼から覆ひ隱して、專ら『修學的要求』をもつて、自らを虛飾しやうとしてゐる。だが、これらの凡ては、一片の僞瞞であり、自慰である。大學經營者の粉飾は大學經營者の利益のために『學問の自由の獨立』が犧牲にされる度びに――その事の何んと常習的であることか――無殘に剝落し、その意識的僞瞞が暴露される。學生達の虛飾は、常に彼等が卒業後の就職難にあらかじめおびえて「潑溂たる元氣と素直に美しい所謂青年氣分に乏しく』（本誌前號『滿鐵』―鈴木氏の言葉）なつてゐる事實によつて、見事に裏切られ、その半意識的乃至無意識的の自慰が暴露される。

だが、大學は言ふまでもなく最初からかゝる企業家的精神に

よつて經營・指導された譯ではない。か丶る企業化は、その學的施設の依つて立つ資本主義經濟が根强くなり、廣汎になり、支配的となるにつれ、漸次に起つたその學的施設の内部變化の結果に外ならないのである。

たとへば帝國大學が明治の初年に開設された時には、それは決して企業家的精神によつて導かれたものではなかつた。一般的には新らしく生れた統一國家の官僚群を養成するため、實質的には初期明治政府の實權を握つてゐる薩・長閥が、自己の政治的・行政的後繼者を養成するために――從つてその指導精神によつて導かれたものであつた。これを言ひ換へると、當時國家主義と結びついてゐた藩閥自己擴大の精神が、その經營精神だつたのである。而して、政治的にそれに對立して創立されたのが早稻田大學であり、實業的にそれに對立して發展せしめられたのが慶應義塾である。從つて早稻田大學は、帝國大學の官吏養成主義に對して「學問の獨立・獨立の精神なる標語を掲げ、その國家主義＝藩閥精神に對して、イギリス流の自由主義を指導精神とした。一方、慶應義塾は、飽まで實業主義に立ち、自由競爭の資本主義的發展の擔ひ手としての自覺が、その指導精神だつたのである。

かく官立と私立との相違こそあれ。帝國大學にしても、早稻田、慶應にしても、當時は明らかに何等か理想的な、勸學的な精神によつて經營されて居たのであり、その規模も亦極めて小さなもので、言はゞ私塾の若干擴大されたものに過ぎなかつたのである。それが一個の企業の如きものとして、經營者によつても、またそこにつどふ學生によつても認識されず、企業家的精神などの浸入する餘地の無かつたことは言ふまでもない。

だが、それは初期の段階だけのことである。日本の資本主義の發達、その國家的の發展は一方にか丶る封鎖的な學的施設の指導精神の對立を許さなくなり、他方に、それぞれの學的施設の自己發展が、か丶る封鎖的な指導精神の框内に自己を閉ぢ籠めておくことを許さなくなつた。そこで大學の指導經營の精神の關する限りにおいては次第に諸大學を相互に區別する境界が撤去されて來たのである。

今日、諸大學には官立と私立との區別があり、その謂ゆる「學風」において、多かれ尠かれ傳統的な色彩の保存されてゐることは事實である。が、それは言はば大學のおごそかな建物がポプラの並樹で圍まれてゐるか、それとも常盤樹の並樹で飾られてゐるかの差異と同樣である。諸大學が一樣に、研究の自由とか或は他の何等かの理想によつて、指導經營されず、自己目的的な企業家的精神によつて指導經營されてゐることには少しの變

りも無いのである。

今日、大學は一個の企業會社である!!

2.

大學企業化の最も顯著なのは、言ふまでもなく、官立の綜合單科の諸大學よりも、例へば早稻田、慶應、明治等のやうな綜合的な私立大學である。それと言ふのは、官立の諸大學が政府の特別會計によつて立つてゐて、それ自身の獨立的經營によつて立つて居らないのに反して、私立の大學は飽まで自己の計算によつて立つてゐるからである。だが、それだからと言つて、官立の諸大學の企業化を見失つてはならない。

官立の諸大學はなる程政府の特別會計によつて立つてゐる。その限りでは、大學の當事者には、何等企業家的の精神の潛入を必要としないかに見える。だが、それは皮相な觀察である。私立の諸大學の場合と比べて、その度合こそ多少異つてゐるが、今日の官立の諸大學が、企業家的精神による以外、指導、經營されないことは、少し事態を無慈悲に觀察すれば、直ちに明らかである。

今日の官立の諸大學乃至直轄學校は、若干のものを除いてはその創立、昇格、維持において、徹頭徹尾、政黨的利益によつたものであることは、何人もこれを拒まないであらう。若し純文化的立場からするならば、社會教育及び私學の發達の今日の段階において、政府が特別會計を設けて、それらの施設を維持する必要はないのである。この一事をもつても、凡てが明らかである。既にその創立、昇格、維持の關係がそうである限り、それらの大學の主宰者たる政府及び直接の責任者たる大學當局にとつては、その施設を——即ちその設備と、その教職員と、及び常に一定數の學生とを、いかにして維持するかが最大の關心事でなければならぬ。こゝに既に企業家的精神の必要の端緒がある。文化的には不必要であるが、營利的には維持を強いられてゐる學的施設にたいする政府の經營精神がこれ以外にあることは不可能であり、その施設によつて賄はれてゐる教職員の指導精神も亦、當然それ以外であることは出來ない。且つ現在、官立の諸大學に蝟集する學生の心理について見ても、私立の諸大學への場合と實質的に何等變りのないのは、明らかである。否、そこに多少とも相違があるとすれば、學資の形をもつて投資する上に、官立の場合の方がより有利だと言ふ、投資的見透しの上の相違位のものである。

少し脇道になるが、一方では官立諸大學の企業的經營の困難から他方ではそれらの文化的無意味から、その全廢を說く自由

主義的識者が相當に多い。が、それは今日の地盤本位の營利的政治の下では、出來ない相談であり、且つ帝國主義の今日の政治的段階から、更に別個の理由で、出來ない相談である。と言ふのは、官立の諸大學は、今や、反動的思想の思想工場、反動的青年の知識工場たる新らしい意義において、その新らたな價値が發見されてゐるからである。

それはそれとして、數字の示すところによると、現在日本の高等教育施設のうち、單に大學だけで見ても、校數三四、教職員數四、二一九、學生數四六、七〇〇（大正一四年度。帝國統計年鑑。）に達してゐる。これを明治三五年に比べると、學生數において約十倍の增加であり、大正元年に比べると、約六倍の激增である。かゝる激增は、言ふまでもなく、一方に日本の文化的發達を物語るものに相違ないが、他方に、大學施設それ自身については、それが愈々益々企業化したことを有力に物語つてゐる。と言ふのは、例へばこの期間中にはかの躍氣的な昇格運動などがあつて、新らたな大學が、その名目によつて學生を誘引するといふ目的を除いては、他のいかなる目的にもよらず盛んに製造された一事をもつても明らかである。

特に文化的には既に不要になつた直轄學校が、名目上の大學への昇格によつて、その生存の維持を全ふしてゐる例は注意に値する。彼はかくすることによつてのみ、その教職員と、及び常に一定數の學生と、最後にその背後の校友的勢力とを辛うじて維持することが出來たのである。この場合、學校當局者とその背景の校友大衆との努力は、怪しげな增資によつて、崩壞に瀕した自己の企業を辛ふじて『救ひ』得た世間の企業家の努力と、微塵も變るところは無い。

大學の企業化は、あらゆる契機に、あらゆる過程と形態とをとつて發展するが、それがいかなる過程と形態とをもつて發展しやうとも、常にそれに固有する學問的、社會的機能が、大學の外形的、經濟的の維持・發展のために犧牲にされ、後者が大學の自己目的と成ると言ふ方向をとつて發展する。實に、現存する諸大學において、この傾向の例外たり得るものは、殆んど絕無と言つてよいのである。

3.

特に早稻田大學とか、慶應義塾とか言つた綜合的の私立大學は、純然たる學術企業であり、露骨に言へば商品「知識」の製造株式會社である。それは大學的施設のうちに諸種の學部を抱擁するばかりでなく、中學、實業學校、工手學校等の諸種の「子學校」をその下に隨へた一つの尨大な「學校トラスト」である。

かゝる厖大な學校組織が、そもく、資本主義的企業精神と企業方法以外の、何等か勸學的な、理想的な精神によつて指導、經營されると考へるのは、迂愚の沙汰である。若しさういふ古代羅馬の學園のやうな精神で導かれたならば、一日もその物質的經濟的存在を保ち得ないであらう。

だが、更に重要なことは、この厖大な大學自治組織は、今日眞に『自治的』であり得ないと言ふ一事である。もしそれが眞に自治的であり得たならば、企業的方法によつて經營される結果として生ずる學問的損失も、甚だ大ではあり得ないであらう。――これらの厖大な大學組織の背景には當然に、それの經濟的從つて學問的生命を左右し得る金權的存在が厳として据えてゐる。一切の資本家的企業の背後に手足を張つてゐる『黃金の蜘蛛』が、こゝにもその怪奇な姿を隱見させてゐるのである。その蜘蛛が一疋の巨大な蜘蛛であつても、或は若干の小集團的存在であつても、それによつて事態は一向變化しない。

帝國大學は官立の大學組織であるから、その背後に在るものが國家資本であることは、說明するまでもない。從つて、自然科學的方面は別として、社會科學的方面（極めて廣い意味で）での學的行動は、多くの場合には間接的に、或る場合には極く直接的に、その背後の支配的な物理力によつて强制される。早稻田や慶應の場合は、一般には全くその力が不明であり、大學經營者によつて周到に隱蔽されてはゐるが、何等かクリチカルな場合には、その背後の力が、定つて影繪のやうに浮び出て來る。そして早稻田の背後の金權的勢力が三菱や古河であり、慶應のそれが三井や久原であることは、今日では大して『祕密』でもなく成つてゐるのである。これらの金權のそれぐの大學にたいする支配的關係は、アメリカの金權が配下の大學にたいして有つ支配關係ほど、直接、强力ではないが、しかし人々の想像よりはずつと强いと考へてよい理由がある。例へば往年、早稻田の軍事敎育騷擾の時、大學當局の執つた行動は直接に古河勢力によつて口授されたと言はれてゐるが、それによつて一般がほゞ窺はれるであらう。

大學企業の背後の力はそこに在り、從つて全資本主義的金融勢力中の地位は、それで決定されるが、それは謂はゞ大學企業の外部のことである。翻つてその內部を見ることにしやう。

大學企業の依つて立つ基礎は、何と言つても學生と、その投ずる學資である。一定數の學生が收容され、それが學資を投じて來なければ、大學企業そのものが土臺成立しないし、學校街の繁榮によつて、直接に大學又は間接に大學關係者が、土地投機その他の手段によつて餘剩利益を占めることも出來ない。大學

の提供する商品『知識』と交換に學生の提供する學費は、大學企業にとつては、その商品の生産費と利潤のふくまれた價格なのである。大學企業はこれを受取つて、まづその商品『知識』の生産費を支拂ひ、次いでその利潤を收めるのである。

而し學生はこの企業にとつて重要であるから、大學企業家はあらゆる、手段を講じて、これが吸收につとめる。大學の形式的の完備は、大學企業家の最も腐心するところだが、それは一にかつて學生吸收のためである、かの野球その他のスポーツに於ける優位は、選手から見れば運動的慾望の滿足、母校の名譽の發揚のためであらうが、大學企業家から見ればそれによつて學生を吸收する手段として役立つが故にのみ、尊いのである。從つて學生全體の體力のためにスポーツの普及をはかるよりも少數選手の拔群的技倆こそ、大學企業家の望むところである。

大學企業にとつて更に他の財源がある。それは卒業生に對する一種の課税である。諸大學が、校友會維持のため以外に、新設備とか、年功教職員の表彰・慰勞とか、その他のあらゆる名目をもつて卒業生に求める物質的寄與がそれである。これらの事柄は、卒業生の寄與を俟たないで、當然に大學企業家の負擔たるべきものであるが、母校と卒業生『恩師と子弟』といふ封建的の關係を、資本主義的企業家たる大學經營者が巧みに利用して、その負擔の一部を卒業生大衆に轉嫁するのである。

大學經營の企業的現實は、斯くの如きものであり、學生に學費を支拂つて、商品『知識』を受取ると共に、學生自身がまた一個の商品として、自己を市場に投出すのである。この際商品『卒業生』の賣手は、言ふまでもなく卒業生自身であり、大學企業家の企業の全課程は學費と交換に商品『知識』を賣り付けた時に、完全に終結してゐるのである。何と『美はしい』母校と卒業生、恩師と子弟の關係であらう。

4.

大學の『開放された』門に向つてかよふ學生自身も亦、投資的精神によつて導かれてゐる――かう私は簡に斷じた。眞摯な學生は、だが、この暴露に向つて心から抗議するでもあらう。

ところで極く現實的に、散文的に見て、誰よりも先づ問題の學資の實際の支出者たる父・兄・保護者にあつて、これ以外の如何なる精神によつて導かれ得るであらうか？ 自己の計算において投ずる學資は、子弟の修學を通じて、日本の總文化に寄與せんがためにあると考へるやうな父・兄・保護者があつたなら、それは時代錯誤の代物か、乃至は子弟のために投ずる學資に、

尤らしい名目を附する大ブルジョア父兄に過ぎないであらう。

今日、大學、專門學校にその子弟を送つてゐる父・兄・保護者の階級相を見ると、その最大部分は、中・小の農・商業家、官・公吏、會社員と言つた有樣である。しかもこの中の大部分が、學資の全額又は一部の『支辨不可能者』なのである。この階級者にとつて、學資の支出は、眞に血を絞る如きものである。子弟の修學の完成日が、卽ち正に、家產の潰滅の日たる事實を身邊に眺めない者は無いであらう。斯く學資支出は父・兄・保護者にとつて、經濟的に生死的な事實なのである。この場合、學資支出が投資的に考へられ、認識される以外、他の何であり得るであらうか。そこで父・兄・保護者のこの投資的精神は當然、子弟の意識や心理に反映せざるを得ない。

この結果、學生大衆のうちに自ら二つの群の生ずることは、何人にも容易に推想されるであらう。その一つは、言ふまでもなく、父・兄等のその精神を強く、そのまゝに反映し、それに少しも反撥することなく、彼自身また投資的精神によつて完全に導かれる學生群である。他の一つは、知識的向上の人間的要求――この要求の生ずるにも社會的原因はあるが――によつて、無慈悲に、父・兄等のその精神に反撥し、或る場合には、それに反抗して、知識と學問とを護る學生群である。而して前者の學生群が、後者のそれに比して、比較にならぬほど多數であることは、說明するまでもないであらう。大學生活中に社會科學の研究に身を入れる學生は、眞摯な、頭腦の優れた學生の中に多いとは、諸大學の當事者が認めるところであり、この部分は必然に少數であるが、これが後者の群の大部分を形成してゐるのである。

それはそれとして、こゝに重大なのは、父・兄・保護者の投資的精神、その反映としての學生の投資的修學は、結局において都會に依る農村の搾取の一方面だといふこと、是である。諸種の資本家企業は、いづれも都會に依る農村の搾取だと言つてよいが、資本家經濟におけるこの一般的法則に、大學企業の場合にも、完全に當てはまるのである。學資として投ぜられる巨額の投資は、都會に所在する大學、專門學校の設備を維持し、教職員、關係者を賄ひ、學校街の種々の都會的職業的の繁榮に資し、且つ大學企業家の『利潤』と成つて、消散してしまふ。しかし若し、學生が卒業後に收入の形において、還に在學中學校に投資したものに利潤を副えて取戻し得るならば、それは必らずしも都會に依る農村の搾取としては現はれないが、事實は而し圓滑に行かないのである。前節に關說した學生大衆の最大部分にしてからが、明らかに修學を投資として考へ、修學後の商

品としての自己の販路に腐心しながら、この商品（卒業生）が、市場で利潤を副へて捌かれること、否、そもく\それの買手があることが、今日では寧ろ例外的なのである。大學の門を出ることが、就職、榮達への發足であつたのは昔の夢であつて、今日では、それは永久的失業への發足なのである。これを言ひ換へると、學資として農村・地方から都會に投資された額の最大部分は、斯て完全に都會の懐の中で消えて了ふのである。曩に闡說した學生の第二の群に就ては、說明するだけ無駄であらう。

諸大學が一個の企業と化し、企業的法則に依つて經營される結果、大學企業家とその從屬者とは、かくて意識的無意識的に二重の『罪惡』を犯すこととなる。すなはちそれは學生に關しては無計畫的な過剰生產を敢として、その大群を年々永久失業の運命へと驅り立て、父兄に關しては、その窮乏化に更に油を注ぎかけるのである。

5.

諸大學や專門學校は、たしかに、或る段階には、文化の發展に貢献した。これは爭ふ可からざる嚴たる事實である。だが、それは今日、最早文化發展の推車でなく、反對に、文化發展の拘束體となつてゐる。自然科學的文化に關してはともかくとして、尠くとも社會科學的（極めて廣い意味の）文化に關しては、そう斷定して差支へないのである。

大學の持つ文化的作用のこの質的轉化は、正に、大學施設の企業化と時を同ふしてゐる。大學が文化的に進歩的な役割を演じてゐた時期は、大學がまだ企業家的精神と方法とによつて經營されない時期であつた。が、大學が一度び企業化すると、それは單にそのことからしても、最早や文化的に進歩的な役割を演じ得なくなるのであり、また事實、そうなつてゐるのである。

近來人々によつて力強く指摘されてゐる『大學の顛落』は、實に、これを契機として開始されたのである。

大學の持つてゐる文化的、社會的意義は、言ふまでもなく、學問の獨立、學問の自由研究、のうちにおいてのみ發揮される。若し學問が何等かの意味で獨立性を失ひ、その攻究の自由が何等かの外側力のために拘束されたならば、その文化的・社會的意義は、忽ちにして消滅し、大學施設そのものは、その存在それ自身によつて、反文化（發展）的なものとなり、反社會（進歩）的なものとなる。ところで大學の企業化の結果はどうであらうか？　既にその指導、經營の精神・方法が企業家的である。大學の持つ文化的・社會的意義の發揮が、多かれ尠かれ尊重されるのは、それが大學企業の經營と矛盾しないか、乃至は大して摩擦を起さない間だけのことである。ひとたびそこに矛盾乃至摩擦が起つて來ると、犧牲にされるものは當然その（唯一の意

義」の方面である。

謂ゆる「赤化教授の問題」「社會科學學生の問題」を始め、近年大學・專門學校の内部に發現するさまぐの「忌むべき現象」は、大學の持つ文化的・社會的意義が、或は急激に、或は徐々に大學の企業化によつて犧牲にされて行く過程の現れに外ならないのである。前者の擁護者としては、直接には少數の眞摯な學生層と、極く少數の教授しか存しないのであるが、後者の支持者としては直接に、壓倒的な多數の學生層と、やはり壓倒的に多數の教職員と、全部の大學當局と、更に背後の國家的（私立の場合には更に資本閥的）權力とが存するのである。大學の文化的、社會的意義が、今日見るやうに、完全に締め出しを喰ふのは、またこの限りで自然と言つてよい。それは、形態と行き方とこそ異なれ、産業企業家が自己の企業的利潤のために、産業のもつ人類の厚生・福祉的意義をその工場の門から締め出しを喰はすのと、本質的に何等相違はないのである。

大學のこの矛盾は、だが、大學だけの矛盾ではもとより無い。それは言ふまでもなく、資本家社會の矛盾の一つでしかないのである。資本家社會は、その一切の施設と運動において、運命的（神秘的な意味でなく）に矛盾を包藏してゐるが、國家の「最高學府」たる大學も、絶對にその例に洩れるを得ないのである。大學の當事者に、たとへ勸學的、理想的の精神が殘つてゐやうとも、それはこの場合、何等の決定的な力も持ち得ないのである。

大學がかく企業化し、文化的、社會的の進歩の擔ひ手から、それが拘束の機關にまで頽落したとすれば、それならば、大學に代つてそれが擔ひ手として現はれるものは何であらうか？これが當然に次に來る疑問である。この疑問に答へることは、この小考の範圍に來るものではないが、それが必然に、資本家的に企業化されない、また企業化され得ない、反ブルジョア的な、反××的な、諸種の學的施設であることは、何人もほゞ察知し得るであらう。この種の學的施設は、今日まだ、顯著な發達をとげてゐない。が、その萌芽は既に儼として存してゐる。廣汎な意味におけるプロレタリヤ文化の發達のための機關、運動、努力が、實にそれである。政治的、經濟的の進歩の擔ひ手が、ブルジョアジーからプロレタリアートに移ると同時に、大學の文化的、社會的意義は、完全に大學の校門を去つて、プロレタリアートの文化運動の手に移つたのである。

企業化された大學は、學費と交換に商品「知識」をその需要者たる學生大衆に賣付け、學生大衆はまたその購入の過程において、徐々に己を商品化し、かくて一定年限の後、市場に投出される。が、市場は既に滯貨に苦しんでゐる。――この極めて機械的な無慈悲な現實を直視すること、それが「知識階級の失業」を取扱ふ唯一の鑰である（三〇・四・三）

第二の金融大動亂？

高橋龜吉

一 最近の財界惡化の由來

最近に於ける財界惡化の有樣は言語に絶する。しかも、實業界の内情に通曉してゐる者ほど、その悲觀の仕方が強烈の傾向がある。そこで、拔け目のない中央公論の編輯部諸君は、早速「第二の金融動亂？」と云ふ課題を選んで之を筆者に書けと云はれる。

今度の財界惡化は、果して、第二の金融動亂にまで爆發するであらうか？　この問題は、いま、玄人の間にも盛んに論議研究されてゐると共に、素人の間にも至大の興味を惹いてゐる。しかし、之を正解するためには、一應、最近に於ける財界惡化の由來及び性質を調べておかねばならぬ。

云ふ迄もなく、最近に於ける財界惡化の主因は内外兩方面から來てゐる。しかし、實際家の多くが、最近の形勢に少なからず周章狼狽の氣味あるわけは、それが、彼等の豫期した以上に甚しいからである。然り、現内閣や資本家連の財界不況に對する豫期は二重に狂つてゐる。第一は舊平價解禁及び彼等の所謂「緊縮政策」――事業の中止乃至繰延に由る經費減縮――の打撃に對する誤診であり、第二は昨年秋以來の米國財界反動の影響に關する見當違ひである。先づ、第一に、舊平價解禁と「緊縮政策」の結果が、如何に廣汎に、如何に深刻なる打撃を、我が財界に及ぼすものなるかにつき、現内閣及資本家の多くは、殆んど無智に等しい迄に之を輕微に見てをつた。例へば、現内閣の金解禁對策が、我が財界に及ぼす打撃は左の如き廣範圍と、深度とに達するのであるが、うち、現内閣及び多くの資本家連の豫期したことは、僅かに、(1)の(ハ)の中の手持商品の

下落損と、(2)の(C)の(ロ)及(ハ)と、(4)の點だけであつた。

舊平價解禁及緊縮政策の打撃範圍

(1) 物價下落
- a 手持商品、並に固定資産等の値下り損
- b 今後の製品市價下落損
- c 右に對應する生産費低下の困難

(2) 賣行減少
- a 物價先安懸念に基く買控に基くもの
- b 企業不振に基くもの
  - (イ)民間企業不振 (ロ)財政政策に基くもの
- c 内地購買力減退に基くもの
  - (イ)現實購買力の減少に基くもの
  - (ロ)財政政策に基くもの
  - (ハ)消費節約運動に基くもの
- d 輸出不振、輸入壓迫に基く消費節約

(3) 産業の金融資本的負擔の増大
- a 産業の借入金元利支拂壓迫の重化
- b 産業の株主配當負擔の重化

(4) 金融的壓迫
- a 金融の緊縮
- b 金利の騰貴

(5) 掛賣回收困難

(6) 彌縫政策の破綻

従つて、例へば物價下落の程度と云ふ一點に關する豫測だけについても、現内閣及資本家連の多くは、舊平價解禁の結果、爲替相場が一割三分騰貴しても、其の一部分は外國で負擔して、内地の物價下落は例へば一割で濟む、と斯樣に考へて之を公言して居つたのである。然るに、實際に於ては、物價下落は、その外、前掲(2)の賣行減少(4)の金融的壓迫(6)の彌縫政策の破綻等種々の方面から壓迫せられて、假りに外國市場の物價暴落なしとしても、爲替下落が一割三分の際には、二割内外からの物價下落を齎らすことになるのであつた。のみならず、物價下落の打撃の及ぶ範圍についても、深度についても現内閣及資本家の多くは、已述の如く、非常な計算違ひをしてをつた。されば、金解禁斷行後、いよ〳〵具體的に其の打撃が財界を壓迫し始めるや、財界の多數が俄かに周章狼狽してその苦痛に悲鳴を擧げて騷ぎ出したのである。

加ふるに、この秋に於て、世界の財界は一大不況期に轉入した。健康體の時ならば容易に對抗し得る打撃でも、衰弱し切つてゐるときにやられては一命に關することもある。然るに、い

ふ、我が財界は稀平價金解禁で、前述の如く、豫期以上に極度に打ちのめされ、衰弱し切つてゐるところに、世界的大不況の痛手を蒙つたのだ。健康體の時に比し、その打撃の苦痛が幾倍甚しいかは誰にも分る。

顧るに、この世界大不景氣來の暴風あることは、昨年十一月井上藏相が金解禁を斷行する當時、已に分つてゐたことだ。即ち、米國財界の大反動來がそれだ。一體ならば、斯くの如き暴風期に、金解禁など決してやるべき筈のものではないのである。ところが、藏相は、第一に稀平價金解禁の打撃を過少評價したが故に、且つ、米國財界の反動來に接するや、それに伴ふ金利安と云ふ反面のみを見て有頂天になり、物價暴落、賣行不振と云ふ肝腎の財界反動の本體を看逃すと云ふ間拔け方をやつたが故に、こゝに無謀にも、颱風中心地に向けて、金解禁と云ふ大修繕のために、ボルトの過半を緩めたボロ船を出帆せしめたのである。

今日、我が財界の惡化に直面して、朝野の「御歷々」や資本家連の多くが、周章狼狽して、著しく神經過敏に、財界の前途を不安視する所以は、以上の如く、豫期すべきものを豫期し得ずして、無知的樂觀に苟安してをつた所が、寢耳に水の如く、いよ／＼、具體的に財界が惡化し來つたからである。このことは、以上に由つて讀者の大略看取し得られたことゝ思ふ。

二　今次の財界惡化の性質

しかし、「第二の金融動亂？」と云ふことを問題にする此際、特に注意せねばならぬことは、今次の財界惡化は、昭和二年春のそれとは、丸で事情が違つてゐると云ふことである。即ち、昭和二年春「金融動亂」が襲つた當時の日本財界には、物價暴落と云ふ現象は殆んどなく、專ら、銀行それ自身に對する信用の動搖と云ふことが、その震源であつた。

然るに、今度の財界惡化の震源は、物價暴落、賣行激減と云ふことを震源とするもので、銀行それ自身に對する信用の動搖と云ふことは、間接的には兎に角、直接的には殆んど問題になつてゐない。

加ふるに、井上藏相の金解禁善後對策なるものが、文字通り金融本位の政策であつて、金解禁後の財界に、金融的恐慌を起させないと云ふことに全力を舉げ、この目的達成のためには、他のあらゆる産業的犧牲や失業的下積を、勇敢にやつてのけると云ふ性質の政策であつた。例へば、銀行取付の懸念を防止するためには、産業の一大不振、失業の續出を賭して、公債支辨事業を中止し、且つ減債を斷行し、以て、公

債市價の維持に全力を擧げてゐる。蓋し、公債市場の崩落は、それを巨額に所有してゐる銀行の一大損失であり、銀行の一大損失は、銀行取付を誘發する惧が多大であるからだ。

しかし乍ら、右の如き、金融本位の金解禁對策を效果的に敢行するためには、それだけ、多大の打撃を産業界、勞働界（失業）に偏負せしめねばならぬ。かくて、産業界の打撃は、いよ〳〵、深刻化する。その上に、世界大不況に基く壓迫が加つて來るのだ。産業界の痛手は愈々激烈となる譯だ。試に、いま、之を先づ重要商品相場崩落の跡に由つて窺ふに別掲第一表の如くである。

（一）重要商品相場暴落一覽

先物	昭和四年二月 最高	昭和四年二月 最低	昭和五年二月 最高	昭和五年二月 最低	同七三月十五日
東京期米	二九圓七七	二九・二〇	二八・七四	二六・〇〇	二七・八〇
横濱生絲	一三八圓〇〇	一三六・〇〇	一三五・〇〇	一〇八・八〇	一一八・〇〇
大阪綿絲	二三七圓八〇	二二八・九〇	一八五・八〇	一七七・四〇	一六五・九〇
大阪棉花	六六圓二五	六四・四〇	五三・五五	四九・一五	四八・〇〇
瓜哇糖	一四圓二五	一三・七九	一一・五〇	一〇・五〇	一〇・五〇
倫敦錫	二三九磅七五	二二一・四四	一七九・九四	一七〇・五六	一六三・五六
紐育護謨ゴム	四四仙二六	三六・〇〇	二六・〇〇	二四・五〇	二四・五〇
濠洲羊毛	四〇片	四〇	一八	二八	一八
米棉	二〇仙〇〇	一九・〇八	一五・一一	一五・八〇	一四・六八

例へば、昨年の最高百三十八圓だつた生絲は、最近、一時百八圓八十錢迄暴落し、遂に絲價補償法の發動で漸く百十八圓を維持してゐる。同期間に綿絲は二百三十七圓八十錢から百六十五圓九十錢に、棉花は六十六圓二十五錢から四十八圓に崩落してゐる。之れは又、世界市場共通で、瓜哇糖、濠洲羊毛、ゴム、錫等何れも多大の慘落を示してゐる。

更に、之を主なる産業會社の株價について指標的に見るに、別掲第二表の如く、多少内容に問題ある會社の株價の下落は殊に著しく、昨年の最高に比し最近のそれは半値以下に暴落せるものはザラにて、市場の第一流株たる鐘淵紡績株の如きものすら、二百七十七圓四十錢から百九十四圓十錢へと、實に八十圓近くを暴落してゐる始末だ。而して、之を東京取引所に上場せられたる株價全體について見ると、最近三月の株價は、昭和三年七月に比し約六十二億圓の暴落、昭和四年七月に比するも尚約十四億圓の下落である。

(二)産業會社株價慘落一覽

	昭和四年 最高	昭和四年 最低	昭和五年一月 最高	昭和五年一月 最低	昭和五年三月一日	同年三月十七日
鐘淵紡績	円 一七七・四	円 一三六・二	円 一二四・三	円 一二〇・一	円 一二五・〇	円 一九四・二
富士紡績	六九・二	五一・七	五四・二	五〇・二	四五・二	三九・三
淺野セメント	八二・五	四九・九	五三・二	四七・八	四〇・〇	三九・九
日本石油	六六・八	三九・九	四二・一	三八・二	三八・〇	三七・一
日本産業	六三・五	二八・五	二七・六	二七・三	二九・一	二九・四
大日本人肥	五三・二	三三・五	三八・二	三四・〇	三四・九	三三・九
富士製紙	八四・六	六六・二	五九・九	五五・五	五三・三	四九・〇
樺太工業	六八・九	三二・二	三六・三	三一・五	二九・七	二五・四
東京電燈	五四・六	三八・七	四一・九	三九・七	三六・八	三六・一

轉じて、何故に、問題會社の株價は、斯く慘落するかと云ふに、從來これ等の會社は、内容を糊塗して、借金で彌縫政策を續けて來たもので、(しかもそうした彌縫會社が日本には殊に多いのである!!)それでも、財界平穩の際には、何とかやりくりが出來てゐたのである。しかし、身體の無理にも限度があつて、或る一點を越すと病氣になり、斃れるに至るが如く、會社の無理にも限度がある。或る一點を越すと、破綻曝露の危險が甚大となつて、銀行其他何れもが之に警戒し出すこととなり、ここに破綻を曝露するに至るものだ。今度の財界惡化は、その深刻なる打擊に由つて、多くの問題會社に、この彌縫の限度を突破せしめたのだ。

かうなると、打擊は加速度的に激烈になる。例へば、資本金五千萬圓の所へ、今度の財界惡化で精算すれば二千萬圓の損失を蒙つたことになつたとする。若しその會社の基礎が十分ならば、此の損失はいま一時に之を償却しなくとも、或は之を十ケ年に分割し、或は之を景氣回復時迄に引延ばして、之を償却すると云ふことが出來る。從つて又、それが、株價の下落となつて現はれるのは、その打擊の一部分に過ぎないのである。現に、今日、優良會社の株價が、會社の蒙つた打擊の割合に、餘り下落しない原因は之れだ。

然るに、從來、彌縫し來れる問題の會社はさうは行かぬ。今度の財界惡化の打擊で、一度び彌縫の限度が破れたとなると、從來隱して來た古疵が一時に現はれる上に、今度の財界惡化の打擊も、一時に精算して了はねばならなくなる。さうしなければ、危險がつて、誰も、融通もしなければ、株も買はなくなるからだ。即ち、赤裸になつて、洗ひざらひにした現在の眞價を示さなくては、最早、誰も相手にしなくなるのだ。之れ、所謂

問題會社の株價が、こゝになつて、財界惡化の程度以上に急に慘落し始めた理由である。而して厄介なことには、斯樣な問題會社が、日本には多いのである。」

三　事業界の惡化——金融動亂？

問題は、斯樣な問題會社の破綻が、引いて、金融動亂にまで爆發するやうなことは決してないだらうかどうかだ。いま、財界に於て一番惧れられてゐる點は之れだ。

例へば、東京電燈株について見よう。昨年の最高五十四圓六十錢を最近の三十六圓十錢に比較すると十八圓五十錢の暴落だ。ところで、多くの事業家は、所有株を擔保にしては銀行から借金して、他の株を所有し、斯樣にして之を繰返して多數の會社に關係してゐるのである。殊に、問題會社の大株主とか重役には此種の者が多い。いま假りに、昨年の最高時、東電株を擔保に時價八掛で銀行が貸したとせば四十三圓七十錢、それの十萬株は四百三十七萬圓だ。ところが、現在の株價は三百六十一萬圓にしか賣れないから、差引七十六萬圓を不足する。借手は、しかし、そんな金を返す餘裕など無き者が多いので、こゝに、それだけ銀行の損失となる。

產業會社の彌縫が破綻して、株價が暴落したとなると、斯樣な損失が、諸々方々に續出する。しかも、甚しいのになると、淺野セメントや樺太工業の如く、株價は一株で三十五圓も四十圓も暴落してゐる上に、擔保株數も何十萬株に上る。加ふるに問題の會社に關係してゐるのが一つや二つではなくて、幾つかに關與してゐるものがある。斯樣にして、問題の產業會社に於ける彌縫の破綻が、それと密接の關係にある銀行に影響するところは甚大だ。況んや、優良株それ自身の株價の暴落も鮮少でなく、且つ、今後、不景氣は益々深刻化してこの種の壓迫は更に加重する事情に在る。

こゝに於て、財界の最も惧れるところは、產業會社の彌縫の破綻が、銀行動亂に飛火する憂は果してないであらうか、どうかの問題だ。就中、問題の〇〇と××銀行との關係、△△と◇◇銀行との關係に鑑み、〇〇や△△の關係事業の惡化（株價に現れた）が、××銀行や◇◇銀行に對する×××となつて、金融界に破綻を起すやうなことはないであらうか、と云ふことが、消息通間の問題になるのである。

しかし、この點に關する悲觀派の見解を此處に赤裸々に述べる自由は、いまの日本には全く無い。「財界攪亂罪」と云ふ猿轡を嵌められてゐるからだ。若し、筆者が、この悲觀派と所見を一つにするものならば、これから先きの文章は×××で埋めねば

ならぬ。ところで筆者は、財界前途の不景氣は更に／＼深刻化するものと信じる點に於ては、依然、悲觀的立場に立つが、しかし、その極、第二の金融動亂が果して勃發するかどうか？に對しては、いまの處、否定的見解を持つてゐる。今後尙ほ財界は惡化する、不景氣は深刻化すると信じながら、それが金融動亂にまで爆發する憂はないと何故に、考へるか。筆者は、その理由を次の諸點に見出すのである。

(1) 如何に産業的打擊が甚大であつても、それがヂリ／＼に來たのでは、メッタに金融的破綻にはならぬ。何となれば、政府及び財界はその脅かされてゐる金融破綻を消し止むべく、各種の消防的努力を豫め累積し來るからだ。然るに、今次の財界惡化は、漫性病的であつて、急性ではない。

(2) かうジリ／＼に來た事業會社の破綻の場合には、それが金融恐慌にまで爆發する萬一の場合には、外資輸入で一時的に之を消留めると云ふ非常手段が採れる。殊に、いま、内外の事情はそれが採り安い時期に在る。

(3) 銀行界自らは、昭和二年の金融動亂で、最も弱い鐵鎖の部分は、已に取捨てられ且つ、特融八億八千萬圓で補强せられてゐる。なる程、その後に於ける打擊もあるが、しかし、去る昭和二年の金融動亂と特融とで淘汰補强されてゐると云ふことは大きな强味だ。

(4) 銀行畑の井上藏相が、たゞ一つそれの防止のために他の汎ゆるものを犧牲にして全力を擧げてゐる。他の方面に對する藏相の御手際なら危かしい限りだが、兎に角此の方面のことには相當敬意を表し得よう。

(5) それに、急激にドカッと來た事業界難ならば、或は、一大不安から全面的金融破綻を將來せぬとも限らぬが、かう、ヂリ／＼で來る場合に於ては、札付きの會社銀行は已に事前に分つてゐる。從つて、萬一その札付きが遂に破綻を暴露しても、それが一般に飛火しないやう、之れを其處だけの、孤立的破綻として消留める準備や手當てが容易に出來る。

(6) 現に襲ひつゝあり、尙ほ今後に於て來るべき財界惡化は、個々の事業の財政難、個別的な金融難を激化する惧は甚大だ。しかし、一般的金融難を招來する惧は、現在の内外諸事情（殊に英米の低金利時代來に鑑み）からは考へ難い。從つて、個別的破綻については、其處だけを犧牲にして、他に動亂の及ばない方法が容易に取り得られる。況んや、銀行家は去る昭和二年の金融動亂で、この種の共同動作の必要は生々しく知つてゐる。

一體、すべてのものは、その時間さえあれば、與へられた打

撃に對抗する力を自働的に強化するものだ。例へば、人間の體がさうだ。健康體が、突然急性肺炎にでもやられると、却つてコロリと死んで了ふ。體力が肺炎（酸素供給力薄弱化）に對抗すべく、之に順應して所要酸素量を減少さす迄に於て、酸素不足で急死するのである。だが、それが漸次に來た場合には、體力は之に對抗すべく諸活動を縮少して、酸素所要量を減少さすから、同一程度の肺炎でも、よく之に對抗して、生理的破綻を起さずにすむのである。

資本主義經濟の機關もさうだ。急激に來た財界惡化ならば、已に、金融大動亂を勃發さしてゐるだけの打撃であつても、それが或は徐々に來り、或は多少豫期されて少からず手當行爲が出來てゐる場合には、同一程度の打撃、乃至は夫に幾倍する打撃であつても、金融動亂に迄破綻するものではないのである。

四　金融動亂よりも更に惡質な財界の破綻へ

斯樣に論じて來ると、筆者は意外に財界の前途に對し樂觀的見解を抱いてゐるやうに、一應、見られるであらう。だが、若し、以上の論述から、斯樣な樂觀的結論に導くものあらば、そは大變な見當違ひだ。財界動亂の最惡の場合は、必しも金融動亂と云ふ形を採るものとは定まつてゐないからだ。譬へば、金融動亂は、肺患者の咯血の如きものだ。表面的には一大事勃發の如く見え、患者や周圍の者に多大の恐怖を與へるけれども、しかし醫者の立場から見れば、それは必しも生命を危くする最惡の症狀ではないのである。否、却つて、そのために回復を早くする場合すらある。一番恐るべきは、假令咯血はしないにしても、刻々と肺が蝕まれて行つて、身體極度の衰弱から生命が奪はれるに至ることだ。

財界惡化の症狀に於てもさうだ。最も恐るべき徴候は、金融動亂ではない。金融動亂は、或は財界惡化の急性でないことに由り、或は手當ての如何に由り、之を防止することが出來る。だが、それは、必しも、病因を克服せる結果ではなく、却つて病勢を内攻せしめながら、それの表面への爆發だけを彌縫的に阻止せる場合があるのである。いま、筆者が、我が財界の惡化は、第二の金融動亂にまで爆發するが如きことはあるまいと云ふ場合は、即ち、此の後者の場合に當るのである。

顧るに、現内閣の金解禁善後策對策は、繰返し述べるが如く露骨極る金融本位のものである。その結果、財界惡化の打撃が金融動亂にまで爆發する危險だけは、他の汎ゆるものを犧牲にして、獨り、手厚くそれが防止せられてゐる。だが、その結果として、産業界は、極度の犧牲を強ひられ、その健康は甚しく衰弱するに至つてゐる。現内閣の金解禁善後策は、謂はゞ、金融動亂を防ぐために、産業界に對し、長期の絶食療法を強制してゐるやうなものであるからだ。

云ふ迄もなく、産業の健康は、そのため極度の衰弱に陥る。

だが、その結果はどうなるか。

(1)失業者の激増である。

(2)農民の極度の疲弊である。

(3)中小商工業の破産的喰詰である。

なる程、これ等の諸現象が如何に激烈になつても、そのために、金融動亂が勃發する憂は殆んどない。否、金融動亂の爆發を防止するためにこそ、財界惡化の壓力が、これ等の方面に安全瓣を求めて、その犧牲を轉嫁し來るのである。この結果、我が經濟の健康體は、これ等の打撃のために、金融動亂勃興の打撃以上に蝕まれて、刻々と其の××を×かされてゐる。否、問題は單に、經濟的打撃の強弱のみではない。それ以上、此の種の打撃は、金錢的秤量に由つて大小を論ずることの出來ない、更に、重大な問題を持つてゐる。即ち、此の種の打撃は、同時にその本人、それの家族等の生命そのものが、存續出來るか否かの絶對絶命の問題を作つてゐるのだ。それだけに、此の種の打撃は、それが或る程度以上に達すると、經濟不安よりも、寧ろ××不安が沸騰して、茲に、第二の金融動亂？の代りに、第二の米××××？の懼が愈々濃厚に急テンポに動いて來るのである。

思ふに、いま、刻々と我が財界を襲ひつゝある一大不景氣は、若し之をそのまゝに放置するに於ては、二つの恐るべき爆發口に向つて必然に進んで行きつゝある。第一は金融動亂、第二は××動亂である。然るに、現内閣及び資本家の多くは、專ら、第一の爆發をのみ懼れて、之れの防止に全力を擧げてゐるが、その結果、第二の××に對する導火線は、刻々と××されてゐると云ふことに殆んど無關心であるかのやうだ。かくて、次の如き氣休めすら切りに口にせられてゐる。曰く、日本の失業者は英米其他に比し未だ遙かに少いと。だが、英米其他の失業者には、失業保險其他の制度があつて、兎に角、生命を繋ぐことだけは何とか保證されてゐる。しかし、日本のそれは、それ等の保證が全然無いものだけが、失業者として取扱はれてゐると云つてよいのだ。實に、いま日本に於て、財界惡化の打撃について最も恐るべきは、それが第二の金融動亂にまで爆發すべきか否かの點ではなくて、失業その他の生活難から、社會不安の極、第二の米××にまで××するの懼なきや否やの點である。之れ、筆者が、さきに、今次の財界惡化は、金融動亂にまで激成するが如きことは殆んどない。しかし、財界大不景氣の前途を、決して樂觀してゐるわけではない。財界大不景氣最惡の場合は、それ以上の××××××せしめる場合がある、と斯樣に述べた所以である。

朝鮮「自治」問題

——その過去・現在及び將來——

中林義雄

一

朝鮮の地方自治制度が愈々確立されることになるらしい。それに就て、僅か三月の上旬頃だつたか、貴族院研究會の政務審査第七部會で、東上中の齋藤總督を招き『朝鮮統治問題並に朝鮮に於ける思想問題』に關し懇談を行つた際、席上某議員が總督に向つて次のような質問を試みたと云ふ記事を當時の新聞紙上で讀んだことがある。

「總督は朝鮮に自治權賦與の方針の樣に承はるが、その根本方針は何處に定められたのであるか。町村（と新聞紙には書いてあつた……筆者）に自治制を賦與することはその窮極は代議制を許す事になり、引いては朝鮮××問題が起ることを豫想され、明治大帝の日韓併合の大精神に背馳することになりはすまいかと思はれる、云々。」——かう云ふ質問をしたのである。即ち、この貴族院議員に從へば、朝鮮に於ける地方自治と云ふ問題も、朝鮮自治と云ふ問題もそしてまた朝鮮獨立と云ふ問題も、何れも『窮極は』一つの問題だと云ふことになるのである。

だが、この『研究會』所屬議員はも少しこの方面の歷史を『研究』すべきであつた。と云ふのは、朝鮮に於ける地方自治權賦與のことは、齋藤總督が大正八年騷擾事件の直後、所謂『武斷政治』に代る『文化政治』の新しい土産を携へて始めて朝鮮に赴任した時、その時既に中外に宣明せられたところだからである。「將來機ヲ見テ地方自治制度ヲ實施シ以テ國民ノ生活ヲ安定シ一般ノ福利ヲ增進センコトヲ期ス」——大正八年九月十日附齋藤新總督の『施設方針ノ諭告』の中にちやんとかう書いてあるのだ。

それから更に面白いことには、若しこの貴族院議員がお手のもの、帝國議會議事速記錄を「研究」する勞をも惜しまなかつたならば、第四十四帝國議會(大正九——一〇年)のそれに於て次のような記錄を讀むことが出來たであらう。

場所は衆議院ではあつたが、議員湯淺凡平氏が、朝鮮に文化政策を行ふならば、その當然の歸結として、完全な自治を認めなければならぬ。更に進んで「所謂一視同仁內鮮無差別の精神から」朝鮮に於ける帝國憲法の實施を斷行しなければならぬ、「此完全なる自治を許し、憲法の實施を御斷行なさるのは今年より何年の後であるか、之を御聲明になる必要はないか」と云ふ質問をした。質問者は、文化政治、地方自治、憲法施行(朝鮮を帝國議會の選擧區に編入する)をば當然の道行として、單にその實現の時期竝にその豫告的聲明の可否如何と云ふ極めて具體的な質問をしてゐるのである。所がこれに對して、當時の總理大臣原敬氏のなした答辯も振つてゐる。曰く、「段々朝鮮の自治の點に於ても、敎育の點に於ても、內地同樣に致したいと考へるのであります、遂に段々朝鮮が其等の事を完成致すやうに相成りましたならば、帝國議會に議員も參ると云ふやうな時期もございませうけれども……併し何れの日と云ふことを期するには、內地に於ける憲法施行に就て、十年も期間を置かれました、斯樣にする譯には參りますまい、何故と申せば朝鮮の狀態が異り、朝鮮の文化の進む程度に依つて、府縣市町村制の自治も行はれ、遂には又議員選擧法も施行すると云ふやうに相成るのでありますから、何時何年より實行すると云ふやうなことを豫め示すこと……は出來ないのであります、云々」と。

原首相も、同樣に、文化政策、地方自治、參政權賦與を當然の道行と考へてゐる。只その時期を明示することには反對したのである。同樣の思想は其後朝鮮に於て下岡政務總監によつても明言せられた。要するに、齋藤總督にしろ、下岡總監にしろ、將又湯淺凡平氏にしろ、當時の人達の考へた所謂「文化政治」なるものは、時期の如何は勿論問題にはならないであらうが、兎も角理想としては、根本方針としては、朝鮮に內地同樣の地方自治卽ち府縣制市町村制を施き、更に帝國議會への選出權をも認めんとするものであつたことは疑ふ餘地がない。其頃から言はれ出した「內地延長政策」と云ふ言葉は、詮じ詰めれば、かゝる內容を表現した言葉であつた。

そこで問題はかう云ふことになる。大正八年九月の所謂制度改革(文化政治)の根本方針の一つたる朝鮮地方自治制度施行の約束が今や漸く履行せられんとするに際して、貴族院議員ともあらうものが、それを朝鮮自治の問題と同一視し更に××問

題とさへも混同して、その根本方針に就て疑を挾むと云ふのは洵に無智なる哉と謂はなければならぬ。だが、かうした朝鮮問題に對する無智は、この貴族院議員のみでなく、內地の所謂有識者の殆ど總てに共通する事實ではあるまいか。朝鮮に於ける地方自治權賦與の問題と、朝鮮自治の問題とは之を混同してはならない。朝鮮自治の問題と朝鮮を內地同樣帝國議會の選擧區となさんとする問題と、これも亦混同してはならぬ。更にまたこれらの諸問題就中朝鮮自治の問題と朝鮮獨立の問題とは云ふ迄もなく根本的に異る。之を要するにこれら夫々の問題に對する精確な科學的認識がこの場合絕對に必要である。

二

最近傳へらる、朝鮮地方自治制施行案なるものは、さきにも述べたように、文化政治、大正八年の制度改革の根本精神の延長である。然かも、それ以後の朝鮮地方制度の歷史に少しく眼をやる者にとつてはそれが全く單なる延長であり、決して『劃期的大改革』ではないことを知るのである。

即ち、大正九年齋藤總督と水野政務總監に依つて創設せられた地方評議會制度（道評議會、府・面協議會、府・郡・島學校費評議會——『劃期的大改革』と云ふことが若し言ひ得べくんば、この時にこそ言はるべきである。）が諮問機關たることを止めて決議機關たらしめらる、點に、今回の地方自治制施行案の骨子がある。（尤も、其他現在の指定面を邑と改めるとか、府學校費及び學校組合を廢して之を府に合併するとか地方公共團體そのものの整理も併せ含まれてゐる。案の詳細な內容に就ては三月廿五日朝鮮總督府發表の『地方制度改正綱要』に就て見られ度し。）從來の諮問機關が議決機關に改められて地方團體が始めて意志決定力をもつようになつたと云ふことは、慥かに地方自治制度の樹立である。尤も理事者は依然として道知事、府尹、邑長（從來の指定面長）即ち國家の官吏乃至待遇官吏であつて團體の選任にかゝる團體固有の機關ではない。この點內地の府縣に類似する。然も、議決機關たる道會、府會及び邑會の議長も之等の官吏を以て充てるとの事であれば內地の府縣よりも低級な自治團體だと謂はなければならぬ。府縣知事の公選と云ふことが一時內地では喧しかつたが、朝鮮では內地の市及び町に該當する府及び邑ですら執行機關は天降りとなるのである。

從つて、ここに內地でも認められてゐる原案執行權が相當强力に認められたならば、諮問機關から議決機關に改めると云ふ今回の所謂地方自治制施行は、その實際の運用に於ては、從來の制度と大差はないことになる。蓋し諮問機關と云つても、提案

が否決せられ若くは重大な部分が修正せられた場合には、矢張り內地府縣の原案執行の場合と同じように、問題が頗る面倒になるのである。豫算返上、議員の連袂辭職と云つたような所謂「憂慮すべき」事件が朝鮮の地方にはよく起る。それと共に重要程度の尠い小規模な修正希望なら、諮問機關の意志が容れられると云ふ場合も多くあるのである。要するに、形式は諮問機關であつても、既にさうした機關が認められてゐる以上、全くその意志を無視して獨斷專行することは困難であり且つ賢明な處置ではない。だとすれば、さうした諮問機關が玆に議決機關に改められたとしても、原案執行權だに確保されて居れば、形式上は兎も角實質上は、さう大きな改革ではないと云ふことが出來る。實質は寧ろこの諮問機關乃至議決機關の構成方法如何に在る。公選の範圍が非常に擴張せられ、且つ選擧資格が思ひ切つて低下されると云ふのであれば事は自ら別である。然も今回の改正はその點には全く觸れんとしてゐない。

かくて今回の朝鮮地方自治制施行案は、朝鮮に住む者にとつては何等眼を瞠つて論議すべき大改革大問題ではない。況んや、朝鮮自治の問題でもなく、また「引いては」朝鮮××問題に導くと云ふが如き筋合のものでも勿論ない。それは大正八年九月以來の文化政治の延長であり、かの三・一事件(大正八年三月一日の××萬歲騷擾事件)以來方向轉換せられた「朝鮮の根本方針」の當然の歸結であり、而してその發展の方向は、朝鮮自治でもなく況んや朝鮮××でもなく、內地延長主義の當然の歸結たる朝鮮を帝國議會の選擧區に編入すると云ふ理想にこそ向つてゐるのである。內地延長主義とは朝鮮開發の時間延長のことか又は朝鮮海峽埋立の土地の延長のことか等と揶揄せられても、尠く共問題が朝鮮の將來と云ふことになれば、そして問題がこの內地延長か朝鮮自治か將又朝鮮××かと云ふ三者擇一と云ふことになれば、誰しも內地延長が今日日本當局の執つてゐる「治鮮の根本方針」たることを否定し得ぬことは明らかである。

三

そこで問題は、朝鮮に地方自治制を施くに就ての當局の根本方針如何などと今更開き直ることではなくて、その當局の根本方針の一の實現たる地方自治制の施行に對して、朝鮮民衆の輿論はどうであるか、と云ふことである。言ひ換へれば、偶々この地方自治制施行と云ふ一改革に當面して、大正八年の三・一事件以來方向轉換せられた朝鮮統治の根本方針卽ち文化政治卽ち內地延長主義と云ふものが朝鮮民衆によつて如何に再吟味さるるか、と云ふことが問題なのである。

で、朝鮮人の朝鮮問題としては、漸進であれ急激であれ、内地延長主義を承認して總督政治の根本方針に追從するか、或は敢て『不逞』となり、保安法、大正八年制令第七號並に治安維持法を××にかけて××運動を是認し、總督政治否日本の統治そのものに××するか、乃至は日本の統治そのものには背反せずと雖も内地延長主義を認めずして自治領としての朝鮮を××するか――三者何れか一つを擇ぶべく彼等は課せられてゐるのである。かくて問題は深刻である。

四

拓務省を設置する時であつたが、その省名を決定するに就て色々問題が起り、それと關聯して『植民地』と云ふ言葉も政府の慣用語としては不穩當だとあつて『外地』と云ふ言葉に改められたことがあつたが、何でも其時國民協會及び同民會と云ふ朝鮮の上流名士の團體が田中首相に猛烈に抗議して『朝鮮は植民地に非ず』と云ふ聲明を出さしたことがあつた。これなどは明白な内地延長主義であらう。又この派の系統である最近創刊せられた民衆新聞と云ふ諺文紙の如きは、最近の印度問題學生事件等に際してもこの問題に論及して「内地延長主義に基き參政權の獲得を」要求してゐたが、更に地方自治制案發表さるるや、「内地延長主義の漸次實現さるるに依り、朝鮮選出代議士が帝國議會に出席するに至る前提たるを信ずる時、吾人は眞に欣幸に堪えざる所である」と感激してゐる。

東亞日報、朝鮮日報、中外日報等の諺文紙を見ると之と正反對の立場である。それらは或は改正制度に依る朝鮮人有權者と内地人有權者とを比較して前者に不利なることを説き、或は自治制度として尚不完全なるを攻撃し、更に進んで「朝鮮民衆がそれのみにて能く滿足するであらうか何うかに就て、疑問を抱かざるを得ない」（東亞日報）と斷じてゐる。朝鮮に於ける言論自由の内地とは比較にならぬ程狹い現狀に於て、合法的文書の上にこれ以上明白な言葉に接することは到底不可能であらうが、要するにこれらの新聞紙が代表する所の意見は、さきの民衆新聞乃至は國民協會同民會のそれと異り、内地延長主義、從つてその一表現としての今回の地方自治制案をば決して××としないのである。然らば彼等は何處に行かうとするのであらうか。

五

昨年第三回太平洋問題調査會議が京都で開催せられた時である。參加單位は同會議規章により、太平洋沿岸の『主權國乃至自治領』と制限せられた爲め、朝鮮は當然に參加資格を持ち得

ないことになつた。この問題に當面して××したのは前已諸新聞紙である。彼等は會議に對する朝鮮人の單獨參加權、民族單位の參加資格を××に××して、この問題解決のため京都に出發した朝鮮人代表を激勵し支持したのである。事は單なる學術會議に對する參加資格の問題に過ぎないが、米・英・加奈陀・濠洲・新西蘭・支那・比律賓即ちこれらの「半權國乃至自治領」の間に伍して民族としての××を主張したのである。それは×××に一つの民族主義である。それ故にその精神は内地延長主義と正に×××××れざるものである。

今一つの例。例へば昭和五年四月二十二日附の朝鮮××黨被告に對する豫審決定書の冒頭にはかう書いてある――「朝鮮××黨と稱するは大正十四年四月……私有財産制度を否認し××制度を實現せしむると同時に、朝鮮を日本帝國の××より××する目的を以て組織されたる祕密結社にして、云々」と。これも亦内地延長主義とは全く相××する主義であり、運動であり、然かも最も明確に尖鋭に××せること前者の比ではない。かく比較して見ると、前者の思想は自治主義若くは當然に其處へ連るものであり、後者は社會主義を基調とする××分離主義である。社會主義を基調としない××分離主義、純然たる古典的民族主義的××運動は、大正八年の三・一事件の爆發を絶頂として、その餘燼、治鮮方針の方向轉換等の結果、今やそれ自身としての力を喪失してゐる。古き民族主義者の或るものには例へば墓地規則の改正の如き「朝鮮ノ文化及舊慣ニシテ苟モ採ルヘキモノアレハ之ヲ採ル」に「大正八年九月「施政方針ノ論告」」との新施政に滿足した者すらあり、そして××ざる者は或は自治運動に走り、或はその××的情熱をば新しい社會主義の基礎の上においたのである。

進歩的教養を有する中堅的朝鮮紳士及び紳商、言ひ換へれば尚微弱ながらも總督施政二十年の間に移植せられた資本主義の生みの子たる都市の土着ブルジョアジー乃至土着小ブルジョア的インテリゲンチャは、彼等の田舍に於ける祖父や父のように「民族的舊慣尊重」の新施政に容易く××するやうな保守主義者ではない。否、××政治專制政治には陰に眼醒めたる朝鮮人としての不滿をば抱いてゐる。併しさればと云つて、彼等は目下の所保安法・大正八年制令第七號及び治安維持法の威嚇を無視して迄もそれを徹底化させる勇氣もなければまたさう云ふ地位にもゐない。そこで彼等の赴く處は必然に自治主義でなければならぬ。人は最近の東亞日報其他の紙上にこの空氣の濃厚なるを見るであらう。そしてこの自治主義に就て、レーニンはかつてそれが自由××主義と本質的に異ることを説明して次の如く書いてゐるのである。「吾々は二箇の國際的提議即ち一、自治制の提議と二、自由××權の提議とを對立させる……既に第

一提議が第二提議と異つて改良主義的であることは極めて明らかなことではないか。支配階級の權力の基礎を××しないやうなもの及び完全に己れの支配を維持しながら支配階級の與へる一讓步に過ぎぬやうなもの、それが改良主義的變更である。××的行動は權力の××を××する。民族綱領における改良主義的要素は、支配階級の特權の全部は破綻せず、何等完全な平等權を創らず、民族的××の何一つをも取除かない。『自治』民族は『支配』民族の持つ一切の權利を同樣に××しはしない。』(『民族自決權に關する討論の結果』——『激流に抗して』所收)

そしてプロレタリアートは? プロレタリア的××××的××××の方向は? ここのそれはおしなべて殆ど××××的色彩を××ないものはないと言つても過言ではない。コミンテルンの民族植民地××が彼等を×へない筈はないからだ。そして朝鮮全人口の八割を占むる農民(その壓倒的部分は現在の土地分配狀態の必然的結果として貧農乃至小農である) これがまた××的植民地運動の×××××として次第に前者の××の下におかれつつある。朝鮮勞働總同盟、朝鮮農民總同盟、朝鮮青年總同盟、等の組織、竝にその××化の歴史が之を證明してゐる。そして三次四次にもわたる××黨××竝に無數の類似の治安維持法違反事件。かくて××の刑務所が既決未決の政治犯で××してゐることは所謂三・一五、四・一六事件以後の內地刑務所の比ではないと云ふことではあるが、然かもこれらの政治犯が最後に至るに從つて殆ど總べて××××的××を帶びて居り、××な民族主義的××運動の色彩が喪失してゐることは注目すべき現象である。帝國主義の最惡の敵『×い妖怪』が遂に××二千萬の白衣××の間を××××めた。

これに就て、人は、大正十一年乃至十二年の朝鮮思想界に於ける古典的民族主義と社會主義との激烈なる理論鬪爭を顧みればよい。前者を標榜する雜誌『東明』と後者を標榜する雜誌『新生活』との對立抗爭、そして『新生活』の勝利、××の故の××による禁止處分——かくて古典的民族主義は既にこの時を以て指導精神としての力を喪失してしまつたのである。『朝鮮の運動が少數の識者階級の手より多數の××の手に移るに隨ひ、資本主義的文化の建設運動、民族運動は、資本主義的立場に於て餘地なく敗北し、あらゆる××を嘗めつつある朝鮮民衆に、その有力なる嘱望を受くるには、彼等の直接利益より餘りに超然たるものであつて……その運動の中心勢力は、遂に經濟的××××方面へ傾くに至つたのである。』(裵成龍『朝鮮社會運動小史』昭和四年一月、『朝鮮日報』所載) 一朝鮮社會運動史家はかく説明してゐる。そして恰かも之に××するように、レーニンはかつて『激流に抗して』の中にかう書いた。『資本主義的社會秩序においては、民族的××(及び一般に政治的××)を廢棄することは出

來ない。それがためには××の××が無條件的に××である。即ち社會主義を導いて來なければならぬ。民族的抑壓を××するためには、一つの根底――社會主義的生産がなくてはならぬ。併しこの根柢の上になほ民主主義的××組織、民主主義的××等が必要である。プロレタリアートは資本主義を社會主義に改造することによつて、民族的××の完全なる××の可能性を創り出すであらう。」(レーニン、前掲書。圏點はレーニン。)繰返して言ふ、「×い妖怪」は既に半島の××××にも憑いたのである。

六

さあれ内地延長主義は、一部の上層朝鮮人を除いては、自治主義並に社會主義的分離主義と云ふ何れも民族的××をもつた××い思想乃至運動を敵としなければならぬとは言ふ迄もない。

さう云ふ所へ「××××××」と名乘る一大組織が出現した。『新幹會』の××これである。それは、その綱領の曖昧さにも拘らず支會總數百四十、會員四萬を抱擁し、全鮮の各運動機關を統一した純然たる××××××である。然かも、×××××××××の一たる『正友會』の劃期的方向轉換宣言(それは當時の日本に於ける福本主義の影響を多分に受入れてはゐるが。)以來擡頭しつつあつた實際的政治運動の分野に於ける民族運動と社會主義運動との×××××の機運は、全×の×××××的運動團體によつて組織せられた「朝鮮社會團體中央協議會」をして自體非常召集、新幹會支持の決議をなさしめ、愈々この××××××をしてその名に値するものたらしめたのである。「かくして、己未運動(註、大正八年三月騷擾)以後一時頽勢に陷つた民族運動は、更に全××の知識階級、農民、甚だしきに至つては封建的イデオロギーを未だ捨てない兩班階級までを抱擁して、巨大なる勢力を形成し、レビアタンの如く朝鮮運動線上に××した」(李[illegible]朝鮮社會運動史―東亞日報昭和五年一月連載)のである。

そこで問題は、この一大民族××が何處へ行くか、何處へ行かしめらるるかと云ふことである。明らかにそれは××政治の一大××××である。だからその全國大會は創立以來常に××されてゐる。合法的範圍でそれの行ふ運動は勢ひ微温的たらざるを得ない。がそれにも拘らず、この民族的××が内地延長主義を××するものでないことは言ふ迄もなく明らかである。然らばそれは自治主義へ行くか、××分離主義へ行くか。或はその何れへも行き得ないうちにその組織を潰滅してしまうか。アイルランド・シンフエン黨か、印度スワラジ黨か、清黨以前の中國國民黨か或は以後のそれか、その何れの道を歩まうとするか。それは朝鮮の政治的將來を考へる者にとつて尠からぬ興味がある。固よりそれらの運命を決するものは單純に朝鮮半島の情勢のみではなく、わけても日本に於ける諸情勢、引いては

所謂第三期資本主義に於ける世界政局の推移とも密接に關聯してゐるのではあるが。

七

何れにしても、今回の朝鮮地方自治制案は、案そのものとしては、某貴族院議員の心配するように、朝鮮自治の前提でもなく、また況んや獨立問題とは何等の關聯もない。それは大正八年××騷擾事件以來の總督政治の根本方針であり、從つて寧ろ内地延長主義の前提である。××問題は勿論のこと朝鮮自治問題も、それらは今回の如き上からの地方自治制案とは全く無關係に、×からの××民族の運動として注目すべきであり、そして某貴族院議員の「心配」は實はそこにあつたのである。

だが、將來に於て「治鮮の根本方針」は何處までも自治主義を敵視するであらうか。人は、今日に於て既に自治運動と×い××運動とを切離した當局の多少の差別取締を見ないであらうか。だとすれば、それは「治鮮の根本方針」の多少の動搖であり、窮極に於てはその××りである。そして若しその××りが來るとすれば、「治鮮の根本方針」は再度の方向轉換を××なくされるであらう。曰く内地延長主義より×××主義へ。言ふ迄もなく日本帝國の一部分としての朝鮮は飽くまで之を維持しつつ。植民政策學者は言はずや、自治領主義は今日に於ける最も進歩したる植民地統治方法である、と。そしてその時は自治領主義者がブルジョア民主主義者としての××をはつきりと見出す時である。だが、よしブルジョア民主主義的植民地運動であつても、それが××主義に對する××的勢力たることを失はない限りは、××××的××××運動が之と手をつないで進軍するであらうことは、既にコミンテルン第二回世界大會の決議以來そして支那を始め諸植民地に於ける××運動の歴史を通じて×××な所である。と同時に、そのブルジョア的指導分子が、運動の一定の發展段階に於ては、民族運動に對する帝國主義ブルジョアジーの最後の切札たる××××の遂行にとつて最良の踏臺となるであらうとも、ケマル・パシャ及蔣介石の裏切に於て示された帝國主義の世界史的實踐以來劣らず××なことである。

斯て朝鮮に於ても、土着ブルジョア及知識的上層小ブルジョアを中心とする××運動は、情勢の如何に應じては、帝國××主義と其正面の敵たる社會主義的××運動と其何れかの××××たるものだ。そして凡て是等の運命を新幹會は其××××××としての胎内に宿してゐる。斯て新幹會は何處迄××××××として進み得るか。夫は同時に、内地延長主義と自治主義と××主義との複雑な三角關係の進行であり、軈て其何等かの解決である。そして其處に××の政治的將來が暗示されてゐるのである　（完）

小學教師の初任給引下げ問題

安部磯雄

官吏の減俸問題が起つた時には司法官の猛烈なる反對運動があつた、め現内閣も不面目を忍びながら遂にこれを撤回することになつた。然るに最近各地に於て小學教師初任給引下げ問題が起り、これに對して中央政府は未だ何等具體的意見を發表して居ないようである。私は地方自治體が種々なる口實を構へて小學教師の初任給引下げを行はんとしても、文部省が容易にこれを許可するだらうとは考へないけれども、決して安心を許さぬ問題であるから、前もつてこれを研究して置く必要があると信ずる。

殊に私が進んで此問題を論じたいと思ふのは、稍もすれば爲政者の壓力が最も抵抗力の少き方面に向つて加へられんとする傾向があるからである。中學や大學の教師には比較的多くの抵抗力があるけれども、小學教師には遺憾ながら、これを求むることが出來ない。教育といふ立場から言へば大中小學の教師の間に何等上下の區別があるべき筈はないけれども、奈何せん今日は俸給の多少を以て人々の價値を判斷せんとする弊風があるから、私共は殊に小學教師に應援して其立場を擁護せざるを得ないのである。

概して小學教師の俸給を引下げることは單に不都合であるのみでなく、教育上非常に不利益であることは言ふまでもないが、よしこれを初任の教師にのみ適用するとしても、私共はこれに反對せざるを得ない。第一小學教師の俸給はこれを他に比較してどうであるかといふに、決して充分なりと言ふことは出來ない。殊にこれを外國と比較するに當り何人も其差の大なるに驚かざるを得ないのである。且つ彼等の俸給を中學校若くは女學校の教師の其れと比較したならば、何人も其不公平を感ずるこ

とであらう。更に小學教師の生活が如何なる情態にあるかを考へる必要がある。彼等の收支は果して償ふて居るのであるか。當局者は先づ此等の點を考へて愼重に此問題を決すべきであると信ずる。

全國に於ける小學教師の俸給が幾何であるかは次の表を見て知ることが出來る。此表は大正六年から昭和元年に至る十年間の統計であつて、正科教員（男女）の得た俸給の最高額と最低額とを示すものである。

	最高額		最低額	
	男	女	男	女
大正六年	二四円	一七円	一九円	一四円
七年	三一	二一	二四	一八
八年	三六	二五	二八	二一
九年	六六	四七	五二	四〇
十年	六七	四八	五三	四一
十一年	七〇	四九	五四	四二
十二年	七二	四九	五五	四二
十三年	七二	四九	五五	四三
十四年	七二	四九	五五	四〇
昭和元年	七二	五〇	五五	四二

これによりて見れば大正六年に歐洲戰爭が終りを告げ、其後數年間は尙ほ好景氣を持續したので、大正九年には一躍俸給の増加を來すことになつた。然も小學教師の俸給は概して少なく現在に於てすら東京市に於ける平均俸給額は六十五圓、地方に於ては僅に四十五圓と言はれて居る。而して現在師範學校卒業生の初任給平均額は第一部卒業男子が四十八圓七十九錢、女子四十一圓十六錢、第二部卒業男子四十八圓七十九錢、女子四十一圓十三錢である（昭和五年四月一日の東京朝日新聞に據る）。私は米國に於ける事情を述べて、これを兩國の其れと對照することにする。

左に掲げる統計は人口三萬以上十萬以下の都市に於ける小中學教師の俸給額を示すもので、大正八年の數字である。中學は二種に分れて居て、一方をジユニヤー・ハイスクールと呼び、一方を單にハイスクールと呼んで居るのであるが、私は便宜のため、これを尋常中學及び高等中學と呼ぶことにする。今、此三種の學校に於ける教師の俸給を男女別に示せば次の如くである。俸給は年俸であつて、單位は弗である。

	小學	尋常中學	高等中學
男	一、五五三弗	一、四九四弗	一、八〇七弗
女	一、〇八七弗	一、二五三弗	一、三八八弗

（東京市政調査會發行の「都市教育の研究」に據る）

是によりて見れば米國の小都市に於ける小學教師の俸給が一年三千圓以上即ち月割にして二百五十圓以上であることが判る。

我國の地方に於ける小學教師の月收が平均四十五圓であることを考ふれば、米國の其れに比して我小學教師の俸給が其五分の一にも達して居ないことが明である。東京市の如き大都市に於ては小學教師の俸給が平均六十五圓に達して居るけれども、これを米國の大都市に比すれば、矢張五分の一に過ぎない。大正十二年（一九二三年）の統計に據れば、デトロイド及びクリーヴランドの二都市に於ける小學教師は平均三百圓（百五十弗）の月俸を受け、セント・ルイス市は三百九圓、ミルヲーキー市は三百八十三圓、シカゴ市は三百九十五圓、ニューヨーク市は四百七十五圓といふことになつて居る。即ちニューヨーク市の小學教師は東京市の小學教師に比して七倍以上の收入を得て居るのである。（「都市教育の研究」）

言ふまでもなく小學教師の待遇如何は單に俸給額のみを以て判斷すべきものではない。私共は俸給額の外に增給の速度とか、恩給制度とか、其他の優待法をも考慮の中に入れなければならぬ。私は昨年渡米の序を以て約二週間を布哇に費したのであるが、幸にして私の知人は小學及び中學教師の俸給に關して次の如き材料を與へて呉れた。勿論これは單に概略に過ぎないけれども、參考材料としては可なりの價値があると信ずる。左に小學校、尋常中學校、高等中學校教師の初任給、每年行はれる俸給の增加額、各教師に許さるべき俸給の最高額、及び校長給を示すことにする。

	小學	尋常中學	高等中學
初任給（月給）	一〇五弗	一二〇弗	一三〇弗
每年增俸額	五	一〇	一〇
俸給最高額	一五〇	一八〇	二〇〇
校長俸給	一五〇	二〇〇乃至三〇〇	三〇〇乃至四〇〇

是を米國本土に於ける大都市以外の教師の俸給額に比較すれば大差はないように思はれる。米國本土に於ける小學教師の平均俸給額は前に示したるが如く、男子が一、五五三弗を得、女子が一、〇八七弗を得るのであるから、これを平均すれば年俸一、三二〇弗となり、これを月割にすれば百十弗となる。然るに布哇に於ては初任給が既に百五弗であるから、實質上より見れば、布哇に於ける小學教師の方がより良き情態に在るのではないかと思はれる。

校長の俸給は小學校の場合に於て割合に少ないようである。高等中學の校長は三百弗乃至四百弗の月俸を得、殊に代表的中學と稱せらるるマッキンレー高等中學校長が四百五十弗の月俸を得て居ることを考へれば、此點に於ける小學と中學との差が餘り甚しい樣に思はれぬでもない。然し規模の小さな小學校は

別として、五人以上の教師を有する小學校に於ては校長の職も責任も比例的に增加する譯であるから、教師の數五人以上一人を增す毎に校長の手當として五弗を給與することになつて居る。更に恩給制度に就ても一言述べて置く必要がある。卽ち勤續年限の增加と共に恩給額の增加を來すことは勿論であるが、假に小學教師が二十五年間勤續したとすれば、彼は彼が其當時受けつゝある所の月俸と殆んど同額の恩給を受けることが出來るのである。然し小學教師は必らずしも小學教師として一生涯を送る必要はない。彼には絕えず上進の途が開かれて居るから、彼の努力次第で中學教師になることも出來るし、又全然他の方面に向つて進む機會も與へられて居る。此點から見れば米國の小學教師は遙に多く惠まれて居る樣に思はれる。

布哇の小學教師は主として師範學校出身であり、中學教師はカリージ卽ち大學の出身であるが、これは米國本土に於ても同樣ではないかと思ふ。布哇で私が聞いた所によると、小學教師は自ら絕へず修養して居るのみでなく、社會も亦種々なる方法を以て小學教師の向上を獎勵して居るようである。例へば主として小學教師のために開かれる夏期學校の如き、決して教師達の出席を强制するのではないけれども、學務委員は小學教師の聽講の有無にも注意して居るのだから、夏期學校を重要視する風が自然に起つて來るのである。又小學教師の中にも中學教師の中にも篤志者はマスター・オヴ・アーツの學位を得るために勉强して居る人が少なくない。これも慥に彼等の位地を向上せしむる好條件であるから、學務委員の注意は此點にも向けられるのである。殊に私が最も面白く感じたのは小學教師が拔擢される條件の一に彼が何等か社會のため奉仕的事業をやつて居るか否かゞ數へられて居ることであつた。例せば少年團を指導して居るとか青年會のため盡力して居るとかいふようなことも小學教師の信任を增す條件となつて居るが如きである。小學教師の待遇は決して俸給增加を以て唯一の方法と考ふべきではない。私共は更に進んで彼等のため無限に向上心を刺戟するような精神的動機をも提供すべきである。

私が比較的詳細に日米二國に於ける小學教師の俸給及び其他の待遇を對照したのは、全く我國の小學教師が物質的に惠まれて居ないことを指摘するためであつた。私は更に進んで我國に於ける小學教師の俸給を中學教師の俸給と比較して、小學教師に對する待遇が餘り貧弱ではないかといふことを考へて見たい。既に述べたる如く布哇に於ては小學教師の初任給が百五弗であつて、尋常中學の教師は百二十弗の初任給、高等中學の教師は百三十弗の初任給を受けて居る。これによつて見れば小學教師

と中學教師との間に大差のないことが判る。更に米國本土に就て見るも、殆んど同一の事實が證明されて居る。大正十二年の統計に據れば、人口十萬以上の都市に於ける各階級の教師が受けつゝある俸給は次の如くになつて居る。

教師又は校長	年俸額
幼稚園	一、七九一弗
小學校	一、八七六
尋常中學校	二、一三六
高等中學校	二、四八七
小學校長	三、一二六
尋常中學校長	三、四八五
高等中學校長	四、四〇〇

(「都市教育の研究」に據る)

然るに、我國の教育組織は餘りに官僚的ではないかと思はれる。教師の俸給が僅なる資格の相違により區々に分れて居るのみでなく、小學程度と中學程度との間に設けられた差異が餘りに甚しい。大正十四年文部省の公にした統計に據り私共は次の如き事實を知り得るのである。

教師	月俸
小學本科正教員	七一、七八円
專科正教員	六五、七八
准教員	四一、六〇
代用教員	四六、〇二
總平均	六九、四五
師範學校教員 男	一一九、八二
師範學校教員 女	一〇九、七三
中等學校	一一九、五四
高等女學校	一〇三、三三
實科高等女學校	八七、四五

(「都市教育の研究」に據る)

これによりて見れば小學教師の俸給と中學教師の俸給との間には可なり大なる隔りがある。即ち中學教師は小學教師に比して約七割高の俸給を得て居ることになる。米國本土に於ける中學教師が小學教師に比して僅に約二割三分高の俸給を得て居り、布哇の中學教師が小學教師に比して二割六分乃至二割七分高の俸給を得て居ることを考ふれば、私は小學教師の爲に待遇改善を絶叫せざるを得ない。人々は往々收入の多少を以て其人を評價するのであるから、現在の如く小學教師と中學教師との間に俸給額の大差を設けることは直に此兩者の間に人間價値の相違を來さしむることになる。元來我國民には官僚主義を謳歌せんとする傾向がある。學校の程度を表現するために大中小の語を用ゆることは我國特殊の習慣であつて、これがため文化の進歩を妨害されることは決して少なくない。大學や中學の教師に比して小

學の教師が自ら卑ふするの傾向あることは我教育界のため甚だ悲むべきことである。大中小といふが如き階級的文字を用ゆるさへ甚だ不都合であるのに、更に小學教師と中學教師との俸給額に大なる差異を設けて官僚的觀念を一層强調せんとするのは實に無謀の甚しきであると言はなければならぬ。

私は共產主義の暴力革命に對して何等の同情を有しないのであるけれども、露國が計畫し且つ實行しつゝあるものゝ中には大に贊同すべき所のものがあることをも考へなければならぬ。現在露國に於て活躍せる大臣級の人々は毎月僅に二百五十ルーブルの俸給と家賃として少額の手當を受けて居るに過ぎないといふことである。私が昨年の夏北海道を旅行した時函館に於て信ずべき知人から次の如き話を聽いた。函館に在る露國領事館に於ては領事の月給が二百ルーブルであつて、門番の月給が百五十ルーブルである。副領事以下書記の月給が百五十ルーブルと二百ルーブルの間にあることは言ふまでもない。官僚主義が廢れてデモクラシーが充分徹底するようになれば、大臣と知事の俸給、警視總監と巡査の俸給、中學教師と小學教師の俸給は必ず接近するに相違ない。

然し中學教師と小學教師の俸給を接近せしむるためには中學教師の俸給を引下げるか或は小學教師の俸給を引上げるより外ない。既得權を無視して中學教師の俸給を引下げることは實行不可能のことであるから、私共の取るべき途は唯一つである。卽ち機會ある毎に小學教師の俸給を引上げる外ないのである。然るに今や小學教師の初任給を引下げんとする運動が起り、政府も强いてこれを抑止する考へはないらしいのである。これは明かに世界に於ける教育界の大勢に逆行するものではないかと思ふ。

最後に私が述べたいと思ふことは小學教師の生活が想像以上に窮迫して居るといふことである。收支がどうかこうか償ふて居るといふのであれば、よし貯蓄が出來なくとも、缺損はない筈である。然るに我小學教師の中には俸給だけで生活の出來ぬ人が少なくない。彼等の中には家族の內職によりて生活費の不足を補充して居る者もある。或は從來の貯金を引出したり、借金したり、或は親戚の扶助を受けたりして僅に收支の帳尻を合はせて居る者がある。左に掲げるものは大正八年末の統計であつて、餘り新しいものではないけれども、これによりて幾分か小學教師の生活狀態を察知することが出來る。これは京都市の調査であつて、中位に在る小學教師の世帶數四百六十に就き其收支を示したものである。便宜のため俸給の多少によりこれを九階級に分ける。

	小學教師の收入	支出	不足額
第一階級	四五、五〇円	六〇、五〇円	一五、〇〇円
第二	五一、〇〇	七六、五〇	二五、五〇
第三	五七、〇〇	八五、五〇	二八、五〇
第四	五九、〇〇	九五、五〇	三六、五〇
第五	六四、〇〇	一〇四、〇〇	四〇、〇〇
第六	六九、〇〇	一一六、〇〇	四七、〇〇
第七	七五、〇〇	一二六、五〇	五一、五〇
第八	八二、〇〇	一四二、五〇	六〇、〇〇
第九	九七、五〇	一七〇、〇〇	七二、五〇

（「都市教育の研究」に據る）

これによりて見れば、我國小學教師の俸給は決して彼等の家族の生計費として充分でないことを見ることが出來る。彼等は勿論種々なる方法によりて其不足を補充して居ることは前に述べた通りであるけれども、此補充の途を講じてすら尚ほ彼等の生活は依然として困難である。前表によりて見れば俸給額の増加する毎に不足額も益々増加するのであるから、皮相の觀察をなす人はこれを以て直に小學教師の不注意と奢侈心とに其罪を歸するかも知れぬ。然しこれが全く皮相の見であることは多言を要するまでもない。小學教師の多數は奉職後四五年にして結婚する。更に五六年を經過する中には二三人の子女を有することになる。これがため彼等の生活費は俸給の増加率よりも一層の速度を以て増加するのである。收入の充分なるを待たずして結婚するといふことも、結婚後何等産兒を制限する方法を講じないのも畢竟するに不注意の結果ではないかと詰責する人があるかも知れないが、私共は斷じて斯る人情を無視した意見には贊成することが出來ない。

人々の模範となるべき教師がなるべく早く結婚して修身齊家の途を講ずることは大に奬勵すべきことである。歐米諸國と異なり我國に於ては産兒制限に對する誤解が可なり甚しいのであるから、教育者の中にこれを實行する者の少ないことも亦已むを得ないことゝ考へなければならぬ。早晩我國民全體が産兒制限を理解するに至るのは明白なることであるけれども、現在に於て教育者の不注意を責むるが如きは全く見當違ひである。

山口縣に於ては知事の職權を以て既に小學教師の初任給を引下げることに決したといふことが新聞紙に報ぜられて居る（三月三十一日）。茨城縣下に於ては小中學教師の退職及び轉職が既に七百名に達して居るといふことだ。若し文部省が知事の職權に干渉するのは穩當でないといふ理由を以て上記の事實を放任して置くならば、遂に憂ふべき結果を惹起することはないであらうか。筋肉勞働者にして失業せる者は如何に少なく見積つても三十萬人を下ることはあるまい。これに加へて更に知識階級

の失業者が頻出すること、なれば、政府は決してこれを對岸の火災視する譯にはゆくまい。府縣知事が財政的理由で教師の初任給を引下げたり、或は小中學の教師を整理したりすれば、其結果は當然失業問題を惡化せしむることになる。それだけ中央政府の負擔は增加する譯であるから、當局者は此際初任給引下げや教師の退職を禁止する方針を確立すべきである。中央政府は近き將來に於て教育費補助額を增加すべきことを公言して居るではないか。一方に於て此の如く地方財政を援助する位であるならば、其交換條件として一方自治體に對し初任給の引下げや教師の退職を中止せしむることも決して不合理ではないと信ずる。

自治體の當局者が小學教師初任給の引下げを主張する理由が何れに在るか私は知らない。勿論自治體の財政困難が其主なる理由であることはほゞ推察が出來るけれども、一般に物價が下落したといふことも其理由の一つではないかと考へる。言ふまでもなく俸給生活者は物價の下落によりて直接に利益を受けるけれども、これは直に俸給引下げの理由とはならない。何となれば小學教師の如く收入が支出を償はざる場合に於ては、物價の下落は單に不足額を少くするまでゝあつて、何等の餘裕を生ずるものでないからである。私は民政黨内閣が官吏減俸意見を公にした時に或意味に於て贊成し、或意味に於て反對した。即ち緊縮政策を標榜する手前官吏が先づ減俸して其範を示すといふ趣旨には私は大贊成であつた。然し凡ての官吏にこれを適用することは實に亂暴極まることで、其れには極力反對であつた。故に私は年俸二千圓以上の官吏に對し累進的に減俸することが適當であるといふことを主張した。民政黨内閣が司法官の反對に遇ふて其案を撤回したのは決して驚くべきことではなかつたのである。私が初任給引下げ問題に對する態度も官吏減俸問題に對するそれと同一である。若し初任給が月百七八十圓であるならば或は引下げ問題を論議する餘地があるかも知れないが現在の初任給平均額が四十八圓七十九錢といふのでは全く問題にならないではないか。(三月三十一日稿)

失業日本

現在我國に於ける失業狀況

川西實三

第一　概説

一國社會に於ける失業者數を適確に知ることは殆不可能に近い困難な問題である。第一に失業者の定義如何、範圍如何に就て問題が起る。賃銀勞働者に限定するのかどうか。小賣商の破産したのや、農村から離れて來た百姓や、内地に漫然と渡航して來る朝鮮人などをも含めるのかどうか　又は別に職に離れたり、業を失つたりしたのではないが、我國で近年八釜しい問題になつて居る學校卒業者の未就職者、勤勞年齢に達して實社會に職を求めやうとする一般青少年等失業者では無いが廣く求職者にして就職難の狀態に在るものをも數へるのか。これ等はホンの一例に過ぎないが、適確に失業者數を求めやうとすると最初から色々と困難な問題に逢着するのである。

失業統計の隨分進んで居る英、獨の如き國に於ても失業者として發表せられて居るものは其の國の勞働者全部に關する失業者數では無くして、大抵其發達せる保險制度によつて失業給付を受けて居る者、竝に統制力ある勞働組合の調べによる組合員の失業者數に限られて居るのである。卽ち組合に屬せず又は保險に加入して居ない勞働者の失業者數は表はれて居ない。我國の如く未だ失業保險制度無く、又勞働組合があつてもその組合はどつちかと云へば外部に對する鬪爭方面に主力を注いで組合員自體の平素の共濟施設を殆閑却して居る狀態の國に於ては限られた部分の勞働者に付てでも正確な失業統計を得る事は餘程困難である。

以上の如き次第であるから、我國現在の失業狀況如何と云つても到底正確な數字を示すことが出來ないのである。爲し得ることは、不完全ながらも、又間接ながらも各方面よりの材料を寄せ集めて來て之によつて失業狀況の香を嗅ぎ大ザッパな推定をするより外仕方がない。

第二 大正十四年の失業統計調査

尤も我國でも大正十四年(十月一日現在で)に一度國費を投じて失業統計調査が行はれたことがあつた。これは全國主要工業都市二十一ケ所竝夕張、足尾、大牟田の主要鑛山所在地三ケ所竝其の隣接地域に付き、國勢調査と同時に一々カードを配つて失業狀況を知るに足る事項を記入申告せしめたのであつた。故にこの調査は比較的正確なものと云ふことが出來る。否今日迄の所、我國に於ける失業狀況に關する正確なる資料と云へば是れしか無い。

我國現在の失業狀況を述ぶるのに今更古臭い大正十四年の調べを引き出すのも氣が利かぬ次第ではあるけれども、上にも述べた如くこれが我國唯一のオーセンチックな調査であるのと、後に述ぶる地方長官の失業狀況推定月報もこの調査を基準とし、その調査報告であるしするから、茲に其の調査の結果を概言するのも無意味なことでは無からうと思ふ。

(イ)被調査者の範圍

被調査者を大別して給料生活者、一般勞働者及び日傭勞働者の三とし、給料生活者に關しては月收貳百圓以上の者は之を除外し、又勞働者は凡そ雇傭關係の下にある賃銀勞働者に付其の失業竝有業狀態を調査したのであるから、學生其他の無業者、雇主、自營業者等は除外されて居る。尙調査の便宜上藝娼妓、酌婦、仲居等及外國人を調査の外に置いて居る。又この調査で失業者とは、曾て勞働者又は給料生活者であつた者で就業の能力及意思を有するに拘らず就業の機會を得ない狀態に在る者を謂ふのであるから、預齡衰弱者や疾病不具等の爲就業に適しない者又は任意に基く不就業者竝收入其他の勞働條件等に於て不滿を感じて居ても兎も角就業の機會を得て居る者の如きは之を失業者の中に入れて居ない。

(ロ)調査の結果

調査人口二百三十五萬五千十五人中失業者の數は十万五千六百十二人で其の失業率は四・四八%を示して居る、其の內譯を示せば左の通り

種別	調査人口	失業者數	失業率
給料生活者	六一五、三三一人	一九、三九六人	三、一五%
一般勞働者	一、五三三、四五三	四八、二〇八	三、〇二%
日傭勞働者	二〇八、二五一	三九、〇〇八	一九、三八%
計	二、三五九、〇三五	一〇五、六一二	四、四八%

然して失業者總數に於て最も多數を占めたのは東京市及其附近で四萬人に近く之に亞いで大阪市(二萬人近し)横濱市(九千餘人)神戶市(八千餘人)名古屋市(約五千人)京都市及其附近(三千餘人)といふ順であつた。尙上記六大都市關係の失業者數は總數の七割八分に當つて居る。

給料生活者の失業者數に付ては東京市及其附近が第一位で八千人に近く之に亞いで大阪(三千五百餘人)神戶(千五百餘人)横濱(千餘人)といふ順で名古屋、京都等は千人に足らぬ少數である。

一般勞働者の失業者數の最も多いのは矢張り東京及其の附近で一萬四千人を超過し大阪(一萬六百餘人)横濱(四千五百餘人)神戶(三千五百

入近く)名古屋(千七百人)之に亞ぎ京都は吳、長崎、廣島等の下位に在る。

日傭勞働者の失業者數に關しても最も多いのは東京及其附近の約一萬七千人、之に亞いで大阪(四千二百人)横濱(三千四百餘人)神戶(三千百餘人)名古屋(二千六百人)の順で京都は八幡の次位に在る。

第三　昭和四年九月以降の失業推定月報

上述の調査は比較的正確なものではあるけれども既に五年餘の過去のものであり、又全國的のものでも無いからどうも我國現下の失業狀況を察知する資料としては不適當なものである。そこで内務省の社會局では大正十四年以降毎年夏から秋にかけて諸種の資料に付て六大都市に於ける冬期の失業狀況を推定するに努め、以て冬季失業救濟事業計畫樹立の參考に資し又中央職業紹介事務局は昭和二年末及昭和三年末現在を以て全國主要都市(昭和二年は七十三ケ所、昭和三年は七十九ケ所)に於ける職業紹介所をして關係都市の失業狀況を推定報告させたりしたが、今日から見れば孰れも事舊聞に屬し其の上部分的且つ不正確なものであるから茲には敢てこれを示すまい。以下に於ては社會局長官より全國地方長官に通牒して昨年九月以降毎月一日現在を以て調査報告せしめて居る全國失業狀況推定月報の概要を示すこととする。

(イ)被調査者の範圍並失業者の意義等に付ては只一點を除く外全部曩に述べた大正十四年に於ける失業統計調査の例に倣ふこととした。その理由は出來る丈け兩者の間に於ける比較を見るに便せむとしたのに由る。前と異つた一點と云ふのは日傭勞働者に關する失業調査の基準である。即ち大正十四年の調査に於ては、日傭勞働者の失業なりや否やは調査期日の前日たる九月三十日の狀態に依り之を決したのであるが、今回の推定月報に於ては調査當日の失業者中過去一ケ月間に大凡その四分の三以上就職せりと認めらるるものは失業者と看做さぬこととし以て出來るだけ實狀に近からしむることとした。大正十四年の調査の際は或地方(關東方面)に於ては九月三十日が大暴風雨であつたため日傭勞働者は全部失業者として表はれ他の地方は晴天であつたためその反對の結果を得たと云ふ例があつた由である。

(ロ)調査の結果

昨年九月以降例月の失業推定狀況を示すと左表の如くである。

種別＼時期		九月一日現在	十月一日現在	十一月一日現在	十二月一日現在	一月一日現在	二月一日現在
給料生活者	調査人口	一、五七二、三三九人	一、五九九、七一七人	一、六〇〇、〇九〇人	一、六四三、八七三人	一、六三五、七四〇人	一、六五一、〇五三人
	失業者數	五九、一五八	六二、五五〇	六一、八〇八	六三、四二〇	六五、八三六	六六、九六八
	失業率	三、七六%	三、九一%	三、八六%	三、八六%	四、〇二%	四、〇六%

	日傭勞働者			一般勞働者			合計		
	調査人口	失業者數	失業率	調査人口	失業者數	失業率	調査人口	失業者數	失業率
	一、五二一、二九一人	九六、二六九	六、三七%	三、五一六、二六八人	一二三、一六三	三、三二%	六、五九九、七七八人	二六八、五九〇	四、〇七%
	一、五三三、三七四人	一〇七、六二三	七、〇六%	三、五〇二、七四四人	一三三、一五三	三、三六%	六、七四七、九八七人	二九二、三三四	四、三三%
	一、五六八、三二三人	一二四、七四一	七、三三%	三、七一六、九八四人	一三三、六四六	三、三二%	六、八八五、四〇六人	三〇〇、一九五	四、三六%
	一、五七四、六九九人	一二〇、七五九	七、六七%	三、七一三、三六五人	一三二、一〇〇	三、五二%	六、九四一、九三七人	三一五、一六九	四、五四%
	一、六二八、〇四七人	一二八、七九六	七、九一%	三、六四七、五六一人	一四五、八五六	四、〇〇%	六、九一二、三四八人	三四〇、四八八	四、九三%
	一、六五三、七二三人	一三一、一九四	七、九三%	三、七一六、五〇七人	一五二、二二三	四、一〇%	七、〇二二、三二二人	三五〇、三七二	四、九九%

右の調に就て調査人口並失業狀況を都市に於けるものと全國に於けるものとを比較して見ると二月分は左表の如くなつて居る。

種別	調査人口 全國	調査人口 市並隣接地	調査人口 右ノ割合	失業者 全國	失業者 市並隣接地	失業者 右ノ割合	失業率 全國	失業率 市並隣接地
給料生活者	一、六五二、〇九二人	九九二、一二六	六〇%	六六、九六六人	五六、二二一	八四%	四、〇六%	五、六六
日傭勞働者	一、六五三、七二三人	五四一、九一七	三三%	一三一、一九四人	八八、三〇六	六六%	七、九三%	一五、九三
一般勞働者	三、七一六、五〇七人	二、一七四、八二三	五九%	一五二、二二三人	一一一、八三一	七三%	四、一〇%	五、一四
計	七、〇二二、三二二人	三、七〇九、九六六	五三%	三五〇、三七二人	二五四、三四八	七三%	四、九九%	六、八六

尚六大都市關係の分（二月分）を都市別に示すと左表の通り。

種別		東京	大阪	横濱	名古屋	神戸	京都	全國
給料生活者	失業者數	二〇、〇五三人	五、三二〇	二、一五八	一、四三九	一、三六六	一、一六四	六六、九六六
	失業率	七、一%	三、七	六、一	三、一	四、六	三、〇	四、〇六
日傭勞働者	失業者數	二七、一五七人	六、一七〇	七、七三三	八、〇六〇	二、七九三	二、五六八	一三一、一九四
	失業率	一五、三%	一七、三	四三、三	二五、三	三、九	一八、三	七、九三
一般勞働者	失業者數	三八、八七五人	一五、六二〇	五、九六二	一、六一七	四、一二五	二、三八九	一五二、二二三
	失業率	六、八%	四、二	七、一	一、七	三、五	二、五	四、一〇
計	失業者數	八六、〇八五人	二七、〇三〇	一五、八四二	一一、一一六	八、二八四	六、一一七	三五〇、三七二
	失業率	九、四%	四、九	二、五	六、四	五、一	四、一	四、九九

（ハ）調査の結果に對する批判

以上の調査は單なる推定であるから之を以て我國の失業狀況を適確に表はすものと云へないことは勿論である。推定並調査方法共に各地方長官の隨意になつて居るし、本來この調査のために特別の費用、特別の人手を充てるといふ仕組みになつて居らぬから極めて大ザッパな、文字通りの「推定」に過ぎないものである。然し乍ら之を以て全國に於ける失業狀況の輪廓を髣髴せしむることが出來るかと思ふ。

一體失業調査は始めにも述べたやうに絕對的正確を期することは如何に制度が整つて居る國でも先づ不可能の事である。又如何に正確な調査でも一度切りのものでは役に立たぬものである。不完全なものでも同じ基準のもとに繼續的に調査して前後相比較し、所謂失業の波の高低を觀ることは極めて有益且つ必要な事である。故に地方長官による失業推定月報はたとへ杜撰であつても粗漏であつても今後も引繼いて調進せらるることであらう。

それから、失業率に就て見るに、每月失業の度合が深刻になつて行きつゝある狀況が窺はれる。二月一日現在までの調査の時分には、六大都市關係公共團體その他失業者特に多き地方と目されて居る川崎、堺及び福岡縣の諸都市に於ける失業救濟事業が未だ充分に其威力を發揮する程に工程が進んで居ないから失業者數は增加する一方の形勢を示して居るが、今後三月四月と救濟事業が進步するにつれて其の事業に對する勞働者の收容力だけ（一日平均約二萬人）失業の緩和に役立つ筈ではあるけれども一方不景氣が相當に深刻であるのと復興事業の完成等によつて新しく失業者を出す形勢があるから果して眼に見えた結果を示すや否や聊か疑はるる次第である。

次に我國の失業狀況と外國のそれとを比較して見るに素より調査の基礎も方法も異るから比較しやうとすること自體が無理かは知らぬが兎も角英國の如きは最近の失業者數が百五十四萬人と稱せられ（一九三〇年三月五日タイムス一九二九年に於ける）失業平均率は一〇・五%の高率を示し、獨逸の如きは時には二十パーセントを超ゆる高率で失業給付を受くる者二百五十萬人に接近した。此等に比べると我國の失業者數及失業率はお話にならぬ程少く且つ低いものであり、其他の歐洲諸國の失業率を見ても我國の如く、五パーセント足らずで止つて居る國は非常に少いから、失業問題の喧しく論ぜられる今日でも我國の失業狀態を他國と比ぶれば極めて輕いものであると論斷する人無きにしも非ずと思はるるが、之に關しては、我國に於ては（イ）失業保險の制度が無いこと、（ロ）能力に相應せぬずつと低い賃銀でも兎も角何かの仕事に就て居ればそれを失業者と看做さぬ立前になつて居ること、（ハ）失業者が比較的容易に歸農すること、（ニ）家族制度のため親戚等に頼つて生活すること、（ホ）失業者なりと名乘つて出ることを恥づる心持が彼國よりも強いと見らるること等が彼此れ相俟つて外國に於けるよりは失業者數の表はれ方が少い事情があることを忘れてはならぬ。

若し夫れたとへ失業者の中に數へられて居なくても年々蓄積して今や相當多數に上つて居ると思はるる、學校卒業生の未就職者並に近時不景氣の深刻なるに伴れて各所に頻發する中小自營業者の破産、廢業

事が最害なる意味に於ける失業者に劣らぬ否或意味から云へばより以上重要なる社會問題として我等の關心すべき對象となつて居ることは多言を要せぬことであらう。

第四　工場、鑛山勞働者の解雇並雇入狀況

内務省社會局が全國地方長官より報告せしめて居る工場（工場法適用工場中常時職工五十人以上使用するもの）及鑛山（常時鑛夫五十人以上使用するもの）勞働者の解雇並雇入並被解雇者の歸趨狀況調は亦我國勞働者の失業狀況を觀察する間接の材料として興味あるものと思ふから比較的近年の數字を表示しやう。鑛山の方が目立つて不況である事が察知せられる。

（甲）工場勞働者に關する調

第一表　解雇雇入狀況

年別	解雇數	雇入數	勞働者年末現在數	年末工場數
昭和二年	六八四、五六八人	六八八、二三四人	一、七一一、〇二二人	七、八〇七
昭和三年	六五五、〇九六	六七九、八一五	一、一九五、七七五	八、一三三
昭和四年	六七一、九六三	六九五、八四四	一、二二五、一八四	八、八四一

（註）解雇者の中には毎年十二月に十八万乃至二十万人ある解雇者中の主要部分を占むる製糸女工を含む、雇入數に就ても毎年二月前後に工場に入る多數の同女工を含むで居る。

第二表　被解雇者歸趨調

年別	同種工業ニ轉職	他種工業ニ轉職	歸農	其他	未就業者	不詳	計
昭和二年	一二五、〇八一	八三、九六四人	二四七、〇四五人	七四、一八三人	一〇三、七八〇人	五〇、五一五人	六八四、五六八人
昭和三年	一三三、〇六六	五〇、九一三	二二九、三二四	一〇七、四六九	六五、一三三	五九、四五六	六五五、〇九六
昭和四年	一二五、一四四	五〇、五二九	二六三、八九〇	八一、九〇六	七八、九四三	八三、四四四	六七一、九六三
歩合	一七%	八%	三九%	一二%	一一%	一二%	一〇〇%

（註）歸農者の中の主要部分は製糸女工である。

（乙）鑛山勞働者に關する調

第一表　解雇雇入狀況

年別	解雇	雇入	年末現在數	年末鑛山數
昭和二年	二二八、〇三〇人	二二五、三〇七人	二六八、六七五人	三四八
昭和三年	二〇〇、〇六七	一九三、三七八	二八〇、六九一	三一三
昭和四年	一九二、八四八	一七九、八四八	二六七、四七三	二九五

第二表　被解雇者歸趨調

年別	同種鑛山ニ轉職	他種鑛山ニ轉職	歸農	其他	未就業者	不詳	計
昭和二年	九三、一八六	一、八六七	三〇、一三五	一六、九一一	一〇、八六〇	五五、〇三七	二〇四、一六七
昭和三年	九〇、七七七	二、一〇四	三〇、七四九	一五、八七六	九、九九七	五〇、三〇八	一九九、九九五
昭和四年	八六、一四四	一、一七三	一九、四八一	一八、三四三	一一、八〇〇	四五、三二〇	一九二、一五〇
歩合	四四%	一%	一三%	一〇%	六%	二四%	一〇〇%

因みに昭和四年中に於て業務を廢止し又は休止して个職工を解雇したる工場數は六六六、職工數は六八、六一〇人で新設又は業務の復舊により新に職工を雇入れたるもの工場數六八四、職工數五三、〇三〇人と報ぜられて居る。

第五　勞働市場に表はれたる失業狀況

紙數に制限を受けて居るので一々數字を示すことを略して極めて簡單に大體の傾向を記すこととする。槪言すれば、大凡左の傾向を見られる。

(イ)求人者に對する求職者の率は段々に高くなり、是れに反して求職者に對する就職者の率は段々低くなる。即ち就職難の狀況は日々深刻となつて居る。而してこの狀況は給料生活者の紹介に於て殊に甚しいが日傭勞働者に於ては例年に比して昭和四年度の失業救濟事業が大規模に行はれて居るので紹介成績もよい方である。

(ロ)女子、少年等の低廉賃銀の勞働者に對する需要と共に供給が比較的多量に表はれて居る樣である。これは不景氣の深刻さを示せるものと思はれる。それから、求職者の態度が格段に眞劍になつて來た樣である。

(ハ)製絲並紡績女工に對しては從來募集費や前貸金等と使用主側の負擔が多く募集難に苦む狀況であつたのが最近は募集費が大に輕減されたのみならず、募集難が逆に就職難となり相な形勢さへ見える。農村女工の結婚率が大に增えたとか、紡績女工の移動率が減つて來たといふ樣な聲をよく聞く樣になつた。

第六　社會生活に表はれたる諸相

失業並就職難が種々の凄慘陰鬱なる形をとつて社會生活に表はれて居ることは日々の新聞によつて讀者諸君の熟知して居らるゝ所、敢て此所に列べ立てる必要もあるまい。自分が仕事の關係上承知して居る職業紹介所や失業救濟事業に關連して表はれて來る事例の一二を擧げて見れば、東京の或紹介所へは最近求職者の辨當の喰ひ殘りや煙草の吸殼をアテに集り來る所謂有識者の一群を見ること、東京、大阪、神戶、橫濱等で行つた小額給料生活者に對する授職事業に集つて來た人の內には三度の食事をロクに喰はぬ人、電車賃が拂へぬため數里の道を徒步で往復した等といふ例が多い。又ある授職現場ではマントや帽子の盜みが最近頻々と行はるゝに至つた等と。

第七　結語

要するに失業者數は正確に分つて居ない。而し諸方面の材料から推して日々深刻且廣汎になりつゝある事は事實である。然れば失業對策も大正十四年以來行ひ來つた六大都市に於ける冬期失業救濟事業だけでは安心出來なくなつた。現內閣になつてから失業救濟事業施行の時期、地域、事業種類、救濟對象等が擴張せられ且つ事業調節委員會の如き機關も設けらるゝこととなつた。而し希望にもつと〱根本的に、綜合的に且つ廣範圍に（所謂失業者に對する問題と局限せずに）失業問題を取扱はなければならぬといふ勢になつて居ると感じて居る。

現内閣の失業對策批判

阿部賢一

失業問題はやがて内閣の命取りとなるだらう、と云ふ人もある。失業と云へば最近までわが國では個人の怠惰とか不運とかに片付られた問題だ。その救濟にしたところが、農村における家族制度の懷に歸れば簡單に消へ失せる代物だと多寡をくゝられた問題だ。又机上の論議には持つて來いの遊戯物件でもあつた問題だ。それが今や民衆の胃の腑の問題となり、社會的責任の問題とす。否、命取りの大きな癌となりつゝある。そして失業の性質と分量が異常なるものとなり、又現に著しくなりつゝあつて、とても既成政黨や内閣の辣腕を以てしてはその解決などゝ云ふことは覺束ないものとなつて來た。

失業者數の激増は世界的現象ではある。英米獨佛がをの〱百萬、二百萬、三百萬の失業群を固定的に有してゐて、去る三月六日各首府における「饑飢と失業に對する抗議」を旗印とした民衆の示威運動があつた事などは、われ等の記憶にあること新である。それに累加する失業群をどうしてよいのかよい智慧は出ず、途方にくれてゐるのが各國政府の眞相であると云へる。勞農露國においても原因はちがつてゐるとは云へ百七十萬の失業者が最近あると傳へられてゐる。それで、失業問題解決の方法が見當らないことは、世界並の事であつて、自己の無爲無策を暴露するものでないと、自から辯護したがつてゐる政府當局の人々の顏が浮ぶやうだ。

× × ×

濱口内閣は今迄のどの内閣よりも失業問題について心配してゐる。これは事實だ。それはその聰明の故であるよりも問題そのものが、捨てゝをけなくなつたからだ。内閣の命とりよりか、もつと深刻だからである。

失業者數については正確な數字はない。昨年九月政府は全國に亙る六百六十萬の調査人口の中二十六萬八千の失業者を得た。その後毎月の調査によれば十二月には三十一萬に達し、失業は四分から四分五厘に上つた。そして同じ時期における給料生活者失業數は六萬二千と示された。無論これ等の統計は最低限であつて事實は餘程多い筈である。しかしその後の財界不況、金解禁の影響、事業の不振によつて工場の閉止や操短やら、小商工業の行詰り、さては今春學校出の就職難やらで、どれ

位の失業者が市に溢れてゐるだらう。正確には無論判らないが、今國に互つて百萬の數に上るであらうと云ふ推定は間違つてゐないであらうと思ふ。更に農村の不況は都會ほど露骨に失業者を出さないやうに見へはするもの丶、「この狹い所に五百五十萬戸からの農家が生活してゆくと云ふのであるから、中々容易ではない。資本化され營利化され、いはゆる合理化されたなら三分の二の失業者が出來て國家はどうにもならなくなる……」と云ふ石黒農務局長の談は農村の機構についてわれ〳〵を首肯せしむるものがある。米と繭が暴落し、僅かに副業の奬勵によつてでも急場を凌がねば、どうにもかうにもならぬと云ふ實情だ。

是において現下の失業はわが國に未曾有だ。質においては如何だらう。わが國の失業も急速度に謂ゆる先進國と同じやうな性質を帶びて來た。それは一は百萬に近い失業者數が固定的の存在となつたこと、しかも二つには失業は一國の生産増加と併行して増加する傾向の著しくなりつ丶あることである。資本主義的經濟は、それが帝國主義的戰爭の成功か若くは國の内外における市場の累進的擴大を伴はざる限りは、失業者數を増加するに定つてゐる。それは固定資本の擴張に伴ふ産業豫備軍の無制限的産出である。産業合理化と云ひ、機械の利用と云ひ、能率の増進と云ひ、企業が採算的理性の鞭撻を受ければ受けるほど勞働は無用になる。實例は擧げるまでもなく無數だ。

かやうに量と質において、わが國においては眞に未開の失業だ。それに外國ではあまり八釜しくないインテリゲンチアの失業者が多い。一向こう云ふ方面に先進的洞察力を持合せなかつた内閣が手も足も出ないらしいのは尤もだが、一體どう云ふ方策を以て失業群の波を防止し又救濟せんとしつ丶あるのであるか。

失業に對して政府當局が考慮せるものと考へられるのは(一)失業防止に關する方針。(二)失業に對する應急策の二つに別けて觀察し得るやうである。第一の失業防止については

(一)職業供給量の増進――國家的産業の選擇樹立、國産の奬勵保護、發明の奬勵、能率の増進、職業教育の普及改善

(二)職業供給量の減少防止

これには輸出補償其他事業損失補償制度、物價金融の調節及び統制、公共事業の繰延と繰上げ、授産及び小資融通。

(三)人と職業との結合の圓滑、敏速、適正、周到を期すること。そしてその内容としては公益無料の職業紹介制度の普及發達、紹介所の專門化、紹介所の活動範圍擴張、紹介所職員の向上。

(四)人の地域的産業的分配を適正ならしむること。

それには都市集中の防止、工業の地方分布、失業救濟事業の普遍化、國外移住の適正を得ること――北海道樺太への移住奬勵、渡航鮮人に關する方策の樹立など――

以上は失業防止について内務省社會局から社會政策審議會に對して參考の爲に提出したものとして報道されたものである。これによつて政府思想の一片を見得るであらう。たゞし、それにしてもその個々のも

のについて如何なる見識と計畫があるのであるかは皆目判らない。例へば國產品の奬勵、甚だ結構ではあるが、例へばわが鐵道省の調査では國產品を使ふにも購買品の十分一にも當らぬそうだ。それはホンの一例にすぎない。無理やり買へば安物買の錢失ひとなる。で、國產奬勵は事によれば關稅率の引上運動を起して少數資本家を利するに終るだらう。發明の奬勵と云ふのも結構、だがその爲に政府はどれだけの工夫をなし得たか。劃一主義の詰込教育、それから直してかゝる必要がある。

政府が應急策として如何なる方法を考へてゐるかについて觀よう。同じく內務省社會局が提出した參考資料である。

(一)授職事業

失業救濟事業の施行、再教育、授產、小資融通

(二)失業緩和

勞働時間の短縮、解雇の豫告等

(三)金品給與

保險制度の確立、共濟組合の普及發達、解雇手當の慣行助長。

(四)知識階級應急策

この謂ゆる有識無產の失業者に對して如何なる方法を政府が有するか——これは何人も聞かんと欲するところであるが——曰く、「現下我國の思想問題、社會問題に重要なる關係を有せる知識階級の失業者に對してはほとんど爲すところなきは遺憾であるを以て、これが專門職業紹介所の增設、再教育および授產施設——例へば謄寫、筆寫、計算、圖書整理、製圖、製本、タイプライター等の授職施設を公費により、又必要に應じて國庫補助によつて行ふなど——海外渡航の應急施設を講ずる必要を認む——と云ふのである。心細からざるを得ない次第だ。

以上がざつと現內閣が失業に對する應急の策としてとなへてゐる諸點である。しかし、その中勞働時間の短縮とか、雇主をして解雇を差控へしめるとかその豫告を前以て與へるとか、これ等は政府の權力を以て強行し得るものではない。大企業は財界不況の對策として從來の合理化に拍車をかけて精出してゐるし、中小企業も自己擁護の爲に失業緩和に耳を藉さう筈はない。金品給與にしても云ふは易いが、何等の施設のない今日、多くを求めることは出來ない有樣だ。失業保險制度にしてもそうだ。神戶市は既に之を實行し、東京市も昨年十二月一日から市社會局內に東京市勞務者共濟會を組織し、疾病保險と失業保險を同時に實施することゝなつた。しかし、諸外國で見るやうな國家の失業保險は將來の問題であるが、實施の光明を見る迄にも至らない。勞働者と雇主と國家と三者の負擔によつて一定失業期間生存を保證するのが、失業保險の通念であるが、わが國においては失業の社會的意識が徹底せぬため——失業を個人的責任であるとなす考が強い爲か、國庫に財源がないと云ふか——眞劍に考へられてゐない。

知識階級の失業及び就職難について、政府に何等の策がないことは政府自から告白してゐること、さきに說いた通りである。比較は當らぬか

も知れないが、有識無業者は封建社會の浪人だ。浪人は無力だ。が、又ある點では有力だ。刀を持たぬ浪人は、水迫るを自覺しつゝ社會の動向を最も鋭敏に見通すのである。世界戰爭前には高等遊民と云ふ名稱で知られたものだが、遊民でなくて焦る民となりつゝある。職業紹介所も重役の引きも知識失業を解消せしむるにはあまりに微弱である。こゝにわが國失業問題の一特殊性がある。

× × ×

勞働者階級の失業對策として最も信頼せられてゐるものは土木事業である。算盤勘定に合ふ事業や、儲かる仕事はもう漁り盡されてゐる。それで營利の目的からでなしに、恒久的利益若くは便利になる事業を起して失業者を吸收しようと云ふのである。外國でも無論その都度‥‥利用せられる方法であつて、わが國の失業問題が本物になるにつけて思ひ當るのは當り前の事である。

云ふ迄もなく現内閣は、國家財政も地方財政も緊縮節約の立前であると宣傳し、更に金解禁後の對策としても公私經濟の節約を喧ましく叫んだ。無論それには色々の下心があつた譯でもあらうが、薬が私經濟の緊縮には多少利きすぎた嫌ひがある。財界は、世界各國の不況、それにわが國經濟組織の弱點、夫に金解禁の實行によつて、一段と深刻になつて來てゐたのである。こゝに發した多量の失業に對して、昨年末より政府は緊縮の看板は面目の上から卸さないが、次の方針によつて失業緩和の投資を試たのである。

(一)道府縣市町村は失業問題解決の爲には主務官廳の許可を受けて失業救濟事業を營むことを得る。

(二)失業救濟事業の勞力費は總工事費の三分の一以上なることを要する。

(三)失業救濟事業には勞銀の半額を國庫より補給する。

(四)失業救濟事業には起債を認める。

失業救濟事業と云へば主として都市の水道、道路、河港、下水道等に關係する事業であつて、こゝ數年間相當の金額をこの方面に使用してゐた事はゐた。東京、京都、大阪、神奈川縣、横濱、神戸、名古屋の一縣六大都市において、大正十四年以來昭和三年までの四年間に一千四百五十萬圓餘を支出し、國庫補助費だけで三百三四十萬圓の支出をなした。そしてその金額によつて使用勞働者延人員は技術者及び日傭を加へて五百十餘萬人を使用した。一日平均就業人員數は昭和三年には四千八百七十五人であり、一人一日平均賃銀は、同年において一圓七十錢であつた。

而して今年においては失業救濟事業の認可の嚴正は之を緩和してゐる。そして本年三月十七日新聞紙上に報道されたものは次の通りである。失業救濟事業として地方の申請に基き既に許可されたもの並に許可の手續中のものを合して二千四百五十八萬六千圓、勞力費八百二十四萬一千圓、國庫補助百七十三萬九千圓であつて、勞働者延人員四百四十

一萬一千人と計上されてゐる。そしてその實行の爲には社會政策審議會の答申に基いて出來上つた事業調節委員會があり、內相を委員長とする中央委員會の外に東京、神奈川、愛知、大阪、京都、兵庫、福岡の七府縣に地方委員會が設けられてゐる。今序に失業救濟事業の內譯を見れば次の如くである。(單位千圓、千人)

一般勞働者救濟事業

	事業費	勞力費	勞働者延人員
(一)起債事業			
四年度	八、一四五	二、四六八	一、二八一
五年度	八、〇三〇	二、三六四	一、二二二
計	一六、一七六	四、八三三	二、五〇四
(二)國庫補助事業			
四年度	六、六五八	二、七〇七	一、五〇〇
五年度	一、四四一	四九六	二七八
計	八、一〇〇	三、二〇三	一、七七九

小額給料生活者授職事業

四年度	三〇九	二〇五	一二七

以上の數字は大體定つたものと云へるであらう。この計數は從來のものと比較すれば、規模がやゝ大なることは云ふを俟たない。で、この四年度及び五年度において起債せられる事業が、どれだけの失業者數を消化するかと云へば、起債事業と國庫補助事業を合してその使用延人員數は四百四十一萬人になる。四年度だけでは二百八十一萬〇八千人である。だが、之は云ふまでもなく延人員である。

今失業者の失業前の職業や技能や適性やその他の個々の條件を全然無視して考察すれば、この二百十八萬人は全國に亘つて一日の勞働者雇傭高は七萬七八千人を出でないであらう。かやうに考へれば事業調節委員會の事務が圓滑に運ぶとして、失業救濟事業が消化し得る勞働者の失業者數に對する割合は極めて僅かである。だが、無きには勝る。在ることはそれだけの效能があるに相違ない。しかし失業救濟事業によつて失業大波に當らんとするは、昔流に云へば龍車に刄向ふ蟷螂の斧である。しかもこれ等の事業は主として土木であるから工場勞働者や特殊技能者や、たゞしは壯年以上の失業者は、偶々の就職機會さへ見舞はれること更に望み少なき狀態となるであらう。この失業救濟の爲に起る土木事業は一方英國においては人も知る通り自由黨の有名なる失業救濟策とさへなつてゐるが、他方獨逸においては出費の割合に失業者の極めて少數のみがその便宜を受けるに止まるに鑑みて一時の信用を失つてゐる狀態である。

併しながら、それだけの效能はあるものと觀ねばならぬ。それだけでよく、物怯えした現內閣はその方針に更に一歩を進めて昭和五年度においては道府縣市町村をして道路、港灣、河川の改修、上下水道の築造その

他生産事業の起興を勧め、その財源を公債に求むるものに對しては起債額一億五千萬圓を限度として之を認むる事に決定したと傳へられてゐる。それだけの金額を以て地方公共團體に對して政府がさきに強制的に慫慂した地方財政の緊縮の全部的還元に終ること〻なる譯であるが、政府は恐らく事實において緊縮の看板を下して地方物資の生産交換の疏通を考へ、かねて失業防止と救濟に資するの止むを得ざるに立入つたのであらう。目先の利いた巧智の政治意識をわれ〱は其處に見出すのである。たゞしわれ〱は失業救濟事業の爲に起した地方債の元利償還の資金が、やがて地方民の租税負擔となることを豫測し得る。中央政府及び地方當局はこの點に關しては如何なる成算があるのであらう。

× × ×

現内閣が失業者数の激増を見て、心中甚だ安からざるものあるは明白であり、その對策らしく何物かを見出す爲に焦慮しつ〻あることも判る。それにも拘はらず、失業に對する恒久策として失業保險制度等について眞劍にどれだけ考慮してゐるか、其だわれ〱は疑ふのである。

必ずしも外國の模倣をする必要はないのみならず、失業保險は個人的慈善ではないのであるから、意思と體力を兼ね備へた勞働を必要に應じて最も有用に發揮せしむるの方法も考案せらるべきであると思ふ。その爲には國庫の負擔も已むを得ぬ。そして國庫の負擔とは取りも直さず、社會的に死藏せられ濫用せられ〻ある遊金に、その負擔を歸すべきであることは無論であり、その爲には税制改革を必要とする。たゞし資本家的内閣に之を望むことの無理であることは明白と云へば、餘りに明白であらう。

失業の應急策として政府の企つるところは土木事業を中心とし、それに職業補導とか再教育とか、勞働紹介所の助力とか、歸農とか、農村副業の奬勵とか、小資金融通とかの一連の甚だ有力ならざる後援隊によつて目前の急に當り、以て景氣の回復――それは何時であるか誰しも豫言は出來ぬが――を指を啣へて待たうと云ふのである。現内閣が公私經濟緊縮の看板を口實さへつけば卸したい事は見へすいてゐるが、それを敢てせしむる迫力の一つは失業問題の脅威だ。

目前の失業難は一歩立入つて考へれば、わが國社會經濟の進退谷まる窮極點にその急所を見出すのである。豈たゞに内閣の命取りの問題とのみと云はうや。

失業の本質究明

野呂榮太郎

一　資本主義と失業

失業問題は、今や、單なる經濟問題たるに止まらず、實に、緊急にして重大なる政治問題たるに至つた。失業問題が、今日特に、政治的重要性を獲得するに至つたのは、就中、それが、今や、資本主義全體制の一般的危機の急速なる深刻化を背景にもつて發展してゐるからである。

失業そのものは何も今日に始つた問題ではない。產業豫備軍たる失業者群の存在は、實に、資本主義の發生、存續、發展のための不可缺の條件であり、必然的の所產である。資本主義は、その發展の過程において不斷に增大する失業者群を所謂產業豫備軍として作り出すばかりでなく、その發達の出發點において既に巨大なる失職者層の存在を前提としてゐた。

資本主義も、他人の勞働力搾取をその存續の基礎としてゐる點においては、奴隷制度や封建制度と異なる所がない。異なる所はたゞその搾取の形態である。資本家的搾取の對象となる所の人間勞働力は、奴隷や農奴の如き不自由民のそれでなくして、一應は自分自身の主人として人格的に獨立してゐる所謂自由民のそれである。從つて、資本が、この自由人格者の勞働力を搾取する機會を見出し得るのは、たゞ、彼等が、同時に、一切の生產手段と生產資料とからも亦「自由」にせられてゐる時、即ち彼等がマルクスの所謂「二重の意味において自由なる勞働者」たる場合だけである。かゝる「二重の意味において自由なる勞働者」の存在するに所において始めて、資本はその本來の——剩餘價値を搾取する價値としての——機能を開始することが出來る。それ故に、農民を土地から、手工業者をその勞働要具から引き離し、彼等を無一物の失職者として勞働市場に抛り出す所謂資本の原始的蓄積の過程こそは、資本の歷史的出發點である。かくして、資本主義は、失職者の巨大なる層の發生と共に誕生する。

併し乍ら、資本主義發達の前提條件たる所謂資本の原始的蓄積過程において作り出される失職者層は、それ自體として見る限り、資本主

義の上向的發展過程においては、原則上、一時的であり、經濟的である。かゝる失業者層が資本主義の問題となるのは、資本主義の發展過程それ自體を通じて——資本の蓄積條件そのもの裡から——不斷に作り出される産業豫備軍との關係においてゞあり、殊に、後者が慢性的症狀を呈するに至れる秋においてゞある。而も資本主義がかゝる時機にまで成熟するや、資本の原始的蓄積は、資本家による資本家の收奪との特種の結びつきにおいて再び強行せられることゝなり、從つてそれ等の收奪過程から生ずる失職者の巨大なる層は、資本家的蓄積過程そのものから生ずる失業者の彪大なる群と共に、特殊の重要性を獲得することになる。今日の世界的失業問題の重大性は、主としてこゝにある。

資本主義は人民の益々多數をプロレタリア化し、かくして一方、益々多くの不拂餘剩勞働を搾取すると共に、他方、その餘剩價値を實現すべき市場（就中國內市場）を擴大することなしには、餘剩價値を搾取する價値としての資本の自己目的を滿足させ、その間斷なき蓄積を遂行することは出來ぬ。然も、資本蓄積の一般法則により資本の集積、集中の進行するに從つて、賃銀勞働者の彌々增大する部分が産業豫備軍として街頭に抛げ出される。尤も、その數には資本家的生産の無秩序に基く所謂景氣變動の波のまに〳〵週期的な消長はあるが、併しそれは結局恐慌の波動の破局的な昂まりと共に增大する傾向をもつてゐる。資本の集積、集中は、必然的に、益々資本の有機的構成の高度化——單位資本中、工場、機械及び原料等々の不變資本部分の占める割合に對して、勞働賃銀として支拂はるべき可變資本部分の占むる割合の相對的減少——に導くからである。

資本の有機的構成の高度化による可變資本部分の相對的減少の結果は、搾取率を同一と假定すれば、それだけ、各單位資本額に對する餘剩價値は相對的に減少し、從つて利潤率は低下することになる。のみならず、産業豫備軍として資本家的生産過程の埓外に抛り出された勞働者は、何等の餘剩價値をも創り出すことがないから、失業者大衆の增大は、それだけ社會的總資本額に對する總餘剩價値の占める割合をも相對的に遞減さすことになる。利潤率の低下、それは資本主義にとつて死を意味する重大事である。

資本の集積、集中に基く資本の有機的構成の高度化が利潤率を低下さす傾向をもつてゐるといふことは、「資本獨占が、それと共にそしてその下に開花して居る所の、生産樣式の桎梏となる」（マルクス）ことを示してゐる。利潤低下の傾向に對抗してこの桎梏を脫せんとする資本家的努力は、市場獨占による獨占利潤の利得か、勞働搾取の強化による餘剩價値總額の增大かの何れかに、否その兩者に向けられざるを得ぬ。獨占利潤を實現するためには市場を獨占せねばならぬが、それが資本家間の販路協定、生産制限等によるにせよ、また少數大資本家による多數の中小資本家の收奪によるにせよ、それ等は常に失業者數を益々增大させ、結局利潤率低下の內在的傾向を激成させざるを得ない。これ等は、結局、矛盾を解決する代りに、その解決を彌々困難ならしむるものであり、謂はゞ矛盾の擴張再生産である。蓋しそれ等は

資本獨占の桎梏をより大なる資本獨占によつて解決せんとするものに外ならぬからである。

こゝにおいて、資本獨占の資本家的生産様式に對する桎梏を脱却せんとする資本家的努力は、究極において、勞働力××の強化の一點に集中せられざるを得ない。然るに、資本家的搾取は、如何なる場合にも、一定の勞働編成の下における勞資間の一定の力關係が、資本家をして可能ならしむる最大限度に到達してゐるのが普通である。從つて、賃銀の引き下げ、勞働時間の延長による不拂餘剩價値の相對的、又は絶對的増加は、所與の×××を變更することなしには、即ち勞働者の抵抗を誘發し、階級闘爭を××することなしには、不可能であるばかりでなく、經濟的、技術的にも一定の限界をもつてゐる。それ故に、不拂餘剩價値を増大せんとする獨占資本の努力は、常に賃銀引下げ、勞働時間延長にも向けられてゐるが、就中、勞働過程の再編制による勞働力搾取の強化に向けられる。人間勞働力の××を決定的に重要な目的とする勞働過程の再組織——これこそ所謂資本家的合理化の本質をなすところのものである。資本家的合理化による勞働過程の再編制は、それが資本の有機的構成高度化の内容としてなされる場合は勿論のこと、然らざる場合においても、失業者を増大さす不斷の傾向を包藏してゐる。

二　世界資本主義現時期における失業の特質とそれに對する闘爭

昨秋ニューヨークの取引所を襲つた株式混亂は、決してアメリカだけの孤立的現象ではない。程度の差こそあれ、決定的な全資本家世界に共通した現象であつた。昨年七月を一〇〇とする本年一月の株價指數をとつて見ると、アメリカは七五・四に、イギリスは九〇・六に、日本は八五・六に夫々低落してゐる。而かも、かゝる株價の低落は單なる取引所の混亂を反映するに止まるものではなくして、實に全資本家世界を包含する一般的經濟恐慌の近づきつゝある前兆である。この徴候は、既に、生産指數の低下にも、外國貿易額の減少にも表はれてゐる。(昨年七月に一二四を示したアメリカの生産指數は十二月には九九に低落して居り、本年一、二月の外國貿易額を前年同期と比較するに、アメリカは輸出において一割七分、輸入において二割を、イギリスは夫々一割一分及び八分を、日本は夫々二割及び二割八分を何れも減少してゐる)が、近づきつゝある恐慌の破局的性質は、就中、失業者の激増に見られる。

各國とも完全な失業統計をもたぬ上に各國官廳の調査は故意に過少評價されてゐる。それでも、最近數ケ月間の失業者の激増は、蔽ひ隱すことの出來ぬ顯著なる事實である。一九二六年を一〇〇とするアメリカ合衆國における製造工業勞働者指數は、十月の一〇二・三から十一月の九五・一へ、一ケ月間に七・五の低落を示してゐる。この一ケ月間の減少は、實數にして十八萬六千人に當るが、實際の失業者數が更に大なることは疑ひない。去る三月六日の「失業デー」の示威運動が米國においても共産黨指導の下に各都市に起つたに鑑み、米大統領は聲明

書を發するに至つたが、失業者數については調査中との理由で發表を避けてゐる。而も議會における政府の答辯においては約三百萬人となつてゐるが、事實は六百萬人を突破してゐると言はれてゐる。三月十七日現在のイギリス本國の失業者數は百六十二萬人にして、昨年同期に比して四十四萬人、昨年末に比して二十七萬人の增加と報ぜられてゐる。イギリスの失業者も事實は二百萬人を超えてゐるとの事である。ドイツの失業者も三百萬人を突破してゐる。日本の失業者は、社會局調査によれば、昨年十二月一日現在において三十一萬五千人（内、俸給生活者大萬三千人、日傭勞働者二十二萬人、其他の勞働者十三萬千人）と報ぜられ、同年九月に比して約五萬人の增加を示してゐる。併し、この社會局の調査は杜撰極まるものであり、且つ眞實の數の數分の一に過少評價せられてゐることは言ふまでもない。同じく社會局が昨年末に工場勞働に從事する職工の移動につき實地調査した結果によれば、十二月中における解雇職工數は解散工場四千百十三において十九萬五千三百三人を算した。他方同雇入職工數は二千七百工場において僅か二萬五千七十六人に過ぎぬから、これを差引くも十二月中における失業增加數は工場の職工だけで十七萬二百二十七人に上つたことを知るであらう。

所謂產業豫備軍としての失業者の存在は、特に今日に始まつた問題ではなくして、資本主義發生のための不可缺の前提條件であり、その發展過程における必然的所產であることは、既に見た所である。然るに失業問題が、今日特に、特殊の重要性を有する所以は、就中、大衆的失業が世界的規模において激成してゐるといふ事とその危機的性質とにおいてゞある。世界資本主義現時期の大衆的失業をして、特にかゝる重要性を獲得せしめつゝある所のものは、それが、各資本家國家の販路の相對的狹隘化と所謂資本家的合理化とを交互的要因としてゐるからである。資本家的合理化と各資本家國家の販路の相對的狹隘とを交互的要因として大衆的失業が世界的規模において激增してゐるといふことは、資本獨占が既に資本家的生產樣式の本質的××としてゐることを意味する。

帝國主義的世界大戰及び戰後の直接的××期において著しく低下せるヨーロッパの資本家的生產も、戰後資本主義第二期の相對的安定期において、漸く、その生產力を戰前の水準にまで恢復し、やがて、それを突破するにさへ至つた。而も、この間、アメリカ合衆國及び日本の資本主義が依然として上向線を辿つてゐたばかりでなく、植民地及び半植民地その他の後進國の資本主義もが漸く顯著なる發展を遂げるに至つた。生產力のかゝる發達は、資本獨占と共に又その支配の下においてのみ可能にせられたのであつたが、然も、その故にまた、資本獨占はやがて勞働の生產力發達の桎梏と轉化せざるを得なかつた。從つて、かくして增大せる勞働の社會的生產力とまたそれによつて益々增進せる資本獨占との間の矛盾の尖銳化は、資本家世界が戰後の第二期において到達せる相對的均衡を掘り返へし、それを深刻なる動搖へ、そして重大なる××へと導くべき諸契機を、急速に成長せしめるに至つた。

戰後の資本家世界がその獨占資本の支配下に見出した所の、獨占利潤實現のための典型的搾取形態は、所謂資本家的合理化によるそれであつた。それ故に、今や、資本家世界を重大なる××へと導きつゝある諸契機は、現發展時期において資本家的合理化の包藏する全矛盾の發展によつて急速に成長せしめられつゝある。資本家的合理化の包藏せる諸矛盾中最も本質的なるものは、それが資本獨占をして社會的生產力發達の桎梏たらしむる所の獨占資本家的××形態であるといふ點にある。何故なら、資本家的合理化は、最も重要なる社會的生產力たる人間勞働力を最も大規模に破壞することなしには、卽ち失業者の益ゝ巨大なる層を作り出すことなしには遂行し得ないからである。

獨占資本の支配の下に、「その爲めに人間勞働力を××することを中心的目標として爲される勞働過程の再組織の、卽ち資本家的合理化の結果もたらされる生產增加は、必ずしも、社會的生產力の發達に對應するものではない。それは、一方、多數資本家の收奪と勞働過程の再組織とを通して生產手段の少からざる部分を破壞すると共に、人民の益ゝ多數をプロレタリア化しながら、その中の相對的に彌ゝ增大する部分を失業者として生產過程の外に抛り出すことにより、從つて他方相對的に減少せる勞働者の勞働を極度に緊張せしめることによつてのみ可能にせられるからである。合理化による生產增加は、それ故に、常に、相對的に益ゝ狹隘化する國內市場と對應する傾向をもつてゐる。世界市場のための國際的競爭が帝國主義戰爭の危機を孕みつゝ尖銳化してゐるのはこの故である。アメリカにおける恐慌の深刻化は世界市場の問題を益ゝ重大化するであらう。

獨占資本をして社會的生產力發達の桎梏たらしむる資本家的合理化の強行による失業者の增大は、それだけ餘剩價値搾取の可能性を制限し、資本蓄積を困難にする。そしてこの困難が增大すればする程、一方、獨占大資本による中小資本の收奪が益ゝ強行せられ、一種の資本の原始的蓄積が強烈に進行すると共に、他方、獨占資本の海外投資圈のための促迫は益ゝ切實となる。のみならず、中小資本の收奪は、新しき農業危機を益ゝ廣汎なる範圍に亙つて深刻化してゐる。この新農業危機の深刻化は、益ゝ農民を窮乏に陷らしめ、彼等の多數をプロレタリア化し、農業生產關係そのものゝ中から厖大なる失業者群を作り出してゐる。旣にそれ自身の失業者をもつてゐる農村は、都市の失業者の最後の避難所としての彈力性を失つてしまつた。のみならず、國家と獨占資本との收奪によつて生產資本に缺乏し、土地所有によつて土地に缺乏してゐる農村から、却つて失業者の群が都市に集中する。彼等は、都市における巨大なる產業豫備軍と相俟つて、獨占資本家をして、現役の就業勞働者の勞働條件を益ゝ劣惡にし、資本家的合理化を強行することを容易ならしめてゐる。

一般的な經濟恐慌の急速に迫りつゝある危機を前に、資本家的合理化と販路の相對的狹少化とそして新しき農業危機の擾亂とによつて厖大なる失業者群が作り出されてゐる。去る三月六日、ヨーロッパ及びアメリカの主要工業都市に「失業反對」の大示威運動がコミンテルンの各國支部の××の下に捲き起され、支配階級のファッショ化せる××

××××の暴壓に對して、隨所に××の衝突をさへ見たのは偶然でない。而も、巨大なる失業者群の存在を利用して、就業勞働者の勞働條件を益々劣惡ならしめんとする資本家の攻撃に對する逆襲的ストライキは隨所に××した。經濟鬪爭の波は一九二九年度において漸く××に達し、日本においてさへ、爭議件數もその參加爭議繼續日數も、何れも從來の如何なる歳のそれ等をも凌駕した。

併し乍ら、過去一年間における經濟鬪爭の諸經驗は、失業の脅威を以つてするブルジョアジーの挑戰に對して受動的に立ち上るストライキが結局失敗するといふことを敎へた。そして、それは、また、ブルジョアジーの利益のため就業者と失業者とを分離せんとする社會ファシズムに對して强力に對抗し得る所以でないことを敎へた。今日におけるプロレタリアートの如何なる鬪爭も、失業者の要求をその鬪爭の中心的要求と有機的に結合し、就業者と失業者とが組織的に結びつくことなしには充分に强力なものたり得ない。賃銀値上げと一日七時間勞動制の要求を掲げることによつて、始めて資本家的合理化による勞働力××の强化と失業者增大とに對抗することが出來、國家及び資本家の全額負擔による全勞働者の失業保險の實施を期することによつて始めて失業の脅威をまぬかれて强力なる××を展開し、社會民主々義者の日和見的裏切りを粉碎することが出來るであらう。

新しき農業危機によつて農民の貧窮化が深刻化し、彼等の收奪が强行されてその多數がプロレタリア化して失業者の列伍に入りつゝある現時期においては、プロレタリアートの鬪爭は、眞に、その經濟鬪爭の範圍内においてさへも、農村プロレタリアートのそれと思想的にも組織的にも××することなしには、そしてまた、農村プロレタリアートとの組織的××を通して貧農及び中農と××つくことなしには充分に强力に遂行せられることは出來ない。

資本獨占の桎梏によつてその完全なる發達を阻害され、破壞されてゐる總べての社會的生産力たる人間勞働力を――就業プロレタリアのそれのみならず、失業者竝に農村のプロレタリア、準プロレタリアのそれ等をも、たゞ一つの××的階級的指導の下に××することによつてのみ、資本獨占の桎梏を××し、從つて今日の失業問題を根本的に解決し得るであらう。

女性に如何なる地位を與へてゐるか？そして正しき戀愛とは何をいふか？熱烈なる片岡氏の論文は總ての現代女性に與へられた一大光明である。

どん底生活　栗島澄子

幼時から舞臺に立ち、父秋衣と忍苦を共にした當時の涙ぐましき憶ひ出。淡い幼な戀の物語。そして、何が彼女を寂しい理智的な女性にしたかをしんみりと物語つてゐる。唯一の彼女の自傳である。

妻の犯罪　三宅やす子

頻々として起る家族心中に對して、女史は同性の立場から主として生理的に妻の生活を解剖し、彼女等に何等かの光明を與へんとしてゐる。

バー・ヒロイン物語　澤秋二

カフエ・ナショナルのお鯉の頃から、艷名を一世に謳はれた女性達が、最後にバーのクインとなるのが一の常道となつた。丹いね、波瀬淳、花柳はるみ、小林孝子、原岡佐緒、と數へ來れば限りがない程。さて、何が彼女達をさうさせたか？これは艷かしい走馬燈である。

辰馬夫人の家出　宮小路英

關西に聞えた富豪辰馬家の若夫人の駈落事件、——「戀愛に對しては三ヶ月主義よ」と常に口にする彼女が生んだ享樂生活の終局、現代上流階級の頽廢生活の斷層——。

若き女性よ田園へ還れ　吉田絃二郎

若い女たちよ、あまりに、都會中心主義の現代生活から解放されるがいゝ。若い女たちよ、田園に還れ。そして思ふ存分五月の太陽と微風に觸れるがいゝ。——都會に憧れる女性達、都會に苦しむ女たち、この一文によつて、人生を考へ直さう。

江木榮子夫人の自殺　松崎天民

前號の續篇であるが、氏の熱心なる調査によつて、未だ謎として注目の的となつてゐた夫人の自殺の眞因が、初めて明確に解かれたのである。只それだけでも充分に興味を惹かれるのに、豐かなる彼女の半生を物語る資料は悉く空前絶後のものである。

◇モダン・ママの技藝室

◇連載小説

◇料理と園藝

中央公論社

勞働大衆版（第一篇）

ゴー・ストップ

貴司山治著

江東百萬の無産者を唸らせた問題の爭議小説

・發・賣・禁・止・

近日改訂版を發行しますから暫らくお待ち願ひます。

現代のストライキといふものが、どういふ意識のもとに計畫されるか、如何なる戰術をもつて闘はれるか。さては又、世人の記憶新たな某々事件の場合の如く、見えざる糸か傳つて秘密の指令を頻發してゐた魔の正體は何物か。およそ、勞働爭議に絡まる事情の裏の裏までを殘る隈なく暴露したのがこの小説である。

銀座尾張町の交叉點に立つて、夜な夜な夕刊を賣るめくらの少女があつた。——物語は此處から始まる。しかも、この哀れな不具者の、ひたむきに純眞な戀情よりも、ブルジョアの玩弄物として黄金の上に亂舞する嬌艶妖美なモダンガールの階級意識への眼覺めの方が此の物語りでは主要な役割を占めてゐるのである。

寄る邊なき街の孤兒が、やがては勇敢な闘士となつて成長して行く過程。粗末なユニホームに身を包む市電の女車掌。彼女の身内に燃え旺る悲壯な同志愛、彈壓と追捕の網の目を潜りながら相擁して交す慌たゞしいキスの音。むせるやうなエロチシズムと息づまるやうな×××××との交錯するところ、全篇惻々切々として異常の興奮に導く迫眞力を持つてゐる。

四六並製箱入
四百二十頁
定價一圓二十錢
送料内地十二錢

東京驛前、丸ビル五階
中央公論社
振替口座東京三四番

滿鐵王國の解剖

鈴木茂三郎

一、

支那革命の父として南京の郊外に木乃伊のやうな骸を奉安されてゐる孫逸仙は、革命旗を上海にすゝめたとき、述懐めいた口調で語つたことがある。

「日本人のうちで自分の心服して已まぬ人が二人ある。一人は頭山滿翁で、他の一人は犬塚信太郎氏である。自分は犬塚氏とは面識がない。しかし日本の多くのブルジョアは、あなたが支那統一の旗を中央に樹てたならば、あそこの、又此所の利權を與れと言つて運動費を寄附して來たが、滿鐵理事だつた犬塚氏は一諾・無條件で五十萬圓を私の使ひのものに與へた。

我々は、その資金で廣東に立てこもつて革命の力を養つたのである。從つて自分は滿鐵に對しては爾來、犬塚氏の厚意を感じてゐる」

孫文をして心服せしめた犬塚信太郎とは何ものか。犬塚は滿鐵を辭してから失意のうちに病ひで殪れたが、彼は卅才の若冠で後藤新平の鼻眼鏡に見出されて滿鐵理事の職についた。

初代の滿鐵總裁後藤の遺制をよくまもつた次ぎの總裁中村是公が、大正二年十二月十九日一本の通電で總裁を馘られ、後藤の政治勢力の經濟的基礎を滿鐵から驅逐すべく、政友會の代表伊藤大八が副社長で滿洲へ乘り込むことになつたとき、大連市街は喪に服したやうに濕めやかに弔旗を掲げたもので、總裁中村は陸路を大連驛から、副總裁の國澤新兵衞は海路を大連埠頭から故國日本へ向つた。

プラットフオームと埠頭は、滿鐵社員と全市民によつて埋め

られ、生き別れを惜しみつゝ一齊に肩をゆさぶつて泣いた。

國澤新兵衞は玄海灘から悲壯な別辭を無電で大連市民におくつた。

そこで理事は總辭職した。

そのとき、犬塚はたゞひとり政友會との血戰を覺悟して快然と笑ひを爆發して居殘つた。まもなく伊藤大八が着任するや、血戰の機はすぐと來た。

伊藤は着任土產として職制改革案をかつぎ出し、犬塚は後藤の遺制たる理事合議制を主張して、第一回の重役會で、伊藤と犬塚は椅子をふりあげて猛鬪を演じ、どちらも傷を負ひ、繃帶したまゝ出社して睨み合つてゐたが、犬塚は聲明書を發して內地へ引上げた。

孫文をして心服せしめた犬塚とは斯うした男である。かうした男によつて、五十萬圓を無條件で投げ出されたために、孫文が滿鐵に對してどの程度に厚意を感じてゐたか否かは、孫文逝き、犬塚逝いた今日、もとより確む可くもないが、滿蒙に於ける日本ブルジョアジーの權益の擴充反對、既得特權の回收といふ支那政府と民衆の運動は、上げ潮に押し寄せる波のやうに寄せては返へし、今やひた押しに押し迫りつゝあるが、わが滿蒙權益の根幹たる滿鐵の基礎的特權に對しては、未だ何等の形態に於ても要求されたことがない。

だが、たゞ山東協約によつて日支の共同出資の下に成立した山東礦山——支那名、魯大公司——の株金支拂ひ問題に關して、支那側から滿鐵に對する要求の片鱗とも見らるべきものが針で突いたほど現れたことはある。此の山東礦山問題については、日本のいづれの財閥に利權を委ぬべきやに關して、外務省の主腦會議で侯爵小村欣一などが、「滿鐵は日本の帝國主義の先端だと支那側に解せられてゐる。左樣な滿鐵に日支合辦事業たる山東礦山の經營を委任することは出來ない」と、頑張つて議論紛糾して決しなかつたために井上準之助の裁斷に訴へて、つひに滿鐵が選まれたのであつたが、半數の株式を所有すべく平等の權利を持つ光榮を荷はされた支那側には、然し乍ら株式拂込金がなかつた。滿鐵がかはつて支拂つた。

此のとき支那側は、次ぎのやうな理解のもとに、滿鐵からの株式拂込金立替えの自己辯護をなしたのである。

「滿鐵の將來は、遠からずして魯大公司と同樣に日支合辦たらねばならぬものであつて、然らば滿鐵より一時的株金の融通を受けるも將來支那側に禍ひすることはない筈である」

「ない筈である」は頗るおかしな用語ではあるが、ともかく滿鐵の日支合辦といふ具體的な要求が、支那側に期待を持ち始め

られたことは事實で、と言つても、もとより要求が提議されたのではない。寧ろ支那側よりも、日本ブルジョアジーの政治代表機關のなかに、かつて滿鐵放棄論のおこつたことこそ注意さるべきである。

それは言ふまでもなく一九〇五年一〇月一二日の桂――ハリマン覺書であつて、外務省から配布された記錄によると、覺書に閣僚中反對したのは大浦兼武一人にすぎなかつたやうで、覺書成立の骨子は、滿蒙に於ける滿鐵の如き利權は之を運用すべき力がない、これを放棄することこそ利益である、と言ふにあつた。覺書の要旨はかうである。

南滿鐵道を日米の共同經營とすること、東支鐵道を買收すること、シベリア鐵道の運輸權を獲得すること、太平洋郵便會社の航路と連絡せしめて世界一週の一大交通路を開くこと。

日本ブルジョアジーにとつて幸ひなことには、全權小村壽太郎がポーツマウスより歸つて、覺書に反對したために一九〇六年一月一五日、覺書は破棄されたのである。

二、

ブルジョアジーにとつて幸ひなことは、プロレタリアートにとつては必然に不幸であらねばならぬ。不幸は日本と支那の民衆の頭上をドス黒く覆ふた。

××ブルジョアジーの權益××のために特派されてゐる約二個師團の滿洲駐屯軍と獨立守備隊と、そしてその他一千八百人に及ぶ支那駐在軍と旅順その他の海河を壓して游弋する軍艦と巨大なるこれらの派遣軍は何をなしたか。

私は張作霖の××××をあげることが出來る、私は宗社黨事件をあげることが出來る。

また鄭家屯事件を指摘し得るのである。

張の××は、あれは第二次目の企てで第一次は××の××××によつて大正五年、奉天の小西邊門で爆彈を投じて失敗にをはつたのである。

その日、張作霖は馬車で行列をうたせて奉天驛から歸城する途中、小西邊門にさしかかつたとき、支那人によつて爆彈が見舞はれた。引き裂かれた一本の足は血に塗れて電線にぶら下つた。張は、次ぎの見すぼらしい馬車に居た。彼は素早く軍服を脱ぎすて丶、裸體で兵隊の乗馬に跨ると、單騎で逸散に駈け出した。行列は再び整えられて、しづ〳〵と城内に入らんとすると、又もや第二彈を見舞はれたのだが、張はそのときすでに營舎のなかにくつろいでゐた。

張の暗殺失敗と見るや××××は大連へひそかに引きあげた

のである。

次ぎの宗社黨事件は大がかりであつただけに、滿蒙を舞臺として劇的興味をさえそそられた事件である。

登場人物

資本家、大倉喜八郎　百五十萬圓を出資す

外務省、次官小池張造、木村亞細亞局長

參謀本部、次長田中義一

支那側、作者として王正廷、肅親王

馬　賊、隊長薄天鬼

劇の筋

肅親王を擁立し、張作霖を殪して滿洲王國を建設して日本ブルジョアジーの××たらしめるために蒙古王ババブチヤブと馬賊をして先づ張と戰はしめる。

然るに劇の進行中、朝鮮總督寺内が嗅ぎつけ、ビラミツト頭を振り立て、反對したために、すぐと幕をおろしたが、そのとき蒙古軍は薄天鬼の率ひる馬賊を陣頭に立て、奉天に迫つてゐたので、わが×××は機動演習に名をかつて蒙古軍の退陣を援護したのである。

寺内總督は言つた。

「もし中止しないならば、朝鮮の軍隊を率ひて俺れが蒙古軍を撃破する」と。

日本ブルジョアジーの一方の利害を代表しつゝあつた朝鮮總督寺内のかかる激語のうちに、我々は劇以上の興味を感じさせられるのである。日、支のプロレタリアートが、今日、もはや知り抜いてゐるやうに、鮮滿の國境に集中されてゐる朝鮮×××軍の一とつの使命が、滿蒙權益の擁護を意圖してゐることや、軍隊とは、ブルジョアの政治代表たる一個の寺内のための××存在たることを、彼の激語のうちに明白に見出だし得ることである。

そして、それはそれとして、宗社黨事件を色彩る薄天鬼の劇中の劇は、まつたく愉快な存在ではあつた。彼は眞紅のどんすの支那服に、身にあまるほどの朱鞘の長刀を押つ立て、二頭馬車で大連をねり歩るいて馬賊二千人を狩りあつめた。

さきに彼は、巴淋の蒙古王に武器をひそかに供給するために、三百の馬賊の手兵を率ひて公主嶺を發してまもなく、張作霖軍の包圍に陷つて、捕はれ、肉屋の倉庫のやうに、三百人の頭をさかさに吊り下げられてジタバタやつたことがあるが、宗社黨事件に於てはさうした危險は萬に一とつ無い。何故なら滿洲にある忠勇なる××××を背景としての戰爭だからである。やがて中止となつて、大連に集中した二千の馬賊を處分するに當

り、ジャンク船に満載して、沖合ひに帆をはらませて出たところを、水雷艇で撃ち沈めやうとの意見もあつたが彼は肯かなかつた。ボツリ〳〵と馬賊を大連から散逸させてそこで宗社黨事件は終結を告げたが、これは同時に、満蒙に於ける日本ブルジヨアジーの利害が、大倉財閥の利害に打ち克つたことを告げるものである。

名物ほこりに　馬の糞
明け暮れまた馬賊の噂する（鴨綠江節）

此の小唄は鄭家屯をうたつたものだが、明け暮れ、馬糞とほこりにつつまれた鄭家屯に、所謂鄭家屯事件がおこつたことがある。事件そのものは古いことであつても、おぼろげに記憶を喚びおこす程度には知られた事件ではあつたが、事件の内容は秘密に附されてゐる。

事件のりんかくを言へば、支那人が日本の守備隊の兵士を毆り殺したので、わが守備隊は一ケ村を包圍して全村民を××あげ、やがて犯人なるものを調べ出したところ、支那軍隊との間につひに市街戰を演じ、公主嶺から騎兵一個聯隊が長驅してやつと支那軍を沈默させてをさまつたのである。事件の發端は、×××××が支那の行商人から常習的に金錢と商品を××してゐたところ、その日も、實演中に農具で背後から毆りつけられて、かくて鄭家屯事件とはなつたのである。

非は明白に××の××に存するのである。

事件直後、現在のロシア大使館參事官、當時の鐵嶺領事酒匂秀一は調査のため鄭家屯に急行しての歸途、三江口に宿泊するや、わが×××の×××は兵士をもつてその旅宿をとりかこんで酒匂と日本巡査をしたたか毆つた。

何故毆つたか。言ふまでもない、酒匂領事が日本××の非を探査して歸らんとしてゐるからである。

日本ブルジョアジーは、あはて・領事毆打事件をも祕密に附した。これに關聯して、他にもう一とつの鄭家屯事件が、これも葬られてゐる。それは〇〇駐×大使が亞細亞局長として鄭家屯の視察、視察と言つても彼等の××は酒と女を味ふことにある。如何んとなれば、滿蒙の領事には、司法と警察權が掌握されてゐるので、内地から身賣りされてきた藝者の身元を逸早く知つて××を弄び得る特權がある。そこで〇〇は泥醉して日本の守備隊長の舍宅に押し入り、隊長の××に手強くからかつてゐるところを隊長の兵士のために捕縛された事件である。酒匂事件で外務が泣かされたやうに、今度は陸軍が胸をさすつて、これも秘密に附したが、日本のブルジョア群の、いづれかの利害を滿蒙に代表するところから、かもされる××と××の葛藤は、

かくは、闘はれ、また妥協されて來たのである。

ここに述べたこれらの××のブルジョアジーの權益のためにたくまれたる事件、そして、ここに述べる迄もなく一般の記憶に新たなる郭松齡事件に對する出兵、張作霖××事件等は、日、支の民衆の上に何をもたらしたか。

日本の民衆に對して、支那全民衆をして憎惡と憤怒と排日へとまつしぐらに狩り立てたことは、あまりにも明らかである。

三、

滿蒙政策不統一の聲が、ブルジョア陣營から屢々叫ばれるのである。外務と軍部の葛藤などもさうした不統一の現れであらうが、滿鐵を車軸として軍部、外務、關東廳、鮮銀、東拓等のわがブルジョアジーの滿蒙政策の全機關は、ブルジョアジーをして長嘆せしめて已まぬほど、悉く不統一そのものである。

軍部の内部さへ、鬱然たる不統一がかもされてゐて、郭松齡に對する出兵事件、楊宇霆暗殺事件等に於て、軍部首腦部のうろたへたところにも不統一の破綻が流露されたのであつたが、鮮銀と關東廳が滿鐵を押えつけて滿蒙に强制執行した金建問題などは、明白に露出された不統一の破綻であつた。

元來が金建は寺内朝鮮總督の子分等が、寺内の遺髮を拾つて滿鮮統一策を實現せんとしたもので、鮮銀理事太田三郎が滿蒙に圓貨の金券を降らせて滿蒙と朝鮮との經濟統一をはからんとする夢を滿蒙に打ち建てんとしたものである。鮮銀は之れがため、内地に高利のコールを漁つては滿蒙へ金をはこんだ。

「私は金建に贊成です」と言へば、鮮銀はホク〱して金を貸したもので、一時は金券の發行高一億六千萬圓を突破したものである。かうして鮮銀から引き出したものに小寺洋行や中村淸七がある。

最近滿鐵を脅威するものとして連山灣の葫蘆島築港問題が騷がれてゐるが、當時支那の知事を買收して、築港の埋立利權を獲得せんと計畫したものに對し、鮮銀は一通の電報をもつて一億圓にも及ぶ埋立費を貸付けんとしたほど、兎かく金券を滿蒙の地にばらまくことにあせつたのである。

滿鐵と共に、大連の支那商務會長李思明が金建に執拗に反對したので、關東廳は李思明を××にたゝき込んで、決意のほどを示したのである。それほどの金建も、不統一のために正金の鈔票――銀券――發行權を取りあげることが出來なかつたので、金券と鈔票の値開きが百圓につき六圓、即ち同一の國家資本によつて發行される紙幣の價値が金券は六圓だけ安いことになり、他方滙兌券――不換紙幣の奉票――で、いくらでも金券

と兌換できるために、さすがの金券も參つて、地震内閣の外相となつた關東廳長官伊集院が、これも赴任する玄海灘の船中から無電をもつて金建中止の指令を發して解決を遂げた。

かゝる不統一は、滿蒙政策の先端にあるあらゆるブルジョア機關が、日本のブルジョア群のそれぐ\の利害を代辨するところに不統一の原因がかもされてゐるのであるが、金建問題によつて巨利をむさぼつたものは張作霖と正金と相場師と僞替ブローカーと小寺洋行その他の滿蒙ブルジョアであつて、かくして莫大な損失を招ける鮮銀の救濟を背負はされたのは國庫である。とりもなほさず民衆の肩に背負はされたのである。

支那の憎惡と憤怒と排日を爆發させたさへあるに、わが忠勇なる民衆は、××××の權益の名に於て、ブルジョアの尻拭ひの榮譽を荷はされたのである。二重の重荷ではないか。

四、

日、支の民衆——プロレタリアートの負ふ重荷は、斷じて二重三重にとどまらないのである。わが權益の根幹たる滿鐵の建設以來の純利益の總額は——表面的に記錄されたものだけでも約十億圓に達する、そのうち四億三千萬圓は株式配當の形態で日本の國土に放出され、約六億圓は留保資金の形態で滿蒙に結集されてゐる。

これらの巨大なる利潤は、日本ブルジョアジーのふところ以外の何物をも温めてはゐない。然るにかゝる利益の××は何處にあるか。言ふまでもなく撫順炭坑の地底につるはしをふるひ、鞍山製鐵所の鎔鑛爐を焚き、大連の埠頭にうごめく支那勞働者と滿鐵線を運用する日、支の從業員諸君の勞働力こそは利益の××である。その他の何物でもあらう筈がない。支那人の勞働者は一萬四千五百人、日本の從業員、勞働者は一萬二千人ゐる。もしも心あるものあらば、心して撫順の炭坑納屋と、大連の碧山莊を見よ。而してそこに蠢めく生物を凝視せよ！ 人か豚かを疑はしめずには置かないであらう。

されはこそ、滿鐵王國の最大の×××は、いつ、いつ迄も彼等をして豚小屋に眠り込ませることにそそがれてゐる。

前副社長松岡洋右は回々教を傳道してアヘンの代りに宗教を彼等に與へんとさへ企てたのである。この企ては日本浪人のために松岡がまんまと運動費をせしめられた茶番に終つたが、支那勞働者に對する×××の彈壓と警戒は、秋霜酷烈である。そして支那人にそゝがれる彈壓の鞭と警戒の眼は、同じく日本人の勞働者と從業員の頭上にも、唸りを發してふるはれ、スリの眼のやうに鋭いのである。

來年度の關東廳の豫算の新規事業費を見ても、六つのうち四つは警察費の充實のために振り當てられてゐる。また、滿鐵は泰東日報、盛京時報、滿洲報、關東報（以上漢字）滿洲日報英文版、滿洲日々、大連新聞の日刊新聞を支配してゐる。

右手には勞働者、從業員を眠り込ませるためのブルジョア文化の宣傳機關としての新聞があり、左手には眼覺めた勞働者、從業員を××し××するための擴充された警察がある。

日、支の勞働者と從業員は、かうした滿鐵王國の支配の下に、共通せる利害の××的一線に立たされてゐるのである。日本のプロレタリアートも亦、滿蒙に背を削られ肉を搾られてゐる日、支の勞働者と從業員と同樣、同一の階級的一線に追ひ上げられてゐる。それを見逃してはならぬ。

そこで滿鐵の陣容を見よう。

社長には言ふまでもなく三菱財閥の代表仙石貢の彥左衞門がゐる。副社長には住友財閥の大平駒槌がゐる。大平は凡庸、前々社長安廣伴一郎が株相場で私財に大穴をあけたために、淸算を手傳つてゐると、これを見兼ねた樞密院の元老が、右の大穴を埋めさせるために滿鐵社長に安廣を推挽したので、安廣におんぶして前回にも副社長の椅子をかち得たものである。監査役には三井財閥の代表として馬越恭平と大橋新太郎、住友財閥の代表として湯川寛吉と原財閥の原富太郎がゐる。

政治代表としては民政黨の側に仙石、原のほか理事に大藏公望、上海事務所長に大淵三樹がゐる。大淵は安達謙藏の子分だが、山本条太郎の社長となるや、首をつながんために安達のことを訴へ出たので、何れにしてもたのもしくない子分だとあつて、山本のためにヨーロッパ視察に追ひ遣られたものである。政友會系には理事田邊敏行が殉死したので、理事級には色彩のうすい小日山直登と神鞭常孝がゐる。なほ滿鐵疑獄事件で僞證罪に問はれた小日山が理事に、八幡製鐵所疑獄事件に連坐した宇佐美寛爾が鐵道部長の要職に返へり咲いてゐるなど、いかにも滿鐵らしくて好い。

これらの滿鐵王國の重役は、重役賞與だけでも年額五六十萬圓ある。五十萬圓として社長が十五萬圓、副社長が七、八萬圓、監事が十萬圓、殘り十五萬圓を理事連で分捕るといふ不勞利得がある上に、なほ莫大な不勞利得の臭ひのすることは山本条太郎の遺業のうちに、とかくの風聞をはらんでゐるところに見ても窺はれるのである。

かく滿鐵王國を料理するものは日本ブルジョアジーを指導する政治的經濟的代表者であつて、またブルジョア群に、不平をおこさせないで滿蒙權益の利潤の一部を普遍的にゆきわたらせ

るためには帳簿上の表面純益のうち、一部を社内に留保し大部分を株式配當の形態で故國へ配分するのである。

そして滿鐵王國を、その代表者によつて料理せしめつゝあるわがブルジョア財閥の利益は、單なるさうした株式配當などにあるのではなく、××の國庫豫算の歳出の大部分を御用商なるこれらのブルジョア財閥が喰ひとつてゐるやうに、六、七億圓の興業費のうちの諸材料の賣込みや、また滿鐵製品の獨占的販賣利得によつて、莫大な利潤を掠め取つてゐるのである。

さうした滿鐵王國の權益を最も多くなめてゐるものは三井財閥である。

そしてまた、日本ブルジョアジーに與へつゝある滿鐵王國の軍事的價値をも見逃してはならぬ。

滿鐵王國の獨占する軍事的價値の最大な指標は、言ふまでもなく軍隊と軍需品を輸送する鐵道と主要軍需品たる鐵と石炭にある。軍需的必要のために、撫順の石炭を九州炭坑の廢坑に埋めて置かうといふ×××××あたりの意見さへある。

次ぎは港灣と船舶である。次ぎは張學良の奉天兵器廠で、日本の施設と技術と滿鐵の××が注入されてゐる。次ぎは××として秘密に附されてゐる砂河口工作所の特殊鋼である。更らに次ぎはと指を屈すれば限りなくある。

然らば、かく滿鐵王國の權益が日本ブルジョアジーのためにもたらしつゝある特殊利益をわが民衆――プロレタリアートは、指を啣えて見てをればよいか。否な、ボンヤリと見てもゐられないのである。かうした權益を保護するために軍隊の駐屯費、關東廳の國庫補給費などをプロレタリアートの懐中から支拂はねばならないからである。

日本政府の最近發表したわが輸出資本に關する數字によると、滿蒙權益に對する投資は十三億三千七百萬圓で大部分は滿鐵の權益を形成する資本である。

輸出資本の總額　二一六四(單位百萬圓)
內、南洋一〇〇、露西亞五七、南米其他一五〇、支那五二〇、滿蒙一三三七、(單位百萬圓)

滿蒙內譯(單位百萬圓)

商業	一一五、	運輸	三三〇、
工業	七四、	農業	一九、
鑛業	八、	水産	一五、
投資	六二六、	不動産	一五〇、

かやうな滿蒙權益を、××の大ブルジョアの××のために、毎年一千萬圓の駐屯軍事費と三、四百萬圓の關東廳補給費を、わが民衆は重課されてゐるのである。滿鐵王國の一翼としてゐまは、旅順に隱居させられてゐる關東廳にしても現在の[illegible]

督石塚英藏の民政長官のとき、滿鐵總裁後藤新平が重役を從へ大名行列を整へて着任の挨拶に罷り出ると、後藤より數段も後輩の石塚は、後藤に椅子も與へないで、鼻眼鏡の上から一場の訓示演説をたゝきつけて、後藤の鼻ばしらをへし折つたといふ逸話もあるが、いまの關東廳長官は木下謙次郎でさへつとまる役柄である。木下が赴任して披露の宴を張つたとき、彼の妻君は「御覽の如くお粗末な長官でございまして…」と挨拶して、やんやと喝采を浴びたとのことであるが、まことにその通りで、かくお粗末な長官でさへつとまる關東廳に滿鐵の權益××のために、わが民衆の血税が補給されてゐるのである。

五、

ここで筆を一轉しやう。

滿蒙は移植民に適するといふ議論が、未だにくすぶつてゐる證據には松岡洋右の農業會社案などといふ怪し氣なものが迷ひ出てゐるのである。勞働者をも搾り足りないで、農民をも大豆粕のやうに×××にかけやうにいふのであらうが、日本の農民は、支那の農民の粗衣粗食、健康、性慾などについて打ちまかされ、畜力の利用と畑作に慣れてゐないで、移住しやうとするほどのものは、支那の農民を使つて地主にならうとするものが多い。

これは失敗の試驗濟みである。

試驗の一、滿鐵はその附屬地七千町歩を、大正四、五年頃、豫備軍人の農民に一戸當り五町歩以上の土地と資本を貸與したが、悉く失敗してゐる。

試驗の二、關東都督府時代に、大魏家屯に二百町歩の水田を設定して山口縣より農民を移植せしめたがこれも失敗である。

試驗の三、東亞勸業の蒙古王の開放地は、張作霖と譚大鬼の馬賊隊を對戰させて、獲得したほどの土地であるが、之れまた試驗濟みである。

たゞ在滿鮮人の水田はやゝ見るべきものがあり、見るに耐えないのは在滿鮮人の救濟費の頭をはねて、馘られた領事のあることである。

移植民が望みなく、木材、紡績、毛織、その他の產業も失敗に歸したものが多い。日支合辦の鴨綠江木材だけは、そのなかで光つた存在だがこれは帝室林野管理局の老官吏の安息所で、社長の年收三十萬圓を下らぬと見られるが、しかし權益らしき存在は滿鐵であり、わが權益の車軸をなすものは、もとより滿鐵王國だが、その滿鐵王國と雖も投資產業所謂傍系會社の利

潤は、ブルジョアどもに喰ひ荒らされたことにもよるが近年の利廻りは三分三厘から四分四厘を出でないのである。

滿鐵の投資産業資本

産業別	社數	拂込資本	滿鐵投資額
工業	一六	二二二、〇一七	三二、〇〇一
商業	七	八、六五〇	一、五〇三
礦業	五	九、三二一	一、四四六
農業	二	一五八、五八〇	二八、三五六
電氣	三	一八、七五〇	一、六二七
土木建築	二	五三、一四六	一、三四二
運輸	九	七〇、三〇〇	三一、六二〇
信託保險	九	五三、一四六	一、三四二
新聞	三	二、六〇〇	一、一〇〇
其他	二	一二、三〇〇	二、三二一
計	五八	五七五、〇二一	一〇九、七〇一

備考　單位、千元　上海發行「日本研究」所載

それ故に、仙石總裁によつて傍系會社整理案が建てられてゐる。尤もかうした整理案こそは、そも〳〵眉唾ものであつて、滿鐵の株式百圓券を五十圓券に分割整理したゝめに株主だけでなく島德藏あたりと通謀して莫大な株式利得をあげた重役があつたとも言はれてゐるやうに、新規事業にせよ整理事業にせよ必ずやさうした特殊利得の生ずるそれを眼差しておこなはれるは明らかだが、しかし滿鐵の傍系事業不振の事實もまた昭乎として明白である。

從つて滿鐵附屬地に對するいくばくかのおこぼれも涸らぎつつある。元來が廿萬人に餘る滿蒙の日本人口は、滿鐵のいくらかのおこぼれを拾ふ雀のやうな生活の煙を立てゝゐるもので、なるほどなかには、山に分け入つて支那人の子供にげきたくをうたせて天羅や搾鑛の鑛種を養つてゐる眞面目なのや、鐵のおりをつくつて、事務と生活をおりのなかにおくつて支那人に血涙をしぼらせてゐる高利貸や、支那人をお客とする賣春婦の群れや、さうした滿鐵の雀でないのもあらうが、多くは滿鐵王國の國民であつて、これらの滿鐵王國の住民の大多數は、故國日本の土にかへりたくとも、生活の慘めさのために滿蒙に骨を埋める可く生活をこゝに釘付けにされてゐるのだが、なかにはまた、滿鐵王國の利害と鋭く對立するいくばくかの人口さへある。

例へば「日本海中心論及豆滿江經略」の著者として、その所論のために半生を力闘し盡した松尾小三郎の意見が實現されたならば吉林と會寧を結ぶ吉會鐵道は、とくの昔に出來上つてゐて、北滿はうるほつてゐたであらうに、當時滿鐵の利害が吉會線と衝突するものがあつたゝめに顧みられないで今日に至つたなどは範例の一つだが、すでに滿鐵王國の住民の生活は窮乏のどん底にある。滿鐵産業の勞働者、從業員は滿鐵王國のために

過重に搾取されてゐる。

しかも滿鐵權益の特殊利潤を强奪するものは滿鐵王國を支配するブルジョア財閥であつて、財閥の權益を防衞するために、支那民衆の憎惡と憤怒と排日を全身に浴びて、滿蒙に支出する國費を負擔するものは日本のプロレタリアートである。

ブルジョア財閥をして滿鐵王國と滿鐵をめぐる日本ブルジョアジーの一切の滿蒙權益を放棄せしめよ。滿蒙權益を放棄することによつて、わがプロレタリアートの失ふものは、滿鐵王國の鐵鎖のみである。

そして滿蒙權益の放棄が、偶然にも多くの産業資本家、商業資本家の利害と一致することに着目されねばならぬ。かつて床次竹二郞の對支外交方針を以つて代辯せしめたところの關西に於ける綿絲布輸出商の對支利害などは、まさしく滿蒙權益の放棄に歸結さる可きものであつて、彼等はブルジョア財閥の獨占する權益に斷乎として挑戰する勇斷を缺き、ブルジョア財閥の支配する宣傳機關によつて民衆の愛國心を煽動されることを怖れ、自からの無力のために、つひに滿蒙權益の放棄を喉元に喰ひ止めた觀があるが彼等の利害は、輸出商品の市場の擁護、擴大のため、言ひ換へると貿易伸張のために、支那民衆の憎惡、憤怒、排日の禍根たる滿蒙權益を放棄しやうと言ふにあつて、ブルジョア財閥の利害とは對立するものである。

然し乍らすでに指摘したやうに、彼等の經濟的位置は、さうした止み難き慾求を喉元に押し止どめねばならぬほど無力であつて、眞にブルジョア財閥の滿蒙權益を放棄せしめ得るものはプロレタリアートのみである。そして日、支のプロレタリアートの××的協力によつてのみ、それは成し遂げられるであらう。

ルマルク小傳

秦豐吉

ルマルク

「西部戰線異狀なし」の原著者ルマルクに就て、僕はその傳記著作等が出來るだけ明にしたいと思つて今日に至つたが、ごく斷片的な資料を集め得たに過ぎないのは遺憾である。ルマルクを痛罵した書物は、二三冊手許にある。「西部戰線」の擬書も到着した。然しルマルクその人に就ては、やはり雜誌「文學世界」に出たルマルクの談話に據るのが最も確實のやうだ。ルマルクがこの書物を書いて、帝國主義者反動主義者排佛論者側から、或は佛蘭西生れのユダア人と言はれ、或は兵隊生活の經驗なき者だと臆測され、又は既に五十五歲の老兵が戰死者の日記に手を入れたのだ等、あらゆる惡意の宣傳が飛ばされたが、然しルマルクは依然として勇敢なる純獨逸生れの一兵卒に過ぎない事は疑ひもない。僕は同書の譯出の際に、獨逸の出版者に求めて得たルマルクの小傳は、直ちに譯本の初めに掲げておいたが、これは獨逸の廣告文に出てゐたものと全く同じだ。そこで、僕はその後に知り得たものを次に掲げて、これを補ふ事にしたい。

生れ

ルマルクは千八百九十八年六月二十二日午後八時十五分に、獨逸オスナブリユック市州立産院で生れてゐる。これは明治三十一年であるから、日本の文壇では北村喜八氏、黑島傳治氏、佐々木孝丸氏と同じ生れ年だ。父親はペエテル・フランツ・ルマルクで、製本屋である。オスナブリユック市ヤアン町十五番地に住む篤敬信者だ。母親はアンナ・マリア・ルマルクといふ名前だ。

ルマルクの名が佛蘭西系なので、佛蘭西の廻し者のやうにも言はれたが、この家は北部ザクセンから出たもので、系圖から見ると、百三十年は獨逸に住んでゐる事が明ださうである。その後に少年ルマルクはカソリック神學校に通ひ、千九百十八年に歩兵第九十一聯隊の豫備少尉として、第一鐵十字勳章と、フリイドリヒ・アウグスト第一級十字勳章とを貰つて凱旋し、もう一度一年間ばかり學校に通つて、まづヒユンムリングといふ一寒村の小學校の先生になつたと、獨逸の出版者ウルスタイン社は、この本の發表前後にルマルクを紹介したものである。

ところが千九百二十九年六月十四日に獨逸ポオツダムの獨逸文書局（ライヒスアルヒフ）では、歩兵第九十一聯隊にそんな名前の少尉はゐなかつた、といふ事を發表した。同時にルマルク自身も、僕は十八歲で戰場に出た、つまらぬ一兵卒に過ぎない、としやべつたので、出版者は大に狼狽して、歩兵少尉であつた事は、これを早速取消した。獨逸一流の出版業者としては、こ

の上もない醜態であつた。

ルマルクは假名で、クラブメ◇といふのが本名だなどとも傳へられたが、これは嘘である。唯ルマルクのクがQEとなつてゐるが、戸籍に載つてゐるのではKである。これだけが本名をもじつてゐるものだ。

小學校の先生をやつてゐる間に、新聞に投書する事も覺えて、この敎員生活はじきにやめてしまつた。まづ短い物を書き出したのは休戰の年の千九百十八年である。雜誌「美」に「金の目をした女」といふスケッチ、「あなたとわたし」といふ詩を出したのが最初であるらしい。してみるとルマルクが大戰から歸つて來たのは、僕の推察では千九百十七年の初め頃ではなかつたかと思ふ。さうすると一寸「西部戰線」の內容と食ひ違ひが起るので、本人に聞いてみない限り明瞭でない。

少年時代の愛讀書は、ケッレルの「綠のハインリヒ」である。「初めてこれによつて形式の槪念が分つてきた時代です。それまでは唯何の選擇もせず、筋ばかり追つて讀んだものです」と自分でも言つてゐる。

廣告雜誌の編輯

千九百十九年、同じく二十年には、やはり二つ三つの短いものを雜誌に書いてゐるが、この年の間に何の職業をしてゐたか、僕には分らない。或はまだ小學校の先生であつたかも知れない。兎に角この時代に田舍の文學靑年として、何か文筆に關係した仕事でもしたいと思つてゐたのだらうとは、僕にも想像は出來る。千九百二十三年から四年にかけてはハンノオフフエル市のコンチネンタル護謨製造會社に入つて、そこの廣告雜誌「エヒヨウ・コンチネンタル」を編輯することになつた。この間には護謨製品の宣傳の爲に、社用で瑞西や伊太利、バルカン、土耳古方面まで出掛けた事があるやうだ。その宣傳雜誌には「廣告と商人」とか、その外記事廣告類を書いてゐる。そのルマルクの書いた廣告文にはこんなのがある。

「生命は運動です。運動は生命です。生れたばかりの赤ちやんでさへ、コンチネンタル護謨製乳首が口に入らないと、可愛いいお手々やあんよを盛んにばたばたさせてお泣きになります。（中略）やがてあんよがお上手の頃になると、もう何よりもお氣に入りの玩具の赤い綺麗なコンチごむまりを追つかけてゐらつしやいます。」

この廣告雜誌の外には、「靑春」といふ雜誌に旅行スケッチを二つ三つ書いてゐる。器用だと見えて、簡單な挿繪も自分で描いたものらしい。その外「エヒヨウ・コンチネンタル」には、每號廣告文として、「海水浴と帆走」、「縫つた新しい物」、「靑い芝生と遠足道」、「クラウゼンパスの競馬」、「スポオトの休日」、「現代のスタイル」、「冬のスポオツ」なぞといふものや、旅行スケッチの外、「プリムケ船長の第一——第八冒險」といふ續き物を書いてゐる。

千九百二十四年には伯林に出て來て、これも大きな雜誌社「シエル」に入つて、そこの「スポオト畫報」の編輯員に成つたものと思はれる。戰場から歸つたルマルクは、まづもう一度學生、寂しい村の小學校、工業都市のハンノオフエル、それから愈々伯林まで出て來た譯である。「スポオト畫報」の編輯をしながら、自分も盛にエッセイ其他を書いて、この

間にルマルクの物を書く才能は完成したのであらう。

「スポオト畫報」の外には、新聞の「ロカアル・アンツアイゲル」、「月曜日」なぞにも出してゐる。然しこの間に發表したものも、ごく輕い旅のスケッチ、廣告文、スポオト記事、エッセイ等に過ぎない。例へば、「上等のリキユウルの交ぜ方に就て」、「夜の海」、「美人競爭」、「印度の狩獵插話」、「自動車の災厄」「自動車と世界の都市」、「ヘッドライトの後で」、「婦人と小型自動車」、「モオタアサイクルによる旅行」、「新しい自動車構造の前途」、「自動車の頭腦」、「小型自動車小說」、「國際自動車型」、「旅行靴の幻想」、「パンクの個所」、「アスファルトの上の映畫」、「安全第一」、「提灯の下の一頭曳馬車」、「コックテエルの凱歌」小說「地平線上のステエション」、「光つた鋼鐵の靴で」等、四年間に約六十箇程の短いものを書いてゐる。

「スポオト畫報」といふのは、愉快な青年らしい雜誌だが、自動車、コックテエル、美人競爭、アスファルトの上の映畫なぞといふ題を見てゐると、ルマルクの書いた物も、恐らくさつぱりした、清新な、日本ならさし當り「新青年」に載つてゐるやうな、氣持の好い文章に近いものではなかつたらうかと想像もされる。

「スポオト畫報」の編輯は千九百二十八年までやつてゐた。この時分にルマルクが所謂經驗の幻想に襲はれ、空虛な懷疑に脅迫されて毎晩事務所から歸つて書き出したのが「西部戰線」である。さうして千九百二十八年の十一月十日から、約一ヶ月に渉つて「フォッシエ新聞」に連載された。本になつて出たのが、二十九年一月二十一日である。新聞に載つた時とは、多少加筆訂正された。

結婚

伯林で「スポオト畫報」の記者をしてゐる間に、ルマルクは結婚した。千九百二十五年十月十四日である。二十七歳の新郎に、二十四歳の新婦だ。區役所の結婚の登記には、ヘルミングハウスといふ商人といふ人が立會つてゐるが、これはハンノオフエルから出て來てゐる。ルマルクはこの當時伯林シヤロッテンブルクのカイゼルダム百十四番地に住んでゐた。伯林でも、空氣は好いが、家賃は安い郊外に近い處だ。妻君は千九百一年八月二十八日ルヒルデスハイム生れのユッタ・イルゼ・エレン・ツアンボナといふ女である。

この妻君も多少文筆の嗜みのある婦人に思はれる。夫の編輯してゐる雜誌に、イルゼ・ツアンボナの名前で「ドライブをする婦人」とか「地中海への旅」とかのスポオト記事を書いてゐる。夫婦揃つて、スポオト・ファンである事には間違ひない。この妻君の方に男爵といふ肩書をつけて好い因緣でもあるのか、千九百二十九年五月二十五日の移轉屆けによると、フォン、ブッフワルド男爵エリヒと稱して、伯林を去つてゐる。或はそんな變名は、「西部戰線」による非難賞讃の喧騒に堪へられなくなつた爲かも知れない。男爵といふ稱號は、ルマルク側のものでない證據には、現住所の屆出に、妻君の名前にこの稱號をつけてごまかしてゐるからである。その後ルマルク夫婦は、伯林を逃げ出して、瑞西ダボスに轉住して今日に至つてゐる。この書物が獨逸の反動主義者から一齊に襲つた非難に對して、唯の一言も辯解せず相手にしなかつた態度は、

あの口やかましい獨逸人としては、實に珍しい。且頗る日本的である。

泥棒

「西部戰線」が手がゝりになつて、泥棒の捉つた話がある。千九百二十九年六月三十日に維納警察は、兼て捜索中のエエク・ピユッチンゲン男爵夫人の寶石類を盜んだ犯人の引渡を、ハンブルグ警察から受けたものである。これは國際的ホテル明巣覘ひの前科で警察のお訊ね者になつてゐたステフアン・ボオコルといふ男で、嫌疑を受けてハンブルグで捉つたが、その手掛りは外でもない。先づこの男の情婦である女優の下廻りのドルベルクといふ女の家を家宅捜索すると、一冊の「西部戰線」が出てきた。ところが被害者の男爵夫人が寶石を盜まれた鞄の中にも、この本が入つてゐた。ボオコル君は、ダイヤモンドと一緒に、ルマルクを盜んだのが、運の盡きである。それが證據になつて、泥を吐かせられたといふ事だ。

コツクテエル

ルマルクがスポオト記者時代には、コツクテエルが好きであつたのか、混合酒の交ぜ方を詳細に書いてゐる。それを拔萃すると

「世界といふものは、これはと思ふやうな、思ひがけない物の中に、現れてきます……リキユウルは精髓（エツセンス）です。これを飮むのは、一つの藝術です。……女の心理を描くといふ事は、リキユウルを理解する事よりも、ずつと容易です。……リキユウルを交ぜないで飮むといふ野蠻な事を、世間の人は平氣で行つてきました。……ワニラとコオヂナル・メドツクなしに、嬉ほ長調の前奏曲が出來るでせうか。……コツクテエルといふものは、浮動し乍ら自分自身の中に落付いてゐる作品です。……キユラソオの急速調から、シヤルトリユウスの緩除調、アラツシユ、クレエム・ド・カカオ・ア・ラ・ワニラ、クリイム、いぶきぜり火酒（アンヂエリカ）、ジン、曹達水の奇怪な舞踏曲等、リキユウルの音樂會は、何を基調にするか、中々一と通りではありません……リキユウルの個性を知らないで交ぜる事は、暗中模索の類です……コツクテエルは生活の如くに意味深長です……それは幾千の光に閃き、無數の面の刻みに輝くダイヤモンドです。けれどもそれは一個のダイヤモンドです……」

その外混合瓶の振り方交ぜ方を細く書いてゐるが、恐らくそれはルマルクの家庭の趣味であらう。獨逸人には珍しい好みだ。

これらのルマルクの態度、趣味等から見ていつも僕は所謂獨逸人離れをしたルマルクに氣が付いてゐる。千九百三十年の末迄に書くといふ現代物は、案外米國式のものかも知れないと祕に僕は思つてゐる。

貴族院論

馬場恒吾

日本の現在の總べての社會層を通して、最も思想の惡化してゐる所は貧困な華族だと云ふ定評がある。華族の中には元より大なる富豪もある。だが子爵・男爵級で相當に暮らして行けるのは三分の一で、殘りの三分の二は下級サラリーメンにも劣る生活狀態に居る。公家華族は宮内省より來る一年千圓前後の給與を得るが、殿樣華族の落ちぶれた連中にはそれさへない。彼等は窮巷陋街に暮しをしてゐる。それでも彼等は華族の肩書を擔つてゐる。此絕望的な環境から生れるものはひがみである。憤怒である。そして捨鉢な思想である。

德川時代にも京都の公卿は極端に貧乏であつた。だが彼等には一つの特權があつた。それは彼等は交代して伏見の墨染と大津の逢坂山の間に出張する權利である。此街道は諸侯が江戸に參勤交代する道に當つてゐた。其所に貧乏なる公卿が衣冠を正し笏を携へて出て來る。それに遭遇する諸侯はみじめである。公卿は如何に貧乏してゐても、位階と官職が高い。或は正三位とか大納言とか云ふ。諸侯は如何に裕福な大名であつても、位階と官職が低い。僅かに從五位か少將である。彼等は威風堂々たる行列を立てゝ、自分は駕籠に揺られて來るのであるが、其行く先に正三位大納言が立つて居る時は、諸侯は駕籠から降りて土下座して挨拶しなければならぬ。面倒と云ふよりは威嚴に關する事夥しい。それ故に、幾許かの黄金を包んで、そうした高位高官の人に往來に出現せざらん事を懇請する。これが京都の公家の生活資料の一部になつた。固より今はそうした儲け口もない。

其時代に金を湯水の如く費つた諸侯も、明治維新の廢藩置縣以後は慌だしく沒落の過程を辿つた。彼等は領地の代償として、明治政府から公債を貰つたのであるが、それは夙くの昔しに無くした者が多い。それを金に代へて財産にしてゐたものも、明

和二年の十五銀行休業で大打撃を受けた。其結果として公卿大名兩方の華族が公平に貧困の味を味うやうになつたのである。

此生活狀態が貴族院に反映してゐる。貧困が生む思想は唯物的である。貴族院が主義政策に於て如何に沒理想であるかを見よ。下品な野武士の集團である衆議院では時々感激の光景を見る。彌次と怒號、鐵拳と亂鬪、それは議會の光景としては褒めた話しではないが、尚其間に政治に對する熱狂と執着が見られる。貴族院は熱狂しても高々、上品な皮肉を云ふに過ぎない。平生は墓場の如く靜かだ。反撥性のない事は古綿のやうな感じを與へる。然かも團體行動になると鐵の如き規律を以て動く。指導精神が唯物的で、統制が科學的に行はれる。

大正十三年の正月早々、貴族院の研究會が策動して清浦内閣を作り、自分で政權を握る事に成功した。其時私は研究會策士の一人を捕へて、

「華族は華族として已に名譽と地位を有つてゐる。その上に政權を握るのは慾が深か過ぎる」と難詰した事がある。すると其華族は

『華族だつて食はなければならぬからなあ』

と恨めし氣に歎息した。私は其當時は華族なるものがそれほど貧乏してゐるとは知らなかつた。だから、腹の中で、贅澤な事を云つて居ると思つた。併し現在から見れば、華族の政權奪取にも一部分は食ふか食はないかの突きつめた心持ちが働いてゐる。只それが華族であるが爲めに、世間の體裁を考へて、勞働階級の如く、露骨にさうとは云はない。又勞働階級の如く人數が多くないから、成功する見込みも少い。只此意識が胸の中で陰氣に燻ぶつてゐる。そしてそれは華族の身を焦がすに充分な眞劍味を帶びてゐる。

貴族院の最大多數黨は今でも研究會である。研究會が貴族院を代表すると云つても差支ない。そして今迄に研究會を支配した三島彌太郎子、水野直子（兩方共故人）は如何にして華族仲間に勢力を扶植すべきかの呼吸を飲み込んでゐた。研究會は子爵議員が中堅であるが故に、彼等の活動の範圍は子爵階級を中心としてゐた。其方法は個人的の世話をすると云ふ事を基調としてゐる。重に臺所の窮乏を救うと云ふ事に努力する。例へば公家華族が生活費に困つてゐる。すると、五人の華族で一人の議員を出し得るのであるから、其中の一人を貴族院議員にする。歳費三千圓の中の千圓を議員が取つて、殘りの二千圓を仲間に頒ける。そして議員にならない華族の生活を助ける。議員としては一年千圓では生活出來ないやうに見へるが、彼等は東京に來ても親戚の家に泊つて、極めて質素に生活する。だから千圓

で生活が出來る。それを議員にするとかしないとかを決定するのは、同爵の選擧母體の幹部である。幹部はさうした事迄世話をして勢力を扶植するのである。

昨年水野直子が死んで以來、それほど行き屆いて個人的の世話をするものがなくなつた。小笠原、青木、牧野、前田と云ふ幹部があるけれども、彼等は殿様である。水野の如く細かく飛び歩かぬ。水野は大抵の家を訪問しても表玄關からは入らず、裏門から出入した。人目を憚るのだと云つてはゐたが、實は一家の心臓は臺所にあると睨らんだからであらう。其流儀を眞似たのではないが、華族議員の中には幹部級の殿様の邸宅に於て、臺所を迂路々々する例は尠くない。平生生活の世話を受けてゐるからである。だから、同じく子爵議員と云つても、富裕なる子爵と、貧乏なる子爵の間に天地雲壤の差がある。德川時代の大名と家來の關係が其儘に殘つてゐる。

吾々には時代の差がある爲めに、封建時代の本當の殿様を目前に見た事がない。今存在してゐる大名華族は本當の大名の子か或は孫である。だから大に現代化してゐるだらう。だが、芝居や大衆文藝に出る封建的の殿様は何所となく鷹揚で上品な處がある。其風格が今日の殿様に殘つてゐるか、否か。それは一概には云へない。財産のあるものと、零落したものは大に違ふ。財産を有する部類になると幾分か大名の氣風を保存してゐる。玄關を訪れて「御主人は御出でになりますか」と云へば、三太夫が「御前様ですか」と問ひ返へす。殿様が主人になつて客をする場合には、主人が床の間を後ろに上座に座り度がる。それは昔からの習慣であるが故に、板に付いて可笑くない。尤もかうした殿様でも、自分より爵位が一段でも上の人を招待する時は、自分が下座に付いて敬意を表する。このやうな處に昔しの大名氣質が殘つてゐると云はれる。

財産を失つた殿様になると、全く始末に困る。彼等は大名時代の我儘な氣質を精算してゐない。大名は何百年かの間、勝手氣儘な事をしてそして、誰れにも責められる事なしに世を送つた。その氣風が殘つて、今の大名華族の多くは責任觀念が乏しく、思ひ遣りが薄い。だが、さうした我儘な無責任な人々は現代の自由競爭の社會に於ては、初めから落伍者たるべく運命付けられてゐる。果して彼等の多くは落伍してゐるのである。今一つ殿様華族に共通なる弱點は、それが屢々女に關する問題を起す事にある。これも彼等の傳統的習性と云へやう。德川時代の諸侯は妾を有つ事を當然の權利とした。そして多くのお家騷動の原因を作つた。今日の大名華族の家庭にも亦其遺風が傳つてゐる。水野直子は華族の家庭に起つたさうした問題を解決す

るのに、忠實にそして懇切に働いた。彼れの政治的勢力がさうした努力に依つて築き上げられたと思ふと、吾々は笑つてよいか、怒つてよいか、途方に暮れるのである。

一言にして批評すれば、貴族院の基礎をなす所の華族社會は、時代の變化に伴ふ一種の生活問題に壓迫せられてゐる。それが貴族院の政治行動を支配する。

日本の歴代の内閣は貴族院に苦しめられた。それは苦しめられる方が當り前である。貴族院には解散がない。議員の四分三以上は有爵議員若しくは終身の勅選議員である。政府の力で免職する事も、少數にする事も出來ない。だから貴族院が政府を壓迫しやうと思へば、どんなにでも壓迫し得る制度になつてゐる。だから歴代内閣は貴族院に頭が上らなかつた。

所ろで、多年苦い經驗を嘗めた後に、如何にして貴族院を操縱するかと云ふ要領を發見したのが原敬であつた。彼れは研究會と結んだ。それは曾つて私が水野直論の中に書いた如く、學校昇格問題で、原が水野を使つた機會から始まつたのである。其時貴族院は原内閣の中橋文部大臣が議前の高等工業其他を大學に昇格すると云つて、昇格しないのを攻撃した。原は鎌倉に引退してゐた水野直を頼んで、此反對の氣勢を切り崩さしめた。水野は風の如く來り、風の如く去り、晝と夜となく貴族院議員の間を奔走して政府の味方を作つた。別に其間に大した金を費つたのではないと云ふ。野田大塊の書いた蘭の色紙を大事さうに袱紗に包んで、それを一枚づゝ贈物にした事もある。華族の本家が裕福で分家が貧乏してゐるときは、本家へ金の無心を云ふ世話をした事もある。女の出入りで紛擾がある場合にはそれを解決してやつた。さうして彼れの同僚議員をして彼れの云ふ事を聞かしめた。其結果として原内閣は昇格案では貴族院の暗礁を乘り切る事が出來たのである。

原は此經驗で如何にして貴族院を操縱するかの要領を呑み込んだ。華族は體面を重んずる。だから其交りは上品でなければならぬ。だけれども、華族の中には甚しく生活に困つてゐるものもある。だから其方に潤いの付く事を考へてやらねばならぬと。此要領を心得て、彼れは研究會幹部と屢々會食した。これはまだ内閣にも相談せぬ事だが、かうした政策を行はうと思ふが、何うだらうと云ふ。さう云はれると、研究會幹部は、天下を料理するのは君と僕だと云ふ虚榮心を挑發せられる。表面は君子の交りで美しさ此上なしである。同時に原は研究會幹部に特殊銀行若しくは大會社の重役椅子を與へる事を忘れなかつた。それは當人の利益になるのみならず、同族の利益になる筈になつてゐた。或西洋人が戀に定義を下して、戀とは美しき夢を見て、

醜き事を行ふものだと云つた。原敬は研究會をして戀に醉はしめた。政友會と研究會とは其時以來、兩院縱斷の政黨主義になつたのである。

大正十三年の初めに、研究會が策動して清浦内閣を成立せしめたのも、初めの趣旨は政研連盟して此時局を救はんと云ふ事であつた。それは美しき夢である。實は原敬と連結した時の潤澤な利益が忘れられなかつたのである。それを云はない所は華族らしい。所ろで、政友會は此提携を拒絶した。純眞な戀ならば、相手に拒絶されゝば思ひ止まる。然るに研究會は政友會に拒絶されると、今度は貴族院各派の代表者を入れて、清浦内閣を組織した。そして彼等の美しき夢は、純眞でない事を證據立てた。

清浦内閣は總選擧に敗れて、内閣を投出す運命に迫られてゐた。だが研究會は政權から全く離れるに忍びない。殊に多年研究會の正面の敵である憲政會に天下を取らせ度くない。若し中間内閣を成立して、研究會が其支持者たる事を得れば、それが最も望ましき事である。十三年五月には、清浦内閣の辭職は決定してゐたがまだ辭表は出されてゐなかつた。其頃研究會幹部は東京の或所に集つて、後繼内閣の事を相談した。それで今は故人になつた後藤新平子を推す事に相談を決めた。其頃元老の西園寺公は京都に居り、元老に接近してゐる近衛文麿公も京都に居た。研究會幹部は後藤を推薦する事に決定すると同時に、近衛の宿屋へ長距離電話を掛けた。そして、吾々はかういふ風に相談を決めた。西園寺公さへ承諾さるゝならば、今直ぐにでも後藤を京都へ出發させる積りだ。西園寺の都合を聞いて貰い度いと云ふのである。近衛は西園寺に聞いて、後藤は來るに及ばぬと云ふ返事をした。

研究會のみならず、後繼内閣の策動をするものは他にもあつた。一日近衛の宿屋へ京都の停車場から電話がかゝつた。田中義一大將が電話に出てゐる。今金澤で軍隊の檢閲をして來た歸りである。急に話し度い事があるから、停車場前の宿屋迄來て呉れと云ふのである。近衛が往つて見ると、名もない宿屋の二階に田中がポツネンと座はつてゐる。軍服には大將の肩章が付いてゐるから、それを隱くす爲めに、外套を着た儘でゐる。田中が云ふには、高橋の政友會と床次の政友本黨が今しきりに合同の運動をしてゐる。其合同は必ず成立する。政本合同すれば、それは衆議院の第一黨になつて、憲政會は少數黨になる。だから清浦内閣が辭職しても、憲政會の加藤高明を奏請するのはよくない。此事を近衛から西園寺に云つて呉れと云ふのであつた。

このやうに政權を憲政會に渡すまいと云ふ運動が渦卷いてゐる中に、水野直は度々京都に來た。それが東京から夜汽車で來て、晝の汽車で還り、又其夜の汽車で京都に來ると云ふ樣子であつた。京都に來ても西園寺を訪問するのでなく、只近衛に會つて一寸話しをして歸へる。それ丈けの事に彼れは京都と東京の間を幾度往復しても關はぬと云ふ風であつた。併しさうした努力の結果として、彼れは清浦內閣の後には加藤高明內閣が出來ると云ふ事を、如何なる政客よりも最初に直覺した。そして加藤內閣が出來るものとして、研究會は如何に身を處すべきかを考へた。研究會はそれまで何日でも憲政會とは反對の立場に居つて、研究會幹部で憲政會幹部と懇意なものは一人もなかつた。水野は憲政會內閣と交涉を付ける爲めに、近衛を研究會の筆頭常務に迎へた。今司法大臣になつてゐる渡邊千冬子などはそれに反對した。近衛を水野の傀儡にならしめるのは氣の毒だと云ふ心持ちであつた。だが近衛は研究會の幹部になつたのである。

加藤內閣の時に、曲りなりにも普選法が成立した、此普選法の成立した事に關聯して、國民は近衛に感謝すべき、かくれたる事實がある。人も知る如く、其時は護憲三派の內閣で、政友會も表面は普選案に賛成であつた。併し裏面では貴族院をして此を握り潰さしめる。さうして、加藤內閣を倒して、政權を政友會の手に收めんとする運動があつた。政友會の策士は研究會幹部を說いて普選案を阻止せしめんとした。それでなくてさへ研究會の幹部である青木信光子、渡邊千冬子などは政友本黨の床次と淺からぬ關係があつた。政友本黨は衆議院に於ても普選案に反對した。それ故に研究會は賴まれなくても普選案を阻止し度い處である。況んやそれが研究會に有利に政局を轉換せしめる槓杆になると思ふと、自然に熱心になる。渡邊は普選案の委員長代理として、衆議院の承諾しさうにない修正案を演說してゐる。第五十議會の會期は大正十四年三月廿五日に盡きる筈であつた。政府は普選案を通過さし度い爲めに、會期延長の詔勅を三度も奏請した。兩院協議會は容易に纏らない。これが纏らなければ普選法不成立になる處であつた。

衆議院と貴族院の議論の岐れ目は、缺格條件の一つに集中した。衆議院の案は「貧困の爲め公私の救恤を受くるもの」に選擧權を與へぬと云ふのであつた。貴族院は之を修正して「生活の爲め公私の救助又は扶助を受くる者」とした。これは親から學資を貰う學生、戶主と同居してゐる子弟を除外する事になる。つまり獨立の生計を營む者のみが選擧權を得る事になる。第二回目に延長した議會の會期は三月廿八日に盡きる。其夜十一時になつてまだ兩院協議會が纏らずに居た。最後に政友會の岡崎

邦輔氏が貴族院案の上に「貧困に依り」と云ふ五字を加へて、衆議院側は承諾すると云つた。貴族院側もそれに折り合つて普選案が成立した。

貴族院がそれに折り合ふ迄には近衛が極力働いたのである。彼れは初めから普選は成立せしめなければならぬと云ふ意見であつた。殊に華族を中心とする貴族院がそれを阻止したとあつては、華族が國民の怨府になる。それはどうしても避けなければならぬ。そして貴族院をして普選に賛成せしめる爲めに彼れは水野直の力を借る方法を採つた。

所ろで水野は腹に一物あつた。それは普選を通過せしめる代りに、同じ議會で問題になつた貴族院改革を成る丈け軟かにして貰い度いと云ふことであつた。人も知る如く加藤高明は貴族院改革には熱心でなかつた。それでなくてさへ、自分は澤山の荷物を背負つてゐる。所ろで後ろからこつそり忍び寄つて、も一つ荷物を背負はした。それが貴族院改革案であると、加藤はかうした愚痴を溢ぼした程、貴族院改革には氣乗りがしなかつた。だけれど、政友會の横田千之助は貴族院の華族議員を現在の半數即ち百名位に減少すると叫んでゐた。華族の生活と幸福を一人で擁護する積りでゐる水野としては、横田の貴革案を見て驚いた。之れは同族の浮沈に關する一大事と思つたのもあながち無理とは云へなかつた。彼れは窃ゝ近衛に接近し、加藤に接近し、貴族院改革が不徹底に終るやうに努力した。其代りに研究會をして普選を阻止しないやうにする事を誓つた。それが彼れ一流の交換條件であつた。

前に述べた如く、普選案の運命は一時風前の燈の如く見へた。三月廿八日の午後、研究會は貴族院の控室で總會を開いて、普選案に對する態度を決せんとした。普選の成立に賛成するものと、反對するものが激論を闘はした。渡邊千冬が反對論の先頭に立ち、大河内正敏が賛成派を唱へる。兩方が激昂して、殆んど腕力に訴へんとする光景を呈した。議論が纏らずして賛成派は別室に引揚げた。其時引揚げて來たものの大部分は華族議員であつた。水野が同族の間を、普選賛成に奔走した事がそれで判つた。元より彼れの眞意は普選案などはどうでもよかつたのであらう。只近衛との交換條件で、貴族院改革を生温くして貰い度い爲めに普選案の爲めに働いたと見へる。かうした騒動のあつた後であつたから、流石の研究會も折れて普選を成立せしめた。貴族院改革の方は伯子男互選議員を一六六から一五〇に減するに止められた。茲に華族議員の互選規則に幹部專制を助ける制度がある。伯爵から一八人、子男爵から各六六人を選出するのにそれが連記になつてゐる。投票者は投票に單に一人の議

員の名前を書くのでなく、一八人、若くは六六人の名前を並べて書くのである。幹部が候補者を選定して、誰れ〳〵に投票して呉れと有權者に推薦する。有權者は大抵その儘に投票する。有權者が五人や十人で、誰れか外の人の名前を書き込んでも物にならない。幹部に睨まれると議員になれる見込みは全然なくなる。だから此互選規則なるものが幹部の威勢を強くする。貴族令中に此互選規則は規定されてゐない。別に勅令を以て定める事になつてゐる。だから、加藤内閣が貴族院改革を企てたとき、此互選規則の方は貴族院の議に掛けなかつた。貴族院の質問に對して、互選規則を變へるとも變へないとも云はなかつた。若し貴族院が飽くまで政府の政策に反對するならば、此互選規則を變へて、連記を單記にする。そして華族議員閥の幹部專制を打破して見せる。即ち最後の切札としてそれを懐に入れてゐたのである。結局、普選も成立し、貴族院改革も不徹底ながら出來た故に、互選規則は變へなかつた。現在でも連記制が殘つてゐる。從つて、切札として政府はいまだにそれを握つてゐるのである。將來貴族院が再び頑張るとき、政府は又此切札で脅かし得る餘地を殘して居る。

尤も幹部專制を打破する爲めには連記を單記にする方がよいが、華族制度そのもの、爲めには單記には、かなりの危險が作つてゐる。華族の大部分が貧乏して居り、其思想が捨鉢的になつてゐる現狀に於ては、投票の賣買が行はれる惧れがある。單記にすれば、五、六票で當選する。任期七ヶ年であるが故に、一票千圓で買收しても勘定に合ふ。華族社會が悉く買收の網にかゝる場合、其所に華族制度の沒落が來る。貴族院が單記を恐れるのは、必ずしも幹部專制が打破されるのを恐れる許りではなく、彼等の存在の基礎である華族制度の崩壞をも恐れてゐるのであらう。大正十四年の貴族院改革の不徹底なる事は、兎も角も華族の政治的權力を維持し、從つて又、彼等の生活の基礎を維持するに效があつた。

研究會は子爵議員を中堅にしてゐるが、水野が活動してゐる間は、勅選議員、多額納税者議員を研究會に入れる事に苦心した。只人數を增やすばかりが目的であるかの如く、政友會でも民政黨系でも、一切お關ひなしに收容した。一寸考へれば全く無方針であるかの如く見へるが實は其所に水野の遠謀遠慮があつた。と云ふのは、何か問題が起ると、水野は會内の政府反對の議員を煽動して政府を攻擊せしめる。實は同時にそれを壓伏せしめる丈けの手兵は一方に備へてゐるのであるが、その事は噯氣にも出さない。却つて政府に向つて、會内でかうした反對が起つてゐるから、それを鎭めなければならんと云ふ。それが

政府を威嚇する材料になる。或は會に何かの利益を獲得する手段になる。水野が片手にマッチを持つて、火を付けて廻り、片手にポンプを持つて、其火を消して廻ると、かうした定評を受けたのは其爲めである。水野は何日も暗闇を縫つて歩るく。そして其政治的理想は同族の利益を增進する以外に、何物もなかつたと思へば、彼れの心事も稍々正確に諒解されるであらう。此意味に於て貴族院は華族の生活擁護同盟になつてゐる。恰も勞働組合が勞働者の生活擁護同盟である如くに。

だから貴族院は今日に至つては愚劣な存在になつた。それが初めて作られたときは其積りではなかつた。日本の憲法制定當時に於ては官民の對立抗爭が極端に惡化してゐた。全日本に澎湃として起つた自由民權の思想は國會の開設を待つて一擧にして藩閥政府を顚覆せしめるかの形勢を示した。政府の要路に立つものは藩閥政府の倒れる事は日本の國家が倒れる事であるかの如き錯覺を抱いてゐた。然るに國會は明治廿三年に開かれる事に決定してゐる。其前に伊藤博文は立憲政治見學に洋行した。歸つて來て彼れと及び彼れの屬僚の考慮した事は如何にして民論の横溢するのを防ぐかにあつた。そしてそれを抑壓する爲めに二段の防禦線を張つた。第一線は衆議院に對する貴族院である。第二線は内閣に對する樞密院である。伊藤の憲法義解には、衆議院と貴族院とは車の兩輪の如く、内閣と樞密院とは鳥の兩翼の如しと云ふ思想が流れてゐる。衆議院が民黨に取られた時、貴族院で之を防ぐ。内閣が民黨に取られた時、樞密院で之を防ぐと云ふ計畫である。樞密院が内閣以上の内閣であり得ることは、昭和二年にそれが若槻内閣を倒した事で、吾々が記憶を新らしくした。貴族院も亦衆議院以上の權力を與へられてゐる。衆議院は解散されるけれども、貴族院は解散されない。衆議院の構成法である所の選擧法は兩院で議決されねばならぬが、貴族院の構成法たる貴族院令は貴族院のみの議決で決定される。する仕事は同じで、地位の安定してゐる點に格段の相違がある。伊藤は兩院を車の兩輪の如しと云ふけれども、衆議院は何日でも取外し得られる輪で、貴族院は取外し得られない輪にしてゐる。彼れは樞密院最初の議長になり、貴族院最初の議長になつた。そして其所に自分の勢力を植ゑ付けて、政府擁護の機關を充實したのである。

其伊藤も貴族院の強さには手を燒いた事がある。彼れが藩閥政治家であつた間は、貴族院は忠實に彼れの御用を勤めた。然るに彼れが政友會を組織し、其總裁として内閣總理大臣になると貴族院、殊に其中堅たる研究會が彼れに反噬し來つた。明治三十三年十二月廿二日に召集された第十五議會に於て伊藤は増

税案を出した。それは北淸事件に日本は出兵してゐる。其軍隊の給與費を拵らへる爲めであつた。衆議院はそれを可決したに關らず、貴族院の特別委員は否決した。伊藤は國外に居る兵隊は養はなければならぬと云つて哀訴歎願した。けれども、貴族院は頑として聽かない。それは其當時は山縣系の淸浦が研究會を牛耳つてゐて、故意に伊藤を苦しめたのである。伊藤は進退谷つて、內閣と貴族院の調停を元老に依賴した。所ろで貴族院を煽動してゐるのが山縣であるが故に、元老の調停に效果のある筈がなかつた。最後に伊藤は明治天皇に奏上して、詔勅を貴族院に降して貰つた。それで貴族院は政府案に贊成した。

伊藤は餘程口惜しかつたと見へて、其當時貴族院改造の上奏文（伊藤博文祕錄揭載）を書いて居る。其中に

「退いて熟思するに、憲法の運用に於て、國民の代表者たる衆議院と政府と意見相容れざる場合には、解散して以て國民の可否を問ふことを得るも、貴族院と政府と衝突し、今日の如き形勢を將來に遭遇するも、圓滑の經過を望むべからざるや明なり。竊に憲法制定に當り、臣實に大命を奉し、其經畫の任に居る。而して今日の如き疏通すべからざる難境に陷る。畢竟臣が經畫の時に於て、周密を缺くに基かざるを得ず。玆に於て乎、將來憲法政治の生活をして永續せしめんとするに於ては、貴族院改造の一方あるのみ。陛下若し臣をして倚大局を全くするの責任を負擔せしめられん乎、臣貴族院改造案を具し、上奏　聖裁を仰ぐべし。」

と云つて居る。此上奏文が果して提出されたか否か判らない。兎に角、伊藤自身ですら貴族院改革を必要とした事は事實である。此伊藤の意見が實行されなかつた爲めに、貴族院は今尚絕大の權力を有つてゐる。そして貴族院の本質が如何に時代に適さなくならうとも、其政治的權力は偉大である。

私は二院制度の存在を肯定する。それは政治は鬪爭に依つて進步し、專制に依つて墮落すると思ふからである。だが、それが直ちに日本の貴族院に適用されるのではない。貴族院は藩閥政府の防禦第一線として築かれた。そして其使命を果したのである。其內に藩閥政府それ自身が崩壞した。藩閥の巨頭の伊藤自身が政黨內閣を作つた時、貴族院は伊藤に反抗した。其後十何年間は貴族院は山縣系官僚の牙城になつてゐたが、原敬內閣時代になつて、貴族院の中の研究會が政友會と連結した。そして最早藩閥擁護の使命などは思ひ出さなくなつた。水野の活動時代には只華族擁護が貴族院の使命であるかの如く見えたが、水野が死んで、貴族院は其指導原理を失つた觀がある。

併しそれが二院制度無用を證明するものでない。國の政治は

何人の專制でも專制になる事は好ましくない。伊藤時代に於ては人民の勢力に對して、政府を擁護すべく貴族院の城壁が築かれた。然るに今日に於ては、政府は大抵の場合政黨内閣である。衆議院の多數黨が政府を取る事に運命が決してゐる。其場合政黨政府の專制に對して、人民を擁護すべき第二院を必要とする。例へば昨年の議會に於て、政友會内閣が後に疑獄の種になつた私設鐵道買收法案を出したとき、貴族院がそれを握り潰した。それは確かに人民の感激を買ふべき行動であつた。日本の衆議院議員選擧に少しも投票の賣買がなく、衆議院が眞實に民意を代表する日になつたら、いざ知らず、それ迄は、第二院に存在價値がある。それは人民に對して政府を擁護する爲めでなく、政府に對して人民を擁護する爲めである。元より此目的を達成するには只華族の生活擁護同盟の觀がある所の現在の貴族院の組織は適當でない。今少しく明確なる指導精神を有する、そして徹底的に人民を代表するものとしなければならぬ。

貴族院改革に關する世界の趨勢は第二院無用論に傾きつゝある。其尖端を切るものとして常に引用せらるる例はノルウエーの上院である。それは下院の議員中より黨派の比例、代表に依つて、四分一の人數を互選せしめて、それを上院とする。殘り四分三が下院になる。即ち上院は日本の衆議院の豫算委員會程度のものである。形は二院制度でも、實は一院制度である。保守的な英國に於てすら、上院は甚だしく權限を縮少せられてゐる。金錢に關する法案は三度下院を通過すれば、上院が反對しても法律となる。結局上院は下院の行動を一、二年間猶豫せしめる機能しか有たない。

日本に於ても各種の貴族院改革論が唱へられてゐる。其中に研究會を脱會した近衞文麿公の意見が注目に値する。彼れの說に依れば、貴族院には解散がない。又政府が一時に多數の勅選議員を作つて、有爵議員を壓伏することも出來ない。かうした難攻不落の城塞に立籠つてゐる貴族院が、猥りに政府の政策を妨げるのはよくない。だから一方には制度の改革を研究すると共に、一方には現在の制度が存續する間は成る丈政府の政策を妨げないやうにすると、これは極めて謙遜にして穩當なる說だと云はなければならぬ。

日本の貴族院が改革の必要に迫られてゐる事は自明の事柄である。貴族院は華族階級の基礎の上に立つ。其華族階級が經濟的に沒落しつゝある今日、其上層建築たる貴族院は崩壞せざらんと欲しても、崩壞せざるを得ない。だから今の内に改築しなければ周圍の者に危險である。

同時に日本の既成政黨の現狀を見れば、貴族院を廢して、政

黨政府が專制を行ふ事を歡迎する氣にはなれない。玆に有力なる第二院を置いて、人民の利益を擁護せしめ度い。衆議院の政治議會たるに對して、貴族院を經濟議會たらしめ、或は衆議院の地域代表に對して、貴族院を機能代表たらしめるなど、其方法は急速に研究すべきである。

目下の政情に於ては、貴族院全體は漠然として向ふ所を知らずと云ふ狀態である。其中の最大多數黨である研究會は水野の死後、統制が取れてゐない。小笠原長幹伯、青木信光子、牧野忠篤子が押へて居る如く見へるが、彼等は水野の如く、痒い所へ手が屆かない。末梢神經が動かない。從つて會員が右往左往する。貴族院全部がそれと同じく指導精神の皆無を證據立てるであらう。其所に政治的野心のあるものに活動する絕好の機會が提供さるゝと共に、一般民衆は伊藤公とは違つた意味で、貴族院の改造が如何に必要であるかを見せ付けられるのである。

メーデーの集合まで

葉山嘉樹

火のない火鉢を抱へて、私はバツトを吹かしてゐた。

勞働組合の事務所つてものは、どこだつて殺風景に極つてゐる。

だが、殺風景の中に、勞働者の、色とにほひがある。

『一體、皆の奴等あ、どうしやあがつたんだ。こいつあ、少しはやすぎたかな。』

私の眼に、メーデーのポスターがくひ込んだ。睡眠の足りない眼だ。

勞働者の巨腕が、紙から浮き出してる。肥つたブルジョアが、逃げた風船玉みたいに吹き飛ばされてゐる。

よごれ目かくしに貼つたんぢやないから、ポスターが生きてゐる。

外は、五月晴れの朝だ。

テーブルの上は、きれいに片づけてある。部屋の隅つこには、赤旗が束になつてゐる。

階段をあがる跫音がした。

『誰だ。』

私は、さつきからのいらだゝしさをぶちまけた。

『俺だ、加藤だい。』

あがつて來たのは、常任書記の加藤だつた。

『どうしたんだい、馬鹿にみんながおそいぢやねえか。——』

やけにバツトを吹かしながら、私は怒鳴つた。

『お前が、はやすぎたんだよ、俺達や今迄足を曳き摺つて、ぐるつと分會をまはつて來たんだぜ。——』

コールテンのすつきれたボロ服の、元仕上工、今は失業者、私達の組合の書記、加藤がさう云つて足を叩いた。

『それで、どうなんだい。集まるのかい、集まらないのかい。おい、今日はメーデーだぜ。』

『何云つてやがんでえ。今に雲霞の如くだぞ。今年や去年よりやい〳〵や。』

『フム、そいつあ有難てえ。——』

窓の外は、工場の屋根の山と、煙突の林だ。黒煙が、青空に吸ひ込まれてゆく。

赤い煉瓦のが、紡績工場とゴム工場。どす黒い怪物が製鐵所。コンクリートがビール會社。すつとむかうに、人橋の太い鋼鐵製のアーチが、屋根の山間からのぞいてゐる。

『畜生、煙があがつてらあ、なあ、加藤。メーデーでもメーデーらしく見えなあ。あの煙突から吐き出す煙をみろ。メーデーでも、空は煙でネズミ色だ。』

私は、昂奮してゐた。

『ほんたうだ。俺達の責任は重い。』

加藤はテーブルの上で、赤い腕章をこしらへながらつぶやいた。

『てめえ一人で運動してゐるやうなこと云つてやあがら。』

私は窓から道路を眺めた。

むかうから黒い人の塊と、赤旗が目にはひつた。

『おい、どつかの分會が勢揃ひしてやつて來たぜ。』

私はぢつとしてゐられなくなつて、夢中で階段を降りた。

ベルトの唸るやうなメーデー歌が流れて來た。

三十人位の一團が、赤旗をかついでやつて來た。

S製鐵所の職工達だつた。

『よう、同志。』

飛び出した私の周圍を、ナッパ服の、黑い鐵色の、固い手がとり圍んだ。

私は、一つ一つ握りかへした。

『早いね。』

『なあに、私達がおそいんだ。』

一體、君達の同志は、みんなその仕事場によつて、ちがつた匂をもつてゐる。

ゴム工はゴムが、鐵工には、鐵のサビが浸み込んでゐる。

私は、そのどす黑い色と、鐵粉の匂ひの中で、冗談を云ひながら、腹の底から愉快になつた。

鐵やけしたどの顏も、いつもの暗さがふつ飛んでしまつて明るい。

そして、胸の底に燃えてゐる。ブルジョアジーに對する怒りが、焔をあげる。

『畜生、俺達の兄弟をみんな工場からひつぱり出してみてえもんだなあ。』

私は煙突を見上げてつぶやいた。

『どうせ、何時かは、さうならあね。なあ、波田君。俺達の運動は芋蟲の歩くのと同じなんさ。』

私のうしろに立つてゐた石鹼工の中田が、肩をたゝいて云つた。

私は、思はず吹き出した。

『芋蟲とは、うまく云やあがつたな。』

私達は、時間を忘れて、話してゐたが、氣がついてみると事務所の前は、すつかり仲間の山になつてしまつてゐた。

道路のむかう側にある、M製薬所の、高い塀から、白服の職工達が、この騷ぎを覗いてた。

——卑怯者、去らば去れ、
我等は赤旗を守る。——

私達の一團が、反抗的にうなり出した。

塀に噛りつきながら、職工の一人が、赤い布を振つた。みんながそれにならつた。

それが、何を意味するのか私にはわからなかつた。が、怒鳴つた。

『出て來い！』

『出て來い！』

塀から、頭が一つ消えた。また消えた。

そしてみんな消えてしまつた。

『まゝにならぬが浮世かな。畜生！』

私は、浪花節を唸りながら人々の中を泳ぎ廻つた。

それから、私達は道路の片側に列をつくつた。

赤旗が、バンドのやうに。群集をひきしめた。

がつちりと一塊になつた私達の一團は、勞働歌を街の上に明日の日の太陽のやうに撒きながら、地響とゝもに、N停留所の方へ向つた。

『おい、今年も、電車一臺占領出來るぜ。』

追つ駈けて來た加藤が、素朴な笑ひを浮べて私に囁いた。

（一九三〇・四・一〇）

ブルジョワ・インターナショナルの一環

亀井貫一郎

一、赤の幽靈

千九百十七年三月十四日ウッドロー・ウイルソンは二度目の大統領の任期を始めた。其の壓倒的な人氣と勝利とは、彼が米國を歐洲大戰爭と云ふ狂暴な滑稽な夢の中に捲き込ませなかつたが故に彼に與へられたものであるに拘はらず、彼が二度目の大統領の椅子に座つてから丁度三十三日目には、米國の全土を擧げて戰爭の泥沼の中に陷沒させてしまつた。

新しい自由！ 彼が參戰の理由として街頭に呼び掛けた新しい自由は千九百十七年六月と千九百十八年五月の間諜取締法と逃亡者取締法となつた。大掛りな宣傳局が政府部内に設けられて、國民の間にヒステリーと憎惡の嵐を煽り立てた。司法省は幾千人の探偵と暴力を養ふ巣になつた。情報局關係では二十萬人の密偵が傭ひ入れられて昨日迄友人であつた人の行動を探偵すると云ふ愛國的な任務に服することとなつた。けれ共之等の人は、「ホントの獨逸の間諜やホントの革命分子を押へる事は出來ないで、狂氣の樣になつた反動が平常から惡んで居たり恐れて居たものをやつつける役をしたに過ぎなかつた」と、博士ペアード夫人は言つて居る。最先きにやられたのはI・W・Wであつた。勞働組合の急進分子であつた。社會主義者自由思想家の群れが第二の犧牲となつた。その中にはユージン・デブスが居た。家庭も俱樂部も學校も泥靴で遠慮なく荒らされて行つた。世界革命の聲がロシアの方から聞こえて來た時には彼等は愈々狂暴になつて行つた。恐怖と憎惡の洪水の中で生活の否生命の危險すら感じ出したのは外國から移民としてやつて來た勞働者であつた。彼等が讀者としてる外字新聞は彼等の代辯者として急に愛國的な政府支持の論說を揭げ初めた。彼等は彼等で大急ぎで愛國自由公債を買ひ始めたりした。だがこの表面的な忠順の中に大きな呪が匿されて居た。「米國人」の疑惑の眼と嫌厭の色が平常から其の周圍に感じて居たからだ。しかもその疑惑と嫌惡は支配階級としての「米國人」が「勞働階級」としての移民の忠誠に對する處のものであることを漠然と感じて居た。ラヂカルな彼等の一部は更に進んで認識して居た。戰爭はたゞ支配階級の戰利品獲得の冒險で勞働者は只犧牲となるものだと。勇敢な連中は公然戰爭を否難した。他の人々は固

境を超へた。彼等にとつては國境でない處のものを、

米國の東部には伊太利の移民が勞働して居た。千九百十七年五月マサチユセッツ州に居た伊太利移民の一團は國境を超へてメキシコに入つた。其の中にニコラ・サッコとバルトロメオ・ヴアンゼッチが居た。二人はかねがねの知り合ひであつたが、汽車の中で特に懇意となつた。メキシコに入つてから二人の親交は特に深められた。

デモクラシイの爲めの戰爭は懲罰的ヴエルサイユ條約で終つた。鐵道は政府の管理から元の手に戻された。生活必需品價格の公定は廢められた。萬事は戰前の米國の姿に復つた。だが元の狀態に復らないものが一つあつた。思想言論の自由である。休戰が出來てからも間諜取締令と逃亡取締令は廢止されないで事實上の勞働者取締法となつた。アルバート・パールソンが依然出版物檢閲の采配を振り、司法省ではミッチエル・パーマーが「赤」に對する大規模な宣戰を布告した。戰爭中政府が培ひ得た處の憎惡はこゝに捌口を見出した。人殺しが上手になりながら休戰の御蔭で殺し足りないで歸つて來た連中は何かいゝ對手はないかと探して居る時であつた。戰爭で儲けた連中――米國の資本家は大概洩れなく儲けたものであるが――は其の獲得した富の故に殊更に神經質になつて居た時であつた。何故かと言へば、ロシアは列國の包圍的攻擊の中で中々閉口たれる樣子も見えなかつたし、ドイツ、ハンガリーには動亂が相續いて居たし、歐洲經濟組織は今にも崩壞しそうで、それが米國を道伴れにしさうに思つたし國內では又製鋼勞働者の罷工した後でシアトルには總罷業が起り、ボストンでは警官迄がストライキをやり、戰時工業は頓挫し、復員された兵士は勞働市場に充滿し、資本家は「オープン・ショップ」でかつがつ息をつかねばならぬと云ふ有樣にあつたからである。赤狩りは燎原の火の樣に捲き起された。だが赤狩りとは眞の犯罪としての赤狩ではなくて、こゝでも、思想運動者狩りであつたのだ。

二、小包の爆彈

千九百十九年五月紐育中央郵便局は郵便小包になつた十六個の爆彈を押收した。押收し損ねた爆彈は宛先きに届けられたが、其の中で一個はジョージア選出上院議員ハードウイックの私宅に届けられて黑人女中の足を奪つた。

六月二日には又爆發があつた。續いてヒラデルフィア、パターソン、ピッツバーグ、クリーヴランドで爆彈の爆發が報ぜられた。其の次に紐育ではある裁判官の私宅に爆彈が届けられ、爆發して其の玄關番が殺された。最後に、ワシントンに於ける檢事總長パーマーの家で爆裂が起つた。破壞された跡の煉瓦の集塊の中に、爆彈を仕掛けたと推せらるゝ者の衣服の斷片と肉塊とがあつたと發表された。更にワシントン警察の發表に依れば現場に資本家階級の身邊に迫りつゝある復讐を豫告したリーフレットが見出されたといふ。

全合衆國の警察神經系統網は興奮し緊張せられた。人や通信が強い電流の樣にその綱を往來した。あらゆる捜索が行はれた。しかし其の一個の爆彈の經歷すらも明にし得なかつた。人々は之が「赤」の大規模

な組織的計畫のあらはれであると信じた。偉いと思つてる人々は護衞を傭ひ込んだ。銀行や工場では使用人の間にスパイを入れた。又使用人中のあるものをスパイに買收した。私立探偵局は俄に金廻りがよくなつた。反動團體は急に權力を振ひ出した。誰が爆彈を發送したとしても、要するに之で儲かつたものは私立探偵であつた。之で大規模の「不逞勞働者」淸算の口實を得たものはパーマーに外ならない。私立探偵界の雄ウイリアム・フリンは終に司法省のパーマーの官房で「赤狩り」の參謀總長格に自分を造り上げて仕舞つた。フリンは私立探偵としてガング團の一味と關係があつたとも後で疑はれた事を附記して置く。

司法省内にはそれから尋常でなく昂奮した空氣が感ぜられた。パーマーの官房では、パーマーとフリンが、幾日も長時間に亘つて顏をつき合して居た。ロシア革命の二週年紀念日が一齊手入れの日と定められた。千九百十九年十一月七日の夜、全國十一都市の外國移民勞働者住宅區域に亘つて、管轄各警察とフリンの手のものは、一齊に、勞働組合本部、勞働學校、勞働者俱樂部に踏み込んだ。幾百人の「赤」「無政府主義者」が念珠繫ぎに警察に引張つて行かれた。其の中には折惡しく丁度其處に居合はした丈けの多數の男と女が含まれて居たし、其時丁度學校で「初等英語」を習つて居た丈けの多くの新來移民も其の中にあつた。警官隊は家屋を破壞し、書齋を滅茶苦茶にし、道具を毀つた。

クリスマスの丁度前にブュフォード號は捕へられたものの中の二百四十九人のロシア人をのせて先づ送還の途に上つた。次にはイタリー人の勞働者や思想運動家をのせた船が大西洋を北に橫切つた。余り滅茶であつた。ロスコー・パウンド、スウインバーン・ヘール、フランシス・フイッシャー・ケーン、フランク・ウォシ、フェリックス・フランクフルテル等十二名の法律學者又は法律專門家は證據を蒐集して、抗議的公開報告書を發表した。夫れには、前記の踏み込みと送還が違法であるのみならず、パーマー又はフリンの命令の下に勞働階級の内部に潛入つて働いて居たスパイが豫め勞働者を使嗾煽動し、集合をさせたり、演說をさせて、勞働者殊に移民勞働者を陷穽に誘ひ、之等に對する大襲擊の口實を醸成をしたものであることを明に指摘して居る。

この中のフェリックス・フランクフルテルはハーバート大學法律學部の教授であつた。ハーバート大學は之が爲めに富豪の寄附金が減少し維持費の集金が惡るくなつた。

三、自由の終り

ヴィンゼッチはこの時メキシコからマサチュセッツ州に歸つて居た。毎日ブリマスに魚を賣りに出掛けて居た。伊太利人・露西亞人・猶太人の女房には彼の鈴の音と押車の響がなつかしまれた。と云ふのは、彼は實際に好人物だつた。或る人には生れ故鄕の伊太利ピードモントなまりで、或る人にはタスカニヤなまりで、ある人にはブロークンな英語で、鱈やハリバットやハドックの目方を秤りながらも、女房達の子供の健康や學校や其の外の事どもを聞かずにはいられなかつたと云ふ風であつた。けれ共、女房達が時々啞然としてさて又深い感嘆を洩らさざるを得なかつたと云ふのは、この魚賣りの口から、ピエトロ・ゴリ、ギウ

スチ、ゲリニ、ラビサルチ、ヤルドウッシの詩句や、ユウゴウ、ゾラ、カンチェ、トルストイ、ゴリキの小説の梗概やルナン、ミセルボの基督傳が語られたりしたからだ。事實この魚賣りは、ダーウインもスペンサーも、ラプラスもフラムマリオンも勉強して居た。クロポトキン、メルリノ、レオーネ・ヅ・ラブリオラ、カルロ・ピサカーネ、マッチニ、そしてマルクスを勉強して居たのだ。それは一面彼の痩せた凄味のある行者的な風貌、黝ずんだ皺だらけの頸、廣い前額、特にラスプーチンの髭にも似たる處の、漆黑で、太くて、長くて奇怪な髭に顯れて居た。だから、彼は彼を知れる總ての人に愛せられて居たに拘らず彼を知らずして毎日彼を途上に見る處の階級、即ち「米國人」にとつては、彼は何となく奇怪的で且つ威迫的な存在に思はれて居た。

魚商賣は時にはよかつたが毎日需要がある譯でもなかつた。金曜日と休日の前日にはかれこれ百弗から百二十弗にはなつた。

千九百十九年の春は、クリスマス――伊太利人はクリスマスに鰻を喰べる――がすんだ處で一應魚賣を片附けた。それからは氷の鋸引きに働いた。春になつて積る雪をかきわけてプリマスの街路掃除をした。ピューリタン・ウーレン・コムパニイの水道工事に働いた。そして又四月の終りから魚賣に戻つて居た。

此の時サッコもマサチュセッツ州に歸つて居た。三K商事の工場で靴踵を作つて居た。素晴らしくい〻腕で主人同僚の氣受けもよかつた。

彼は主人ケリーの隣に少さなバンガローを借りて居た。朝は太陽と共に起き出でて自分の庭の手入れをした。工場で夜遲く迄働いて來ても歸つて來ると又庭に出なければ氣がすまない彼だつた。自然に主人ケーリの庭の手入迄も引受けることになつて仕舞つた。事實彼の精力は際限がなかつた。と云ふのは日課が終つても又仲間のことと云ふと出掛けて行つて、一時三時でなければ歸らないことがあつた。しかし愛妻ロジナと息子ダンテとの生活には彼は足り滿ちて居た。ただ一家を引連れて伊太利の故郷に歸省し度いと思つて居た。其の爲めに銀行には千幾百弗の貯金が殖ゑて行つた。ヴアンゼッチはよく遊びに來て夕飯を一緒にしたりした。二人は送還された伊太利の家族や送還の爲めに檢束されて居る伊太利人の救濟問題を考へたりした。實際檢束も送還も少しも止まなかつた。一昨日はガレアニマルッコーが送還された。しかもマルッコーは、伊太利に着く前に、不可解な死に方をした。昨日はコアッチ、フルゼッチが送還された。妻と子を大陸に殘こして。今日はサルセドーとエリヤが捕まつた。と云ふ風であつた。捕まつた連中の中で少し目星しいものは明に愛讀の圖書を引合ひにして拷問に會つて居た。事態がこうなつて來たのでヴアンゼッチもサッコも伊太利人の仲間は寄合つた。捕まゑられてはやり切れない。所持の思想的圖書丈け早く匿くして仕舞はねばいけない。

家庭でも倶樂部でも。これは五月二日のことであつた。其の翌日、パーマーの經育出張所のあるパーク・ロー・ビルヂングの十四階から人の身體が飛び出して舗装された人道の上に落ちて死んだ。死體は無花果の實の樣になつて居た。司法省の出張所員はそれが何人であるかを祕密にしようとしたが、新聞の方が先廻りしてそれがサルセドであつた

ことが報導して仕舞つた。サルセドは明に十四階の部屋の窓から突落されたのだ。しかし司法省はサルセドが八週間の檻禁から氣狂になつて自殺をしたのだと發表した。

だが新聞は犯罪の證據なくして、八週間に亘つて檻禁したのは何故かと追究した。パーマーはあわてて追加した。いやサルセドとエリアは千九百十九年六月二日の爆彈事件に關係があることを自白した。しかし外の證據がないから其の證據の擧げらるゝ迄、及び彼等の口から自白した共犯者が捕へらるゝ迄、「本人と其の辯護人の承諾の下に卽ち本人の任意の意思に依つて」留置場に止めて置いたものであると。紐育の司法省出張所は更に追加した。サルセドとエリアは其の共犯者を自白した。彼等は其の自白に對して仲間からの復讐を恐れて、自ら留置場に止められんことを要求した。當局は保護の爲めに彼等を留置して置いたものであると。新聞記者の中にはエリアに面會を許せと當局に要求し出したものもあつた。だが、エリアは、どう云ふ譯か不意にエリス島の移民收容所に移されて、そこから間もなく伊太利に送還された。伊太利人の一團はこうなつて來たので第一に思想的鬪爭を始末するの急を感じた。米國には讀書の自由すらなくなつた。其の讀書はいや應なしに彼等を爆彈に結びつけて仕舞うのだ。第二に演說會を開催して同胞の爲めに大衆的抗議をしなければいけないと思つた。演說會は五月九日ブロックトンで開催することに決定した。ヴァンゼッチが演說することになつた。宣傳ビラは出來た。サッコはその一部を大事にしてポケットにねじ込んだ。次は鬪爭の始末であつた。仲間の一人ボーダが自動車を持つてゐた。それはウエスト・ブリッヂウオーターのエルム・スクェテのガレッヂで修繕中だつた。ヴァンゼッチとサッコとボーダと外一人は五月五日にこの自動車を受取つて、四人で各自所有の「危險な圖書」を集めて安全な處に運搬することに決めた。五月五日の夕方四人は豫定の通りそのガレッヂに集めた。ガレッヂの主人サイモン・ジョーンズは四人を見ると何だかそわそわし出した、そして暫時まごついて居る樣であつた。彼の妻は青ざめながら妙に興奮して居た。四人が主人と話しを始めると妻は隣迄行つて來ると云つて外に飛び出した。主人は自動車の修繕は出來たが未だ鑑札が警察から戾つて來て居ないからと言つて引渡しを拒んだ。四人もそれ程急ぐ譯でもないので之を承知して外に出た。サッコとヴァンゼッチは電車に乘つた。ボーダと外一人はオートバイで歸つて行つた。電車がウエスト・ブリッヂウオーターを出て之からブロクトンに入らうとした曲り角でサッコとヴァンゼッチは捕縛された。自動車に乘せられて警察に連れて行かれた。之が彼等魚行商人と職工との二人のこの世の自由の終りであつた。

四、強盜團

戰爭中と戰爭後の赤狩りは何處の國でもある樣に強盜團の跳梁が結果した。「だがそんな事は何でもない。強盜團は一個人の財產の一部を奪ふに過ぎないが、赤は我々の階級としての生命と財產を奪はうとして居るのだもの」。「米國人」はこう耳語したものだ。「赤」とはコムミユニストのこと許りでは勿論ない。アナキストもサンヂカリストも勞働組

合主義者も社會主義者も自由批評家も、苟しくも彼等を批判するものは皆赤だつた。強盜團は跋扈を始めた。それは警察の目が赤に轉ぜられて居る隙を利用したと云ふ樣な生優しい事ではなかつた。反動的な暴力公認の一般的風潮を利用したものであつた。否、彼等實際の責任者以外に彼等の行爲に對して責任を負はされるものがあると云ふ事實を利用したのだつた。強盜は殊にマサチユセッツに於て著しかつた。銀行襲擊、俸給支拂の金を銀行から持つて來る途中のホールド・アップ。新聞には之等の初號見出しが斷えなかつた。千九百十九年十一月十七日ランドルフの貯蓄銀行は自動車に乘つた四人のものに襲はれて金庫から三萬六千弗が消えて行つた。同年十二月にはブリッヂウオーターでホワイト製靴會社の會計は從業員の俸給に支拂ふ金をトラックに載せて銀行から會社に歸る途中、四名の自動車に乘つた賊の爲めに襲はれたが辛ふじて免れた。千九百二十年四月にはサウス・ベイントリーで其の町の收入役と護衛が自動車に乘つた五人の壯漢に襲はれ、公金袋を奪はれた上に殺害せられた。以上はしかし強盜事件の相續く連山の中で特に人の耳目に聳立した二三の嶺に過ぎなかつた。ブリッヂウオーターの警察署長とミカエル・スチユワートは田舍廻りの老警官としての長い生涯の中で此頃程生き甲斐のある活動の日が續いた事はなかつた。パーマーからの命令で先づ不逞伊太利人のコアッチを捕へた。コアッチは送還迄保證金を積んで一時釋放はしたが之が大手柄として讚められた。次にはワシントンから特派された刑事も手傳つて四人の「不逞」リトアニン人を捕へた。四月十六日、卽ちサウス・ベイントリー事件のあつた翌日、彼は再びコアッチを捕へて移民官に引渡した。コアッチは其處からエリス島に送られ、二日の後に送還された。ブリッヂウオーターの彼の家には妻子が殘つた。其處には元より伊太利人の出入が頻繁だつた。スチユアートは之に眼をつけた。頻々として起る強盜事件が其處に出入する「不逞」伊太利人に關係があるのではないかと思ふ樣になつた。

其の家には同居人としてボーダが居た。コアッチは、其のトラックが暴漢の襲擊を受けたホワイト製靴會社に働いて居たことがあることが思ひ合された。ベイントリーの殺人に使用されたと推せらるゝ自動車はコアッチの家から一哩半の處に捨ててあつた事も考へ併せられた。「ボーダを捕へろ」。然しボーダは暫らく姿を見せなかつた。だが警察はボーダの自動車がサウス・ベイントリー殺人事件の數日後にウエストブリッヂウオーターのエルム・スクエアー・ガレヂに修繕に持つて行つてあることを發見した。「ボーダが來たら密告しろ」とガレッヂの主人夫妻は署長から言付けられた。五月五日ボーダは外の三人と一緒に來た。ガレーヂの主人の妻は警察へ電話した。しかしボーダは捕まらないでサッコとヴァンゼッチが捕まつた。之迄が警察の陷穽であつた。之から後は裁判の陷穽であつた。

五、何　故？

之だけの話なら二人は、取調の結果放免されるか、高々送還されるのが落である可き筈だ。

だが二人は之れから七年の間未決に居た。そして世界プロレタリアの抗議や世界自由人の抗議に拘はず死刑に處せられた。ドレフュス事件の自由人抗議の尖端にはゾラが居た。サッコ・ヴァンゼッチ死刑の抗議

には自由人としてジョージ・バーナード・ショウ、H・G・ウェルス、ロマン・ロラン、ジョン・ゴルスワジイ、アルベルト・アインシュタイン、シンクレア・レウィス等が居た。　サッコは千九百八年四月ボストンに上陸し、ヴァンゼッチはそれから二ケ月遅れて紐育に上陸したのだ。此の時から彼等は靜かで原始的で牧歌的な故郷伊太利の田舍の夢を捨てねばならなかつた。摩天樓、ラッシュアワー、ハイスピード交通の米國工業主義の眞中に於ける彼等の生活は此の時から始まつたのだ。二人は伊太利ではある個人だつた。こゝでは只の卑屈な勞働者だつた。米國勞働總同盟は不熟練工としての外國移民勞働者に大して力を入れなかつた。だから彼等は自身達で集まつて居た。其の内に彼等は自身達の人間の型とそうでない人間の型の區別が覺えた。ローレンスで起つた處の三十の國籍からなる三萬人のアメリカン・ウールン・コムパニー紡績工の爭議、ホープデールの鑄鐵工の爭議、プロクトン、リン、ヘーバーヒルの靴工の爭議は今や彼等自身の爭議であつた。ガレアニがアナーキストとして研究會や爭議に表はれて居た。彼の新聞は彼等の間によく讀まれた。彼はその樣に親しまれた。サッコとヴァンゼッチはこのガレアニのグループにあつた。二人の居たマサチュセッツ州即ちニュー・イングランドは嘗つては米國の經濟的に文化的な中心であつた。獨立戰爭の搖籃であつた。奴隷廢止運動の根據地であつた。ボストンの實業家と銀行家は米國を支配した。ボストンの文學、論壇、哲學は米國の他の部分に於ける出來事の最高の批判であつた。が、大戰爭の十年前から、即ち、外國移民の大軍が全州に氾濫し始めた頃から、ボストンは凋落し化石化し紐育、市俄古、桑港に地位が讓りつゝあつた。　對手は組織せられて居ない外國移民勞働者である。去り行くニュー・イングランド資本家の繁榮を呼び止む可く、此の地に於ける勞働搾取は強度を加へ爭議は殊更に激化した。ローレンスの爭議は勞働者の勝利に終つた。爭議は相次いで瀕發した。ニュウ・イングランドの工業に投ぜられた資本は急速度に南に逃亡し出した。それ丈け其處の凋落は急速度であつた。「總べては勞働者煽動家の故である」とせられた。「勞働運動者の故である」とせられた。其の勞働者煽動家の中にヴァンゼッチは數へられて居た。勞働運動者の中にサッコは數へられて居た。「煽動家や運動者は秩序破壞の思想を左右するのであり、從つて、ベイントリーの殺人事件は彼等の思想と相一致するものである」と。　かくて、サッコとヴァンゼッチは何等の證據無きに拘はらず、(この事は前記フエリックス・フランフルテル教授の調査で明である)ベイントリー強盜殺人事件の犯人であるとして死刑を宣告せられた。マデイロスと云ふ強盜嫌疑者が後で自分こそその犯人であると自白したに拘はらず、マデイロスはその事に就て正式に取調べらるゝ事なく、ヴァンゼッチとサッコは又再審に附せらるゝ事なく(此事はマサチュセッツ州法が許してゐるのみならず前例もあるのである)、七年の法律鬪爭と大衆鬪爭の後で、千九百二十七年八月二十二日二人は電氣刑臺に上つた。第一のサッコ・ヴァンゼッチ事件はこれで終つた。第二第三のサッコ・ヴァンゼッチ事件は未だ終らない。當分終らないであらう。　昨年から今年にかけて、ガストニア事件其の他が未だつゞいて居る。

巴里コンミユン祭

淺野研眞

一

昨年のメーデーには、巴里は靜穩だつた。伯林の流血的示威運動に對しては、全く見るべきものがなかつた。それは街上行動が禁止されてゐたからである。

巴里でも、勞働祭の最初の時代、卽ち一八九〇年、一八九一年は、かのフールミー派の示威運動によつて、甚だしき流血の慘を見た。また一九一九、一九二〇年には、ロシア革命の影響を受けて、これ又、深刻なる街上鬪爭が展開されたのだつたが。

然し、同二十六日の午後には、巴里コンミユンの記念祭が行はれた。ペール・ラシエーズの墓地にあるコンミユンの遺蹟『聯盟者の塀』の前での大示威運動が、それなのだ。

當日の大示威運動は、午後三時から初まつて、約三時間半も續いたのであつた。巴里市及びその近接町村の各種プロレタリア團體は長蛇の如き行列を作つて、右の塀の前を通過して行くのである。

『アンテルナシヨナル』の歌聲が高く響く。婦人團體も、勞働スポーツ團も、學生聯盟も、次から次へと續く。少年隊、少女隊が、ユニホームを着て、けなげにも進んで行く。組合旗、團體旗、スローガンの大旆が、押し流れて行く。塀の前では、各人、脫帽の禮をして、眞紅な花輪が、各團體から捧げられる。

拍手のあられ、民衆のどよめき！でも、墓地内の行軍は、全く自由だ。そして其れは極めて秩序的である。五月一日の巴里に淡き失望を感じて居た私は、此處に此日、端なくも光に輝く傳統を持つフランス勞働階級の勇ましき組織力を見て、甚だしく力強さを感ぜざるを得なかつた。

だが、此の可なりに廣い、巴里第一の墓地の外廓には、警官の莫大な群れを發見させられた。直ちに發砲し得る狀態の下に居る警官、騎馬上に嚴めしきヘルメット帽を戴いた其れ。

二

所で、玆に少しばかり、遺蹟『聯盟者の塀』に就いて記さう。

元來、巴里の市中には、ところどころに大きな墓地があつて、外客をしてフランス史上の著名なる人々の墓に展せしめるが、その中でも、所謂三大墓地たるペール・ラシエーズ、モンマルトル、及びモンパルナスは、甚だしく由緒に富む。只、皮肉なことは、右の三大墓地の後の二つは、巴里でも有數な遊蕩區にあるのだから面白い。モンマルトルにしても、モンパルナスにしても、共にその名を世界に走せた魔窟なのだから――

然し、第一のペール・ラシエーズ（Pere la Chaise）は、決して左樣ではない。この墓地の存在する第二十區は、お隣りの第十九區と共に、所謂勞働者街、プロ界隈であつて、プロ政黨の強固な地盤でもある。

このペール・ラシエーズの墓地には、モリエール、ラフオンテーヌ、ア・ドーデ、ユーゴー、バルザツク、等々の、フランス文學史上に輝ける文豪連の墓もあれば、チエールの如き大政治家、經濟學者セー、社會學の始祖コント、社會主義の先驅者サン・シモン、アンフアン

タン、ルイ・ブラン、ブランキ、等々の名ある人々の墓もある。

然し、さうした知名の人々の墓にも増して、特に吾々の注意を惹くものは、此の墓地の東北隅にある巴里コンミユンの一遺跡『聯盟者の塀』(Mur des Fédérés)である。

三

巴里コンミユンは、云ふまでもなく、近代プロレタリヤ運動史上の、一大金字塔である。之を説くことは、到底、少しの頁數を以つてしては不可能のことに屬するが、吾々は之が史的管見だけは與へねばならぬ。

巴里コンミユンを良く知るためには、その直接的な社會的背景をなした所の普佛戰爭を見ねばならない。玆に先づ、その簡單なクロノロジーを掲げる。

一八七〇年(明治三年)

九月二日　セダンの陷落、ナポレオン三世降伏

同　四日　フランス人共和制を立つ。

同十九日　巴里の包圍。

十月　ガンベツタ輕氣球に乘じて巴里を脫出す。

一八七一年(明治四年)

一月十八日　プロシヤ王ウイルヘルム一世は敵地たるヴエルサイユ宮殿『鏡の間』に於てドイツ帝位卽位式を行ふ。

同　廿八日　巴里の陷落。

二月　ヴエルサイユの假條約。

三月十八日　巴里コンミユン成る。

五月十日　フランクフルトの本條約。

同月二十二日　巴里コンミユンの沒落。

八月　チエール佛國大統領となる。

卽ち、普佛戰爭に於けるフランスの連戰連敗は、革命運動を巴里に起し、チエールに率ひらるる假政府は、全市の勞働者を、武裝して市民軍を組織し、敵兵重圍の裡に共和制を布いた(一八七〇年九月四日)。然し、巴里城内の食糧が缺乏し、籠城の困難が益々加はつて來るに從ひ、巴里のブルジヨア政府は、城外の敵に於けるよりも、寧ろ城内の市民軍に於て、より恐るべき勞働者革命の脅威を見出さなければならなかつた。

玆に於てか、ブルジヨア政府は、味方の勞働者を裏切つて敵軍と密通し、プロシアの凡ゆる侵略的要求を容れて、ヴエルサイユ講和を締結した(一八七一年二月)。これを知つた巴里の勞働者階級は、頓にその階級意識を呼び覺まされ、今や彼等の持てる銃は、轉じてチエールとその政府とに向けられた。

三月十八日の朝未明、巴里の市街は『コンミユン萬歲!』の叫びに滿たされ、其の本部には陽に映ゆる革命の赤旗が飜つた。次いで三月二十八日には、コンミユン選擧を行ひ、八十六名の代議員中、勞働團體から六十五名の代表者を出し、事實上プロレタリアートの政府が建設された。

之れを見た世界のブルジヨアジーは、大いに恐れをなし、コンミユンの撲滅のために協力せんことを申し出た。當時は既に第一インタナシヨナルの運動が、各國に根を張つてゐた所から、各國が支配階級的に結び付いたことは、見易いことだつた。昨日まで敵であつたプロシアさへも、この協力に加はることになつた。かくて難をヴエルサイユに避けてゐたチエールは、急に政府軍を糾合し、再び猛然と巴里に逆襲した。かくて混亂と不統一との裡に、終始惡戰苦鬪した此の『プロレタリアートの天下』は、僅かに二ケ月の短命を以つて、五月二十二日には、遂ひに崩壞し去られた。

マルクスも論結した如く、それは『勞働者階級は單に出來合ひの國家機關を掌握し、そ

して其を自己の目的のために運用することを得ない』(マルクス『巴里コンミユン』)ことを證明したのだつた。

四

それはさて置き、一八七一年の此の偉大なるプロレタリア運動の犠牲者逹は、やがて狂暴なる反動的銃彈に見舞はれるのであつた。

チエールの軍隊の逆襲は、極めて慘めな殺戮を結果した、女も子供も、砲火の下に斃された。二萬五千人の巴里人が殺され、一萬二千人が傷いた。そして四萬五千人が投獄された。之に比して、ヴエルサイユの軍隊は、僅かに九百人を失つたのみだつた。

ペール・ラシエーズ『墓地の聯盟者の堺』は、此の『血の週間』(Semaine sanglante, 21—28 mai 1871)に於て、暴壓の手が、その前に老若男女となく、次から次へと、一列に並べて纎鏖にした其の眞の流血の遺蹟なのだ。此處で銃殺された老若男女は、二萬人の多數に上つてゐるのだ。

この記念すべき堺には、今尙ほ、銃彈の痕の殘つてゐるのを、アリ〳〵と認めることが出來るではないか?

堺には、その中央の所に、大きな標板が嵌め込まれてゐる。それは次の如く讀まれる。

AUX MORTS
DE LA COMMUNE
21—28 MAI 1871

その邊りには、常に大小無數の花輪、花束が捧げられてゐる。

私は別の日、フト手近の新しい小さい花輪の一つに眼をやつた。それにはペンで以つてささやかな紙片に、かう書いて附けてあつた。

Aux Communards.

Des jeunes communistes allemands.

げに、プロレタリアートには、國境を越しての結びつきがあるのだ!

歩を轉ずれば、巴里コンミユンのマンブル誰れ彼れの墓と云ふのが、此處彼處等にある。

マルクスの娘ローラと、その夫ポール・ラフアルグとの比翼塚も、その間に介在してゐる。

五

此の堺を去つて、遠く墓地の西門を出て、外側のスクアール・カンペツタの小公園に引き返して來ると、そこには今の堺を形ちどつた六、七尺平方もあらう、白花の石の大きなモニユマンが立つてゐる。

極めて巧妙に印象的な彫刻が、それには施されてゐる。今、當に發砲射殺されんとする其の刹那の表情が、その壁面の一群の老若男女の其れによつて、如何に深刻に表現されてゐることよ!

冥目せるもの、驚けるもの、懼れを存せる女性、怒號犬を銜ける老丈夫——そは總て、まのあたりに當時の狀況を見るが如くである。

左下のところを見やれば、そこには一代の文豪ユーゴーの言葉が彫られてゐる。

ce que nous demandons à l'arenir,
ce que nous vonlons de lui,
c'est la Justice— ce r'est pns
la vengeance
victor Hugo

吾々が將來に望みしもの、
吾々が彼れから求めしもの、
そは正義だ—そは復讐ではない。
ヴイクトル・ユーゴー

全く、その通りだ。吾々も亦、今日この言葉を繰り返す以外、他に何の言葉も持ち合せない。

でも、その正義の女神は、何時その全幅の顯現をなし給ふのか? プロレタリア革命の明日にか?

將た永遠の明日にか?

黒船・えぴそおど

春浮宏

断髪もの語り

「断髪もの語り」といふと、如何にも、モダンな話題らしいが、これは、黒船時代の断髪の話しである。

その頃は、断髪といはず、斬髪といつた。

頭の眞中に、ちよこんと存在する「ちよん髷」こそ、長い傳統の齎した儀禮的、紛飾的存在であつたのだから、當時の人々をして、「ちよん髷」を斬らしめやうとすることは、ハロルド・ロイドから眼鏡を取上げ、チヤーリー・チヤップリンから口髯を取去る以上に、困難なことだつたらうと思はれる。

前にも書いたやうに

「異人は髪を結はない、猿も同様である、日本では、千餘年前から結髪してゐる」

と、「ちよん髷」の存在に依つて、十數世紀以上も進化してゐる、と考へてゐたのだから、さう簡單に斷髪は出來ぬ。

しかし、また異人の方では異人の方で、日本の「ちよん髷」を

「ほ、ほうピキテイル」

と惡口を言ふ。

ピキテイルとは「豚のしつぽ」の意味であるが、まさか豚尾漢であると馬鹿にされてゐるとは知らないから、榎本武揚や澤太郎左衛門が、和蘭へ軍艦開陽丸の注文に出掛けたときは、幕府から

「異國へ渡つても、髪を斬つたり、風俗をかへたりしてはならぬ」

と、命令があつた程であつた。和蘭に渡つてからも、「ちよん

髷」の上から帽子をかぶつて、漸く外人の嘲笑を免れたが、或時一行が揃つて芝居を見に行つた、ところが皆脱帽してゐるので、思はず脱帽したところが、例の「ビキテイル」がちよこなんと乘つてゐる。

「わあつ」

と、見物が、はやし立てるので、こそ／＼と、逃げて來たといふ。

また、伊藤博文が一行五人と、文久三年に密航を行つた時には、英一番のガール氏に頼んで、だぶ／＼の古洋服、がぼ／＼の古靴を貰ひ、斷髮して船に行つたところが

『幕府の禁を破つて連れて行く譯にはゆかぬ』

と、船長が許さない。

『頭まで斬つたのだから、この儘日本に居れば縛られて殺されるばかりだ。どうせ殺されるなら、腹を切つて死なう』

と、一行が覺悟をきめたので、これには驚ろいて連れて行つたといふ。

恐らく、坊主、幇間、醫者、茶坊主、なんかを除いたら、斷髮のトップを切つたものだらう。

かうして、時代の尖端を歩む人に依つてだん／＼斷髮となつたが、それでも明治元年の六月歸朝した中村敬輔、林董、箕作奎吾等十四人は、横濱へ上陸すると

『これあ大變だ』

と、斷髮頭をかゝへたものである。

『この儘上陸しては殺されるだらう』

といふので、何れも横濱で「つけ髷」をして漸く江戸へ入つた程で、横濱の小數の、商館出入商人や、醫者などが斷髮してゐるに過ぎなかつた。

しかし、機を見るに敏なものがあつて、横濱村の髮結床、小倉虎吉といふ者が、黑船へ異人の髯を剃りに行つて鋏のつかひ方を覺え、明治元年に、居留地へ理髮店を出した。

その店飾りと言へば、髮結床と大して變らず、四五寸の小さな鏡と、天井から綱で吊してある毛抜きがある位なもので殺風景極まるものだつた。

時代の流れは恐しいものである。

かうして、斷髮がだん／＼多くなり、所謂「ビキテイル」でなくなると同時に、結髮のことなき千數百年前へ逆行したことになる。

この波に洗はれて、早くも斷髮を初めたのは、横濱の「菜葉隊」や「天沼兵學塾」などといふ、軍隊類似のものや、學校類似のものであつた。

菜ッ葉隊に、面白い話しが、殘つてゐる。

菜ッ葉隊は、洋式調練までやつてゐる程だからと、隊士に斷髪の命令を下した。

『えらいことに、なつたのう』

隊士は、寄るとさわると、その噂だ。

『みな、ちよん髷を切るんぢや、だが、月代が短かくては變ぢやらうから、それが五分のびるまで待つてやる』

と、隊長から、情狀酌量がある。

『えらいことになつたぞう』

『おい、さういへば、貴公の月代は、もう五分位あるぞ』



『いゝや、まだ四分位だらう』

その翌日になると、いつの間にやら、青々と月代を剃つてゐる。どれもこれも、「ちよん髷」に愛着をもつてゐるから、一寸のびれば剃り、またのびれば剃る。



黒船當時の斷髪時代。

新聞雜誌七十號（明治五年）所載

下圖は上圖の頭部のみを集めたもの（明治事物起源）
上段右より切下髮、長まげ、つつ込みびん、茶せん髷、
下段右より婦人ジャンギリ、へつつい頭、散髮、半髮。

成程、これならば、容易に五分にならぬ。

隊長連がこれを見て憤慨した。

それは、憤慨する譯で、自分達も、限りなき愛着を忍んで、淚をふるつて斷髪にしたのだから……。

「こいつあ怪しからん」

と、いふので、夜になつてから、隊士の宿舍に、丁度「ちよん髷」の觀兵式の如く、ずらりつ、と並んで熟睡してゐる、その「ちよん髷」を

ぢやきり、〳〵

と、片ッぱしから、鋏をもつて切つて歩いたものである。

その時の隊士で、未だ殘つてゐる老人もあるが、その時ばかりは、何とも情ない、千萬無量であつたさうな。

それからが、大變である。

この「ちよん髷」を切られた連中が、その鬱憤をはらさうといふので、市中へ押しだした。

商人などが、店先で何かしてゐると、後から、そつと來て

ぷつり

『わあつ』

もう追つかない。當時の所謂「開化頭」といふやつになつてゐる。

至るところに、この

ぷつり『わあつ』

が、流行したものだといふ。

斷髮もの語り（つゞき）

現代の女性よ、殊に銀座人種は驚いてはいけない。女の斷髮が、明治の初年に流行したことだ。

「ちよん髷」を斬れば「開化頭」といはれて文化のバロメータの如く見られた時代であるから、女も文化人たるべく、斷髮をあへてしたのも當然かも知れない。

明治四年五月の「新聞雜誌」二號に

『半髮頭をたゝいてみれば、因循姑息の音がする』

『總髮頭をたゝいてみれば、王政復古の、音がする』

『ジヤンギリ頭をたゝいてみれば、文明開化の音がする』

と、あるのに見ても判る通りで、到るところに理髮師が出來、入口の障子に「英佛髮はさみ所」と記して大いに客を呼んだものである。

この「文明開化」の風潮は婦人の斷髮となり、その斷髮の數は、寧ろ今日より多かつたかとさへ思はれる。

その流行は、明治四年頃からであつたが、餘り流行が甚しく、風俗上面白くない、といふので、五年四月五日、東京府が告諭を發して、女子の斷髮を禁じたが、容易に、終熄しなかつたらしい。

この當時のモダン・ガールについて「明治事物起源」に依つて見ると

『妙齢婦女子の頭上をも洋化し、緑の黒髪を惜氣もなく切り棄て、男女別なき髭古の醜體を敢てするに至れり」

と、して

上野山内清水堂の傍なる茶店の女、新内上るり語りの女などが斷髪を初め、淺草藏前の伊勢屋某、といふ男が、自分は「ちよん髷」を切り兼ねながら、妾とその子に斷髪させ、さらに、妻にも斷髪させたといふ話しがあり、日要新聞、新聞雜誌、明六雜誌、などは當時の輿論を代表して、賛否の論囂々たる點は、いまも昔しも變りはない。

日要新聞(五年二月)

『先年來、貴賤となく、或は禿天頭(はげあたま)の如きも、漸く髮を蓄へ、今日に及んでは士はもとより町人に至り、十に三四散髮せり、然れども、一の甚敷は、頃日、切りに婦女子の散髮せるあり、尤多くは煎茶屋の給仕女にして、啻に奇を好むのみならず、書生、兵員の寵戀を計るか、或は自負の強き、不從教(おてんば)の所爲なれば、實に笑止の甚しきなり、速く異風を改め、人々の相應の容をなして、一婦も、かゝる至愚なきやうありたし」

明六雜誌(七年十一月)

『近年、男頭飾一變の際、女頭も亦頗る變化、無用の治飾を去り、斬て後に垂れ、大いに古態に復せんとす、余以爲らく、善く之を導て一風を爲す、女氣これより振ひ、德また進むべしと」

とたがひに論じてゐるところ、今も昔しも變りはないが、これ等の斷髪婦人の風俗は、蝙蝠傘をもち、燕(えん)服を着て、大いに濶歩するので、後年の「青鞜社」の青いマントの婦人達より、斷髪だけ更らに新しかつたと言へやう。

斷髪をよめる歌謠(明治事物起源より)

ざんぎりや、半髪あたま惣髪に、紅葉の錦かみのまに〳〵。

禮服の帽子をとればあたまかず、チヨン髷野郎二つ三つ四つ

ざんぎりの中にチヨン髷二つ三つ、なほ餘りある昔しなりけり。

この頃の、一つ八つつい立ちては、三笠の山に出でし月かな。

○

いきな散髪、いやみな茶筅(ちやせん)、髷のあるのは野暮な人

○

手入せぬ散髪釋迦のお弟子めき。

開化した犬、ちよん髷を見ると吠え。

しかし、かうしてゐるうちに、婦人の斷髮も無くなり、明治六年三月には、明治天皇が斷髮を遊ばされるに至り、頭髮混亂時代も、漸く落着く可きに落着いたのだつた。

そして、理髮店も出來るやうになつた。

東京、銀座三丁目の理髮店、杉浦善次郎は、ジョージ・ホーバンといふ佛蘭西人の職人まで雇つて、大いに宣傳してゐる。

その宣傳ビラに曰く

廣告

蓄髮の髷飾を切斷て。因循の垢を洗ひ除し。元結の束縛を脱却て自由の寢起の得るのが則開化の散髮頭。されば香水の匂ひは馥郁として。櫻香の薫りを厭し。鐵の光は明皓々として。月代の月よりも朗かなり。況英風に採分ける櫛。佛流に撫付けるブラシ。百物具備て整頓ふ姿。殊に婦人の結髮も諸國の形容を其儘に。爰に摸寫せる鋭山。高きホテルに寄留する。御婦人方まで櫛の齒の。しげき御來車希ふと。銀座の街の中央より。分髮て諸君に告ぐるになむ。

郵便電信こと初め

「笑話」が「一口噺」といはれてゐた頃の秀逸なのに

東京へ働きに來てゐた女中が、故郷の叔母へ手紙書いたが、その宛名に

「國元にて、おばさま」

と書き、差出人のところへ

「東京にて、おいさんに」

と書いてあつた。これでは神樣でも配達することは出來まいといふのがある。

まさか、と思はれるこんな話も、郵便の初まつた頃には、ざらにあつた事實談である。

わが國の郵便は、明治三年三月、東京、京都、大阪間に初められ、七月には、横濱へ郵便所が出來た。これまでにするにはなか〳〵の苦心で、兎に角準備萬端整つて仕事が初められた。

今では「遞信省」だが、その當時は「驛遞寮」といつた。

郵便局のことは「郵便役所」

郵便切手のことは「書狀切手」

ポストのことは「箱場」

郵便料金は「錢百文」

汽車も、電車もない頃であつたから、昔の童謠によくあるやうに

「郵便はいく〳〵」

と郵便脚夫が、馳足で、天秤棒の先で荷を縛りつけて走つたものである。

面白いのは、切手を買つて貼付するのが面倒なものは、書狀へ、錢百文を括りつけて、郵便函へ投込んで置けばよいことだつた。

しかし、この爲めに大恐慌を來したのは、飛脚屋である、これでは失業する外はないといふので競爭を初め、殊に近距離の、東京橫濱間の如きは、郵便が百文であるのに對して、飛脚屋は半額以下の四十八文で、顧客奪取戰猛烈を極めたが結局飛脚屋には、小包郵便を與へることにして、書狀郵送は全部政府の手に歸した。後年、小包郵便を開始するに當つて、飛脚屋の後身、內國通運會社がその請負をしたのはそのためである。

さて、かうした郵便時代であるから、笑話の部分に屬すべき

「東京にて　おち樣」

の類は、相當知識階級にも多かつたと見える。こうした書狀は、屆けもならず、戾しもならず、驛遞寮では、新聞に之れを廣告して取りに來るやうにさせたが、明治六年一月の「郵便報知」に「郵便沒書」といふ標題で廣告し

郵便沒書とは表書の認方充分ならず或は屆け先の者舉家轉住し又は差出し人名前のみにて地名認めこれなく屆け先戾し方をもわかりがたき郵便書狀を云ふ。

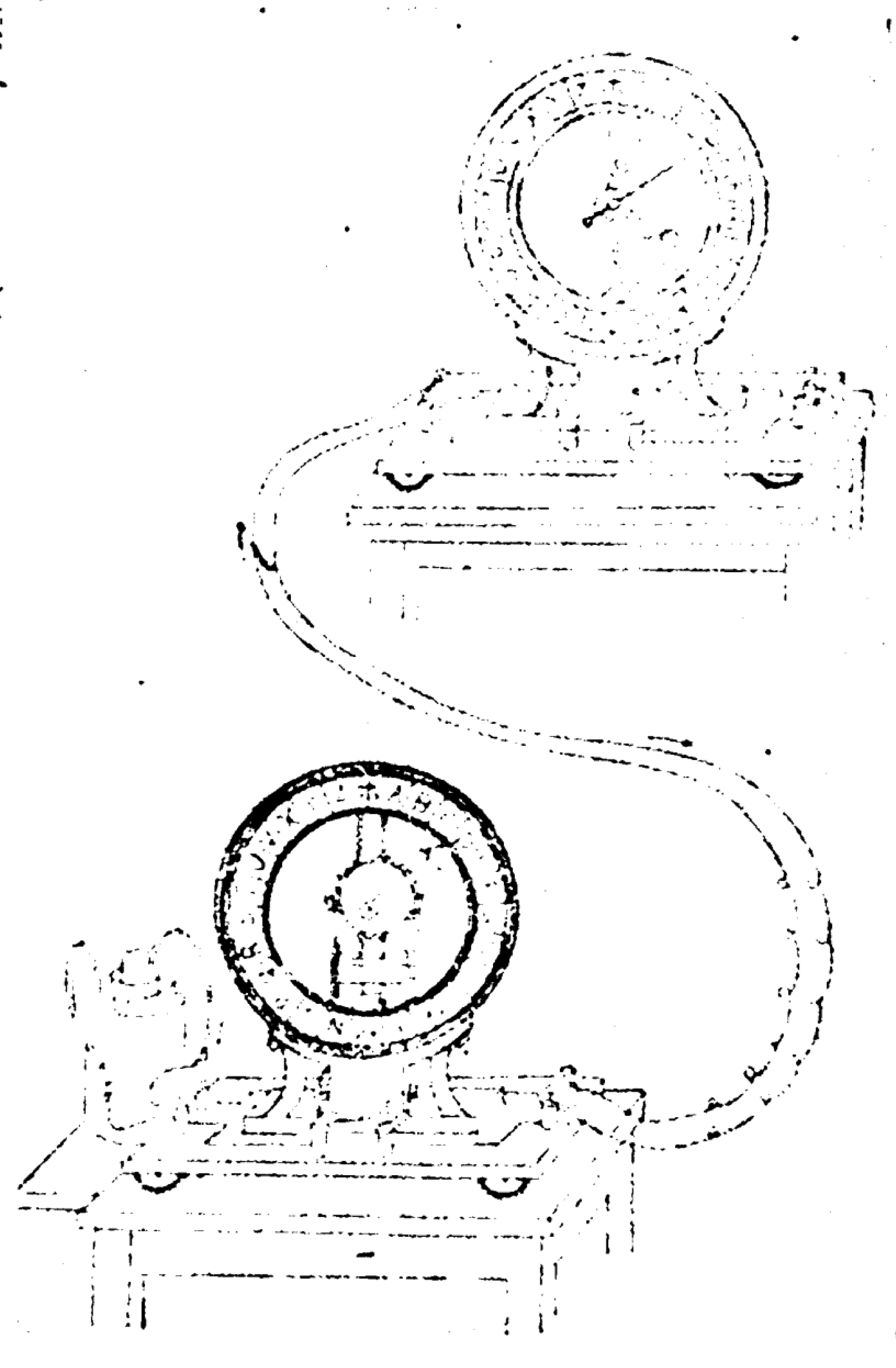
と、說明してある。その中から二つ三つ「笑話種」を探してみる。

東京築地、電信記はりがねのもとにて

留　吉　樣

橫濱石川口　大工さと吉

といふのがある。「電信記はりがねの元にて」は笑はせるが、京濱間の電信局が築地にあつたから、「築地電信局內」のことだらうと思はれる。



ペルリ來朝時の電信機
アルフアベツトの文字盤が「いろは」に書替へられて針がそこを指すやうになつてゐた

東京鐵砲洲コンシラロウ、日ノ下ホ、イ
藤吉様
横濱　林　宗兵衛

これも判らない、「コンシラロウ」は領事館のことかも知れない、「日ノ下」は、大使のことで「ホ、イ」はボーイ(給仕)のことだらう、何處かの大使館の給仕のことだらうが、これでは成程、配達不可能だ。

もう一つ。

讃州香川縣にて
岩崎兢様
三條家
高橋　久造

これなんか相當知識階級らしいのだが「香川縣にて」では困る「東京にて、おぢ様」の最も好い標本だ。

電信は、郵便より早く行はれた。

黒船舶來の、てれがらふの實驗に

『手紙が針金を傳つて歩くさうだ』

と、辨當を携へて、朝から晩まで電信線をみつめてゐたといふのは「原始横濱人」に纏る笑話だが、それから、いくばくもない明治元年に、政府は米國へ器械を注文し、二年八月九日には、器械及技師ギルベルトが到着し、十二月二十五日から、東京横濱間に開通して

『電信機は幾百里相隔る場所にても人馬の勞をはぶき線の連なる場所までは音信を一瞬間に通達する至妙の機關なり依つて通信相願候ものは左の規則を心得べし』

と告示し、東京は鐵砲洲の運上所前の電信局から、横濱は裁判所前の電信局まで「朝第八字より夕八時まで」とか「代銀の定めは假名一字に價銀一分」とか「秘密のことは隱し言葉をつかへ」とかいろ〱の規則を出してゐる。

その頃の電信機は、時計の文字盤のやうな文字盤があつて、いろは四十八文字があり、針が字を指すやうになつて居たのであつた。矢張り初めは、

『切支丹の魔法だ』

といふので柱を切つたり、丁度その當時、戸籍法をつくつてゐたので

『家の番號をしらべて、番號順に處女を殺して、その生血を電信線にぬるのだ』

など、の流言蜚語が行はれて、東京、大阪間の開通した時な

どは殊に甚しかつたといふことで、政府が是等にたいして、如何に嚴罰に附したかは、明治七年二月二十日に東京一大區横山町の平林忠藏といふ、五歳になる子供が、紙鳶を上げてゐて電線にからましたのを

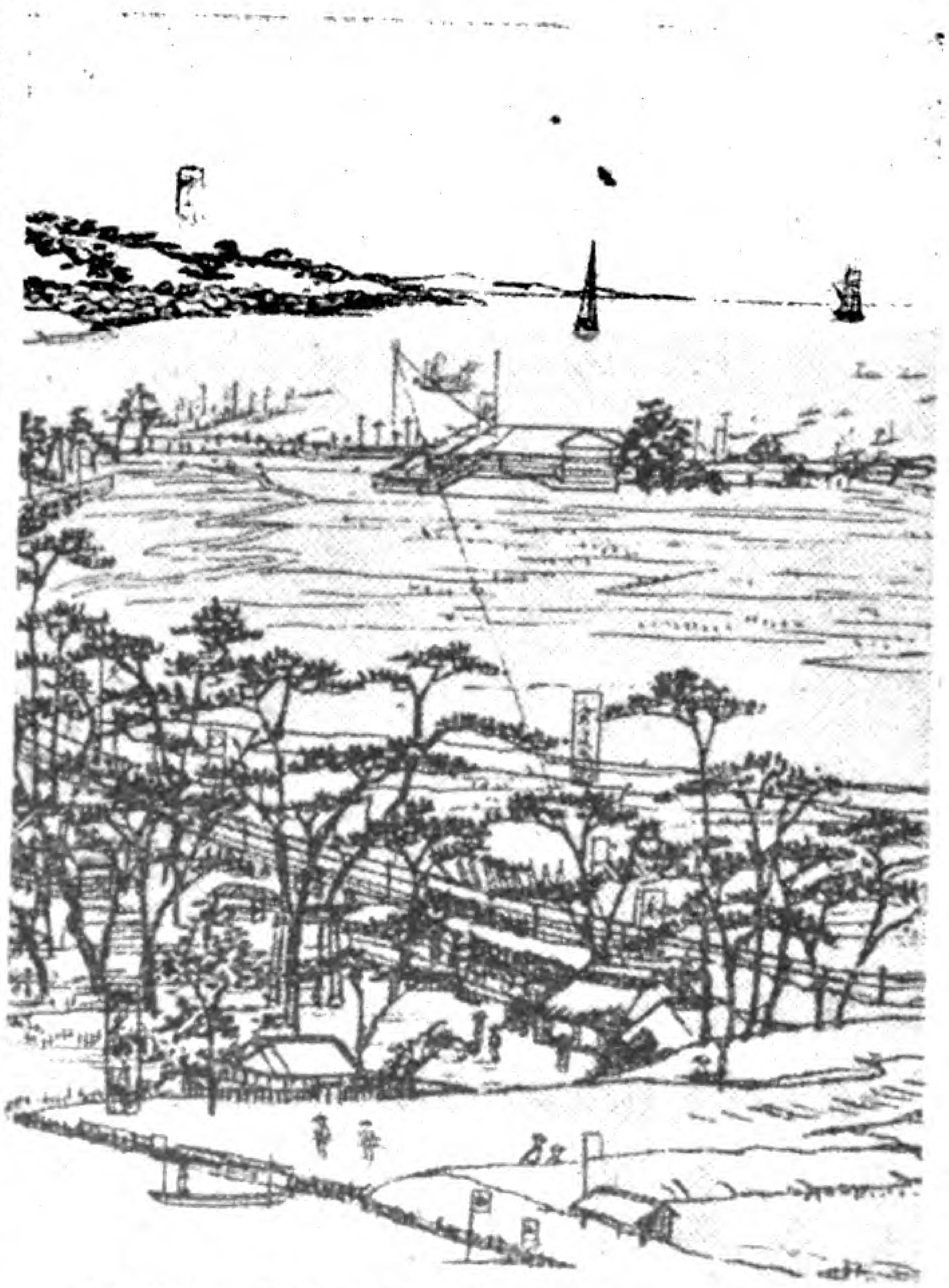
『懲役十日に當ると雖、七歳以下だから無罪とした』

と、當時の新聞にあるのでも判る。

當時の電文には、滑稽なものがあつたらうが傳つてゐない。横濱で「もしほ草」を發行したウエンリードが、明治五年九月京都へ行つて歸るさに、庄野驛で足を病み、京都府お抱醫師ヂヨンケル氏に出張して貰つて治療した。その時、京都府へ禮狀を電報で出したのが傳つてゐる。黒船時代の日本通を以て任じた異人さんの日本文で、一寸面白いが、判らないところもある。

『ヤクニン、タイソウ、シンジツ、マモリマス、イシニブカ、ル、ズイブン、タスケマス、マコトニ、アリガタウ、ゾンジマス、ゴシンジツ』

高橋是清氏を奴隷に賣つたやうな男でも、隨分有難かつたものと見える。



ペルリ來航と共に獻上の電信線を架設したときの圖で横濱人はこの針金を手紙が傳つて行くと思つて毎日見物に行つては失望した。

「火輪車」笑ひ話

黒船時代には、汽車のことを、或ひは「火輪車」といひ、或ひは「岡蒸氣」といひ、更らには通俗的に「火の車」ともいつた。

明治二年に廟議が決定して、わが國最初の鐵道である京濱間の鐵道工事に着手された。一百萬磅の外債により、英人技師モレールによつて三年四月から工事に着手した。

技師長モレルは病を得て、四年九月歿し、横濱外人墓地に葬られた。その墓地には今でも、記念の「連理の梅」が殘つてゐる。

モレルの後を繼いで、英人ボイルが技師長となり工事を進め五年九月、新橋、横濱（今の櫻木驛）間が開通し、明治天皇の御臨幸に依つて、九月十二日開業式を擧げた。

その當日の、新橋と横濱の賑ひは非常なもので、煙火を打揚げ輕氣球を飛ばし、提灯のデコレーション、陸海軍の祝砲、濱御殿の餘興、國旗の掲揚(この時が國旗掲揚のはじめ)等々。

陛下には、九字御出門、新橋鐵道省にならせられ文武百官を從へられて、十一字横濱鐵道館に着御、勅語を賜はり、商人總代原善三郎、外人商人總代マルシャルの祝詞を受け給ふて十二字御發車、一字新橋御着車、こゝにても御勅語を賜はり、勅任官及各國公使の祝詞を受けられて後御歸還あらせられた。

かくて鐵道は開始され、一日六往復、東京横濱間賃銀、一等一兩二朱、二等三分、三等一分二朱で運轉が初まつた。

さて、これから話さうとするのは、まだ新橋まで開通しない頃、五年の五月に、横濱、品川間の假運轉が初まつた時の話である。

横濱は、神奈川に恐しく足の早い坊さんが住んでゐた。村の娘達が

『いくら覺念さんの足が早くても、火の車にはかなはないでしよ』

と、やつたものだ。

『うゝん』

とばかり、日本一のスプリンターを以て任じてゐた覺念坊が憤慨した。

『なあに、あんな火の車に負けるものか』

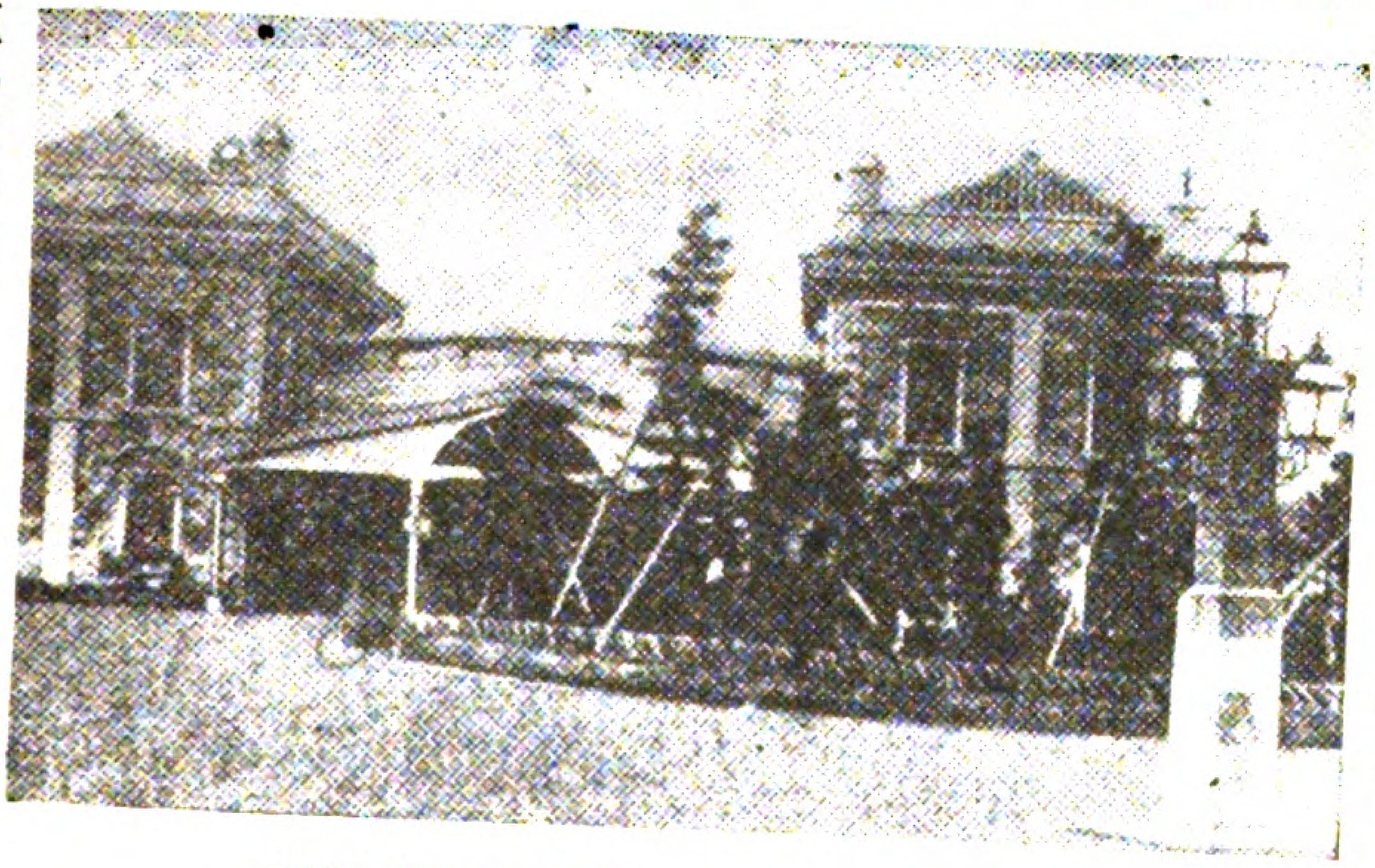
そこで、火の車と韋駄天との競走をやらうといふことになつたので、村の娘達

『あら、面白いわねえ』

と喜んだものである。

で、或日覺念坊は、横濱の鐵道館から、發車する火の車の「ピー」と可愛らしい汽笛を合圖にスタートした。

名にし負ふ自慢の毛脛を鞭うち、坊主頭に鉢巻して、衣の袖を飜して東海道を東京へと韋駄天の如く走つて行く様は、物凄かつたに違ひない。



京濱間開通當時の横濱驛(現櫻木驛)

一方、火の車の方は、石火矢(石炭のこと)を釜いつぱいにつめて

トッテポッポ、トッテポッポ、モウ直ぐ川崎、トッテポッポ

トッテポッポ、覺念ドウシタ……。

と、笛を唸らし烟を吐いて進んだ。

この競走の結果はどうなつたか。

覺念坊は、晝頃になつて漸く品川の繼立所（停車場のこと）へ着いて、ホツ、としてゐると、横濱からの火の車が

トッテポッポ〳〵覺念ドウシタ、

と、いひながら入つて來たので、覺念思はず歡聲を上げて

『どうだい、矢張り俺の方が早い』

意張つたところ、品川の繼立所の御役人

『あれは、あなた、三往復目のですよ』

に、流石の覺念、ダアとなつてしまつた。

嘘のやうな話しであるが眞實だと、その昔江見水蔭が何かに書いたことがあるといふ話しである。どうも少し落し噺めいてゐるが、事實その位のことはあつたかも知れないといふのは、次ぎのやうな話が事實だからである。

その話とは、

明治十年のことだ。

西南の役で熊本城が包圍されたとき、政府は城内との聯絡を保つために、輕氣球を使用しやう、といふことになり、陸軍で海軍兵學校の馬場新八氏に頼んで作製し、築地の海軍練兵場で試驗をした。

初めは馬場氏が搭乘して千二百尺の高所に飛翔し、次いで、輕氣球だけ飛揚させたら、綱が切れて、五六千尺の高所に達し、やがて東南に流れ、堀江といふ村に落ちた。

さあ、村人は大騷ぎを初めた。

何しろ、奉書紬百二十反、瓦斯一萬五千立方尺で、できてゐる怪物だから、村民の驚ろくのも無理ではない。

『風の神が間違つて袋を落したんだんべ』

『さうか知らん』

『うんや、いゝゝ、らつきよの化物だらう』

と、騷ぎ立て、皆棒切れを持つて來て、突いたり叩いたりしてゐるうちに、氣嚢が破れて、瓦斯が噴出したから堪らない。

『わつ臭い』

『化物が毒氣を吐くんだ』

と、逃出したが、そのうち數人は、水素瓦斯に中毒して二、三日間病氣したので、いよ〳〵、化物といふことにきめてしまつた。

明治十年にしてこれであるから、明治五年には汽車と競走するものがあつても、不思議ではない。

燐寸と石鹸

黒船から貰つて來た石鹸を
『これあ、羊羹か、蒲鉾みたいなものだらう』
と、煮たり燒いたりして見た話は、すこぶる有名であるが、燐寸としても、これを「摺付木」とか「早付木」とか言つて珍重したのは、矢張り一部の知識階級だけで、一般大衆は、これが賣出されても
『火事の子を賣つてゐる』
と、ばかり、誰れも買手がないどころか、排斥までされ、長谷川伸氏の戯曲「燐寸」にあるやうな喜劇は、至るところで展開されたものだ。

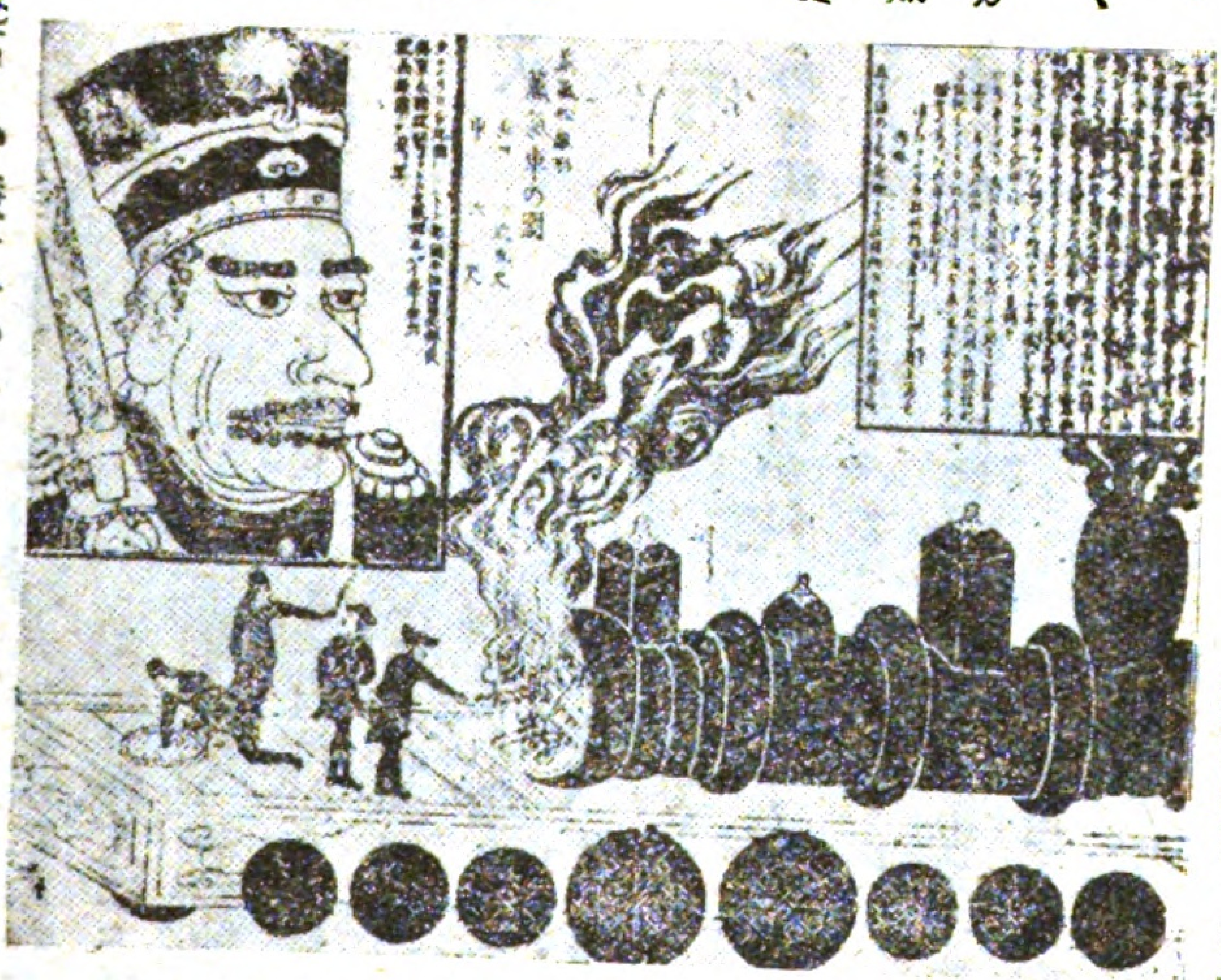
しかし、米糠で顔を洗つたり、灰汁で洗濯をしたりするよりも、石鹸が便利であると判るし、燐寸にしても、火燧石と、鎌金で、かちん〳〵やるより何の位早いか、使ひ出したらやめられない。
『これを製造して、賣出したら儲かるだらうな』

金儲けに拔目のない、當時の横濱人は、誰れしもが考へてゐたことであらう。

で、「しやぼん」と「まつち」の元祖の話をしやう。

横濱開港となつて、暫らくしてから、熱海から菊林林藏といふ男が、横濱へ出てきた。裸一貫で、八戸坂に家をもつて、ぶら〳〵してゐたが、或時、面白いことを考へた。
『いゝとわんて山の赤蜻蛉の鐵砲の口をつくつて賣らう』
と、いふのである。

赤蜻蛉とは、別名「赤隊」で英國の駐屯軍のことであり、いゝとわんて山は、今の居留地の山手で、英國の二十聯隊が駐屯してゐたので、一般に、トワンテー（二十）山といつてゐた。鐵砲の口とは銃口の栓のことで、キルク等はないので、赤隊で困つてゐるのを見て轆轤細工でこれを造つて、賣つたところが、なか〳〵儲かる。で、西洋人の日用具や、机や、手函などの商賣を初めて益〻盛んになつたのである。



ペルリ來朝當時の讀賣りに現はれた汽車左方の軍人はペルリで
（まつちらせ　へろり）などと書いたものが多い

その頃、横濱に英人の舎密家ブラオール、といふのが居て、林藏は此れに金を貸してあつた。

ところが林藏は調子に乘つて、外國から乳牛を取寄せたりして、すつかり失敗してしまつたので、ブラオールに貸金の催促をする。ブラオールも、金が無い。

『その代り、日本にない商業を敎へやうではないか』

『何を敎へるか』

『燐寸と、石鹸はどうだ』

と、いふことになつた。

ブラオールが、ブレンドといふ異人と、加賀藩の秋野次郎といふのを助手にして、戸部に工場を設け、林藏は埋地へ店を出して販賣を擔當することになつた。で、東京へも、横山町と尾張町へ店を出して賣り初めた。

ところが例の通りで

『おれは人間の骨でつくるんださうな』

とか、

『火事の子を賣るとは太い奴だ』

と、いふ譯で少しも賣れない。

その時の燐寸の値段は六百打入一箱卅三圓であつたといふ。

すると或時、本所といふ人が來て

『支那へ輸出してみたいから』

と註文に來たので　東京の二軒の店の品物を全部渡して店を閉鎖し、さて代金をとりに行つて見ると、その家ではそんなことは知らぬといふ。籠拔け詐欺にかゝつた譯である。

このことをブラオールに話すと、ブラオールは自分の知つたことでないから、一文も負けないといふ。とう〳〵喧嘩分れになり、林藏は、三好町へ自分で工場を設けたが、製造法が判らない。

秘密に秋野次郎に賴んで、少しづゝ藥を貰つて、それを持つて外國商館を廻つて、名前を聞きながら藥を買ひ集め、それをいろ〳〵に調合して、漸く火の出るやうにした。

それで勝負ができたので、戸部監獄の囚人を三百人ばかり使つて製造をはじめた。

石鹸の方は何うしたか。

これは、矢張りブラオールから、横濱の磯子の人堤儀右衛門が習つた。

習つて製造を初めた、のは好いが、何うしても固まらない、數ケ月間苦心を重ねて、家財もなくなり

『もう駄目だ、よさう』

と、絶望し、原料を棄てやうとして器物を洗つたところ、堅

日になつて、溶解物が自然にかたまつてゐる。

大いに喜んで、これを洗濯業者に一朱で賣つて試驗して貰つたところが、

「普通品には充分つかえる」

と、いふので、いよ〱、ほんとうに製造に着手した。

それが明治六年四月だつた。

燐寸の方の、製造に着手した年は判らないが、矢張り明治六七年の頃と思はれる。

註 わが國に於ける燐寸製造の元祖は、明治九年の秋、清水誠が新燧社を起したのが、それであるとされてゐるが、この横濱の方が早いやうに思はれる。石鹸の方は文獻に殘つてゐるが、燐寸製造の年月は文獻にないので、別に元祖を主張しはしない。

和製造語の話

第一「黒船」といふのからして、和製語である。

かくて、舶來品の、名稱混亂時代がはじまり、しきりに和製語が流行する、なかでも秀逸なのは、今日にまで殘つて、黒船時代を追想させ、追憶的な、談奇的な、ユーモラスな、微苦笑を催させずには置かない。

撞球のことを、「異人玉ころがし」といつた。

椅子、のことを「曲祿」といつた。

ハンケチ、のことを「懷中手拭」といつた。

コーヒー、のことを「豆茶」といつた。

洋服、は「筒袍」といつた。

ウイスキーを「うい助」といひ、バタを「髮つけ」といひ、ワイシャツのカラーを「つけ襟」といひ、汽車の停車場を「火輪車驛」といひ、探せばいくらでもある。

異人の女などが、犬を呼ぶ。

『かあめん、かあめん……』

それは Coming で

『おいで〱』

と、呼んでゐるのであるが、洋犬の名前だらうといふので、無暗に

『かめ、かめ』

と、呼び、名前もそうつける、甚敷いのになると、洋犬と書いて「かめ」と振假名をしてゐる書物まである。

また、領事（コンシエル）のことを「こん四郎さん」と十一谷氏の唐人お吉に、出て來るが、これと同じに、大使（ミニスター）のことを「目の下」といつてゐる。

この「目の下」に至つては、横濱の公術とも言ふ可き會所か

ら發行した、らしやめん鑑札に麗ゝと書いてあるのだから、大闘格であるが、外國大使も、ミニスター即ち目の下、といふ語呂合せのやうな、その癖、國粹的で排外的ともみえるこの名命を聞いたら、さぞや、憤慨したことであらうと思はれる。

これ等、多くの和製造語のなかでも、殊に光つてゐて、今日でも相當に使はれてゐるのは、「どんたく」である。

日曜日または休日のことを「どんたく」といひ、「土曜日を「半どん」といふ。

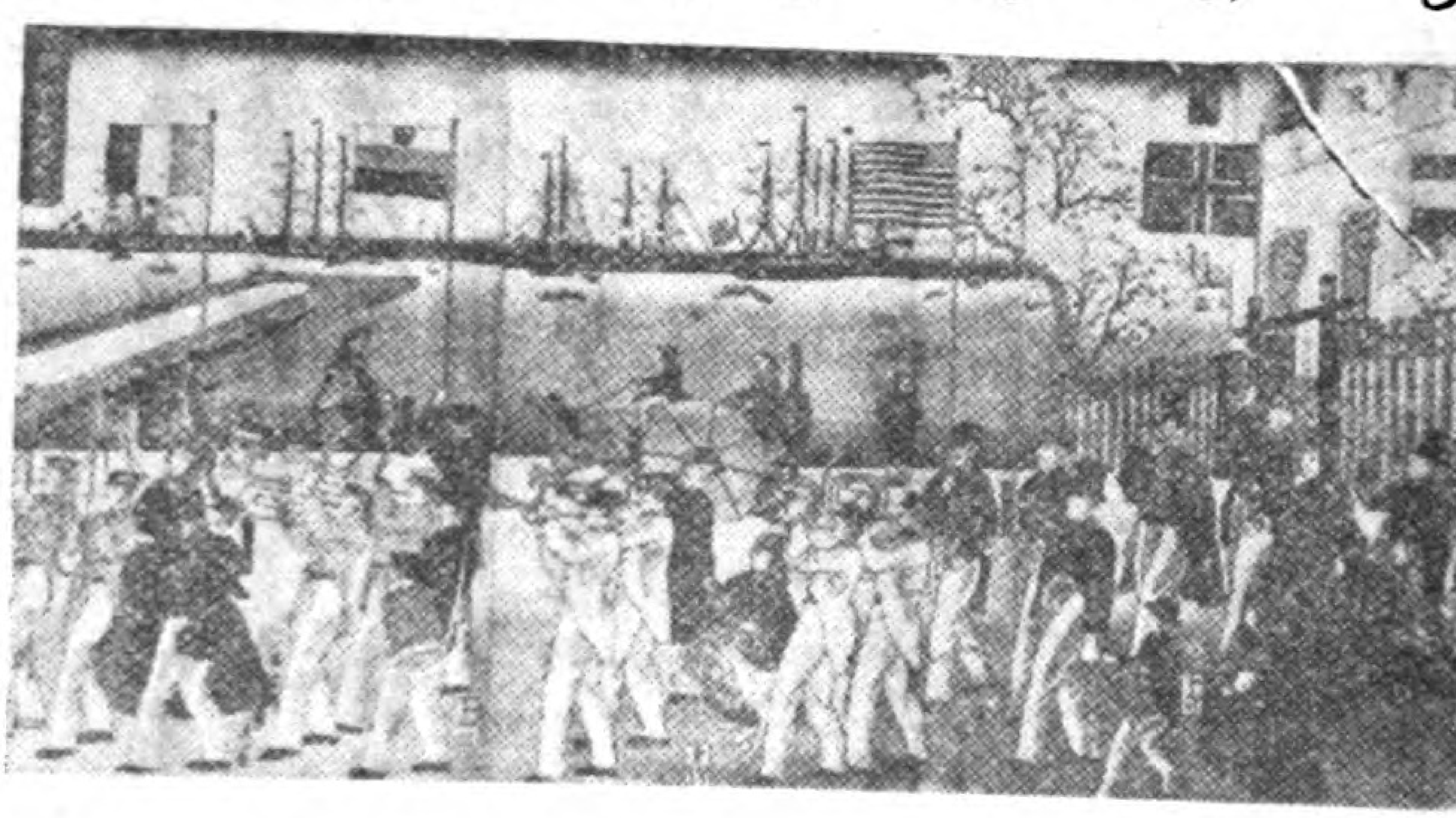
この、どんたくは、和蘭語の "Zun Dag" の轉訛であつてこの原語に近く、ゾンダフ、といふ者もあつた。

『ゾン』は洋語の天也、ダフは日なり、わが國の日曜日なり』と、文久三年版の、横濱奇談、にある。

しかし、何といつても、「どんたく」の方が日本的であり、大衆的である、從つて「どんたく」と轉訛したのであらう。

「どんたく」の日本字にはいろ〜ある。鈍宅、遁宅、呑宅、損德、曇德、呑泥、又は假名でどんたく、等々。

これを見ると、何れも、日曜日を暗示してゐるではないか。一日家に居てぶら〜してゐるのが「鈍宅」ならば、家庭から遁出して遊びに行くのが「遁宅」、うちで酒を飲んで暮すので「呑宅」蟄つてゐると外出できず支費もないので「曇德」などと、なか〜、ユーモリストが揃つてゐたと見える。





頑慣鈍宅の圖、文久元年版、貞秀畫(上)芳員畫(下)

さて、「どんたく」が、何故かほどに有名であつたかといふと、開港の初めの、横濱居留人達が、老若男女全部集つて、先頭に、樂隊を組み、列を爲して居留地から、海岸通りを通り、波止場の廣場に集まつて踊り拔いたのであつた。

當時、数の少ない外人達であり、日本人からは猿だとか、紅毛人だとか、いつて親まれないので一種の娯樂的示威運動をやつたのであらう。

その有様は

『波止場の廣きところ、異人數多寄りつどひ、丸く立ち並び、その間少々離れて大なる太鼓を打つにつれ、男女兒まで一度に手拍子を揃へ、足のふり廻しを揃へて、くる〳〵と廻る。何のこともなきさまに見ゆれども、その國におることと思へば、問ひけるに、今日はどんたくにて踊るのみと答ふ……わが國の盆踊のごときものならん

と、横濱開港見聞誌にある。

當時の日本人がこれを見て、驚異の目を瞠つたさまが思はれるではないか。

貿易挿話（その一）

黒船が入港する。

その日から必要なのは生活必需品だ。で、貿易が初まる。何といつても、初めての日本と亞米利加であるから、品物の使用價値も、交換價値も、さつぱり判らない。それどころではない、貨幣價値さへ見當がつかないので、いろんな滑稽や、悲慘やが續出する。

下田時代に、既に「弗相場談判」と、言ふのがあつた。

下田が開港される。

異人が上陸して品物を買ふのに、一弗の銀貨が、一分銀三つにしか取らない。

此れにはハルリス總領事、眞赤になつて憤慨した、それは無理もないところで、一分銀は二匁三分だが、弗銀は七匁二分である。

『これは大いに困る』

と、下田奉行水野筑後守に申入れる。

筑後守は、

『商賣の時に、相對で決めたのだから、それでよいではないか』

頗る元始的な答辯をする。だから、ハルリスは益々憤慨して

『そんな馬鹿な話はない、金や銀は何處の國へ行つても同じに通用するものだ』

と、言ふ。これは下田の談判所で行はれたのであるが、ハルリスは憤慨の餘り、火鉢の灰を奉行に投げつけたとさへ傳はつてゐる。

『それでは、兎に角、江戸幕府へ伺つて見やう』

と、江戸政府へ請訓する。早籠で、前後二人宛がかつぎ、綱

をつけて二人が引張ると、駕籠の中からは竹挾といつて、青竹の先へ、伺書を挾んで道中する。

また、黒船の側では、長崎奉行、函館奉行などへ直接談判に行く、函館奉行の如きは、なか〳〵喰つたもので

『日本では、かくの如き紙札（紙幣）でも通用するのだが、外國の金銀は、日本同様に通用は相成らぬ』

と、劍もほろゝである、これは幕府が許さなかつたからで、幕府の意見では

『弗銀を改鑄するには、百分の二十六の費用がかゝる、約四分の一の費用がかゝるから、目方では弗銀一枚と、一分銀四枚と同じでも、三枚かぎり通用しない』

と、いふので、この横車を押通さうとしたが、さうは行かない。ハルリスは改鑄費は、百分の一でよいと主張する、たうとう雙方が讓歩して百分の六といふことになつて、漸く落着した。



三井呉服店の仕入買の圖、外國人との應接振りが現はれてゐる（開港見物誌所載）

かうして貿易が初まつたが、やがて横濱時代となり、兩替は運上所（税關）で行ふので、常に銀貨が山のやうに積まれてあつた。

かうして受取つた弗銀貨は、江戸の銀座に送つて、日本の一步銀に改鑄するのであつたが、何うした譯か、

『あめりか一分』

と、稱して、民間では餘り珍重されなかつたといふ。

銀相場については、この様に敏感であつた幕府も、金相場には氣がつかなかつた。

つまり、日本の金相場は、銀六匁をもつて金一匁を買ふことが出來た、しかるに外國の相場は、銀十五匁を以つて金一匁としてゐたから、日本の金の値段は、半額である。

で、金が、どん〳〵密賣される。

金は、輸出禁止ではあつたが、どん〳〵密輸出されて、開港一二年の間に、約一億圓近い金が、流出したらうと計算されてゐる。

幕府たるもの、「一文惜しみの百知らず」の、そしりを免れまい。

兎に角、弗相場談判は、それで片着いたが、品物賣買には、いつまでも滑稽が續き、悲劇も伴ふ狀態であつた。

貿易挿話（その二）

黒船から、水兵が上陸する。

『オハヤウ〱』

と、片言で御世辭を振廻きながら、船から持つて來たビスケツト等を、子供にやらうとするが、皆逃げて仕舞ふ。

之等の水兵は、上陸すると必ず、果物や、人參や、大根を買つては、生のまゝで噛りながら歩く。それを見て

『何うしても異人は猿だ』

と、いふことになる、その頃の横濱人は、長い海上生活者が、動脈硬化症になりかけてゐて、野菜を食はねば、體が參つてしまふ、なんてことは知らなかつたらしい。

で、取引は、野菜から初まつた譯だ。

こんな話しもある。

運上所（税關）のそばの、衣紋坂、といふのが當時の横濱の「銀座」であつて、大いに賑やかだつた。

そこで露店商人が達磨を賣つてゐる。

『えゝと、さあ買つたり〱、人間七轉び八起きの縁起もので御座い』

いひながら、片手で、ごろりと達磨を轉がすと、むつくり起きる。また、ごろりと轉がすと、くるりと起きる。

七度轉がせば七度起きる、だから、七轉八起ではないのだが、そこは文學的修辭で、論理的でなくてもよろしい。

異人先生、この七轉八起の怪物を見ると、さあ不思議でたまらない。

それは、泥でこねて固めた、一寸した力學應用なのだが、どうしても判らない。

『ほう、ほう』

と、青い眼を丸くして、達磨のお尻を叩いたり、頭をなでたりしてゐる。判らない。でバリ〱と破いて見るが中は空虚。

また、破いて見るが同じことだ。

『ほう〱』

達磨さん、すつかり憤慨すると、手眞似でいくらだといふ、五百文のつもりで片手を出すと、五弗置いて行つたといふ。

こんな話しもある。

開港當時の横濱に、紀ノ國屋半七といふ、大きな織物商があつ

て、外國の丸釘が安いので仕入れた。一本毎に鍛冶屋が叩いてつくつた釘に比べると、非常に安いのだが、ちつとも賣れない。

で、大工に見せると、

『なんだつて異人は、こんなぴかぴか光つた釘をつくるんだらう、錆がなくつちや、引掛りがなくて利くものぢやねえ』

仕方がないから、此の釘を鹽積にして、錆びさせる、さうすると、どんどん賣れる。從つてそれから後は、荷揚げ場で潮水をかぶつて錆びた奴を、安く買入れて賣つて、隨分、儲かつたものださうだ。

さうかと思ふと、炭團をコークスと間違へて何萬箇と買入れて、困つてゐる異人があるかと思ふと、セメントの滿足なものは少しも賣れず、潮水をかぶつて凝固したのが、滿足なものより却つて高價に賣れる。何にするのかと思ふと、それで手水鉢をつくつたりして喜んでゐる。

また、銅は、地金や、板金では賣れないことになつてゐるので、商人は、十能だの銅壺だのにして賣る。

然し地金を賣るのが目的だから、細かい細工は面倒である、だから又、素晴しく大きな十能をつくつて並べてある。

午後四時頃になると、運上所から役人が調べに來る

『こんな大きな十能を何にする』

『へえ、風呂屋で使ふんださうで……』

『ふうん』

役人も、苦笑して行つて仕舞ふ。

銅の輸出制限の話しが出たから、當時の、輸出禁制品を見てみやう。

武具、金銀、棹銅、米、麥、その他

とあつて、武具のあるのが珍らしい。

これは開港となると、異人商人が、刀劍や具足を頻りに買度がる。幕府では、これに對して

『武士の魂を、異人に賣ることはならぬ』

と、いふので、禁制にしたのであらう。

貿易挿話(その三)

商人同志の取引は、そんなに面倒でもなかつたが、一般民衆が、異人商館から品物を買ふと、あとが面倒だつた。

その一例、

乍恐訴申上候事

一、金巾筒抱　卅枚　金一兩二分

一、ギヤマン花瓶一本　金二分

右の値段にてメリケン三番より買求め候旨當人岩次郎より申出で候に付、筋道相調べ候所聊ゝ怪敷風聞無之に付此段連印の上御訴申上候事如件

右　岩次郎

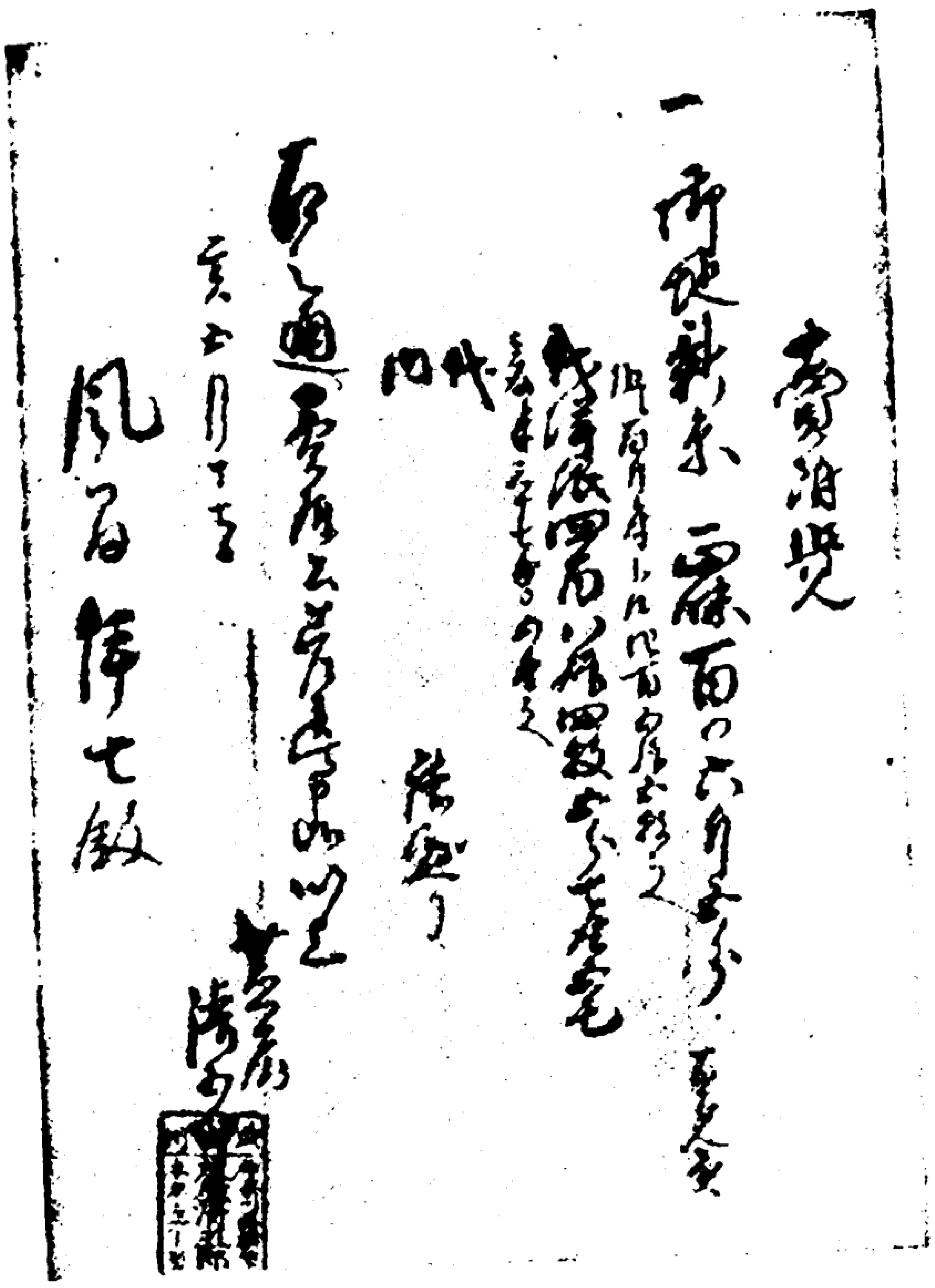
同町役人　善兵衛

と、いふ譯で、一々御役所へ「御訴へ」に及ばねばならなかつた。

だが、かうした面倒や、いろ／＼の滑稽やの中に、貿易はだん／＼盛になつて行つたのである。

生絲の初取引は、開港直後の六月に、芝屋清五郎が、イソリキといふ外國人に、甲州絲六俵を、生絲一斤一分銀五箇の割で賣渡したのが初めであるといふ。

ところが珍談は、その中に支那人が立つて取引したが、異人の方の一斤は百二十匁、こちらは百六十匁のつもりであるから、支那人が、その差額を誤魔化して、四百二十五兩儲けてしまつたさうである。



生絲輸出の始祖、芝屋清五郎の賣附通知書、文久三年のもの（知己氏所藏）

言葉が通じなければ、こんな滑稽なこともあつたらうが、神奈川奉行水野若狹守は、この生絲輸出の開拓者に對して

手づから自ら苗字お許しも
芝分けたとの清き御上意

といふ狂歌を添えて「手塚」といふ苗字を許された。

當時としては、破格の名譽だつたらう。

そして忽ちのうち九十軒からの生絲商も出來、生絲の商館も十ばかりになつた。

その商館のうちに、佛蘭西人のバルマンといふのがあつたが、剽輕な男で

『生絲ありますか』

といつて來る。

『あります』

と、いふと、懷中から尺度を出して、五寸五分のところを示

すと、五百五十弗で買はうといふことだ。もう少し高く賣らうと思つても、何うしても聞かずに、五百五十弗にしなければ、店先で算盤を枕にして寢て仕舞うといふ、仕入方をしてゐた。

このバルマン商會は、だん／＼大きくなつて、明治四年の普佛戰爭の時には、必ず佛蘭西が勝つといふので、鬼灯提灯を何萬と買入れ、勝報の來るのを待つてゐたが、遂に佛蘭西が負けて、バルマン先生毎日提灯を見ては泣いてゐたさうである。

さて、生絲に次いで蠶卵紙が輸出される、文久二年十一月、蠶卵紙一枚一分銀二枚で、十番の佛蘭西人マロレに賣つたのが初めで、賣れ出し、一時は非常に騰貴したが、惡い奴があつたもので、僞造の蠶卵紙を賣るものが出て來た。

佛蘭西あたりでこれを買つて行つて、いくら待つても蠶が出て來ない。そのうちに卵から芽が出て菜ッ葉がはへる、といふ騷ぎ、これは、紙の上へ、菜種を糊づけにしてごまかしたものと知れた。なかには、かすの子を、糊づけにしたものもあつたさうだ。

こんな譯で、日本商品の不信用はこんなところから初まり、殊に蠶卵紙はバッタリ輸出が絶えて、後には、全國から横濱へ持ち込んだ蠶卵紙を、何う始末することも出來ず、六十萬枚も燒棄てるやうなことになつた。

から言ふと、日本の商人ばかりが惡いことをしてゐたやうであるが、さうでもない。

後に岸田吟香と共に「もしほ草」を出した米人、ヴエントリードの如きは、高橋是清氏を、米國へ奴隷に賣つたやうなこともあり、また、

絲賣込の元祖であつた手塚清五郎は、英人バルベルといふ惡い奴が、絲を買ふといふので、見本として三千兩の生絲を渡した。

すると、十萬斤の生絲の注文が來た。

「十萬斤は出來ない」

と、斷はると見本は返せないといふ。この掛合ひに通辯を頼んで、一日百兩といふかゝりで交渉するが一向埒があかず、入費倒れとなつて遂その儘になり、これが原因で、生絲輸出の名家も絶家した、といふ憤慨にたへないことがある。

尙ほ、その當時は、海上保險など、といふものはなかつたので輸出品の荷造りの中へ、「水天宮のお札」を入れて、海上安穩の守りとしたものであるといふ。

豪勢なレッテル

黒船からの舶來品が、みな、レッテルを裝飾してある。日本で

も商品にレッテルをつけるやうになつた。

横濱で、菊林林藏が燐寸を賣出したが、そのレッテルは、黄色い紙へ、黒く汽車の發車するところを印刷したものであつた。

しかし、それ等よりも豪勢なのは、輪出茶函のレッテルである。

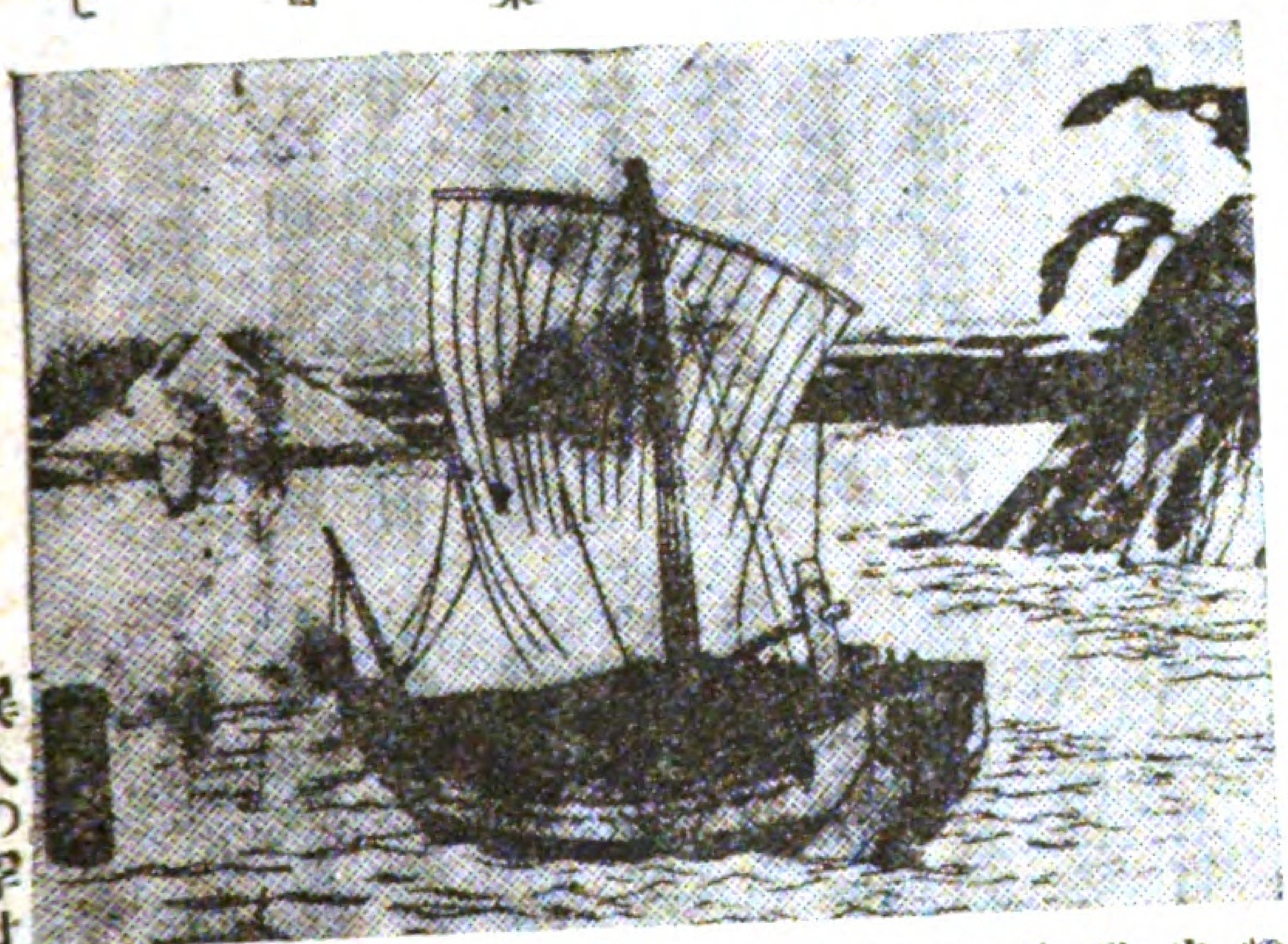
茶の輪出が初まつたのは、横濱開港後、たちまちのうちであつた。

その頃の異人さん達は、綠茶の淡白な味に感心し、淺草海苔の風味を喜び、これ等を外國へ送つたものだが、澁紙包みの茶で、すつかり濕氣を喰はせられたり、淺草海苔を、ベタ〳〵にしてしまつたりしたものである。

結局、淺草海苔は輪出できず、茶は、茶箱に入れて送るのであつた。

最初は、この茶箱のレッテルが豪勢なものであつた。

『レッテルとは商品の商標であり、裝飾でもある』





製茶輪出當時のレッテル

とは知らない。

だから、單に裝飾だらうといふので、店に有合せの錦繪を、ベタ〳〵と茶函へ張りつけるのだつた。

廣重、國芳、豐國などの、今から考へれば商品の「茶」そのものよりも貴重であらうと思はれるやうな藝術品が、ベタリ〳〵と商標に化して輪出されたさうである。

しかし錦繪も、さう〳〵は手に入らないので「茶函繪畫工」といふものが出來て、矢張り、日本趣味豐かな木版畫を描いてゐた、これ等の人々には、二代廣重や、歌川門下の國鶴、國綱などもあり江戸の町繪師が、横濱に流れ込んだ數は、なか〳〵多かつた。

レッテルとしては、惜しい氣がする。

だが、かうして、日本の風景や、花鳥や、風俗や、等々が、あの纎細な線と、澁くて華かな色彩とによつて外國へ傳へられ、わが國の浮世繪が賞玩せられるやうになつた。

異人の浮世繪に對する賞鑑の眼が、茶箱のレッテルから出發

したと思ふと、何となく、懐古的な微笑が禁ぜられないではないか。

茶の輸出は、かうして年々盛んになり、居留地の各所に「茶焙じ場」が出來て、輸出茶を焙じ、それは港灣都市情調豊かな一つの色彩となつて行つたのである。

日本人の茶焙じ場は「お茶場」といひ、異人のものは「茶屋敷」といつて、盛んな頃には數千人の勞働者が集まつて來た。

老若男女の、之等數千人の人は、焙られて上がる茶の煙りに青くいぶされた顔をしながら働いてゐた。そして開港場らしい獨特な哀調と滑稽味とを帶びた「茶焙じ歌」が唄はれるのである。

お茶場やつこらさで溜めたる金を、
みんなお前にいゝり（焙り）あげた。
朝は早うから辨當箱さげて、お茶場
通ひも意氣なもの。
鬼の三番、佛の五番、なさけ知らず
の六十番。

一日の勞銀は天保十枚（八錢）で、それを稼ぐ人達の口から單調な、單調であるだけに哀切な唄が傳はるのだ。その最後の「鬼の三番……」などは樂屋落であり、卽興詩であるのだが、焙じ場の監督の異人を諷したもので、屋敷の番地で「鬼」と罵り「佛」と有難がり「情知らず」と憎み、哀悲交々のうちに毎日同じやうな勞働を續けてゐたのであらう。

「奴隷解放」事件

明治五年六月、「人間の目刺し事件」なるものが横濱を騒がせた。

丁度、廢藩置縣のときで、神奈川縣廳といふものが置かれ、縣令、陸奥宗光、縣權令、大江卓、縣參事、高木久成といふ陣容であつた。

ちよん髷、洋服、帶刀、といふ異様な風俗のこれ等の大官は、しかし新しい制度と、新しい時代とに對する憧憬と熱情とに燃えて「乃公あらずんば」の意氣で、新しい海港都市、横濱の行政に當つてゐた。

大江卓は、近く開通する、京濱間の鐵道規則を作製するので、頻りに、セイロン島の鐵道規則を翻譯してゐた。

六月の初めから、季節的な巽巳の暴風が海上を荒れ廻つた。

この暴風に難破しかゝつて、ほうほうの體で横濱港へ逃込ん

だ黒船があつた。それは六月五日のことで、船は南米ペルーの汽船、マリヤルズ號であつた。

ペルーは非條約國であつたので、汽船は棧橋に近よらず、離れて停船してゐたのであつたが、或夜、この船から一人の支那人が遁出して、海を泳ぎ、附近に碇泊してゐた英艦アイロンデユク號に着いた。

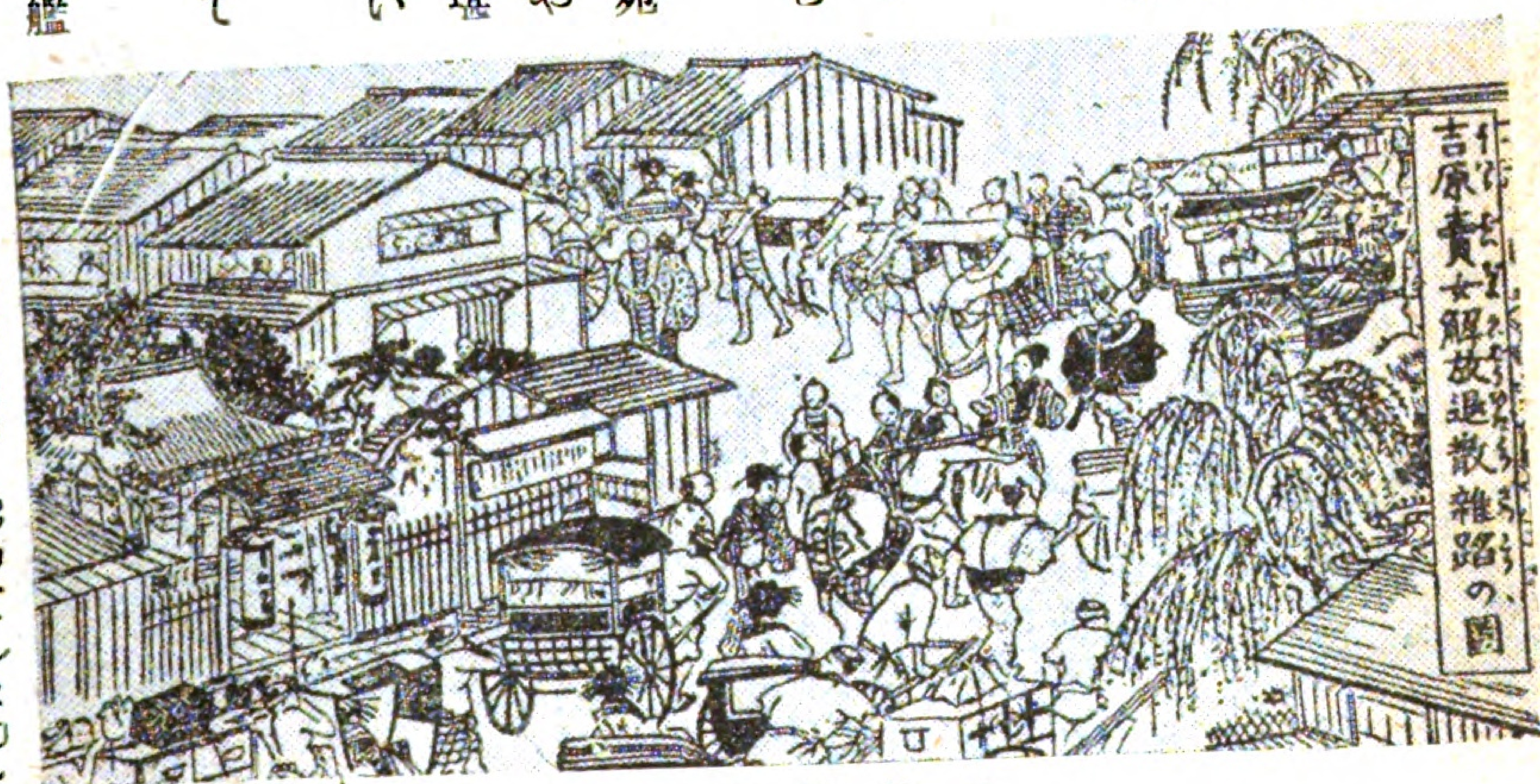
そして、

「われ／＼支那の同胞二百三十餘人は、マリヤルズ船長等に誘拐されて、奴隷としてペルーに輸送される途中である」

と、いひ、船では此等の支那人を五人宛縛り合せて遁げられないやうにし、豚のやうに船艙に押込め、打つ擲る等の虐待に堪えないので、何とかして救助して貰ひたいと哀訴したのである。

これは忽ち「人間の目刺し」事件として傳へられたのであつた。

その脱出の清國人は、翌日、英國の軍艦から英國領事館へ引渡され、領事館は更らにこれを、神奈川縣廳へ引渡した。



娼妓開放の圖

「人道上の重大問題だ」

といふので、陸奥縣令は餘り積極的の意見をもつて居なかつたが、大江權令が、どん／＼と事件を進行させて、國際裁判を行ふことにした。

外國の領事館からは

「非條約國の船舶に對しての裁判權は、領事と協議の上行ふことになつてゐる」

と、領事團は、その裁判への參與を主張したが、大江權令は

「わが領海内に起つた事件であるから、わが國法に照して裁判するのは當り前だ」

とばかり、領事團にかまはず、どん／＼裁判を進め、いろ／＼の障害があつたが、結局その奴隷を解放したのであつた。

このために、マリアルズ號の船長は、途中で遁げるやうに歸國してしまひ、船は破損したまゝ空船となつてしまつたので、賣拂つてしまつた。

痛快にやつてのけたので、大江權令は、好い氣持だつた」とところが米國の領事が、

『奴隷賣買は人道に反するといふが、日本にもあるではないか」

と冷かした。

『いや日本には、そんな不埒なものはないさ」

『では敎へて上げようか、遊廓娼妓の賣買は明瞭に人身賣買だよ」

大江權令、ぐつ、と詰つてしまつた。

これが爲めに、大江權令ばかりではなく、近來の名裁判として、これを誇つてゐた政府も、有頂天に喜んでゐるところを、がん、と一つやられた形であつたが、この爲めに急に、十月二日娼妓解放令を全國に發した。

その條文の中に

『娼妓藝妓等年季奉公人一切解放致す可く右に就ての貸借訴訟總て不取上候事」

といふ。實に高壓的なもので、司法省令もこれに關して布達して

『娼妓は人身の權利を失ふ者にて、牛馬に異ならず、人より牛馬に物の辨濟を求むるの理なし」

と、樓主が娼妓への貸金を取立て、はならないといふのだ。

かうして、マリヤルス號の問題は娼妓解放令にまで展開を見るに至り、東京でも、横濱でも、遊廓から解放された遊女が、或ひは大八車に荷物を積み、または親兄弟の迎へで、荷物を背負ひ、或ひは駕籠に乗りなどして、何れも廓を後にして出て行く有様は、丁度火事場のやうであつたといふ。

大江權令は此の時には、高島嘉右衛門に

『何うしたものだらう」

と相談した。

『何とかしませう」

それで、羽衣町の新吉原の遊女全部を縣廳へ集めて、正業に復するやうに訓示して解放したが、直ぐその翌日から、高島町の一角へ新しい遊廓の建築が初まつてゐた。

そして出來上つたのが高島遊廓である。

『貸座敷」

といふ新しい名前が、外國への名聞と、法律への自尊心と、役人の人道的思想の慰安のためにつけられた。

そこで奴隷たる少女の賣買は行はず、遊興せんとする男女のために座敷を貸せるだけである。といふのだ。

從つて遊廓は、貸座敷として全國へ復活して行つた。

その翌、六年、ペルー國の政府は、特命全權公使を我國に派

して
『日本政府の處置は越權であり、不埒である』
と、憤慨したが、わが國は娼妓等まで解放し、人道的な處置に於ては、少しも假藉するとこがないと大見得を切つたので、萬國仲裁裁判に附せられ、最後の審判は、露西亞皇帝に依つて行はれ
『日本の處置は、法理又は法律の規範を超越し、人類共通の德義的認識に出發した處置であつて、此れを非難すべき理由は少しも認められない』
との判決が與へられた。
清國からは、副島外務卿、大江權令に頌德の大旆が贈られ、若き日本は、全世界に向つて大いに面目を施したのであつた。
（完）

アスファルトを往く

片岡鐵兵

I

資本主義の行手は短く、アスファルトの道は長い――

皮膚をスリ剝く。血が吹き出る。その血がかたまり、固くなる。都會の皮膚を剝いで行く。剝いだ痕をかためる。アスファルトの色を見よ、冷酷な表情。血なまぐささ。

大東京の復興は、アスファルトを煮る煙と共に伸びて行つた。路面をいぶす煙が晴れて行く、その跡に、くつきりと肌を表はす幹線道路。それは消費と享樂の街にも、又、生産と失業者の工場地帯にも、アスファルトの道路網は「公平」に、大都會の動脈を形成した。更らに、それは郊外八方に伸びて行きつゝある。

幾多の利權、幾多の搾取、幾多の中間搾取の底に、無數の勞働者が、土を掘り、石を運び、アスファルトを煮た。

自動車はすべる。トラックは軋る。断髪、モボ、戀人、菜葉服、スパイの髪、髪、髪。

飛行機の上から見よう。都會の肩が、うるんだ空氣の底に沈んで見える、建物の四角な頭、積み重なる屋根の流れに深く切れ込んだ縱横の幹線道路が、ヤケドの痕のやうに光つてゐる。

今や、アスファルトは、東京と横濱とをつなぎ、大阪と神戸とを結んだ。

全日本の、一切の産業上、軍事上の重要地點が、この大動脈によつて連絡されるであらう。全日本の、あらゆる車輛が××されるその日までに！

アスファルトの、大進軍！　壯大なる未來！　トラムペットは響く、×車はつゞく、絡繹と。

II

工場地帯のアスファルト。本所深川の、十三間道路だ。

工場から市場へ、生産品を滿載したトラックが狂氣したやうに奔つてゐる。

歩道では、勞働者が行く。商人が行く。此所を歩いてゐる人間は、みんな逞しい顏をしてゐる。それは兎も角、のらくらしては暮らしてゐない人間の顏だ。生活してゐる肩だ。

のらくらしてゐる奴らを輕蔑してゐる。そいつらを、ガンと一つ——いつでも凹こます事の出來さうな人間だ。

アスファルトの道は道だが、その癖、埃りつぽい。空は、いつも煤煙で曇つてゐる。世界は灰色だ。空氣も、鼻の穴も、肺の中も、胃の底も、灰色だ。

女工さんが出て來る。モスリン工場から、東洋紡績から。

彼女らは固い頰をしてゐる。パサ〳〵した髮を引つ詰めてゐる。硬直したやうに腰から上を据えて、歩いてゐる。

商店は、食べ物を賣る店が多い。飯屋、氷屋、ライスカレーの立看板。銅張りの壁に金文字の看板——ところで本當は銅ではない。ブリキを銅色に塗つて、家の正面に張つたゞけだ。食料品屋、三河屋だ。そしてすしやだ。

失業者が歩いて行く。剝つちよろけた絆纏の自由勞働者。仕事にあぶれて、物憂げな眼をチラとあげては、幸福さうな奴らに憎惡を投げるが、それも刹那だ、すぐ默々と眼を伏せて、喘ぎながら歩いて行く。

アスファルトの道は、何と歩きにくいのだらう。仕事にあぶれた足には、地獄の道だ。

この埃つぽいアスファルトで、食事をしよう。一ぜん飯屋に入る。テーブルクロスのない木卓がある。清潔だ。土間もきれいだ。きれうは惡くなく、然し、少しも淫猥でない少女が、飯を運んで與れる。鰈の煮付、ほうれん草、鮪の汁、香の物、そんな物を注文する。主人の婆さんが、家庭的にいたはつて與れる。勞働者たちは仲々御馳走を喰べる。おいしいのだ。健康な味だ。拂ひは二十五錢。

勞働者がいかに清潔好きであるかは、斯うした飯屋で一度喰べたら、誰にだつてすぐ諒解されるだらう。

四

そのアスファルトの道に、時折り、「フオンな」ビラが貼られてゐる。去年の四月から五月頃まで、この往來はいつも無數の×××で滿たされてゐた。其所を通る電車の中、バスの乘場、交錯路、等々に、うすつぺらなスプリング・コオトを着た下品な紳士が、どんなに眼をギヨロつかせてゐたことか。

此頃は、だいぶ、それが尠くなつた。あんな所を、大物はめつたにウロ〳〵してはゐませんよ。

一九三〇年も、もうそろ〳〵五月一日を迎へようとしてゐる。メエデーだ。勞働祭だ。

今年のメーデーは、きつと素晴らしいだらう。ところが、このメーデーの大示威行列は芝から越中島まで、殆どアスファルトを踏みつゞけて進行するのだ。

あの日は、アスファルトの上を、勞働者の十萬の脚が踏みつけながら流れて行く、鬪爭のスロオガンと、組合旗とが、アスファルトの上を公

然と踊りながら進んで行くのだ。

IV

自動車はすべる。アスファルト。

けれども、私共は考へよう。自動車をすべりやすくするためにのみ、巨大な費用をかけてあんな道を拵へたのだらうかと。

私共は、參謀本部に行つて訊いて見よう。

V

おゝ、アスファルト。

すゞかけの並木はなげく。

VI

國家總動員、靑年訓育所、思想善導、車輛××、これらの間に緊密なつながりがあるのは、今更ら云ふまでもない。

然し、靑訓とアスファルト。この二つの間に何かつながりがあるかと云へば、人は茫然とするに違ひない。

然し、アスファルトを歩きながら、私は靑訓の組織をきつと連想するのだ。こんな事を連想するのは、私の神經質だらうか？イヤ斷じてさうではない。

先づ、アスファルトの道があれば、必ずその近くに、鐵筋コンクリートの小學校がある事を記憶されたい。いつか、靑訓の諸君は、このコンクリートの建物を見物させて貰へるだらう。その建物の上から、アスファルトの道路を見下せよ。

自動車はすべる。——

自動車がすべりやすい事は、他のあらゆる車のすべりやすい事を意味する。他のあらゆる車——×××の車も、××の車も。

十二間道路、二十間道路、三十間道路。

國家總動員。

靑訓。コンクリートの近代城砦の如き小學校。

おゝ、敵はアメリカか？　イギリスか？

VII

然し、海軍々縮會議で七割說を固執する力のある日本は、めつたにアメリカやイギリスの兵隊を、上陸させるやうな事はせぬ。アスファルトの道路は、あいつらとの戰爭では、決して戰場にはならん！

VIII

だが、春だ。

歩きたい誘惑だ。あたゝかい日光は、アスファルトの上に輝いてゐる。

銀座へ！　私たちは銀座を歩かう。美しき文化の花咲く銀座、星と月とを永遠に意識せぬ不夜の檻。私たちは、其所の歩道を埋める群衆の夥しさに實際びつくりするのである。そして世の中では、こんなに澤山の人が幸福なのだらうかと、考へる。

銀座を歩いてゐる人々は、實際たのしさうだ。彼らは自信がありさうに、歩道を踏んでゐる。みんなが、「個人」を守りながら肩を聳かしてゐる。で、さういふ顔色から、此所を歩いてゐる大多數が、「仕事」を持つた人たちである事が察せられる。何らかの仕事を。或者はオフィスを持つて、どうも事業がうまく行かぬのを心配してゐるのかも知れない。或者は、雇主にひどく搾取されてゐて、上役や重役ばかりが巧いことしやがると憤慨してゐるのかも知れない。けれども、彼らはたしかにたのしさうだ。彼らは、第一、朝から晩まで働いて一圓七十錢の日給を貰つて、それで一家五人を養はなければならぬやうな身分ではない。どんなに月給が尠くても、會社で馬鹿にされてゐても、現代で、何らかの職業を持つてゐると云ふことは、素晴らしい幸福なのだ。何所でも、彼所でも失業者がウヨ〳〵してゐる時、たとへ四十圓の月給にでも有りついてゐるといふ事は！　斯る優越人種でみたされた銀座だ。

それ故、彼らはたのしさうだ。新橋から京橋まで、二つの橋の間の遊歩場。けれども、どんな享樂の巷の中に居ようとも、もしそこの歡ばしいどよめきから、「生活」を感じ出さないなら、それは低腦だ。二つの橋の間の遊歩場は、たとへば刑務所の散歩場のやうなものなのだ。囚人が青い空を眺めて呼吸するやうに銀座の遊歩者は、高度な消費文明の陳列窓を眺めて愉快になる。囚人は、重い鎖を曳きずつてゐる。銀座の遊歩者が、生活の重い鎖を曳きずつてゐないと誰が云ひ得るのだ？

その證據に、われわれ銀座を歩いて、一歩その外に出たら、われわれの樂しさうな顔色は、すぐ別な、落ちつきのない、無興味な顔色になつちまふだらう。

それはさておき、春だ。私は今、銀座を歩いてゐる。私は埃を吸ひ、光をくゞつて、暖く疲れてゐる。自動車はすべる、電車はきしる。街路樹は、春が來たのに、と呟いてゐる。

二つの大百貨店が、群る商店の中に聳えてゐる。大群衆は、その巨大なビルデイングの中に溢れてゐる。工場のプロレタリアの手から今出て來たばかりの商品が、新鮮な匂ひを散らしてゐる。

新鮮な匂ひから、私はそれらを生産する者を感じ、そして、それらをを消費する者を、此所に殺到して來る群衆の中に見るのだ。

銀座、こゝを華やかに飾る商品を生産した者は誰なのか？　私たちはそれら生産者の影すら此所で搜し出すことが出來るか。

然しながら、私たちは二つの巨大な百貨店と、それをつないで軒をならべた商店との間の、猛烈な爭鬪を見るだらう。大資本が空たかく誇りながら、もろ〳〵の小商店を眼下に見くだしてゐるその姿を、そのまゝ見るだらう。

華やかな商店の前に、みがゝれたパカアドは停り、大ブルジョアの婦人が、傲然と爽やかな軒をくゞる。

飾窓の、高度な消費文化を誇る商品は、それらの大ブルジョアにのみ關係があるのだ。然も、銀座の銀座である所以は、街頭の日なたに、何萬圓の寶石や、何千圓の毛皮が公然と曝されてある所に在る。云ひ換へるなら、大ブルジョアの消費生活に其所の華やかさが依存してゐる。それにも拘らず、其所の歩道を埋めてゐるのは、さうした高度の消費生活

とは殆ど關係のない、中產階級、又は小ブル人士なのだ。

だが、これに何の不思議があらう。彼らはみんな味方なのだ。彼らは中產階級人同志——お互ひに大ブルジョアに依存してゐるものとしての仲間を、此所でお互ひに感じ合ふために集るのだ。

仲間よ！

行交ふ群衆は、互ひに親愛の眼を投げ合ひながら、無言の挨拶をする。

IX

そこで、銀座を歩く群衆は、一つの點で溶け合つてゐる。それは、彼らの外容や服裝が悉く中產階級的美學で統一されてゐる、といふ事だ。

そこを歩いてゐる一人の女を見よう。はでな銘仙の絞り染めの羽織か錦紗の着物かの上に、白い春のショオルをまとつてゐる。洋服でも、しつとりしたサロンに適はしいアフタヌーン・ドレスではない。又、夜そこを行く外套を剝いで見たまへ、私共はめつたに彼女の白い肌と腕とを匂はせた夜會服を見出さないのだ。

多くの金を費さずに、きれいに調ふ服裝は全く好もしい。然し、大ブルジョアの虛榮の市として光り輝く銀座に、斯る中產階級的統一の下に流れてゐる群衆しか見ないといふ事は一つの悲劇だ。それは、大名がかくれてゐて家來が踊つてゐることだ。そこは大名の花園だ。踊つてゐる家來は、自分の花園であるかのやうに幻想してゐる！

アスファルトの道路を作る事を企てたのは大ブルジョアだ。これを、眞の意味で利用するのは、少數の彼らだ。群衆は、そこで踊るべく、自然に組織されてゐる。そこで踊り得る光榮に醉つて、群衆は、彼らの味方として組織されるの餘儀なき身の上だ。ジャズで踊つてリキユウで更けて——彼ら支配階級のテサキとしての幸福が、銀座のアスファルトの上に在る。

X

銀座の有名なカフエに入つて見よう。こゝで、小ブルジョアの讃美する女給さんを見せて貰ふが好い。そして、私たちは、きつとヘドを吐く。醉つてゞはない。醜さにあきれるからだ。紫組とか、紅組とか、こゝでは無數の女給が、ブルジョア娘を眞似て働いてゐる。彼女らは日本中のあらゆるカフエの女給の中で最もイゴイスチックで、慾深かで、その底知れぬ無智と正比例した高度のゴウマンさを持つてゐる。女給は藝妓の進化した姿だと誰か云つてゐたが、この野獸の巢のやうなカフエの女給は、いちばんおくれた藝妓よりも文化の程度が低いではないか。

おゝ銀座、そこのアスファルトは目立たない。そこは少しも、現代文化の尖端ではない！

XI

アスファルトの路は、大東京の新しいメイン・ストリートを作つた。

われわれは、いはゆる金座通りに立たう。此所は、銀座にまさる金座であり得るか？ 此所は落ちつきのない、中心のない大街路だ。用事を持つた人が其所を通りすがりに歩いて行く。みんな用事を持つてゐるのだ。

みんな忙しいのだ。急がなければならない。この街を飾るための、資本がまだ出揃はないのだ。

たゞ、白い明治座が、その大きな近代ルネサンスの建物と、昔風な芝居との矛盾を悩むやうに、どつしり据はつてゐる。

私は、神田から上野へとつゞくアスフアルトの上を歩いてゐる。ひじり橋の明るさは、白い石の反映だ。私は上野廣小路で、眩暈に近いものを感じた。そこでは、成長してゆく大都會が感じられる。淺草公園の裏には、巨大な田舎がある。そこのアスフアルトの上には、農村から來た失業者の、投げ捨てたバットの吸殼が、いつまでも細い煙を上げてゐた。更らに、私は芝にゐた。お成門ちかく、いつでも砲砦に代るであらうコンクリートの建物が、警察署のマークを光らせてゐた。

これらの無數のアスフアルトの大通りに、私は何を見たか？

私は見た、あかゞね色に塗られた急造の商店を。表は、あかゞね色に金文字を浮かせ、裏はあら壁と米材の露出。

そして私は見た、聳える鐵筋コンクリートの城砦、近代小學校の建物を。

XII

丸の内。

雨が降る。アスフアルトは、黒く光る。建物は、白い遠景――

青い芝生にこそばゆく雨が降る。孤獨なレインコートが、警視廳のオートバイと、すれちがひさまに、黒い洋傘を傾けた。

霞ケ關から、永田町へ、坂を滑り上る。

參謀本部の緑青の屋根にも、雨が降る。建築中の、あの宏大な議院の頂上に、働く人間が、小さく、小さく見える。

赤い煉瓦の司法省、海軍省、その他各省。ブウルジョアの政治機關が積み重なつてゐる。こゝに、ブルジョアの大組織の、心臓がある！

そればかりではない。こゝには、銀行集會所があり、電氣クラブがあり、一切の大トラスト、大カルテルの頭腦がある。

高い建物の並ぶ一直線、舗石の日かげを、春の女が行く。戀人が歩く。邦樂座へ行くのだ。

丸ビル、東京驛、其所の廣場は人間の海だ。

全日本のアスフアルト道路網の中心は、ブルジョア組織の中心である丸の内だ。全身の動脈が、心臓を中心とするやうに。

そして、こゝから派生するあらゆるアスフアルト道路は、やがて日本の全××、全××を結び付けるだらう。

XIII

麻布のアスフアルト。

大學の制服をつけた男が歩いて行く。三四十間あとから、汚れた紳士が歩いて行く。

學生服の男が足をはやめると、汚れた紳士も足をはやめた。ゆるめると、後者も、やはりその歩調に合はせて歩く。あとを付けてゐるのだ。

學生は、こいつ、見込まれたな、と思つた。往來で見込まれるのなら、

きれいな娘さんに限るのだが、あんなオヂさんぢや、迷惑この上もない。

學生服の男は、しかし平氣だ。逃げをはせるといふ自信がある。この邊の地理を、彼は實によく心得てゐた。

彼は背ろを振り向いた。よごれた紳士は、治安維持法の外套を着て、こつちを見詰めながらやつて來る。學生服は、横町を曲らうとして、ひよいと帽子をとり、うしろのオヂさんに、ぴよこんと頭を下げて見せた「はいちや」そして、すぐ、横町へ身をかくした。「泥棒！」今はまぎれもなく逮捕する者の意志をさらけ出して、汚れた紳士は疾風の如く驅け出した。

XIV

池袋のアスファルト道を、彼女は歩いてゐた。約束の時間がすこし過ぎるのだが、出會ふべき男に出會はない。

場末の活動寫眞館が埃まみれに立つてゐる。そこに近づく頃、くるりと廻れ右して、同じ歩道を歩いて行つた。

彼は來ないのぢやあるまいか――ふと、そんな事を考へた。彼は來ない――彼は、捕まつたのぢや、あるまいか……

アスファルトの路面が、急に彼女の脚を吸ひ付けるやうな感じがした。一歩も歩けなくなつた。が、立止つてはゐられない。

多くの同志が、いろ／＼の時にアスファルトの上で突然の絶望を感じた。彼女もその一人だ。

XV

夜、一瞬間、停電した。

長いアスファルトが、月の光りに青く濡れつゝ、遠くつゞいてゐた。

XVI

神戸、高取の鐵道工場へ××××に行つた二人の男が、ひどく急いで來て、圓タクを摑まへた。運轉手は、二人の男のボロ洋服が、生々しい血と泥とによごれてゐるのを見て、拒絶しようとした。が、その瞬間に、二人は車の中に飛び込んでゐた。うしろから、ドスを擬して、「走れ！」と命令した。

神戸と大阪をつなぐ阪神大國道を、縫ふやうに行く無數の自働車や電車の中に、一臺のタクシが狂氣したやうに奔つてゐた。

そこのアスファルトは白ぼつい。左手に六甲山がつゞき、右手に遠く海が光つてゐる。赤い屋根、宮殿のやうな住宅、松林――巨大な野球場のスタンドが、松林の彼方に聳えて見える。一切の風景は明るく、ゆたかだ。

狂氣のやうに奔る圓タクは、警官に咎められ、行手をさへ切られた。運轉手はホツとした。恐しき脅迫者から、初めて遁れた、と思つた。が、二人の血まみれな××××は、疾くの昔に、車を捨てゝ姿をくらませてゐたのだ。

今年、××××の一場面。

おゝ、アスフアルト！
其所は既に戰場だ。
其所は戀人の遊歩場だ。
其所は自働車の極楽だ。
其所は失業者の針の道だ。
私たちは、アスフアルトを踏む。搾取された無数の勞働者の・道路人夫の肌を感じる。
私たちは、アスフアルトから、強固な敵の××を感じる。
敵は組織されてあるぞ！
私たちはアスフアルトを歩きながら、日本中の車輛の××される日を思ふ。鐵筋コンクリートの小學校を見上げる。青訓を思ふ。
おゝ、アスフアルトの上の、ビッグ・パレエド！　壯大な未來！

——一九三〇年三月——

出版部便り

新刊『日本財閥の解剖』はまちに出た。各種各様の經濟人に絶大の好評を博してゐる。一體、日本總人口の九割五分はプロレタリアで殘る五分だけがブルヂヨアだと誰もが言ふが、そして口を開けば金權の財閥のと騷ぎ廻るが、その金權財閥なるものゝ正體を的確に認識してある人がどれだけあるか。本書は、未だかつて誰人の窺知も許されなかつた此種大財閥の内部に深く立ち入つて、その五臟六腑を摑み出し、縱横無盡に解剖のメスを揮つたものである。古井戸の中から小判が出たとか、始祖が天秤棒を擔ぐ一文商人であつたとか、そんな話は今、問題でない。蜘蛛手に張り廻された緻密な事業網と水も漏らさぬ完璧な支配力が、如何なる機能で統制され、如何なる組織で運用され、更に如何にして年々歳々彌益す富が累積され行くか。景氣不景氣の外に超然、微動だもせぬ盤石の基礎と鐵壁の機構を持ち、資本主義經濟組織の下にわが世の春を謳ふ一切のカラクリを暴露したのが本書である。正確詳密比類なき財界閻魔帳である。

勞働大衆版第一篇『ゴー・ストップ』は突如として發賣禁止を喰つた。期待が大きかつただけ如何にも殘念であるが仕方がない。目下改訂版を出すべく準備中である。併し、この事は、われらにとつてよい試練であつた。將來の活躍を待たれたい。

トーキーの將來

清水光

序

近代的な技術による藝術として、機械的な藝術である映畫は、莚に現代の藝術であつた。しかし更に複雜なる技術的基礎に立ち、より新しく發生したトーキーは、更に現代的な藝術である。トーキーは映畫に代つて今や機械藝術の尖端を進みつゝある、といふことが出來よう。しからばトーキーは如何なる方向に進みつゝあるか。トーキーの將來は如何に發展するであらうか。この問題は映畫藝術の現實的な問題として、あらゆる側面からの考察を要求するであらう。その總ての問題に觸れることは勿論ここでは不可能である。この小論に於いてはこれを新しい藝術形式としてのトーキーの問題を美學的立場を中心に考察することにしよう。

トーキーの歴史は、映畫の歴史とともに古い。しかしトーキーの美學――藝術としてのトーキーの問題は、映畫の美學とともに、しかもより新しいのは言ふまでもない。

トーキーは映畫の技術に音響の同時的再現の技術が結合されて生れた。より精密に言ふならば、物體運動の機械的・寫眞的再現の技術である映畫に、この物體の運動によつて生じた音響を機械的に同時的に再現する技術が結合したのがトーキーである。運動及び音響の再現の技術は以前から存在してゐた。トーキー發生の根本的なことは映畫と音響の同時化その所謂シンクロニゼイションに存してゐる。之によつて外界の視覺的再現だけではなくて同時に聽覺的に再現することが機械的・技術的に可能になつた。

かつて映畫藝術が寫眞的・機械的な外界再現の技術から發生したやうに、トーキーの技術的基礎は自然、人間の所謂外界を視覺的・聽覺的に再現し得る可能性の上に置かれてゐる。

映畫がかつて創造的な表現の手段としてではなく單なる再現のための技術として理解されたやうに、現在ではトーキーは未だ視覺的・聽覺的な創造的な技術としてではなく單により現實的・寫實的な從つて映畫より一歩進んだ外界再現のための技術として理解されてゐる。

しかし映畫が單なる再現のための技術からそれ自身に特殊な內容と形式を持つた創造的な藝術に向つて進歩した如くに、トーキーも單なる再現のための技術から、より豐富な內容と形式を持つた藝術に向つて進展しつゝあると言へるであらう。

映畫と類似したる機械的・技術的・基礎がこのことを可能ならしめる。そして映畫の現在の社會的經濟的なる存在の仕方が、映畫を更に進めそれに代るものとしてのトーキーの未來に向つて、その獨自の藝術としての發展を必然的ならしめてゐる。

藝術としてのトーキーの考察に於いて根本的なことは、トーキーは藝術としては映畫の單なる直線的發展の結果ではない、といふことである。トーキーは氣紛れな映畫の新しき裝ひの一つではなくて、一つの新しい藝術の發生であり誕生である。何故かなら夫れは一つの新しい技術、シンクロニゼイションの技術の上に立つてゐるから。

新しい技術は、新しい藝術を可能ならしめる。ここに一つの飛躍的な發生と轉向を認めなければならない。

映畫が未だ一つの技術的發明として、世間の好奇心の對象であつたとき、動く寫眞は動くといふこと丈けで充分であつた。「それは單なる複寫であつた。寫眞に撮せるものなら映畫にも撮せる筈である。といふ純技術的な事實であつた。」（アドルフ・ベエネ）この時に當つて、映畫的技術と藝術との間には殆んど何の關係も存在してゐない。映畫と藝術との交渉が生れ、映畫が藝術として考察され始めたのは、映畫が文藝や舞臺藝術と關係し出してからである。

藝術としての映畫の歷史は、映畫と舞臺藝術との交渉に始まると論ずることが出來よう。何故かなら舞臺藝術は言ふまでもなく藝術であり、その映畫技師的再現はその限りに於いて藝術と交渉してゐるからである。かくて最も素朴なる舞臺藝術の機械的鑵詰としての映畫、所謂「舞臺的映畫」が生れた。それも聽覺的再現の能力を奪はれた甚だ不完全な舞臺の再現が現れたのである。しかしこの時期に於いて「撮影された事物が監督によつて規定されることになつた。けれども夫れは殆んど今までの舞臺劇をその儘に演じた。舞臺の上で良いものは映畫としても良いものに違ひない、との前提のもとに。」（アドルフ・ベエネ）

しかし視覺的であるとともに聽覺的でもある舞臺藝術の再現は、視覺的に如何に正確であり得ても元より不可能なことである。そこに聽覺の世界が完全に奪はれてゐるから。

そこで映畫は聽覺の世界を奪はれてゐるこの根本的な制限を脫しようとして視覺的に發展した。よく言はれるクロオズ・アップやカット・バックの發見、移動撮影の技術の發明は、この制限を利用し、それに順應し、それを超越しようとして生れたものである。クロオズ・アップ、カット・バック、移動撮影の與へる印象は、舞臺藝術には殆んど存在することの出來ない全然映畫的な視覺的な發見である。

映畫はかくて、その藝術的發展の途上に於いて舞臺藝術からの道を進みつゝあつた、と言ふことが出來よう。この時期に於いて「矢張り劇が演じられてゐる。けれども、特に視覺的な要素を重んじてゐる。未だに劇が演じられてゐるのであるが、舞臺劇の劇ではない。（アドルフ・ベエネ）映畫はバクシイの言ふ樣に常に劇的であるの外はないかも知れない。しかし舞臺的な劇、舞臺藝術から映畫は離れ去つて、視覺の世界にそれ獨自の表現の世界を求めつゝあつた。映畫は「更にこの視覺的な劇を純化して、純粹な直觀の方向に發展せしめ」ようとした。

この映畫藝術の發展の道を、「舞臺藝術からの道」と言へるであらう。映畫の藝術としての發展の方向は、舞臺藝術よりの隔離の方向であつたと言ふことが出來るのである。そして、この藝術的な進展を方向付けたものは、映畫藝術の基礎をなす視覺的（聽覺的ではな

く）再現の技術である。

　ところでトーキーの技術は視覺的・聽覺的再現を可能ならしめる。そこで舞臺藝術よりの隔離の方向を進みつゝあつた映畫は、トーキーの出現によつて急角度の轉向をなした。再びトーキーは映畫の方向に逆行して「舞臺藝術への道」に急速に轉向した。舞臺藝術の現代的な一異變種であるレビュウの映畫化、レビュウ映畫の全盛の餘り悦ばしからざる現狀はこのことを十分に裏書きする。ムウシナックの言葉を借りて、トーキーをも映畫（無聲）をも含めて「映畫的藝術」と呼ぶならば、映畫的藝術はトーキーの出現によつて正に一八〇度の回轉をなした。トーキーの出現は新しい藝術の發生である。少くとも新しき藝術發生の可能性を與える。

　現在に於いてトーキーは未だ再現的技術としてしか理解されてゐない。しかし、かつて映畫が再現の技術から獨自の藝術として發展した如くにトーキーも亦、藝術的に成長するであらう。現在の餘りに騷々しいトーキーの内にも藝術に向つての動向を認めることが出來る。トーキーによつて映畫的藝術に與えられた新しい可能性の展望する重大な意義は、この舞臺藝術を中心とする映畫發展の側面觀によつて知ることが出來るであらう。

　映畫的藝術は、ここに一つの段階を終つて新しい進展の可能性を前にして立つてゐる。ここに映畫藝術の一つの始源を劃することが出來る。

3

　映畫藝術の自立の過程を舞臺藝術との關聯に於いて、いはゞ舞臺藝術の側面よりの配光によつて眺めた後に、より具體的に映畫に於ける音響の問題を考えることにしよう。

　映畫藝術はトーキー發生以前に於いては、無音の沈默の藝術であつた。しかし映畫藝術が自己の特異の性質制限を自覺し、視覺の領域に自己完成を成し遂げつゝあつた時に、勿論、聽覺現象をも視覺的に十分な效果的に表現することを覺えた。

　これをプドフキンによつて行はれた具體的な實例によつて説明しよう。彼の傑作「聖ペテルスブルグの最後の日」に於ける爆發の映畫的表現のための苦心についてプドフキンは記してゐる。「戰爭にあてられた姿の發端に於いて、私はダイナマイトの大爆發を表現したいと思つた。この爆發に完全な眞實性を與えるために私は莫大な分量のダイナマイトを地面に埋めておいてその爆發を撮影した。この爆發は實際に於いては實に素晴らしかつたが——映畫ではさうでなかつた。スクリインの上には凡そ退屈な、生命のない事件であつた。

　その後、私はながい間の研究と實驗とを經て、これまで撮影したものの一斷片をも使用せずに、私の欲した通りの效果をもつ爆發を「モンタアジユ」した。私は猛烈な火焰を展開させる火焰放射機を撮影した。さらにこの間に一層の爆裂的な效果を與えるために、マグネシウムの閃光の短い畫面を、明暗のリズミカルな轉換をなすやうにして組入れた。それに、ずつと以前に撮影した溶解物の畫面を組合せた。これらの畫面は特殊な光調をもつてゐるために私にも適當であるやうに思はれたのである。

　かやうにして遂に、私の狙つてゐた畫面效果が出來上つた。今度こそ私の企圖した大爆發がスクリインの上にあつた實際の爆發に相

應した、ありとあらゆるものがあつた。たゞ、眞實の爆發がなかつただけである。」

映畫は音響をその儘再現することは出來ない。しかし映畫はモンタアジュによつて音響的印象を視覺的にではあるが與えることが出來る。プドフキンの言ふやうに「たゞ眞實の爆發がないだけである」實際の爆發に相應した、ありとあらゆるものが映畫面に表現されることが出來る。爆發に伴ふ大爆音も勿論その内に含めて。

映畫は、かくの如くに、音響をそのまゝ再現はしないが映畫的に表現することが出來る。

も一つの例を取らう。

スタンバアクの「暗黒街」の最初の場面に於いて、深夜の銀行街の町角から醉どれが、ふらりと現れる。突如、銀行の鐵格子の窓ガラスが眼前に碎け破れる。瞬間のクロオズ・アップ。再びロングに戻つて醉どれの蹌いた格好で立つ夜の街。

この時、突發的に破裂するガラス窓と共に瞬間的に挿入されたクロオズ・アップは正に爆音が鼻の先に起つた印象を與えるに十分であつた。この同じ手法、爆音的モンタアジュは、この映畫の寶石商襲撃のときにも使用されてゐた。

又ムルナウの「最後の人」に於いて――

目出度い夜を踊り明した二人の隣人が醉つた足取りで老人の家の外に立つ。喇叭を吹いてゐる。いゝ機嫌で左樣なら、と、プーッと喇叭を吹き鳴らすのである。その時、カメラは喇叭の正面からプーッといふ響のやうに顚狂に空高く去るのである。そのあとに二人の隣人は反響のやうに遠く小さく、未だ喇叭を吹きながら、よろよろと立つてゐる。

このカメラ・ワアクを見て、セルデスは映畫は今や音響をも表現することが出來ると感嘆した。これは移動撮影の技術の發見とともに隨分以前のことである。

このやうに映畫藝術は、映畫的技術を巧みに利用し、そのモンタアジュによつて、映畫には先天的に失はれてゐると云はれてゐる音響をも表現することが出來るのである。

映畫は、その他種々の點についても、あらゆる藝術とともに夫れ自身の制限をもちながら、却つてそのために映畫的に視覺的に獨自の領域を開拓し、獨立の藝術にまで成長した。そしてこのある程度までの完成、したがつて行詰りと時を同じくして現れた映畫事業の經濟的困窮を救ふために映畫に取入れられたのがトーキーである。したがつてトーキーは事業的に映畫事業の延長であり進展である。このことはトーキーの技術的基礎と機械的な生産過程が與える可能性が極めて容易ならしめた。そしてトーキーの出現は一時的にではあるが、ある程度まで映畫の經濟的危機を救つたかの如くである。

しかし藝術としてのトーキーは未だ藝術以前の狀態に於いてある。映畫に同時化されて附加された音響は、かつての映畫がそうであつたやうに、未だ好奇心の對象としての意味しか持つてゐない。映畫と共に音響が再現される。たゞそれ丈けである。それはベエネの言葉を借れば「純粹に技術的な事實である」に過ぎない。勿論この幼稚に騷々しいトーキーの現在の動向の内に藝術への傾向を見付け出すとは出來ないとはないが、未だにそれは充分には顯はにされてない動向としてである。

視覺藝術として映畫は繪畫ほどにではない

が、ある程度の完成をなしてゐる。その映畫に、附加的に音響を與へることは却つて藝術的な印象の混亂を招くのみである。取つて付けたやうに、映畫をそのまゝにそれに音響を附加した現在のトーキーの大部分は劇場藝術に於ける視覺と聽覺の問題に關して言つたクレイグの有名な言葉を想ひ出させる。

『例へばベルリンの畫廊で、名高いシニヨレルリの繪を見るとする。同時に、四部の絃樂が奏せられたとして、それが吾々の視覺を助けるであらうか。又同時に何者かによつて「パンの誕生」が朗讀されたとして、それが繪畫の內容を傳へてくれるであらうか。

否、そこに唯印象の混亂があるのみである。

例へばベエトオフエンの「田園シムフオニイ」を聽くとする。同時に草刈が草を刈つてゐるパノラマが眼の前に現れたとして、或は又美しい聲でスペンサアの「羊飼の暦」が讀まれるのが耳に入つたとして、それがこのシムフオニイの理解と鑑賞とに何の助けをなすであらうか。

それはたゞ印象の混濁を起すのみである。』

現在のトーキーは、今のまゝでは殆んどすべて、たゞ印象の混亂のために音響を音聲を同時化的に伴ひつゝある狀態である。それでは藝術としてのトーキーの未來は全然絕望的であらうか。勿論、これは否と答へられなければならない。

機械藝術としての映畫によき理解を示し「技術家の美學」として映畫・モンタアジュの理論を實踐の內に理解したソヴエイトの映畫人たちは、機械藝術としてのトーキーにもよき理解を示してゐるからである。

映畫のモンタアジュの理論はトーキーを如何に考へてゐるであらうか。

4

ソヴエトのエイゼンシュテイン、プドフキン、アレクサンドロフが連署して發表した「發聲映畫に關する宣言」の內に記されてゐる。

「監督の發達と完成のために新しい可能性を與へるところのものは、雜音に對しては對位的な位置にある音の利用である。發聲映畫の最初の經驗的勞作は、眼で見えるタブロオとの確然たる不調和に向つて導かれなければならない。たゞ「ショック」こそ望みのセンセイションを與へ得るものである。これこそ未來には、眼で見るタブロオと耳で聽くタブロオとの新しいオオケストラ的對位法の創造を作り出すものである。」

ここにトーキーに於ける視覺的な契機と聽覺的な契機が對位的に考へられてゐる。トーキーの最初の經驗的勞作は視覺的な映畫の部分に對して確然たる不調和に向つて導かれねばならない、ことが主張されてゐる。

トーキーの技術的基礎は、映畫と音響との同時化である。即ち視覺的・聽覺的な再現のための技術である。この視覺と聽覺の同時化は其儘の技術としては、外界のあるひは舞臺藝術等々の機械的再現を與へるのみである。しかも藝術は單に技術的・機械的再現に止ることは出來ない。視・聽二覺の同時化の可能はそれら二覺の任意の結合の可能性を與へる。視覺と聽覺の任意の組合せ、それら二つの感覺のモンタアジュの可能性である。かくて視・聽覺的再現の技術は、藝術として藝術家の意志に從つて統制され、計量され、モンタアジュされ得るに至る。ここに再現のための機械的・技術的能力は、創造的な藝術のための表現手

段として一〇〇パアセントの機能を果すことが出來るのである。

　このことを具體的に、實例をもつて說明しよう。

『例えば映畫「母」で彼女が死んだ夫の屍を凝視してゐるとき、母の泣き聲を聽くのは良いとは思はないですか』との問に對して、プドフキンは、それを次のやうにモンタアジュすると答えてゐる。

「母は屍の傍に座つてゐる、

　そして觀客は水が洗濯盤の中に滴る音を、はつきり聽く、

　その次に、沈默せる人の顏と燃える蠟燭の畫面が現れて、

　それから忍びやかに泣く聲が聽える。」

　ここに泣く母の姿とともに泣聲を聽くのを良いと思ふ、常識的な考方(そこで視・聽の同時的再現としてトーキーが考えられてゐる)に對して視覺と聽覺の對位的モンタアジュが如何に異るかゞ明らかにされてゐる。

　アメリカのトーキーについてプドフキンは「それは技術的には確かに完成されてゐて、音響を立派に再現する。しかし結局それは藝術的には下らない物にしかならない。音響は單に音響のために用ひられてはならない。ロシアに於いて吾々は劇場藝術をスクリンの上に現さうとは思はない。新しい表現の手段を創造しようとしてゐるのである。」と言つてゐる。

　プドフキンは映畫に音響を結合させる可能性について又次のやうな映畫の場面をとつて說明してゐる――

「一人の女が夫を停車場に送つて行く、

　列車は今や發車しようとしてゐる。

　急に女は夫に話すべき重要なことがあつたのに氣が付く、

　しかしその瞬間、彼女は夫れを思ひ出すことが出來ない、

　そして夢中になつて思ひ出さうとしてゐるとき彼女は(幻に―)機關車の蒸氣の響と車輪の回轉の音を聽く。

　彼女は興奮の內に、數秒の後に夫は去つて了ふことと思ふ、が彼女は考を纏めることが出來ない、去り行く列車の音が耳に響く、

　しかし列車は尙そこに立ち留つてゐるのである。

　この場合の音響は、今まで聞かれなかつた強度を劇的境遇に加えるに違ひない。このとき音響は正當化され適當に用ひられてゐる。何故かなら、ここで音響は最も力强い劇的表現の手段であるから。」

　これらの實例によつて具體的に明確にされたやうに、モンタアジュの理論に於いては對位的に視・聽の二つの感覺の世界を綜合し統一する藝術として、トーキーは理解されてゐる。かくの如きトーキーに於いて、視・聽二覺の綜合的現實的な藝術として、かつての映畫藝術に代るものとして、トーキーに始めて望み多き將來が約束されてゐるのであらう。

(三〇・四・四)

スポーツの春

早慶戰を中心として

腰本壽

リーグ戰の未だ開始されてゐない時、リーグ戰の結果を豫想し、早慶戰の勝敗を豫想するのは大こそ早計に過ぎる樣で、責任者の立場にある私としては非常に困つて仕舞ふのですが、私の豫想なり結論が多少他の人と違つてゐるかも知れませんのでペンを執つた次第です。先づ第一に昨秋よりの戰跡と今春卒業する諸選手及び入學する中學界のスター等を考慮に入れてからペンを進めたいと思ひます

臥薪嘗膽と云ふ言葉が復讐戰を敢行した場合にはよく使用されます。これは敗者が勝者を倒した時のみに使用すべきものであるとされてゐます。が勝者もその王座を確保する爲にはそれに勝つた苦心をする事はあるに拘はらす多くの場合それは見逃がされがちです。

昨秋の敗戰について多く語るべき材料を私は持つてゐます。しかし過去の敗戰を繰り返して見てもそれは死兒の齡を數へるのと餘り違ひはありません。リーグ戰では負けました。確かに惜敗した事は事實ですが、私達所謂塾チームの選手は、リーグ戰直後に行はれました神宮大會における天覽試合において、早慶戰開始以來の大スコアで大勝した事によつて總てを忘れる香心持よく新春を迎へる事が出來たのです。日本人として、陛下の赤子である私達としましてはリーグ戰に勝つた方がよいか或は天覽試合に勝つてリーグ戰に負けた方がよいか選手としては兩方に勝つ事を望むのは人情ですがそれが不可能の場合孰れを選ぶかと問はれゝば、私は躊躇なく天覽試合に勝つ事をこそ望むと答へるものです。然るに殆んど總ての新聞雜誌がこの試合の結果については餘り多くを記述する事を好まないやうに空前絶後とも云ふべき球界の一大事に對しました。あの結果を豫想し得なかつた事も一つの理由でせうが、私達としましては可なり思ひ設けない事でした。これまでリーグの優勝者が次位のチームと試合をリーグ戰後に行つた例もありませんでしたが、優勝者が次位のチームにかゝる大敗を招くと考へ及んだものも少なかつた事でせう。野球戰の進展が如何に微妙なる原因によつて左右されるか野球のゲームが如何に運不運に支配されることが多いかをよく物語つてゐます。他の競技においては恐らくかゝる結果は出て來ないでせうが野球戰では決して珍らしい事ではないのです。非道い批判をする人の中には、野球戰

はサイコロの次きに勝負い分らぬもの」だと力說してゐるものもあります。私は實力そのものをそれ程に無視するものではありませんが、この運不運即ちブレーキを摑んで必ず勝つ、少くとも勝つ事を逸しないチームが結局實力のあるチームであると考へてゐます。

思はず本論から遠く離れて仕舞ひました。私はリーグ戰の前半戰が終るまでは早慶戰の勝敗を論じる事に對しては非常に小心でありたいと考へてゐます。

それは何故かと云ふに、リーグ戰の前半において堂々と勝利を續けて行つたチームがあつてもそれを果して最後まで持續し得るかどうか、甚だ疑問とせねばなりません。主戰投手が病氣になつた。打つてゐた連中の當りが止つた。只これだけでも勝敗の立場が代つて來る事があります。私の一番恐れてゐるのは相手方のチームでなくて病氣と云ふ魔物です「これなら決して負けないまでに練習が積んだ」と思つてゐる時、突然チーム中のレギユラーとなつてゐる選手の中の一人が病氣になつたとか又他の事故で出場出來なくなつた時位落膽をさせられる事はありません。塾のチームと云へば誰しも宮武、山下と云ふ名前を思ひ出しこの兩者が柱石であると速斷するかも知れません。しかしゲームを行ふ場合にはこの大物打ちばかしを餘り重く見る事は總てにおいて破綻を招く原因になります。チームである以上その中の一人が缺けても圓滑を缺くものですから、場合によつては餘り重要視されてゐない選手の方が缺けて却つてチームとしては非常に困る場合もあります。チームの協力一致と云ふ「融合の力」に須つて最も力ある選手が必ずしもグラウンドにおいてスタープレーヤーでない場合があります。この團結力を構成する主要分子となる選手が外部からは殆んどその存在をすら認められてゐない事があります。即ち團體競技における一つの特殊性の現はれです。ですから私はチームの健康狀態について最も頭を惱まされてゐます。

そこで愈々兩軍の比較をして見ませう。早大にあつては伊丹、水原、水上三君の主要選手が昨年度のチームから抜けてゐます。チームは次のやうなものになる事でせう。

投手	小川　多勢　山田　松木
捕手	伊達　宮脇
一塁	西村
二塁	三原
三塁	森
遊撃	富永
外野	今井　矢島　弘世　杉田屋　大馬

外に福田と云ふ身體の大きな投手と、淺井捕手が加はり大體以上の選手が戰鬪員と云へます。これに對して塾のチームは

投手	宮武　水原　塚越　上野　碣石
捕手	岡田　川瀬　小川
一塁	山下
二塁	本郷　三谷
三塁	水原　堀川
遊撃	牧野　村尾
外野	井川　楠見　堀　梶上

以上の外に島本、溫井・兩投手が出場せねばならぬかも知れません。

昨秋の早大の陣容より伊丹主將、水上二塁手及び水原右翼手が抜けた外に内川、高橋兩君を失つた事は、前三者が攻擊の主要位置である一番、三番、五番を打つてゐただけに非常な損失と云はねばなりません。しかし最近の早大軍はベンチに多數の有望選手を有してゐますから持駒において少しの不足もないと考へます。往年早慶戰が復活されました秋、塾を大敗させたチームが翌春主要選手竹内、安田、山崎及び根本の諸君を失つた當時に比べて本年の方がより大なる損失と云ふ事は出來ません。然るにその當時のチームは他校には敗れたが塾には二回連勝してゐます。即ち失つた所は新人の意氣と熱とによつて充分補はれたのであります。私の平常の持論から云

つてもチームと云ふものは何年間も同じ顔觸の選手がゐる事はどうも面白くなく、名前負けがする事が多く却つて毎年二三人づゝ選手に變更がある方がよい結果を生むものと聞く信じてゐます。新らしく陣容に加つた選手と卒業生を送つた殘部の選手とは期せずして、奮ひ立ち練習その他においても非常な熱心と努力を示すために良結果を生むのが通例で、餘り心配する必要はないと思つてゐます。數學的に9から3を減じて6が殘ると云ふ譯にゆかない所に無限の興味が存してゐるのでせう。

塾のチームにあつても加藤と町田を失つてゐますが私はそれを補ひ得ると樂觀してゐます。內野の樞要なるポジションである遊擊に加藤の名前が見えない事は非常に淋しさと不安とを與へるものと信じられてゐます。又町田の滋味たつぷりの攻守も惜まれる事でせうが、この穴を埋める川瀨、牧野、村尾の中誰かゞ加藤の代りに、堀、梶上乃至土井が町田の後繼者として立派にやつて行きます。駒は揃つてゐますからこれが運用を誤まらればいゝのです。

早大にあつては小川君が投手板に立つかどうかによつてチームの力に非常の差異があると同樣、塾にあつても宮武が投手板に立つか否かによつて可なりチームの實力が違ふものと見ればなりません。從つてどうしても第二陣を引受ける所の多勢、山田、松木の諸君對水原、塚越、碣石等の投手力に對すチームの攻擊力が如何に作用するかをよく考慮して見ればなりません。投手力が相手方の打力を何邊まで防ぎ得るか、これに前述しました「運」の神樣が色々の戯れをします。選手もファンもそれにつれて或は赤くなり或は青くなる事になります。そこで兩主戰投手と見られてゐる小川君對宮武の出來如何と云ふ事が勝敗の一大分岐點になります。

宮武は昨秋の後半眞に素晴らしい好投をしました。あの好調が續けば私は大いに樂觀してよいと考へてゐます。反對にあの調子が亂れて來れば苦戰を免がれません。小川君の技倆球勢等について私は以前から同君の健康がよりよくならなければよりいゝ投手にはなれないと云ふ持論を今日も變へないでゐます。昨秋以上の投球をせれば打ちこなし得ると云ふ結論に達します。ダークホース式に新入投手の中に素晴らしい偉物が出現すれば別ですが先づこの兩者の出來不出來は兩軍の勝敗に最大の斷定を下すものと見ねばなりません。

次に攻擊においては今井、矢島、森、伊達、佐藤の五君に對して楠見、井川、山下、宮武、水原等夫々いゝコントラストを作つてゐます。宮武の昨秋の好投に面してもこれを早大の巨砲が打ち得るか、小川の一段進步した投球に對しても塾の各打者が一歩も退かず打ち捲り得るか非常な興味を覺えます。そこで早慶戰に直面した秋最もいゝコンディションにチームを持つて行く事に腐心せねばならぬ事になります。守備において內野に伊丹、水上の兩君を失つた早大の方が加藤一人を失つた塾よりも損失は大きく見えますがこれは先づ五分と見ていゝでせう。外野から一方が水原を片方が町田を失つたのも五分と云へます。從つてベンチに殘つてゐる選手の質の如何が接戰となれば勝敗の鍵を摑む事になるかも知れません。只私としては大變大膽な言葉かも知れませんが接戰になれば塾が敗れるかも知れないが點數に開きが出來れば出來る程――スコーアの差の如何から推論すれば――塾が勝つものと思つてゐます。

終りにこの稿では早慶のみについて述べて

他の諸チームを無視してゐる事は私の本意ではなく、限られたる標題に制限されて已むを得ず他チームに言及しなかつた事を御斷りして置きます。與へられた紙面もモウ盡きるので最後に明大と法政の兩チームを非常に警戒せねばならぬ事を記して擱筆します。(三月卅日記)

極東大會の解剖

行田重治

冬の眞最中だといふ日本のこの頃、常夏の國マニラでは既に、來るべき極東大會に備へて第一線に突喊してゐたのだつた。それを想ふと三月の下旬か四月上旬ならではトラックやフキールドの練習も出來ぬといふ日本にとつて、なんと大きなハンデキヤツプではあるまいか。なんと云つても過去の歴史の敎へるやうに、比律賓は色々の點で日本の強敵である。

◇

北風の猛威に外套の襟をたてゝ靴先の冷たさに足元を凝つと視ながら電車の停留場に停んでゐた私は、一枚の新聞を踏んでゐた。なに氣なく眼に止まつたものゝそれは「比島の極東大會陸上豫選」と云ふ記事の見出し中段になつてよく觀ると『マニラ廿日發聯合』とある。

拾ひ上げて讀まうかと思つたが手が冷たくつてポケツトから引出す勇氣がない。

一たい幾日の新聞かと思つて欄外をみると昭和五年二月廿一日、東京日日新聞と書いてあつた。

◇

極東大會だといつて眼の色を變へて掛つたのは大正十二年の第六回目、大阪の築港に開かれた頃迄のこと。勿論この頃は極東大會を日本に迎へるのがやつと二度目ではあり、前後五回の大會中、日本はまだ一度しか優勝してゐなかつた時代だから、無理もないことではあつた。

それから大正十四年の第七回(マニラ)昭和二年の第八回目(上海)頃には、既に日本は極東大會の時代に非ず、捨てて世界の國際競技へ走れ等と、先覺者の聲を聽く時代となつて終つた。

詰り昔の極東大會は日本の先生であつたが此頃の極東大會は日本が先生であるといふ自惚も幾分は手傳つてゐたではあらう、けれどそれ以外に極東大會の度毎に起る紛擾に愛想を盡かしてゐたのでもあつた。

◇

先づ簡單に第一回目からの極東大會を解剖してみるに、第一回目が大正二年のマニラ、この時は野球に明大が、陸上に只二名の選手を遣り、野球に優勝しただけで勝敗は最初から眼中になく、云はゞお客樣氣分の遠征に過ぎなかつた。比律賓優勝、支那二位、日本三位。

ゝ第二回目は大正四年の上海、日本からは八

名の陸上選手と水泳に鵜飼、庭球に熊谷、柏尾と十一名の選手を送つたに過ぎず、比軍の百十數名、支那の二百餘名にはいつかな敵し難く、庭球に優勝しただけで支那優勝、比軍二位、日本三位、

×第三回目は大正六年の東京芝浦埋立地に於ける大會、日本はこの年から初めて極東大會へ正式加入して主催したのであるから、日本に於ける最初の國際競技會として、わが運動界には前代未曾有の騷動であつた。

それに前二回の大會に較べ、日・支・比の三國いづれも百餘名の選手を出して鬪つたのはこの時が最初で、極東大會の内容を表現したもの、日本は水・陸・庭・野球に勝つて初めて優勝、支那二位、比軍三位、

×第四回目は大正八年のマニラ、大會の期日問題で彼我に疎隔を來し、折角前回正式加入した許りの大日本體育協會は極東大會から脱會して終つたので、日本運動界の將來を氣遣ふた關西地方の有志が、日本青年運動俱樂部なる急造團體を作り、十六名の陸上選手を送つた外、テニスに三神、野村、岡、水泳に内田正練氏等を僅に遠征さしただけで比軍の優勝、支那二位、日本三位、

×第五回目は大正十年の上海、大日本體育協會は再度加入、日本は總勢百二名といふ初の大擧遠征、尠からず期待されたが全競技に敗退、零敗の珍記錄を留め、比軍四競技に勝つて優勝、支那二位となつた。

×第六回目は大正十二年大阪、日本に迎へること二回目、日本は陸上、庭球、水上、比軍は野球、籠球、排球、支那はア式蹴球と、日比兩國は三個づつの同數選手權獲得となつた爲め、三國協定の上、大會の主體をなす陸上競技の優勝國が極東の選手權を握ることとなり、畏くも前世の歷史を破つて御下賜に相なつた吾が天皇カップは、最初の獲得を日本に運命づけられたのであつた。

×第七回目は大正十四年マニラ、日本は當然勝てるべき陸上競技で紛擾に禍ひされ、後半を棄權退場し、當時大きなセンセエションを起したことを想ひ出すが、日本は水泳、庭球に勝つて二位、支那はア式蹴球に勝つただけで三位、

×第八回目は昭和二年の上海、日本は惡戰苦鬪、水泳、庭球では思はぬ惜敗となり、陸上競技と野球に勝つただけであつたが、この時から陸上競技中、リレー競技、五種、十種競技を混成競技たる別個の選手權種目にされてゐたため、三競技に選手權を得たことになり支那の庭球、排球、ア式蹴球の三選手權と同數になり、結局第二位の獲得數に關係し、日本は庭球、ア式蹴球、水泳と二位三個を持つに對し、支那は野球、籠球の二個であつた爲め極東選手權は日本の手に歸し、わが天皇杯は再び自國に納めることが出來たのであつた。

◇

斯く大會の前後八回をみるに比律賓の優勝すること四度、日本は三回、支那一回、今日、日本の實力既に比支の上に在りとは云へ、大會の歷史は尙斯る數字を示してゐるのである。

喩へ揶揄にもせよ、極東大會紛擾史などと名前が付けられる程、極東大會は何故ごたつくのであらうか、過去の言葉を綜合してみれば、大體に於て主催國役員の横暴不公平に主因をなしてゐるのであるが、上海に於ける前大會の如き、寄附金の<u>たか</u>によつて大會の役員に選ばれたといふが如き、完全なるルールも知らぬ素人役員のことでは紛糾を生ずるのも無理ならぬことではある。これは單なる一例に過ぎぬが、來るべき第九回極東選手權競

技大會は、五月廿四日を第一日に向ふ一週間ゆかりも深き明治大帝神前に於て、傳說も古きオリムピヤードに倣ひ展開されんとしてゐる。

過去に流るる忌はしき大會紛糾の主因、それを今や知る日本、極東の盟主として自負する日本、さらば吾等の日本よ、正しき力と、正しき審判の下に、正しき勝利の範を示すは將に今であることを忘れてはならぬ。

極東大會の選手權競技種目

一、陸上競技、　一、混成競技、
一、水上競技、　一、野球競技、
一、庭球競技、　一、籠球競技、
一、ア式蹴球、　一、排球競技。

競技種別の勝敗表

	比律賓	日本	支那
陸上競技、	四勝	三勝	一勝
混成競技、	○	一勝	○
水上競技、	四勝	三勝	二勝
野球競技、	五勝	三勝	○
庭球競技、	二勝	四勝	一勝
籠球競技、	七勝	○	一勝
ア式蹴球、	一勝	○	七勝
排球競技、	四勝	○	四勝

（庭球は第四回大會の時、單、複を別個の選手權として、比島軍に、日本軍が試合に勝つてゐる）

陸上競技の一觀察

縄田尚門

來月の廿日過ぎから約一週間に渡つて我が帝都明治神宮外苑に於て第九回極東オリンピック大會が開かれる事になつてゐる、今から丁度六年前大正十二年五月第六回の大會が大阪築港グランドに行はれた時は私が未だ田舍から上京したばかりでどうかして日本代表選手になり度いものだと非常に緊張して猛練習をやつた事を今尚ほハツキリ覺えてゐる、あの時は開會式當日から大雨で大會は雨に始つて雨に終ると云つた調子で私共は雨中を衝いて新設トラックを五哩も走つたので腹は一面泥まみれになり、熱帶に育つた比島の選手は餘りに寒いため足にケイレンを起して倒れた選手も見受けた位であつた。

其後マニラ、上海に渡つて久し振りに日本に迎へて一戰を試みる次第である。

扨てこの大會の戰跡を調べて見るに去る一九一三年第一回極東大會がマニラに開かれてから今日まで前後八回戰つてゐるそしてフィリッピン四、日本三、支那一の割合で優勝してゐるから日本は支那には勝つてゐるが比島には一回敗け越してゐる勘定になる。

これを更に各種目に渡つて見るに先づトラックの短距離から述べやう、百、二百、四百米はどうした事か日本人は比島人に勝てない特に百、二百米は合計十六回の決勝戰に於て唯の一度もテープが切れないでいつも向ふの連中にやられてゐる、強いて云へば第三回の芝浦でやつた時山内晋作君が四百四十碼（約四百米）に勝ち、先年大阪で納戸德重君が同四百米に辛勝したのみである。私はあのレースは終始見てゐたが實力で勝つたと云ふよりか寧ろ巧妙なる策戰に成功したのだと思ふ、確か慶應の瀧野君と門鐵の松重君が犠牲になつて敵の闘將ダナオの前に無理に進出してグツト抑へて納戸君をして十四、五米も先に出し

た、それでもダナオは最後にグン〳〵逐に詰めて、ゴール前では約ど一ボデイーの差となつた。

反對に八百、千五百、一萬米等の中長距離競走になれば向ふの選手は馬鹿に弱くてまるきり相撲にならない、僅に第一回マニラの大會に比島のサンマリナスと云ふ選手が八百八十碼（約八百米）に勝ち第二回目の上海で支那の郭選手が八百八十碼と一哩に二つ優勝した事があるのみ、其他は千五百、一萬等悉く日本選手の獨り舞臺で問題にならない、第七回大會に私共がマニラに遠征した時でも千五百米決勝のあつた翌日向ふの新聞の批評にこの種目は日本人の遊び事だと書いてゐた、先方でもあきらめてゐたらしい。

次に高低の兩ハードルであるが前者が百十米に後者は二百米、これも日本選手に取つては辛手な短距離レースだから毎回黑星を戴いてゐたが、この前の上海であつたか我が福井選手がローハードルに始めて勝つて全敗はまぬかれたがやはり短距離は弱い。

是の如く前後八回に渡る極東大會の戰跡を顧みれば短距離は比島、中長距離所謂持久戰は日本、支那は全々競走圏外と云つた具合にハツキリと區別されてゐる、一體この樣な珍しい現象は何故に起つてくるのであらうか？大會成績の示すが如く日本人は中長距離には耐え得る素質を持つてゐるが短距離の如く瞬間的に走る力は彼等比島人に劣つてゐるのであらうか？

元より私は彼等フイリッピン人の體質なり練習法をよく研究したのではないが右の點に就いて次の樣な見界を持つてゐる。

昨秋十月神宮外苑に於て擧行された彼の日獨對抗戰の短距離レースを見られた人は誰しも感じられた事であらうが、スタートしてから五六十米までは寧ろ日本選手の方が獨逸よりが優勢である、殊に二百米の吉岡君の如きは百米を過ぎても尙はエルドラッヘルをリードしてゐた、四百米の中島君もラストのコーナーを出るまで（約三百米）は優勢であつた、それがゴールに近づくに從つてどれこれも振り離されてしまふ、この傾向は獨り日獨戰ばかりではない極東大會でも常に見られる圖である。因て日本人の短距離としては外人に比して始めは速いが終りが駄目だと云ふ事になるこれは常に私ばかりではなく少し競技を見られた人には誰でも感じられる事だと思ふ。

されぱこの缺陷は何故に起つてくるかと申せば、日頃のトレーニングの仕方にあると思ふ、日本の短距離選手の練習法と云へば殆ど全部が（中にはそうでない人があるかも知れないが）スタートの二三十米の力走、競り合ひにのみ全力を注ぎ勝敗の運命を決するラストの力走と云ふ事が等閑視されてゐる、これが一般日本選手傳統の一大缺陷だと私は信じてゐる。だから競走中スタートして五六十米は馬鹿に調子がよいけれど七八十米から先は殆う力が拔けて敗れてくる、要するに一番大切はこれからだと云ふ處になつて參つてくるから幾度戰つても連敗と云ふ辛い思をしなければならぬ。

次に中長距離に至つて馬鹿に弱いのは何故かと云ふに比島の中長距離は尙は初步の域を脫していない、從つてこの競技の性質、練習法走法などがよく理解されてゐないと思ふ、その一例には私共が遠征した時向ふの千五百米で一米強い選手はたしか四分廿五秒位だつた、それがイザ試合となつてスタートを切れば前年の四百米を五十九秒で走り、このスタートは丁度日本の八百米で一等強い人が走つてゐる位な調子で千五百米なれば世界記錄を

破る人でも一寸速すぎる位である、更に一萬米の練習を見るに只慢然と日々〱して走つてゐるのみで日本で云へば中學生程度の選手が冗談半分にやつてゐると云つた感がある、それれては到底巧く走れやう道理がない、それに今一つの理由は御承知の如く向ふは熱帶地方で非常に暑いから比較的短時間に輕い練習で濟む短距離とかジヤンプなどはさほどでもないが、長い方にたつて來ると走る距離でも何十倍となる——時間も彼是二時間は炎天に練習しなければならぬから非常に體が疲勞してくる、この點は吾々が盛夏長距離のトレーニングに苦しいのと同じ事だ大體こんな理由で向ふの選手は特別に中長距離が振はないのではないかと思ふ、從來の彼等であつたら日本の中學選手でも決して敗けるやうな事はない。

扨て來る可き五月の第九回大會の各國陣容を見るに支那やフイリツピンは既に豫選もしば〱行はれて略ぼ彼等の實力は伺はれるが獨り肝ジンなる日本のみは長い冬眠期から未だ明けたばかりで何れの選手もトレーニングが不十分で沈默を守つてゐるので力は全々不明である、而し大會までには昨秋位の記錄は出し得るものと想像される。

先づ百、二百米で最も有望な選手は例の島根師範から今回高師に入學した吉岡君、それに南部、阿武、西君等だと思はれる。

比島は強豪ゴンザガ、ヴイラヌエヴア及び老勇ネポムセーが未だに活躍してゐる。ゴンザガは去る二月廿日廿一日の全島大會に百米十秒九、二百米廿二秒フラットで共に優勝してゐる、あのマニラの不完全なトラツクで百米十秒九、半圓を畫く二百米の廿二秒は大した記錄である、日本の競技今の樣に直走路で而も風土からスタートするのとは一寸趣が異ふ、若しも彼が來る可き一戰に右の記錄を出したならば恐らく優勝するであらう、けれど彼等には遠征の不利と氣候急變と云ふハンデイキヤツプがあるからこのまゝの記錄は出せまい、だから今年こそは我が短距離界に取つて積年の慘敗を雪辱するに絶好のチヤンスだ、一つ大いにやつてもらひ度いものである。

四百米も六年前納戶君がテープを切つて以來今尙ほ誰も勝てない、今回日本選手で賴りになるのは獨り早大の中島君のみで誠に心細い次第である、同君の實力は五十一秒見當、比島のナンバーワン・アルリンプラは二月の大會に五十一秒八だから、中島君が練習さえ甘くやつてゐれば優勝率は百、二百よりかあると思ふ、若しも中島君に故障でも生じたら他に選手がゐないからそれこそ大變である、

八百米以上は從來日本軍の獨占競技であつたが今回比島にヤタールと云ふ選手が現はれて二分一秒三の驚く可き記錄を示して日本の中距離界に一大恐慌を與へてゐる、これは今大會の新しい現象とも云ふ可きで向ふとしては每回連敗を重ねてゐるので特にこの方面に力を入れたからだと思はれる、昨秋も彼のペルツア博士を遙々招いてコーチを受けてゐた位だから、兎に角日比何れの選手にせよ八百米を二分一秒三で走れば必ず大會には勝てると思ふ、彼れヤタールを好敵手とする日本チームには慶大出の岡田、早大矢柴、農大久富君等の巴戰は蓋し面白いゲームであらう、次の千三百米もヤタールが四分十六秒九で非常な進出振りを示してゐるが優勝は一寸六ケ敷しい甘く行けば四番位には喰ひ込むかも知れない一萬米は卅六分卅五秒四で向ふの新記錄だなんてゐつてゐるから全く笑はせるハードルは向ふの得意な種目でカシアと云ふ選手がローに廿五秒四ハイは十五秒七だから日本で相手

になれる人は三木君以外に一寸見當らない、これも下手をすると敗け越すゲームである、最後にリレーだが四百米の方は特に強い人はないけれど比較的よく揃つてゐるから日本が有利だと思はれる、千六百米の方は中島君以外に一寸見當らないから勝ち味は少い、かく見てくれば日本が安心して戰へるゲームは千五百と一萬米のみである、而しトラック全體としては日本に十分勝ち味があると思ふ、其他支那に劉と云ふ選手がゐて昨秋奉天に於ける日獨支三國エキジビションゲームに我が代表選手大澤、阿武兩君を破つた。張學良氏は大いに聲援してゐるそうだが今年はまだ餘りいゝ記錄は出してゐないから大勢には影響はない、次にフイルド競技になつてくると日本側は斷然優勢であるが、唯心配になるのは比島が有する唯一の世界的選手トリピオがゐる、彼は最近非常に元氣で二月の大會にもハイジャンプに一米九六、更に其後の練習會にはオフイシアルではないが二米餘も飛んで米國オスボンの世界記錄に肉迫してゐる有樣である我が木村小野兩君も彼の日獨戰には首尾よく勝つたが今回は非常に苦戰だと思はれる、この競技も不思議な事には第一回以來一度も日本は勝つてゐない、折角木村、小野君等の名選手を出してもトリピオの如き人が出てはどうにも仕方がない、其他、圓盤、砲丸、槍、走り巾飛、棒高飛、三段飛等悉く日本側が強くて特に三段飛に至つては未だ土つかず、我國が世界に誇る可き唯一の種目であるこのジャンプ即ち飛ぶ競技になると日本選手は極東に限らず世界各國の選手に比較して非常に強いこれは何が爲めであらうか？この點に關して例の織田君とも話した事もあるが日本人は日常生活に椅子を用ひず座敷に坐つたり膝を組んだりするので腰膝等の關節が非常に柔軟で伸縮自在である、この點になると外人は頗る堅い、ジャンプは丁度ゼンマイの樣なものでよく縮めば縮む程反撥力が強い、だから日本人はジャンプに強いのだと云つてゐたが成程合理的な說明だと思はれる。

是の如く今回の大會はトラックの方は相當白熱戰が演ぜらるゝと思ふが、フイルド競技は全く相撲にならないと思ふ、名稱は極東大會でも實質は日比の對抗戰に終るであらう。

「文壇アンデパンダン」の提供

我社が中央公論五百號記念を期して出版界に進出して以來、異常の喝采歡呼の裡に目醒ましい成功を獲得した。偏へに江湖の支持と聲援との賜物である。われらは此の恩顧と同情とに酬いるところなければならない。それは一に讀書階級の要求と期待とに背かざる雜誌書籍の刊行に邁進すべきは言ふまでもない。またわれらはその努力を寸毫と雖も怠つてはゐないつもりである。が、また一つには無名の作家、執筆者を發掘して之を世に推奬することも、われらの常に心懸くべき任務である。

さればこそ、五百號記念號發刊に際して普く草稿を全國に募集したのであつたが、心細いことには應募四千に餘らんとして、その一篇だに誌上に發表し得るものを見出し得なかつたことである。之については一部の非難をも受けたが、非難どころか、いかに惡罵と讒謗を蒙つても致方はない。われらはその發見に不忠實であつたのではない。寧ろその發掘に熱心なるわれらの同僚をして先づ失望に泣かしめたのを奈何せんやである。

併しながら、われらはそれによつて絕望してよいものか。惟ふにそれは何等かの手段において間然するところがあつたに因るものだらう。第一『中央公論』といふ雜誌に募集する原稿であつて見れば、誰にしても現在の『中央公論』といふものを目安におかない譯にはゆかない。そこに無意識の裡に何等かの妥協や苟合が生れて來る。

……今度は一つ思ひ切つて、原稿を白紙の儘で募集して白紙の儘で發表しようではないか。——といふのがこの『文壇アンデパンダン』の提供である。

「アンデパンダン」といふのは夙に佛蘭西畫壇に行はれたことで、最近我國においても二科會によつて創施された自由展覽會の意である。即ち展覽會場の一部を各自借受けてそこに各々自信ある作品を出品して江湖の批判に俟つ譯である。審査鑑査の情實に囚はれることなくして、一直線に一般大衆に呼びかけようとするのである。そこに、今までさういふ場所に顏出しの出來なかつた無名の、又は不遇の作家にして一躍畫壇に認めらるゝ機會が與へられる。

『文壇アンデパンダン』はそれと軌を一にする。即ち無名作家にして自己の作品を世に問はんとしてその便宜なく、若しくは知名の作家にしてもその資力なく、空しく愛兒を篋底に祕して身の不遇を喞つ多くの少壯作家のために、假に中央公論社が代つて出版するのである。中央公論社の信用によつてそれらの作家の自費出版を助けるのである。そして出來るだ

け版價に提供するのである。賣れるか、賣れないか、歡迎されるかされないかは一に作品の價値によつて定まる。賣れた時はその利益を配當し、賣れない時は中央公論社が犧牲となつて其損失を甘受する。從つてそこに中央公論社としての一通りの審査を必要とするのは言ふまでもない。また如何に良い試みだといつても無限の要求に應じて無限の損失を招いてゐる譯にもゆかないから、その邊は諒解下さることと思ふ。

今や、出版資本主義横行の時代に入つて、可惜才能を抱いて朽ち果てる無名作家や、出版界の積弊を恨んで悶々たる不遇知名の人士のために、この我社が率先して提供せんとする『文壇アンデパンダン』こそ大旱に雲霓を望んだ以上の福音であると信ずる。

恵まれざる、寧ろ虐げられたる作家群出せよ。新人輩出せよ。

左の規約を承知の上、どし／＼御投稿ありたいと思ふ。

『文壇アンデパンダン』規約

一、原稿は創作（小説、戲曲）に限る。

一、原稿は大體枚數を一篇一百枚以上と定めておく。但し一作を一冊として出版することもあれば、また二三篇合せて一冊とすることもある。故に堂々たる大作であれば一百枚以上八百枚位まであつてもよいが、それほどでもないならば三百枚位までのものが二三篇合して一冊として出版し得る可能性が多い。

一、作者への配當は印税一割を以てする。故に一冊三人の合本ならば、枚數に拘らず頭割にその印税を三等分する。五人ならば五等分する。

一、原稿は六月十五日で〆切る。そして九月上旬に發行する豫定。その場合組方製本装幀等に關しては本社に一任せられたい。

一、原稿は中央公論社宛の事。但し必ず「文壇アンデパンダン」原稿と傍書あるべき事。

一、原稿は必ず書留郵便にて送らるゝ事、而して、原稿は必ず返送する故、同料の書留郵便切手を封入せらるゝ事。

一、住所姓名は原稿の終りに必ず明記せらるゝ事。

以上

右の規定に背反する者は本社は責に任じない。

博士製造裏面物語

T・N・S

近ごろではすつかり廢れてしまつたが、その昔流行を極めたサノサ節の文句に

「末は博士か大臣か」

といふのがある。まだカクテルやスタウトのない時分の書生が安酒をあほつては盛んにそれを怒鳴り散らしたものである。いや、立派な宴會の席で藝者やいゝ年をした親爺も唄へば、道行く女子供までが、口ずさんだものである。

博士と大臣——それは當時の書生がみんな一樣に抱いた理想の姿である、と同時に一般社會からも尊敬の的であつたに相違ない。

唄の文句では、大臣より博士が上に行つてる。花井卓藏君は、みすぼらしい身なりをして中央大學の先身たる中央法學院か何かへ通學してゐた頃に『おれは三十にして博士となり四十にして大臣となつて見せる』と言つて薄ボンヤリの同窓たちを驚かせたといふ話があるが、それによると、まづ博士になつて、それから大臣といふ順序だから、博士より大臣が偉いわけになる。しかしながら現に鐵道大臣として時めいてゐる法學博士江木翼君に言はせると『大臣になつた時よりも博士になつた時の方がどれほど嬉しかつたか知れやせん、馬鹿でも運がよければ大臣には成れるんだから、人間の能力をあらはす博士の方がずつと名譽だ』さうである。して見ると大臣より博士が偉い、といふ勘定で、どつちが尻やら頭やら判らなくなるが、唄の文句は語呂の都合で博士が先に出るものとして置かう。とにかく博士と大臣は相竝んで世間から持て囃されたものである。

ところが近來はどうだらう。昔に比べると大臣の値打も下がつて來たものゝ、博士の値打に至つてはまるでガタ落ちではないか。

讀者よ試みにソッと口の中で『末は博士か大臣か』と唄つて御覧なさい、提燈と釣鐘ほどの違ひはないにしても、何だか草履と足駄を片チンバにはいてるやうな氣持でせう。

かう言へば、博士先生のお氣に召さぬことであらう。『博士と大臣では哲學と、から傘みたいなもので比較の對象にならない』との抗議が出るかも知れぬ。しかし珍重される時は默つて竝んでゐたんだから、落ち目の際にも我慢してほしい。

昔のやうに大臣や博士を世間が尊重しなくなつた原因は、大雜末にいへば時勢の進歩だらう。一般の知識が進んで來ると、すべてのものに對する評價が正當な處に近づいてゆく。夜が明けかゝると影が次第に小さくなつて物體が小さく見え出すのと同じ理屈で、大臣や博士の神秘性が薄れ出すのである。

知識が進歩した、といつても併し世間は、

一々はかりにかけて見るやうな調子に細かく大臣博士の價値測定ばかりやつてるわけではない。世の中はもつと忙しい。手つ取り早く目のこ算用で行く。「小泉又さんが大臣になつて、山王台で無暗にドラ盤を出してゐた又さんが、請負師の又さんが、つひこの間四十圓ばかりの家賃を拂へないで店立てを食つたあの又さんが……ハハーン大臣つてそんなものかい」といふ調子に。

博士も同様である。近所の藪醫者の息子が東京へ修業に出かける。何年か立つと「學士さん」になる、やがて醫學博士になつて歸鄕する。町の衆、村の衆が晒し木綿か寒冷紗の旗を立てゝ停車場まで賑々しく迎ひに出る。汽車がついて金縁眼鏡、金くさりの若先生が親爺さんの竹庵先生とは似もつかぬハイカラ姿をプラットホームに現はすと、出迎の衆は「何たら博士先生萬歲々々々々」。それから歸鄕開業の披露も濟んでいよ〳〵博士先生が脈を握り藥を盛る。日數が立つにつれて町の衆や村の衆が「若先生の藥もお父さんの藥と格別違やせんし、風邪をひいても博士に診て貰へば早く直るちゆうわけでもなし、治らん病氣はやつぱり治らんし……」と頭をかしげ出すのだ。箔が剝げるといへば語弊があらうが、博士の眞價がバレて來る。總じて大衆の評價法は非科學的だけれども要領を得てる。

○

十五年ばかり前に、京都帝大で細菌の研究をして醫學博士を貰つた某先生が、その肩書を貰ふや否や京都市の眞中へ「内科專門、醫學博士何がし」といふ大きな看板をあげたので、大學の方で大問題になり、教授の中には「怪しからん奴だ、世を欺くも甚しい、あの憎たらしい看板をおろさせるか、然らずんば學位を取り上げろ」とカン〳〵に怒つた正直者もあつたが、多數の教授先生たちは考へて見れば「醫學の研究てものは一本の針をいちくつてゐるやうなもので誠に幅の狹いものだ。足首の筋肉がどう動くの、爪の成長する速度がどうのなんてことばかり研究してるわけだが、足首の研究をした者は足首の病人しか診てはいけない、爪を專攻した者は爪をはがした者しか診られん、てなことになるとしたら醫者なるものは飯の食ひ上げだ。こいつはウッカリしたことを言はれない。下手を言へば自繩自縛。細菌を調べた奴が外科手術をやらかしては大變だが、細菌と内科なら滿更緣がないわけでもないからこの問題は知らぬ顏の半兵衞として置くのが上分別だわい」と目をつぐんで仕舞つたので、細菌の某先生は看板も學位も失はずに濟んだのみか、博士の町醫者といふので大繁昌、細菌の數ほど金貨銀貨が舞ひ込んで今では京都で第一流の大先生になり濟まして御座る。

今では、細菌の博士が内科の看板を出す位は當り前のことになつてゐる。そこいらの醫學博士でその點を突つ込まれて顏を赤くせずにゐられる先生が何人あらうか。

これは東京帝大醫科にあつた實話だが、某醫學士は砂糖と尿の關係を研究題目に選んで、毎日々々一定量の砂糖を嘗めては小便を試驗管に取つて研究を初めた。それも自分だけでは足らないので、誰か正直に、そして正確に一定量の砂糖を數年間なめ續けてくれる人は無いものかと物色した結果、白羽の矢を立てられたのが、その學士と同じ教室に勤めてゐた看護婦さん。

砂糖を嘗めるといへば、鳥渡うまさうに聞こえるが、普通の食餌は一切糖分ぬき、間食のお菓子などは以つての外、そして毎日同じやうな白砂糖を、それもかなりな分量を、日々何回か定まつた時間に嘗めるのだから鳥渡やそつとの辛抱では續くことでない。砂糖を嘗めるのを忘れておいて、表面は飲んだやうな顔をして「オシッコ」だけ差出したんでは研究に狂ひを生ずる。しかしその看護婦さんは學士の目がねにたがはず、實に正確に眞面目に依囑を果たして行つた。つまり看護婦の方からいへば獻身、學士の方からいへば感謝それがいつしか戀愛に進むのは人情の常道である。學士は看護婦に結婚を誓ふに至つた。看護婦さんが「その約束を小便にしちやいやよ」と言つたかどうか聞き洩らしたが、とにかく學士は小便とオシッコの試驗管をいぢくること數年にして、所期の論文をデッチ上げ首尾よく博士となつたのである。すでに論文が合作である以上、その看護婦さんがめでたく博士夫人となつたのも不思議ではない。

砂糖が取り持つた縁だけに、あまい話であるがこんな博士が糖尿病の治療にどれだけの腕前を持つてるか頗る怪しいものである。ましてや、かゝる博士に脈を取られる結核患者や心臟病者は災難である。それは脈を取らせる患者の方が惡いには違ひないが、博士の値打も下がる結果とならずにはゐない。

○

醫學博士に對する世間の價値判斷は、病氣が治るか治らんか、早く治るか遲く治るか、といふ處からも來るが、一方には博士の人數からも割出して來る。

偉さうな者は、その數の少いほど一層偉さうに見えるのが社會通念だ。「末は博士か大臣か」と謳はれた頃には博士も少なかつたから値打以上に偉く思はれたといふ筋合もキットある。

その後、大臣の方は椅子の數に制限があるので内閣が幾度も變つてゐるとはいふものゝ現、前、元の大臣をみんな數へ上げても知れたものだが、博士の方は殖えた〳〵。大臣と博士の釣り合ひが取れなくなつた原因の大半はこゝにある。

博士が殖えたので何となく有難味が薄れたと、たゞそれだけで濟めばいゝけれども、世間では博士を一定の値段で買つてゐる。一例を言へば醫學士には五圓の診察料を拂ふ處を博士なればこそ十圓拂ふのである。だから、猫も杓子も博士になりたがるのではあるが、買ひ手の方にしてみると、定價十圓の品物がだん〳〵粗製品になつて來ては默まつてゐられない。品物をもつとよくしろ、といふことになる。博士濫造に對する非難がそれだ。

金錢關係のみならず、以前なら鼻風邪を引いた時には近所の藪の醫者に、少しこじれて來たら醫學士に、やゝ重いとなれば博士に診て貰ふといふ風に、肩書が便利な標準になつてゐたものを、近來ではヤクザな博士が殖えたばかりにさういふ見當が立たなくなつて來た。どうかすると行く〳〵は輕い病氣なら博士に診て貰へ、重くなつたら肩書のない醫者へ行け、となるかも知れん。さうと決まつて仕舞へば便利だが、今のやうにゴチャ〳〵ではやり切れない。どうしても博士を作るならもう一つその上に大博士を作れ、となる。これは何事にも簡便を貴ぶ大衆の切實な叫びである。

○

博士製造元の大學側に言はせると、「何も昔の博士と今の博士とは學力に差はありやしない。うそと思ふ人には學位論文をお目にかけてもよろしい。相當の研究を積んでオリヂナリチーを具へた論文が出て來れば學位を拒む理由は何處にもない。むしろ博士の簇出することはわが文運の隆昌を物語る證據として慶賀すべきことだ」と涼しい顔をしてる。全くその通り文運隆昌で慶賀すべきことではあるが、博士相場の低落は製造元御自身が困る問題ではないか。

ことに博士大量生產の大工場である官公立の醫科大學あたりでは「醫學博士濫造だと騒ぐけれども、法科や文科の學生は學校を卒業して仕舞へばそれで大ていは學問を放棄するではないか。醫學生は大學を出てから更に研究をつづけるんだからわけが違ふ。博士の人數が多からうと少なからうと、夫で世間が何と考へやうと大學の知る所ぢやない、學の立場から、たゞそれ學の純正な立場から、教授會で適當と認めた論文に學位を與へるここそ學問への忠誠なのだ」と見榮を切つてゐる始末だ。

がしかし、あまり大きな口をきいて貰ひますまい。今こゝに一々博士論文のアラ探しを試みる餘裕（ウッフヽ）はないから止めておくが、教授先生たち自ら教授會の內幕を顧みなさい、と申して置く。同僚の教授からサンザン難點を指摘された論文でも、弟子可愛さに――それはやがてわが身の可愛さから躍起運動をして漸く教授會の過半數で通過させて貰ふやうな論文の何ぞそれ多いことや。

その半面には、論文を出す者が指導教授に對してこびへつらひ、全く唾棄すべきものがあるのは自然の成り行きである。東京の某私立醫科大學で學位を取つた男が筆者に語つた『學位を取る秘訣の第一、先生と一緒に酒をのみに行くこと、勘定は無論こつち持ち、第二、自分が目をつけた藝者をまづ先生に取り持つて上げること、第三、先生が謹嚴屋だつたら物產その他を盛んに持ち込むこと。第四、先生の奥さんやお孃さんのお氣に入ることだよ、この秘訣を知らん手合は同じ論文を書いてもドクトルになるのは三年位おくれるだらうね』だつて。彼の話によれば、論文の手入れをするよりも、教授のお髭の塵を拂ふ方が早道ださうな。

少し具體的な例をあげてもいゝ。例のそれ近年の醫學界を騒がせた京大の石川日出鶴丸君と慶大の加藤元一君の減衰不減衰傳導學說の大喧嘩についてだ。昭和二年大阪に開かれた醫學大會で、兩派が大體妥協する意味で兩方の御大は出ないで石川派から三人、加藤派から三人、と出演することになつた。その直前に、石川派を代表する三人が京大から揃つて學位を貰つた、と見ると慶大でも加藤幕下の出演者三人を開會間際に醫學博士にした。石川說を支持する三人が醫學博士で、加藤派を支持する三人が醫學士では宣傳效果の上に大分差を生ずるからなア。それらの連中に學位を貰ふ資格がなかつたとは申さないが、大學側の自由自在な生產ぶりには醫者仲間でさへ呆れてゐた。

○

古い言ひ草だけれども、雨後の筍よりももつと非道い勢で醫學博士が出來る。大正八年末に五百二人だつたのが昭和四年末までの十年

間に二千三百人殖えて三千八百人になつた。昭和四年の一年間に約四百九十八人の醫博が出來て、一ヶ月に七十何人、日に平均二人半づつの割合になつたこともある。京都帝大の如きは何でもその年度の醫學部卒業者數よりも醫學博士を出した數の方が多かつた！　文運だか醫運だかの隆昌祝すべしと何度でも申上げたいが、それで一體、日本の醫學はどれだけ進歩したのかなんて聞くと「素人にわかるものか」と一喝されさうだからやめるが、さきにも言つたやうに醫博を射んとする連中はまづ先生を射んとして莫大な金を使ふ。中には論文の一番大事な點を教授に書き添へて貰ふのもある。佛(？)を作つて魂を入れて貰ふ謝禮金の高いことは言ふまでもない。指導教授に見て貰へさうにないのは、別につてを求めて他所の大學の先生あたりへ持ち込んで校閲を乞ふ、謝禮金の件同斷。さういふことをしない連中でも、醫科の論文は多くドイツ語で書くのだがそのドイツ語が極めて怪しいのが多いので、ドイツ人に文章上の校正を求めるのは普通になつてゐる。校正料は論文の長短などによつて最低百圓くらゐから五六百圓くらゐまで。

それからいよいよ論文を大學へ提出する時に審査料金二百圓也を添へて出す（これは手數料で選擧の時の保證金と違ふから論文が當選しても落選しても返してくれない！）

論文を出して仕舞つてからが又大變、審査に當る教授へのお追從役、多寡は隨意だが、多々益々辨ずで、これを使はぬ者は審査が手間取るために學資が何年分か嵩んで差引き損をすることがある。

いよいよ論文通過の内報に接すると關係諸教授への謝禮は言ふにや及ぶ、同僚への振舞ひ當人の浮かれ費用なんかも計算に入れねばなるまい。最後に文部省の學位授與認可が發表になると學位令に從つてそれから半年以内に、その論文を必ず公の刊行物又は單行本として公表せにやならぬ。その論文が法文科あたりの一般向きのものなら刊行を引受ける書店もあるが、大ていドイツ文のしかも駄論文を易々と載せてくれるやうな太つ腹の雜誌はさうタントは無い。仕方なしに掲載料を新博士の方から差出して恥かしながら論文を日の目に當てるといふ風なのが多い。中には親の身代があるにまかせて、豪華な單行本にして出す者もある。御粗末な内容に、見事な裝釘が泣き出す程度の書物だから賣れつこは無いが、當人は得意で何千册か刷らせて知り合ひの先へ隈なく「進呈」、そして曰く「開業廣告費だと思へば安いもんだ」、全くね。

以上あれやこれやで、醫學士が大學を出てから滿五年で學位に有り付くとして、その費用は最低八千圓くらゐ、普通は一萬圓から一萬二千圓、多いのになると二萬圓、二萬五千圓も使ふ。東大醫學部は博士にして呉れるのがとても遲いので、貧乏な學生は初めから東大へ寄りつかない。

その外、學位を取る前に洋行すれば、學位の價格はもつと高いものになる勘定である。金、金、金でいつそのことアメリカ式に博士號を賣り出す方が輕便でいゝ。かうして少からぬ資本をかけた「博士」に對して筆者のやうな不所存者が憎まれ口を叩いたりするものだから博士の世間的價値は値が下がるばかり。

つまり「博士」は價格が上がるほど價値が下がつて行く點で、經濟原則とアベコベである。

あまり醫博の棚下ろしをやると、筆者が病

氣になつて醫博の路へ行つた時に、一服盛られると困るからいゝ加減にして措く。

○

濫造の反對に出し惜しみも度を越えると困りものである。

學位をケチ〳〵するのでは文科が一番ひどい。既に東北大教授の石原謙君にしたつて十二三年も前に大學院で書いた論文を十年も寢かせられて漸く二三年前に博士になつた。

常盤大定君なども十數年間、置いてけぼりを食つた方で、八九年前に博士になつた時、學生から「先生おめでたう御座います」といはれたら「名譽といふか、不名譽といふか、この年になつて新博士でもないよ」と悲喜交々の顏（もつとも常盤君の顏はいつでも悲喜こもごも）。

最も非道いのは一昨年あたり、大分問題になつた山田孝雄君の件である。明治三十七年に「日本文法論」を書いて東大文科に提出したのに、文科の物置きでその論文が埃と同居してゐる中に、山田君は刻苦精勵、昭和二年に東北帝大教授になつた。すると大學教授の肩書に必要な「博士」の必要（？）を認めた文部當局が山田君に論文を出して貰へと勸めると「もう二十何年前に出してある」といふ返答、當局が驚いて東大文學部へ通牒して調べさせると果して有つた。國語學の親方の上田萬年君が讀んでみると大した名論文、そこで早速、極上々の折紙付でその論文が文部省へ廻つたので、文部省は舊學位の最後の適用として文部大臣の名によつて山田君に眞に榮ある「文學博士」が授けられた。

論文を出してから學位を貰ふまで二十六年！一字一讀づゝ審査したつてもう少し早く行きさうなものではないか。山田君は富山中學の二年まで行つた切り何の學歷もない、そこで權式張つた赤門の先生が山田君の論文に鼻も引つかけずに捨てゝおいたのである（破いて捨てなかつたのが見つけもの）。若し、山田君に學歷とか、他に有力な背景でもあつたなら山田君は論文を出した明治三十七年に三十歳で文學博士になつてゐた筈だ。文科の先生たちは博士の榮譽を獨占せんがために他人が當然得べき幸福、權利を蹂躪するものだと罵られても辯解の辭はあるまい。或はかういふ間抜けを演ずることによつて自分たちがいかにも世俗に超越した人間であるかの如く見せかけやうといふ意識的又は無意識的の心理の結果かも知れんが、あまり超越されては困る（かなりどなたも政婆氣の多い辯に）。

山田君が學位授與を祝ふ門下生の前で『學位何ものでありませうか……』と言つた切り熱涙滂沱として少時は言葉が出なかつたと聞く。一語よく東大文科の怠慢を罵つてゐる。

○

山田君よりもつと氣の毒な人に保科孝一君がある。

保科君は東京高師――今度の文理科大學の教授で、東大文學部助教授を兼ねてゐる。やや人のいゝ先生だけに、一言居士の嫌ひがある爲めにか、大御所上田萬年君に受けの惡いこと夥しい。國語學上の實力では保科君を充分に認めてゐる他の教授連中も大御所の鼻息を窺つて「保科の論文を……」をと口を切る者がない。保科君は萬年文學士に甘んずる外はない。いつそのこと京都大學へでも論文を

出せばよさゝうなものだが保科君にして見れば同窓か然らずんば後輩に當る京大の教授に審査を頼ふと言ふわけに行かぬと見える。時々新聞辭令で保科博士になつてゐることに甘酸つぱい滿足を覺えるだけである。

其外にも山田君や保科君と同じ運命に泣く者がどれだけある事か。何でも今、某大學文學部へ「新聞論」を出してる一職工があるさうだが、大學側では職工に博士をやれるものか、と頭から見もせずに抛り投げてあるとやら。

○

學位の出し澁りは文學部だけではない。東大理學部にもこんな實例がある。

問題の人は數年前に亡くなつた海軍大學校教授江口元太郎君だ。江口君はエレクトレット(永久電氣)の研究に心血を注いだ結果出來上がつた學位論文を東大理學部へ出すと同時に、その要領を日本數學物理學會の總會に發表した。ところが梨の礫で、學界から完全に默殺された。

江口君の業蹟は東大でも學界でも認められない位だから、元より海軍側からも存在を無視されてゐたので、悶々の情を懷いて數年を送る裡に病床の人となり、遂に瀕死の狀態に近づいた。東大理學部では氣の毒だといふわけで論文を引きづり出して見たら、何やら珍らしさうなものだから、とにかく學位を與へた。江口君は慄へる手に學位記を取つて淋しく微笑んで酬はれざる生涯を終へた。

ところが昨年、長岡半太郎君——日本が世界に誇り得る最大の科學者と言はれる——が歐米巡歷の途中ドイツに立ち寄ると、何某といふドイツ第一流の電氣學者が長岡君に

『日本には驚くべき學者がゐる、エム・エグチのアルバイトたるエレクトレットは世界的創見に充ちてゐる、正にその方面の新生面を創造したものだ。とりわけラヂオの基礎理論はそれを基礎として今後の發達はかるべからざるものがある』

とロを極めて激賞したので、本來なら得意を感ずる筈の長岡博士が、實は江口君の研究に氣を留めずにゐたものだから、冷汗をかきながら、要領を得ない受け答へをして、あとで早速調べてみると、これはしたり、大變な業績である。驚いた博士は日本へ歸るとすぐ江口君の墓所を訪れて、今は冷かな墓石に長い默禱を獻げたさうだ。そんなわけで、エレクトレットの研究はドイツの方が數年お先に發達したゝめに、近ごろ、エレクトレットを應用したラヂオ器がドイツからわが國に輸入されてゐるのを見る始末だ。

これによつても判るやうに、創見的な研究は先づ日本で發表するよりも、外國で發表して評判が日本へ逆流した時分に初めて日本で發表するのが一番いゝやり方だといはれてゐる。舶來の學説になら一も二もなく盲目的崇拜を贈る日本學界の腑甲斐なさは全くジレッたい。日本の學界はエレクトレットの前に不明を耻ぢてよからう。

○

舊學位令の時代には、教授會と、博士會と大學總長の三方から推薦して來る者を文部省で考査の上、文部大臣の名で學位を授けたものであるが新學位令では、學位請求論文を審査するのは教授會だけとし、大學總長は學長の名で博士を授與し、文部省はこれを認可するだけになつた。だから、めつたに近頃は

文部省が博士授與を押へることはないが、最近でたつた一つの例外は、アメリカ金融論で賣り出した小島精一君である。九大が論文を通過させたけれども小島君の〇〇上の問題から文部省が首を横に振つた。

しかし九十九・九パーセントまで學位の活殺權は敎授會にある。就中、論文の專門科目を受持つ敎授の掌中にある。その結果は個人的な好惡感情や倒錯觀念のために、あたら有爲の學才が地中に埋もれて仕舞ふのだ。

審査制度を變へてもつとデモクラチックにする必要がある。論文の種類によつて必ず二大學以上の間で回覧して双方の會議に付することにするのなんかも一法だらう。

審査方針についても一考を要する點がある。といふのは現在では醫學科と他の學科とでは方針が違つてゐる。醫學科では單なる學問上の立場から、研究そのもの、特にオリヂナリチーに重點を置いて審査する。これに對して他の學科では研究の深さを見ると共に論文提出者の社會的地位を考慮することになつてゐる。

中學敎師や私立大學の講師をしてゐた時分の山田孝雄君が論文を審査して貰へなかつたのも、常磐、石原兩君等が待ち呆けを食はされたのもみなその爲である。

その反對に、あまり學殖はなくとも、役人で勅任官などになつてる人の論文なら、アヤフヤナ代物でもスイ〱とパッスするのである。名前をあげると氣の毒だから言はないが、そんぢよそこいらに、その種の名譽博士が大ぶん御座る。

これは少し變つた例だが、かの名物敎授末弘嚴太郎君にしたつて、先生が最後の博士會で滿場一致博士に推薦された時の、推薦の根據とされたのは、その著「債權總論」だつた。渡歐前「債權總論」を書いた博士はその本に頗る不滿だつた。出發に際して末弘君は「あの債權總論は間違つてゐる、今後は絶版にする、あの本を見ることの嫌さだけでも早く日本を去りたい」とまで先輩敎授や同僚に公言して出かけたのであつた。

その「債權總論」で博士になつたのだ。ちようど去り狀を渡した女房に行く筈の財產が先夫の懐へころがり込んだやうなものだ。元氣のいゝ末弘君が日本にゐたら或はその推薦を斷はつてゐたかも知れない。しかし夏目漱石のやうに返上せずに歸朝後末弘博士で通してゐる處を見ると「債權總論」は駄目なものでも別の業績で博士たるの資格充分なりと自認してゐるのかも知れない。

たゞ博士會の方が、社會的地位の方に重きを置く餘り、當人が否認した業績で學位を送つたのが變だといふのである。繰り返し言つておくが、末弘君には債權總論無しとするも博士たるの學殖は充分であつたのだし、その後の研鑽において更に學殖を深めてゐるのだから、その點に何等の問題はない。むしろ一般からは名著といはれた「債權總論」が自ら惡著として葬つたところに博士以上の見識と末弘君らしい痛快味があるといふものだ。

○

で、審査方針の要目たる社會的地位といふことだが、本來ならば、學問の性質上、「博士」は學位でなくて稱號でいゝのだ。そして、一職工であらうと、小學敎師であらうと、よしんば受刑者であらうと、その稱號に値する學

殖ある者にはドシ／＼與へらるべきだ。舊學位令の時代には、「博士」に特權的地位を付はせてあつた。それを新學位令の實施と同時に殆ど削除したのである。現に殘つてゐる特權としては高等教員受驗の際の豫備試驗を免除することと、旅費規程の中に「博士には奏任旅費を支給す」とある位なものだ。以前にはすべての公文書に勳等や爵位と並べて學位を書いたが、今では書かないことになつてゐる。實質的には制度の上からも「學位」でなく「稱號」になつてゐるのだ。それを勿體らしく出し惜むのは滑稽ぢやないか。

醫科の方では「研究」を盾にとつて濫造し過ぎるに反して、他の科では「社會的地位」を吝嗇の辯護に使ふ。

○

ところが世の中は皮肉なもので既成博士たちが學位を出し惜しむことによつて博士の價値釣り上げを策してゐるのに、別の方面で博士相場の下落を促す動力がある。それは例へば東大法學部教授高柳賢三君がいつまでも學士である。しかも誰も高柳君を博士以下には評價しない。學士大内兵衞君が博士土方成美君より學殖が淺いと思ふ者もない。慶應の小泉信三君や浪人櫛田民藏君が今ごろ博士になつたら可笑しいだけだ。東大經濟學部の新進土屋喬雄君あたりも「博士」を飛び越して恩賜賞を狙つてゐさうな勉强の仕振りだ。

文學方面にしても釋迢空の折口信夫君なんか大したものだ、緊まり屋の上田萬年君でさへ「折口君が論文を出せば翌日にも博士にする」と幾分督促がましい賞め方をしてゐるけれども、さうなると折口君の方で乙に構へてジラしてゐるといふ體だ。

早大の杉森孝次郎君にしたつて、無暗と判かりにくい新熟語を濫造して判り切つたことを態々わかりにくゝ言ひ廻はす嫌ひはあるにしてもこの頃出來合ひの博士などよりはグッと確かなものだ。

以上の現象は何を示すか。言ふまでもない本當に學殖のある連中はもはや「博士」なんかに目を呉れない。論文などを書くのはセコンドハンドに限られる。さうすると、既成博士群は自然と取り殘された特殊地帶に立ち、新博士群は學界第二流の徽章をつけてゐることになる。そこで當然に來る運命は博士價の暴落である。

杉森孝次郎君はその人らしい表現の仕方で『博士の名稱なるものは博士だけの商品價値しか含有しない』と喝破してゐる。學位は博士以上のものゝ標準にならぬ、意譯すれば『俺は博士以上なんだ』といふことになる。

さういふ愉快な啖呵を切つてゐる杉森君に對してすら、マルクス學徒が「ブルジョア學者の沒落」と頻りに弔鐘を打ち、輓歌を歌ふ時勢である。

假面をはいだチャップリン

尾崎士郎

商標としての「マスク」

山高帽子と竹のステツッキ、口髭とドタ靴――。

この簡單な扮裝の上に、チャアリイ・チャツプリンといふレツテルを貼りつける。これだけで彼は辛ふじて喜劇俳優としての姿勢を保つてゐるのである。この「マスク」は彼が、カルノ默劇團の旅役者から、キーストン會社のマツク・セネツトに拾ひあげられて、始めて映畫俳優としての第一歩を踏み出したときにつくりあげられた。そして、最近の二十餘年間、彼は同じマスクによつて彼の時代的聲價を高めてきた。たつた一つの「マスク」、――まつたく彼はたつた一つのマスクを持つてゐるだけである。いかなる映畫にも彼は同じマスクをもつて現れる。放浪者になり、質屋の番頭になり、强盜になり、そして、おそらくは、彼の畢生の大願であるナポレオン映畫においても彼は彼のマスクを失ふことはあるまい。

それほど、彼の作品において、「マスク」は重要な役目を占めてゐる。そこでチャツプリンは極めて謙遜な態度で豪語する。――「このマスクは必ずしも私でなくてもい、。誰れが用ひたとしても、きつと觀衆を笑はせずには置かないであらうこと。」

この言葉を素直に聽いてゐると大間違ひが起る。これは、チャツプリンの「マスク」が、誰れにも考案のできるほど簡單素朴なものであるといふことよりも以上に、彼のマスクが人生において、唯一つのものであり、それ故、歴史上に一般化さるべき永遠性の上に立つものであることを意味する。そこで、チャツプリンは彼の自畫像の下に題して言ふ。「I STAND ALONE」

彼のマスクに現れたグロテスクな近代色は野卑な毒々しさの

かはりに囘顧的な古典美にみちみちてゐる。彼の批評家の多くが言ふやうに彼は彼自身、自分の肖像畫家なのである。同時に製作品なのである。これは、映畫創造者にとつては一つの歴史的傳統である。

神經的で明朗なメランコリイ、――こいつは落ちぶれた貴族の顏である。それほど、ゆとりのある悲哀にみちみちてゐる。例へば、若し、われわれが、かういふ顏の男を現實の群衆の中に見出したとしたら、多分、こんな男が養老院で一生を終るであらうと思ふにちがひない。

このマスクが彼の動作の一切を支配する。そして、われわれが道端で、品の良い、落ちぶれた貴族の正義觀に拍手喝采するやうに、彼がスクリーンの上を動きだすと觀客は笑はないではゐられないのである。これは、いふまでもなく、機械文明に打ちのめされ、敲きのめされて、歪んでしまつたマスク。――今日の時代において、彼のマスクほどに、正義感にみちみちた、それにもかゝはらず無氣力なインテリゲンチャの面貌を物語るものはない。そして、今や、何よりも、このマスクが象徴するものは、知らず知らずアメリカ資本主義のトリックに陷つて、彼自身が一つの歴史的役割を演ずる前に、資本主義の傀儡としての役割を演ずべく餘儀なくされたチャップリン自身である。

「マスク」をつけない彼

ファースト・ナショナル時代。――「キッド」を完成するとすぐに、チャップリンは世界旅行を企てた。その旅行はヨーロッパだけで終つてしまつたが、彼の旅行記 My Trip Abroad. (Harpers. New York) の中で、われわれはいかに、彼が自分のマスクから――マスクに蝟集する人氣のかけから逃れようとしておせりぬいてゐるかを見た。七年間、カリフォルニヤの人工光線から、映畫世界から、そして、セルロイドの臭ひから、興行契約から――ドタ靴とちよび髭から逃れたくつて仕方のない彼を。

――ロスアンゼルスをあとにして、はじめてチャプリイ・チャップリンは姿をかくしてしまつた、――と彼は言ふ。ところが、さうではなかつた。群衆は彼のゆく方向へ、彼の着く港へあつまつてきた。

彼と握手した新聞記者のほとんどすべてが彼にかう挨拶する。

「何故、ヨーロッパへゐらつしやるんです？」

「結婚なさるおつもりですか？」

「あなたはボルセヴィキですか？」

「ハムレットをやるおつもりですか?」
「髭は如何なすつたんです——靴は、ステツキは?」
その最後の質問だけは何處へ行つても同じやうに繰りかへされる。そして、署名帖が山のやうに運ばれる。押しの強い寫眞班がやつてくる。
「——ねえ、チャアリイさん、お氣の毒ですが、僕は旅行中のあなたのお寫眞を撮らなきやあならないんですよ、僕は是が非でもやりますよ、ですから、僕のするとには眼を瞑つてゐて下さいよ、明日になつたら、あなたを、三等船客、二等船客の間で寫し、それから運動場でも寫したいんです、御面倒でも何時もの扮裝どほり、髭と帽子と靴、それからステッキも持つていたゞきたいんですがね」
それから、この男は自分が撮影競爭で優勝したことや、寫眞ぎらひの政治家をうまく寫した經驗を示威的に物語つたあとで、嘲笑ふやうに彼を見あげる。
「イギリスの王樣の寫眞も、宮城の壁を破つて寫さうとしたことがありますが、うまくやれましたよ、フォッシュ將軍だつて僕の手にかゝつちやあ、ひとたまりもありませんからね」——チャップリンはもう助からないと觀念する。それで彼は自分の部屋へとぢこもつて錠をがちりとおろしてしまふ。「畜生! おれはこの男と根くらべをしてやるぞ」
しかし、この男と根くらべをすることは結局彼の「時代的人氣」と根くらべをすることなのである。そしてベッドの上に横になつて苛々する頭をおさへてゐると、マスクをつけてゐないチャップリンの姿が靜かにあらはれてくる。憂鬱で孤獨な人生。囘顧的なニヒリズムと、宿命論。——
そこで、彼は紐育では誰れに會ふよりも前に、コンミュニストのマクス・イーストマンを訪問する。
その晩の小宴のことを彼はかう書いてゐる。——「その夜のことをわたしは永遠に忘れることはあるまい。知らず知らずのうちに、わたしの感情は高まり、淚や笑ひが雜然としてわたしの心をみたした」
イーストマンの家で、彼は、前、I・W・Wの書記、ヂョーヂに會つた。この無名の若き革命家を一見して彼はたちまち感激してしまつた。——「彼はえらい人間だ」「わたしはこんなに美しい光の漂つてゐる眼を未だかつて見たことがない」「彼の顏は正義に燃ゆる自信と勇氣にみちみちてゐる」どこをあるいたつてこんな人間にはやすやすと會へるものではない」
その若き、ヂョーヂは二十年間の刑を宣告され、その二年間の服役後、病氣のために臨時出獄をゆるされてゐるのである。

それ故彼は間もなく、殘餘の十八年の刑に服すべく牢獄に歸つてゆく筈だつた。

「若しこれがわたしだつたら」

と、チヤツプリンは考へる。――「十八年の間に何をするか？」

チヤツプリンにとつてはこのやうな美しい人間が、何故二十年の刑に處せられなければならないのか、といふことが不思議でたまらない。そこで、彼はヂョーヂにたづねる。

「君は一體何をしたんです、――二十年の刑に處せられるやうな罪を犯してはつまらないぢやないかね？」

「だが、これだけは避けられないからね、たくさんの先驅者や殉教者を見たまへ！」

と、ヂョーヂが答へる。それで、チヤツプリンはすつかり感心してしまふ。おれはまるでキリストにでも會つてゐるやうだ、と彼は思ふ。

「そんなことよりも、チヤアリイ！ 僕はこれから、サラベルナアルの眞似をしてお目にかけように」

ヂョーヂはいきなり部屋からとび出していつたと思ふと女の帽子をつかんで歸つてきた。そのベルナアルぶりのおもしろさに一座が哄笑する。笑へないのはチヤツプリンだけである、――どうしたといふのだ、今から十八年の刑に歸らねばならないといふ人が、どうしてこんなにやすやすと踊つてゐられるのかと、彼は思ふ。――このヂョーヂが、貴い人生の十八年を牢獄で暮さなければならないといふことは、考へるだけでもたまらない。

チヤツプリンは、唯ひとりきりで庭へ出る。空を仰ぐ。星の夜である。――わたしはヂョーヂのために何かしてやらなければならない、と思ひつゞける。此處に動いてゐる彼の感情は、チエホフの憂鬱と鄕愁の中にわれわれの心をみちびく彼の作品の底を流れてゐる感情である。「マスク」の裏にうすい影を曳いてゐる彼自身の心の輪廓である。

チヤツプリンが庭へ出ると、ヂョーヂがすぐあとからついてきた。悄然として物思はしげにしてゐるが、しかし、チヤツプリンの頭に映る彼の面貌は、後悔してゐる顏ではなくて、遠き未來と美に憧れる顏である。

彼等はならんで、空を眺める。そして、ヂョーヂが、「空の美しさにくらべたら何も彼もつまらないものばかりだ、――ことに人生の宴會は――」

と言へば、チヤツプリンが、答へる。「この宇宙の靜寂を味ふ者が幾人ゐるだらう。これは金では買へないものだ、富める者が購ふのは騒音だけだ。――」

星空の下でセンチメンタルな感情にひたつてゐるのが、若き革命家と、世界的喜劇俳優なのである。そしてこの情景が何とチャツプリン映畫そのまゝの雰圍氣の中から浮きあがつてくることか。――

「僕のことを心配してくれなくつたつていゝぜ、君には君の仕事があるからね、世界中を笑はしてやつてくれたまへよ、それだけで君の仕事は偉大なすぐれたものだからね」

と、ジョーヂが涙聲で言ふ。チャツプリンも泣きだす。感極つて、ジョーヂが彼を抱きしめる。

此處で、われわれは、はじめて百パアセントの興行價値から解放された、チャアリイ・チャツプリンを、そして、百パアセントの人生的價値に歸つた喜劇俳優を見るのである。

ショウとウエルス

チャツプリンはバアナード・ショウに會はなかつた。ショウに會ふこと、ウエルスに會ふことは彼のロンドンへの旅の重要なる目的の一つであつたにもかゝはらず、しかし、チャツプリンはショウの玄關から引返へしてきた。

アデルフィア・テレースには二人の藝術家が住んでゐる、一人はバアナード・ショウ、もう一人はピイタア・パンの作者であるヂェームス・バアリイ。

チャツプリンは彼の隨行者といつしよにショウの家を訪問するために出かけていつた。ショウの家はテームス河の堤を見下すことのできる高臺の上にある。

チャツプリンはショウが好きだ。それ故、彼はあるきながら、二人の話の内容について考へる。家の前門の上に、バアナード・ショウと彫りこんだ眞鍮の標札が、かゝつてゐる。チャツプリンはその前で立ちどまる。一體、ショウの名前を何故眞鍮の標札に彫りこまねばならないのか、――と彼は思ふ。そのとき、彼の隨行者は、もう案内をこふためにベルを押してゐた。

アメリカからやつてくる映畫俳優の誰れも彼もが必ずショウ訪問を、ロンドン滯在の日程に加へてゐるといふことが、眞鍮の門標を前にした一瞬間、彼の頭をかすめたのは仕方のないことだつた。彼は、あの皮肉な老人が、映畫俳優の訪問をうるさがつてゐる姿を、――そして、ショウの頭の中にひとりでに出來あがつてゐるにちがひないアメリカ映畫俳優に對する概念を、ひやりと、彼の神經に感じた。すると輕い反感と氣耻しさとがチャツプリンのヒロイズムをよび起したのである。陽氣でほがらかな、スクリーンの上のチャアリイ・チャツプリンはたちまち影を沒して、憂鬱なつむぢ曲りの、チャアリイ・スペンサア・

チャップリンが、——彼の〝I STAND ALONE〟が眼を醒ました。

この心理を解剖すると、自分だけは別物だぞ、といふ感じと、同時に必ずさういふ感情の裏打ちになつてゐるところの、自分だけはちがつたことをしてみたい、そして、自分をショウに認識させたいといふ感じが、千遍一律の訪問客として彼自身をショウの喰ひ物にさせたくなくなつたのである。もつと、はつきり言ふと、彼は彼の藝術に共通する一つの要素をショウの中に發見したのである。

そのとき、玄關口へやつてくる誰れかの足音が聞えた。チャップリンは慌て丶逃げだした。隨行者たちには一瞬間にひつくりかへつた彼の氣持のわかる筈がない。

「どうしたんです、一體？」

「止さうよ、——ショウに會ふのは？」

しかし、この心理の中に、僕は幾パアセントかのアメリカ的臭味を感ずる。チャップリンはこの位の芝居のできない男ではないからである。

ショウに會ひそこねたことを、彼は紐育へ歸つて後悔してゐる。おそらく、會つてゐたら同じやうな後悔をするであらうごとく。しかし、ショウには會はなかつたが、ウエルスの招待に應じ、それから、ショウと隣り合せに住んでゐるジエームス・バーリィの家で話しこんでゐる彼である。そして、この兩者との會見においてはチャップリンは充分彼の優越感を滿喫する。バーリィは、「ピータア・パン」を彼にやつてくれ、といふ。何度はねつけても持ちかけてくる。チャップリンはその度ごとに巧みに體を躱す。彼は「バーリィがい丶年をしてゐることを考へると少し氣耻かしくなつた」と言つてゐるが、僕はこの言葉の裏に、老作家バーリィの前でのさばりかへつてゐるチャップリンを感ずる。

バーリィとくらべると、ウエルスはウエルスらしく威張つてゐる。ストロール劇場で二人が會つてゐると、無數のカメラが向けられ、マグネシウムが立てつゞけにたかれる。

そのとき、ウエルスが、かう彼の耳に囁く。——「われわれは君、まるで闘犬だね、立ち合ひに呼び出されたやうなものだ」

そして、まつたく、この二人はい丶取組である。

チャップリンはウエルスを評して、アメリカ人そつくりだといふ。二人の會話の應酬は一切合切常識的で、氣が利いてゐる。彼等は教育の話をし、社會主義の話をする。チャップリンが、ロシヤへゆきたいと言へば、「今は寒いから時期が悪い」とウエル

スが答へる。「スペインに行つて闘牛を見たい」と言へば、さうだ、闘牛には繪畫的な美しさがあるとウエルスが答へる。等、等、等。

それで、二人でバルコニーにあがつて月光の中に展開するロンドンの夜景を眺めながら、チャツプリンの頭の中でウエルスは、だんだん「思つたよりも好ましい男」になつてくる。

ウエルスとの二度目の會見は、イーストンの別莊である。ウエルスは彼を書齋へつれていつて、かう言つて威張る。――「此處で、世界的な大業が成就したんだ、――つまり、僕が文化史大系を書きあげたんだ！ 君が、非常に疲れたときは何時でも此處へ來たまへ、此處でならいくらでも休めるよ」

そこで巨大なものに對する、チャツプリンの反感がそろそろ頭をもたげてくる。ウエルスとわかれてロンドンへ歸る途中で、彼はかう自分に言ひ聞かせる。――わたしはウエルスがわたしを知りたがつてゐるのか、それともウエルスはわたしにウエルスを知らせたがつてゐるのか理解するに苦しむ、だがとにかく、わたしはウエルスに會つた。云々」

假面をぬいだチャツプリンは巴里では彼の作品によき思ひつきをあたへる駄小説家カミと會つて手眞似で話し、ポーラ・ネグリと會つてすつかり惚れこんでしまふ。

彼の人物は“My Trip Abroad”の中に躍如としてゐるが、しかし、彼の一言一行を片つぱしから批評してゐては、きりがないからこの位にして置かう。キメの細い神經質な小男、氣取り屋で、少しばかりつむぢ曲りで、センチメンタルで詠嘆的な天才、――これが世界的喜劇俳優の全貌である。

時代的感情の媚藥

彼の作品、「ゴールド・ラッシュ」の中で、財を得たチャアリイが、いよいよ歸航する船の甲板に立つて、彼の愛人ヂョーヂアを思ひ、離れてゆくアラスカを眺めながら感慨にふけつてゐると新聞記者がやつてきて、アラスカの成功者である彼にカメラを向けるところがある。――

ほんとうの作品(彼のつくらうとした作品の筋)は此處で終つてゐるのである。ところがこの作品の結末は興行政策を慮る資本家から抗議を申込まれた。この、あまりにも文學的效果にかたよりすぎた結末の改正が決定せられたとき、チャツプリンは直ちに味な仕事をやつてのけた。

そこで、次のやうな場面が出來あがつた。――彼が甲板に立つて感慨にふけつてゐるときに、船の中に密航者が隱れてゐるといふので一さわぎが起る。いよいよつかまつてひきづり出さ

れた二人の男女を見ると、彼の戀敵であるジャックとチョーヂアである。（チョーヂアはジャックに誘拐されてきたのだ）

カメラの前に立つてゐたチャップリンがこれを見つける。

「ど、どうぞ、この女はかんべんして下さい、僕の女房です、——船賃は拂ひますよ」

チャプリンはヂョーヂアをつれてきて一所にカメラの前に立つ。うれしさがどつとこみあげてくる。二人をとりまいて歡聲があがる。寫眞班はそこで、二人をならべてポーズをとらせるのであるが、カメラのシャッターがうごくとき、我慢に我慢を重ねてきたチャップリンは、衝動を抑えきれなくなつて、突然、チョーヂアに接吻する。それで、種板にうつつた二人のポーズは烈しくぐらついてしまつたので、すつかり駄目になる。寫眞班は憤激のあまり怒鳴りたてる。

「畜生！　これで寫眞が臺なしになつてしまつたぞ！」

ゴールド・ラッシュはこれだけの蛇足をもつて結末となる。この結末はチャップリンの豫期せざるところのものであつた。それ故この寫眞班をして語らしめる最後の言葉は、いふまでもなく、資本家に妥協して、アメリカ的ハッピーエンドに導くために豫定の筋を變更せざるを得なかつた事實に對する自嘲的反抗である。

この話が、どの程度まで眞實であるかといふことを僕は知らないが、かういふ「カラクリ」を背後に持つてくるとき、この「蛇足」はかへつて作品を新鮮にするだけではなく、興行成績を一層高めるであらう。

僕は此處にすつかりアメリカナイズされたチャップリンを見る。といふのは、彼の持ち合してゐる程度のニヒリズムと、常識的社會主義と、前の實例が示すやうな極めてインテリゲンチャ的な反抗とが、アメリカ資本主義にとつては充分時代的に利用すべき理由をあたへるからである。

チャップリンはたしかに、彼の藝術を通じて反ブルヂョア的な感情を表示する。それはたしかに反ブルヂョア的ではあるが、しかし、彼の感情は決して破裂しない爆彈である。

いかなる感情も、彼の商標によつてその方向を一變してしまふであらう。山高帽子とドタ靴と、チョビ髭と竹のステッキと、だぶだぶのズボン——この泣き笑ひを表象するアングロ・アメリカンの「マスク」が彼の藝術を支配してゐるかぎり、たとへば彼が、どのやうな形式で、ブルヂョアジィの禍根を極め、誤謬を指摘しようとも、彼に共笑する大衆の背後でアメリカ資本主義は充分安らかに腹を撫でることができるであらう。そして、時代的感情の媚藥として、彼の作品の商品價値は決して動搖し

ないであらう。

彼の詠嘆面と女

チャップリンの詠嘆面のうしろには女との關係が影を曳いてゐる。彼は今までに六人の女と夫婦關係を結び、六人の女と別れてゐる。その、何れもが、彼の映畫においての相手女優であつて、彼は現實的に、結婚する前に必ずスクリーンの上で彼の理想的戀愛をやつてのける。そして、その一人一人が現實の大地へ下りてくると、彼の中に榮えてゐた幻影の美しさはたちまち影をひそめてしまふ。ミルドレッド・ハリス、エドナ・パーヴィアンス、ポラ・ネグリ、リタ・グレイ、バージェニア・チェリル、ジョーヂア・ヘール――チャップリンの藝術は過去において既にこの六人の女を踏み臺にしてのびあがつた。彼にとつてはすべてが藝術である。すべてが藝術に還元する。それ故、女が彼の藝術から一歩を踏み出してくると、チャップリンの戀愛はたちまち姿を變へてしまふのである。

かうして、時を隔てずして、家庭生活が一つ一つ破れてゆく。法律問題が起る。チャップリンの宿命觀は、女との關係の重なるにつれて一層強度を加へてくる。

第一夫人、ミルドレッド・ハリスとの生活が破れた後、相手女優として現れたエドナ・パーヴィアンスは、最もチャップリンの理解者であつた。チャップリンではない。チャップリンの藝術の。――それ故、彼等の結婚生活は、一種の友愛結婚の形式の下に結ばれた。不即不離の關係で、エドナとの戀愛は長く續いていつた。過去においての彼の作品のほとんど大部分はエドナを相手女優として完成された。彼がポラ・ネグリと新しい關係に陷つたときも、エドナは靜かに時期の來るのを待つてゐた。

伯爵夫人ポラは、彼がヨーロッパへ行つたとき、巴里の劇場で會つた。ポーランド生れのポーランド式美人。彼はその時の印象を次のごとく書いてゐる。――「美しい黒髮、白い齒、齒の白さとまがふばかりの美しい肌、こんな女を映畫に出演させないで置かれるものか、とわたしは考へた。彼女はわたしに挨拶した。その聲の素晴らしいほがらかさ」

その印象は長く彼を支配した。彼が後年チャップリン夫人となる日まで。

しかし、多くの女がチャップリンに見捨てられたのとは反對に、ポラはチャップリンを見捨てていつた。身長五尺三寸の痩せ形の小男は彼女の豐滿な肉體にとつては、精力の涸れた駄馬のごとく見えてきたのであらう。そして、彼女が新しい戀の相手、ルドルフ・バレンチノの許へ走り去つたとき、愛慾の戰ひ

に倦み疲れたチャツプリンの前に、清冽な泉のごとく現れたのは依然として、エドナ・パーヴィアンスであつた。しかし、エドナは所詮彼にとつては、沙漠の緑地にすぎなかつた。チャツプリンはもつと長い旅をつゞけなければならない。間もなく十七歳の少女、リタ・グレイが登場する。彼女は、數年前、「キッド」の中の夢の場面に出た少女である。チャツプリンの情熱はリタの「新鮮さ」を目ざして燃えあがつてきた。リタとの結婚、——家庭生活の失敗者はまたしても新しい結合を急ぐためにメキシコに渡つて結婚した。カリフォルニャの法律は十八歳以下の少女の婚姻を許さなかつたから。——

しかし、家庭の中におさまつたリタはすぐにその新鮮さを失つてしまつた。同じ感情の形式的な反覆が行はれた。リタとの間に子供が產れた。

リタがその喜びを彼に傳へたとき、チャツプリンは苦々しさうに言つた。——「ホリウッドの人口を一人殖したところで如何なるといふんだ！」

そこで、またしても離婚訴訟がはじまつた。そのあとへ現れたのが、ヂョーヂア・ヘールである。——かう書いてくると際限がない。最近のレディス・ホーム・ヂャアナルはチャツプリンが、エドナと正式の結婚生活に入る意志のあることを傳へてゐるが、しかし「街の灯」の完成後に、どのやうな突發的な事實が現れるか、まつたくわれわれの想像を許さゞるものがある。唯、彼の愛慾生活が螺旋狀を描いて續いてゐるかぎり、チャツプリンは、ますます懐疑的になり、ますます回顧的になり、それ故、現實の宿命觀から拔け出すことはできないであらう。女性輕蔑論者でない彼は、新しい空想を追ひながら、絶えず彼の藝術の中に理想的な女の幻影を追ひ求めてゆく。

踊るチャツプリン

ヨーロッパの旅から歸つてきた、チャツプリンは紐育で、シンシン監獄を訪問した。長い旅の中で、出來るだけ、自分のマスクから逃れようとあせりぬいてゐた彼が、この監獄の中で哀れな囚人を前にして立つたとき、始めて純粹な氣持になつて踊り出した姿を世界中の何よりも僕は美しいと思ふ。——少しの芝居氣もなく、當てこみもなく、唯、囚人を如何して喜ばしてやらうかと考へぬいた揚句、スクリーンの上のチャツプリンにかへつて、出來るだけ喜劇俳優にならうと努めてゐる彼の姿を見て、僕は、はじめて親愛なるチャツプリン君を感じた。

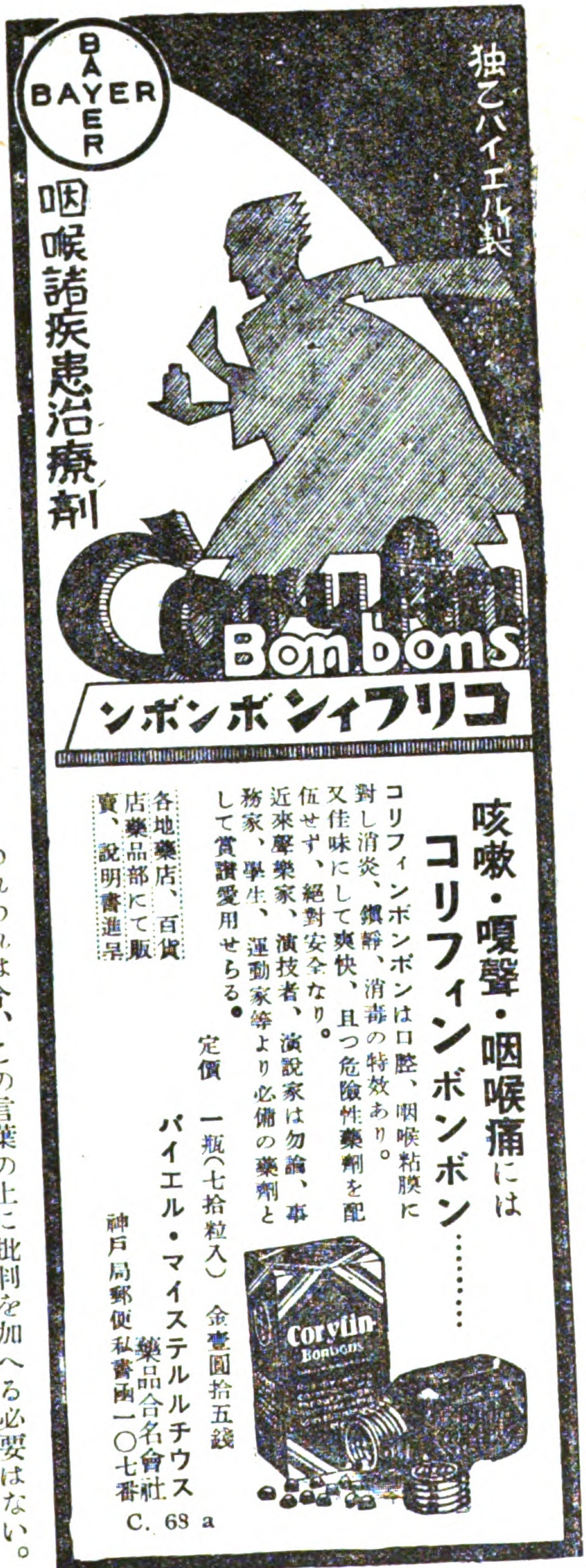
彼は監房を前にして一席の演說を試みようとする。

「諸君！」

と言つてみるが、もうそれ以上言ふ言葉はなかつた。そこで彼は、ステッキを曲げ、帽子を空に投げ、足を蹴りあげて踊つてみせるのである。

此處において、囚人と彼とは一致した。感情もなければ道德もない。囚人は彼を見て喜び騷いだ。チャップリンは言ふ。——

「囚人とわれわれとの間に何の違ひがあるか、あるものは唯、立場の相違だけだ、即ち囚人と囚人でない者との」



われわれは今、この言葉の上に批判を加へる必要はない。監房を前にして始めて踊り出さずにはゐられなくなつたチャップリンの姿だけを見ればいいのである。この姿の中にのみ、われ等の生きたチャップリンがゐる。彼は資本家の傀儡であつても無くてもいゝ。すべての時代的感情の上に、チャアリイ・チャップリンは彼の假面を剝ぎ去つても猶且つ人生の喜劇俳優としての姿勢を保つてゐるのである。——

早川雪洲と上山草人

翁久允

くる、來ると、いつも新聞を騷がせ、人を騷がせた早川雪洲は、今度こそ、いよ〳〵船に乗つたらしい。だから、この稿が誌上に載る頃は讀者は久し振りの雪洲に逢つたり、話したりしてゐる頃であらう。日本の映畫フアンが、海外で、ほんとの意味で、ある時代をもつた日本人の映畫俳優をどう歡迎するかが、興味あることでもある。それは、去年の春、上山草人が歸國した時に、丁度仕合せなことには世界的人氣役者、ダグラス・フエヤバンクスが渡來してゐたので、その附屬的人氣が、妙に日本人のフアン根性を煽つて、草人は映畫俳優としての實質以上の儲けをしたわけだつたが、草人のやうに日本で若い時代に役者として苦勞し、その役者生活も、丁度新興劇壇の波に乗つたが故に當時の若き劇壇人や文壇人にも名を知られ、將來の新劇運動の爲めに多少の期待をもたれたと言ふやうな事實もなく、たゞ中學を出て、將來海軍の將校を夢みて士官學校に入學を希望してゐた雪洲は、志成らず、アメリカに飛んで、實生活のいろんな苦勞から苦勞を辿り、そして、腕一本で、セッシユ・ハヤカワの名を、アメリカ娘は勿論フランス、ドイツの隅までも謳はせた、ある時代の誇ある榮譽を贏ち得て、十數年前、一度歸國した折に、彼は或る方面の人達から、國賊呼ばはりをされた。少年時代から日本を去つて、日本の社會的事情に暗かつた彼は、今日なら日本でも隨分アメリカ化してるから他も怪しみはしないだらうところの態度も、當時は、或はキザに見えたり、若しくは日本人離れして見へた爲めに、いろんな問題をひき起したのであつたらう。それから見れば草人は、日本人として米國へ渡つて、歸つて來た時分は、日本にゐる日本人よりか十年もおくれた古ぼけた日本人として歸つて來たのと、面白い對照をなしてゐる。それは二人の容貌をみてもわかることであるし、又、二人がアメリカの監督から與へられた彼らの過去の映畫の上にみてもわかる對照だ。

草人は日本で苦勞してアメリカに渡つた人だ。アメリカでは浦路夫人があつた爲めに、どうにか生活も出來、彼女の内助と、生活上のきり廻はしに依つて、彼は漸やく活動寫眞界に身を投ずるまでの順序がついたわけであつた。草人がもし成功してゐると言はれるならば、そ

れは浦路の功勞を忘れてはならない。 と同時に雪洲も又、青木つる子があつた爲めに、 あれだけの舞臺が踏める運命に辿りつくことが出來た。しかし、二人とも、藝術家としての天分が、內部に充分あつたから、スクリンの上でもあれだけの活動が出來たのであつて、 この二人の婦人が裏面になくても、機會がありさへしたら、 あれだけの手腕を充分に揮へたにちがひはないが、 何と言つてもこの二人が世に出たについては、二人の女性を思はずにはをれない。 この二人の女性の對照も又面白い。 青木つる子は川上貞奴の姪にあたるので幼少の頃、貞奴一座と共に渡米した。 そしてアメリカに殘つた彼女の數奇な運命が雪洲と他日ホリウッドの映畫界に日本人の先驅をなしたのである。 山川浦路は華族女學校に席をおいてゐた少女だつたが、 若い感激から當時の劇壇に進出し、 草人の懷ろに入つて世上の幾多の問題を作り、 日本では二人とも劇壇の生活に行詰り、 たゞ漫然とアメリカへ亡命家のやうに渡つたのである。 その頃雪洲夫妻の名は全米を駭してゐたと言つても過言でない程、 セッシユ・ハヤカワの得意時代であつた。 ホリウッドの、もし日本の何處かにあんなのが建つてゐたら、 殿堂とでも言はれるだらうやうな、 宏壯の建物の中に、 東洋人の好きな言葉で言つたら、所謂王侯の生活をしてゐたのであつた。 草人は雪洲に對して、 雪洲がなんだ。映畫俳優として偶然に成功したに過ぎないので、 役者としてはなつてゐないぢやないか、 役者としてはオレの方が一枚上だと言つたやうな自負心をもつてゐた。 それは日本人として、 どの社會に活きる人でも、 何か自分に自惚れをもつてる人達が、 その方面で立ちおくれた場合、 悲痛な氣もちで相手を見る目であつた。 だから、あちらでは草人に逢ふ者は必ず一度は雪洲の噂さを初めたものだ。 が、その度に草人の呪ひに似た表情が彼の言葉を曇らせ、 彼の無關心を煽らせたものだ。 オレだつて機會が來たら、 雪洲位淩駕することは朝食前だ! 彼の表情にはこんな氣もちが溢れてゐた。 が、雪洲の方では、 上山草人? へえ? そんな人がゐるかい? さうか、 と言つた調子だつた。

事實、 彼は若くして日本を去り、 草人が坪內博士や島村抱月らの指導に依つて、 新らしい劇壇の一隅に立ちあがつたことも、 又、その劇運動が、 日本の民衆をひきつけるものでなく、 興行としては價値なく、その爲めに衰運の悲境に陷り、 尾羽打枯らしてアメリカ三界へ飛ばねばならなくなつたと言つたやうな事情を知る遑がなかつたのである。假りに多少知つてゐたにしても、 左程眼中におく程の草人でもなかつた。 こんな二人が、 たしか、ある機會に逢つた筈であつた。 逢つても二人の話が合はなかつたに相違なかつた。 それはスクリーンの上に現はれた晴々しい雪洲と、 草人のあれを切りぬいて來てつぎ合はしてみたやうな會合であつたに相違なかつた。

雪洲は世界的人氣をもつて日本へ歸つたが (千九百十八年?) 日本は彼に餘りよい印象を與へなかつた。 彼と話して共鳴するものは井上正夫位なもので、 その他の所謂役者達は彼の肌に合はなかつた。 又その頃はまだ、日本に映畫俳優らしい映畫俳優もなく、 映畫そのものも、今日からみたら、子供の玩具よりか劣つてゐた。 そこへ一人前のスターとして歸つた彼を遇する道さへ、 日本で誰も辨へてるものがなかつた。

だから雪洲としては、日本が何だか厭やな處だつた。それに妙な連中から脅かされたり、强請られたりした。アメリカでは人種爭鬪の第一線に立つて、遂に日本人としての最初のスターとなつた彼も、その祖國の人情に對しては餘り芳ばしいことがなかつた。彼としては、アメリカ育ちの彼としては、もし、アメリカの一地方から、一流のスターが出現した場合、その地方民は、大統領を出したよりも以上の歡迎に熱狂する風習を胸裡に描いてゐたに違ひなかつた。それはアメリカに於ては人氣が立つて來たら、老猾な宣傳や、見え透いた芝居じみた狂言をしなくてもよかつた。堂々と郷關に乘り込んでよかつた。勿論彼は相當の歡迎は受けたけれどそれは彼の光明に輝いた海外での、當時第一人者に對してのそれとしては、上陸一週間後の彼の身邊を襲つたいろんな不快な事件が、彼を呆れさしたのであつた。彼にして、草人の如く日本での苦勞をしぬいてゐた人だつたら、もつと、やり方もあつたらう。それにあとから詳しく述べるが、彼はその出世作「チート」に依つて、或る種の日本人に誤解を與へてゐた。或種の日本人は、何か一つ突込むところがあつたら執念深くそれを突込んで物にしやうとする。彼は「チート」に依つて世界に進出し、「チート」に依つて祖國から呪はれたのだ。そしてアメリカに歸つた彼は、ある抱負をもつてホリウッドの生活をきりあげ、ニユヨークの舞臺に立ち、更らにフランスに招かれ「ラ・バタイユ」その他の製作をすまして歸米以來アメリカの映畫界に緣を絕ち、昔日の人氣を忘れられやうとする頃、西部アメリカでは草人の名が、日本人の俳優として頭を擡げて來たのであつた。

草人の歸朝漫談には可なり齒の浮くやうなところもあるが、それは別として、草人がアメリカへ最初に渡つた時の彼の淋しい感懷は雪洲が最初に日本へ歸つたときの感懷と、いろんな内容や事件がちがつてゐるけれど、淋しい心もちに於て似通つたものがある。それは草人としては、日本の社會の事情や、彼の生活環境の雰圍氣が、當時はどうであつたにしても彼の自信からみたら、彼は新劇界の第一人者をもつて任じてゐた。日本に止つてゐたにしても後日澤田正二郎が出現したやうなわけには勿論ゆかなかつたであらうが、しかし彼としては、この上山草人を知らないかと一杯飲んだら怒鳴つても憚るところがない位な自負心を抱いてゐた。だから、アメリカへゆくと言つても、彼らの出發の時に空想してゐたやうなアメリカの生活が、彼の滯米中一日もなかつたであらう。彼としては日本で有名な草人である。アメリカの劇壇を少し研究して歸朝し、捲土重來しやうと思つてゐた。だからアメリカにゐる日本人の誰も彼もが、彼の存在を認め、彼を名俳優として尊敬し、彼の光輝ある前途に對して祝福の手を擴げてくれるだらう位に夢みてゐたに相違なかつた。事實、最初は、布哇でも、桑港でも、シアトルでも、一通りは旅役者としての彼を歡迎した。しかし、彼の心底にはオレを旅役者扱ひするとは無禮だと言つた氣もちがあつた。それは草人としては御無理もなかつた。志ある者は同情もした。が、一方から見たら草人は在米同胞の社會にとつてはたゞの一旅行者若しくは滯在者に過ぎなかつた。何ら草人から敎へられたことも無へ

られたこともなかつた。それに草人のやり方が、在來同胞社會の習慣的やり方と、いろんなことが違つてゐた。彼は、日本で旅興行をやつて歩いたやうな流儀で、渡り歩いた爲めに、方々で排斥され、半年と一つ處にとゞまることがなかつた。そして生活に窮迫し、その爲めには、又手段を撰はないやうなことも、しなければならなかつた。そこで浦路夫人がその間の貧窮を内助して、活動した。その時代の草人の生活は、餘りほめたものではなかつた。自分の思ふまゝにゆかない爲めに親切にしてくれた人とでも喧嘩別れして、昨日は彼れ、今日は誰れと言つたやうに、人から人を渡つて歩き、一旦別れたら、自分の何かの宣傳か或は利益にでもならない限りは顧みやうとはしなかつた。さうして、ホリウッドに出現して、今日をなすやうになつても、周圍の日本人からは餘りよい感情をもたれてゐなかつた。が、しかし、日本からの旅行者で、彼を訪問して來る者に對しては彼の及ぶ限りの歡待をつくした。それは、それに依つて彼の他日歸朝の際の便宜に供しやうとする下心と、更に一つは周圍の日本人よりか話も合つたり、昔の日本にゐた時代を回想する爲めとであつた。

もし、草人が、相當な金をもつてアメリカへ渡つて來たものであつたら二三ケ月を出でずして、その不快な周圍から、さつさと足を洗つて歸國したであらう。又、雪洲が、最初歸朝した時、もし、金がなかつたら、づるづるべつたりに日本にとゞまつて、そして今日頃では動きのとれない位立派に成功し、或は、海外輸出映畫の如きも、歐米諸國から歡迎されるものを作つてゐたかもしれない。草人が、金に窮して、米國を轉々して歩いた揚句に、その昔つては映畫俳優と言へば侮蔑の眼をもつてみたその世界に進出し、雪洲は、金があつたが爲めに、世界中を轉々として歩き、そして映畫俳優としては、もはや世界的にその名を失はふとして日本に返り咲きせんが爲めに歸つて來た。草人は、宣傳そのよろしきを得た爲めに、凱旋將軍のやうな人氣をもつて帝都に乘り込んだが、彼が、歸朝早々に宣言した如く、もし、アメリカの映畫會社と、何かの製作契約があつて、今年中に歸米すると言ふのであれば、この對照は更に面白い。彼は、今日まで、映畫人として世に現はれた位置は、まだ雪洲が「チート」を製作して世に出た以前のものである。だから、彼が映畫俳優として世界の舞臺に踊るのはこれからである。雪洲は、世界の舞臺を踏み終つて、ほんとうの意味で錦衣歸朝したわけである。ところで、その雪洲は、もし、日本での種々な條件が、彼を滿足させなかつたならば、彼は、さつさとアメリカに歸つてゆくであらう。しかし草人は、歸つて來たやうな人氣が、續いて行つたら、アメリカに歸らぬであらう。草人が歸米すると言ふ反面には、もはや日本が草人を惜しまないことであり、雪洲が、思ふまゝに日本で仕事が出來なくても、日本にぐづ〳〵とゞまつてゐるとしたら、アメリカは、もはや雪洲を要しないことなのである。

雪洲は映畫界で苦勞し、しかも萬國人相手のアメリカで苦勞をし遂げて、日本人としては最初のスターとなり、アメリカでの一流の人氣者が生活する凡ての善のも惡のも生活を體驗した。彼は最初英語の會話は青木つる子よりも下手であつた。が、どし〳〵社交界に進出する

やうになつてから、あらゆるスタイルも板について來て、アメリカでは最早や押しも押されもせぬ紳士にまで漕ぎつけた。彼は日本へ歸つて來なくても、充分あちらで潰しのきく人である。さうした彼が、映畫界を去ると舞臺人として活動し初めた。が舞臺人としての雪洲の名聲は、映畫スターとしての彼の餘韻に過ぎなかつた。と、言つて彼の藝術が足りないと言ふわけでない。彼は本質的に舞臺役者と言ふよりも映畫役者だからである。ところで草人は前にも言つたやうに日本の劇壇で苦勞し、松井須磨子を中心とした人氣と、澤田正二郎時代との中間に、日本に上山草人ありと謳はれた位だから、舞臺役者としては成功したわけであつた。成功したがその次ぎの時代にアメリカでの五六年の放浪時代を送らなければならなかつた。彼は日本ではどうすることも出來ないまでの苦境に立つてゐた。雪洲は最初に日本へ歸つた時の心境には得意の氣滿ちてゐたが、草人がアメリカへ最初に渡つた頃は、失意と失望のどん底にあつた。雪洲は若年にして萬國人相手に生活して中年に日本へ歸つたし、草人は若年時代に同胞人の間に生活し、中年にして萬國人の生活環境に新らしい苦勞第一步を進めなければならなかつた。だから英語が下手で、その又下手な爲めに彼はある意味で成功したわけだつた。と言ふのは、彼は雪洲位に英語が話せたら、米人の誰れとでも喧嘩して終ふであらう。喧嘩しないまでも、必ず相手に不快を抱かしめるであつたらう。彼は英語の聾啞であつた爲めに、彼の怪異な顏に浮ぶ微笑は善意にばかり相手の白人から受けられたのだ。彼が英語で彼の毎日の心事を忌憚なく語つてゐたら、恐らく三日も仕事が續かなかつたであらう。自然はいろいろな人間をいろんな位置に据えつけて、彼らに生活をさせる。性格も容貌も感情も自然ちがつたこの二人を自然がいつも逆な場所に於てたがへてゐた。そして雪洲は雪洲として進み草人は草人として歩いて來たのである。

私はこの二人を語りゆくうちに、アメリカの同胞社會の情景を漠然と描いてみたいと思ふ。それには二つの彼らのエピソードを語らしてもらひたい。この二つの話は彼らが表現する代表的なものでないけれど、この話によつて在米同胞社會の或る時代が顏を出してくれるからである。

雪洲はロサンゼルスの邦字新聞に左のやうな廣告を出したことがあつた。

謹　告

過般當市ブロードウエー、タレー座に於て興行せし寫眞「チート」の映畫は圖らずも在留同胞諸君の感情を害したるは、小生の衷心遺憾とする所に有之候。今後は充分注意を拂ひ再び累を同胞社會に及ぼすなからんことを期す可く候。

十二月二十九日　　早川　雪洲

これは千九百十五年のことだつた。千九百十五年と言つたら桑港に萬國大博覽會が開催された年だ。そして十四年は世界大戰爭の勃發した年で、十三年は在米日本人の土地所有禁止法案が米國上下院を通過した年であつた。排日法案通過後の日本人は、日本政府の軟弱外交を非難し、民族發展の芽を摘まれたものとして悲觀した。が、何を言つて

みたつて長いものには卷かれなければならなかつた。泣く泣く忍び、そして新らしい展開を講じなければならなかつた。世界大戰だ、日本の繁加だ。そこへ萬國博覽會だ。在米同胞も目まぐるしい位に忙がしかつた。所謂多事多難時代だつた。さうした時代にラスキン映畫會社の製作品として早川雪洲をスターとした映畫「チート」が現はれたのである。日本人は、彼らの多事多難時代には落ちついて四圍を觀察し、考究して他日に備へると言つたやうな大國民的氣性を缺いてるから、たゞ無暗に神經過敏となる。「チート」はその神經過敏時代の在米日本人・社會に投げつけた爆彈だつた。もう、ずつと以前のことだからこの映畫の筋書さへ覺えてる人が尠なからう。大筋を言つてみれば、鳥居と言ふ日本人の美術家が、米國人の妻君に懸想する。その女は白耳義救濟會の爲めに奔走して義捐金を募つてるが、自分の投機的失敗からその公金一萬弗を費ひ込む。それを鳥居がとり繕つてやるのだが、その時に

Is it a bargain?

ときく。女は點頭く。そこで二人の了解が出來るのである。が、女の亭主はある投機で金を儲けその一萬弗を仕拂つてくれる爲めに女が鳥居の方へその金を返しにゆく。鳥居はあの金をやつた時に既に了解が出來てるのだ。お前はあの時からオレのものなんだとつめ寄る。二人の鬪爭。鳥居は女の肌に"It means belong to me"と言つて烙印を押す。女は悶へ苦しむ。遂に男を擊つ。亭主が這入つて來る。妻の代りに自分が擊つたのだと言つて訴へ出る。判事は亭主を謀殺罪と認めて刑を下す。女は堪へかねて實狀を告白する。傍聽者のエキサイトメント。そして鳥居の私刑（リンチ）が初まる。――こんな風なもので、雪洲はこの鳥居をやつたが爲めに一躍スターの列に飛びあがつた。が、この映畫をみた在米日本人は直ちにこれを排日映畫と騷ぎ、日本へも電報を打つ。はては雪洲を國賊とまで叫び出した。毎日壯士のやうな連中が彼を襲ふ。新聞では大攻擊を初める。領事館員まで騷げば、日本人會とか何々會とか言つた方面でも大騷ぎに騷ぐ。とゞのつまりは前掲の『謝告』となつて雪洲が在米同胞に謝罪の意を表したわけであつた。

私は當時、こんな映畫の爲めに何故日本人は斯う騷がなければならないのか不思議で堪らなかつた。そしてある新聞に、日本人がこんな下らないことに神經過敏になるよりか、もつと根本的に考察する問題がざらにある。と、言つたが爲めに、ブラックメールが八通も飛込んで來た。そんな位だつたから雪洲の身邊も一時は危かつたのである。が雪洲はその映畫に依つて次ぎの全盛時代をかち得たのだ。全盛時代になつて來ると在米同胞の誰れもが「われらの雪洲」を愛した。彼は幾多の名畫を製作すると、その得意な時代に彩づける氣もちで歸朝したが、その二三年前の例の排日映畫主演者として國賊として日本で羞められた。又彼の競爭者で彼に立ちおくれた連中らの惡宣傳も充分に功を奏したかもしれない。が、今日、誰が彼のそんなことを記憶してゐるものがあらう。彼は肥るところまで肥つた、それは草人が日本の社會でいぢめられて、窮迫のどん底からアメリカへ渡り、あちらで得た人氣に助色して歸朝を華かにしたこととは同日でない。一は完全に成功

してその榮譽を擔はされなかつた。他は、成功の關門に立つただけで、噺やされ過ぎた形である。

草人が渡米したのは雪洲が歸國した年かその前後だつたと思ふ。それから千九百二十四年映畫界に口を求めるまでは慘憺たる放浪の時代を續けた。布哇から桑港、シアトル、スタクトンと渡り歩いたがどこにも彼は惠れなかつた。千九百二十二年「東西時報」と言ふ雜誌を浦路と二人で發行するやうになつてから桑港に居をおき、更に東西藝術家協會と言ふものを同士の連中と創立した。その頃ロシア革命の爲め白色藝術家達が、ハルビンから日本に渡り、更にアメリカの沿岸に放浪してゐたものが尠くなかつた。小圃千浦とか岸山頼吉とか言つた畫家を中心に、それらの亡命藝術家達が時折相寄つてゐた。草人はそれらの仲間に入つてゐた。そして、その年の秋、所謂東西藝術家達の作品展覽會を桑港の美術館に開催したことがあつた。この藝術家協會に依つて彼は漸やく今日までの乾燥無味な沿岸移民地生活の中から、内的生活に觸れ得る、或る感激の日に出遇ふことが出來た。そして仲間が寄ると觸ると禁斷の酒をどこからかもち寄つて、氣焔をあげたり猥談に耽つたりしてゐた。もう五年も放浪した彼は東も西もわかつて來たし、アメリカへの親みも出來て來た。それまでの彼は所謂「沿岸人」と自分とは別の人種ででもあるやうに考へもし、又言動にも現はしてゐた。自分は日本でも選ばれた人間の一人であつて、この沿岸にごろ〳〵してる出稼勞働者共と身分が違ふのだと言つた風な、高慢な態度が離れなかつたが、どうしたところで日本へ歸る金も出來ねば、さうかと言つて志して來たニユヨークへ行つて劇界を研究する餘裕もなかつた。仕方がないから、ことに依つたらこれで永住しやう、と言ふやうな考から、郷里の骨肉の人達に對して計つたこともその時代であつた。長場平六を呼び寄せたのもその頃だつた。彼は輕蔑してゐた移民地生活の中から、曾つては芝居をして歩いて入場料や花をもらつて一時的に生活したことを今度は雜誌に依つて、購讀料とか廣告料とかに依つて生活せねばならなかつた。これらの仕事の殆ど全部は浦路がやつたので、草人は酒があれば飲み、暇があれば釣ばかりしてゐた。そしていろんな支拂の方面は打ち捨てゝも釣道具なんかは贅澤なものを備へてゐた。收入も一家の生計を立てるに不充分ながら充分なところまで漕ぎつけた彼は、もう自分が役者であることも忘れやうとしてゐたし、又舞臺に立たうと言ふ感激も失つてゐた。そして一種の有志家らしい位置に自分を立て、東西藝術家協會の幹部格で何やかやとやつてゐたのだが、そこに一つ事件が起きた。

例の東西藝術家協會の展覽會が、とにもかくにも成功したのであつた。時は千九百二十二年の春であつた。二十年は日本人の絶對借地禁止令が法案となつて米國上下院を通過し、燎原の火のやうな排日運動が沿岸の北から南までゆり動かしてゐた。世界大戰中は、日本も米國も所謂人類の共同の敵たる獨逸と戰つたのだが十九年の十一月十一日あの未曾有の大戰が幕を閉ぢると、シベリヤで共同戰線を張つてゐた米國の歸還兵達に依つて、新らしい排日運動、厭日運動が捲き起された。そして、加州民の一般投票に依つて、日本人には一尺の土地も貸

さないと言ふ運動が初つたのだ。「カリフオルニヤを白くせよ」と言ふ宣傳が彼らの標語であつた。それは加洲を白人の世界にせよ、黄色人種を追ひ出せと言ふことだつた。日本人の方では「カリフオルニヤを綠りにせよ」と言ふ標語を打ち立てた。それは日本人の百姓が加洲から去つたら、加洲の肥沃な土地は再び荒地に返るだらう。日本人は加州農園の恩人であり關係者である。加州の野菜、果實は日本人に土地を貸さねばその新鮮を失ふであらうと言ふ意であつた。が、結果は五對三の投票結果で日本人側が負け、そこで千九百十三年の土地所有禁止から、千九百十八年の寫眞結婚禁止（これは日本人は兎のやうに子供を產むから、この調子で日本人人口が增加したらマルサスの人口論でゆくと百年を出でずして加洲は日本人化する。だから、今のうちにその子供を產む花嫁の渡航を禁じやうと言ふのがこの法案）そして二十年の借地禁止で、日本人は完全に手も足ももがれて終つた。社會的、國際的にはさうした破綻の下にあつた日本人に對して、學者とか宗教家とか藝術家と言つた傾向の人達は、日本人を排斥はしなかつた。ある意味で尊敬さへしてくれた。そこでそんな風な排日運動の激しい「あらし」のあとの東西藝術家協會展覽會は、ある意味で米人の親みなひいた。桑港美術館長の某氏はこの展覽會を賞揚し、あらゆる階級に宣傳もしてくれた。藝術には國境がない、勿論、人種もない。そして、東洋の藝術家達はある榮譽を負はされて、寧ろ過分な賞讃をさへ博したのであつた。美術館長は、展覽會が終つたある一夕、協會員を自宅に招いて晩餐會を催した。これは殆どこれまで例のないことだつた。主人を初めとして協會員はフオマルな禮服さへもつてゐなかつた。しかし、何とか繕くつて彼らは出かけたものだつた。そこには米人の紳士淑女も多數招かれてゐた。晩餐の席上は、東西の藝術家で賑つた。そこまでは極く順調に行つたのだつた。

協會員で一人の變態的な畫家がゐた。彼の出品のいくつかゞ問題にされてゐた。彼は有頂天に喜んでゐた。その彼が自分の作品の中で最も得意としてゐた作品をその夜靜かに招かれた美術館長の邸宅の一室に掲げておいた。彼は晩餐會席上、彼の隣に椅子を占めた令孃から會話を求められ、名を求められて得意滿面だつた。彼は自分の藝術を賞められたので、百尺竿頭一歩を進めた。それは「あれらの作品は自分として大した自信のあるものぢやない。が、自分は傑作の一つを今夜もつて來てる。そしてある部屋においてある。もしあなたが私の作品を好まれるならば、食後、觀賞してもらひたい」と言つた。令孃は喜んだ。

友達を誘つて、デザートコースがすむと彼のあとについたのだつた。彼は悠々と別室の戶をあけた。その壁間に掲げてあつた繪畫はおゝ、それは春畫だつた。一人の令孃は、きやつと叫んでそこに卒倒した。他の令孃は眉をさか立て、聲を軌らして叫んだ。「巡査を呼んでくれ！　そして彼を捕縛してくれ！」と。この異變に對して群衆の眼と足がこちらに動いた。座長の館長は、まつ青になつてかけ込んでくると、その繪畫をひき下ろして、誰れにも見られないやうに伏せ、二令孃を慰め、そして客人達に、何事でもないと告げ、どうか廣間の方へ行つてくれ、これからは又夜會のいろんなプログラムがあるのだか

らと昂奮をおさへ／＼て冷靜に指揮した。そして自らは廣間の舞臺に立つて、ざわついてる客人達の心もちを靜める爲めに、イプセンの戯曲を朗讀したりした。が、館長の巧妙なこの處置は、甘く皆なを胡麻化すことが出來なかつた。十二三人の日本人と、二十何人の白人との間に大きな不安が渦卷いて來た。日本人はその夜、この事件は絕對にこの會員以外のものに喋舌らないことを誓つた。もし、邦字新聞にでも英字新聞にでもこのことが暴露されたら日本人藝術家の品位を傷けるばかりでなく、全體の日本人の不名譽となることである。絕對に絕對にと、緘口の契約を交はした。そして表面的には、この一夜は日米藝術家の交歡會として華かに終つたことになつてゐた。

ところが、いつの間にか、この話が外部にもれて來た。そして新聞には「事珍しく新聞に掲するが」と言つたやうな書き方で、その夜の內容がすつ破拔かれた。協會員は逆ひあがつた、そして、一體これを喋舌つた奴は誰だと言ふ詮議が起つた。草人は、その爲めに東西藝術家協會から離れなければならなかつた。そして桑港も、彼には愉快な生活地でなくなつて終つた。それから間もなく、獨逸人と日本人の混血兒で、沿岸文壇は勿論、米國の文壇でも可なり名を知られてゐたハプトマン定吉と言ふ詩人があつた。彼はロサンゼルスで詩人につき物の貧乏な生活を續けてゐたが、ダグラス・フェヤバンクスが、例の「バグダットの盜賊」をやる爲めに、東洋人の役者を求めてゐた。ハプトマン定吉は、東洋人の血を受けてると言ふところから選ばれた。彼の貧窮はこのジョウブに依つて救はれたのだが、この不幸な詩人は、二本か三本を撮影すると病氣の爲めに倒れた。ダグラス・フェヤバンクスは弱つた。そして更らに人を求めてゐたのであつた。そこへ桑港で失意して羅府に居を求めてゐた草人は偶然現はれたのだ。「支那の鸚鵡」「バット」「漂泊者」「海の野獸」「追放の女」「世界に告ぐ」「惡魔の獅子」「彼と女優」と言つたやうな映畫に、彼の存在が、だん／＼認められて來る端緖を開いた過去に、彼には彼としての苦勞があつたのであつたが。雪洲は「チート」で一度賣り出してから「火の海」「勝利の鬼」「黃泉の國」「怒髮天をついて」「沼」「蛟龍を描く人」「黑ばら」「ジャカーの爪」「阿修羅の如く」「かげろふの命」「朱色の鎖」「ラバタイユ」などの大作を、主演者として畫界におくつたのに較べると、彼は、今のところ助演者でしかないのである。

草人は今、松竹の映畫會社で何本かのものを創作してる。これに依つて日本的に彼の位置はどう確立されるか。彼の藝術には濃い東洋人的な味がある爲めに、小さな斷片にも光がある。雪洲は、米人俳優の幾人かを同伴して歸つて來るのだときいた。雪洲プロダクションは果してどんな作品を世界におくり出すか。これは全く未定である。二人とも、もう名優と言はれてよい年配だ。二人とも後繼者をつくつてよい頃だ。日本にとまるにしても、アメリカへ歸るにしても、私は彼らに世界的な名優を日本人の中から出す爲めにこれからは指導者の位置に立つてもらひたいことを希望しておく。

街上風景

廣津和郎

教育亡國とメリンス屋

飯田橋から溜池の方へ行く電車に乘つてゐたら、牛込見附から一人の四十二三歳の男が乘つて來た。一見して商店の旦那と云つた風で、少し神經質ではあるが、瘦せぎすの美しい顏をした男だつた。日和下駄の柾目の具合、無地の羽織の紐、その他の好みが、地味で、目立たぬ中に、なかなか凝つた趣味を見せてゐた。

電車には八分目程の乘客があつた。その男は丁度私の筋向ひに腰を下ろした。そして神經質な、一寸凄味を帶びた眼で、ぢろりと車内を見廻した。

電車が新見附を出ると同時に、その男は持つてゐた風呂敷包の中から、謄寫版で半紙に刷つた印刷物を取り出した。そして

「さあ、皆さんに一枚づつこれを進呈するから、讀んで見て呉れ給へ。——これは目下の社會の重大問題だ」そんなことを云ひながら、彼の兩隣りに腰かけてゐる人に、その刷物を配り出した。瘦せて、喉佛などの飛び出してゐる男に、時とすると吃驚するやうに太いバスの聲を出すのがある。身體は瘦せてゐても、腹は靜座か腹式呼吸で鍛えてある、と云つたやうな事を思はせるバスの聲——底力のあるあの聲だ。この男もさういふ聲の持主だつた。細い頸に、喉佛が尖つてゐて、聲を出す度に、その喉佛の動くのが際立つて見える。そしてかういふ質の男は姿勢がいいもので、腹を突き出し、背をぐつとそり返らしてゐる。瘦せて、腹を突き出して、太い聲を出すから、又へんに傲慢にも見える。

「大分學生諸君が乘つて居られるが、學生諸君には殊にこれを

讀んで貰ひたい、又父兄もうかうかと子供を學校にやつてさへ置けばいいなどと思つてゐては駄目だ。一つ大いにこれを讀んで參考にしてくれ給へ。――さあ、これは教育亡國の歌だ』

彼はそんな事を云ひながら、彼の向ひ側に坐つてゐる乘客達にもそれを配り出した。その刷物は人々の手から手に渡つて行つた。みんな電車の退屈まぎれと、その男の威壓的な態度に興味を持つてか、それを讀み始めた。

私の手にも一枚配られたので、私もそれを讀み始めた。題は『教育亡國の歌』と書いてある。そして七五調の今様風な文章で、達者に書いてある。

『日本の子供は氣の毒だ』と云ふ文句を冒頭にして、一に教育二に教育、小さな頭に絶えず襲つて來る試驗地獄、それで一體何が出來上るかといふと、用事の手紙一つ書けない大學生が出來上る。土地や田畑を質に置いて、大學を卒業させて見れば、意氣地のない、何ひとつ出來ない高等遊民が出來上る。親のなけなしの金をしぼつては、カツフェエ通ひの莫迦青年が出來上る。やれ、スポーツだ、運動だと云つて、騒ぎまはるが、『走るは馬にまかせて置け』で、到底駈けつくらでは馬に敵はない。……

さう云つた風で、その文句はなかなか痛烈である。日本の今の生活程度で、かう猫も杓子も大學に入れるといふ事は出鱈目であるといふこと、教育、教育、教育で、税金を一般の人間もしぼられてゐるが、こんな事をしてゐたら、今に教育で國が亡びてしまふこと、社會は一日も早く目覺めて、この莫迦々々しい無駄を省いて、もつと何とか人間の使ひ道を考へ、國民の負擔を輕くし、もつと地味に日本の百年の計を立てなければならないこと……

全體の歌の意味はさういふ意味である。

私は讀み終ると、微笑しながら、その男の方へ眼をやつた。彼の云ふ事はなかなか肯綮に値してゐる。自分は大分前のことであるが、『大學生と從姉妹』といふ文章を書いたことがある。この知識階級の洪水の始末をどうしたらいいかといふ事は、今の知識階級のいろいろな苦難を知つてゐる人間は、誰でも考へてゐることである。――併しこのかたぎな商店の旦那風の男が態々今様風の歌に作つて、電車の中でこれを乘客に配布してゐるといふことは、何と云つても物珍しい現象だつた。一體この男は何ものなのだらう。あんな風な、直接今の知識階級と關係のない風態をしながら、而も熱心に、かういふビラを撒いてゐるといふことは、餘程變つた人物に違ひない。

『大體に於いて、僕も君に賛成だ。自分はこんな風に彼に向つて

云つて見たい氣も一寸起つた。併し別段云ひはしなかつた。——日本人風の澄まし方が、自分の心にあつたためかも知れない。——それで唯興味をもつて、微笑しながら、彼の方を見てゐた。

彼はビラを一通り配つてしまふと、自分でもその一枚を擴げて、それを默讀してゐたが、やがて電車が赤坂見附に近づいた頃になつて、再び風呂敷包を開けた。そして中から別の一束のビラを取り出した。

『さあ、諸君、もう一つ諸君に讀んで頂きたいものがある。——それだけ讀んで貰つたんでは仕方がない。これがなかなか重要なんだ』

彼はさう云つて、指の先をちよい、ちよいと甜めては、そのビラをさつきと同じやうにして配り出した。それは人々の手から手へと渡つて行つた。そして私の手にもその一枚が配られたので、私もそれを讀み始めた。

今度のは今樣風に七五調に行を離して刷つてはなく、ベターッ面に刷つてあつたが、その文句が淸元もどきで、甚だしく意氣である。何でも神田祭になぞらへて、築土八幡の祭禮から書き出してある。イキな藝者が褄を取つて歩く姿や、町の娘達が打ち集る有樣、それからイナセな町の若者の祭姿……前の『敎育亡國の歌』とは恐ろしくその趣を異にしてゐる。一體これは何を歌ひ、何を語らうとしてゐるのだらうと思ひながら、私は筮者なその文章を讀んで行つた。さうしたら、最後に行つて、やつとその意味が解つた。さうしたイキな藝者や、町の娘や、イナセな若者達が、をちこちから聞き傳へて、神樂坂のメリンス屋に集まつて來る樣を歌つたものなのである。——つまりそれは神樂坂の或メリンス屋の廣告だつたのである。

私はをかしくなつて來て、今始めて解つたメリンス屋の主人であつたところの彼の方を改めて見た。彼は前のビラを配つた時と同じ澄まし方で、傲然と腹を突き出し、背を反り返らし、そして喉佛を際立つて尖らせながら、前と同じやうに今配つた一枚を自分の手に持つて、それを默つて讀んでゐた。そして山王下の停留場まで來ると、殘つた風呂敷包を小脇に抱へて、悠然として電車を下りて行つた。

今樣風の敎育亡國の歌——淸元もどきのメリンスの廣告——この變つた宣傳法は、やつぱり今の時代の街上風景にふさはしいものの一つに違ひないと思ひながら、私は動き出した電車の中から、彼の後姿へ尙も微笑を送つてゐた。

市區改正と目的意識

柳原で或料理屋をやつてゐる青年――それは東京でも最も古い店の一つで、その青年は大體は文學志望だつたが、父の死後、止むを得ずその歴史ある店の後を繼いだのだ――が私にこんなことを話した。

『柳原では今度の市區改正で電車が通らなくなりました。それはあの軒を並べてゐる古着屋達が、電車を通さないやうにすることを、みづから望んだのです。通さないやうにして貰ふために、市に向つて運動までしたのです。その結果、電車が望み通り通らなくなつたら、豫想に反して、あの邊一帶に商賣が乾上つてしまひました』

私はその話を興味をもつて――といふと、話した人にも、その土地の古着商にも氣の毒であるが――聞いた。何故かといふと、一つの賑かな通があるとすると、その通の道幅が擴げられたり、更にそこに電車が通されたりすれば、その兩側の商店が商賣をし難くなるといふのが、今まで一般的な定則と云つて好かつたからである。市中到るところ、度々の市區改正で、町幅が擴げられたり、電車が通されたりする度に、『此處も駄目になりました』といふ歎聲を、その兩側の商店から聞いた事が度々あるからである。

そこで、その定則の逆を行つたら、今度はうまい汁が吸へるに違ひない、と柳原の商人達は考へたわけなのである。それだから、今まで電車の通つてゐた通を、今度の市區改正で、みづから電車が通らないやうにして貰つた。電車の通らないで賣れた通が、電車が通るやうになつて賣れなくなつたといふのが一般的法則だとしたら、電車が通つてゐて賣れた通は、電車を通らなくしたら倍賣れるに違ひない――かう思つたわけなのである。

ところが、その豫想は裏切られて、電車を通らなくして貰つたら、まるで商賣がなくなつたといふ。――私は人間の目的が、始終自然から逆襲される例として、この話を興味深いものに思ふ。

今度の東京市の復興に伴ふ市區改正では、到るところにかうした喰違ひが生じたことと思ふ。私は東京に生れ、東京に育つて、これで四十年間この土地に住んでゐるのであるが、その四十年の間には、隨分市内の盛り場の移動があつた。麹町の通が如何に寂れて行つたか、赤坂の一つ木の通が如何に寂れて行つたか、本郷の通が如何に寂れて行つたか、その經路が朧げながら、私の記憶にある。

その盛り場になつたり、寂れて行つたりする有樣は、一方から云ふと、人爲的である。と共に、人爲的な動機の上に立つての自然的法則に支配されてゐるといふ點も甚だ多い。一日に云ふ

と、人爲と自然との交錯した甚だ複雜な現象がそこに見られる。

專門家達に見させたならば、そこに我々素人が考へるよりも、もつと緻密な計算があり、又我々の解らないやうな微妙な法則が　その現象から割り出されてゐるのであらうと思ふが、一寸した一つの市區改正がもたらす影響といふものは、實際豫想外に大きく、又廣いといふ事を、我々は度々見てゐる。極めて一般的に誰でもが氣がついてゐる事だけを云つても、目拔きの通の町幅が擴げられる。これは交通その他の關係で擴げられるのであるが、町幅が擴げられると、その町の裏側の、云はば九尺二間風の家が取拂はれる。ところが、この小さな九尺二間風の家々の住人がその町の最も大きな購買階級である。この購買階級がそこに住へなくなるために、郊外にと移轉して行く。それだから一つ木の通よりは、青山の通の方が購買階級を持つやうになり、青山の通よりは道玄坂の方が更に購買階級を持つやうになる。

と云つて、目拔の通が市區改正をしなければいいだらうと云つても、それはさういふわけに行かない。盛り場になれば、どうしても、交通上からも、體裁上からも、その他いろいろな點からも、いつかは道幅を擴げなければならなくなる。そして購買階級を他に移轉させる。そして寂れて來る。發達して、その頂點まで行つて寂れて來る。――もつとも、歷史や時代の推移はかくして行はれてゐたのであるが。

私は散步によく本鄕通を通る。私は商店の貸家といふ札に、非常に興味を持つ。そこには町の盛衰が端的に現れるからだ。此二年程の間に行はれた市區改正は、本鄕の通の盛り場を、非常に變へて來た。もつとも、三丁目から帝大前にかけての店々はまだ品物が賣れる。だから、たまに貸家があつても、『雜作賣』といふ但し書がついてゐる。けれども三丁目から一丁目の方へ行くに從つて、その寂れはひどい。私はつい最近も、三丁目から一丁ほど一丁目の方へ行つた左側の、相當に立派な店の貸家札を興味を以て眺めた。その店に貸家札が貼られた時は、最初は『雜作賣』としてあつた。無論數年前には、四五千圓の權利があつたに違ひないと思はれるやうな店である。ところが、いつになつても借り手がない。そこで二ヶ月程すると、その雜作賣といふ字を、墨で消した。併しまだ借り手がない。そこで又一ヶ月程して、今度は全然新しい紙に、雜作附貸家と書き變へた。

……

私は時々市ヶ谷の秀英舍の側まで行く用がある。市ヶ谷見附の側から、狹い薄汚い通を通つて行く。兩側に田舍町のやうに

ほそぼそとした小さな商店が並んでゐる。ところが、あの邊の町に時々貸家があると、それが小さな店でも、「雜作賣」と書いてある。——本郷一丁目の盛り場らしい目拔きの通に、權利がなくなつてしまつたのに、秀英舍前のあの取殘された田舍町のやうなところに權利があるといふのは、珍現象のやうに思はれるが、併しどちらが購買階級を持つてゐるかといふ事を考へると、『成程』と合點が行く。本鄉一丁目では一體誰が物を買ひに來るかと考へても、買ひに來る人の顏が浮んで來ない。ところが、秀英舍前の細いゴミゴミした通の附近には、秀英舍の職工を始め、九尺二間、或はそれよりも少し氣の利いた家々に住んでゐる人々等のはつきりした購買階級がある。

今や東京市内の土地の價値といふやうなものも、根こそぎ變化しつつあると云つていい。下手な傳統的な町の名などで、この大勢をせき止める事など出來ないらしい。實際目拔きの場所の立派な商店に權利も何もなくなつたのに、屋敷町の一寸した小さな角店の煙草屋などに、確固とした權利があるといふのは甚だ愉快な現象ではないか。——この變化は又人心の變化だ。おちつくところまで落ちついてしまふまで、町も店もいつ安心してゐられるか解らない不安と懊惱の驅足だ。

私はその意味において、文藝春秋がやつた東京市の復興座談會といふ記事を甚だ面白く讀んだ。その中でも歌舞伎座の横から東坂の方へ向つて走つてゐる例の四十間道路についての論爭が最も面白かつた。大阪のさういふ方面の專門家の某氏が、「東京市ではあんな道路をこしらへて、あの兩側に立派な商店街が出來るつもりでゐたらしいが、一體どんな人間がそこに物を買ひに行くと豫想したのか？」と語つてゐるあたりは、殊に私には面白かつた。(その同じ人があの四十間道路の兩側に官廳を皆持つて行つてしまへといふのも面白い。)購買階級を考へずに、商店街などはあり得ない——併しそこまでの細かな豫想は、大東京の復興といふ事を最初考へた時、なかなかつかなかつたに違ひない。人爲と自然との複雜した交錯、合致、離反のこの數學を、何年か前から割切つて答を出すといふことは並大抵なものではないらしい。有らゆる町の有らゆる市區改正が、互にいろいろな影響を働きかけ合つてゐる。隨分好い頭でも歴史の歸結が割切れないとすれば、あの四十間道路に大商店街を豫想した誤算も、まあ大目に見なければならないかも知れない。

自分のやうな素人考で云へば、東京市中の各商店の救ひの道は、市内に何階建かのアパートメントが澤山出來て、郊外にのがれた人々が、そこに又歸つて來るといふ風にでもしなければうまく行くまいと思ふ。つまり横へ横へとはみ出さして行つた時

買階級を、容へ容へと縦に積み上げさせるのである。さうして土地一坪あたりの人口をもう少しふやすやうにでもしたら、店と店とが互に食ひ合つてゐる今のやうな状態が少し緩和されるかも知れない。——もつとも、一方デパートに或種の制限を加へることも必要であるが。

前に戻つて、柳原が電車を通らなくして、どうして寂れたか、何故失敗したか、その細かい原因は私には解らない。併しその原因の一つには、あゝした古着店などは、大衆が電車の釣革に掴まりながら、絶えずあの前を通つて行くことに依つて、始終人の眼にもつけば、又記憶もされてゐるのではないかと思ふ。——柳原に行けば古着屋がある——かういふ東京人が昔から持つてゐた一般的知識も、近來のやうに住民の移動の多い東京市では、だんだん人に忘れられて行く。始終眼についてゐれば眼についてゐる人だけにも忘れられずにゐるものの、眼につかなければ忘れてしまふ。——古着は柳原に行け、などとはそろそろ遠い昔の傳説見たやうに人々に思はれ始めようとしてゐるのではないか。それよりもデパートの既成品の方が、人の頭にはつきり印象してゐるのではないか。

併し何と云つても、市内盛り場の推移は推移である。それが人爲的に來やうと自然的に來やうと。こんな場合に過去の傳統に執してゐるものはみんな滅びるより仕方がないのだ。有名な盛り場の屋根々々に、ペンペン草が生えたつて、それは仕方がないのだ。

いや、かう云つて來ると、これはどうやら市區改正と東京の盛り場の移動といふだけの問題ばかりではないらしい。これと同じ程度の變化は、この一二年、有らゆることの上に來てゐる。

次々に起つて來るいろいろな現象、それを一寸でも保守的に見たら身のつまりだ。直ぐ頭にペンペン草が生えるだらう。そこでどんな現象でも、根氣よくその現れの原因、結果を見守らなければならない。投げられた一つの石が傳へる波紋、その影響、人爲と自然との合致、離反、交錯——近頃の言葉に飜譯すれば、目的意識と自然發生との合致、離反、交錯——それは複雜限りなき計算を要する問題だ。

目的で物を作る。作られたものはそれ自身の進みを始める。——そこから起る千變萬化は、目的意識一點張りでも割切れなければ、自然發生一點張りでも安閑としてはゐられない。そこで我々に無限の興味を與へるのである。（三月二十二日）

新著月評

中歐諸國の土地制度及び土地政策

澤村康著

河西太一郎

先に力作『小作法と自作農創定法』を著述せられた澤村康氏は玆に又菊版七百頁の大著『中歐諸國の土地制度及び土地政策』を發行せられた。我々は先づ氏の努力精進に對して敬意を表したい。

『本書は獨逸、オーストリア及びハンガリー三ヶ國の土地制度及び土地政策を論述批判したものである。』(はしがき)著者が何故に此の三ヶ國を一纏めに取扱つたか。著者の見るところによれば、此の三國はその土地制度に於て又その土地政策に於て著しくその特色を共通にしてゐるからである。卽ち著者は結論に於て云ふ「中歐諸國の土地制度は(一)土地所有の分配が不均等で大所有地が甚だ多く又は相當多く存在すること、(二)農業經營は自作を主とし小作を從とすること、及び(三)大農場小農場等各規模の經營が混在し對立せることの三個の著しき特徵を有するのであつて、其の結果、其の土地問題の重點は決して、我國に於けるが如き小作問題の形式をとることなく專ら農地耕放化の問題農民の土地饑餓の問題又は農業勞働問題等の形式を以て現はれることを知るのである。卽ち此の土地制度の近似せることがやがて之等の國々に於ける土地問題の性質を同一ならしめる所以となるのであり、同時に其の土地政策の目的及態樣をも大體に於て同樣ならしめる所以となるのである。』(六九四頁)然らば之等諸國の土地政策の共通點はどこにあるか『第一は凡ての大所有地や大農場を悉く收用し分割するの手段に出でず單に或る程度まで之れを收用し得る旨を規定するに止めて、成るべく豪農階級の既得權を損傷せざる樣にせること、第二は收用地に對しては時價通りの充分なる賠償を支拂つて決して被收用法に損をさせぬ樣にせること、及び第三は以上の結果として內地植民の效果が甚だ微弱であつて、たとへ之れを豫定通りに進行しても決して土地所有の分配、狀況を根本的に變革することなく大所有地や大農場は依然として其の舊態を存續し唯僅かに其の一部を削つて若干の小農地(正確に謂へば過小農地)が限定されるに過ぎないことである。要するに大地主や豪農階級の利益を害せざる程度と方法とに依つて內地植民を實行せることが此の中歐の三ヶ國に共通せる土地政策の根本的特色である』(七〇二頁)以上が卽ち著者が中歐三ヶ國の土地制度及び土地政策を本書に一纏めにし、取扱つた理由であると共に又實に本書の總括的結論に相當するのであつて(これ筆者がやゝ長きに亘る以上の引用を敢てしたる所以)、要するに本書は以上の如き結論に到達するまでの過程の詳細なる解說に外ならないのである。卽ち筆を遠く農民解放の時代に起し、其後の土地制度及び土地政策の推移を追ふて戰後の最近時にまで及んでゐるのであつて、豐富なる資料とその取扱の周到なる態度とは本書の價値を不動のものたらしめてゐる。願くば著者が更に他の國々にも手を擴げられ、世界の比較的重要なる國々に亘りその土地制度に關する同樣に周到明なる研究を完成さるゝならば裨益す

ところ甚だ大なるものあるべきは筆者の信じて疑はざるところであり、敢て著者に寄贈する所である。

だが筆者が深甚の敬意を表し得るのは本書に於ける事實に關する敍述の部分であつて著者によるとその批判に至つては必らずしもそうではあり得ないことを最後に一言して置くことは却つて著者の努力に酬ゆる所以であるかも知れぬ。先づ第一に、著者の批判は形式的乃至主觀的であつて（此點に就ても文句あることも次に述ぶるが如し）、實質的乃至、客觀的批判に缺けてゐることを指摘しなければならぬ。この筆者の用語は可なり曖昧の感があるから、具體的に之れを例示するならば著者は中歐三ケ國の土地政策を總括的に批判して全體として、『土地政策は相當各種の方面に亘つて居るけれども程度が甚だ控へ目であり、及び特にハンガリーは最も土地制度の不良な國であるにも拘らず其の土地政策が最も不備であり保守的である』（七〇三頁）と述べてゐられる。卽ち『その程度が甚だ控へ目』であるとか、『最も不備であり保守的である』とかの形式的乃至主觀的の批判があるだけで何故に之等の國々ではかゝる程度の土地政策が行はれたか、又行はれざるを得なかつたかの經濟的社會的政治的必然性の客觀的把握が有されてゐないのであるが、かゝる方面の實質は批判こそ遙かにヨリ有意義であり且つ教訓的なのではないか。第二に、著者自身の批判の見地が明確を缺くことを指摘してもいゝであらう。著者は土地政策指針としての內地植民政策には賛成してゐられるやうであるが、或る所では又農地國有論にも左擔してゐられるやうである。例へば『殊に農業社會化の立場から今や農地國有論が有力なる土地政策として論議されつゝ有る場合に、折角の國有地を強いて農民に拂下げるが如きは時勢に逆行する反動政策と謂ふべきでは無からうか』（二〇三頁）と論じてゐられるが如きそれである。これは少しオカシイと思つて讀んで行くと果然最後の所で、戰後の土地政策の意義を要約して、『一言にして謂ふならば土地を耕作する者の權利を確保し、土地と耕作者との關係を一層緊密ならしめ、土地の獨占を打破して土地の社會化を圖る爲めである。然らば土地の社會化は何を目的として行はれるのであるか。謂ふまでもなく夫れは農業社會化の爲めである。卽ち今や世界の土地政策は農業社會化の旗の下に意識的に其の進路を進めつゝあるのである』（七一〇頁）と論斷されてゐるのに逢ふのである。だがかゝる見解は畢竟概念の混亂の表現であり、政策の本質的意義に對する不洞察の結果でなくして何であらうか。內地植民を中心とする諸種の土地政策は要するに耕作者自身の所有權乃至耕作權の確保を意圖するものである以上結局土地乃至農業の個人化に歸するものであつて、土地乃至農業の社會化とは凡そ正反對のものであり、又その政策の歷史的意義から云へば畢竟現社會制度の維持を企圖するものであつて、それ以外の何ものでもないのである。兎もあれ、社會化と云ふ以上は何等かの意味に於ける共同化を意味しなければならない筈であるのに、如何なる意味に於ても共同化とは反對の個人化に終るべき內國植民其他の諸政策の目的を『土地の社會化』にありとし、その點に之等の政策の歷史的意義を見出さんとせらるゝが如きは甚しき、概念の混亂であり、洞察の混濁であると評せざるを得ない。敢て著者の再考を煩はしたいと思ふ所以である。旣に豫定の紙數を超過してゐるので所論甚だ意を盡さす、且つ著者に對して禮を失するとこ

ろ大なるものあらん、著者乞ふ之れを諒せよ。

(改造社發行)

協調會編
最近の社會運動

前田多門

協調會同人の大共著、「最近の社會運動」を見てまづ第一に感じたのは、矢張り協調會はあつた方が良かつたといふことである。チョット見渡した所で、協調會ならではこんな大きな仕事は出來ないと思はるゝからである。若し協調會が創立以來、色んな道草を喰はずに專念一意かういつた方面の研究編纂にばかり沒頭して居たら、もつと社會に大きな貢獻が出來たものをと、思はず愚痴が出て來る程、それ程大きな述作である。

協調會十週年記念としてこの「最近の社會運動」の編述が出來たのだと言ふ。善い思ひ付きだ。しかし內容を見ると寧ろその標題は謙遜に過ぐるかと思ふ。勞働問題の百科辭典だと名づけても大した誇張にはならぬやうである。實際また頗る浩瀚な、千三百九十頁にわたる大册である。

全體を二編に別ち、本邦最近の社會運動と、海外に於けるそれとに區分してゐるが、勿論前者卽ち本邦のことに記述の重點が置かれ、頁數で言ふても三分の二以上がこれに費され、更に參考資料といふやうな意味で第二編が海外主要國に就て本問題を取扱ふてゐるのである。

第一編本邦の部は二十三章に別かたれる。初めに豫備概念を與ふるために、第一章に「本邦社會運動前史」を置いて、明治維新以來社會運動黎明期に於ける主要現象を說明し、第二章には運動の背景たるべき「產業及勞働事情」に就き可成り詳細な記述がある。卽ち紡績製絲業から初めて印刷業に至る十二業目に關して一々その勞働狀態を明かにし、次いで家內工業の狀態を紹介し、終りに一般的な勞働者の生活狀態や賃銀對物價の趨勢を論じ、更に監獄部屋問題、朝鮮人勞働者にまで及んでゐるが、勞働運動を上辿りなものにしないためには、是非この靜的な勞働狀態調査が必要であり、この上に明確な認識を有つべきことは一般に慫慂するためからだけでも、この章に編者が相當の努力を拂ふたことを多とするのである。若し慾を言へば最近の緊切問題たる失業狀態の檢討を玆で試みて貰ひ度かつたのである。

そこで愈々問題の本論に入つて、第三章には勞働組合運動、第四章勞働爭議、第五章小作爭議、第六章農民運動、第七章水平運動、第八章協同組合運動、第九章勞働委員會制度、第十章無產政黨運動といふ順序で筆を進め主として過去十年間に於ける眼まぐるしき勞働運動の展開過程を極めて具體的に敍述してゐる。さうして第十一章以下は更に方面を擴げ右傾運動や既成政黨の動向さては社會運動に對する取締のことを說くかと思へば、婦人運動、勞働者運動、社會事業といふやうな問題に對しても、解說を與へてゐる。特に第十七章の社會行政及び社會立法は第二章の勞働狀態と相俟つて、問題全體に對する背景的智識を完全ならしむるに役立つ所多い。たゞこの邊を通覽して感じたことは、社會運動と實際政治現象との關係に於て今一息突つ込むで貰ひ度かつた。一例を言へば、普選實施の經過記述なぞはたとへ社會運動者がその主演者では決して無かつたにせよ、省略を許すべからざるものであつたらうと思ふ。

第二編海外最近の社會運動は十六章に分かたれ、第一編同様、勞働事情、勞働組合、勞

働爭議、勞働法制といふやうに、事項別に依て資料が整理せられ、最後の章は國際勞働會議を以て結むで居る。何れも章の初めに要約された概說を揭げ、次いで英米佛獨その他主要國の各箇に就き說明を與へて居る。或る問題に就て外國の例はどうかと窺いて見るものに取り手取早く重寶な資料を提供するのである。

本書全體を通じての特色は、その純客觀的な敍述にある。時にはもう少しエヴアリユエーションが働いても良いではないかと、稍もどかしく思はれる點も無いではないが、この書本來の使命たる一つのレキシチンといふ見地からすれば、却つてこの方が宜しいのであらう。文章は決して乾燥無味といふべきでは無い。先づ米の飯といふ所である。

特筆を要するは卷尾七十九頁に渉れる大索引(人名別及び事項別)である。この親切な索引故に參照書としての本書の價値は充分に發揮せられるのである。しかし、たゞにこの索引のみならず、全體に渉つて監修の眼が行屆き手を拔かずに丹念に資料を蒐集配列したことは敬服すべきである。

住谷悦治著

經濟學說の歷史性・階級性

石濱知行

かつて我國に於いて、マルキシズムが旺然として興り、學界に侵入せんとしたときに、既成學界の席につらなるあるものたちは、自己の立場を擁護し、マルキシズムを排擊せんとして、種々の策を講じた。文部省もまた大事件なりとして、我國の特異性を高潮するために新らしい講座を大學に新設し、その他いろいろの手段を講じてその主張を一般社會に弘布せんとした。その當時、ある一派の經濟史家たちは、理論を排斥して、考證をのみ重んじ、考證による歷史的研究をもつて、我國の特異性を立證せんとしたことがある。河上博士は、我國に於ける歷史學派の擡頭と題する論文を社會問題研究誌上に發表して、マルキシズムの立場から、歷史學派を排擊した。この論爭は、それ以後歷史學派からする力づよい應酬もなくして、從つて發展を見なかつたやうである。しかし、かゝる思想は、今もなほ社會に潛在してゐることはたしかである

新刊紹介

能率增進時代(報知新聞經濟部編)　我が產業界の主要部門についての合理化乃至能率增進法の實際を、その各部門の權威が執筆せるものを收む。嘗て報知紙上に連載されて好評を博せるもの。(四六判二七六頁、定價一・五〇、千倉書房)

文明ハ何處へ行ク?(上田杏村著)　本書に於ては複雜な現代文明の樣相を分析し批判しそしてそれらに對する一の統一的立場を獲得せんとする意企が見られる。特に機械と藝術と社會經濟生活とイデオロギーと社會改造論との問題が、全般的にいかに統一せらるべきかに力點がおかれて居る。行文平易にして興味ある讀みもの(四六判三三八頁、定價一五〇、千倉書房)

階級論(小池四郞著)　(四六判一二五頁、定價五〇、クララ社)

文藝年鑑(文藝家協會編)　一九三〇年版、過去一ヶ年にわたる文藝の各部門に於ける概觀を示し、座右において重寶なもの。(四六判四七八頁、定價、一、七〇、新潮社)

豌豆になつた女(杉浦伊作著)　詩集　(新四六判八七頁、定價、九〇、銀沙社)

龍溪矢野文雄君傳(小栗又一編)　嘗て慶應義塾教師、大藏省書記官、報知新聞社長、清國駐剳公使等々であり最近大每副社長の職を辭せる翁の八十年間を傳ふ。記述詳密にし

たゞかゝる考は、歴史學派一般がさうであるやうに、理論的の背景がないがために、表面に現れ來つて理論的鬪爭をなすだけの力がないのである。考證、統計、數字の羅列のみが唯一の眞理であるとする歴史學派が、今日、プルジョア經濟學よりするも、プロレタリア經濟學よりするも、成立し難いことは明白である。

思ふに、この一聯の日本歴史派經濟學の主張者たちは、ドイツの歴史派經濟學の何ものなるやも知らず、たゞマルキシズムの勃興と文部當局の巧みなるタクティックに應じて、一時の踊を踊つたにすぎないのである。

がしかし、日本歴史學派も、ドイツの歴史派經濟學が『國家の統制および行政の必要』から『その目的のために大學で經濟學を教へる必要に迫られて』(シュモーラー)おこつたのと、同じ理由で、おこつたといふことは甚だ面白い暗合と言はなくてはならぬ。たゞ、ドイツ經濟歴史學派に屬する學者たちは、日本歴史學派の學者たちより大に偉かつたがために、後者その主張をつゞけ得ざるに反して、前者はとにかく一つの學派として存續し得ただけの力と執拗性とを有したのである。

な人、同志社大學教授住谷悦治君近頃一書を刊行せられた。題して『經濟學說の歴史性・階級性』といふ。同君は、さきに『唯物史觀より見たる經濟學史』なる著を發刊せられてマルキシズムの立場から、フキジオクラット學派、古典經濟學を批判せられた。新著は、思ふにそれにつゞくものであらう。主として歴史學派とオーストリア學派とを批判の對象としてゐる。

すなはち第一部は歴史學派を檢討したもので先づ歴史學派およびそれにつゞく新歴史學派の主張を紹介し、つゞいてそれを批判してゐる。『すなはち、歴史學派の特質は一面に於いてイギリスその他先進資本主義に對するドイツ資本家國家を防衛するために、歴史的方法によつて、古典學派の方法論に攻擊を加へ、他面に於いて、内外に擡頭せる社會主義理論の克服のために、その上に遡つて古典學派に挑戰したところに見出すべきであらう』(第五十一頁)。次に、歴史學派につゞいて、それを若干訂正した新歴史學派の主張を檢討してゐる。と同時に、『かくて彼等(新歴史學派を指す)の社會生活に於ける倫理、道德を重要視する思想は、當然に、經濟生活上の分配問

て興味あり、整備もその宜しきを得て居る。(菊判三七六頁、定價一、六〇〇、希望閣)

カフエー(高村歸一著)　社會惡の報告者としての立場に於てかかれた嘗ての諸述作を收む。近代的カフエーの實情と其内部に織り込まれて居る社會惡と人間苦の諸相をここに見ることができるが、又同時に明るい面白い讀物でもある。(四六判三五七頁、定價一、五〇、文化生活研究會)

獨逸文學研究(東京帝大獨逸文學會編)　その第三輯。主として獨逸中世文學に就いての諸研究を收む(菊判二八七―四三八頁、定價一、〇〇、第一書房)

生産經濟學より信用經濟學へ(土田杏村著)　著者が過去數年に於けるダグラス派經濟學說研究の一集積、彼の經濟學說が全般にわたつて詳密に解說されて居る。(菊判三五〇頁、定價二、五〇、第一書房)

ロシヤ革命と演劇(マルコフ著、杉本良吉譯)　ロシア革命が演劇の上に働きかけた樣相、及び現代に於けるその成果は、本書によつて要領よく知識される。(四六判二五八頁定價一、〇〇、叢文閣)

唯物史觀序說(プロレタリア科學研究所編)　唯物史觀の一般的定式を個々の文化の領域にわたつて特殊化し具體化せんとせる試みをもつた、佐野學氏以下六氏の、諸論稿を收む(四六判一九二頁、定價一、〇〇、鐵塔書院)

左翼戰線と宗教(三浦參玄洞著)　無産階

題についての公平の觀念と結びつき、社會政策となり、社會改良の提唱となつて現はれるに至つた』(第二十頁)のであるとして、新歴史學派の學者たちによつて、創立せられたドイツ社會政策學會の沿革、性質について研究批判してゐる。その後に、このドイツ社會政策學會を摸倣したとも言ふべき日本社會政策學會の成立沿革、性質について、甚だ興味ある長い研究を發表してゐる。この日本社會政策學會の研究は、本書附錄中にあるラーネツド博士研究とともに、日本社會史研究の上に看過すべからざるものであらう。

第二部は、オーストリアの限界效用學派を批判の對象としてゐる。金融資本の發展とともに生産に關係しない、個人主義的な、消費を主とする利子寄生者が發生する。オーストリー學派は實にこれらの新階級のイデオロギーを代表し反影した學説である。著者は、かゝる學説の社會的原因を論じ、それの理論的分析を行ひ、オーストリア學派は、(イ)主觀主義・個人主義、(ロ)非歴史的觀點、(ハ)消費に基礎をおくものなりとしてゐる。

第三部は、前二部の所説を補正する三つの論文をかゝげてゐる。第三の論文、土方博士舞出教授論爭所感は、從來の日本學界に於けるマルクス學説對ブルジョア經濟學説の論爭歴史の鳥瞰的觀察である。

——以上が、本書の輪廓的紹介である。最後に本書を讀んでの友人としての若干の苦言を言はして貰はう。第一、批評をいそがれる前に、いますこしく各經濟學説そのものの研究に沒頭せられんことを希ふ。本書に於いて學説の紹介に誤りがあるといふ意味ではない。本書を讀んだ僕に、著者の「學問的情熱」が切りに感ぜられるからである。僕は、本書六十二頁にあるブハーリンが『利子寄生者の經濟學』を書く前に如何にオーストリア學派そのものを研究するために苦しんだかの所を讀んで實に感心した。第二、本書に所々散見する不嫻情的な言葉。例へば三百二十六頁の『社會主義運動の勃興の氣運に遭ふや、あはたゞしくも北昤吉氏が』三百二十八頁の『舞出氏の一撃に、あはたゞしくも矢繼早に……』等は、願くば早く清算してもらひたい。著者もつて如何となす。

紀と背離する宗教はいつの時代に於てもその生命を失ふといふ立場にあつての、從來ものせる宗教對階級に關しての諸論を收む。(四六判三一一頁、定價一、三〇、大鳳閣書房)

コンナのが(沼田利平著) 詩集。四六判二一八頁、定價一、五〇、弘榮社)

日稼哀活(吉田英雄著) 七歳にして父を喪ひ漂然として上京した著者が、僅かさ八大を振り出しに辞職一枚、身を萍の日傭勞働者におき、黎明の巷にその日の仕事を求め、星の光にその日の賃銀を數へたどん底生活のあがき三十ヶ年にわたる生活記錄から得た結實である。(四六判六九一頁、定價一、八〇、平凡社)

鐵の流れ(セラフイモーウイッチ著、藏原惟人譯) 革命後に於けるプロ文學の最も大きい收穫の一つ。南露北カフカズに於ける革命的鬪爭を描く。(四六判三三一頁、定價一、八〇、叢文閣)

勞働問題研究(北原安衛遺著) 農商務省に於ける官吏生活十一年間終始勞働行政の樞機に與つて居た著者が生前の諸論策を收む、(菊判四五九頁、非賣品、北岡壽逸編纂發行)

産業合理化の諸問題(不破倫三譯編) 主として最近數年間ドイツの諸雜誌に發表されたルピンシユタインの論文から、拔萃せるもので、專ら産業合理化が勞働者階級に加ふる直接的作用を說明せるものを收めて居る。(四六判一五八頁、定價、五〇、叢文閣)

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルデング五九〇區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)五五三五番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。
◇御註文の際は郵税をお忘れなく爲替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

結核の最新藥 ツベルケン

最新藥ツベルケンは强力な膽球溶解作用を有し、白血球を増殖して喰菌作用を旺盛にし心臟を害する事なく解熱し、食慾を催進し體重は増加し、盜汗及咯痰を輕減し、重症結核患者をして日一日と爽快に向はせます。

而も何等の副作用なく、併せて澱粉消化不良、胃酸過多症、之に續發する諸病に特效があり、最も榮養に注意を要する肺結核病者にとつては至上の福音です。

適應症　肺結核、肺尖カタル、結核性助膜炎、喉頭結核、淋巴腺結核、膀胱結核、副睾丸結核、痔瘻、及神經衰弱症不眠症等。

定價　一號（輕症用）五日分　二圓五十錢　十一日分五圓
　　　二號（重症用）一週分　五圓　十五日分　十圓

送料　東京市内　十二錢　内地十八錢　領土　四十五錢

古書賣買のお取次

「古書案内」は從來古文書、和本、錦繪等も掲品中に加へてをりましたが、何れも中には思はぬ高價な内容をお持ちのものがあり、再び求め難いものも含まれ少くありませんので、今後はこれ等の類に屬するものは一切お受けしない事に致します。

要するに賣買共に普通の古書のみお取扱ひ致します譯ですから、今の規定を御一讀の上どしどし御遠慮なく御利用ヶ願ひます。

規定

A、御紹介には送料實費又は通信料を添附して下さい。

B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。

C、商品は在庫僅一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後お手許までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。隨つて價格等も時には變更する場合が生ずる事も豫め御承知おきを願ひます。

D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、汚損の程度等を詳細にお書添へを願ひます。但古文書、掛軸等の如きは、現品を拝見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。

E、御紹介の宛名は、中央公論社代理部古書案内係」と明記して下さい。

ズボン吊兼用
保健整形帯

サツポーター

(一)ズボンを腰で輕快に釣り支へます。

ズボン吊の如く肩の凝りや、胸背の壓迫がなく、ゆるやかな氣分で常に居られます。

(二)姿勢を正しく、スタイルを端正に整へます。

座臥動作は自由で、姿をスラリと見せ、前屈みの人も姿勢の正しい習慣となります。

(三)胃の下垂を防ぎ、腸を保護し、腹力を強めます。

疲勞を和らげ、神經過敏に陷る事を防ぎ諸種の病弱の原因を輕減し、自然健康を增進します。

(四)執務も活歩も愉快に、活動力が盛んになります。

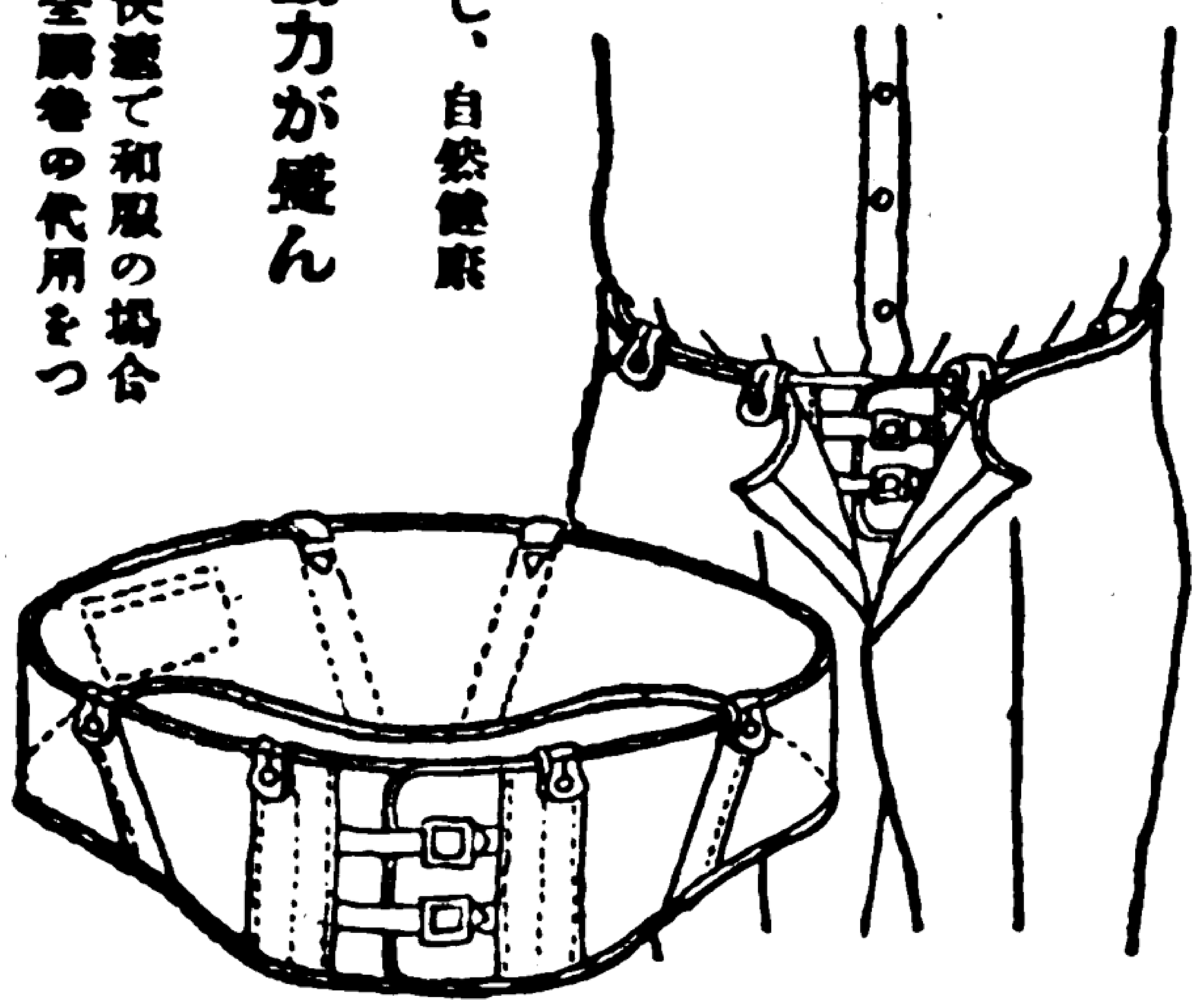
下腹、腰骨、脊柱等のシマリ工合快適で和服の場合にもよく、殊に旅行外泊の際は安全腹巻の代用をつとめます。

(特大)周圍　鯨二尺七寸中心　(大)二尺四寸中心　(中)二尺一寸五分中心　(小)一　一尺九寸中心

A純毛ネル地三圓八十錢　B混毛ネル地三圓二十錢　C麻地一重二圓五十錢

送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

◆**御注文には引き締めた腹廻り寸法をお報らせ下さい。**



經濟と實用とを兼ねた

替ズボン

新紋の候となりました。地方在住の方々のために、最も經濟的實用的な替ズボンを左記特價で提供致します。

高級ウーステツド	(ヒザ裏付)	八圓
優等黑及紺細セル	(同　)	七圓
上等黑及紺セル	(同　)	六圓
薄ラシヤフラノ	(鼠と紺)	五圓
實用及紺セル		四圓五十錢

特別提供品

スポーツ用白ギヤバヂン		二圓二十錢
園藝用スレン	(鼠と茶)	一圓八十錢

寸法				
大	腹廻り	鯨約	二・三五尺	股下　一・九尺
中	同	同	二・二尺	同　一・八尺
小	同	同	二・一尺	同　一・七尺

御註文には大中小の別と身長とを御記入下さい。(股下はークルブシ迄を計つたもの)

送料　東京市内　十二錢　内　地　十八錢　領　土　四十五錢

オーダーメード夏服上下

特價 三十圓 (三ツ組は七圓増)

◇洋服の裁縫を發表以來非常な反響で、各需要期には註文が殺到して、後からのお申込みは何としても少しづゝ遅れましたから、遠い方程お早目に下さるやう希望致します。

◇生地はポーラー、フレスコ、トロピカル等の上等品を多量に用意してあります。



洋服註文は代理部へ

◇從來の極端な流行から脫して、一番紳士的な、而も明るい感じの洋服を左の廉價で調製致します。

◇先づ生地見本を請求して、代理部考案の用紙に寸法を書入れて送れば、思ひ通りの型思ふ通りの寸法の服が、座りながらに得られる譯です。

◇お持合せの服をお送りになれば、その通りの大きさの服も作ります。

◇特に裁縫の入念と、品質の確實な事は、代理部で責任を持つもの丈に、必ず御滿足を得られます。

◇見本ノ請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添付ノ事。

【春着】

背廣服
オーバ

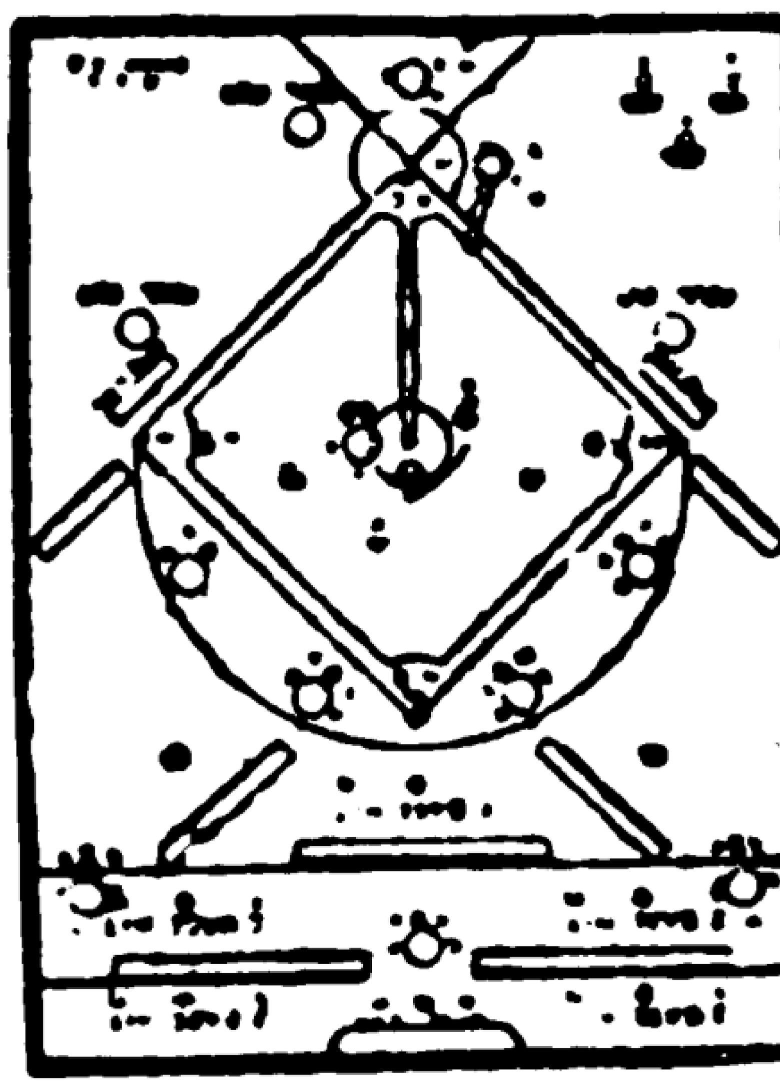
F 三十八圓　G 四十五圓　H 五十五圓
I 六十圓　J 七十圓

◇洋服の生地見本は、御承知の通り種類が多く全部取揃へる事は、經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ずお希望の品例へば「Aノ背廣」「Bノオーバ」と云ふ風にお指定の上お年齢をお申聞け願ひます。

◇代理部では御指定の種類のお年齢向なものを見立てゝ、明確な個入りの寸法書をお送りしますから、これに各部分のお寸法を記載してお送り下されば、約一週間で居ながらにしてシックリと體に合つた洋服がお手に入る譯でございます。

中央公論社代理部
振替東京七八四七五番

誰にも愉快な 野球競技盤



盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、球にあてた指の力一つに、直球、曲球、軟球、剛球を自由自在に出す投手と選手がボックスに立つた氣持ちで立向ふ打手との醍味が緊張した氣分は、この野球競技盤ならでは、味はへぬ所です。

選手はもとより、春のシーズンを目前にして野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戯として、一般の家庭におすゝめ致します。

定價　小型一圓三十錢大型三圓八十錢

送料　内地小型は十二錢　中型は二十七錢　領土小型は四十五錢　中型は五十錢

最新艶出布

このフレッシユマン、ダスト、アブソーバーは、特殊の毛織物に機械的工程と化學的處理とを施したものでありますから、藥物附有の變色を損ずる事は決してありません。

この布は、從來の艶ふきんと異り、埃りを吸ひ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。

漆器類、殊に蒔繪の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードを、この布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價(金屬製容器入)　一圓

送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

スマドレ ヘヤトニック

このスマドレヘヤトニックは、米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニューヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。

洗髪後や朝夕に適當を毛髪の根元に振りかけて、指頭で輕くマッサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は妙であとには得も云はれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛髪は絹の樣に軟くなり、日々漆黑の美を増します。

定價　婦人用 紳士用　特大瓶各二圓五十錢

送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

スマドレ シヤンプー

理想的洗髪液スマドレ、シャンプーは短時間に地肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな潤のある美しい髪にする一方、ちゞれ毛や癖毛を直す事は全く不思議な程で、スマドレヘヤトニックと共に、ニューヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界特許品です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髪を整へる事が、重要な嗜儀の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、毎もさつぱりとした姿で、自他共に氣持ち良く會談する事をおすゝめ致します。

定　價　特大瓶　二圓

送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

梅と鈴蘭の香水

本社代理部特製の四季の香水の中、春の梅及夏の鈴蘭の二種は、如何にも香りのすがすがとした紳士用には最もふさはしいものです。

此の外に秋のヘリオトロープ冬のシクラメンを加へて四季何れも所に用意してありますから、お好みのまゝにお註文下さい。

定價(春、夏、秋、冬)各　二圓

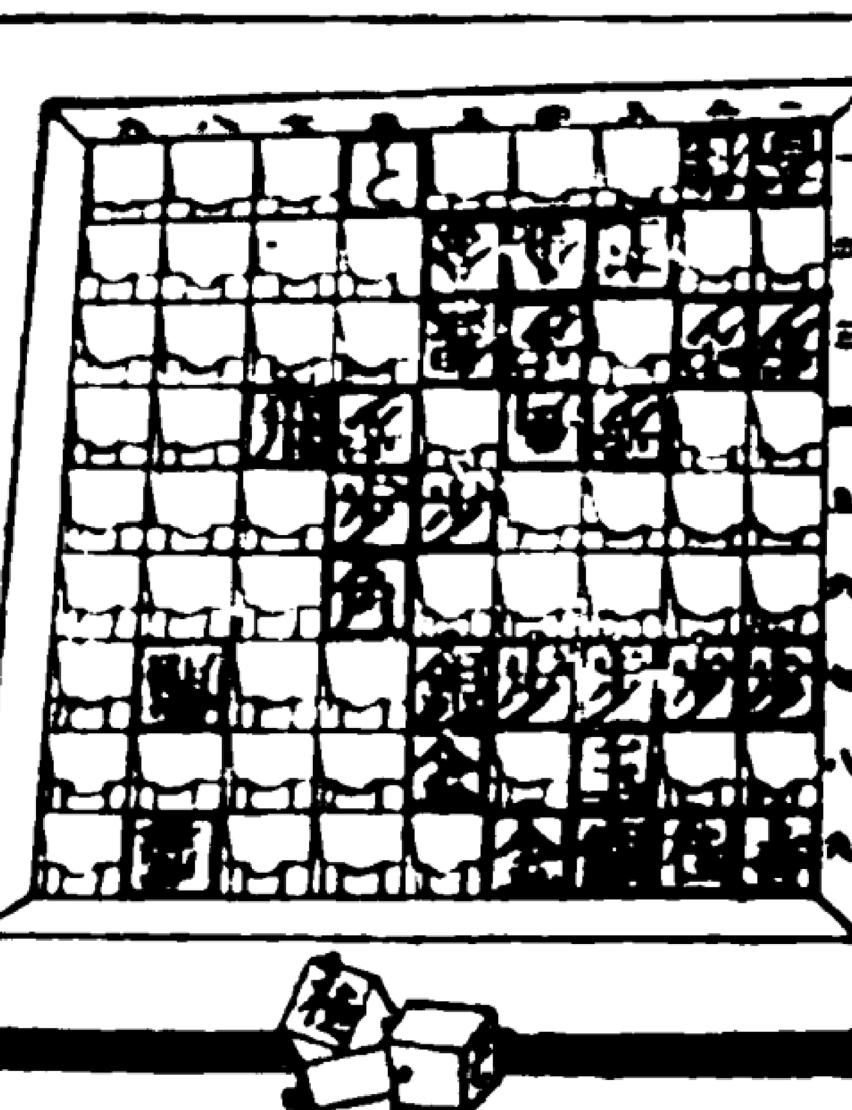
(四季組合せ、又ハ四個)七圓五十錢

送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

最小型將棊盤

縦三寸七分横三寸二分厚さ五分の最小型攜帶便利將棊盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重く感じる事なく、駒には一個一個磁石が附けてある等、婦女子の眼にも可愛らしいのあ物のです。



駒は正字を用ひ、裏には點線に數字が記されてありますから、局面を見ながらの研究には一層便利です。

徒の無聊な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に或、ひは床上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定　價(完全品附)　一圓八十錢

送料　東京市内十二錢、内地十八錢　領土四十五錢

御注意

◇御送金には振替の御利用が一番安全ですが、地方により普通便より四日乃至十日間以上遅れますから、御注文はこれ丈一層お早くお出し下さい

◇為替での御送金は、必ず書留郵便に願ひます。

中央公論社代理部

劇壇秘話

——澤正と草人——

上山草人

序言　本記事の前半は筆者がまだハリウッドにおり、且つ澤田正二郎君も存命中に手記したもので今回後半を補記して發表するものなればそのつもりにて讀まれたし

前篇

諸方から寄稿をたのまれてゐるが、ハリウッドの映畫界の話でもドシノ\書送つたらよささうなものだが、然し毎日其中につかつてゐると、取立てゝ書く氣にもなれず、大の筆不性と相待つて孰れにも失禮な沈默を續けてゐる。然しこゝにかうして最も私の心をひくものは日本に殘して來た友人諸君の動靜でその思ひ出に走るのは誠に止むを得ない。

東京のファンの一人から貴君の事が書いてありますといつて澤田正二郎記三千六百五十日といふ小册を送つて來た。見れば新國劇十周年記念の出版物で彼が十年間奮闘の概略であり當然其旗擧當時に私と接觸した件なども簡單に記されてある。

「此陣立に運命のすべてを賭して二十五日の初日を待つ時、こゝに圖らずも劈頭の大難關が突破したのです。それは一座の賣物であり呼物狂言『飛行曲』の女主人公を勤める女優衣川孔雀君の身に起つたことです。と言ふのは同女優は、前の愛人上山草人氏と別れて齒科醫T氏と結婚する時、上山氏を慰める一條件として「他の劇團へ無斷出演の際はそれに伴ふ損害を賠償す」といふ意味の公正證書を入れておいたのです、其爲、一足後から來る筈であつた同女優から、突然參加不能の斷り狀が舞ひ込んだのです。一座の困惑は固より、一方南座からはそれを楯に解約の膝詰談判までうける。當惑の極遂に最後の手段として、單身歸京、孔雀と良人T氏を訪ひ、遮二無二、兩人を京都へ連れて來たのです。それと知つた上山君も、早速京都に急行してきました。やがて上山君から一座に向つて強硬な談判が開始されたのです。が策は一つしかありません、寧ろこちらから出向いて、親しく上山君を動かす外はない、私はさう腹を決めました。だが相手はあの氣象の上山君。しかも事件は氏にとつて大きな苦惱の基だつた戀愛信義の問題です。これは容易ならぬ談判に相違あり

ません。

「もし最後まで孔雀を貸してくれなかつたら――」三條の橋を渡る時私はかう言つて、私の無二の相談相手である倉橋仙太郎君の決心をさぐつてみました。「死ぬ覺悟で闘ふまでです」――その言葉は疲れてゐたが、月に蒼い倉橋君の顔には、強い決意の色が輝いてゐます。間もなく二人の懐には新しい一ト振づゝの短刀が祕められました。二人は三條小橋の欄干にもたれて中味を見ながら微笑を交しました。しめやかな月光に媚笑む加茂の灯影の艶めかしさ。京の三條の初夏の夜にしては何と適當しからぬ殺風景な情景でせう。

「よし！　では機を見て僕が先にやるから……」

「罪は僕が引受けます」

二人の決心は鐵石です。劇的光景！　それは極度に緊張した人生の姿ではありますまいか。上山君と會見したのは、その夜の十時過でした。月の河原に、淋しく螢火が飛び交うてゐました。

「君は僕等の仕事を潰しにきたのか！」手はもう劍に懸けての談合、血を祕めた沈默―それは意外に容易く事件を解決しました。そして上山君は愛人孔雀ばかりでなく夫人浦路をも一座のために貸してやらうと言つてくれました。」

傳聞すると此の記事は澤田君自身の執筆でなく他人の代筆だとの事だが兎に角私の名前は册子の隨所に出て來て、前記の件は特に實際間違つてゐるやうに思はれる。此程藤原義江君が當ホリウッドにやつて來ての話に澤田君には此他「蛙の放逐」といふ著書があつて其中にも君の事が書いてあり、新國劇の旗擧に際しての二人の女優を貸して好意を示してくれたのは流石に草人君だと賞めてあつた、といつた。「蛙の放逐」は未だ目に入つてないからどういふ事が書かれてゐるかは知らないが多分は前記同様多少の覺え違ひの事が書かれてある事を豫想する。又最近目に入つた演藝畫報の誌上にて仲木貞一君が澤田君を倣してゐる中にも右の件が記されてあり、京の三條の橋の上で彼と私がアワや血の雨を降らさんとしたが話が判つて事なきを得たなどといつたやうな件が記されてあつた。その他いろ／＼な通俗雜誌にも右様の記事を見受けた。それだけ人の興味をひき後々迄語り傳へられる事だとすれば猶更誤つた事だけは訂しておきたいと思ふ。此記事は此訂正を中心として僕と澤田君との接觸點を展開し、合せて當時の新興劇壇の逸話の一二を打明けんとするものだ。

澤田君は坪内博士の文藝協會の第二期生であり、小生は第一期生で浦路と共に卒業演劇「ハムレット」の後早くも博士の膝下を辭して別に近代劇協會と云ふ一派を樹てた爲め、此家塾に於て澤田君と懇意になる機會はなかつた。次いで島村抱月、松井須磨子の御兩人が坪内先生の團體から分離する事になり坪内博士は沙翁の「シーザー」を最後として御自分の團體を解散する事に内定してゐたので多士濟々たる此團體の有望な人を私の一座に貰ひ度いと云ふ希望で帝劇に於ける此團體の「シーザー」を待

つたものである。二十人近い有望な若手俳優の中に混じて其頃の澤田君は左程目立つてゐなかつた。役等も極くお手軽の所で立ち働いてゐたやうに記憶する。

文藝協會の解散は前記島村抱月、松井須磨子の藝術座、東儀鐵笛、土肥春曙の無名協會、横川唯治（後に山田隆彌）森榮二郎、加藤精一などの第一期生を中心とした舞臺協會の三大劇壇に分裂し最も下積にあつた一二期生の諸君の美術劇場と云ふ影の薄い劇團の一員に澤田は加盟してゐた。然し此劇團も一二の地方興行をやつた後に直に潰れて終つたやうであつた。私は此時代から澤田君の有望である事に眼星をつけてゐた者だがつひかけちがつて話をする機會さへもなかつた。其内澤田君が島村氏の藝術座に招かれ須磨子の相手をするに及んでやうやく友人仲間に注目されるに到つた。其頃の澤田君は故笹本甲午君武田正憲君中井哲君田邊若男君等と同連であつて交る／＼我儘な松井須磨子嬢の相手をさせられてゐた。

私の主宰する近代劇協會が滿洲支那臺灣等を一巡して約一年振りで日本へ歸つて來た時は東都の新劇壇も行き詰るものは行詰りいろ／＼模樣が變つてゐた。私は此地方興行で成功の勢を以て散逸してゐる新劇俳優の大同團結を企てた。金扇社で行詰つた下山京子嬢や有樂座で一條汐路等といふ綺麗な所にも集つて貰ひ、別れてゐた新劇社の伊庭孝君にも來て貰ひ、一時藝術座を出て遊んでゐた澤田君に來て貰つた。出し物は都新聞連載小說「役者の妻」七幕十二場と云ふ大した物でノラやハムレットを賣物にしてゐた新劇團としては實に破天荒の興行であり、劇場前に旗や幟などを林立して恐らく新劇團が街頭に出て大衆の前に大衆劇を以て見えた最初の演劇であつたのである。

其一座は私が座頭で男優には前記伊庭、澤田の外諸口十九、高橋義信（今の五月信子の御亭主）故正邦宏、藤村秀夫、宮島資夫、外數十名、現在の劇壇映畫壇にそれ／＼確乎たる地位を有する人人で女優も亦當時の花形山川浦路、衣川孔雀、下山京子、一條汐路、玉村歌路などの外に現在の新劇運動の花形花柳はるみが細谷銀子と名のつてゐた事を記憶する。今の澤正夫人として新國劇にときめく久松喜世子嬢は柏木杉枝と名のつてふけ役などを受持つて貰つてゐたと記憶する。勿論其頃は澤田正二郎君の勢力の外にあつた。伊澤蘭奢や上山さんご、明石潮君などは此頃まだ俳優になつてゐなかつた。

其後約半年位は私の一座は澤田君に二枚目をやつて貰ふ事になり信州方面の旅行や東北の旅興行にも一座して貰つた。其爲め在來の二枚目諸口十九君が大に憤慨して脫退するの椿事なども生じた。澤田君の人物藝風に親しく接する事の出來たのは此

時代であつた。

其後間もなく私の座も經營困難に陷ち、一座の花形ＫＫ女史と小生との間に隙を生じて實家に歸宅して休養する事になる。殆んど同時に妻女浦路が急性關節炎で全身の關節が一時に動かなくなり入院の上、長療治といふ災難が幾つも〳〵重つて、新劇運動者としての小生は、鳥の翼を失つたやうな工合で一時は困却した。

兩翼をもがれて劇運動の道を失つた小生は、演伎座の外其頃公園に五六館を支配して盛にやつてゐた根岸興行部に招かれて奧役のやうな顧問のやうな仕事を引受け、脚本の選定や座組や俳優の出入りの仕事までも受持つ事になつた。其頃澤田君は再び藝術座に戻つて須磨子の相手をしてゐた。此時分同興行部の大將小泉丑治氏に進言して此時分新劇の民衆化を率先して企てたのは私だつた。

諸口十九や村田榮子や二十名程の男女優を水野好美君を筆頭とする常盤座の新派の中へ混入して新派新劇の同成團をやり出した黑幕は私だつた。島村須磨子の淺草興行、所謂新劇の普及興行に際し私は根岸の奧役として濱松迄行つて買込の相談をしたのだから隨分おかしな話ではないか。それよりも常例として座組の出來た手打の晩に、須磨子抱月に、根岸興行部の幹部連と共に根岸の株主である山田菊次郎といふ人の經營してゐる尾稲辨とかいふ遊女屋に押上つて各々相方を買つて一晩を過した事があるんだから面白いではないか。あの須磨子嬢が何紫とか云ふ女郎を抱いて一晩を過す。島村先生も僕も同樣別々に部屋をとつて翌朝寢ぼけた眼で洗面所で顏を合せた圖などは新劇祕話の中の最珍なものでありませう。ＫＫ女史は其頃家を出で再び大川ばたの私と共に家を持つて二枚の標札を出した。之を二枚標札の家と云つて當時評判になつた。いや話は飛んだ横道だ、御免下さい。

浦路の關節炎は中々急に治りさうでない。そこで私はＫＫ女史丈けで再び立つ方針を立てた。それにはよき二枚目が欲しかつた、それで私は祕に澤田君と結ぶ事になつた。「役者の妻」以來の懇意であり須磨子の横暴の爲めに悶々の形であつた澤田君は直に私の新計畫に贊成したものである。打合せの事項は極簡單で、劇團の名稱も新らしく二人を幹部とし旅興の資金は差當り根岸に出させ直に民衆の中に切込むといふ方針であつたやうに思ふ。然し澤田君は當時藝術座に籍があり、近く綺麗に出て來る迄は極祕にしてくれといふ注文であり且それ迄は草人ＫＫ女史の新劇團も暫くひかへて現狀維持で待つてくれといふ事であつた。其所で當時私にはシャイロック式の妙な癖があつて何

事も一札書いて置かないと承知しない。此打合せは大事件であるから後日の爲め一札書いて置かうではないかといふ提案をした所、澤田君もKK女史も直に賛成して「近く左記の三名の者相棒同志で新劇團を起す事を契約する」といふやうな文句を書いて私を筆頭にKK女史を次に澤田君が最後に署名した。勿論それは只一枚であつて私の手許に保留された。眞に片々たる書附であつて法律的にも何の效果も無いものであつた。然し澤田君は中々急に藝術座を脱けて來さうもなかつた。ものかけてせつついて見ると近くトルストイの「闇の力」を主演する事になつてゐる。あれはすま子のものでなく恰ど僕の物だからあの演劇をもつて聲價を高めてから我々の企に取かゝらうといふやうな調子であつて、私は約三四ヶ月澤田君を待つてゐた。

其内次に陳べるやうな事件が起つた。根岸の配下の演伎座の正月興行にかけ物が足りない。新之助一派の舊劇に高木德子のトウダンスだけでは新年として賑かさを缺くから、上山さんが孔雀さんをつれて新劇を一幕演じて貰へたら此上の事はないといふ根岸の懇望であつた。奥役が舞臺の表へ出る事であつて、小泉さんと小生との間に立つて値段其他の話をする人がないので曾我廼家五九郎君が立つて兩者の話をつけた事等も珍談の一つであらねばならぬ。一方値段も演じ物も定まつてから、澤田君との盟約に氣がついて「君も中々藝術座を脱ける事が出來ないやうだし、我々は生活の關係もあるから主人小泉氏の懇望でもあり、正月から演伎座にかゝるから諒解をして貰ひたい」と申込んだ所、澤田君の返事は實に意外だつた。それは甚だ迷惑だ。君達との盟約がある爲に俺は今にも藝術座を脱けようとしてゐるのに、君達二人に先んじて民衆の中に出られては三人合同の新劇團は成立つ機會を失つてしまふ。少し位の金を取らなくとも演伎座出演を思ひ止つてくれ」「いや君からさういふ强硬な話が出ようとは僕も意外だつた。然しもう話が定り蓋明けも間近な事であり、只事では出演を拒絶する事は出來ない、此事情を小泉氏に打明けて時機を待つて貰ふの他に道はない」「それならばこれから三人で小泉さんに押掛けようといふ事になり翌朝七時頃（これは役者稼業にとつては殺人的早起であるのだ）三人勢を揃へて諏訪町河岸の小泉氏の邸宅を訪ねたのは八時近くであつた。

小泉氏は眠い目を擦り〳〵起き出して來て我々に會つた。新劇の頭株三人が意外な早朝は物々しいから何事であるかといつた。我々は前記の美濃紙の一札を拔けてからいふ話になつてゐる、どうか此度澤田君の抗議に會したから草人の演伎座出演はどうか勘辨して貰ひたい、他日三人合同の上はもつと立派な御

紹介をするからといふ事であつた。小泉さんも渋々承諾してKK女史だけが出演する事に妥協が成立つた。此出來事は皆物陰に起つた事であるから世間で知つてゐる者もないし、恐らく澤田君は忘れてゐる事であると思ふ。然し早朝に三人の見舞をうけた小泉さんや、草人の演伎座出演に小泉さんとの中に口を利いた五九郎君などは薄々覺えてゐると信ずる。物好な人があつて、事實を確めようと思はゞ此二人に聞いてみたまへ。

後篇

その後私はこの演伎座を最後として、再びKK女史と別居することゝなつた。それから一二ヶ月してKK女史は結婚生活に入り、間もなく澤田君の新國劇の旗上げの日が來た。澤田君は同志を糾合して、新國劇の旗を舉げたが、その頃は世間の信用に乏しく、これを引受けて興行しようとする興行師も小屋もなかつたのだ。京都の南座で引受ける話になつたのだが、無論、澤田君を看板として引受けたのでなく、當時の人氣女優たる下山京子、KK女史の兩孃を上置にした新國劇を引受けたものであつた。兩孃は早く澤田君に對して、無論あなたが旗舉げをされる時には、私共も御助けしませう位の口約束位はしてあつたものらしいが、京子の方はその後或る實業家の旦那が出來、KK女史は某ドクトルに嫁してしまつたので、何れも演劇生活には支障のある身の上になつてゐたのだ。

京子の方は旦那からポンとことわられてといすがるすべもなかつた。KK女史の主人某ドクトルは幸、澤田君の友人であつたので旗舉げ當初、一興行だけ出演する諒解を得たらしい。然し澤田君にとつて、こゝに一つの困難な事が出來た。それは小生とKK女史との一つの盟約であつてたとへ人に嫁しても、小生の許諾なくしては濫りに他の劇壇又は劇場に出演出來ないといふことであつた。即ち澤田君は當人並にその御亭主の承諾があつても、かく申す草人の許諾なしには、KK女史を京都まで引張り出すことが出來なかつたのだ。

この盟約は法的には無名契約とし、何等損害金などは規定してなかつたが、三年又は五年の間、この盟約を嚴守する契約として、公正證書に作成されてあつた。この案は實は女史の母君の案であつて、深い御不動樣の信者である母君はKK女史の劇壇的亂動を怖れて、靜かな結婚生活に抑へようとする深い思慮から思ひついたものであつたらしい。劇運動に携はるなら草人の手許を離れるな、然らざれば靜かな結婚生活に終始せよといふ主意から割出されてあつたのだ。それで澤田君のその時の誘ひは、第一にKK女史の母君を落かし、御不動樣に御伺ひをた

てた上、上山さんの顔をつぶしては斷じていけないとの意見を持して、動かなかつたのである。そこで澤田君は萬策つきて草人に賴まなければならない破目に陷ちた。

私が斯うした羽目になつてからの澤田氏のこの願出に對して輕々に承諾しなかつたのは、澤田君のパンフレットの巻頭にあるやうな、戀愛信義を正さんがためではなかつた。友人の信義を正さんがためにあつたのは、前からこの記事を讀んできた讀者は首肯くでせう。卽ちKK女史と小生との關係は、當時世間周知であり、而かも祕かに盟約を結び、隨分出すぎた抗議をした彼が旗擧げの當初から懇談的なものであつたのなら、兎に角、せつぱつまつてから賴みに來た態度を遺憾としたのだ。彼は遂に御亭主Tドクトルまで伴れて歎願にやつて來た。私はその頃新橋のどぶ臭い「かかしや」に蟠居して、眞向ひの新橋クラブの貸席の三階に事務所の一間を借りてゐた。澤田君は南座の座方にさうした上置の女優なくても、蓋を開けてくれと歎願もしたらしいが無論、承諾されなかつたので、京都と東京の間を、三四度いや四五度はせつせと往復してゐた。その頃の彼の相棒は倉橋仙太郎君であつて、澤田君と倉橋君とが萬策つきて、短刀二本を買込んで或夜、京の三條？の橋の上で、草人をバラしてもKK女史を連れだすといふ悲壯な決議をしたといふことを、後から當の倉橋君から聞いたことを覺えてゐる。然し新國劇のパンフレットにあるやうな、彼等兩人から短刀をもつて脅やかされたといふことは、それは捏造であるのだ。今日に於ても私の身内には蠻勇が殘つてゐて、短刀の一本や二本には怖れはしない。況んや、世間樣御承知の、當時の僕においておやである。向ふが辨慶ならばこちらは牛若丸、かつては早大のランニングのチャンピオンであつた小生は、橋げたの上を足駄で飛びのけるといつてもよい位の輕業は御手のものであつたのだ。呵々：

尙後から顧みて微笑まれることに、この無名契約に立會つた公證人は誰あらう、日本が生んだ世界的歌姬、三浦環さんのお父さん柴田猛甫君であつたのだ。それから以後小生をたよつて俳優を思立つた人々は手ほどきを受けるに先立つてすべて柴田公證人を立會人として同樣の無名契約を作成したものだ。伊澤蘭奢、明石潮其外みな然りである。

氣の强い兩人の押問答が四五日續いた。たうとう澤田君は小生に謝罪してあらためて、KK女史の出演を乞ふことになつたのだ。其頃から着てゐた柳に蛙の定紋を彼の平あやまりの背の上に、見たものである。其時の私の條件は第一に謝罪狀を書く事。第二に浦路女史とKK女史（引離して出演させた事がないから）とが並んで出演する事。浦路女史の出演料は無論、無報

酬である。未だ關節炎がはつきりしない事でもあるから、小生がつき添ふて行かねばならず、即ち二人分の二等乘車券、並に寢臺付、一流ホテルの滯在費は全部負擔すべき事との條件であつた。澤田君は欣然として承諾をし、謝罪狀を書いた。恐らく彼は腹を抑へ目をつぶつて書いたのであらう。そして彼は恐らく努めて忘れてしまつたであらう。然し其一札は僕の筐底に殘つたので、古い書類を引き出すたんびに目にとまり、當時を思ひ出し、苦笑を禁じ得なかつた。急いで書いた澤田正二郎といふ丸るみの略字が今日に及んでも眼底に殘つてゐる。

當時浦路は病院から退院したばかりで、足の關節が未だ自由でなかつたにも拘らず、この意地ばりの出來事のために、京都まで出掛けて、舞臺にたゝなければならない破目になつた。南座に於ける新國劇最初の狂言は仲木貞一氏の作で「飛行曲」といふメロドラマであつた。仲木君は事情をきいて急に浦路のために、洋裝の一美人の役を書き足した。

即ち澤田君と小生とのこのトラブルは決して京都に於いて解決したものでなく、「かかしや」の向ひの新橋クラブの二階の一間に於いて解決したものであり、KK女史は御亭主に伴はれ、足の不自由な浦路は小生に伴はれて京都に下り、各別々の宿屋に陣取つたのであつた。かくしてあの名譽にして、光輝ある新國劇の所謂最初の旗擧げが無事にふたがあいたのであるが、當時彼の先輩である小生としては、何にも意地惡から彼の旗擧げを邪魔したものではなく、友人としての信義を正した上寧ろ我が二勢力の二人の女優を提供して其旗擧げを祝つたものであり、彼の分裂價値を深く信じてゐた。勞々樂屋などを往來して、彼の出來たての劇壇を攪亂するものゝやうに、とられることを怖れたから劇場には足を入れなかつた。獨り宿屋に引こもつてゐた。初日は、流石は澤田である、袴、羽織を着て車をもつて浦路を迎へた。樂屋の梯子を上下するため浦路の足は難澁であつたのだが、その時、穢い久留米絣に兵兒帶をぐる／＼まきにした無名の一下廻りが、浦路の手をとつて、その上下を助けたものであるさうな。その名は外山榮次郎と名乘つてゐたが、これが將來世に出て我等のテナーたる藤原義江となつた。出世をするものは、小さい時から心懸けが違ふものだ。

この興行は當らなかつた。新國劇は只旗擧げをしたに停まつて、財政的には何等得る所がなかつた。然し流石は澤田君であつた。浦路に對しては條約通り、二等特急、寢臺付、一流ホテル代、合計百幾十圓を綺麗に支拂つた。KK女史の方には拂はなかつたさうだ。KK女史は亭主に伴はれて引揚げ、澤田君は殘つた同志と慘憺たるトヤについたのである。それから後の新國

劇と小生とには何の關係をも有してゐない。

さて、讀者諸君、澤田君は前記文藝協會、藝術座などをへて小生とは前事の如き經緯を有し、明かに既成劇壇より分裂したものであるに拘らず、彼は彼の劇壇の分裂を寸毫も許さなかつた。愛人の擡頭すら許さなかつた。彼から分裂を企てたものを反逆とよんでゐる。こゝに彼の頑强なる英雄主義がある。

又讀者諸君、私はこの記事を書いた後に、特に申述べたい感想の一つがある。それは澤田君が謝罪狀を書いた忍從の態度である。新國劇のパンフレツトでいふ如く、短刀で人を脅かしてKK女史の出演を小生に承諾させた彼よりも、あの傲頑兒が涙をのんで謝罪狀をかいた態度に吾人は萬腔の敬意を表せざるを得ない。滿天下の澤田ファンも小生の今回の打明け話をきいて故人に對して一層欽慕の情を强めることを小生は信ずる。それかあらぬか、小生が海外放浪の長い留守の間、義妹上山さんごも座員の一人として迎へ、長い間可愛がつてくれたことを、感謝せずには居られない。彼女も不幸にして、兄貴の歸朝を見ずして病死し、多分今頃は後から來た澤田君とあの世で出合つて、兄貴の强情を語りあつてゐるであらう。今回の歸朝に際し肩をたゝき手を取つて語りたかつた澤田といふ一人の大きな友人を失つてゐることは私の秘めたる悲しみの一つである。筆を措くに際し衷心から彼の冥福を祈らざるを得ない。



マクドナルドと語る

在ロンドン本誌特派員 清澤洌

1

『カール・マルクスをロシアに移せつて？』

今まで默つて聞いてゐたマクドナルドは、少し險しい聲になつて、かう聞き返した。

わたし達は赫々と燃える英國流の切り爐の前に車座になつて据つてゐた。石炭の火を背にして、灰留石の上に無造作に腰をかけて、兩足を投げ出してゐるのは、主人のマクドナルドである。膝までしかない粗末な野外服を着て、ソフト・カラーの垢染みてゐるのが、薄明るい燈にも目だつ。

『こちらにいらつしやい』

マクドナルド氏は私をさしまねいて、自分の傍の座布團を叩いてみせた。私はかれとすれすれに据つて、同じやうに床に足を投げ出した。日本の疊の上を想出しながら。

『日本の無産黨は選擧で大分成績が惡いさうではないですか。』

丁度、日本の總選擧が行はれた翌日で、その第一報がタイムスなどにも載つてゐた。かれはそれを讀んでゐたのだ。

『無産政黨間に協定が出來ないで、候補者亂立がいけないらしいです、惜しい人々が落選しました』

私がそういふと、かれは默して肯づいた。先程、かれは軍縮會議において各國の主張が一致せず、中々問題が困難であることを、呻めくやうな調子で話してゐた。かれの休息の場處に來たわれ等としては、時事問題に話頭を持つて行くことが、いかにも商賣氣が多いやうで控えてゐたのだが、かれ自からその問題を持ち出したのだ。

『五ケ國が、みんな社會主義内閣になると、こんな問題は直ぐ解決してしまうでせうネ……』

と誰かゞいふと、マクドナルドは直ぐ

『それは無論問題じやないが……』

と眞面目になつて引きとつた。

社會主義から話しは日本の選擧に移りそれからカール・マルクスに移つたのである。私は同氏の書籍によつて、ロンドンのハイゲート墓地にカール・マルクスの墓を訪ふたことを語つた。

『墓の方の貧弱な場處にありますけれども、墓石は新らしく、誰があげたのか、生花が供えてありました』

私がそういふと、ある英國の記者が『なんでもソヴエート・ロシアであの墓をロシアに移して貰ひたいといふ意見がありました』と、口を入れた。

この時である、かれがキッとなつて聞き返したのは。

『カール・マルクスをロシアへ移せつて？　なんであの外國の土地へやれるもんか。』

かれはエリエン・ランドといふ文字に、法外に力を入れた。その聲には怒りをすら帶びてゐた。

2

『カール・マルクスをロシアのやうな外國の土地へやれるもんか。』

私はこの言葉を腹の中で繰り返して、愕然として主人公を見た。頭も髯も、もう黑いものが見えないまでに白くなつて、漸く熟して來た政治家としての圓滿さを示してゐるが、その額の横に引いた大きな皺が、それから何よりもその爛々たる眼が、まだ生れつきの利かぬ氣を現はしてゐる。

マルクスとロシアと結びつけることに、憤激を發えるかれの心持は、併し私には直ぐ分つたやうな氣がした。

マルクスとその一派が、どんなに生ぬるい英國流の自由主義、社會主義を嫌つたにしたところが、たゞ一つ確實なことはこの英國人の寛大な氣持がなくして、あのマルクスの大業は生れなかつたであらうことである。私はマルクスの墓を見舞つた歸りに、英國博物館の圖書室を見た。そしてあの古ぼけた建物の中で、毎日、本の中に埋もれながら、研究に精進したマルクスの姿を想像した。

『もう閉館します』

と、いつまでも動かないマルクスに注意した番人が、當時も今と同じ制服を着て居つたであらうことを考へても見た。

各國を追はれたマルクスが、このロンドンの自由な空氣に包容されないで、どうして尻を落ちつけて研究に進むことが出來たらうか。この點において、ロンドンは確かにマルクスを「要求」する權利がある筈である。

併しマクドナルドが、マルクスの本家爭ひをするのは、それだけの理由ではない。

かれは元よりマルクスの經濟原理を、キリスト信者がバイブルを信仰するやうに信仰して居りはしない。いな、かれは『かれの經濟原理の正當性は疑問の餘地があるといふ程度のものではない。またかれの歴史哲學も同じ位置にある』といつて、その經濟論に承服しないことを明らかにしてゐる(Socialism; Critical and Constructive. P. 47)。

それならマルクスの偉大性はどこにあるのか。マクドナルドによると――

『マルクスは勞働階級に對して、かれ等が何等かの政策をとることにより、その自由を獲得しうる希望を與へた最初の人である。かれが示した政策といふのは、勞働階級の精神を鼓舞し、その理性に訴へたるものである。また戰鬪の結果による勝利の獲物と、敵に對して深刻な敵愾心をハートに植えつけることにより、最大限の戰鬪心をかれ等に吹き込むやうに戰線をしいたのは、かれを最初とする』(同書)

故にかれはマルキシズムをそのまゝ信じない。『マルクスはマルキシズムがなき後に殘るものなのだ、即ちマルクスはマルキシズムより大きく、より包括的である。これはマルクス自身も認めたところで、かれはある日、その弟子、或は自稱弟子が喋々喋々として口演するのに耳を傾けて「天に誓ふ、私はマルキストでないことを」と叫び出したといふことである。將來に殘るものはマルキシズムでなくて、マルクスである』

これがマクドナルドのマルクス觀である。

かういふ立場に立つかれであるから、マルキシズムを金科玉條とする人々に對しては、公然これに白い齒をむけることを辭さない。かれが自から築きあげたといつてもいゝほどに、四十年近くの間守り育てゝ來た獨立勞働黨と絶縁したのは、今から三四日以前のことである。

その頃また英國ではロシアの宗教迫害が大きな問題となつて、保守黨は對露國交斷絶を主張してゐた。勞農ロシヤに寛大であるかれも、この態度には深い憎しみを持つてゐた。

『私の同志も、私自身も、宗教迫害に對しては憎惡の念を持つてゐる。これはわれ等が民族として生れ繼いだもので、時と處の如何を問はずこの種のいかなる迫害にも無關心ではありえない』

といつて、勞農ロシアの政策を彈劾したが、併し『それはこの際別問題である。一國が外交的に承認することは國内の信仰や政策を基礎とするものではない』と、對露政策の不變を述べてゐた。

かうして國の中から、マルキシズムの名によつて、かれが術きされる程度は、最右翼から受けるもののそれに劣らない。マルクスの價値を認めれば認めるほど、その文字の末に膠着する人々に對する輕蔑と嫌惡は增して行つた。

『マルクスを外國のソヴエート・ロシアへやれるものか……

も一度そう吐き出すやうにいつて、かれは話しを續けた。

3

この日、わたし達はマクドナルドをチエッカースの首相別邸に訪問したのである。折しものロンドン海軍會議で、身體が幾つあつても足らない忙がしい中を、かれは進んでわれ等少數人を招待した。

『この近くを御案内しませう。高いところからこの一帶がよく見えますから』

暫らく應接間で午後のお茶を呑んで話してゐると、かれはかういひながら無造作に立ちあがつて、自分で階子段の下にある押入れから、鳥打帽子とステッキを取出して庭に出た。

『寒いから貴方がたは外套をお着になつたがいゝでせう』

外套を着たものかどうかを思ひ煩つてゐる客を顧みて、かれはつけ足した。主人を眞中にして少數の一團は、庭續きの小山の方に進んだ。英國特有の底冷えのする風が、冬樹立を通して吹いてゐた。

私はこの日ほど、ラムゼー・マクドナルドのほんとの姿を見たことはなかつた。ロンドンに來て二ケ月經つと、もうマクドナルドはわれ等に珍らしい姿ではなかつた。議會でも、レセプションでも、ロンドン海軍會議でも、群衆の眼が集つてゐる先を見れば、屹度そこにかれを見出すといつてもよかつた。濃いモーニングか、燕尾服かゞ、どの保守黨內閣の首相も及ばないほどかれを品のいゝ尤もらしい宰相姿にしてゐた。その四角四面のマクドナルドに見馴れてゐた私には、今日のくだけ方が氣に入つた。水色……で昔はあつたであらう程の古い野外服に、底厚の運動靴がいかにもかれに似ついて見えた。大股に歩くかれのガッシりした姿には、日本流に算へて今年六十五歳といふやうな老の影は毫しもさしてゐなかつた。

先ほど、令嬢のイシユベルが、かれの書齋——歷代の英國の首相が週末毎に据つたであらう書齋を見してくれたが、デスクの傍に大きな斧があつた。『これは何です』と聞くと『父が薪を割つてゐたのが、他にお客様があつたので、こゝに置き忘れたのでせう』といつてゐたが、かれがさうしたことに親しむのは、たゞに運動のためだけであらうか。

私はかれの後に從いて、その矍鑠たる姿を見ながら、英國で有した最初の勞働黨首相の奇すしい過去を考へてゐた。

かれがスコットランドの北端ロシマウスといふ寒村に生れたのは、こゝで繰り返すのには餘りに知れた事實である。『私の生れた場處？ ロシマウスと發音するんです、ロシといふ小さい川の國といふところから名づけたものです』と、その後茶の時に話してゐたが、その小さい村の、食堂にも寢室にも二つしか室のない百姓家が、かれの生れた家である。

かれは物心のつく頃から、もう漁船にのつて、家の生計を助けた。十二才の時には學校をやめて、農園に藷を掘つた。十八才の時に二三圓を握つたまゝでロンドンに來て、それから、かれの苦鬪の幕は開かれて行つた。

『どうしても仕事がなければ乘合自動車の車掌にならうと思つたが、いよ〱最後といふ時に、自轉車協會の宛名書きの仕事が見つかつたんで

す』自分の過去を誇りかに話したことのないかれも、いつか話しの序でにそういつて笑つたことがある。

それからかれはクーパー・ボックスといふ會社の倉庫に雇はれ一週間六圓二十五錢を貰ふ仕事にありついた。その頃である、お晝を食ふ金がなくて、ギルド・ホール圖書室に晝の時間をすごし、水を呑んで本を讀んでゐたのは。

今年の二月廿三日、ロンドン會議が開かれた翌々日、ロンドン市長は各國全權を主賓としてこの同じホールで盛大な歡迎晩餐會を開いた。マクドナルドが這入つて來ると、滿場は破れるやうな大喝采をした。かれは五十年前の過去を想出したかどうか、一杯詰つてゐる圖書棚を感慨深さうに眺めた光景を私は忘れないでゐる。

4

マクドナルドが、どれだけスコットランドの生れ故郷に愛着を持つてゐるかは、この安息所で、かれと手を握つたその時から分つた。

かれの傍にはいつでも令孃のイシユベルと、令息のマルコムがゐた。妻君に死なれて獨身を守り通してゐるかれの家庭をまかなつてゐるのは、令孃のイシユベルである。總理大臣としての晩餐會も、夜會も、アツト・ホームも、その招待の主は、悉くかれとイシユベルの名が連ねられてある。このイシユベル孃に、海軍會議の首相秘書官に任命されて居るマルコム君が手傳つて、主婦のない淋しい家庭の「對外」陣立は出來てゐる。

この二人は無論ロンドンに生れた人々である。だのに、父の希望からか、それとも自己の趣向からか、二人ながらあのスコットランド特有の縞格子の袴をはいて、本當のスコッチのやうに振るまつた。近頃はロンドンの若い女で、煙草を吸はないものなどは少ないのに、イシユベル孃は煙草も吸はなければ、顏にお白粉氣は微塵もない。髮を後に無造作に束ねた頭の上に、スッポリ赤い帽子を被つて、われ等の後に隨つた。

『こゝは大變いゝ。こゝに週末に來ると、氣も、心もすつかり變つて、何ともいへぬいゝ氣持になります』

マクドナルドはそういひながら、田舍を讃美した。このチエッカースといふのは、ロンドンから三十哩ばかり北にある英國首相の週末休養場で、リー卿といふ華族が自分の別莊に建てたのを、そのまゝ――これに維持費をつけて國家に寄附したものなのである。

わたし達は暫らくして小山の頂上に達した。霧の深いこの地方としては珍らしく晴れて、廣く開いたバッキンガムシヤー一面を俯瞰することが出來た。

『あれがミルトンの失樂園を書いた場處です。そら、あそこに森が見えませう。あの樹林の中から米國に渡つたメイフラワー號の船材をとつたといひます。』

かれは持つてゐるステッキで指さしながら一つ〳〵に説明してくれた。冷たい風が激しく麓から吹いて來た。見ると外套を着ないのは首相一人だけである。

『あの小山の先の塔は南阿戰爭に死んだ人の記念碑です。それから、

の方面が、スコットのアイバンホーが活躍した舞臺です』

庭自慢が、自分の庭を說くやうな誇りが、かれの口調にあつた。

歸りの道には馬の蹄の跡が、青草の上に幾つも殘つてそこが丸く切れてゐた。

『これはひどい、實に亂暴だ、なんとしたことだ』

かれは同じやうな言葉を澤山並べて、恐らくは獵に來て荒したであらう馬足の跡を恨めしさうに見た。そして何回も何回も靴で、その切れ目を踏んで直さうとした。

『これだけの草になるのに、どれだけの年月と丹誠がかゝると思ふ』

かれは獨り言のやうにさういひながら、芝を踏んでまはつた。

私は思はず、マクドナルドの一面に打ち當つたやうな氣がした。英國の有名な記者であるネヴィソンは、この前の選擧の時にかれの遊說に同行したが、『かれの魂は自然の美醜によつて踊るやうである』といつた。『わたしはかれほど自然に敏感である人を知らない。かれの魂は自然の美によつて踊り、自然の醜によつて沈むのだ。田舍の景色に富んでゐるところに行くと、かれは戰鬪的になり、じめ〳〵したところに行くと氣の毒なほど憂鬱になる』

かれは一個の詩人である。『マクドナルドを政治界に送つたことにより、英國は天才的な文學者を失つた』とある人はいつたが、かれの著作と演說に、豐沃な文才を見る時に、その言葉が決して誇言でないことを知るであらう。

淋しい家庭生活にあつて、かれの唯一の伴侶は自然である。

『さうですネ、私に自由な道を選べといふならば、一日に四時間讀書して、二時間書くことが地上の樂園でせうネ。自由に書籍が讀めて、それから胸中に湧く諸種の感想を書き現はす時間さへあれば、私は別に他に望むことはありません』

とかれは語つたが、併しこれに加へる唯一の條件は自然の美にあることは勿論である。

5

應接間に歸つて來てのわれ等の話しは、更にいろ〳〵な問題にわたつた。

『世界大戰後、國家主義の勃興はどうだ』

かれはクリスチヤナ市がオスロといふ名にかはり、チエッコスロバックなどの町が、いづれも自國流に改名したといふ話しを聞いて、さう嘆息していつた。

『それは無理はないでせう』

誰かゞいふと、かれは直ぐ聞き咎めて

『自己を主張するのはいゝ、併し自己の獨立を主張するのに、他人を蹴仆していゝといふ思想が當然でせうか』

言葉に力を入れて駁擊した。

『自己主張といへば、あなたの御演說の中の「[illegible]」といふ字句が問題になつてゐるではありませんか』

私はさういつて聞いてみた。ロンドン會議の開會式當日におけるマク

ドナルドの演說はその文章において、その內容において、堂々たるものであつたが、その最も重要な文字が英文法からいつて間違つてゐるといふので、英文學者の間から批難が起つた。かれは軍備縮少が各國民に深い關心を有する事實であることを述べた後で

『英國の道は海の上にある。それは小さい島だからである。その國民の種族は海から來た、その防禦と公道は海である、その國旗は海の旗である。われ等の海軍はわれ等にとつて飾り物ではない、それはわれ等自身である。』

その It is us が、文法といふものは言葉自身よりも大切であると思つてゐる英文學者に引つかゝつた。それは It is we か、It is we ourselves か、それとも It is of us かでなければならない。『一國の總理大臣が、こんな文法上の誤りをしては敎育上からいつてもよくない』といふ批難があがつた。敎科書に活字一つ間違つても、國體が潰れてしまうやうに騷ぐ愛國者は、どこかの國の專賣ではない。

『そう、問題になつてゐるやうですね、あれは無論文法上からいへば私の間違ひです。それを發見して鬼の首でもとつたやうに喜んでゐるんです。併し It is we ourselves で強い感じが出ますか。』

そういつてかれは問題を一笑に附した。

それからわれ等の話題は、も一度社會主義に歸つた。

『レニンとは同じ會に出た筈ですが覺えてゐません。かれが出たロンドンの會に私も出て居つたのですが、つい氣がつきませんでした。かれが非常な闘士だと聞いたのは、それから餘程後だつたのです。トロッキー？トロッキーとは逢ひません。かれは多く米國に居つたんではありませんか？』

かれは私に反問した。私はトロッキーがアメリカに居つたことは事實だが、その後ロンドンに來て居つたことが、かれの自著の中に書いてあることを手短かにいつた。

『米國といへば、私が餘程前に米國に行つた時に、ド・レオンといふ社會主義者がニューヨークにゐました。私は雜誌でこの人を知つてゐたので、その事務所を訪問したことがある。事務所といつても汚ない室で、かれは紙の中に埋れながら、居眠りをしてゐた。起して自分が誰であるかを自から紹介すると「そうか、君が誰であらうと、おれには一向面白くないよ」といふんです。非社交的な人だと聞いてゐたが、これには少し驚きましたね。「それは知つてゐます。私があなたの雜誌に何が正しい社會主義であるかを書くことが出來たら興味が出ませう」といつてやりました』

かれの駁撃力は、その靑年時からの特長であつた。

6

『今度の軍縮會議は東京で開いたらどうですか』

かれの注意が、とかく會議から去らないのを見て、私はそういつた。

『東京？』

東京といふと、列席の人達は『東京はいゝな、東京を見たいな』といひあつた。令息のマルコム君はニコ／＼笑つてゐた。かれは昨年の秋に京

都で開かれた太平洋會議に出席して、クリスマス前に歸つて來たばかりのホヤ〳〵の日本通である。マクドナルド一家が、個人的には如何にも日本人に好意を見せて、何くれとなく世話をしてくれるのは、日本で受けた歡待の返禮の意味でもある。

『東京といふと遠すぎるからな』

と誰かゞ口を出すと、マクドナルド氏は

『その頃までには飛行機が通じて、もつと早く行けるやうになるよ』

と注意して、その實現に興味のあることを示した。それからかれは近頃の科學の發達が、驚くべき速力で進んでゐることをいつた。

『その發達の內で、最も驚くべきものはラヂオであらう。去年の秋、私はアメリカへ行つたでせう、その時にラヂオをやつたのですが、それを私の生れ故郷のスコットランドで聞いてゐた知人があります。私が放送室に這入つてイシユベルに「こちらへ行くのか」と、何氣なしに小さい聲でいふと、それがスコットランドへ聞えたのです。』

かれがフーヴアの客として紐育に上陸した時の模樣も、自動車の音から、歡迎の辭まで、ロンドンに居つて手にとるやうに聞えたといふのである。

『かうなると國民全體が自分達もその關係者の一人だといふ氣になります。つまり歡迎されたり、歡迎したりするものはたゞマクドナルドとか、フーヴアとかいふものでなくて、自身もその當事者だといふ感じを持つやうになります。それがどれだけ國際間の利益になりませうか……時に若槻さんのラヂオは日本にどういふ成績でしたか』

マクドナルド氏は若槻氏が北極を經由して放送したことを想出して私を顧みていつた。

『よく聞えたつて？　それはよかつた。そして國と國とが直接に話しあふやうになれば、世界はも少し變つて來るでせう』

かれは豫期して居つたことであるけれども軍縮會議を開いてみて國と國との疑ひがこれほど深いものであるかを、今更ながら驚いた。かれがセントジエーム宮に婦人代表の訪問を受けて、軍縮事業の困難を述べた話しには、神に祈るやうな調子があつた。

『たゞ今、佛國の代表ホーズレー夫人は、わたし達の大問題は、平和を安全と一致させることだといはれました。まことにさうです。この安全といふものはその內容において九割までは精神的です。もしわれ等が世界の人々に對して、かれ等は安全だと信じさせることが出來れば、邪惡な政治家がどう騷いでも軍備を增すために、國費を支出させることは出來ないでせう。恐れと不安心といふこの目に見えない綱が常に後から引張つて私達を前進させないのです。私はスチムソンさんと（同氏の方に顏を向けて）その國民を信用するか、かれ等はまた私達を信用するか。私はまた若槻さんを信用するか（若槻氏の方にむいて）、若槻さんは私を信用するか。……この疑問が私達の心からぬけるまでは、私達はいつまでも臆病な動搖を續けてゐるのです。少なくとも軍備の大きさについては。』

私はかつてウイルソンの演說を聞いて、それが世の不信を矯める宗敎家の說敎のやうな調子のあることを感じたことがある。マクドナルドの

それは祈りといつた方がいゝほど人の尙覺めざるを越えて、事理を説き、理想を追ふて循々として社會と人類に訴へる響きがある。

かれは南阿戰爭の時に、非戰論を高調して動かなかつた。世界大戰の時に總ゆる迫害を排して、毅然として戰爭反對を貫ぬきつくした。これがためかれはベルヂウムで軍隊に檻禁(かんきん)されたこともあるし、戰後二回の選擧といふもの無慘に敗戰して、かれの同情者すらも、かれが再び政界に出る機會はないであらうことを想つたほどである。

『世界よ、なぜ覺めないのだ』

かれの話しを聞いてゐると、かういつて搖ぶつてゐるやうな感じがある。今回の軍縮會議の協定の束縛期間を一九三六年までとして、各國の贊同を買つたのも、この間にせめて、ラヂオその他の仲介機關により人間が少し賢くなつて、國際間の疑心暗鬼が取去られることを期待してゐるからであらう。

7

女中や召使ひを周圍にをかぬマクドナルドは、なにかといふと直ぐ令孃のイシユベルを呼んだ。

『イシユベル、あのクロンウエルのライフ・マスクの抽出(ひきだ)しを開(あ)けてくれんか』

チエッカースはクロンウエルに關(かん)する蒐集で有名である。その歷史的な手紙もあれば、一族の肖像もある。他に見出しえない生像(ライフ・マスク)もあつて、それは奧深い抽出しの中に藏されて居り、その鍵をイシユベル孃があづかつて虎の子のやうに大事にしてゐるのだ。

『今日は外ならぬお客樣だから、財産全部お見せしませう』

かれは笑ひながら、そういつて令孃に開けさせたりした。

マクドナルドといふ名が話の種になつた時である。ある英國の紳士が

『自分の家内の祖母がイシユベル・マクドナルドといひますが、その家ではメクドナルドと發音してゐます』といふと、かれは孃の方にむかつて

『もうお前はお祖母(ばあ)さんになつたのか、馬鹿に早いではないか』

といつて、われ等を笑はした。

子供に對するかれの溶けるやうな愛情は、そこの空氣を和げた。子供達はまたなにかと父親に氣をつかつた。

『なぜマックは結婚しないだらうね』

と私はその後、ある英國人の消息通に聞いたことがある。

『あれで中々婦人にはもてゝ、申し込まれた人も一人二人あるのを僕は知つてゐる。だがかれは結婚しないんだ。かれの半生の情的歷史は死んだ妻と共に閉ぢて、また開かれることはないんだらう』

そういつて、かれはマック君が、どれだけ前の妻を愛してゐたかを語つた。

一九一一年の八月に英國に鐵道の大ストライキがあつた。その時に、丁度かれの妻は大病であつたが、かれは勞働黨の院內總務として妻の病床に侍つてゐるわけに行かなかつた。かれは心を殘して街頭に出て爭議の調停に當らねばならなかつた。

暑(あつ)い日で、妻(つま)のマーガレットは氷を欲しがつた。が、その氷はストラ

イキのためにどこにもなかつた。かれに代つて病床に居つたかれの友人は、ロンドン中捜して、漸く氷の一片をえて、それを病人に與へたといふ話しである。

『自分が代表する人々の福業のために、その愛妻に氷一つ與ふることが出來ず、ロンドン中をさがしたといふのだ。正にこれ一個の悲劇ではないか』

そういつてこの英人は溜息をついた。

かの女は五人の子供を殘して死んだ。マクドナルドはかの女の死の床に際して、その靈魂に捧ぐる一部の著作に精進した。

『かの女は、もしかの女が再び生れることができるならば、同じ道を生きることが出來るやうに希願すると、われ等にいつた。かの女はまたかの女が努力し、助けて來た主義と人をわれ等に依托した。九月八日、太陽が西に傾いて落日の榮光に照り榮ふる時、病室が夕陽の悲しい光に滿つる時、かの女は逝つた』

かれは妻の名に捧げた一書において、妻の死を悲しんでそう書いて居る。

妻の影像をその遺兒に見出して、かれは一切第二の家庭を拒絶した。生後三四ケ月の赤兒を末に五人の子供を、かれは男の手で育てた。今マルコム君は代議士であり、二十五六歳にしかならぬイシユベル孃がロンドンの市會議員であることに、かれは何にも代へられぬ喜びを感じてゐる。

『もう歸らなければならないのですか』

汽車の時間が迫つたので、われ等は立ちあがると、かれはマルコム君とイシユベル孃と共に出口のところまで送つてくれた。親子三人は夕暗の中に一列に立つた。

私は自動車の中から、この睦まじい、併しながら淋しい一家を今一度見た。マクドナルドは、あの華やかな雜談に耽りながら依然として淋しい姿である。私はかれの演説と話しの中に英國人の誰もが持つてゐるユーモアと氣輕がないことを想出してゐた。生一本の眞摯さと詩人に近いまでの純情が生活的には一生の間、一人の戀人しか持ちえず、思想的には社會主義のバンナーをかゝげて、また他を顧みる餘地をなからしめたのではないか。

民主的でありながら貴族的であり、冷靜でありながら熱情的であり、論理的でありながら詩人的であり、戰闘的でありながら調和的である。それがかれの矛盾した姿である。そして、この矛盾を蔽ふてかれの抗し難いパーソナリチーがある。

この純情人を、その宰相に持ちえた英國人は不幸であらうか。私は夕暗の汽車の窓から、葉の落ち切つた森の去來を眺めながら家庭姿の『かれ』を頭に置いてゐた。

戰雲に乘る女怪

—世界怪奇實話VI—

牧逸馬

一

露獨連絡の國際列車は、波蘭の原野を突つ切つて、一路伯林を指して急ぎつゝある。

一九一一年の初夏のことで、露西亞の國境を後にあの邊へ差し掛ると、車窓の兩側に廣大な緑色の絨氈が展開される。風は草木の香を吹き込んで快い。一等の車室を借り切つて莫斯科から巴里へ急行しつゝある若い露西亞人ルオフ・メリコフは、其の植物のにほひに鼻孔を擽られながら、窓の外に眼を遣ると、其處には、今迄の荒涼たる景色の代りに、手入れの行き屆いた耕地がある。白楊の並木と赤瓦の農家がある。西歐の天地だ。メリコフは汽車の速力を享樂してうつとりしてゐる。

ボウゼン驛に一寸停車して動き出すと間もなく、車室の外の廊下に男女の爭ふ聲がするので、メリコフは覗いて見た。車掌がボウゼンから乘つて來たらしい、二十五六の上品な服裝の婦人を、何か口汚く罵つてゐる。その婦人も仲々負けてゐない。切符に手違ひがあつて、豫約してある車室が取つてないといふのだ。貴族階級の甘やかされてゐる夫人に特有の口調で、女は猛烈に車掌に食つて掛つてゐる。

「切符はいまボウゼンで買つた許りですけれど、三時間も前に、二つ三つ向うの停車場に止まつてゐたこの列車に驛から電話を掛けさせて車室を申し込んであるのよ。ほら、ちやんと斯う列車番號から車室の番號まで書いてあるぢやないの。」

「そんなこと言つたつて、滿員だから仕方がありませんよ。」

「仕方がありませんて、何うするつもり？あたしを此處へ立たしとく心算？隨分馬鹿にしてゐるわ。」

『冗談ぢやない。そんな處に立つてゐられちや邪魔でさ。次ぎの驛で降りて貰はう。』

『何ですつて？』

『何が何だ。次ぎの驛で降りろと言ふんだ。』

『何て失禮なやつでせう。名前を仰言い。申告してやるから』

と言ふやうな事から始まつて、車掌は職權をかさに怒鳴り立てる。女はこゝぞと許りヒステリカルに泣き出す。大變な騷ぎだから、メリコフも默つてゐられない。車掌の言ひ草も可成り横暴なので、スラヴ族は多血質だ。むかつとして、頼まれもしないのに、女の助太刀に飛び出して行く。

『車掌君、君は婦人客に對して物の言ひ方を知らない。不親切極まる。切符の手違ひと解つたら、出來ない迄も、一應車室の融通を考へてみるのが至當ぢやないか——まあま、貴女もさう泣くことはないでせう。』

女を庇つて、車掌を白眼みつけてゐる。

伯林ドロテイン街に住む獨逸政府直屬の女國事探偵フォン・リンデン伯爵夫人は、四日前に、外務當局から一通の命令を手交さ[illegible]

四日後の今日、露獨連絡の國際列車によつて露西亞外務省から巴里駐在の露西亞大使の許へ重要秘密書類を運ぶ一人の外交郵便夫が通過する。この外交郵便夫といふのは、郵送出來ない外交上の重要物件を身に附けて持つて行く、まあ、早飛脚みたいなもので、何處の國でも、必要に應じてやつてゐる。暗合は頻繁に切り換へることになつてゐるが、その新しい鍵語などはとても書留やなんかでは送れないから、そこでこの外交郵便夫といふのが選ばれて、身を以て遞送の任に當る。常備の譯ではない。大概、書記生どころの若い外交官を出すことになつてゐる。

ところで、女密偵フォン・リンデン伯爵夫人が受取つた獨逸外務省の通牒である。露西亞の一外交郵便夫が、ニコライ・ロマノフの宮廷から巴里の大使館へ宛てた密書を帶びて獨逸を通過するとある。それに對するスパイの役目は、不言不語の裡に解つてゐる。フォン・リンデン伯爵夫人は、ちやんと心得てゐた。

その時、密偵部の首腦が、細かい區分けになつてゐる書棚から一通拔き取つて默つて、夫人に渡したといふ『文字の肖像書』（デスクリプション）を見ると、

ルオフ・メリコフ——三十二歳。白系韃靼人。希臘正教徒。前近衛[illegible]の各國語に通じ、少しく緬甸語をも解す。兄は緬甸在住の貿易商。メリコフは反獨主義者とし

て知らる。また英米をも嫌惡す。性格は迷信的にして、自家の宗教、主義、主張等に關しては、絶大なる狂信者なり。感激性に富み、女色を好む。騎士的。勇敢。買收の見込み無し。獨逸人の仕事だけに、微に入り細を穿つて調べてある。その外交郵便夫の人物に關して、これ丈け豫備智識があれば、充分だ。フォン・リンデン伯爵夫人は、すつかり甘やかされた奥樣の役」に扮して、途中のボウゼン驛から乘り込む。

まあまあ、といふやうなことで、留め男に割り込んで來たのが強さうな立派な紳士だから、車掌は忽に降參して、其の場はそれで濟んで終ふ。メリコフの扱ひで、やつと車室の都合が付く。フォン・リンデン伯爵夫人は、地獄で佛に――西洋の事だから神樣だが――その神樣に會つたやうに喜んでゐる。悅びの餘り、こんなことを言つた。

「何卒伯林でお暇が御座いましたら、鳥渡でもお立寄り下さいまし。」紋章入りの華奢な名刺を渡して、「主人もゆつくりお眼に掛つて、お禮を申し上げることで御座いませうから。」

晩餐の招待だ。淑やかな女である。殊に盛んに主人が主人がと言ふから、良人があるならとメリコフは安心した。が、是非訪問すると約束した譯ではない。

其の列車には、フォン・リンデン伯爵夫人の他に、もう一人の獨逸密偵部員が、先に乘り込んで、メリコフを見張つて來てゐた。不親切な車掌がそれだ。ちやんと手筈が出來てゐた。口論は八百長だつたのである。

勿論巴里直行の豫定だ。伯林で乘換へがある。この、伯林で乘換えの汽車を待つてゐる間に、メリコフは、今一緒に降車して別れた許りの若い伯爵夫人のことを思ひ出した。是非訪問すると約束した譯ではない。しかし、伯林には一泊して行つてもいゝのだ。それに、先方には良人も居るし、身分のある人だから訪ねて行つたところで、大して間違ひのある筈はない。もうそんな魅惑を、夫人はメリコフの上に殘して行つてゐた。美しい女だ。あゝして停車場の雜沓の中で別れの握手をして、それきりといふのは、何うも面白くない。なんかと、色んな理窟で自己納得の後、ホテルに鞄を下ろしたメリコフである。間もなく、この、三十二歳の白系露國人、希臘正教徒、前近衛中隊長、迷信家で狂信家で感激性に富み、騎士的で勇敢で買收の見込みのない人、別書（デスクリプション）は、ドロテイン街の家の玄關に立つて、にこにこ笑つてゐた。出掛けて來てみると、驚いた事には、美しいフォン・リンデン伯爵夫人が泣かん許りの顏をしてゐるのだ。スタットガルト市の親戚に急病人が出來て、良人伯爵はたつた今其地へ向

行したと言ふ。電報を見せて言ふのだから、騎士メリコフはすつかり眞に受けた。主人の留守中ではあるが、その儘歸る譯には往かないので、ゆつくり上つて遊んで行くことになつた。やがて晩餐が出る。卓上には、美味と佳酒と伯爵夫人の愛嬌とある。葡萄酒と火酒だ。大いに飲んだ。あのデスクリプションには一つ足らない所があつた。この前近衞中隊長殿は猛烈な酒豪だ。『魚が水を飲む如く酒を呑む』といふ一項を挿入する必要があるとフォン・リンデン伯爵夫人は思つた。仲なか醉はないのだ。心がしやんとしてゐて、時々思ひ出したやうに、そつと片手を卓子の下へ遣つて短衣の上から腹部の邊りを押してみたり、撫でて見たりしてゐる。彼處に祕密の肌帶をしてゐるのだな、と夫人は此方からさり氣なく白眼みを付けてゐる。

一層醉ひ潰しに掛つた。

一層醉ひ潰しに掛つたが、一向利き目が現れない。仕方がない。こいつを床へ送る爲にはもつと強い飲物が必要である。フオン・リンデン伯爵夫人と、給仕に出てゐた執事との間に素早い眼配せが交された。次ぎに運ばれて來た火酒の壜からは、相手にだけ擬めて、自分は飲む態に止めて置くやうに、夫人は、眼立たないやうに注意した。三十分もすると、希臘正教徒の生ける屍が出來上つた。その、完全に感激してぐつたりしてる狂信家を、そつと夫人の寢室へ運んだ。別室に待つてゐた指の利く專門家のスパイが呼び込まれて早速メリコフの身體檢査に着手する。メリコフは、重要さうにふくらんだ折り鞄を持つて來てゐて食事の間も足許に引き付けてゐたが、何うせ古新聞紙でも詰め込んだものでそいつへ注意を外らさうといふ看板に決つてゐる。そんな物へは眼も呉れなかつた。伯爵夫人の指揮で、直ぐに腹部の扣鈕を開く。案の外、膚に直接嚴丈な革帶を締めてゐた。ポケットがある。特製の錠が下りてゐたが、指仕事專門のスパイは、錠を壞さずに巧みに開けて、中から書類を取り出した。その書類を地下室へ持つて寫眞を取つたのち、直ぐメリコフのポケットへ返して錠を下ろし、元通り洋服の扣鈕を掛けて置いた。メリコフはこんこんと眠つてゐる。

二

このメリコフの腹帶から取り出されて寫眞に寫された書類が何であつたか、一說には、センセイショナルな内容を有する露佛祕密條約の成文だつたとも傳へられてゐるが、未だに判然しない。しかし、この爲に、歐洲大戰に際して、露西亞は獨逸に對して、非常に不利な立場に置かれたと言はれてゐる。

アイヒレルといふ密偵部員の一人が、其の夜矢張りドロテイン街の家に詰めてゐた。他の連中がベルトから出た書類を地下室へ持つて行つて撮影してゐる間、アイヒレルは、寢臺の上に昏睡狀態にあるメリコフを張番してゐた。メリコフの所持品は凡て着衣から取り出されて、傍らの小卓の上に並べてあつた。アイヒレルは、指紋が附かないやうに手袋を穿めて、其の一つ一つを檢査してゐたが、その內、ふと眼に止まつたのは、メリコフの萬年筆だつた。それは明らかに必要以上に太い物だつた。不審を打つて分解してみると、果してインキのタンクに當る所から上等の日本製薄紙に細字で書いて小さく卷いた密書が出て來た。これも早速寫眞に取つて、すぐ萬年筆の中へ返して置いた。その時は何だか判らなかつたのだが、これは、先の革帶から出た本文の暗合を讀む鍵語で、これが無くては、その複雜極まる暗合文は到底讀み得ないところだつた。この功績で、アイヒレルの名は獨逸のスパイの間に記憶されてゐる。所持品をすつかり元の場處へ返して、夫人以外のスパイが室外に去ると、暫らくしてメリコフは吾れに返つた。見ると、自分は寢臺に寢てゐてフオン・リンデン伯爵夫人がにつこりして傍に立つてゐるから、びつくりして起き上らうとすると、

「あら、お眼覺め？食卓でお眠りになつたものですから、こちらへお伴れ申しました。隨分ぐつすりお寢みで御座いましたわ。」

はつとしたメリコフが、急いでバス・ルウムへ行つて、手早く持ち物を檢べてみると、腹卷のポケツトにもちやんと鍵が掛つてゐるし、そつくり元の場處にある。何一つ紛失してもゐなければ、觸れた形跡さへないので、ほつとして寢室へ歸ると、美しいフオン・リンデン伯爵夫人が、强烈なイツトを發散させ乍ら寢卷に着更へてゐた。

しかしメリコフは內心充分の疑ひを抱いたのだらう。證據のない事だし自分も暗い饗應に預かつてゐるので、素知らぬ顏をして巴里へ着いたが、大使館へ出頭して外交郵便夫の役目を果すと同時に失踪してしまつた。その後大戰は始まる。露西亞はあんなことになる。一メリコフの行衞など搜しもしなかつたらうが、突然消え失せた理由だけは、後日處刑された稀代の女スパイ、フオン・リンデン伯爵夫人ことマタ・アリの告白に依つて判明したのだつた。

世界大戰を背景に活躍した、あの有名な踊子のスパイ Mata Hari は、大戰に伴ふ挿話中の白眉である。

この物語に伴奏をつとめるのは殷々たる砲聲だ。空を裂く爆

擊機の唸りは、何の頁にも聞こえるだらう。各國の無線は執拗にマタ・アリの首を追つて、灯火が燃えるやうに鳴り續ける。彼女の報告一つで、深夜海底を蹴つて浮かび上る潜航艇もある。當時初めて現れた鋼鐵の怪物、超弩級タンク「マアク九號」も、その壓倒的な體軀と銃火の牙をもつて、この全篇を押し廻るのだ。將軍、參謀、陸軍大臣等要路の大官をはじめ、一皇太子と二人の帝王まで、楚々たる美女マタ・アリの去來する衣擦れの音につれて、踊らせられてゐる。

Mata Hari――彼女自身が好んで用ひた「傳說」によると、惡魔的性向の東洋人だつたとある。中部印度に生れた先天的ヴァンプで、長らく秘密の殿堂に參籠して男性魅縛の術を體得したのち、突如風雲急なる歐羅巴に現れて、その蠱惑的美貌と、不可思議な個性力と、煽情的な體姿とを武器に、幾多國政の權位に就く人々を籠絡し、大戰に當つては、雲霞の如き大軍をすら、彼女の策謀一つで、瞬く間に墓場へ追ひ遣つてゐる――と言ふと、このマタ・アリは、それ自身、素晴しい物語的存在のやうだが、事實は、マタ・アリは完全に普通の女であつた。誘惑的な身體と顏以外には、何ら特別の才能があつた譯ではない。尤も、美しい丈けで平凡な女だつたからこそ、あれ程思ひ切つた活躍が出來たのだとも言へやう。

マタ・アリは、歐洲大戰の渦中にあつて、策を倂い、凡ゆる近代的智能を傾けて闘つた、獨逸スパイ團といふ厖大な秘密機構の一重要分子であつた。こゝに於て、このマタ・アリの生涯を語ることは、今日の太陽の如き生色を帶び、現代其のもののやうな複雜性を暗示し、しかも、アラビアン・ナイトを思はせるやうな絢爛たる回想であらねばならぬ。

マタ・アリの自叙傳なるものがある。それによると、彼女は、富裕な和蘭人の銀行家と、有名な爪哇美人の母との間に、爪哇チエリボン市に生れた。十四の時印度に送られて神秘敎祭殿に巫女となり、一生を純潔の處女として神前に踊る身となつた。マタ・アリといふ名は、彼女の美貌を禮讃して、修驗者達がつけたもので、Mata Hari といふのは、「曉の眼」といふ意味である。この曉の眼が十六歲のとき、蘇格蘭の貴族で、印度駐在軍司令部のキャンベル・マクリイ卿が、祭壇に踊つてゐる彼女を見初めて、私かに神殿から奪ひ去つた。マクリイ卿夫妻は、印度で贅澤な生活を續けて、一男一女を擧げたが、土人の庭師が、マタ・アリへの横戀慕から彼女の長男を毒殺したので、マタ・アリが良人の拳銃で庭師を射殺したる事件が持上つて、夫妻は印度にゐられなくなら[illegible]ると同時に、マクリイ卿との結婚生活にも破綻が來た。獨り娘を尼院に預け

てマタ・アリは離婚を取り、當時、大戰といふ大暴風雨の前の不氣味な靜寂に似た、世紀末的な平和を享樂しつゝあつた歐羅巴に、「自活の途を求めた。

その時のことを、マタ・アリは斯う書いてゐる。

『最後にわたしは、印度の祭殿で踊り覺えた舞踊をもつて歐洲の舞臺に立ち、神祕的な東洋のたましひを紹介すべく努めやうと決心しました。』

すると、伯林の劇場(こや)に掛つてゐる時の事である。政府の一高官に依賴されて、宴席の女主人とし、また舞踊家として、丁度其のとき伯林に滯在中だつた露西亞大使を歡待することになつた。その目的の爲に、善美を盡したドロテイン街の家がマタ・アリに呈供されて、彼女も、初めてフオン・リンデン伯爵夫人と名乘り、引き續き其の邸に住むやうになつたのだつた。

斯うしてマタ・アリは何時からともなく、一度内部を覗いた以上、死に依つてでなければ出ることを許されない、鐵扉のやうな獨逸密偵機關に把握されてゐる自分を發見したのである。

『フオン・リンデン伯爵夫人として、私は始めて、無意識のうちに獨逸帝國のためにスパイを働いてゐるじぶんを知りました。そして私は、それが私に一番適した性質の仕事であることを思つて興味をさへ感じ出したのです。』

マタ・アリは、死刑の日を待つ獄中で、この告白體の自傳を書いたのだ。心理的にも、そのペンからは事實を、そして嚴正な事實だけしか期待出來ない場合である。にも係らず、別に愛國の眞情からではなく、只金錢づくで、雇はれて定業的スパイに從事する程の性格だから、先天的嘘言家だつたに相違ない。それが嘘言そのものを生活するスパイの經驗によつて、一層習練を積み、出鱈目を言ふ事はマタ・アリの習性になつてゐたとみえる、この「傳説マタ・アリ」として、未だに一部の人に信じられてゐる、彼女の死の自傳なるものが、全部創作だつた。

何處からどこまで、食はせ者だつたのである。

が、珍しい美人だつたことは、傳説ではない。これだけは現實だつた。丸味を帶びて、纖細に波動する四肢、身長は六呎近くもあつて、西洋好色家の概念する暖海の人魚だつた。印度の混血兒と自ら放送した位だ。家系に黑人の血でも混入してゐるのか、淺黑い琥珀色の皮膚をしてゐて、それが又、魅惑を助けて相手の好奇心を唆る。倦(たる)い光りを放つ、鳶色の大きな眼。强い口唇に漂つてゐる曖昧な微笑。性愛と殘忍性の表情。

三

要するに手先だつた。マタ・アリの専門は、男の慾望を扱ふことだけで、淫奔で平凡な女でしかなかつたが、この、平凡なマタ・アリの背後に在る獨逸のスパイ機能は、およそ平凡から遠いものであること、言ふまでもない。それが、マタ・アリを大々的に利用したのだ。娼婦型の美女が微笑する。スパイとして國境から國境を動き廻る。戰時である。歴史的な挿話にまでなつてしまつた。

土耳古に教育制度の變革が起つて、その委員會が生れると、第一着手として、百五十人の土耳古の學生を外國に留學させることになつた。人選も濟んで、さて何國(どこ)へ遣らうといふ段になつて、それが問題だ。衆議まちまち仲々決まらない。騒いでゐると、英佛獨のいはゆる三先進國が、銘々自分の國へ來て貰ひ度いので、夫ぞれ有利な條件を持ち出し、自己宣傳をやつてまるで宿屋の客引きのやうに、こゝに猛烈な留學生の爭奪戰が開始される。

土耳古の學生など何處へ留學しやうと、歐羅巴の大勢には一向關係ないやうだが、それがさうでない。と言ふのは、今でこそ書生だが、皆一粒選りの秀才である。これが外國の大學に學んで、法政經濟、工科學百般、各自専門を修めて歸國すると、土耳古革新の第一線に立つて大臣參議、國政を調理して土耳古を運轉しやうといふのだから、今その書生連が何國へ留學するかは、十年廿年後の土耳古が、英色に塗られるか、佛色を帯びるか、獨色を呈するか、つまり將來の對土耳古關係が今決定されると言つていゝ。土耳古を中心に、近東方面への投資進出と商品販路の開拓を計畫してゐる三國だから、是非俺の國へと言ふので、自然激烈な競爭になつた。

ところが、獨逸の旗色が惡くて、留學生は何れも英佛へ奪られさうである。斯うなると獨逸の誇る所謂文化(クルツウル)の威信にも關はる問題だ。政府は何時しか躍氣になつてゐる。色いろ探りを入れて見ると、目下巴里滯在中の埃及王族の一人に、埃及總督(ケディーフ)とも親交のあるアバス・ヌリ殿下といふ方がある。この方が大の英佛贔負で、しかも土耳古の教育制度改革委員會の上に絶對的勢力を投げてゐるので、そのために大勢が英佛に傾きつゝあるものと知れた。

既に留學生達は、英吉利と佛蘭西と二國の大學へ振り當てられることになつて、[illegible]てゐる。一九一二年の三月だつた。

するど、巴里のスパイから逸早く伯林に報告が飛んだ。そのアバス・ヌリ殿下が、留學生問題の後仕末のため巴里からコンスタンチノウプルへ急行の途、伯林を通つて二三日は滯伯するらしいと言ふのだ。色仕掛けに限るとあつて、ドロテイン街のマタ・アリへ命令一下。

こゝを日本のメロドラマで往くと、委細飲み込んだ姐御が、湯上りの身體を鏡臺の前に据えて、諸肌脱いで盛大な塗立工事に掛らうといふところ。手ぐすね引いて待ち構へてゐる。

政府總出の出迎へ。埃及國旗。軍樂隊。儀仗兵。大警戒。寫眞班――非公式の旅行なのに、伯林停車場へ着いてみると、大變な騷ぎだから、アバス・ヌリ殿下は、何うして知れたんだらうと不思議に思つてゐる。が、何の途、歡迎されて悪い氣はしない。歐亞雜種（ユーラシアン）の女富豪且つ天才的舞踊家として、マタ・アリが殿下に紹介されたのは最初の晩餐會の席上だつた。

後は譯はない。計畫通りに進んで、マタ・アリの嬌態が、殿下をドロテイン街の家へ惹き寄せる。應接間を通り越して、彼女の××へまで惹き寄せてしまつた。

アバス・ヌリ殿下は、餘程マタ・アリが氣に入つたのだらう。朝になると、政府が狙つてゐたやうに、マタ・アリをコンスタンチノウプルへ同伴すると言ひ出した。斯うして、一夜許りでなく、マタ・アリを殿下に附けて置いて、獨逸に好感を持たせるやうに仕向け、その間に、側面から運動しやうといふ獨逸の肚だつた。で、マタ・アリも大いに喜んで、殿下のお供をして土耳古へ發たうとしてゐると、巴里の埃及關係者から思ひ掛けない情報が飛んで來て、この獨逸の策略はすつかり畫餅に歸して終つた。アバス・ヌリ殿下が、豫定を變更して、急遽巴里へ引つ返したのである。

大戰當時の佛蘭西の密偵局に、獨逸のスパイ團を向うに廻して智慧競べを演じ、散々惱した辣腕家に、「第二號」と稱する覆面の士のあつたことは、餘り有名だ。それが誰であつたかは、當時も今も判つてゐないが、アバス・ヌリ殿下の行動に危險を看取して俄かに呼び返したのは、この第二號だつたと言はれてゐる。また殿下自身、實は佛蘭西密偵部の同志で、自發的にあゝしてドロテイン街の家を探險したのだといふ、穿つたやうな説もある。あの露西亞の外交郵便夫ルオフ・メリコフ事件をはじめ、この邸で奇怪な出來事が連發して來たので、少くとも佛露兩國のスパイは、疾うから此の伯林ドロテイン街の大邸宅と其の美しい女主人、伯爵の居ない伯爵夫人フォン・リンデンとに眼を付けてゐたのだつた。

この事があつてから間もなく、ドロテイン街の家は忽に閉鎖された。これからのマタ・アリは、縦横に國境を出入して諸國に放浪する、スバらしいスパイである。

眞個の活動に這入る。

瓜哇などとは嘘の皮で、和蘭に生れた。家はさゝやかな書籍商。「朝の眼(マタ・アリ)」も夜の眼もない。本名は Marguerite Zelle。印度内地の神殿といふのが、實は首府ヘイグ市近郊の宗教學校、尼さんになる心算でこゝで教育を受けた。が、早くも少女時代に飛び出して、結婚してゐる。勿論相手は貴族でも何でもない。強ひて言へば、兵營の貴族だつた。和蘭に遊びに來てゐた、若い英國士官マクリイの軍服は、後年の「朝の眼」には、充分貴族的に見えたかも知れない。一緒になると直ぐ、マクリイは印度駐屯軍附きを命じられた。後のマタ・アリことマルガリット・ツエルもくつゝ付いて行く。

—だから、印度へ行つたことは行つたのだ。が、南國に住むと、特質が強調されて、潜んでゐた個性が現れると言はれてゐる。青年將校マクリイがそれだつた。人が變つたやうに、飲む買ふ手に負へない。おまけに、給料だけでは足らないから、マルガリットは、良人の命令で、同僚の所へ金を借りに行かなければならない。それも、何んな事でもいゝから、先方の××××して、兎も角借りて來いと言ふのだから非道い。殖民地の若い軍人だ。獨身者が多い。周圍は黒い女許りの所へ、マルガリットは白い中でも美人である。要求と××に、皆爭つて金を借すやうになつた。間もなくマクリイ夫人は××なのか、聯隊附きの賣笑婦なのか判らなくなつてしまふ。そんな生活が續いた。マルガリットも段々慣れて平氣になる。後年マタ・アリとしての活躍の素地は此の印度時代に築かれたものだ。自傳では、此處の所を鳥度浪漫化して、神前に巫女を勤めた等と言つてゐる。

この間に、舞踊を少し習つた。勿論祭殿で踊つた譯ではなく、歐羅巴へ歸つても、寄席位へ出て食へる様にして置く心算だつたのだらう。Mata Hari といふ名は、言ふ迄もなく自選自稱だ。

四年の後歐羅巴へ歸ると同時に、離婚して、初めて踊り子マタ・アリとして、巡業して歩く。舞踊其のものは、何うせ彼女一流の出鱈目に近いものだつたに相違ないが、裸體なので評判になつた。殊に東洋人といふ觸込みだから、到る處で珍しがられて瞬く間に好い贔負が付く。本國の和蘭では、當の首相、伯林では例のお洒落な皇太子を筆頭に政府のお歴々、佛蘭西では陸軍大臣が、夫ぞれ彼女の愛を求めて、當分に得てゐる。知名無名

の終邊に到つては、彼女自身記憶出來ない程だつた。

ドロテイン街の家へ落付いたのは餘程後の事だが、この家はマタ・アリの活動と緒に、獨逸人は未だ誰も忘れてゐない。近處では、途轍もない金持ちの女が住んでゐるのだと許り思つてゐた。家具、室内裝飾等、贅を盡したものであつたことは勿論だが、各室到る處に、凡ゆる角度に大鏡が置かれてあつて、屈折を利用して、思ひがけない場處から覗見出來るやうになつてゐた。室内に一人でゐても、この鏡の關係と、天井の通風口の格子とに氣が付けば、上下右左に無數の見えない視線を意識した筈だ。素晴しい床ランプのコウドと見える、細卷きの電線は、實は、隣室の聽取機(ディクタフォン)に通じてゐた。面白いのは、地下室の酒倉である。各國民の口に適ふ爲の一大ストックを備へてゐた。あらゆる種類と産地と年代のワインは元より、火酒、椰子酒(アラック)、コニャツク、ウヰスキイ、ジン、ラム、テキラ――それに、沙酒まであつた。このサキと言ふのは、酒の事だ。殊に依ると、マタ・アリの手から、この「サキ」の饗應を受けた日本人もあるかも知れない。

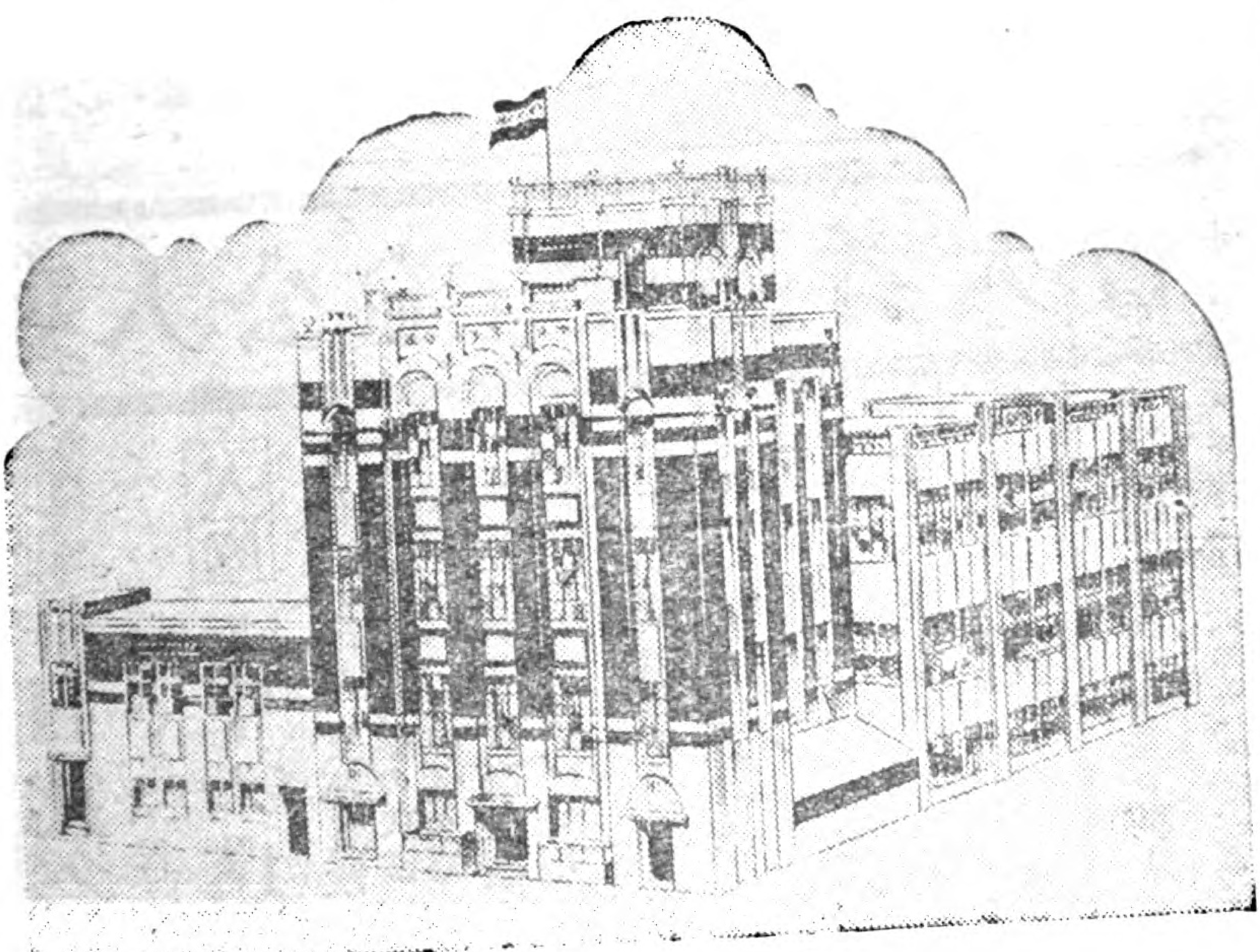
英國の密偵であるといふ嫌疑の深い、エリク・ヘンダスン少佐を物にして、或る祕密を聞き出す可き内命を受けた。マタ・アリは今ソフイア地方へ急行しつゝある。――本稿次號完結――

中外商業新報

朝刊 夕刊

國民の經濟生活を
指導し、啓發し、
充實する……

日本唯一の
經濟中心新聞



東京市日本橋區

懶惰の說

谷崎潤一郎

○

懶惰と云ふことは、簡單に云へば「怠けること」である。普通、懶惰の「懶」の字の代りに「嬾」の字を使つて、「嬾惰」と書くのをしばしば見受けるが、あれは間違ひで、矢張り「懶惰」が正しいやうである。今、簡野道明氏の「字源」に據つて調べると、「嬾」は「憎嬾」などと用ひ、「にくむ」或ひは「きらふ」の意である。「懶」の方は、「ものうし」「なまける」「おこたる」「つかれふす」の意で、柳貫の詩の、

借二得小窗一容二吾懶一

五更高レ枕聽二春雷一

と云ふ句が引例として擧げられてゐる。なほ「字源」から孫引きすれば、許月卿の詩に「半生懶意琴三疊」、杜甫の詩に「懶性從來水竹居」などとある。

以上の例でも分るやうに、懶惰は「怠けること」には違ひないが、「ものうがる」「億劫がる」と云ふ心持ちが多分に含まれてゐることを見逃してはならない。そして一層注意すべきは、「小窗ヲ借り得テ吾ガ懶ヲ容ル」と云ひ、「半生ノ懶意琴三疊」

と云ひ、「懶性從來水竹居」と云ひ、いづれも「ものうい生活」の中に自らなる別天地のあることを知り、それに安んじ、それをなつかしみ、樂しみ、或る場合にはさう云ふ境地を見えや氣取りにするかの如き傾向の存することである。

此の心持ちは支那ばかりでなく、古くから、日本にもあつて、代代の歌人や俳人の吟詠の中に例を求めたら定めし數限りもないであらうが、就中室町時代のお伽草紙のうちには「物臭太郎」と云ふ小說さへ作られてゐる。

……ただし名をこそ物臭太郎と申せども、家づくりの有樣人にすぐれてめでたくぞ侍りける。四面四町に築地をつき、三方に門を立て、東西南北に池を掘り、島を築き松杉をうゑ……錦をもつて天井を張り、桁、うつばり、たる木のくみ入には、白銀黄金を金物にうち、瓔珞の御簾をかけ、厩さぶらひ所にいたるまで、ゆゆしく作り立てて居ばやと心には思へども、いろいろ事足らねば、ただ竹を四本たて、菰をかけてぞゐたりける。……かやうに作りわろしとは申せども、足手のおかがり、のみ、虱、ひぢの苔にいたるまで、足らはずと云ふ事なし。もとでなければ商ひせず、物を作らねば食物なし。四五日のうちにも起き上らず、ふせりゐたりけり。

と、かう云ふ書き振りで筆をすすめてある此の物語は、純然たる日本人式の着想であつて、支那の小說の燒き直しであるとは思はれない。恐らく當時の零落した公卿などが、それこそ作者自身物臭太郎の如き生活をなしつつ、退屈紛れにこんな物を書いたのであらう。そして、幾分そのせゐもあらうが、作者は此の手に負へない怠け者の主人公を擯斥しないのみならず、その物臭さ、不潔さ、橫着さに、一種の掬すべき愛嬌を持たせてゐるのである。隣り近所の人人からは爪彈きされ、土地の厄介者のやうに書いてはあるものの、乞食かと思へば地頭の威力を怖れない程の氣骨があつたり、馬鹿かと思へば時の帝の叡聞に達する程の和歌の才能があつたりして、とうとうしまひには御多賀の大明神と云ふ神樣にまで祭られる。

昔、嘉永年間にペルリの船が浦賀へ來たとき、彼等が日本人について第一に感心したことは、他の亞細亞民族と違つて

如何にも綺麗好きであり、港の町筋や家家の掃除がよく行き屆いてゐると云ふ點にあつた。左樣にわれわれ日本人は東洋に住む人種中では最も活動的であり、最も怠け者でない筈であるが、それでもなほ此の物臭太郎の如き思想を持ち、文學を持つてゐるのである。「怠ける」と云ふことは決して褒めた話でなく、誰しも「怠け者」と云はれて名譽に思ふ者はないが、しかしその一面に於いて、年中あくせくと働く者を冷笑し、時には俗物扱ひにする考へは、今日と雖も絕無ではない。

此處まで書いて來て想ひ出したのは、近頃數日に亘つて大阪每日新聞紙上に連載されてゐる「米國記者團から見た日本と支那」と云ふ記事である。此れは最近アメリカの新聞記者連が東洋へ視察旅行に來て、歸國の後にその僞らざる感想をめいめいの紙上で發表した中から、大每社の高石眞五郎氏が面白さうな部分部分を紹介されつつあるもので、今日迄のところでは主として支那の惡口が多く、まだ日本へはお鉢が廻つて來ないけれども、あの調子だと日本の方が支那よりずつと好感を持たれてゐるらしい。彼等は支那へ着くと早々、第一に汽車の不潔なことに呆れて、ひどく胸糞を惡くしてゐる。そのくせ彼等の乘つた車輛は決して普通の客車ではなく、張學良氏が彼等のために特に京奉鐵道中の最良の車輛を準備させたのだが、それにも拘はらず、彼等は滿足に顏を洗ふことも髯を剃ることも出來ないやうな言語道斷な目に遭つた。これにはいろいろ、絕え間なき國内の爭亂とか、財政の窮乏とか、その邊の事情もあらうけれども、現今の滿洲は支那に於いて最も秩序の保たれてゐる裕福な地方であり、近年は内亂も終熄してゐる形であつてみればさしあたり辯護の足しになる口實はあるまい。かく云ふ私自身も、曾て京漢鐵道の一等車に乘つて彼等と同じ經驗を嘗めた記憶がある。北平から漢口までざつと四十時間のあひだ、寢臺車に雨漏りがするくらゐはまだしもとして、尾籠な話だが何より困つたのは便所の掃除が不完全なことで、私は差し迫る必要に驅られながら何度も入口から引つ返したことがあつた。

思ふにかう云ふ不潔と不規律とは、いつの時代を問はず支那人には免るべからざる通有性であつて、どんな進歩した科學的設備が移入されようとも、一とたび彼等の經營に委ねられれば、忽ちそれが支那人獨得の「物臭さ」を帶び、折角の近代的な尖鋭な利器が東洋風な鈍重な物に化してしまふ。清潔と整頓とを文化の第一條件とするアメリカ人などの眼からは、許すべからざる無精とも横着とも見られるであらうが、支那人自身はちつとやそつとの不都合はあつても、用さへ足りれば濟まして置くと云つた風な、傳統的な性癖を容易に改める樣子もない。そして時に依つては、西洋人の極端な規則づくめと神經質とをうるさがるやうな氣味合ひも見える。歐米流の禮儀作法とし云へば事毎に反感を寄せ、自分の國の風習なら一夫多妻の制度をさへ是認してゐた晩年の辜鴻銘翁などは、定めしこんな事象に對しても相當の意見があつたであらう。さう云へば印度のタゴール翁、ガンヂー氏などは何んと云ふであらうか。彼等の國も物臭さに於いては敢て支那に引けを取らないやうであるが。

なほ此れは餘談ながら、アメリカの記者は支那が外國から金を借りて元金も利子も拂はない不信を攻め、此の點に於いて「南京政府はモスコーの眞似をしてゐる」と云つてゐる。が、單に金錢上の問題ばかりでなく、不潔なことも此の兩國民は甚だ似通つてゐはしないか。但し此の方は孰方が本家か分らないが、私の知れる限りに於いて、白人のうちではロシア人が一番汚い。凡そロシア人の多く泊まつてゐるホテルの便所は、大概支那の汽車のそれと同じやうな觀を呈する。ロシア人が西洋人の中で最も東洋人に近いことは、此の一點でも説明されるやうに思ふ。

○

兎に角此の「物臭さ」「億劫がり」は東洋人の特色であつて、私は假りにこれを「東洋的懶惰」と名づける。

ところでかう云ふ氣風は、佛教や老莊の無爲の思想、「怠ける者の哲學」に影響されてもゐるのであらうが、實はそんな

「思想」なぞに關係なく、もつと卑近な日常の生活の諸相に行き渡つてゐるのであつて、その根ざしは案外に深く、われわれの氣性風土體質等に胚胎し、佛敎や老莊の哲學は寧ろそれらの環境が逆に生み出したものであると考へる方が自然に近い。

怠け者の「哲學」や「思想」だけなら、西洋にだつて必ずしもないことはあるまい。古代のギリシヤにはディオゲネスのやうな一種の物臭太郎もゐたが、しかしそれも哲學的見地から出發したところの學者としての態度であつて、日本や支那に無數にころがつてゐる物臭人種の如く、ただ何んと云ふ理由もなくぐうたらに日を送つてゐるのとは譯が違ふ。あの時代の克己主義の哲學と云ふものは、消極的ではあるが、物慾を征服しようとする一念が強く、多分に努力的、意志的であつて、「解脫」とか、「眞如」とか、「涅槃」とか、「大悟徹底」とか云ふ境涯からは除程かけ離れてゐるやうである。それから又、仙人だの隱者だのと云ふ者もないことはないが、彼等の多くは所謂哲學者の石を發見せんとするアルケミストの類であつて、恰も支那の葛洪仙人の如く、「無爲」とか「怠け者」とか云ふよりは寧ろ「神秘」の觀念と結び付けられてゐるやうに想像される。

近代に於いて「自然に復れ」と云ふ說を唱へたジャン・ジャック・ルーソーの思想は、幾分老莊のそれに相通ふところがあると云はれるが、私は實は、それこそ怠け者のためにまだ「エミール」二册をすら讀んだことがないので何んとも云へない。しかしさう云ふ思想や哲學はどうであらうとも、實際の日常生活に於いて、西洋人は斷じて「物臭」でもなければ「怠け者」でもない。それは彼等の體質、表情、皮膚の色、服裝、生活樣式等、あらゆる條件からさうなつてゐるので、たまたま何等かの事情のために不潔や不規律を餘儀なくされることはあつても、東洋人が懶惰のうちに或る安らかな別乾坤を打開するやうな心持ちは、夢にも理解し得ないであらう。彼等は富める者も、貧しい者も、遊ぶ者も、働く者も、老人も、青年も、學者も、政治家も、實業家も、藝術家も、勞働者も、等しく進取的、活動的、奮鬪的である點に於いては差別はない。

○

「東洋人の精神的若しくは道徳的と云ふのは果して何を意味するか。東洋人は浮世を捨て丶山の中へ隠遁し、獨り冥想に耽つてゐるやうなのを聖人と云ひ、高潔の士と云ふ。しかし西洋ではそんな人間を聖人だとも高潔の士だとも思はない、それは一種のエゴイストに過ぎない。われわれは勇ましく街頭に出で、病める者に薬餌を與へ、貧しき者に物資を恵み、社會一般の幸福を増進する爲めに身を犠牲にして働く人を、眞の道徳家であると云ひ、さう云ふ仕事を精神的の事業と云ふのだ。」――と、大體から云ふ趣意のことを、ジョン・デュウィが書いてゐたのを讀んだことがあるが、これが西洋に於ける一般の考へ方の標準、――常識であるとすれば、恐らく「怠ける」と云ふこと、「何もしないでゐる」と云ふことは、彼等の眼から見て惡徳中の惡徳であらう。われ／＼東洋人と雖も、「怠けること」が「働くこと」より精神的だと極め込んでゐる譯ではないから、此のアメリカの哲學者の説に正面から反對する氣はないし、さう堂々と開き直つて來られると挨拶のしやうにも困るのだが、いつたい歐米人の「社會のために身を犠牲にして働く」と云ふのはどんな場合を指すのだらうか。

たとへば基督教の運動に「救世軍」と云ふものがある。あれはイギリスのブース大將が始めたのだと聞いてゐるが、私はその事業なりそれに携はる人々に對して敬意をこそ抱け、決して反感や惡意を藏する者ではない。しかしその動機の如何に拘はらず、あゝ云ふ風に街頭に立つて、激越な、早口(はやくち)な、性急な口調で説教したり、自由勞業の援助に奔走したり、貧民窟を軒並みに歩いて慰問品を贈つたり、一人々々行人の袂を捉へて慈善鍋への寄附をす丶め、ビラを配ると云ふやうな、せせこましい、鎖鎖屑屑たる遣り方は、不幸にして甚だ東洋人の氣風に合はない。それは理窟を超越した肌合ひの問題であつて、東洋人にはお互ひに解つてゐる筈の心理である。ああ云ふ運動を見せられると、われわれは足元から追ひ立てられるやうに忙しい氣持ちがするばかりで、少しもしんみりした同情心や信仰心が湧いて來ない。人はよく佛敎徒の布敎や敎

濟の方法が、基督教に比べて退嬰的なのを攻めるけれども、實はあの方が終局に於いて國民性に叶つてゐるのである。鎌倉時代の日蓮宗や蓮如時代の眞宗がいかに積極的、能動的であつたと云つても、歸するところは七字の題目や六號の名號にあつて、ああ云ふ風に現世的な枝葉のことにまで係はつてゐたのではあるまい。禪宗の道元の如きは「佛教のための人生であつて人生のための佛教でない」と云ふ風に考へてゐたらしい。基督教とは千里の差があるやうに思ふ。

諸葛孔明が玄徳に三度も草廬を驚ろかされて、仕方なしにその重い腰を持ち上げたのは三國誌でお馴染みの話である。われわれは、もし孔明が玄徳に引つ張り出される迄もなく、もつと早くから世に出て活動してゐたとしたら、それも亦結構な事だと思ふが、いくら玄徳に懇請されても逃げ隱れして現はれずにしまひ、閑雲野鶴を友として世を終つたら、その心持ちにもなか／＼同情出來るのである。支那では昔から「明哲保身の道」と云ふ言葉があり、爭亂を避けて一身を全うするのも、亦一つの處世術と考へられてゐる。戰國の世に蘇秦が錦を着て故鄕へ歸り、「我をして負郭の田二頃あらしめば豈六國の相印を佩びんや」とか何んとか云つて威張つたと云ふ話があるが、立身出世して六國の相印を佩びるのもいいけれども、負郭の田二頃を耕しつゝ、生涯田舍に埋れることも惡くはない。但し、こんなことを云つて得意がる蘇秦と云ふ男は、何だか此の頃の代議士みたいで、孔明などに比べると大分品格が落ちるやうである。事實東洋に於いては、蘇秦型より孔明型の人物の方が、單に品格ばかりでなく、本質的にも傑れてゐる例が多いのである。

○

私は此の頃、いろいろの映畫雜誌に載つてゐるホリーウッドのキネマ・スタアたちの寫眞を見てしばしば變な氣がすることがある。といふのは、彼等の顏を大寫しにした肖像を見ると、殆んど一人の例外もなく悉く齒を露はして笑つてゐる。そして此れも亦一人の例外もなく、その齒がどんな俳優のでも實に、見事に眞珠のやうな粒が揃つて眞つ白に並んでゐる

のである。が、彼等の表情を仔細にじつと視詰めてゐると、その笑ひ顔がどうしても笑つてゐるやうには思へないで、無理に可笑しくも何んともないのに脣を開けて、齒並びを見せびらかしてゐるやうにしか取れないのである。よく日本の女の兒があくたいを吐く時に「いーッ」と云つて齒を出すが、ちやうどあれと同じである。その感じが、女優の場合にはそれほど極端でないけれども、男優の場合には特に顯著である。こんな氣持ちのするのは大方私一人ではあるまい。讀者諸君がもし疑はれるなら、早速「クラシック」でも開いて試して御覽になるといい。一遍さう思ひ出したら、孰の俳優の肖像でも「笑ひ顏」が忽ち「齒をムキ出してゐる顏」に見えること甚だ妙である。

文化の進んだ人種ほど齒の手入れを大切にする、齒列の美しさ如何に依つてその種族の文明の程度が推し測られると云ふ。それがほんたうなら、齒科醫學の最も進步したアメリカこそは世界一の文明國であり、かのわざとらしい無氣味なる笑顏を作る俳優たちは、「己は此の通りの文明人だぞ」と云ふところを誇示してゐるのかも知れない。そして私の如く生れつきの亂杭齒の持ち主で、それを療治しようともしない者は、嘗て故大山元帥のあばた面がさうされたやうに、手もなく未開人の標本にされても仕方がない。尤も此の頃は日本人でも私のやうなのは例外であつて、少し氣の利いた都會には何處へ行つてもアメリカ仕込みの齒科醫の店が繁昌してをり、中には腦貧血を起すぐらゐは覺悟の前で立派に使用に堪へる天賦の齒を拔いたり切つたりして人工的の裝飾を施す。そのせゐか知らぬが、近來都會人の齒は日增しに美しく、昔のやうな亂杭齒や八重齒や茄子齒はめつきりと少くなつた。男女を問はず、禮儀や容姿に氣を付ける人は、齒研き一つ買ふにしてもコリノスだとかペプソデントだとか、アメリカの舶載品を使つて、念の入つたのは朝夕二度も齒を研く。だから日本人の齒は、一日一日と眞つ白に眞珠色になり、それだけアメリカ人に近く、文明人になりつつある。人に快感を與へることを目的とする以上、これは惡いことではない。が、元來日本では八重齒や味噌ッ齒の不揃ひなところに自然の愛嬌を認めたもので、あまり色の眞つ白な齒がズラリと綺麗に列んでゐるのは、何んとなく酷薄な、奸黠殘忍な感じがするとされたも

のだつた。それで、東京、京都、大阪等の大都會の美人と云ふものは、(いや、男でもさうだが、)大體に於いて齒の性が惡く、且不揃ひである。殊に京の女の齒の汚いことは殆んど定說になつてゐる。私の知るところでは、却つて九州あたりの邊陬の人に齒列の美しいのが多い。(だから九州の人は薄情だと云ふのではないから、怒つてはいけない。)又老人なぞは、煙草のやにで黃色く汚れて、手擦れのした象牙のやうな色をしてゐるのが、白毛交りの疎髯の隙から見えたりするといかにも老人らしく、皮膚の色ともよく調和して、のんびりした、悠悠迫らざる感じを抱かせるもので、中には一本や二本ぐらゐ拔け落ちたままに捨ててあるのも、決してそんなに見苦しいものではない。今ではかう云ふ黃色い齒を持つ老人は、田舍へでも行かない限り日本では見られなくなつてしまつたが、支那や朝鮮へ行けばザラにある。老人の齒の眞つ白に揃つてゐるのは、少くとも東洋人の容貌には調和しない。入れ齒をするにも成るべく自然に近いやうにすべきで、年寄りのくせに餘り若がつて綺麗にしたのは、「四十過ぎての厚化粧」で、へんにイヤ味なものである。

○

上山草人の話をきくと、アメリカでは禮儀作法が實にやかましい。男子が女子の前で肉體の一部を見せてならないことは勿論、鼻をかんでも啜つても咳をしてもいけない。だから風邪でも引いた時は何處へも出られず、一日家に籠つてゐるより仕方がないと云ふ。此の調子だと、今にアメリカ人は鼻の穴から臀の穴まで舐めてもいいやうにキレイに掃除をし、垂れる糞までが麝香のやうな匂ひを放つやうにしなければ、眞の文明人ではないと云ひ出すかも知れない。

此れと似たやうな話は、嘗て故芥川君から又聞きしたのだが、成瀨正一氏が獨逸で或る家に客となつて、芥川君の「或る日の大石內藏助」をその場で譯しながら讀んで聽かせた時、「內藏助は立つて厠へ行つた」と云ふ句に行き當つてハタとつかへた。そしてとうとう「厠」と云ふ語を譯さずにしまつたと云ふのである。

ポール・モーランの小說などには「馴」と云ふ語がちよいちよい出て來るから、近頃の佛蘭西あたりはそれ程でないのでもあらうが、どうも歐米人と云ふものは斯う云ふことに變に氣を廻す癖があり、それを文明人の資格と心得てゐるらしい。

○

トルストイの「クロイツエル・ソナタ」を讀んだ人は御承知であらう。あの中で、あの小說の主人公は歐羅巴の所謂文明人の生活振りを口を極めて批難してゐる。彼等の日常の食物や婦人の服裝等を見ると、甚だしく刺戟的、積極的で、どうしても劣情を挑發する目的にしか出來てゐないのに、一方に於いて禮儀作法をやかましく云ふのは虛僞である、——と、今その本が手元にないのでハッキリ想ひ出せないが、たしかさう云ふ意味のことで、私はあれを讀んだとき、さすがにトルストイはロシア人であると思つた。

實際、紳士が夜會の席などで、足枷手枷を嵌められたやうな禮裝をして、あの誘惑的な婦人の服裝を前にしながら、オクビをしてもシャックリをしてもスープをすする音を立ててもいけないなどと云ふ禮法に束縛されて食卓に就いたのではいかに善盡し美盡しの料理を並べられても何んの御馳走になるであらう。そこへ行くと支那人の宴會は、「食ふ」「飲む」と云ふ目的のために大概な不作法を許容する。いかに騷騷しい音を立てても床やテーブルをどんなに汚しても差支へなく、夏など南の方へ行けば、主人から先に上衣を脫いで、腰から上は素ッ裸になる。日本も此の點に於いて支那と大した變りはない。

ホテルの食堂と云ふものは、家族的で、花やかで、舊式な旅館の個人主義なのよりいいと云ふ人がある。しかしながら、あれは紳士淑女が服裝を見せびらかし、虛榮心を滿足させる爲めの處で、食ふ方は二の次ぎにされてゐるやうに見える。浴衣がけで脇息に凭れたり足を投げ出したりしてたべる方が、胃の腑はたしかに喜ぶのである。

之を要するに、西洋人の「文明的施設」と云ひ、「清潔」と云ひ、「整頓」と云ふのは、あのアメリカ人の齒のやうなものではないのであらうか？

○

今日われわれが惱んでゐる二重生活の矛盾と云ふことも、衣食住の樣式と云つたやうな末節の點にあるのではなく、その由來するところはもつと眼に見えない深い原因に依るのだと思ふ。つまりわれわれは絕體に疊のない家に住み、朝から晩まで洋服を着、洋食を食ふやうに努めてみても、なかなかそれが續けられないで、しまひには洋室に火鉢を持ち込んだり絨毯の上へすわつたりするやうになるのは、矢張り何んと云つても東洋人の持ち前たる「ふしだら」や「億劫がり」が心の奧に根を張つてゐるからである。第一われわれは食事の時間を規則的に極められることに苦痛を感ずる。晝間事務所で働く人は、その間だけ已むなく規則的になるが、家庭へ歸れば直ぐ不規則になる。又さうしなければ本當に落ち着いて休息し、一杯やりながら物を食ふと云ふ氣になれない。だから勤め先で晝飯を食ふ多くの日本人は、ほんの辨當代りに、簡單な物を大急ぎで掻つ込んで置くだけであるが、神戶や橫濱に住む西洋人はさうではない。近い所に家庭のある者は可なり忙しい思ひをしてでも必ず一定の時間に家に歸り、食堂に打ちくつろいで食事をし、酒を飲み、そして又時間迄には事務所へ歸る。そんな慌しい思ひをして何が面白いと云ひたいけれども、彼等はさう云ふ規則づくめに馴れてゐるのである。それに洋食の料理法と云ふものが、何時何分に食堂へ這入るとキッチリ極めて貰はなければコックが困るやうに出來てゐる。だから日本人はしばしば「何時召し上りますか」とコックに執拗に念を押されて腹を立てることがあるが、ふいにすればどんなに料理がまづくなつても、コックは決して責任を負はない。

一事が萬事である。食器にしても、箸や椀ならざつと洗つておけば濟むが、西洋料理は材料が脂ッこいのだし、銀器や

磁器やガラスの器が多いのだから、始終ピカピカに研くやうに氣を付けなければならない。われわれは斯う云ふ無數の煩はしい拘束に堪へて迄も二重生活を打破しようと云ふ氣持ちには、容易になりにくいのである。

（○）

イギリス人は老人でも朝から濃厚なビフテキを食ひ、そして盛んにスポーツをして精力を貯へ、體力を養ふ。此れも一つの養生法であるには違ひない。しかしながら無精な人間の眼から見ると、刺戟性の食物を多量に攝取するために、否でも應でも運動しなければ消化し切れないと云ふことになつては、スポーツも一種の苦役である。それだけの時間を靜かに讀書にでも費した方が、或ひはもつと有益であるかも知れない。況んやトルストイの言の如く、その刺戟のために一層性慾を煽つて煩惱の火を掻き立てる結果となり、精力の濫費を來たすとしたら、つまる所は食ふ物を減らして怠けてゐるものと孰方が善いか分らなくなる。

昔、と云つてもついわれわれの祖母の時代の頃までは、堅儀な家の女房と云ふものは殆んど一年中日の目も見ないやうな薄暗い部屋の奥にゐて、めつたに外へ出ることはなかつた。京大阪あたりの商家では、入浴さへ五日に一遍ぐらゐだつたと云ふ。そして「御隱居さん」と云はれるやうな身分になれば、一日ぺつたりと据わつたきり座布團の上をさへ動きはしない。今から思ふとそんな風にしてどうして生きてゐられたか不思議であるが、彼等のたべる物と云つては、ほんの僅かな、ごく淡白な、鳥の摺り餌のやうなものだつた。粥、梅干、梅びしほ、でんぶ、煮豆、佃煮、私は今でも祖母の膳の上にあつたさう云ふ品々を想ひ出すことが出來る。彼女たちには彼女たちに相應な消極的の攝生法があつて、多くの場合活動的な男子よりも長壽を保つてゐたのである。

「寢てばかりゐては毒だ」と云ふが、同時に食物の量を減らし、種類を減らせば、それだけ傳染病などの危險を冒す度も

少い。カロリーだのヴイタミンだのとやかましく云つて時間や神經を使ふ隙に、何もしないで寢ころんでゐる方が賢いと云ふ考へ方もある。世の中には「怠け者の哲學」があるやうに、「怠け者の養生法」もあることを忘れてはならない。

○

今大阪で一流に數へられる老檢校の話に、昔は地唄をうたふ場合に餘り大きな聲を出して發音を明瞭に云ふと、却つて下品だと云つて叱られたものだと云ふ。成る程さう云へば、琴や三味線の巧い檢校で聲量の大きく美しい人は、關西には割りに少い。が、さうかと云つて、樂器の方を大切にし唄はおろそかにすると云ふ譯ではない。じいつと落ち着いて聞いてゐれば、聲は少さくても節廻しは細かく、餘情も心持ちも充分に行き渡つてゐるのである。ただ彼等は、今の聲樂家のやうにアルコールを節し、女色を節しても喉を大切にし、聲量の保存に努めると云ふ心がけない。つまり何處までも氣分本位で、そんな堅苦しい思ひをして唄つたのでは、唄つても愉快でないのであらう。老年になれば聲量が減り、皺嗄れて來るのは自然の理であるから、敢てそれに逆らはうとしないで、自分に心行く限り唄はうとするのであらう。實際本人に取つてみれば、醉つて陶然とした時にふと三味線を取り上げて唄ふのでなければ、何んの面白味もない譯である。かかる考へからすれば、人には聞えない程の微かな鼻聲で唄つてゐても、自分では技巧の妙を味はひ盡すことが出來、三昧境に這入れるのであつて、極端に云へば聲を出さずに空想で唄つても事は足りる。

自分が樂しむよりも人を樂しませることを主眼とする西洋流の聲樂は、此の點に於いて何處か窮屈で、努力的、作爲的である。聞いてゐて羨ましい聲量だとは思つても、その脣の動きを見てゐると何んだか聲を出す機械のやうな氣がして、わざとらしい感じが伴ふ。だから唄つてゐる本人の三昧境の心持ちが聽衆に傳はると云ふやうなことはないと云つていい。これは音樂のみならず、凡べての藝術に於いて此の傾きがあると思ふ。

誤解をされては困るが、私は決して怠け者になることを諸君にすすめる次第ではない。が、精力家とか勤勉家とか云はれることを鼻にかけ、或ひはそれを自分の方から押し賣りする人が多い世の中だから、たまには懶惰の美德、――奥床しさを想起しても害にはなるまいと思ふのである。正直のところ、さう云ふ私自身が實はそんなに怠け者ではなく、先づわれわれの仲間うちでは勉強家の方であることは、友人諸氏が說明してくれるであらう。（昭和五年四月十日記）

文藝時評

花袋氏について

正宗白鳥

この頃、ある新聞に連載されてゐる竹越與三郎氏の「明日はどうなる？」といふ感想文を幾回か讀んだ。何十年か前に讀んだことのある氏の現代讃美論と略々論調を同じうしてゐる。樂天家である氏は、「いはゆる思想の惡化なるもの」をも、「社會頽廢の一顯象として見るべきものでなくて、社會進化の一道程として見るべきものである」と云つてゐる。過去を追想して一圖に現代を嫌惡する、老人の通有性を脱して、朗らかな氣持で浮世を見てゐられるのは、幸福だと云つてい〻。

これに反して、田山花袋氏は、現今の文壇の頽落を痛罵してゐるやうである。改造社の三月配本の「文學全集」に挿まれた、薄つぺらな「文學月報」を見ると、氏は、泡鳴の、妥協を許さない非通俗の熱氣を激稱すると〻もに、通俗小説全盛の現今を非難してゐる。簡單な感想であるが、私はそこに近來の氏の心境を瞥見した。昔、世間の冷嘲惡罵に怯むことなく己の主張を突進めて行つた文豪田山花袋の面目は今なほ保たれてゐる。氏を主唱者とした自然主義が文壇を風靡してゐた時分に、上田敏氏は、京都大學の講壇で、「日本の文學は不良青年の手に落ちました」と、歎息したさうだが、この歎聲を今の田山氏の罵聲と並べて思出してゐると、私は、主義や傾向の是非善惡についてよりも、彼れも一時此れも一時といふ感じに一層つよく打たれるのである。

それで、私は、近刊の「文學全集」中の「花袋集」を取つて、試みに一つ二つ讀んだが、忘れてゐたことが思出され、

舊知に接した感じがした。そして、ついにこの撰集の全部を讀盡した。どの圓本發行者も、讀者に買りつなぐことを第一主義としてゐるらしく、月々の配本順序によつて、作者の流行程度が測量されるやうな有樣で、「花袋集」の配本のひどく遲れたのは、この作家の人氣が稀薄になつてゐる證據としてい丶のかも知れない。しかし、今度私が讀んだところによると、花袋氏の作物などこそ、文壇といふ狹い範圍の毀譽褒貶の如何にか丶はらず、世上一般の讀者に、相當の興味をもつて讀まれるのではないかと思はれる。分りい丶小說が多い。かなり通俗味にも富んだ小說が多い。この撰集には入つてゐないが「田舍教師」にしろ「再び草の野に」にしろ、世の小說好きに愛讀されさうな物語である。

私は、今度、「蒲團」を讀み、「生」を讀み、「妻」を讀んで、日本的自然主義勃興當時の文壇の光景を回顧した。二葉亭が突如として「浮雲」を出したのは、明治二十年頃であつたが、あの時分には、まだ世間が幼稚で、この斬新な文學に追隨する者はなかつた。二葉亭自身にしても、強い自覺をもつてあ丶いふ心理小說を書いたのではなかつたので、「浮雲」一篇は、明治文學史上に、孤立的存在を保つに過ぎなかつた。ところが、花袋氏の小說は、自覺した文學的革命によつて生出されたもので、「浮雲」よりも根底の深いものがあつた。多くの共鳴者を得、追隨者も續出するやうになつたのは、作者の力と時世の機運がよく合體してゐたゝめでもあつた。「浮雲」がロシア文學の感化によつて作られたやうに、花袋氏の對時代的大作も露佛の文學に刺戟されて出た譯なのだが、しかし、西洋近代文學の讀み方も、花袋氏は花袋氏好みの讀み方をしたのであつた。それで、追隨者も、花袋氏の見方によつて近代の海外文學を見てゐたのだが、それが、近年の日本の文學を萎縮させた一つの原因になつてゐたかも知れなかつた。西洋の文學藝術の本當の味ひは、とても日本人には鑑賞し盡くせないに極つてゐて、私など、葭の髓から天をのぞく如く、歐洲の新思想や新文藝を見てゐるに過ぎないと思はれてゐるが、しかし、フランスの自然主義文學などが、決して自己の生活記錄でないことは一目瞭然である。作風は無技巧でもなく露骨なる描寫でもないことも明かである。自傳を書きたがるのは、むしろロマンチシズムの作者の好んですることだ。

私は、去春、ニューヨークで Blanche Yurka といふ、イプセン物を得意としてゐる名女優の「ヘッダガブラ」を見て、その技巧の妙味に感心した。擧動がそこにゐる歐洲人のやうに自然で、しかも、姿態の美が絶えず觀者を魅した。イプセン自身の用意周到な技巧は、この作品に含んでゐる思想を決して露骨にしてゐなかつた。自由劇場から築地小劇場に至るまでの、飜譯芝居から受ける感じとはまるで違つてゐたが、それにつけても、粗末な日本譯で得た外國文學の味はひは、まるで骨をしやぶつてるやうなものだと思はれた。ロシア語に熟達しない限りは、「アンナカレニナ」は永久に味はへないのである。しかし、我々の壽命は短かく、世界各國の言葉に通じる譯には行かないから、重譯にでもよつて、一通り分つたつもりになるより外仕方がないのである。

田山氏は、兎に角、氏獨得の解釋に基づいた西洋近代文學の感化によつて、自己の文學を改革し、人生に於ける自己の生き方をも一變したのだからい丶。「同情は弱者の聲」であると信じ、「地上にあつて天上の星にのみあこがれる」ことの愚を知り、「新しい西洋の作家の傍觀的態度、巴渦の中から、一度離れて立つて見てゐる、かれ等の態度、美も醜も善も惡も無い、萬般の事物唯現象として自然の姿として歷々としてその眼に映ずる」傍觀的態度を羨んだ。今讀んで見ても、氏の作品は、さほどに傍觀的態度を持してゐるとは思はれず、またさほどに同情心を滅却してゐるとは思はれないが、「自己を正直に出してしまへ」といふ強い意氣込みは、氏以前の文學には斷じて見られないのである。氏はそれでよかつた。「あこがれの少女文學」から、「煩惱苦」の實相露出の文學に轉じ、ついに「神祕的冥想境」を彷徨さす文學に達するまで、氏としては、忠實に自己を生きて來た譯であつた。しかし、氏の追隨者は詰らない。何主義にしても模倣者は詰らないが、「露骨主義」を文字通りに發揮する非文學は、この頃までも日本の文壇に續いて來た。

氏の覺醒後最初の長編たる「生」は、まだ蕪雜で、せか／＼した所もあるが、「妻」は、筆がゆつたりして、よく調つてゐて、その後の長編に散見する獨斷的筆法も少くて、氏の代表的傑作である。「苺樂」「黄い姿品」「山莊にひとりゐて」など

は、この作者が頻繁に取扱つた愛慾小說で、よくも惡くもこの作者の面目を深く讀者や批評家に印象させたのは、この種類の小說なのだ。

これ等の作品について批評しようとすると、いろんな感想が浮んで來るが、今の場合、私は花袋氏の過去の作品を詳しく批評しようと企てゝゐるのではない。この撰集で、「ある僧の奇蹟」を讀んだゝめに、何か書いて見たくなつたのである。この短篇は一度讀んだことがあつたが、その時はさして感じなかつたらしい。今度はじめてこの小說に接したも同樣であつて、あの「蒲團」の作者花袋氏が、かういふものを書いたかと思つて、私は新たなる敬意を寄せた。私は最近數ケ月間に讀んだ粉々たる小說のうち、この作品と、谷崎氏の「蓼喰ふ蟲」とにだけ、私の心も惹寄せられた。「蓼喰ふ蟲」の男女間の變挺な心理には、田山氏の愛慾小說に描かれてゐる普通の人情よりも、私は却つて、共鳴を感じた。「ある僧の奇蹟」の心境には、私は到達してゐるのではないが、この作者の撓まざる努力に感心した。一つ所に停滯しないで、舊套を脫して進む心掛けに感心した。それが時代の流行にかぶれて變遷するのではなくつて、自己內部の要求から、舊い殼を脫いで、新しい境地に入つて行くところに、現代の文人氣質とちがつた氏の眞面目が見られるのである。「苦行は僧や婆羅門の徒の行するばかりではない。人間はすべてこれを行してゐるのではないか。意識せると、意識せざるとの區別はある。蚊の食を求めるのもまた是れ行。盲目の戀をするのも亦これ行。生死も亦是れ行ではないか」と氏は云つてゐるが、この聲が肉慾讃美者らしく思はれてゐる田山氏の心から發せられてゐるのである。歐洲中世紀の人々の心境である。かういふ心境は今日の日本の文壇人の心境とは遠く掛け離れてゐるのを見て、私はある懐さを覺える。代議士運動をした無産黨諸氏の落選感想を讀むと、「それでも何千何票取つたから……」と、皆んな揃つて、氣休めの氣焔を吐いてゐるが、俗衆の投票の多寡によつて自己の價値を定める人々の心境と、「ある僧の奇蹟」の心境とには雲泥の相違があるのである。

花袋氏は、ユイスマンスの「途上」について云つてゐる。「巴里の寺院——通俗なやかましい寺院に堪へかねて、つとめ

て靜かなサン・ニセベリンのやうな寺をたづねて、中世紀のミスチシズムの匂ひを嗅がうとした」ユイスマンスの氣持に、氏が同感してゐるのも私には面白かつた。セーヌ河の左岸にあるサンセベリン寺は、巴里のうちで最も靈魂の鎭靜を求むるにふさはしい場所であると、古代の巴里を研究してゐる或米國人が書いてゐたので、私は幾度かその古寺の扉を開けて、人影の稀れな薄暗い禮拜堂の片隅に腰を掛けて、壇上の燭光を見詰めたのであつたが、外の寺院とちがつた感じはしなかつた。異國人の我々には傳統的な微妙な匂ひが嗅ぎ分けられなかつた。ダンテやユイスマンスや古巴里通の米人が、そこの堅い椅子の上に腰をおろして、亂れた心が鎭まつたやうに、私の心は鎭まらなかつた。しかし、滅多に買つたことのなかつた繪葉書を、此處では、内陣で一人ぽつちで編物をしてゐた婆さんから買つた。一綴りの繪葉書集で、簡單な寺の歷史が添つてゐて、それには、ユイスマンスの「途上」の一節が挿入されてゐて、人として作家としていろ／＼な苦悶を經た人間が、ついにかういふ所を搜して來る心持が髣髴として、私の心にも浮んで來た。今度田山氏の「ある僧の奇蹟」を讀んで、日本の老作者も、さういふ境地を經驗してゐることに、興味を覺えた。しかし、私自身は、サン・セベリン寺で、そこの宗教的空氣に陶醉しなかつたと同樣に、花袋氏の境地を追隨する氣にもなつてゐない。

飢渇信

「飢渇信」は、武林無想庵君の文集である。妻子を抱へて異鄕で生活に苦しんでゐる記錄である。大抵は一度讀んだものだが、かう纏つたものを讀直すと、事相が一層鮮明になつて新しい印象が得られた。先日帝劇で生田葵山君に會つた時に「西洋を見て置くと、あちらの小說がよく分るよ」と同君が云つたので、「さうだ」と、私は答へることは答へたが、實際はさう簡單に思つてゐるのではなかつた。成程、ハイドパークやリユクサンブル公園はあんな綺麗な公園で、シヤンゼリゼはあゝ云つた優雅な廣い通りで、巴里人は、道ばたで立小便はしないらしいが、杖のやうな長いパンを噛りながら歩い

たり、眞晝間、往來で男と女と抱きついていつまでも接吻したりするのがあたり前のことであることなどが分つて、西洋小說理解の上に多少の便利が得られるが、文學のもつと深い所は却つて以前よりも分らなくなつたやうに思はれる。モウパッサンはかうだ、ゴンクールはかうだ、アンドレージードはかうだと、以前のやうに輕々に斷定されなくなつた。西洋文學は本當に分るものぢやないと絕望感に襲はれだした。しかし、森鷗外の「舞姫」や「うたかたの記」や武林君の「飢渴信」などは以前讀んだ時よりもよく分つて來た。つまり生田君の說は「西洋を見て來ると、武林君の小說、その他、日本人の書いた西洋種の小說はよく分るやうになるよ」といふ程度に於て眞實である。

　この文集の主人公の苦難は、社會組織の缺陷によるのではなく、自業自得見たいなものであるが、無財產で異鄕で生活することの如何に困難であるかは、私にはよく察される。この作者が、附元氣の與太を飛ばしたり、棄鉢の妄語を吐いたりしてゐる間に、私は異鄕放浪者の苦しみを察する。この作者は自分で認めてゐる如く、文才は乏しいので、書かうとすることが思ふやうに書けないもどかしさが至るところに見られるが、彼れの胸に蟠つてゐるものを覘いて見ると、複雜した人間苦がそこに動いてゐるのだ、文才の豐かなものは、一のものを十に吹聽するのだが、この作者はその反對だ。しかし、時としては人を惹きつける筆の運びの見られることもある。辻潤君との會談なんか、甚だ面白い。夫妻で饒舌を弄してゐるところも面白い。遊惰、放逸、不倫行爲、比叡山上の自我的隱遁生活、異鄕でのコキュの悲しみ。切は詰つた錢々の要求。「古來人間の考へた極樂淨土で、尤も多量の黃金を豫想しない世界は、一つだつてなかつたぢやないか」と、古今の事實に徵して、滔々と黃金萬能論を、妻君を前にして說くところ、根強い雄辯になるから面白い。武林君はゾラを飜譯してゐるさうだが、この文集によつて窺はれる彼れの一生は、悠にゾラのルーゴンマッカール叢書中の一篇をなすに價ひしてゐるのである。「自傳を書くのは私の本意ではない。書いて示すに足るほどの閱歷價値が、私の一生涯にあらうとも思はれないからだ。しかしながら自傳を書くといふことを離れては、殘念ながら私には全く書く材料の持合せがない。そ

れほど私の頭は空疎で且つ貧弱なのだ」と、彼れは嘆じてゐるが、しかし、彼れの生涯の實驗は、田山花袋氏のそれよりも、小說的題材に富んでゐるのだ。

四月號の雜誌

「改造」の廣津和郎氏の「昭和初年のインテリ作家」はすら〳〵と讀まれた。雜誌か新聞を通して、いろ〳〵な作家の日常の生活振りを知るに過ぎない私は、かういふ小說によつて、ある若い文學者仲間の起居動作言語思想の一面を、他所行の衣服を着けない日常の姿のまゝで見られるのを面白いと思つた。田山氏の「妻」には、明治三十年前後の新進作家の一群の日常の言行が散見してゐる。主人公たる田山氏を中心として太田玉茗や國木田獨歩や柳田國男氏など、世間に乘出さうとする時の光景がよく書かれてゐる。「大家と青年文士との差別、雜誌記者と作者との關係、黨閥朋閥の交際、かけ持批評家の無操持、原稿料の階級」生やさしいことでこの波の荒い文壇を乘切つて行かれぬこと」は、あの頃の新作家の歎聲であつたが、これは、今日でも明日でも、消滅することのない歎聲であらう。しかし「妻」の時代と、廣津氏の新作の時代とでは、時代相が違ふので、私は同時に讀んで、その差違に興味を覺えたのである。ことに、N出版者對執筆者の實況が面白い。こんな問題は思ひもそめなかつた。昔の作家の生活のみじめなものであつたことは、これについても回顧される。北川が提出したN社印税問題についての、藝術協會員の意見のまち〳〵なところに人間の氣持が自から現はれてゐる。金に對する人間の感情がよく出てゐる。「結局口先ばかりで何も出來ないインテリゲンチャの無力の暴露」は、この小說の挿話たる印税事件によつても推察される。しかし、本屋の方から云はせたら、暴利を得た時に執筆者に餘分の配當をしても大損をした時に執筆者が、印税や原稿料を返して呉りやしまいと、一理窟こねられぬこともない。どつちにしても煩はしい世の中である。

お人よしの弱氣な人間が生存競爭に落伍してしまふことは、廣津氏の小説にも一端を示されてゐるが、中央公論所載の細田源吉氏の「巷路過程」には、さういふ實世間の有様が、平明に的確に描かれてゐる。どこと云つて新しい筆致はないが、こんな風な世相の忠實な描寫はいつになつても古臭くなることはない。濃い主觀の色や、文章の綾や理窟で、作品をよごさないで、有るがまゝに、人生の實相を寫すといふ作風は、遠い昔に唱へられたのであつたが、それは隨分六ケしいことなので、凡手の實現し得ることではなかつた。それで「有るがまゝ」に描かれた大作は、殆んど現はれないで世は變遷した。しかし、この態度が惡い譯はない。空想でこね廻したり、理窟でひん曲げたりする作風が、「有るがまゝ」の實相描寫よりも優れてゐる譯はない。奔放自在の幻想文學が今の文壇に全く跡を絶つてゐるところにも「有るがまゝ」の寫實小説も、殆んど見當らないのである。

丸木砂土氏の「アヱマリア」研究を讀んで、何でこんな汚ならしい穿鑿をするのであらうかと怪しんだ。我々日本人は聖母マリアを神聖視する氣になれないので、「マリアは唯の女人だつた」くらゐは、今更珍らしさうに說かれなくても、すでに知つてゐるのだ。

「文藝春秋」の石濱金作氏の「沖博士の墮落」は、作者がどういふ意見でこんなものを書いたのか分らない小説である。

室生犀星氏の「ユキ子は食はねばならない」この作者の筆のしつかりして來たことは、この一篇を讀んだゞけでも感ぜられる。だが、この小説にはうま味がない。

「改造」の小林多喜二氏の「工場細胞」を讀んで見たが、書いてゐる事が頭に入つて來ないので、中途で止めた。それで金子洋文氏の「蒼ざめた大統領」といふ長い戯曲を讀んで見た。これは、例の無産運動の一面を現はしたものだが、しまひまで樂に讀まれた。事件の取扱ひ方は、例の通りで、特殊の觀察のある譯でなく、通俗芝居であるが、印象は鮮明である。舞臺上の運びも會話もテキパキしてゐて、間の拔けたところがない。

吉田弦二郎氏の「大阪城」は、片桐且元の、人知れぬ忠義を書いたもので「桐一葉」と似通つてゐる。現代の抱負ある作者は、史劇にでも、流行の階級鬪爭をこぢつけるか、あるひは、知慧をひねつて、舊道德反逆を試みるのを例としてゐるのに、吉田氏はひどく穩和である。德川方の冷酷不人情を豐臣滅亡のあはれさと對立させてゐるのだが、書き方が叙事的で劇的ではないので、印象が薄い。越前の忠直がこの作中特種の人物であるが、これだけでは物足りない。

武者小路氏の個人雜誌「獨立人」の四月號に、「自分はいつ死ぬか分らない、死んだあとのことは心配しないでもい、と思ふが、心配しないわけにゆかない」と、氏に似合はない弱音を吐いてゐるのが、私の心に觸れた。眞實の聲である。近松秋江氏の愚痴が晒へないのだ。「いくら考へても今の世の中では、金がなくては見ぢめすぎる」と云つてゐるのも、その通りで、今の世でなくても、昨日の世もさうであり、明日の世もさうであらう。しかし、「早く金がなくとも安心して生きてゆける時代を來さしたいものと思ふ」と、武者氏は氏らしい空想をいろ〳〵と還うしてゐる。武林無想庵氏が、「金がなくては見ぢめだ」といふ同じ出發點から、いろ〳〵な空想に耽けつてゐるのと、比べて讀むと面白い。

柳澤健氏は、この頃亞米利加に遊んで、米人の生活には既に黄金時代の觀があるのを見「特別に自己の生活に不滿も不安も感じてゐない」この國には、すぐれた文學の生ずる餘地はないと斷じ、「歷史的に見るも安穩にして物質的の富裕なる時代にはすぐれた文學現はるゝこと少なく、これに反して、世亂れ人多く糊口に苦しむ時代にすぐれたる作品現はれる」と云つてゐる。さうすると、今日の日本にこそ傑れた文學が現はれる筈だが、果してさうだらうか。歷史的に見ても、國が豐かで世が泰平の時に、文學も榮えてゐたのではあるまいか。理窟はどうにでも云はれるが、事實として、今の日本のやうに、作者が生活のために、心に落付きがなく、雜誌や新聞などが目まぐるしく流行を追つてゐる時代にはどつしりした作品の現はれる可能性は少いにちがひない。

内村鑑三氏逝く。年少の頃、私が最も畏敬した日本人は内村先生であつた。西洋文學の讀み方をも、私は先生の著書と講演とによつて、はじめて教へられたのであつた。少年時代に受けた感化は、容易に脱け切らないものらしく、私の歐洲中世紀に對するある親しみは、あの感化に基いてゐるのかも知れない。小山内君でも有島君でも、その他の多くの内村崇拜者も、先生を離れたのは、各自の生命の成長を意味してゐるのである。私は、直接に先生に接しなかつたため、さしたる反感も抱かず、他所ながら、先生の一生を見て來た。「聖書の研究」をも、最近まで斷續的に購讀して來た。「日々の生活」と題する日記が面白かつた。老い行く人の影をそこに見て感慨に耽つたこともあつた。若い男女が側へ寄つて行つてはまた反いて行く。先生はそのたびに憤つてゐる。老いると先生も子孫の愛に溺れんとしてゐる。今日の時世にも、新しい若い内村崇拜者が可成り多く存在してゐるのは不思議なやうだが、それは、大山郁夫君崇拜者など、同樣の心理狀態に依るのであらう。英雄崇拜心の一端がそこに見られる。

私は、この頃、改造社刊本で、上田、厨川、阿部の三氏の論文集を見て、これ等の諸氏が、それ／＼にダンテ觀を述べてゐるのを知つた。内村氏は、學究的研究はしなかつたであらうが、ダンテを心讀した點では、誰れにも勝つてゐたと思はれる。氏は、ダンテ地獄篇を、日に一囘づゝ讀んで、三十三夜眠れなかつたと、昔云つてゐた。



日清戰後（五幕十二場）

村山知義

所。

東京。臺灣航路の汽船の中。及び臺灣。

時。

明治三十年十月以後

人物。

小野田斧三郎。五十八才。內務大臣。

初子。四十五才。その妻。

楓。二十才。その娘。

國太郎。十七才。その息子。

野呂信吾。三十八才。內務大臣祕書官。

近江時三郎。五十二才。ブルジョア。　市來。渡利。共にスッパ。
岩吉。五十七才。車夫。　杉山。三十九才。總督府參事官
横山。小野田家の書生。　車夫。その手先。
足部。その友達。　松田。日本鐵道會社課長。
月島保治。三十七才。判事。　竹や。（小野田家の女中。）
上野驛々長。日本鐵道會社機關方、火夫等七八人。　藝妓〆松以下六七人。川村音三郎一座の俳優多勢。
同じく頭取。その觀客、物賣。巡査。（東京の二人、臺灣の六七人。）醉つ拂ひの兵士。臺灣土人多勢。
通譯一人。技師二人。吏員二人。土人技手四人。代書屋、印形屋。船員多勢。船客多勢。

第一幕

第一場

明治三十年十月。

東京神田三崎町川村座。川村音三郎一座の新演劇中。

舞臺はその劇場の内部で、客席と舞臺の一部を現はしてゐる。客席は下手舞臺端、花道に掛けて、ほんの一部分を作り、後は本當の客席を劇中劇場の客席と見なす。舞臺中央より上手に掛けて斜めに劇中劇場の舞臺。

劇中劇場の舞臺では、何か會議室らしい所で日本の將軍達が卓を圍んで會議してゐる所が演じられてゐる。だが、幕が開いた丁度その時。劇中劇場の舞臺は幕切れて、引幕がスルスルと引かれる。その引幕には、海を出る太陽の圖に「大日本帝國萬々歳。川村音三郎丈江。」と書いてある。

引幕が引かれると一緒に客席はガヤガヤと騒ぎ出す。

――○や、大したもんぢや。樺山中將が一番よく似ちよつたぞォ。――○うん、似るには似ちよつたが意氣が足らん。そこへ行くと伊藤さんはいい意氣を出しちよつたワイ。――○いい意氣ぢやつた。名調子ぢやつたのォ。清國うつべし! 支那ぶつつぶすべし!と來た。――○(歌ふ。)倒れし戰友抱き起こし、耳に口あて名を呼べば、につこと笑ふて眼に涙、萬歳唱ふも口の內、トコトツトトツト。――物賣り。え丶、お壽司はよろしう。ええお辨當はよろしう。――○ちよつと、壽司を一つに、上辨を一つおくれな。――物賣り。へい、有難う存じます。――○いくら?――物賣り。お壽司が四錢五厘、お辨當が十三錢で、十七錢五厘頂きます。――○(錢をやる。)あいよ、ツリはいらないよ。物賣り。へい、毎度有難うござい。ええ、お壽司はよろしう。ええ上等のお菓子はよろしう。

その時、揚幕の中が騷がしくなる。

木戶番。駄、駄目ですよ、駄目ですよ、旦那。

巡査。表へ出て! 表へ出て! 出ろと云つたら出んかッ!

兵士。(醉つてゐる。)何をッ? 失敬なッ! 帝國軍人に對して何を云うかッ!

木戶番。そりや御國の爲に手柄のあつた軍人さんにや違ひないが、芝居をごらんになるにやア、やつぱり木戶錢を拂つて貰はなくちやア、困りますよ。

兵士。何ッ? 我々軍人は貴樣等國民の爲に生命を投げ出して來たんぢやぞ。それを何ぢや、貴樣等はその間中、懷手で暮してゐやがつた癖して。芝居さへ我々に見せんとは何事ッちや。

巡査。懷手で暮して居つたとは何ぢや。戰場にこそ出なんだが、我々だつて寢る間もなく御奉公しとつたんぢやぞ。聞き棄てならん! 表へ出え!

ここで三人揉み合ひながら花道へ現はれる。

——○また醉つ拂ひの兵隊だョ。——○そりや生命がけで戰爭をやつて來たのは解るけど、近頃はあんまり鼻にかけ方がひど過ぎるョ。

兵隊。只の芝居ぢやァねえ、貴樣等がやつてる芝居は戰爭芝居ぢやねえか。俺達のやつた事を仕組んだ芝居を俺達に見せないねえツて法があるか。俺達をネタに金をもうけやァがつて、挨拶しねえたァ何事ぢや。さァ、俺ァもう動かねえ！挺でも鐵砲でも動かねえぞ！（すわり込む。）

巡査がもう一人出て來る。

第二の巡査。何ぢや、また醉つ拂ひの兵隊か。

最初の巡査。こいつを表へおつぽり出してくれ！

第二の巡査。よし來た。さ、表へ出え！

あばれる兵士を揚幕の中へ引きずり込む。內務大臣小野田弁三郎の妻初子が令孃楓をつれて棧敷に現はれる。初子も楓も當時の知識的婦人ゆゑ、髮は朝卷、就中楓は當時のモダン・ガールで、顏も中々ハツキリとして美しい。內務大臣祕書官野呂信吾が二人の後からついて來て何くれと世話を燒いてゐる。髮を七三に分けた色白の好男子で、金縁眼鏡を掛け、モーニングを着てゐる。此のきらびやかな一群は忽ち客席の注目の的となる。

——○よう、尤物が現はれたぞう。——○どれぢや、どれぢや、ほゝう。これは踏めるぞ。——○貴公が踏んだ所でどうにもならんよ。高根の花ぢや。まああきらめろ。——○貴樣あのレデーの素性を知つちよるのか？——○知らんでどうする。有名な女ぢや。——○敎へろ、敎へろ、ホワツト・イズ・ハア・ネエム？——○あれを知らんとは話せぬ男ぢや。あれこそは今を時めく內務大臣小野田弁三郎の一人娘楓の君ぢや。

棧敷では——

楓。私もう少しで突き飛ばされさうだつたわ。

初子。本當に仕樣がないわねえ。もともと亂暴な所へ持つてつて、すつかり氣が荒くなつてるんだもの。何も芝居なぞへあばれて來なくてもよささうなもんぢやありませんか、ねえ、野呂さん。

野呂。しかし、ま、大概の事は見逃してやるんですな。相當に働かしたんですから。

初子。それならそれでお巡りの方に、無暗と威張るばかりが能ぢやあるまいし、何とかうまく扱はせて、あんな大騷ぎにならないやうにさせたらいいぢやありませんか。

野呂。いや、これは一本參りました。確かに巡査も官權を笠に着過ぎてをります。早速何とか考へませう。全く兵隊とお廻りの喧嘩なんどといふものは國民教育上面白くありませんよ。

初子。岩吉も岩吉だわ。折角お芝居を見せてやるつて云つてやつてるんだから、上つて來さへすれば今の騷ぎの時にだつて役に立つたんだのに、あのぢいやは變に頑固な所があつていけないよ。

楓。だけど母樣、やつぱり岩ぢいやの身になつて見れば、自分の息子が戰爭で死んだんだから、戰爭のお芝居なんか見たくないのは當然かも知れませんわ。

野呂。しかし、それにしても、名譽の戰死ぢやありませんか。我々だつたら、進んでかういふ芝居を見たいといふ氣になるでせうがなあ。

土間では――

――○（楓達の裝を見て）何だかをかしな結ひやうだわねえ。まるで馬鹿貝を見たやうで私ゃ好かないねえ。――○アラ、素敵だわア！おッ母さんは古いから駄目なのよォ。――○つき從ふサムラヒは何者ぢや？――○心配か？――○さては知らんな。――○知つとるとも。口惜しいだらうが教へてやらうか。あれこそは内務大臣祕書官野呂信吾と云つて、

帝國大學初まつて以來の秀才と稱へられた、今では令孃楓の君の未來のハズバンドの第一候補さ。――〇ふむん。無念ぢや。――〇察するぞオ。

木が這入る。

楓。（番附を見ながら）番附が英語入りですわよ。ちよつと感じがいゝことねえ。

野呂。成程、成程。いい感じですねえ。カツムラス・ニユウ・シアタア・ゼ・ワア・オブ・ジヤパン・アンド・チヤイナ・カワムラス・カムパニイか。

初子。御前會議の場がすんだ所らしいね。今度は原口重吉宅の場ですよ。丁度よかつた。重吉が出る場ですよ。

野呂。新聞で見ると馬鹿に出來ない顔立をしてをりますねえ。だが、藝の方はどうでせうかねえ、村芝居でやつたことがあるといふ事ですが。

楓。だけど私、何だか、さもしいやうな氣がしますわ。

初子。何がさ。

楓。だつて自分の手柄話を自分が役者になつて皆のゐる前でやるなんて、いやぢやないこと。

野呂。そりやあんまり賞めた事ぢやありませんが。興行師として見れば、是が非でも引きずり出したい所でせうし、當人もまアそれで、國民の愛國心を涵養する一助ともなれば、何も恥ぢるには及ばないことだと思ひますねえ。

楓。そりやさうかも知れませんけど、それで、はれがましくないとしたら、私どうしても重吉といふ人に好感が持てませんわ。

士間では――

――〇あいつ中々英語も達者らしいのオ。――〇赤門出の秀才ぢや、英語の達者は云ふ迄もないが、ああ生ッ白い顔をし

てゐながら、あれで柔道が三段、劍道が初段の腕前だとは驚いたらう。——○ふむん。さうか。もう駄目ぢや。萬事は休した。

幕の前に頭取が現はれる。

頭取。さて皆々樣、本日もかくは賑々しく御來場下され、樂屋一同になり代りまして、私より厚く御禮申し上げる次第にござりまする。さて幕も段々と相進み、次は原口重吉婚禮の場でござりまするが、此の場よりはかねて御吹聽申上げましたる通り、玄武門の勇士にして、名譽の金鵄勳章拜受者たる當代の軍神原口重吉自ら登場、諸君に御目通り致しまする。何分演劇の方面は素人にござりますれば、藝の未熟は幾重にも御容赦の上、百聞は一見に如かず、劇界に例なき此の有意義なる試みに御賛同あらむことを伏して願ひ上げ奉ります。さて婚禮の場が相濟みますれば、皇軍愈々敵地へ出征のくだりと相成りまするが川村演劇が今回開演の脚本は尚も國威に相關する次第につき、吾が陸海軍軍人に扮しまする俳優は其の威嚴を示すため、すべて禮服を相用ゐますれば、自然戰時の事實に相違致すことと相成りまするが、それは右の次第とよろしく御推量の程願ひ上げまする。

尚、名譽ある聯隊旗が舞臺に現はれましたる其の節は、觀客諸君に於かせられましては、申す迄もござりませぬが、敬禮の意を表せられたく、かくは豫め御注意申し上ぐる次第でござりまする。

頭取が引つ込むとすぐに幕が開く。上手二重、押入戸棚、すすけたる障子。破れたる壁。下手門口。貧しき農家の體。原口重吉羽織袴、おくら綿帽子、仲人其他羽織袴で控へる。四海波の謠曲。三々九度の盃事の模樣よろしく。原口の姿を見ると見物人しばしば總立で騷ぐ。

——○原口！重吉！——玄武門の一番乘！——○日本の守り神！——えらいぞ！

仲人。目出度い、目出度い。オツト重なるは忌言葉、三國一の嫁取濟ました、シャンシャンシャンシャン。

おくらの父。重吉どんは兵役中、品行方正、學術技藝に熟達し、善行證書を受けられたれば、おくらにとつてこんなよい緣はねえわい。

ト ばたばたになり、表の戸を開けて憲兵警官入り來る。

警官。(二重に片足掛けながら)當家の倅重吉は後備軍の兵籍にありて、既にその筋より徵發の令が出た。いざ來れ!

立ちかかる。皆々泣き騷ぐ。

——〇えツ、徵發の命令が。——〇一夜の契も濟まねえうちに。——〇今すぐにとは、ハア、情ねえ。

重吉の父。もし、憲兵樣、ごらんの通り、只今三々九度の盃事が濟んだばかり、慈悲だ、情だ、憲兵樣、せめて今晚一晚だけ——

憲兵。ええ、成らぬ。

重吉。ヤアヤア親人、(チヨボの乘地になり)さまで嘆き給ふべからず。徵發あることぞ幸ひなれ。鐵の草鞋を踏みしめて、國に仇なすヘロヘロのチヤンチヤン坊主がそつ首をチヨキリチヨキリと切り落すこと水瓜冬瓜を切るよりもいと安し。ハヤおさらば。

ト 立ちかかるを花嫁おくら取りすがる。

おくら。なう待つてたべ我が夫、あんまり聞えぬ重吉どん、そもや結納かはしてから、嫁入する日を待ち兼ねて、やつとの思ひで來たものを、固めの盃すむやすまずに御出陣、お前はそれでもよからうが、あとに殘つたこのわたし、辛き浮世にながらへて、人の口のはに上る恥をかけとの事かいなア。(ト 隣家で淨るり——いひなづけある初菊殿、わしが事は思ひ切り、他家へ嫁入りして下され。)エーモー折も折とて忌はしきあの淨るり、嫁入するとき門火を焚くは何のため、私やここで死にに來た。何ぼうでもやりはせぬ。

重吉。イヤ何といふても御國のためぢや。ゆかねば日本臣民の義務が立たぬ。え丶、聞分け（トおむらの肩に手をかけるを道具替りの知らせ）ないか。

トつッぱなして憲兵巡査諸共に驅け去る。お初、楓、其他見物等涙を拭いてゐる。次の軍歌にて道具廻る。

——敵は幾萬ありとても
すべて烏合の衆なるぞ
烏合の衆にあらずとも
味方に正しき道理あり
邪はそれ正に勝ち難く
直は曲にぞ勝ち栗の
堅き心の一徹は
石に矢の立つ例あり
などて恐る丶事やある
などてたゆたふ事やある——

この軍歌の途中で、聲を合せて歌ひ出す見物少からず。

舞臺一面の岩山、下手寄りに嚴重な門。門を圍んで泥土大石で築いた堅壘。壘の上に數流の黃龍旗が飜つてゐる。すべて平壤牡丹臺下玄武門前の體。上手寄りに十數名の日本兵が控えてゐる。道具留ると同時に喇叭卒白岩が突撃喇叭を吹く。と清國兵が一人壘の上に現はれて喇叭卒を射倒す。一人の兵隊が抱き起す。

兵隊。白岩、傷は淺いぞ。

白岩は死に瀕しながら、喇叭を口から放さず、とぎれとぎれながら吹き續ける。

少尉。白岩、立派だぞ。皆、進め！

日本兵は門の前に押し寄せる。すると壘の上に清國兵が多勢現はれて一齊射撃をする。日本兵手傷を負ふものが多い。

――○やられたッ！　――○うむ、殘念！　――○大日本帝國萬歳！

彼等は止むなく手負ひを助け、一と先、さつきの岩陰に戻り、傷の手當をする。原口重吉は矢立を取り出し手紙をしたためる。

少尉。こらッ、原口、何をしちよる。

原口。はッ。手紙を書いてをります。

少尉。誰にあてて書いちよるか。

原口。はッ。妻に宛てて書いてをります。

少尉。何、妻に？こら、原口。この期に及んで女々しい心を出すとは何事ぢや。その手紙を見せい。

原口。はッ。（と手紙を差し出す。）

少尉。（讀む。）拜啓、軍人一たび家を辭して戰地に臨めば、又再び生還を期せんや。たとひこの重吉の身にいかなる事あるも、家人たるもの決して未練のふるまひあるべからず。我れ既に死を決せり。この他何事も云ふべきことなしと雖も、ただ一事心にかかるは、我れ出陣してより後に生れしといふ一女兒の事なり。たとひ我れに萬一の事ありとも、生長ののちは天晴軍人の士女と云はれ、婦德の鏡とたたへらるるやう、今より家庭教育に注意すべし。草々。うむ、さうか。さう云ふわけであつたか。よい覺悟だ。叱つたのは俺が惡かつた。

原口。勿體ない事であります。

少尉。だが、お前はまだ結婚の式さへ濟まぬ。そのうちに、出陣したと云ふではないか。それに女の兒が生れたとは――

原口。お恥しい事であります。つい結婚の二ヶ月前から——

ト其の時曇の上に清國兵二人現はれて、可笑しき手眞似で馬鹿にする。

清國兵一。ちんしんようろ、くんけんくるめいたかりんかんきう、さうもうすがすんでいするとも、とらやおやお。

清國兵二。うすうすうさすはもう、さきがちんぶんかくさんきんないろ、きんにやうにやう。

少尉。おのれ無禮なチャンチャン坊主。我が日本軍を輕蔑なすか。もう勘忍袋の緒が切れた。者共、突貫！

トサーベルを振つて先に立ち、一同突貫するが、再び一齊射撃に遇つてたぢろぐ。

少尉。進め！進め！えい、意氣地のない奴原だ。誰か塀を乘り越えて、門を内から開く者はないか。

ト原口が默つて飛び出して壘壁に取り附き、よぢ登り初める。

少尉。うむ、原口か。出來したぞ。おい、原口を見殺しにするな。壘上の敵に一齊射撃！

ト兵隊等折敷の構へで壘上の敵を射撃して追ひ拂ふ。その間に原口は壘壁を越えて内に飛び降りる。内でワーッ、ワーッと云ふ騷ぎ、劍戟の音。やがて門扉がギーッと開く。

少尉。突貫！

ト兵隊等を率ゐて門内に突入する。原口は再び壘壁の上に現はれ、日の丸の旗を立てて叫ぶ。

原口。大日本帝國萬歲！

ト萬歲の形できまつてゐると、門内からスチチコ節の合唱が聞える。

——ゆふべ見たよな大きな夢を、威海衛を背に負ひ、鎭遠定遠を足にはき、そのまた帆柱杖につき、ほうかん山に腰をかけ、四百餘州を一またぎ、あんまり喉がかわくゆゑ、黄河の水を、ひい、ふう、三口に呑みほせば、何やら咽喉に立つたやう、えへんえへんと咳ばらひ、つばきを吐き出しよく見れば、萬里の長城が飛んで出た——

觀客一同拍手喝采のうちに暗轉。タイトルが出る。

タイトル。だが、芝居と實際とは、何といふ大きな相違か。

暗黑の中、劇中劇場の舞臺の上のみが使用される。背景は映畫で、ボロボロの田舍屋、母親がボロをつくろつてゐる。不意に遠くで號外賣の鈴の音。騷ぎが近づく。(この短いシーンは德永直の短篇「カツトされない場景」から借りた。)

――○號外だぞ、號外だぞ。――○おう、お吉、號外だぞ。早う行つて見べえ。――○勝つたのか？――○おう、早う來う、號外だ。

母親はボロを抛り出して怒鳴る。

母親。芳ッ！　何處にゐる。芳ッ！

表から爺が一人覗き込んで去る。

爺。おう、平壤が落ちたぞ。平壤がよう。

芳が這入つて來る。母親は芳を外へ突き出す。

母親。行くだ。早う行くだ。早う行つて號外買つて來るだ。

芳は跳び出して行く。暗轉。背景は映畫で村はづれの路。號外の束を片手に差上げて、喚いてゐる號外賣を、爺さん婆さん女房子供達が身動きも出來ぬやうに取り卷いて、一ト塊のまま動いて來る。(背景の映畫を移動させる。)

――○よう、號外よこせ。――○何處が落ちたんぢや。――○平壤だとよ、平壤。――○早うよこせ。――號外賣。いかん、いかん、五厘だ、五厘持つて來う。――○よこせ、よこせ。

突き飛ばされ、引きずられて、老爺老婆はまろびころびながら泣き騷ぐ。

――○ありがたいこつちや。これで息子の顏が見られるのう。――○駄目だ。まだ初まつたばかりぢやねえか。――○平

壌なんて、入口だねえか。――○ちよつと見しとくれよ。――○見したつていいぢやねえか。號外賣。どいた、どいた。五厘持つと來ねば駄目ずや。どけ、どけ。――○何が駄目ぢや。息子一匹おつ盗られたに、號外一枚がどうしてくれられんかツ。――○さうだ、さうだ、太十さとこは名譽の戰死が出ただ。一枚くれとけ。――○ぬすつと。出せ！――

號外賣。そんな事、俺が知るもんか。――○何、知らん？――○どうしてもよこせねえか。ふんだくるぞ。

芳は素迅くモグリこんで號外を引つたくり、バラまき、自分も二三枚取る。

號外賣。こらツ、餓鬼ツ、叩つ殺すぞ！

芳は走る。（背景の急速な移動。）一瞬の暗轉ののち、再び以前の家、芳が飛び込んで來る。

芳。おつかア。ほれ。

母親は受け取つたが、字が讀めない。

芳。（號外を引つたくつて、）俺が讀んでやろ。（讀む。）平壌――陥落す――九月十五日――元山枝隊長佐藤大佐――牡丹臺を攻む――激戰十二時間ののち――敵軍遂に――玄武門上に白旗を――揚げて降る――我軍目下平壌に入城中。

母。どうしたのかのう？

芳。平壌が落ちたんぢや。

母。いゝちやんは生きとるのかい？

二人の眼は號外の上をさまよふ。

母。原口重吉といふ名前は書いてねえのかい？陸軍歩兵一等卒だぞ。

芳。無え。書いてねえぞ。

母。もう一つの方のにや書いてねえ？

芳。どれだつて一つもんだい。馬鹿だなあ。(笑ふ。)

母。(怒つて芳をなぐる。)この餓鬼め、ちやんが死んだ日にやお前達や明日からどうして食つてくだッ！恐たれめッ！ちやんが死んだ日にやア——(泣き倒れる。)聞いて來う。地主さんの所さ行つて、ちやんは生きとりますかつて聞いて來う。御奉公に役場さ草鞋十足も納めてあるだ。聞かしとくれるべえ。とつとと行つて聞いて來う。

芳はベソをかきながら表へ出る。一瞬の暗轉で、背景は立派な地主の家の裏口。芳がションボリ立つてゐる。

芳。ちやんは戰死しましたでせうか？(答へなし。)ちやんは戰死したでせうか？(答へなし。段々泣聲になる。)ちやんは生きとりませうか？(答へなし。あとは啜泣きとなる。)

——舞臺廻る——

第二場

神田末廣町にある小野田芳三郎邸。楓の書齋。女の書齋にしては書物が澤山置いてあるのが眼がつく。同日の夕方。楓の弟國太郎が何か本を音讀してゐる。

國太郎。一寸御免を蒙りまして、日本の御百姓様、日本の御商賣人様、日本の御細工人職人様、其他士族様、御醫者様、船頭様、馬かた様、獵師様、飴賣様、お乳母様、新××様共、御一統に申上げまする。さてあなた方は皆々御同様に一の大きなる寶をお持ちでござる。この大きなる寶とは何んでござる歟。打出の小槌か、鍵のなる樹か。金か、銀か、珊瑚か、ダイヤモンドか、但しは別嬪の女房を云ふか。才智すぐれたる兒子(こども)の事か。いや〳〵こんなものではない、まだ是等よりも一層貴い一つの寶がござる。それが即ち自由の權と申すものぢや。元來あなた方の自由權利は、中々命よりも重きものにて、自由が無ければ生きても詮ないと申す程の者でござる。ウン、これは中々書き方が民衆的でいいなあ。

かういふ調子で行かなくちやいかん。

さつきから遠くで、「お歸りイ」といふ聲やバタバタ足音などが聞えてゐたが、下女の竹やが駆けて來て襖を開ける。

竹や。お坊ちやま、奥様やお孃様がお歸りでございますよ。あら、こんなに暗い所で。梅やはランプを持つて來なかつたんでございますか?

國太郎。僕が姉さんの部屋へ這入りこんでることを知らないんだよ、きつと。

竹や。仕様がない子だこと。すぐ持つて參ります。(去る。)

國太郎は本を讀み續ける。楓が這入つてくる。

國太郎。(振り向かずに。)お歸んなさい。

楓。また人の部屋を占領してるのね、國ちやんは。

國太郎。うん、どうも此の部屋の方が妙に感覺が落ち着くんでね。

楓。ぢやお母様に申上げていつその事國ちやんと部屋を取つ換つこしませうか?

國太郎。いや、さうしちまうとまた此の部屋では落ち着けなくなつちまふかも知れないんだ。

楓。まあ、むづかしいのね。

國太郎。どうも仕末に困るよ、かう妙に感覺が鋭敏なのも。芝居どうだつた?

楓。ずゐぶん勇ましい事は勇ましかつたけど、原口重吉が自分で役者になつて、自分の手柄をやつて見せてるのは何だか姉さんなんかには嫌に感じられたわ。

國太郎。そりやさうだらうね、どうせ戰爭芝居なんて始めつから上ッつぺりのしたものなんだから。

楓。さう一概に云つたものでもないわ。(着物を着換える。帯の間から手紙を落とす。)

竹や。（ランプを持つて來る。）遲くなつて申しわけがございません。（着換えの手傳ひをする。遠くで男の笑ひ聲が聞える。）

國太郎。おや誰か來てるの？

楓。ええ野呂さんが何かお父樣に用があるからつて芝居から一緒に家へゐらつしやつたの。國ちやんお會ひしてくるといいわ。

國太郎。ま、エキスキユース・ミーだ。御用があるなら向ふからお越しを願ひたいね。

外で救世軍の樂隊が聞える。「信ずる者は誰も皆救はれむ。只信ぜよ、只信ぜよ、信ずる者は誰も皆救はれむ。――皆さん、今晩、神田美土代町の青年會館に於きまして、基督教のお話があります。どうぞおいで下さい。」子供の聲がする。「ヤソ、ミソ、テツカミソ。」救世軍が遠のく。數人の子供がうたふ。「夕燒小燒明日天氣になアれ」子供が叫ぶ。「おい、かうもりが出たぞ、かうもりが出たぞ」「草鞋持つて來い、草鞋持つて來い。」

楓。（着換え終つて）今歸りしなに厭なもの見ちやつたわ。

國太郎。何さ。

楓。上野の廣小路の所でね、鐵道馬車の馬がまた泡を吹いて倒れてたの。白眼を剝き出してね、可哀さうだつたわ。

國太郎。厭だなあ。

楓。それをね、鞭でもつて滅茶苦茶にぶつてゐるの。しまひにはどこからか竹の棒を持ち出してそれでぶつてゐるの。

國太郎。厭だなあ。この夏は、毎日きまつて二匹や三匹倒れたつけなあ。

楓。私どうしても鐵道馬車にだけは乘る氣がしないわ。人間なら痛いとか苦しいとか云へるんだけどねえ。

國太郎。その人間も自由權利がなければ馬も同じことさ。リベルチーとライトだ。

楓。だつてさういふ議論は憲法御發布や國會開設の前には本當だつたかも知れないけど――

國太郎。なァに今だつて同じことさ。たとへば同じ人間でも婦人には參政權がないぢやないか。

楓。國ちやんの議論は過激に走るからいけないわ。

國太郎。所が僕は十年も前の自由民權論ぢやなくて、もう少し先迄考へてゐるんだ。例へば國家といふやうなものも僕にとつてはクエッション・マークなんだ。だから今度の戰爭なんか僕にとつては根本的に同感出來ないんだ。

楓。シッ、駄目よ、そんな大きな聲を出しちや。お父樣に聞えたら大變ぢやないの。

國太郎。この植木枝盛の民權自由論を讀み初める前にね、ここに置いてあつたからちよつと此の凱旋記念帖を覗いて見たんだがね、何だか可笑しくつて思はず笑ひ出しちやつたのさ。そら、この人の卷の卷尾に歌がのつてゐるでせう。これが可笑しいんだ。皇軍の全勝を祝ひて。すめ國の神のみいつのそはればやたたかひごとに勝たざるはなき。ちはやふる神の御國の神風になびかぬ唐のしこ草もなし。日の御旗ふきなびかしし神風にいろうしなへる唐にしきかな。あはははは、どれを讀んでも神、神だ。これぢや救世軍と同じぢやないか。人智の開發もこの調子ぢや前途遼遠さ。(手紙を見つける。)おや、何だい、これ。

楓。(あわてて取り戻さうとする。)駄目よ、國ちやん。

國太郎。ははァ。また月島さんからだな。隨分勤勉な人だなァ。

楓。返してつてば。(たうとう取り戻す。)

國太郎。また相變らず理想主義のお說教だらう。文明はいかん、自然に返れと來るんだ。

そこへ母親初子が這入つて來る。

國太郎。お歸んなさい。

初子。はい只今。まあ、お前さん達は何をしてるの？ 野呂さんをあつちにおいてきぼりにして。早くお客間へおいでな。

國太郎。行つてもいいけど、どうもあの先生おしやべりだからなあ。口が滑り出したらキリがないんだから。

初子。爲になることならうかがつたらいいぢやないか。

國太郎。ところがあの先生の説は俗臭紛々だからなあ。

初子。何を生意氣云つてるのさ。來ないならここへおつれしますよ。

楓。駄目よ、ここはちらかつてるから。

初子。構やしないよ。家の人見たいなものだから。それより國太郎、野呂さんのお話に生意氣な挿出口をするんぢやありませんよ。(去る。)

國太郎。オーライト。

楓はそこいらを取片付けてゐる。野呂が初子につれられて來る。

野呂。やあ、押し掛けて參りましたよ。構ひませんか。

楓。さあどうぞ。

野呂。國太郎君、近頃はいかがです腦の方の具合は。

初子。お陰樣で、近頃は痛むやうな事もないやうですよ。

野呂。それは結構です。何しろ家に引きこもつて因循するのはいけませんな。折角學業を半途で廢した意味がなくなりますからなあ。たまに芝居見物などに行つて鬱を散ぜんといけませんなあ。

國太郎。川村のニユー・シアターは如何でした？

野呂。精神はよろしいが、技術が未熟なので殘念でした。それよりもまたもや××と××との衝突があつたのは苦々しいことでした。三國干渉で臥薪嘗炭などと口では云つてゐますが、何と云つてもまだ戰勝氣分に醉つてゐて、擧國一致と

いふ精神が不充分です。軟弱外交のなんのと云つて、日比谷に集まつたりするだけが能ぢやありませんよ。外交が軟弱なのも、もとはと尋ねれば、これ皆國力が充實して居らんからぢやありませんか。

初子。本當にさうですわねえ。

野呂。しかも一方ですな、軟弱外交を責める輩が、遼東を還附したことばかり騒いで、臺灣といふ新領土を得たことを云はないのは皆がまだ臺灣の價値を知らんからだと私は思ひますな。愚見に依れば、臺灣は佛國の彼のアルゼリー、印度支那、英國のボルネオ、ローデシアにも優る殖民地です。我が國は領臺以來の一ヶ年間に六百九十萬圓の補助金を支出しましたが、私は十年を出でずして、臺灣が必ず補助金を必要とせぬばかりか、母國に巨額の利益を與へる殖民地となることを斷言致してはばかりません。只今も閣下にお眼にかかつて、臺灣の有望な事について懇々とお話した所です。

楓。(調子を合はせて)まあ、臺灣てそんなにいい所なんですの?

初子。そりやお前、よくなかつたら引き合やしないわね。十ヶ月も戰つて、何千人といふ兵隊さんが生命を捧げてさ、分捕つたのが償金二億兩(テール)と臺灣きりぢやないか。だから、餘つ程よくなかつた日には折角の戰爭が無駄骨折になつちまふよ。

野呂。その點は御心配御無用です。天のなせる寶物庫とでも云ひませうか、砂糖、鹽、樟腦、茶、材木などは無盡藏と云つてもよろしい。例へば樟腦は樟樹から取りますが、臺灣の山には周圍が三十尺から四十尺にもなる大木が所嫌はずモクモク生えてゐて、そいつを打つたぎつて煮さへすればいいのですが、かういふ大木になると一本から一萬圓もの樟腦が取れるといふから凄いぢやありませんか。

初子。まあ、一本から一萬圓。

野呂。何しろ臺灣は熱帶ですから、樹木の成長が極めて敏速です。お茶の樹などにしましても親木から移植して二年たつ

と、もう三尺の高さになり、四月、六月、七月、八月、九月、十一月と六度も芽を摘むことが出來るのだから、弘法大師もハダシです。米などは二度の收穫は普通で、所に依つては三度收穫出來るといふから大したものです。さうさう、今日はお孃さんにお土産を持つて來て居つたのですが、芝居見物に取りまぎれて今迄とんと忘れて居りました。ちよつと取つて參ります。(立ちかける。)

初子。あら、ようござんすよ、女中に取りにやらせますから。(手を拍つ。)

竹や。はあい。(現はれる。)

初子。あの、お玄關ですわね？——

野呂。は、さうです。紫の袱紗に包んだ四角な本がありますから、ちよつと持つてきて下さい。

竹や。畏りました。(去る。)

野呂。新領土臺灣寫眞帳ですがね、以前部下だつた者が總督府の參事官になつて行つとりますのでな、それが送つてよこしました。もう宣傳寫眞帳迄作つてゐるとは總督府も中々やるわいと感心しました。や、寫眞も印刷も相當立派に上つとりますよ。

竹や。(現はれる。)これで御座いますか。

野呂。や、これこれ。御苦勞でした。(竹や去る。本を取り出して。)表紙なども中々綺麗に出來とります。これが總督樺山大將と。(以下アルバムの頁をめくるに從つて、舞臺の片隅につるされたスクリーンに幻燈がうつる。)これが玉山です。富士山より二千尺も高いといふ日本一の高山です。餘り高いので、始終頂にはかういふ風に雲がかかつてゐて、すつかり見えるのはごく珍しいといふから大したものです。これは郵便物を輕便鐵道に乘せて運んでゐる所です。熱海にありますな、あれと同じ理窟です。人夫が一臺につき二人づつついてゐて、登る時は押す、下る時はかうして乘つてゐるのです。こ

の郵便物の輸送といふのが中々骨でしてな、土匪が兎角郵便物を狙ひたがるのです。

初子。土匪つて何ですの？

野呂。土匪といふのは臺灣土着の土人でしてな、強盗殺人を業とする連中で、之には淸國も手を燒いて居つたのです。

楓。まあいやだ。

野呂。これについてはかう云ふ話があります。去年の四月、講和條約締結の席上、伊藤博文公が李鴻章に向つて、「臺灣の島狀は如何でおはすか」と聞いたのです。すると李鴻章が答へるには「臺灣には、三年小叛五年大叛といふ諺がおはして實に難治の地でおはす」さあ判らない。そこで伊藤公が「三年小叛五年大叛とは如何なる事でおはすか」と聞くと李鴻章が答へて「それは島内を横行する不逞浮浪の徒が、黨をなして暴行を働き、良民を害し、財貨を横奪し、時の政府の施政方針に反抗する所謂暴徒の蜂起が、三年目には小さく、五年目には大きく反覆されるといふ語でおはす」と云つたので、伊藤公は眉間に憂色をたたへられたが、やがて語をついで「その他には統治上參考になる事どもおはさぬか」と聞くと「いや、島の地域の十分の六、七を占有する到底敎化し難い生蕃といふのがおはす」といふ大變な答へなのです。「敎化し難いといふのは如何なるわけにておはすか」と聞くと李鴻章答へて曰く「彼等は猛獸と等しく深山溪谷を住居として爭闘を事とし、人の頭を獲るを以つて最も誇りとする奇習ある者にておはす、之を以つて臺灣を南荒化外の地といふのでおはす。」南荒化外、即ち南の方の荒れ果てた開化出來ぬ土地といふ意ですな。これ等がその生蕃です。これがビユマ族、こつちが男、こつちが女です。これはアタイヤル族の女。刺青をした上、耳に棒を突き刺してをりますな。パイワン族、ツオオ族、ヴオヌム族、アミ族、かういふ連中が深山幽谷の中に巣喰つてゐて、何かと云ふと人の首を切る。切るとその首をまづ谷川で洗つて——

初子。まあ、野呂さん、もう澤山ですよ、氣味の惡い。

野呂。や、どうもつい調子に乗つて飛んだ所へ脱線してしまひました。

楓。あなた折角さつき迄あんなに賞めてらしつたのに、これでは臺灣は臺無しぢやありませんか。

野呂。こいつは飛んだ所で失敗しました。だが美しい薔薇には棘があります。私は元來殖民地を持つてゐる民族は庭を持つてゐる家だと思つとります。庭に生えてゐる樹や草は人間の吐き出す濁つた空氣で育てられ、人はまた樹や草の出す新鮮な空氣で育てられる。國民は餘つた活力を殖民地に排泄し、殖民地はまた母國に新鮮な活力を給與する。さればこそ殖民地を持つ民族は世界いづれの國をとつて見ても、活動成長せざるは無き有樣です。しかし殖民地になるやうな所は天産こそ豐かなれ、未開野蠻な土地ですから、或ひは黑ん坊、或ひは生蕃、或ひは土匪、これらの徒が横行してゐることは理の當然なのです。しかし近衛師團や樺山總督の努力に依つて、臺北、臺南等といふ大都會の城内はもうお孃さんがゐらしつたつて何の危險もありません。

楓。私、いやですわ、そんな所。

野呂。いや、日本もたうとう殖民地を持つ國になつたのですから、これからは婦人連も、國内で女子に參政權を與ふべしなどと演説ばかりしてゐないで、いや、それも結構ですが、そんなことより一つ殖民地へでも押し渡つて、といふやうな進取的な氣象にならなければ本當の新しい婦人とは云へんと思ひますなあ。國太郎君もどうです。一つ南方の天地に雄飛しては。

國太郎。土人や生蕃の首を切りにですか?

野呂。いや、そんな事は兵士なり警官なりがしてくれますよ。大鑛山王乃至は大砂糖王になるんですよ。何しろ國太郎君などは幸福な境遇に生れた人ですよ。尊大人が内務大臣で政權を握つて居られる。これで金力があれば鬼に金棒、世界に恐れるものはありませんよ。

その時、外で號外の鈴の音。「號外、號外、大藏大臣の辭職」

野呂。(驚いて立ちかかる。)えッ、諸井さんが辭職?こりやいかん。奥さん、すみません。一寸號外を買はせて下さい。閣下、閣下。

初子。竹や!竹や!

二人は出て行く。外では號外の聲。地震が搖る。

楓。あらッ、地震だわ!

國太郎。(平氣で)うん。

楓。地震よ、地震よ。(驅けて行く。)

——舞臺廻る——

第三場

同家の裏大部屋で下手の門に續いてゐる。岩吉と書生横山が座つてゐる。前場に續いて地震が搖つてゐる。號外の聲が聞えてゐる。

横山。まあ、弱震の弱といふ所だな。

岩吉。戰に行つたものに取つちやあ、こんなものは何でもねえだらうて。ホラ、もうやんぢやつた。

竹や。(聲だけ聞える。)横山さん!號外、號外を早く買つておくれつて。何處にあるのさ。

横山。ホイ來た。ええと號外の事は何々つたつけえかなあ。エキスプレスぢやねえ。ええと。(驅け出して行く。)

竹や。(聲のみ。)早くよう、横山さん、何を愚圖愚圖してるのよう。

横山。(號外を持つて走り過ぎる。)占めたッ。さうだ、エキストラだ。(號外を渡して戻つて來る。)

岩吉。何の號外だね。

横山。大藏大臣の諸井さんが病氣で辭職したんだ。

岩吉。へえ、こいつあ大事だね。諸井さんは内閣の金穴なんでせうに。

横山。さうさ。現内閣は云はば閥族内閣で、金穴と云へば諸井さんを通じて五井と結んでゐるだけなんだから、ここで諸井さんに投げ出されたら、この内閣も長い事はあるまいな。うちの大將も今頃はさぞガッカリしてゐるだらうよ。

岩吉。さうかねえ。これでこの内閣も倒れるのかねえ。

横山。倒れるね。次に來るのは五菱の呼吸のかかつた内閣だらう。去年の遼東還附の騷ぎの時に民軍の釆配を振つて政府に肉薄したのが大熊さんの改進黨で、大熊さんは五菱の番頭みたいなものだから、そこらの所から推草を廻らすと、大よその當りは附くと云ふものさ。

そこへ横山の友達足部仁太郎が號外を握つて這入つて來る。

足部。今晩は、よう、岩吉君を相手に政治談かね。

横山。岩吉君は君、中々の政治通だぜ。しかも「門前のぢぢい習はぬ經を讀む」の域を脱して既に一家を成しとるよ。

足部。岩吉君の名聲は僕も夙に聞き及んでをるよ。所で君此の號外見たか？

横山。うん、今その號外のことで談論しとつた所だ。

足部。實に驚き桃の木だ。アイ・ウオンダー、驚愕の至りだ。諸井さんの心事が僕にはさつぱり了解出來ん。今辭職したら内閣が倒れる事は目前に見えてをるぢやないか。

横山。そこだ。そこに關して僕は面白い話を知つとるんぢや。昨年うちの大將が京都に旅行した事があつたらう。あの時の話を野呂祕書官からちよつと聞き出したんぢやが、フト金につまつて五井の京都支店に金五百圓也の借金の申込をし

たんぢや。

足部。ほう。

横山。政府の大官や閥族が富豪から返濟期無限の借金をすることはいつもの事ぢやが、この時京都支店長小田といふ男は一言のもとにはねつけたと云うんぢや。

足部。ほほう、えらい事をやり居つたな。

横山。野呂さんがその事を話してえらくおこりよつたよ。今迄は二つ返事で用立ててゐたものが、急に開き直つて、銀行であるから無論貸出しは致すが、無擔保では御相談にならぬ、擔保を御持參あればいつ何時でも御用立て致すと來た。だがこの肱鐵を食つたのは、うちの大將だけぢやないさうだ。どうも流石の左井も閥族のお貸し下されには閉口して、斷然緣を切る氣になつたらしいな。

足部。ふむ、して見るとこれは奴等ももう、閥族の助けを借りなくとも充分やつて行けるだけの基礎を得たと見えるのう。

横山。さうらしい。此の戰爭で日本の工業も愈々盛んになつたので、今迄の前垂主義を改めて、官邊の利權をアテにせず獨立獨步で行く第一步を踏み出したと見えるわい。

岩吉。お金持は段々えらくなつて行くばかりですな。

足部。さうさ。どうだ横山、ここらで我々もオピニヨンを改めて、法律書生にはグードバイして、株屋の手代にでもなつて年期を入れた方がよささうだぜ。

岩吉。あんた方はさうやつて、まあ勉強しさへすりやあ何にでもなれるからいいが、わつし等車夫と來た日にやあ、一生涯車の曳きづめでお抱えで十四五圓、もうろうにでもなつた日にやあ、朝つぱらから夜中迄働いて、日に四十錢にでもなりやおんの字でさあ。それでまあガキの一人もあつてごらんなせえ、まあ一日に割つて、(ソロバンを取つて)米が一升五

合として十七錢、オカヅに五錢、薪代炭代に五錢、石油が五厘、屋賃が七十五錢の長屋として日に二錢五厘、布團の損料が二錢五厘、それにまあ、酒に三錢、煙草に一錢、子供の小遣に一錢づゝもはづみやす、これでもう二十六錢五厘だ。やれ車の税だ何だといふのが何處から出ますい。それで車界黨といふやうなものをこしらへてあばれたもんでさ。

足部。さうさう、岩吉君に車界黨の話を聞かして貰ふ約束がしてあつたなあ。車の世界と書いて社會とモヂつたなんぞは仲々風流氣があつたぢやないか。岩吉君も大分あばれたんださうぢやないか。

岩吉。あばれましたよ、十六年だから今からもう十二年も前の話しでさ。一つ話すかね。

横田。一席頼むぜ。

岩吉。この鐵道馬車てえ奴が出來たんで、車夫仲間は仕事がなくなつたんで、奥宮てえ先生が音頭取りで、この上の神田明神に東京中の車夫が集まつて、馬車鐵道反對同盟會てえ奴をこさへたんでさ。こいつがあとで車界黨てえ名に變つたんだが、あつし等何も鐵道馬車を倒さうてだけのこつちやなくつて、甘く行つたら、この力で石崎初め金持共を片ッ端からやつつけちまふつもりだつたんでさ。

足部。成程ね。

岩吉。演說會なんて隨分盛んなもんでしたぜ。とても今時の演說會見たいな生やさしいもんぢやねえ。かうハッピを着込んだ連中がたんかを切る。中止になるてえと、參背が飛ぶ、煙草ぼんが飛ぶ、臨監の警部巡査なんかメチヤメチヤに擲つて半殺しにした。演說會で煙草ぼんを差止めになつたなあこの時が初まりでさあ。

足部。ふうむ、こいつあ初耳だなあ。

横田。それにしても凄い事をやつたもんだなあ。

岩吉。所があんまり勢が烈しいんで、結社は禁止される、奥宮さんは石川島に送られる、それでたうとうオヂヤンになつ

ちまつたが、隨分盛んにやつたもんでさ。何しろ法律とか政府の命令とか云やあてんから從つちやあいけねえものと思ひ込んでゐたんだからねえ。

足部。こいつあいい。

岩吉。憲法が御發布になつて國會が開設されても、わつし等にやあ何のいい事もねえが、車夫仲間も近頃ぢやアからつきし意氣地がなくなつちまつたよ。だがこれで車夫なんかでも田舍の百姓にくらべりやまだましでさ。何しろわしの國の方ぢや、まあ一町歩位の地所持ちで一日の賃が一錢位にしきや當らねえんだからね。小作人と來た日にやア——

竹や。(聲だけ。)岩吉さん！旦那樣のお出掛け！

岩吉。はいよ。(立つて足袋を穿き草鞋を穿く。)

横田。諸井さんの辭職で閣議でも開くんだらう。(去る。)

足部。どれ僕もグードバイとするかな。(立ち去る。岩吉は車を玄關の方へ持つて行く。「いつてゐらつしやいまし。」といふ多勢の聲が聞える。小野田を乘せた車を曳いて花道へ曳つぱり込む。)

第二幕

第一場

逗子海岸にある近江時三郎の別莊。海を見はらす高臺にある座敷。明治三十一年一月。

小野田斧三郎、野呂信吾、近江時三郎が酒を呑んでゐる。藝者六七人酌をしたり、唄つたりしてゐる。

△(唄ふ)支那の李鴻章は鰯か雜魚かネエオイ、鯛に追はれて逃げてゆくんだよ、ホイホイ。——□(追つかけて唄ふ)旅順取

られて威海衞が落ちる、北洋艦隊全滅す全滅す、これなら開戰するのぢやなかつたに、落膽落膽、つらいつらい。

野呂。アヽつらいつらい、と。

○。さあ御前、お乾しなさいよ。

野呂。乾すのは乾すが、もう、お前のお酌ぢや厭だとおつしやるんだ。

○。アラ失禮なノーさんね。ねえ御前本當に妾ぢやお厭なの？

小野田。厭と云ふわけではないがの。ならうことなら、といふ所ぢやな。

○。ならうことなら、してほしくないとおつしやるの？

野呂。ノーノー、ならうことなら〆松にして貰ひたいとおつしやるのさ。

○。あははは、さうならさうとおつしやればいいに、御前はホンにお氣が小さいのね。だから妾は御前が好きなのさ。（抱きつく。）可愛いい鬚の赤ちやんや。さあ〆ちやん、早く御前にお酌をして頂戴よ。

〆松（雛妓）あい、御前、お一つ。

小野田。むう（呑む。）

○。アラ、ただ、むうッきりなの。色氣がないわね。何とかおつしやいよ。アイ・ラヴ・ユー。余はハッピーであるぞよ。あははは。

野呂懐中時計を出して時間を見る。

野呂。御前、そろそろ始めませうか。正三時でございます。

小野田。新橋行の汽車は何時ぢやつたな？

野呂。五時半發のがよいと思ひますが。

小野田。さうか、ぢや始めるとしよう。

野呂。さあ妓共、ちよつと海岸へ散歩にでも行つて來い。

○。アラ、追ひ立てなの？

小野田。國政上の大事な相談ぢや。一時間たたんうちに歸つて來るんぢやないぞ。

△。あら御前、時は一月でござんすよ。寒中ですよ。――□吹きつつあらしの所へ出たらお陀佛だわ、それこそ。

野呂。國政上の大事な仕事だと云つたら判らんか。

△。ひどいわ、御前。――○。卽刻、近江時三郞の別莊より退去を命じ、一時間以內出入することを禁ず。まるで保安條令だわね。人は違ふけれど、矢つ張り內務大臣に命令されたんだから、へいへいと出て行くより仕樣がないわねえさ、〆ちやん、行かうよ。

小野田。〆松は殘つとれ。

〆松。あら――はい。

野呂。でも――

小野田。子供ぢや、何が解るもんか。

近江。さ、〆松だけ殘つて皆出て行つた。出て行つた。

近江は部屋の周圍を見廻はる。三人寄り合つて坐る。小野田は片手で〆松の手を弄びながら話す。

小野田。一體場所は何處なんぢやね。

野呂。（地圖を取り出して）ええと、新竹、竹南、苗栗、ここでございます。この苗栗地方でございます。

近江。聞く所に依りますると、この地方は臺灣中でも最も地味が豐かでございまして、甘蔗には最も有望ぢやといふこと

でございます。

野呂。それに此の土地を買ふと云ふ吉田保之助といふのは五井の影武者だと云うぢやございませんか。何でも物産の方の本店詰で、會計か何かやつてゐた男ださうです。

小野田。生意氣な奴ぢや。

近江。所が、困りましたことに、既に此の吉田に總督から假免狀が渡つてゐるといふ事なのでございまして。

野呂。道はただ一つ。あの近邊を一應官有地といふことにしてしまひ、改めて近江に拂ひさげるといふ事に致せばよいと思ひます。ムザムザ敵に糧を與へるなどといふことは馬鹿氣てをりますよ。

小野田。それは出來ん事はないぢやらう。

野呂。そこで吉田を片附けた更にその先の事でございますなあ。製糖業を臺灣の主要産業とするといふことに致しまして、總督府からまあ、から云つたやうな臺灣糖業奬勵規則と云つたやうなものを出させるのでございます。此處にちよつと覺え書をして參りましたがな。まあ數字などはあてずつぽうで、どうせ後に改正しなくてはなりませんが、ええと甘蔗耕作のため官有地を開墾する者には之を貸付し、成功ののち無代價を以て業主權を與ふるべし。千圓以上の灌漑又は排水工事をなす者には工事費の五割以内を下附すべし。その臺灣では灌漑の費用が中々かかるものでしたな。

近江。や結構でございます。實に結構で——

野呂。當該官廳に於て檢定する製糖器械を裝置して製糖する者には、其買入代價の二割以上を下附すべし。何しろ器械も中々かかる。事業の始めには固定資本は出來るだけ儉約せんといかんからねえ。器械もどうせアメリカあたりの會社から輸入せんといかんだらうが、それも近江君、君の方で引き受けてやつてもいいぢやないか。

近江。結構でございますなあ。

野呂。更に開墾費だとか、肥料費だとか、苗代だとか云つて、補助を與へることが出來ます。それに致しましても、何しろ何時迄も臺灣を軍人の手に委ねて置いては開發の仕事は手が着きませんのです。

小野田。軍人の力で分捕つたんぢやし、その上、土匪や生蕃の討伐があるから、ここ一二年は取り戻せまいが、早い所奴等の手から取り返さにやおいかんのう。

野呂。總督府假條例では、總督府は民政局、陸軍局、海軍局といふ三つから成り、軍事以外の政務は全部民政局に屬すべきものと定まつてをるのですが、全く怪しからん話でございます。何とかしてこれは條例をもつとハッキリさせて、民政部の要求がなければ、斷じて兵力は用ゐられんこと、總督府評議會に於ても、軍人は軍事以外の事では發言せんことにせねばなりませんと思ひます。

小野田。さうぢやのう。さうすれば仕事がしよくなるわい。

野呂。それにつきましても、私は月島保次を何とかして臺灣の覆審法院に判事として送りたいと思ふのでございますがいかがでございませう。何しろ臺灣での仕事は土人から土地を收容する事が第一着手でございますが、臺灣は目下特別の法典がございませんので、改まつて云へば、特殊法典の完成を見る迄は、母國の法律、若しくは法律上の格言に依り、ただし特殊なる風俗習慣歷史に基いて、多くの除外例を持つといふ事になるのでございますが、要するに法官にその人を得ることが大問題でございます。それに臺灣は內地の三級裁判と違つて、覆審法院が控訴院と大審院を兼ねた二級裁判でございますから、いよいよ覆審法院に誰か人を送つて置く方がよいと思はれます。

小野田。だが月島ぢや氣が弱くて碌な仕事が出來まいて。

野呂。それもさようでございますが、しかし考へやうに依れば、却つてあゝいふ小心翼々たる男の方が、上司の命も聞き、あとの批難も少く、好都合だとも思はれます。

小野田。さうかも知れん。考へて置かう。（近江に向つて）それから、此の間云つて置いた二萬圓の件を一つ至急たのみたい――

近江。は、畏りました。明日、早速お邸の方に持つて參上致します。

小野田。すると話はこんなものぢやな。

野呂。はッ、大體――

小野田。（〆松に）おい、海岸へ皆を迎へに行かう。まだ時間があるぢやらう。

野呂。はッ、まだ充分。

小野田。こまかいことはよろしく二人で相談して置き給へ。〆松來い。（去る。）

近江と野呂も送つて退場する。

近江。ああ、あの松林の方に聲が聞えるやうでございますな。

この時、岩吉が通り過ぎようとして、ちよつと立止つて、茂みにかくれる。近江と野呂戻つてくる。

近江。（小さな聲で）戀敵の月島さん追ひ出しの筋書には驚きましたなあ。

野呂。馬鹿を云ひ給ふな。一に君の利益を思つての遠謀深慮さ。

近江。何ともお禮の申し上げやうがございません。所で私の心配なのは、土地を土人からどうやつて政府に召し上げるかといふ段ですが――

野呂。そんな事は心配し給ふな。土地調査規則といふものが最近出來ることになつとる。地租も増し、有望な所は沒收することになつとる。萬事こつちの胸のうちだ。

近江。大したもんですなあ。所で、この間お話しして置いたお邸はお氣に協ひませんか。金子の方はちつとも御心配に及

ぴません。楓の君との新婚の御家庭に捧げたいと思ふとりますが。

野呂。うむ、ありや中々凝つてていい家だねえ。ただ場所が少し不便だ。

近江。それもさうですなあ。いやまだ他にも心當りがありますからそのうちまたお目にかけませう。所であなたのお考では、此の内閣の壽命はどんなものでせう。まあ云つて見れば、すがりにすがつてゐた親樹が、枯れるか枯れんかといふことは、私といふ蔓にとつては大問題ですからねえ。

野呂。大した肥つた蔓もあつたもんだて。その點にぬかりがあるもんか。君が蔓なら我輩も蔓だ。お互ひ親樹に異變があつては大事件だ。ちやんとスッパに活動させてゐるさ。

近江。スッパとは？

野呂。迂遠だね、君も。隠密のことさ。大熊の改進黨が左菱の尻押しで出てくるに違ひないから、奴等の内情をさぐらせてゐるのさ。スッパを使ふのだつて、機密費だけでは足らん、そこで我輩達も大分金がいるといふわけだ。

近江。成程。萬事よろしくお願ひ申します。この別莊も御用の時はいくらでもお使ひ下さい。

○（遠くて聲がする。）アラ、御前。もう保安條令に依る追放は解けたんですの？——へ死んぢまいますよオ。い、加減で勘忍して頂戴よ。ハクショイ。——□ハクショイ。

岩吉去る。舞臺廻る。

第二場

舞臺廻る間絃歌。數日後。新橋の裏通り。兩側になまめかしい家が立ち並んでゐる。雪の降つてゐる宵。「森川」といふ瓦斯燈の立つてゐる家の供待に車を置いた車夫が一人寢込んでゐるらしい。

スクパ市來多助が帽子をまぶかにかぶり、蝙蝠傘をさして出てくる。路地に立つて口笛を吹く。車夫が跳び起きて市來のそばへ行く。

市來。畜生め、お正月だといふのにあつちこつちで寄合をしやがるんで忙しいつちやねえや。おい、こゝに集まつたなあ何人だ。名前は皆判つてるな。

車夫。へい皆で十五人、名前は判つてるだけは此處で書き出してあります。

市來。何だ、たつた八人しか判つてねえぢやねえか。働きのねえ奴だ。女中部屋へ廻つてしらべたか？

車夫。へえ、手を盡した揚句がこれだけなんで。

市來。首になりたくなかつたら、もうちつと氣を利かして御奉公するがいゝや。

車夫。所が市來さん、一つ大きなネタを嗅ぎ出したんで。

市來。何だ。

車夫。こいつを一つ見ておくんなさい。（紙片を出す。）

市來。（ひろげて見る。）何だ。「我黨待遇期成大同盟會。日本鐵道各驛機關方に告ぐ。會社は我等を冷遇す。否虐弃す。諸君近來の出來事を見られよ。保線課一同は甲乙の別なく一人不殘増給せり。又運輸の方を見られよ。日給者にありては或ひは十二錢十錢、月給者及び年俸者にありては、一等若くは二等の上給者多く有之、是實に目醒しき盛事なり。實に一驚を喫せり。而して我等遂には微風だになし。何ぞ會社は冷遇否虐弃するの甚しきや。今や會社の眼中我々機關方あるなし。諸君以て如何とす。二十七八年軍隊輸送に際しては、其責任に當る者は誰ぞ人と見做し、機關方、火夫、驛長、助役等は保險儀從を免せられたり。見よ、當作に驛長、機關方、助役、火夫、同等なり。然るに其の戰後賞與の差を見よ。關係驛長、助役等は或ひは二十圓或ひは五十圓の賞金勳賞褒狀を賜ふせしにあらずや。而して眞に辛苦慘憺の局に當りし機

關方、火夫は何物を辱ふせしぞや。冷遇なり、罵言なり、何ぞ憤怒の價なしとせんや。某驛長は曰く。」何だ。これや。

車夫。へえ、確かに日本鐵道の機關方が何か陰謀をやつとるに相違ないんで。

市來。だつてお前、これつきりぢや仕樣がねえぢやねえか。「某驛長は曰く」でおしまひの筈はねえ。大きなネタが開いて呆れらあ。それに、ちえッ、火夫や油差の罵言が何になるつてんでえ。手前も昨日今日此の道に這入つたんぢやあるめえ。ちつたあ仕事のタチを鑑定してかゝるもんだ。お互ひ、どうで、なんぼ手柄を現はした所で幹部になれる氣遣ひはなし、德になるやうな仕事をするもんだ。それにしてもだ、乘りかゝつた船だ。この紙ッ片のあとの方も手に入れて貰ひてえな。何かにならねえとも限らねえ。一體何處で手に入れたんだ。

車夫。それが市來さん、をかしな所なんで。新橋ステンションの便所の中で拾つたんで。

市來。（紙片のにほひをかいで）ちえつ、きたねえなあ。

その時一人の男が路地の暗がりの中に立つて二人の話を聞いてゐる。車夫が氣がつく。

車夫。あッ、いけねえ。

市來。（氣がつく。逃げようとする變な男をつかまへる。）やい、こん畜生め！

變な男。（逃げようとするが逃げられないので急に笑ひ出す。）あはゝゝゝゝゝゝ。

市來。おや！？

變な男。俺だよ。渡利だよ。

市來。ちえッ、渡利か、どうしたんだ。

渡利。驚いたか。

市來。當り前よ。よくねえ悪戯だ。

渡利。寒い中をお役目御苦勞だな。

市來。何をゥ。

渡利。日本鐵道會社の社長に賣りつける件は一人ぢやもうけさせねえぜ。

市來。畜生、油斷のならねえ奴だ。いま〳〵しい。だが此の件はまだ海のものとも山のものとも判らねえのさ。

渡利。まあ、とつくりとしらべることにするさ。所で可哀さうだから、俺の方からも一つ教へてやらう。今夜のこゝの様子ぢやァ改進黨はもう例の件に感づいてるらしいぞ。

市來。例の件とは?

渡利。小野田の疑獄事件さ。

市來。ほほう。

渡利。裏から上り込んで、ちよつと小耳に挾んだんだがな、ちつたァ證據も握つたらしいぞ。

市來。シッ（車夫に向つて）おい、出て來る奴に氣をつけてろ。（少し傍の方へ渡利を引つ張つて行く。）おい、かうッと、待てよ。さうだ。いゝ考へがあるぞ。

渡利。何だ。

市來。改進黨はこの一件を議會に持ち出して倒閣の道具に使ふつもりに相違ねえ。

渡利。當り前よ。

市來。そこでだ、今のうちからチョビ〳〵と野呂の奴に報告してゐたんぢやァさつぱり有難味が判るめえ。議會が間近に迫つて、改進黨の倒閣計畫が愈々きまつた時にだな、コソリと持ち込んで、ウンと野呂からしぼつてやらうぢやねえか。もう議會に間はねえ、相手の様子は知りたくて仕樣がねえと云ふ時だ、かぶりついて來るに違えねえぜ。

渡利。うむ、手前見てえな惡人にかゝつちや、流石の赤門出の秀才樣もざまアねえなあ。

市來。どうだ、我ながら妙案だらう。さうときまつたらお互ひ稼業に身を入れやうぜ。

その時「森川」の玄關が騷がしくなり「お立ちイ」「お車は？」「いやつい鼻の先だ」「御氣嫌よろしう」「是非また御近日」などの聲がして、一人の男がいい氣持で謠曲を低吟しながら出て來る。市來と渡利はパツとわかれて路地と軒陰にひそみ、そつと相圖を交し、市來がその男の後をつける。

暗轉。タイトルが出る。

タイトル。その間に、日本最初の交通勞働者の總罷業が着々準備されつゝあつた。明治三十一年二月。

機關車の音。車輪の響。

舞臺の一部分に垂れたスクリーンに走る汽車のモンタージユされたフイルムが映る。一瞬の暗黑ののち、そのスクリーンの前に人力車に何か荷物を載せた岩吉が走つてゐる。背景のスクリーンに停車場の棚の移動が映る。一瞬の暗轉の後、背景に機關手の溜りの內部が映る。機關手が五六人居る。

○(立ち上つて)や、御苦勞御苦勞。――△(同じく立ち上つて)濟まねえなあ、岩さん。

岩吉。(包みを一つさげて現はれる。)なあに、こんな事何でもねえ。さ、早いとこ降してくれ。

□(車から包を降ろしながら、)刷物つてのは案外重いもんだなあ。――×これで汽車が止まらうつてんだから重い筈さ。

岩吉。一と包が五百通づゝ、六つでいゝんだな。

○ さうだ。さてこいつを疊んで封筒に入れてと――

岩吉。弱音を吐くなよ。俺の若い時の元氣を見せてやりてえや。ぢや、あばよ。しつかりやりなよ。

△ 親玉に見附からねえやうにしとくれよ。

岩吉。心配しなさんな。(去る。)

○(刷物をたたみながら)元氣なお爺さんだなあ。――×内務大臣も飛んだ者を抱えたもんさ。あは、ゝゝ。

一瞬の暗黑のうち、再びスクリーンに走る汽車。一瞬の暗黑ののち。背景は映畫で止まつてゐる機關車、その前に機關方、火夫が五六人集まつて、一人が刷物を讀むのを聞いてゐる。

一人の機關手。――うゝと、某驛長は曰く、機關方は馬なり、我々驛長が叱咤の下に業務を全ふせば可なりと――

○驛長づらと助役づらと來りやあ、何處も同じこんだと見えるのう。――×默つて聞けや。

一人の機關方。――而して機關方にして平々拜々、恰も奴隸のごとくせば可なるも、若し一朝不平を稱へんか、椽の下の敵打同様の所爲に苦しむは必せり。大會社の一箇人を苦しむる手段極まれりと云ふべし。

△さうだ。うまく書えてあらあ。

一人の機關方。――立つて大會社に對抗するの道は、我等同業堅く集まりて散せず、熱血を以つて正義を主張するにあるのみ――

□成程なあ、いゝ元氣だぞ。――×うむ、成程。

一人の機關方。――立て日本鐵道各驛の同業諸君。奮へよや同業諸君。而してまづ運動の手始めとして、機關方火夫一同卽刻上給の事を、必ず二錢郵券を貼發し、社長、副社長及び課長に宛て、何百通を限らず東西南北より上願すべし――

○こいつあ面白え思ひ付きだ、ふむ。――□やい源、手前は二錢が惜しいからうて。――×馬鹿野郎奴、二錢位えの錢ア糞ッ紙に使つてらあ。一々五月蠅え奴だ。默つてどんぢり迄聞けや。

一人の機關方。――右の件成就する迄は、全線機關方以下は、心中にて堅く同盟し、所謂以心傳心を以て固く相誓ふべし――

○さうだ。かういふ事アさういふ鹽梅に秘密にやらにやア駄目よ。

一人の機關方。——もし會社不承諾ならば、運動の第一着手として、服務規定三三三條に急行厳禁とあるを堅く實行すれば、運輸上日々二三時間は遅れて、時間表不必要となること保險附なり。右を以て會社と對抗すべし。ふうむ。

△　それでおしめえか。

一人の機關方。——うむ。それでこりや上野から來たのか？

●　うむ。青森、仙臺、盛岡辺すつかり廻つてる筈だ。東海道の方にやお新橋から出てるつてこつた。

一人の機關方。ふむ、さうか。どうだ、驚いたなあ。

○　うむ、俺ア大賛成だな。——×賛成は無論よ。當りきよ。（口々に）——やつつけべえ。——さうだ、さうだ。——やつつけろ！——一人殘らずやらうぢやねえか。——賛成。おやすい御用だ。

一人の機關方。おい源、お前十時五十分の上りか。

×　うむ。

一人の機關方。上野へ行つたら知らせてやつてくれ。俺達の所ぢアみんなでやつつけることにしたつてことをな。

×　引き受けた。

一瞬の暗黒ののち、スクリーンに走る汽車の映畫。

——幕——

第三幕

第一場

上野ステーション下等待合室。前場より數日後暮方。亂雑に置かれたベンチに丸まつて寝てゐる者、腰かけて居眠りしてゐるもの。何ともわびしい有様である。足部も丸まつて眠つてゐる。

人相の悪い男が十四五の娘をつれて隅の方にゐる。

男。畜生、まだ改札になりやがらねえ。（煙管を出して煙草を喫む、娘はシクシク泣き初める。）あれ、何が悲しいだ。うむ、そりやチャンやオフクロに別れるなア辛からうが、お前がちやんとした機織女工さんになつてよ、家へ仕送りが出來るやうになりやア、これに越した孝行はねえぢやねえか。な、そのうちにやア、嫁入支度も自分で出來ると云ふもんだ。あはははは、どんな婿さんでも選り取りだア。お前どんな男が好きだか？え？（娘は泣きやめて、はにかむ。）お染ちやんなんかは伊井蓉峰みたいなハイカラが好きだらう。あはははは。ちえつ、風が吹き込んできやがる。お前、寒かあねえか。

お染。（震えながら）いいえ。

男。川俣の遊佐紡織場つて云やあ、お前、日本中に響いてる大きな工場だ。仲間が多勢ゐて、まるで女學校へでも行つてゐるみてえなもんさ。お染ちやんなんか悧巧だから、ぢきにお鳥目がうんと取れるやうにならあ。

間。外て風の音。

男。あああ、ちいつと眠くなつて來た。お前眠くねえか？

お染。いいえ。

男。ぢや、叔父さんちよつとウツラウツラするから、お前、ガランガランて鈴が鳴つたらすぐに起しておくれ。いいかい。

お染うなづく。男はベンチの上に丸まつて居眠る。お染は彼に倚り添つて、眼を閉ぢたり開けたりしてゐる。舞臺が段々暗くなる。お染と男の所にスポツトがあたつてゐる。幻燈でタイトルが舞臺の一端にうつる。

○

明治三十年前後、紡績女工の勞働時間は十五時間乃至十八時間。

○女工多くは見習と稱し別に一定せる給金無し。三年以上のもの年に五圓、七年に及ぶ者二十圓の賞與金あり。
○しかも一日の定尺を織る能はず、或ひは虐使に耐へ兼ねて逃亡する時は、多く裸體となして監禁拷責す。

メイトルが消えると舞臺元の明るさに返る。外套を着、山高帽子を冠つた紳士が、驛長や助役につれられて這入つて來る。横山が後からスーツケースをさげてついて來る。

驛長。これが下等の待合室でございます。
課長。ははあ、以前とは大分面目を改めて立派になりましたな。（ヂロヂロと見廻し、顔をしかめる。）
驛長。ぢや私の部屋へいらしつてストーヴにでもあたつて發車をお待ち下さい。まだちよつと間がございます。
課長。ぢやさうしませう。
驛長。寒い時に北の方へ御出張は大變でございますなあ。

四人は部屋を横切つて去る。足部はフト目をさまし横山の後姿を見つけ、後を追つて去る。間もなく手ぶらになつた横山とつれだつて這入つてくる。

足部。どうしたんかと思つたよ。今のは誰ぢや？
横山。日本鐵道會社の課長の松田さんだ。
足部。そこの書生に住み替えたのか？
横山。うんにや、（聲をひそめて）鐵道にストライキが起りかけちよるんだ。
足部。解せないね。
横山。それより先に君はまた何故こんな所へ來ちよるんだ。おひびきか？
足部。この足部を見そくなつたか。かう見えても女にはお袋より他に知己はないといふ牢人だぞオ。

横山。それなら何のために來とるんぢや。

足部。親爺が國から出て來よるから、それを迎ひに來たんぢやが、どうも一ト汽車遅れやがつたらしい。それで、かくの仕末さ。

横山。さうか。俺の仕末は鐵道のストライキぢや。ま、それの詳しい話は、歸りに俺の所へ寄れ。すつかり話してやる。面白いぞオ。（聲をひそめ）岩吉がなア、昔取つた杵柄で盛んに力瘤を入れとるんぢや。

足部。そりや愉々快々ぢやのう。

横山。そこでその今の松田といふ男がのう、狀況探聞に出張する事になつて、今度の汽車で御出發ぢや。それで出張前に一應うちの大將の所へ打ち合せに來たんだが、それ今日にも内閣總辭職といふ瀬戸際ぢや、うちになんか居りやせんわ。岩吉も居らん、そこで我輩がおわびかたがたここ迄お伴といふわけぢや。

足部。さうか、ふむん、鐵道のストライキか、戰爭後の好景氣もたつた一年で、去年からまたひどくストライキが多いのう。ええと天滿紡績會社の工女、友染職工、横山の船大工——

横山。あれも大きかつたぞ、保田の石切工の奴——

足部。うん、それから北海道の硫黄山の坑夫もやつたつけのう。所で内閣の總辭職は愈々確實かのう？小野田さんもひどい目を見たいもんぢや。

横山。さうさ、大將ももう二度と人前へは出られんぢやらう。

足部。俺は小野田さんと云ふ人は、そりやどうせ政治家だから、いろいろあるだらうが、もうちつたあ清廉な人だと思つちよつたよ。

横山。いや今度の事で大將を判斷しては大將が少し可哀さうぢや。今度の事は全く野呂の口車に載せられたんぢやからの

う。岩吉の云ふ所に依ると、野呂といふ奴は惡い奴つちや。岩吉は大分種を握つとるよ。

足部。さうか、ぢやそいつも今晩、ストライキの話と一緒に聞く事としよう。

横山。たゞ一つ不思議なのは、今度の臺灣製糖會社の一件を一體全體改進黨は何處からあんなに詳しく聞き込んで居つたかと云ふこつちや。

足部。さうよ、一昨日の議會で改進黨の連中がやつた攻撃演說のこまかさには社會一般舌を卷いたからなあ。

横山。何しろ、うちの大將の財産目錄から利益金の分配の割當までわかつてるんだからなあ。お互ひに大分スツパなぞを使つたらしいが、それにしてもこんなこと迄解る筈がないよ。おおお、我輩も拙くすると今度は食ひ扶持に離れんければならんかも知れんて。何處か書生の口があつたら探しといて貰ひたいな。

その時、ガラン、ガランといふ鈴の音が鳴り渡る。「七時二十分、青森行きイ」といふ驛夫の聲が聞える。寢てゐた連中が起きて改札口の方へ去る。

お染。（男を搖すぶつて）叔父さん、鈴が鳴つてますよ。叔父さん、鈴が鳴つてますよ。

男。うううう、何？何云つてやがんでえ。（眼を醒ます。）あ、さうか。鈴が鳴つた？よし、それ、出發と行くか。やれ、やれ。（お染をつれて去る。）

横山。ぢや、俺、ちよつと勤めを果してくるぞ。

足部。俺も改札口迄行つて待つてよう。濟んだら一緒に歸らう。

横山。親父はどうするんだ？

足部。面倒臭えや。どうせ總辭職をアテ込んで何か利權あさりに出て來やがるんだ。これから小一時間も待つてゐられるもんか。

二人去る。驛員が二人出て來て出會つて小聲で話す。
○おう、何してんだ。――×松田の野郎が出掛けて行くつて事を各驛へすつかり電報を掛けて來た所よ。どうせあんな野郎が行つた所で何にもなりやあしねえがね。――○さうとも。だが掛けといた方が間違ひがねえ。（行かけたが、立ちどまつて）お、さうだ。八時十分の上りにやあ一ノ關の中野君が乘つてくるから、便所の裏で打合せよう。
外が騷がしくなる。號外賣の鈴の音。「内閣愈々總辭職！」「それ、内閣が總辭職だぞ！」プラツトフオームでは、發車の笛、汽笛、發車の音。

――暗轉――

第二場

神田末廣町の小野田邸。小野田の寢室。家財道具は殆んど無い。小野田が衰へて寢てゐる。枕元に藥瓶。前場より二十日程後。夜。行燈がともつてゐる。遠くを、太鼓を叩いて火の番が廻つてゐる。「火事は淺草千束町、火事は淺草千束町」と云つてゐる。

小野田。（眼を醒して呼ぶ。）初子！　初子！
初子。（廊下を廻つて來る。）お眼が醒めましたの？
小野田。今何時頃だ。
初子。今しがた八時が鳴つたばかりでございますよ。
小野田。火事があつたらしいな。
初子。今晩はでも風がないからすぐ消えたでございませう。

小野田。國太郎は寝たか？

初子。いい鹽梅にやつと寝つきました。

竹や。（現はれる。）あの、月島さんがお暇乞ひに上つたと云つてゐらつしやいましたが。

初子。あら、お暇乞ひつて——

小野田。（顔色を變える。）うむ——月島を——月島を——俺は——臺灣へやるやうに——

初子。えツ、月島さんが臺灣に？

小野田。畜生！野呂の奴——何處迄俺の一家を——

初子。どうしても駄目なんでせうか？もう沙汰止みには——

小野田。（竹やに）通してくれ。

竹や。はい。（去る。）

初子。（泣きながら）根が可哀さうです。

小野田無言。月島が這入つてくる。

月島。夜分に伺ひまして相濟みません。

初子。さ、どうぞこちらへ。

月島。御氣分はいかがでございますか？

小野田。お蔭で神經痛の方だけはひいたやうぢやが、どうも心臓がもういかん。

月島。いいや、そんな事はございますまい。根が頑健でおいでですから。

小野田。いいや駄目だ。今度のことは徹底的にこたえた。で、君は臺灣へ行くのか？

月島。は、一昨々日突然臺灣の覆審法院の判事になれといふ辭令を貰ひました。どうせ獨り者ですし、即刻行けといふ事ですから、明後日出發致さうと思ひまして、それで夜分をも顧みずお訪ねしたわけでございます。

小野田。君は誰が君を臺灣に追ひやつたか知つてゐるか？

月島。は？

小野田。俺だ？この俺が君を臺灣に行くやうにさせたのだ。

月島。（顏色蒼白となる。）――うむ、心の底では――或ひは――さうではないかと思つてをりました――私の居りますことは御令嬢のためによくございませんでしたらうから。

小野田。馬――馬鹿な。それは全然君の思ひ違ひだ。それどころか俺は何故楓をおれの願ひ通りに君の手に托さうとしないで人――人もあらうに――野呂などにやらうと思つたか――今となつて、臍――臍を嚙んでゐるのだ。

月島。（半分泣きながら）私には――解りません。私には――何だか――

小野田。俺は殘念でならぬ。何もかも――殘念でならぬ。何のために、俺は生きて來たのだ。月島君、俺は、まるで莫迦見たいに野呂の奴にだまされたんだ。君にも、家のものにも、仲間の者にも全く面目ない。（楓が廊下にかゞんで、袖で涙を押へてゐる。）議會であばかれた事は皆本當だ。何故あれが改進黨の手にあんなに詳しく這入つたかと云ふと、あの事件を書いた野呂自身が改進黨に賣つたからなんぢや。恐らく奴はそれで五菱から餘程の金と將來の保證を貰つたに違ひない。だが奴はそれでも飽き足らずに、（露顯すると危險だからといふ名目で俺の財產をみんな奴のに書き替えてしまつたんぢや。俺の公人としての生涯を終らせると同時に、家族の者の生活迄奪つてしまつたんぢや。

月島。な、何とも申し上げようがありません。私が東京に居られさへすれば――

小野田。いや、駄目ぢや。どうにもならんやうに仕組んである。それに奴は改進黨にすつかり喰ひ込んだらしいからのう。

俺は君を臺灣にやつて近江の仕事をやり易くする積りだつたんぢや。賴む。月島君。奴の仕事を邪魔してくれ。事はもうずつと運んでゐるぢやらう。だが、君の力で出來るだけの事をやつてくれ。俺は口惜しい――このままでは――死にきれん。（泣く。）

月島。（泣きながら）畏りました。私の力で出來得る限りの事は、誓つて致します。

小野田。糖業奬勵規則とか、土地調査規則とかが怪しぞ。いや、何もかも怪しいぞ。

小野田グッタリとなる。月島と初子は驚いて介抱する。楓も驚いて跳び込んで來て介抱する。

小野田。それから――月島君、今になつて云へた義理ではないが――楓の世話を見てやつては貰へぬだらうか。

月島。私のやうな者で――よろしければ――

小野田。有難う。

「鍋焼うどん」の呼聲と救世軍の樂隊がかすかに聞える。

月島。では、あまり遲くなりますから、私はこれで――

國太郎。（不意に奥の部屋で叫ぶ。）人世の大道理、何を最要と爲す。曰く宜しく人をして自由に其の才能を發展し得せしむべし。姉さん。何處へ行つたの？　人民猿の如く羊の如く豚の如き有様に至りて、ただ政府の法令に屈從して、へいへいはいく〱然たるのときに至れば、之を國家能く治まれりといたして居ります。奇妙奇體こんな間違つたことがまたと世の中にあるものか。これ卽ち天下の大亂でござる。姉さん。自由じや自由じや人間は自由、自由がなければ人形よ、官吏はおいらの雇ひ者、人の上には人はない、權利張れよや皆の人。

精神錯亂した國太郎が紫袴寫眞帖を持つて這入つてくる。

楓。（立ち上つて彼を抱くやうにしながら）國ちやん、さ、寢ませう、ね。

初子。野呂のお陰でこんな姿になりました。
小野田。（國太郎が手に持つてゐる寫眞帖を見て）おい、國の持つてゐる寫眞帳を寄越せ。
楓。國ちやん、これ姉さんに頂戴な。
國太郎。嫌だ。
小野田。寄越せ。早く寄越せ。
初子。あなた。
楓。ね、頂戴、いい子だから。
小野田。ええ、寄越せと云つたら。（伸び上つてひつたくる。）
國太郎。（泣き出す）馬鹿ァ！馬鹿ァ！
小野田。（べりべりとその寫眞帖を破りに破る。）ううん、畜生め！ううん、畜生め！

舞臺暗くなる。

タイトル。同じ時に――

背景は映畫で機關庫。その前に機關方、火夫等が池田を圍んで七八人集まつてゐる。

○ いいや俺達ァ君を見殺しにするわけにやァいかんど。――× んだ。そんな事ァどうしても出來ねえ。――□ んだ。そりやいけねえ。
池田。俺ァ何も停職されたつて、そんな事ァ構はねえけんど、それぢや會社に對して、俺達が負けつてことになるど。
△ んだ。それが大切なとこさ。――●（やつて來る。）おい、上野から梅林君が來たど。
梅林。や、失敬。池田君、やられたな。今度停職された者は皆で十人だ。尻内の石田君、菊池君、稲見君、一ノ關の中野君

田代君、横沼君、安居君、坂君、仙臺の藤田君、それにここの池田君と都合十人だ。

△　隨分やつてけづかつたなア。──×んで、上野ではどうするだね。

梅林。宇都宮迄は意見が纏つた。どうしても負けてはいられねえ。ストライキをするんだ。

○　ストライキをなア。──□んだなア。他に道ばねえべ。──・ねえ。──×んぢやストライキだ！

舞臺暗くなる。

タイトル。二月二十四日東北線各驛は全部ストライキに入つた。

映畫がうつる。機關庫に立往生してゐる機關車。

タイトル。二十五日東海道線も運轉が止んだ。

映畫がうつる。構内に立往生してゐる客車。カラツポの停車場。

タイトル。三月六日會社全く屈服、給料一割値上。解雇者一人もなし。

タイトル。四月五日待遇期成同盟會解散。最初の組合矯生會を組織す。

タイトルが消えると、空車を曳いた岩吉がうれしさうにニコニコしながら舞臺下手に現れる。足部に出合ふ。

岩吉。やあ、足部さん。

足部。よう、どうした。急成もうろう車夫、客が取れるかい？おや、いやに欣々然としとるぢやないか。

岩吉。さ、乘んなせえ、今日はうれしくて堪らねえ事があるから、ロハで乘せてやる。さア早く乘んなせえ。

足部。そりや有難いがね、ハテ理解出來んねえ。何しろ乘せて貰ふぜ。

足部を乘せて岩吉はクックツ笑ひながら花道へかゝる。半分程過ぎた所で──

足部。ははア解つた。鐵道のストライキが勝つたからだな。

岩吉。 さうでさ。はははは。

笑ひながら揚幕へ曳き込む。

―幕―

第四幕

第一場

タイトル。 製糖會社はどうやつて出來たか?

タイトル。 臺灣北西部海岸苗栗地方。

幻燈に臺灣の地圖が出、苗栗の位置を示す。

苗栗に設けられた臨時臺灣土地調査局出張所。木造の安普請で上手に入口、受附があり、下手は部屋の内部を示す。室内には板敷の上に數箇のテーブル、十數脚の椅子がある。壁には地圖がいくつとなく掛けてある。入口の柱に「臨時臺灣土地調査局苗栗地方出張所」と書いた看板が下つてゐる。

一つのテーブルでは一人の技師が二人の土人技手を相手に圖を引いてゐる。入口に近い椅子では××が一人居眠りをしてゐる。奥のテーブルでは一人の屬官が算盤をはぢいては帳面に記入してゐるし、受付のテーブルでは帳面を持つた吏員が土人の通譯と向ひ合つて腰掛けて、何か教へてゐる。草鞋がけや足袋跣の者が多い。

土人通譯。(つまりつまり云ふ。)第五條――土地の所有者――及び――境界は――境界は――

吏員。 地方土地調査委員會。

土人通譯。 地方土地調査委員會之を定むるものにして――もし――もし――此の判定に不服の者あらば――五十日以内に

吏員。六——十——日。六十日だよ。

土人通譯。六十日以内に高等——土地調査委員會に申し立つべし。

吏員。第六條。

土人通譯。第六條——第六條——

吏員。また忘れたのか。馬鹿。(横面を張る。)しかして申告をなさざる——

土人通譯。しかして申告をなさざる土地の所有權は——國庫に歸す。

吏員。しつかり覺えろよ。頭の惡い奴だなあ。こんな物覺えるに幾日かかつてんだ。

技師。(土人技手に)おいおい、もうちつと綺麗に引けや。そんなこつちや今期は賞與ばかりか、級を一つ下げられッぞ。(吏員に)だが癪にやァさわるが、此奴等ァ日本語覺えるだけでも腦味噌が出拂ひだんべえ。ガミガミ云ふなァ考へりや憐れ憫然よ。

吏員。あ——あ、何だかまた雨が降りさうだなあ。早く雨期があけねえ事にやァ、身體に虱が湧いちまはァ。

土人通譯。もう一ト月待つ——天氣よくなります。

吏員。香氣な事を云つてやがらァ。あ——あ、大租戸、小租戸と來やがら。

技師。え？何だつて？

吏員。知らねえだらう。こいつにやァ惱まされるよ。

技師。何だ、女に關した事か？

吏員。ちえッ、助平に出來てやがらァ。こいつにやァ我が大日本帝國が惱んでるのよ。

技師。大したもんだな。

吏員。そもそも我が臺灣に於てはだな、一つの土地を二人の人間が持つとるんだ。土地がそのどつちの物ともつかんのだ。地主を大租戶と云ひ、小作人を小租戶と稱するんだが、兩方ともその土地に權利を持つとつて、地主が小作人を勝手に追ん出すと云ふ事が出來んのだ。

技師。ほう、結構ぢやねえか。

吏員。さてはお前、小作人の悴だな。

技師。さう云ふお前だつて地主様のお坊ちやまとは受け取れねえぜ。

吏員。おきやアがれ。だがこれが爲にだな、一つの土地を處分するのに二人の人間が出て來てガヤガヤ云やアがるんで仕末にをへねえのよ。されば我が大日本帝國は惱むのよ。どうもその小作人の方に、その土地を賣つたり貸したりする權利があるらしいんだな。妙な話よ。

そこへもう一人の技師が二人の土人技手に測量器具をかつがせて這入つて來る。

技師二。畜生め、やつと濟んだわい。

技師一。これですつかりチヨンか。

技師二。お陰様で。（お辭儀をする。）畜生めえ。どうもここらは沼地が多くて、骨を折らせやがるわい。それ。（測量圖を渡す。）

技師一。あいよ。

ボロボロの着物を着た土人の老婆が紙片を持つて受付へやつて來て何かしきりに喚く。通譯が突慳どんに應待する。

吏員。（通譯に）この婆ア何を云つてやがんだ。

通譯。昨日渡した布告——讀めないと云つてる。

吏員。誰か近所の者に讀んで貰へ。

通譯。近所の者誰も讀めない。

吏員。何處の奴だ？

通譯。（老婆に聞いたのち）南勢庄の劉。

吏員。あそこは官有地になる。さう云つてやれ。

　　通譯と老婆とはしきりに押し問答をしてゐる。老婆はしまひに泣き出す。

技師二。うるさいのう。何をほざいとるんぢや。

通譯。土地を取られるのは斷ると云うてます。

吏員。只取るんぢやねえ。補償として公債證書をやるんだ。

　　通譯又老婆と押問答する。

通譯。先祖代々百姓してから、土地賣ることいやだ云うてます。

吏員。いやなら勝手にしやがれ。

　　老婆は窓口に取り縋つて、猶哀叫してゐる。

吏員。窓を閉めちまへ！（通譯は窓をしめる。）こつちァ明日の支度で忙しいんだ。

　　そこへ隣の部屋からもう一人の吏員が厚ぼつたい帳面を五六冊抱へて出て來る。

吏員二。（テーブルの上にドサリと帳面を置きながら）出來たよ、昨日の分迄の土地臺帳が。

吏員一。見るだけでもウンザリしやがらあ。

　　老婆が窓の下で相變らず哀叫してゐる。

吏員一。うるせえな、泥棒猫見たよな聲を出しやがつてっ（眠つてゐる××を起す。）おいおい、角間君。

××。む？むうう。（眼を醒ます。）な、何？

吏員一。外で仕末におへねえ婆アが泣いてやがるんだ。おつ拂つてくれよ。

××。う？よし來た。

彼は出て行つて老婆を引きずり起して何か土語でドナる。老婆は泣きながら曳き去られる。

吏員二。明日の用意はもう出來たのか？

吏員一。まだまだ。所でと、登記所の奴と代書屋と判こやは六時に來ることになつとるな？

吏員二。大丈夫かねの脇差。

吏員一。××五名來て貰ふ件もよしと。あとは天氣の問題だけだ。

吏員二。愈々宣戰の布告は下れりかね。

吏員一。皇軍行くとして勝たざるなしと。

××が歸つて來る。

吏員二。明日はあんなのが束になつて押しかけてくるんだから事だぜ。

吏員一。（ヤケになつて歌ふ）てーきは幾萬ありとてもォだ、すーべて烏合の衆なるぞォだ。烏合の衆にあらずともォだ、味方に正しき道理ありィだ、邪はそーれ正にィ勝ちがたくゥだ、直は曲にぞ勝ち栗のォだ、堅き心の一徹はだ、いーしに矢のたつためしありィだ、なーどて恐るゝことやあるゥだ、などてたゆたふ事やあるゥだ。

××は再び椅子に腰かけて眠り初める。歌の途中で暗くなる。

歌が止むと闇の中で罵り騷ぐ群集の聲。

タイトル。その翌日。

明るくなる。舞臺前と同じ。ただテーブル椅子の配置が異つてゐる。室内上手入口の取つつきにテーブル。そこに土地臺帳を前に吏員二人が通譯と一緒に控へてゐる。その次のテーブルに代書人。次に吏員一。次に登記所の役人。少し離れた下手に印刷屋。それらのテーブルに沿つて上手のドアから下手のドアへと繩を張つて作つた一條の道がある。上手戸外には××が五人、室内には一人、他に土人技手四人がゐて群集の整理に當つてゐる。

戸外の群集はそれぞれ××に向つて、質問し、罵り、哀訴してゐる。通譯が窓から首を出して怒鳴る。××は土人を一列に並べて室の中へ順々に入れようとする。老若男女の土人は口々に何事かを喚きながら、押し込まうとする。××は土人の男一人を曳き出してなぐつたり蹴つたりする。土人は聊か靜まつて、室の中へ這入つて來る。

吏員二。どれだ？

通譯。南勢庄の林少花。

吏員二。（臺帳を引つくり返して）これか？

通譯。それ〱。

吏員二。えゝと二等水田面積一甲三分四十厘の小租戸と。南勢庄は皆官有地だ。（代書人に）さ、頼むぜ。書き込んでくれ。（臺帳の寫しを指して）これだ。（土人に）印形持つてるな？

通譯。持つてます。

吏員二。よし、あつちい行け。

彼は吏員一の前に行く。

代書屋。（呼びとめて）おい、これを持つてくんだ。（今書いた紙を土人に渡す。）

吏員一。（土人からその紙を受け取つて）林少花と。二等水田面積一甲三分四十厘の小租戸と。これを大日本帝國政府は買ひ

上げる。公債で支拂ふ。その額は總督府で追つて定める。解つたな。

土人技手が一々通譯して聞かせる。土人は呆然として、只恐れうなづいてゐる。

吏員一。こゝへ判を押して。あつちへ行け。

土人は登記所の役人の所へ行つて紙を渡す。登記所の役人は無言でその紙を受け取り、何か書付を渡す。技手二が彼を別の戸口からそとへつれ出す。その間に次の土人は既に代書屋の所迄廻つて來てゐる。

代書屋。印形持つてるな。

技手一が通譯するが土人は首を振る。

代書屋。(印形屋を指さして)ぢやあすこへ行つて印形拵へて貰つて來い。(技手二に紙を渡しながら、印形屋に云ふ。)その紙の鄭文流だ。大急ぎでやつてくれ。

印形屋は紙を受け取つて彫り初める。

吏員一。あつちの隅い行つて待つてれ。

技手二に突きとばされ、奥の隅で立つてゐる。その次の土人が既に代書屋の所に廻つてゐる。

代書屋。印形持つてるな。

技手が通譯するとうなづく。

代書屋。隣りへ行け。(紙を渡す。)

吏員一。(土人から受け取つて)黄才と。三等水田面積二甲二分十五厘の小租戸と。これを大日本帝國政府は買ひ上げて、公債で支拂ふ。その額は總督府で追つて定める。こゝへ判こをつけ。

技手一が通譯すると、土人は頻りに何か云ふ。

吏員一。早くせんか。

技手一。代金いくらか、聞きたい。現金すぐ貰ひたい云ふ。

吏員一。だから現金ぢやない、公債だ。額は總督府が追つて定めるちうとるぢやねえか。

　技手一と土人とまた爭論してゐる。

技手一。どうしても厭云ふ。

吏員一。解らん奴だなあ。現金は公債證書で拂へんハシタ金だけしか拂はねえんだ。金額はまだきまつてねえ。きまつてねえものが云へるか。阿呆め。

　だが土人は矢張り頑として頑張る。

吏員一。ようし、申告したくねえ奴ァ勝手にしねえがいゝ。あとで吠え面かくな。申告をなさゞる土地の所有權は國庫に屬すだ。(××に)おい、こん畜生追ん出してくれよ。

××。出ろ！出ろ！

　土人は勝つたつもりで威氣揚々と出て行く。彼に應じて去る者が二三人ある。

吏員二。そんなに歸しちやつちや駄目ぢやねえか。出來る限り圓滿に納めろといふ内訓ぢやねえか。(最後に歸らうとする土人を指さし)おい、あいつ取つゝかまえて來い。(技手一がつかまえてくる。)他の奴ちよつと皆外へ出してくれ。

　××、技手は例の彫れるのを待つてゐる土人を除いて皆外へ押し出す。窓から内を見ようとする。

××。(窓から首を出して外にゐる巡査に叫ぶ。)おおい、こいつら内を覗かねえやうにしてくれえ！

　××達は皆を窓に近寄せない。内では——

吏員二。名前は何てんだ？

通譯。(主人に聞いたのち)南勢庄の徐様。

吏員二。(台帳を引つくり返し、代書屋に向ひ)頼むぜ、えゝと二等水田二甲一分の小租戸。(印形屋に)徐様だ。これ(紙を渡す。)彫つてくれ。手つ取り早い所。(煙草を出して吸ふ。)さあ、判の彫れる迄一ト休憩だ。

吏員一。(窓から眺めて)おおお、随分並びやがつたなあ。

××。(吏員一に)あれが坎閒山(かんかんざん)だよ。

吏員一。妙な名だね。

××。あすこで君、一昨年の八月、暑い眞最中に殿下が御奮戰遊ばしたんだよ。

吏員一。ほおゝ?

××。俺も新竹(しんちく)で初めて軍夫に採用されてあの山で初めて戰爭をやつたが、暑いわ暑いわ、腹は下るわ、道は悪いわ、死ぬ苦しみを嘗めたわい。敵は土民兵の他に黒旗兵と云うて黒旗を立てるのがあるよつた。屍骸が片つ端から腐りよつて、蛆が湧いて、そらひでえもんぢやつたわい。こいつ等も澄してやがるが當時は鐵砲持つて俺等を狙やあがつたんだぜえ。ふ、ざまア見やがれ。

吏員二。まだ生蕃をブツ殺した事アねえのかい?

××。ああ、まだねえね。こゝから七八里山ん中へはいつた隘勇線に勤めりやア、生蕃も×せるけんどね——

吏員二。その代りこつちも危えと來やがらあ。

××。隘勇線勤務は女房と一緒に住んでもいゝ事にしてあるが、俺見てえた獨り者ぢやあどうともならねえや。

吏員二。生蕃の娘でも引つかけろ。

××。お前にやア似合つてるだらう。

印形屋。出來ましたよ。大急行でさ。

吏員二。あい來た。(印形を受け取つて土人に突きつける。)こゝへ押すんだ。(だが土人は受け取らない。)押すんだよ、此處へ！

(土人は受け取らない。××に)こいつを持たせとくれよ。

××は土人の手をつかまえて、無理に印を持たせる。土人はふりもぎり、印を投げ出し、大聲で喚く。

吏員二。(立つて、土人の横面をひつぱたく)判を押すんだ！(だが土人は抵抗して喚く)えゝ畜生め。(××に)そつちの手持つてくれ。

土人は兩手を取られ、身をもがき、泣き叫ぶ。だが遂にひつぱたかれながら、無理矢理に印を押される。

吏員二。裏口から出してくれ。

土人は大聲に泣き喚きながら裏口から去る。表ではこの間、彼の泣き喚く聲を洩れ聞いた土人達が不安げに動搖してゐる。印の彫れるのを隅で待つてゐた鄭は憤怒と恐怖のまじり合つた顔付で、この出來事をみつめてゐる。

吏員二。こんなに暇をくつてちやお幾日かゝつたつて濟みやアしねえ。次だ！次だ！

次の番の女がおづおづ這入つて來る。舞臺暗くなる。瞬間の後、闇黒の中で鋭く女の泣き叫ぶ聲。

──暗轉──

第二場

舞臺前面に張つた紗の幕に、波を蹴つて走つてゐる汽船が映る。これは日本郵船會社の神戸基隆間定期船(二千五百噸)である。第三幕第二場から十日後。

紗の幕の後ろに汽船の上等客のサルーンが出來てゐる。映畫の途中で舞臺にあかりが這入る。サルーンでは今、船員の餘興の最中て

船客が酒など飲みながら、見物してゐる。その中に野呂と近江がゐる。臺灣征討に關した琵琶が終る所。ヤンヤといふ喝采。次に手風琴の獨奏。この間に何時の間にか紗の幕は上がつてしまふ。獨奏が終ると船員が立ち上つていふ。

船員一。え〻、未熟なる藝を數々御覽に入れまして誠に恐縮でございます。

客一。ノー〳〵。

客二。立派なもんだ。

客三。玄人はだしだ。

船員一。（お辭儀をして）どうも有難う存じます。ではそのやうにお褒め下されまするならば、お言葉に甘えまして、一つ今度は私共を見物人に廻して、お客様から隱藝を見せて頂きたいと存じます。

客四。ちえツ、こいつア甘くやられた。

客五。（假色で）油斷のならねえ、船員だなあア。

（船員達が拍手を叩く。）

船員二。よう〳〵。

船員三。玄人はだし！

船員一。（今の船客に）さ、あなたからどうぞ一つ。

客五。駄、駄目だよ、俺なんか。

船員一。いやさうはお云はせ申せません。今の假色が何よりの證據でございます。さ、どうぞえ〻只今から丸橋忠彌さんが餘興として假色をやつて下さるさうでございます。（船員等手を叩く、船客もそれに和する。）

客五。駄、駄目だつてば。

船員二。や、どうぞさうおつしやらずに一つ。

客五。(少し憤つて)悪く強制するもんぢやないよ。

一座白ける。

近江。(小聲で)野呂さん、一つお得意をやつてやつたらどうです。何だか船員達が氣の毒見たやうぢやありませんか。

野呂。それもさうだな。折角面白くやつてたのになあ。妙に白けちやつた。よしやつゝけよう。(一人の船員を掴まへて)お前だつたな、さつき三味線をひいたのは。

船員四。はあ。

野呂。何やらうか。一つ賑かな所でやつゝけよう。「奴さん」でもやるか。(身支度をする。)

船員船客一樣に拍手喝采する。野呂は踊る。舞臺半ば烟轉する。サルーンの外のデツキ。サルーンのざわめきが聞える。空には星がきらめいてゐる。野呂と近江が出て來て欄干に倚る。

近江。相變らず鮮かなもんですなあ。

野呂。うさばらしさ。

近江。あんたもあんたらしくない。何時迄一婦女子に戀々としてゐるんです。

野呂。だが今度のいきさつはひどいよ。無理矢理に自分の手で愛人の首を斬らされたんだからねえ。昔だから云ふが、今度だけは流石の野呂信吾、血の涙を流したよ。

近江。(ひやかして)お察し申します。

野呂。お茶らかすなよ。考へても見給へ。自分の飼つてる犬が、ネタを掴んでながら絶體絶命の所迄引つ張つて置いて噛込みに來るなんて、それだけだつて、飛んでもねえ、胸の中がムシヤクシヤする話ぢやないか。それに、かうなると、

今度は逆にこつちから、臺灣の一件を改進黨に賣りに出て、内閣を倒させてやるからその代り、製糖會社も俺も見逃しておくんなさいと出るより他に助かる道はないぢやないか。

近江。如何にも。

野呂。うつかりしてりや小野田が助かつて俺一人がしよひ込まなきやあならない事になるからなあ。——ただ別離の悲しみだけなら、今度が初めてぢやアあるまいし、野呂信吾さうさう閉口垂れはしないんだが、あの女に父の仇、家の仇と憎まれてゐるのかと思ふと、何とも云へず淋しいわい。

近江。だが物は考へ樣でさ。今度の事のお陰であんたもすつぱり政界から足をぬいて、愈々前途ある實業家として立つ事になつたぢやありませんか。なあに、金さへあれば女なんかいくらでもお望み仕第でさ。あんた以前よく「殖民地は庭だ」つてな事を云つてましたな、その庭でちよつと散歩するですなあ。

野呂。だが今度の臺灣入りは、どうも幸先がよくなかつたな。東京御出發といふ其日に鐵道のストライキなんぞが始まつて立往生とは何ともはや。

近江。そんな心配が當分ないのが臺灣の有難い所なんだから、喜ばにやァいけませんよ。

野呂。（下を覗いて）おい、岩吉。何をしてるんだ。一人でひどくボンヤリしてるぢやないか。

岩吉。（聲のみ）おや、そこにおいでてございましたか。いえ、なに——あの——澎湖島といふ島は見えませんでせうか？

野呂。ありやお前、臺灣をずつと西に廻つた方だから見えやしないやね。澎湖島がどうかしたのか？ああ、あそこでお前の息子が戰死したんだつたな。

汽笛の音。

——暗轉——

第三場

臺北にある總督府の中。支那風の木造建築。上手寄りに横斷された部屋の側面。下手に廊下。前場から一ヶ月後。

廊下を覆審法院判事月島が興奮して歩いてくる。あとからついて來た給仕に部屋のドアの所で云ふ。

月島。いいか、杉山參事官に月島判事がすぐお目にかかりたいと云つてくれ。

彼は部屋に這入つてイライラしながら待つてゐる。杉山が給仕につれられて出てくる。

杉山。や、よくお出ででした。やつと雨があがりましたなあ。

月島。お忙しい所を濟みませんがな、今日はちよつと伺ひたい事があるのですがなあ。

杉山。はあ、何です？

月島。いや、妙な事實があるのです。一週間ばかり前に私の方に來た事件ですが、苗栗の南勢庄で村の共有地の竹林で土人が二人竹を切つてゐたら、突然警官に捕まつてしまつた。何時の間にかそこが官有地になつてゐたといふのです。それから段々聞いて見ると、ひどいぢやないか、土地調査規則の第六條を楯にとつて、知らないでゐた者の土地は片ッ端から沒收する、そればかりか不服な者は××でもつて承諾させてるんだ。判を持つてゐないといふ者があればその場に印形屋を置いといてどんどん判を彫つて無理矢理に押させたんだ。しかも補償金の額は全然きまつとりやせんのだ。こ、こんなひどい事があるもんか。

杉山。そんな事はないでせう。

月島。なあに、無いことがあるもんか。僕ァちやんとしらべて證據を握つとるんだ。

杉山。そんな事がある筈はないですがねえ。

月島。筈がなくたつて現にあるんだから仕様がないさ。それとも君は僕が出鱈目を云つてるとでも云ふのかね。

杉山。ですがねえ月島さん。あなたはまだこつちへ來て一ト月にしかならないからよく事情がおわかりにならんのですよ。殖民地の統治と云ふものは母國のそれとは全然別物で、云はばここではまだ戰時狀態なんですからね。

月島。そりや僕だつて相當の差異は認めるさ。しかし同じ日本の國民で、憲法の行はれてゐる土地ぢやないか。僕はこんな事が又起りやあ××だらうが××だらうが、片ツ端から引つくるつもりだからね。

杉山。いいや月島さん。さういふ見地から云つたら、そりや現在臺灣で行はれてゐることは、一から十まで憲法のある國では考へられんやうな事ばかりですよ。だが月島さん、臺灣には××は行はれないのですよ。

月島。××が行はれん？！

杉山。細い法理論上の點に就いてはそのうちゆつくり御議論を承りたいと思ひますが、實際の話、××をこゝに行つて御覧なさい。母國人の權利は保護されず、土民權ばかり保護されるやうな仕末になつてしまひますよ。實際の話、もし憲法がここに行はれるものとすれば、一體どういふわけで生蕃は××も何もなしに毎日毎日×されてゐるんですか？何故彼等は交通、居住の自由を限られてゐるんですか？

月島。そ、そんな無茶な議論があるもんか！

杉山。一體××は何の爲にあるんでせう。日本帝國の爲ぢやありませんか。大所高所から物を見なくちやいけませんよ。總督府は生蕃を二種に分けて、歸順する望みのある者は德を以つて撫でるが、望みのない者は××させる方針で進んでゐます。あなたの××で行くと總督初め我々も皆××にでもされなきやならん事になりますなあ。殖民地の人間に向ふ場合、やれ正義の法律のと持ち出すことは、彼等に××を敎へることですよ。

月島。（憤然として立ち上る。）それが總督府の意見なのだな。よろしい。この上話す必要はない。

彼は廊下へ出る。すると通りかゝつた野呂と近江にぶつかりさうになる。

野呂。おや、月島君、久し振りだつたな。

月島。（睨みつけながら）君はこゝで何をしてるんだ？

野呂。何をしてるんだは手きびしいね。今度は野に下つて商賣人だ。

月島。何の商賣だ？

野呂。苗栗製糖會社々長といふ商賣さ。

月島。ふむん、君が社長か。官有地拂ひ下げの手續きはもう濟んだのかね？

野呂。一昨日濟んだよ。

月島。それはお目出度う。（足早に去る。）

近江。（見送つて）あれが月島判事ですか？

月島。畜生め、俺が初めから臺灣に來るつもりなら、あん畜生を此處へ送るんぢやなかつたに。

杉山。（ドアの所に立つてゐたが、月島の肩を叩いて）心配し給ふな、あんなのに臺灣の仕事が勤まるもんか。ま見てゐ給へ。長い事ァないよ。

—暗轉—

第四場

藪の中。夜。武器を持つた黑い影が多勢、上手から下手へと、多くは無言で、時として低い聲で囁きながら、獲物を狙ふ猛獸のやうに靜かに爬つて過ぎる。過ぎてしまふと瞬間無氣味な空虛。突然あまり遠くない所で、ワーッといふ大きな喚聲。形容出來ぬ物凄い

叫びの混沌。唸り聲。物のぶつかり合ふ音。燃える音。下手の空が赤くなつてくる。

――暗轉――

第五場

萵栗臨時法院の判事控室。上手のドアに依つて法廷につらなつてゐる。ドアが開くと法官席の壇の背面が見え、法廷の會話が聞える。下手に廊下に通じるドア。部屋の中にはテーブル、椅子、茶碗、鞄、本箱、峯州全圖等。舞臺空虚。下手のドアから野呂と杉山が這入つて來て低聲に話し合ふ。

杉山。月島が裁判長とは何しろうまい具合に行つたねえ。彼奴がどういふ判決を下すか、蓋し講和談判以上の興味だよ。

野呂。豫審以來、めつきり痩せちやつたから痛々快々だよ。氣でも違つてくれりやァ申分なしだ。

杉山。どれ一つ判決振りを拜見するかね。

上手のドアを細目に開ける。中の聲が聞える。

月島。最後にたづねるが被告羅福生は今となつてもなほ少しも惡事をしたとは思つてをらぬのか?

通譯が通譯する。被告のハッキリした聲が聞える。

通譯。被告は自分のした事は飽く迄も正しい事だと申して居ります。

月島。被告陳阿棠はどうだ?

杉山。（野呂に）おい、特別傍聽席へ行つて見てよう。

二人は法廷に這入つてドアを閉す。巡査が上手のドアに現はれる。

巡査。もうぢき判決が濟むから此處で待つとりなさい。

楓。はい、有難うございます。

岩吉と楓が現はれる。楓はやつれてゐる。

岩吉。さ、お掛けなさいまし。(楓腰掛ける。)本當によくまあ一人でおいでになれました。(あとは言葉なく涙を拭ふ。やがて)旦那様はとうたうおかくれ遊ばしたさうで、何とも申し上げようが御座えません。お坊ちやまがあゝいふ風におなりになつては、奥様がどんなに大變でおいでかと――でも、月島さんはそれは〳〵お孃様をお待兼ねでござえました。

楓。(小さな聲で)さうを。

岩吉。だがこちらへ來ましてからも、私はもう野呂といふ奴のやる事を見てゐると怖さを通り越して恐ろしくなつて參りました。

楓。もうどうかあいつの事は云はないで、ね。

岩吉。お孃様が折角お出になつたばかりだのに、こんな事は申し上げたくごぜえませんが――全く――こゝは――何とも申し上げられません――ひでえ所でごぜえます。今もかうやつて、現に七十人からが××の申し渡しを受けるのださうでごぜえます。

楓。(蒼ざめる)そして――それを――月島さんが――

その時法廷で喚聲があがる。

岩吉。おや、どうしたんだらう。判決が下つたのかな。

岩吉がドアの方へ行かうとした刹那、眼を血走らせた月島が上手のドアから這入つてくる。這入るや否やドアに鍵をかける。

楓。月島さん！

だが月島のうつろな眼は一時彼女の顏に注がれるが、不意に驅け寄つて楓と岩吉を下手のドアから押し出してドアに鍵をかける。

楓と岩吉は外からドアを叩く。月島は一瞬躊躇したのち、テーブルのひき出しからピストルを取り出して、轟然一發、額を擊ち拔

いて倒れる。二つのドアを叩き破つて人々が跳び込んでくる。楓が叫んで月島の屍體に取り縋る。岩吉も泣き喚く。群集が二人の姿を隠してしまふ。野呂が群集に揉まれながら中を覗き込んでゐる。彼が後向になつた時、岩吉が群集の中から跳び出して物をも云はず短刀で野呂に切りつける。野呂は體をかはして岩吉を投げつける。多勢が寄つてたかつて岩吉を押さえつけてしまふ。

野呂。（まはりにたかる人達に）いや、何でもなかつたですよ。氣でも違つたんでせう。（部屋を出る。）

暗轉。舞臺前面に紗の幕が降りる。映畫がうつる。工場。カメラは太い煙突を根本から段々に仰いで行く。その煙突には「苗栗製糖會社」と書いてある。煙を濛々と吐き出してゐる。それにダブツて改築された立派な總督府。次のタイトルが順々に映る。

○明治四十年、北埔事件。××九名。行政處分九十七名。

○明治四十五年、林圯埔事件。××八名。懲役、無期一名有期三名。

○同年。土庫事件。××一名。懲役、無期二名有期十二名。

○大正二年。苗栗事件。××二十名。有期懲役二百八十五名。

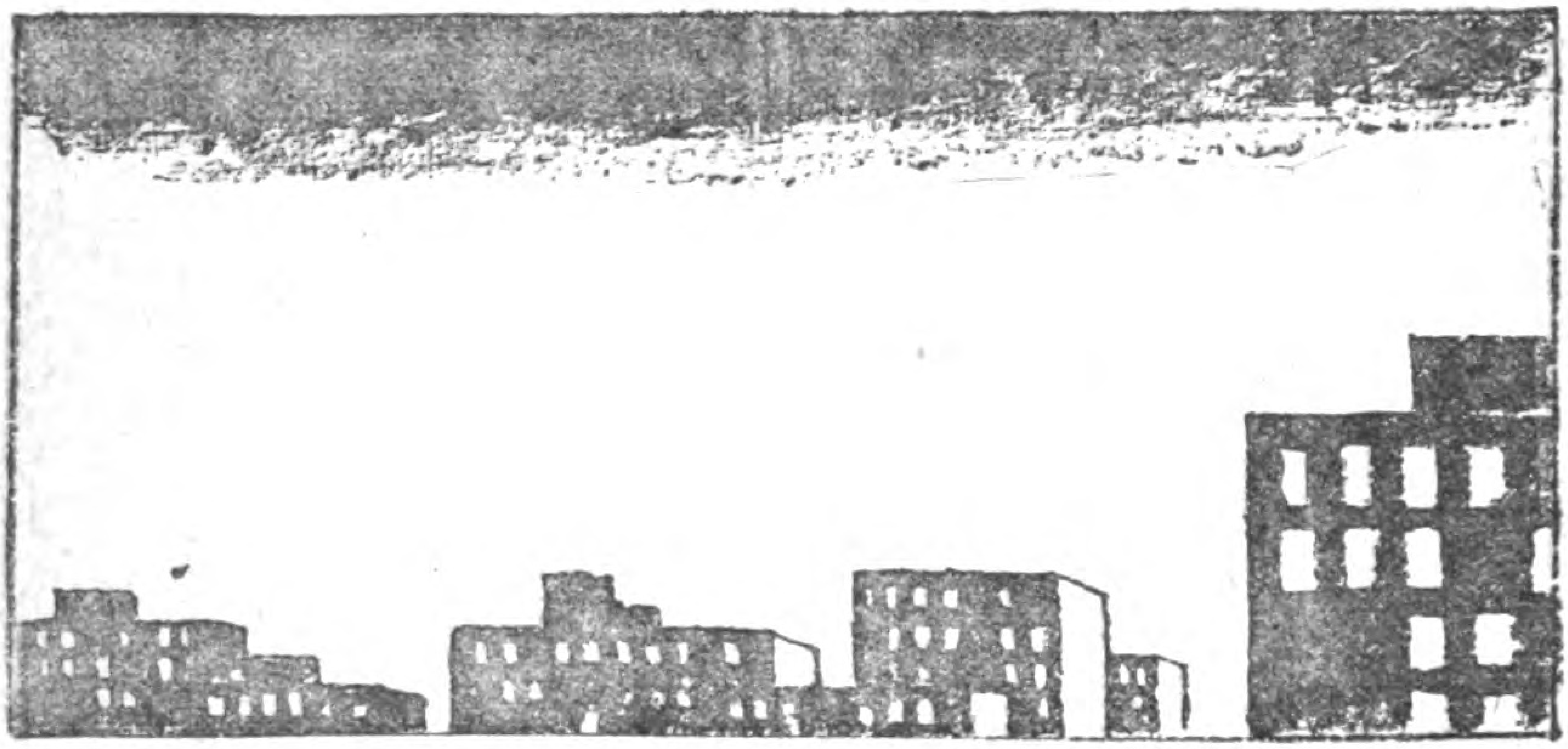
○大正三年。六甲事件。××八名。懲役、無期四名有期十名。

○大正四年。西來庵事件。行政廳に於て處分した者二百十七名。××八百六十六名。有期懲役四百五十三名。

紗の幕の後ろにあかりが這入る。パントマイム。大きなコンクリートの塀。その前に多勢の土人が互ひに抱き合ひ、塀に耳を押しつけ、何かを待つてゐる。紗の幕は上つてしまふ。不意に塀の中で××××の音。靜寂。土人達は痙攣し、ぐつと小さな塊りになる。やがてその破れるやうに見開かれた眼を持つた顔は一樣に正面に向けられ、塊はふくれ、盛り上り、口には何事かを叫んで大きく開かれ、手が差しのばされる。眞紅の光線にひたつて——

——幕——

——注意。この戲曲は特に歌舞伎、新派等の既成俳優達が上演する事の出來るやうに企てたので、題材、構成、演技等すべてさういふ意企の下に統制されてゐる。主演俳優は野呂と岩吉とを早替りで演ずることが出來る。



メキシコ共和國の滅亡

橋本英吉

一

サリナ・クルーズ港を發つたメキシコ市行きの特急は、地峽の高地を通過して大西洋岸の低地に向つて奔流のやうに下つて行つた。

列車は歐米人と東洋人とインデアンで滿員だ。乘客の多くは大産業に關係ある人々で、石油や金銀やコーヒーの臭ひをさせてゐた。

イギリスの海軍少將A・G・フィッシュ氏は、默つて列車の隅に座つてゐた。彼は英本國を半年前に出發した。メキシコに來る途中、ペルシャと支那で數ヶ月を送つたのだつた。彼は他の金持の旅行者のやうに、珍しい織物や陶器を買ひ込まなかつた。たゞイギリス帝國のために、油田の權利を確保し、政治家の良心を買收したの

みだ。メキシコでは同一目的ではあるが、百倍も困難な買收運動が待つてゐた。彼は嗅ぎ煙草を鼻腔に押しつけ眼をつむつた。

列車は平野に入つて行つた。コーヒー園や龍舌蘭の畑の間を疾走した。列車は直ぐに山の中に入つて行つた。速力は鈍り、のろ〳〵と山壁を這ひ上つた。大きな火山が雲の間に現れ、乘客達の退屈さうな眼をひいた。が、乘客達は直ぐに眼をとぢてアクビをした。列車の中では彼等を有頂天にならせる何物もない。やがて、メキシコ市に着いて、女は男から、男は女から、實業家は銀行員から、脣を接吻された時のことを想像して、僅かに心を躍らした。

然し例外はあつた。それはアメリカ人の一團だつた。總勢五人の男女達は食堂車を占領して、いつまでも動かうとしなかつた。多分、メキシコ市といふ呼び聲を聞くまでは腰を上げないのだらう。此の一團の主人公は、アメリカ合衆國上院の石油委員會常任委員ゴード氏だ。彼はフイッシユとは反對のベネズエラからコロンビアを廻つてメキシコにやつて來たのだ。ゴード氏はフイッシユ少將と偶然にも同じ目的を持つてゐるのだつた。違ふところは、一方はアメリカ合衆國の代表であり、他が英國海軍省の派遣員であることだ。もう一つの二人の相違は、フイッシユ氏が沈思默考してゐる時に、ゴード氏は酒を呑んで大騷ぎをしてゐるといふ性格にあると言へる。

列車はメキシコ高原に上つて行つた。列車は此の二人をメキシコ市に運んだために、どんな變化を及ぼすかは知らなかつた。誰もそれは知らないのだ。

列車が海拔七四三〇呎のメキシコ市に着くと、タイピストや秘書を連れてゴード氏が食堂から出て行つた。フイッシユ氏はヘルメット帽を被つて、洋傘を杖にして汽車から下りた。

二人が今後、メキシコ市から發する指令が、事々に衝突する運命にあるにも拘はらず、彼等は同じ屋根の下に住むことになつてしまつた。それはホテル・イツルビデがメキシコ一であるといふ理由に依つてだつた。ゴード氏は五個の連續した

部屋を占領した。フィッシュはたつた一つの部屋に、英國々旗のマークを貼つたカバンと暮すことになつたのだつた。

二

ホテル・イツルビデは二〇〇呎の丘の上にあつた。柏の林がまはりを圍んでゐた。二百年前に宮城として建てられたものだつた。林の中には馬に乘つたメキシコ帽が見えた。午後の夕立がキッチリ三時に歇んだ。すると綠の樹の葉がキラ〳〵光りはじめた。空は澄んで一七〇〇〇呎のポヽカテペトル火山が白々と現れた。

フィッシュ少將は、眼鏡を外して新聞の切拔きを貼りつけてゐた。

「アメリカ合衆國の石油委員會は上院議員、海軍、石油業者より成る有力な機關である。今回同會は常任委員ゴード氏を視察のため派遣した。大統領及び關係業者は歡迎會の日程を發表した。終了後、油田地に出發する……」

そんな意味の報導だつた。これだけの記事からは、何の意味をも探り出すことは出來ない。が、フィッシュ少將は、石油委員會がスタンダード石油會社のものである事を知つてゐた。アメリカには外に一つの石油會社もなかつたからだ。スタンダードは現大統領を援助して國内戰を起させ、前大統領を放逐して終つたのだ、だからゴード氏が、たゞ油井を見るためにのみ、不便な氣候の悪い地方にやつて來はしない。何かしつかりした目的があるに違ひなからうと少將は思つたと、少將は自分とゴード氏の仕事が、互ひに反撥し合ふ二つの勢力となるのではないかと思ひ初めた。早い話が、商賣敵だ。

少將は石油が欲しい。彼は軍人で、自分の目的に熱中する。やりかゝつたら飽くことを知らない。彼は自分を英帝國のために捧げて居ることを忘れない。其の信念は彼が年をとり、位が上るに從つて強くなつた。彼は一般の政治家のやうに失業問題を口にしない。それは石油の缺乏は英海軍を滅亡させ、從つて英帝國を敵の手に渡すものだと思つてゐるからだ

これは失業問題の比でないのだ。英海軍は大戰後、五大石油政策を確立し、アングロ・ペルシャ石油會社の株を半數買收した。英國配下の凡ての石油會社を海軍の監督下に置いた。そして各國に散在する油田の權利を獲得すべく努力しはじめた。少將は第二次世界戰爭の危機が近づけば近づく程、石油に對する熱愛を深めた。彼は此の第二次世界戰爭に勝つたためには、軍艦と石油が欲しい。

だが、アメリカ合衆國がそれと同じ樣な考へを持つとしたらどうだらう。石油が軍艦の能率を約二倍に引上げることは周知の事實だ。飛行機、自動車、タンク等は石油がなければ無用となるだらう。少將が「戰爭が必ず起る」と信ずるやうに、アメリカ合衆國も信ずるだらう。戰爭の直接の準備として石油が欲しいに違ひない。

少將は、任務の重大さを感じ嚴肅な態度になつて行くのだつた。

少將のスベ〳〵した掌には、次のやうなもう一枚の切拔きが乘つてゐた。

「油田及鑛山勞働者の生活狀態が、最近著しく低下しつゝある。勞働條件は惡くなり、三つの地方には暴動が起つて居る。メキシコに投資された外國資本は六十七億弗で全產業の八割五分に達してゐる。メキシコ共和國は事實上滅亡した。今や英米諸外國に分割されたるメキシコ植民地の下に勞働者及農民は奴隷化して居る。メキシコ××黨は、諸外國の帝國主義に反對する運動の中心として活動したゝめに、多數の黨員は捕縛された。……」

フィッシュ少將の白い鬚は動いた。同時に顎と頰の間の筋肉はピリ〳〵と引きつつた。それは彼の笑ひといふものだつた。彼はかういふ事實を暴露した記者の才能に感心しやうとする自分の良心に鞭打つた。自分が祕書もつれず、新聞記者の眼をかすめて、ホテルの地下室から英國大使や、ピアソン石油會社々長に暗號電報を打つのは何のためか！ それはメキシコにある英國の資本家と、海軍少將である自分とが、何の關係もないことを裝ふためではないか！ 自分はかゝる慾眼に感心してゐてはならない！

少將は内心の混亂を靜めるために、否、忘れるために立ち上つた。嗅ぎ煙草で鼻を押へ、窓の鐵網を透して街路を見下した。雨後のドライヴのために、無數の自動車が連なつてゐた。ベルが鳴つて給仕が名刺を出した。

――ピアソン・西シエラマドレ開拓會社、アントニオ・ロレドー――

――同、　ジョン・ハックス――

少將はうなづいた。二人共、立派な歐米人らしい服裝をしてゐた。が、足は外側に曲り、馬乘りであつたことを說明してゐた。眼は細くて大きな黑い髭を生してゐた。

「新しい報告を持つて來たか？」

少將が云つた。

「これに書いてあります。」

ロレドーは封蠟で嚴重に封印した暗號の手紙を出した。それは二人の主人カノからのものだ。カノは現政府に反對して「シエラマドレ軍」を組織した。英國の資本か一世紀前からカノの黨を援助してゐた。然し米國の資本は、彼等の黨が政府を組織すると大統領を暗殺さした。かくして二つの資本に援助された代々の大統領は悉く彈丸の的になつた。

「シエラマドレ軍」はシエラマドレ山脈に散在する鑛山を基礎にしてゐた。精悍なカウ・ボーイから成る騎兵隊が其の主力だつた。

「機關銃・小銃を日本商人の手を經て送付して貰ひたい。百萬磅を援助されたい。自分は大統領になつてアメリカの手先から銃殺され度くはない。自分は國民に信望のある政治家を自分に代つて大統領にする準備がある。又、共產黨の示威は、我々が蜂起する口實となる。何となれば、人民は極度な貧困に陷つてゐるから――」

少將は二人の大きな手を握つてうなづいた。それから英國大使とピアソン石油會社々長に電報を打つために、地下室に

降りて行つた。

三

ゴード氏は「わしは樂天家じや。わしには祕密がない。わしは自分の思つたことを云ふ權利がある。それはわしに生きる權利があるのと同じじや。」と前置きして、大統領ザルモロスをやつつけた。

「メキシコ産業の繁榮に對する大統領の政策は間違つてゐる。一九一四年の石油法制定後、石油産額は半分になつてしまつた。現在ではどこの國でも外國資本を爭つて輸入してゐるのに、あなたは、消極的にしかやつてゐない。國民に氣がねしてゐる。――」

ゴード氏の顎はダブル・カラーの上に垂るんでゐる。彼は龍舌蘭から採取したプルケ酒を水のやうに呑み乾した。

大統領はイダルゴーの胸像に、ハバナの煙をからませながら笑つてゐた。大テーブルの上には、ゴード氏の掌の脂肪が薄白く付いてゐた。

「わしは、あなたと石油國有法や石油課税法を改正するといふ約束をしませう。そしてスタンダード石油の株が暴騰したなら、それをあなたの軍隊に獻上しませう。」

ヴエルタ大統領は歐洲大戰中、各國の勢力の弱くなつた際に石油を國有にし、採掘者に重税を課したのだつた。各國の石油企業は衰えた。ヴエルタは忽ち米國資本に仆された。ザルモロスにアメリカの資本家代表ゴード氏がそんな要求を提出するのは當然かも知れない。

「わしは産業繁榮の積極政策をとりませう。それは國民全體の幸福を增進しますからね。これは二つの順序を經なければならぬ。第一が反對派の解滅。第二は借款を起すことです。」

ゴード氏は大聲で笑つて、肥つた手を叩いた。

「わしとあなたは、利害關係が一致しとる！　わしは二つの政策に援助します。」

ゴード氏は酒で頰を赤くして、チヤプルテペツク城を出て來た。額ににじんだ汗をハンカチで拭いて自動車に乘つた。森林の多い公園の中にある大統領官邸には、美しい三色旗が飜つてゐる。彼はふりかへりながら、此の城の主人公が、幾代かに亙つて殺された歷史を思ひ出して苦笑した。

ゴード氏が苦笑してゐた時に、彼の敵手フイツシユ少將も頰をゆがめて彼特有の笑ひ方をしてゐたのだ。

「シエラマドレのカノ」の部下達は復命に歸つた。武器は日本の數人を仲介として輸送されることになつた。だから二人の敵手は、ホテル・イツピロデで自分の手腕を密かに誇つてゐたのだ。哀れな大統領サルモロスは、「殺されるか、生きるか」の危險に曝されてゐる自分の運命を知ることさへ出來なかつた。

四

澱つて動かない空氣。青々としたサボテン。乾いた熱砂。まばらに生えた二寸餘りの灌木——

丘に續いた低地に、インデアンの部落が見える。森の間に褐色の煉瓦の壁がある。

彼等は部落の方に下りて行つた。インデアンの女達は、樹陰の流れで洗濯をしてゐた。白い服の裾は水に浸つてゐる。

子供等は濡れた手で花をいぢつてゐた。水甕を頭に乘せた娘が、彼等に笑ひかけながら、水邊から去つて行つた。

彼等は疲れてゐたが、强いて「今日は」と女達に挨拶しなければならなかつた。裸足だつた。眼は汗に汚れて臭かつた。

何よりも空腹は三人を疲らしてゐた。凹んだ頰には、長い鬚が伸びてゐた。眼はグラ〳〵してゐた。

三人は麥藁帽をとつて、一軒の家に入つて行つた。

「何か喰はして下さい。それからタンピコまでの汽車賃も欲しいのです。それに相當するだけの仕事を手傳ひませう。」

主人は大きな掌で、長い眞黒な鬚を撫でながら、

「何處から來たのだ？」

と云つた。インデアンとスペイン人の混血兒エリドが、即座に答へた。

「サンルイスの方からでさア。銀山に居ましたが、潰れさうなんですよ。これから油田の方で働くつもりです。」

主人は承諾して奥に入つて行つた。やがて路傍で玉蜀黍で拵えた煎餅と、黑豆の煮たのを食べた。コーヒーのいゝ匂ひは彼等の弱つた神經を刺激し力づけた。食卓の横を、二頭の牛をつけた荷車が、のろ〳〵と通つて行つた。蜂雀の群が、金綠色の小さな羽を陽に輝かしながら飛び去つた。

インデアン達はコーヒーを作つてゐた。彼等は乾かした豆を、アメリカ人の店に持つて行くのだつた。それは二億弗の資產を持つた、メキシコで一つしかないアメリカのコーヒー會社に集まるのだ。

彼等は一週間働らいた。インデアンは黍と豆だけを喰つて生きてゐるにも拘はらず、鷹揚で親切だつた。三人はサン・ルイス・ポトシーの衛戍監獄から逃亡して來たのだつた。彼等は油田地方でストライキをやつたのだ。だが資本家はアメリカ人やイギリス人だつたので、それ等の外國資本に反對する運動に進展しはじめた。メキシコの勞働者は

「英米の××主義的侵略を蹴散らせ！」

「第二次世界戰爭の準備のための油田獲得競爭に反對！」

そのモツトーは世界の各植民地で叫ばれてゐた。でメキシコの官憲は指導者を捕縛したのだ。

二十七人の勞働者のうち、六人がアメリカのマークの入つた銃で××された。彼等六人が漸く逃亡に成功した。殘りは未だ監獄に居た。

汽車賃を稼いだ三人は、二組に分れて出發した。エリドーは北部油田に、他の二人は南部油田に下つて行つた。

五

エリドーは北部油田の輸出港タンピコにやつて來た。暴動のあとで組織は破壞されてゐた。たゞメキシコ市にある本部からの通信が來るだけであつた。然し十二の支部のうち三つと、運搬勞働者が殘つてゐた。運搬勞働者は大部分純粹なインデアンで差別待遇をうけてゐた。彼等は辛抱強く自分達が解放されるまで闘ふ意志をすてないのだつた。そして「解放され、新しい、社會が必ず來る」と信じてゐた。スペイン人や混血人種は壓迫を恐れてゐた。アメリカ製の煙硝を恐れた。エリドーは舟や汽車やトラックに乘つて二十五哩離れたタンピコ港に石油を運んで來るインデアン達に「メキシコ××黨は再び組織された！」と刷つたビラを渡した。ビラは一枚々々になつて原油の染みた勞働者の手に渡つた。大統領サルモロスはゴード氏に煽動されてさういふ運動を彈壓する決心をしてゐた。ビラを持つて居た勞働者は銃殺され、或ひは捕縛された。然し彼等はスパイや官憲の眼をかすめて××網を擴げて行つた。

此の運動は南部のツースパンでも發展した。同時に鑛山でも再び芽を吹きはじめた。

六

パヌコ河畔にあるタンピコ守備軍の軍人クラブの大ホールに一山程の宣傳ビラが積重ねてあつた。アメリカの士官學校や、カウボーイあがりの將校達は、それを珍しさうに取りあげた。一人の若いスペイン人の將校が聲高く讀みあげた。ビラはテーブルから絨毯の上に散つた。

「メキシコ共和國將校兵卒諸君！」彼はおどけながら右手を振りあげてテーブルを叩いた。

「諸君が我々の同胞であることは言ふまでもない！　しかるに諸君は、我々が英米資本家に對して反抗する時に、何故我々に×をさし向けるのだ！　我々が彼等と闘ふのは五千萬の兄弟のためにだ。諸君は自分の同胞を×すことによつて、諸外國の帝國主義に味方をしてゐることを知つて貰はなければならない……」

それに對して讃否の嵐が起つた。將校達はビツクリしたやうに立ち上つて、散つてゐたビラを拾ひあげた。

「例へば油田經營者はメキシコ人であるが投資者は諸外國人であり利潤は悉く彼等の懐に流れこんでゐる……」

然し將校達は彼の讀むのを聞いてゐなかつた。彼等は議論に熱中してゐた。彼等は、自分の經驗から判斷して凡ての理論を拒んだカウボーイは「馬乘り」の哲學を、アメリカ士官學校出は「拜金哲學」を、メキシコ人は「愛國主義」を——誰も彼も相手の顏に唾をとばした。カウボーイと若い士官學校出が遂に掴み合ひをはじめた。彼等は赤い絨氈にひつくり返つて噛み合つた。

一人の將校が入つて來た。

「諸君！　兵卒の奴等はビラを讀んで昂奮してるぞ。奴等は集合を開かうとしてるんだ。上官に反抗しやうとしてゐるぞ！」

噛み合つてゐた將校達は靜まつた。自分達が「將校」であることに氣付いた。すると反抗しやうとする兵卒に對する憎惡が高まつて來た。

「奴等を營倉に打ち込め！」

滿場一致で叫んだ。

ラレド國境軍司令官はニユー・オリヤンスの本隊から來た電文を讀んでゐた。彼は密輸入者から沒收したウヰスキーを呑んでゐた。七面鳥をフオークに突きさして頰ばつた。彼は暗號電報を副官に譯させることは嫌ひだつた。副官は酒と女に弱かつたから、酒をうんと呑まされて、その上で女に口說かれたらどんな祕密でも洩らすかも知れなかつた。やつと讀み終つた彼はウヰスキーを呑み乾して立ちあがつた。

「副官！」

副官は隣りの彼の部屋から出て來た。

「地圖を持つて來ましたか！　メキシコ北部を全部！」

國境をなしてゐるリオ・グランデ河は黑い大きな線で兩國を分離してゐた。ラレドの對岸にヌエボ・ラレド市があり、線路が砂漠の横を曲つてゐた。アメリカ側には、千八百四十八年に千五百萬弗でメキシコから奪取したテキサス、ニユー・メキシコ、アリゾナ、カリフオルニヤの四州が竝んでゐた。

「命令が來たのだ！　我々は四本の鐵道幹線を守らねばならぬ。」

司令官は七面鳥の脂肪に汚れた指で、アメリカからメキシコに伸びてゐる黑い線路を押した。

「此の沿線には二十七億弗の投資と、それから生產される商品があるのだ。勞働者はまた暴動を起してゐる。チワワ、カイエゴー、モンテレーは危險に陷るかも知れない。木材勞働者は機關車の運轉を中止してゐる。石油勞働者には煙幕と毒ガスより外に××方法はないのだ。而も鑛山には「シエラマドレのカノ」が英國の手で武裝されて居る。あ奴は慓悍なカウボーイを持つて居る。今山を下りて南に移動して居る。荒原の戰鬪では損だ。我々はメキシコ政府軍と我が海軍とカリフオルニヤから南下する我が陸軍と完全に連絡をとらなければならぬ！」

司令官は語尾に力を入れて胸を張つた。大きな口をあけて、指をさし込んだ。然し齒に挾まつた肉片をつまむには彼の

指は大きすぎた。

翌日、リオ・グランデ河の舟橋を渡つた米軍は、困難な砂漠の周圍を進まねばならなかつた。地表を掩うて居るものは僅かな灌木だけだつた。軍用自動車のラヂエーターからは熱氣があがつた。午後になると夕立がやつて來て彼等を濡らした。數匹の鷲が彼等の後を追跡した。濛々とした砂煙りの中に、長い縱隊は埋り、大きな煙幕のやうに見えた。ラルドー軍は山脈に入つて行つた。山の向ふ側にはモンテレーの市街があつた。

アメリカの陸と海からメキシコに入つて來た。彼等はたつた一つの命令で自分の生命を堵して他國に侵入してゐるのだ。命令は數千マイルを隔てたニユーヨークのウオール街から來たのだ!

八

ロンドンから來た命令はシエラマドレの山の中を騷動さした。五千呎から八千呎の西部の山脈は氣候がよかつた。カノの部下達はメキシコには珍らしい立派な馬を持つてゐた。首にネクタイのやうな派手な布を捲いて仲間の印にした。幹部達は絨氈の縁の廣い帽子を被つてゐた。それには銀の飾りがついてゐて、一匹の乘馬よりも高い値のものだつた。それから薄いマントを着て腰に大きなピストルをさしこんでゐた。兵卒達はガニ股だつた。彼等は皮のズボンをはいて右手で鐵砲を鞍の上に立て、左手でたづなを持つて居た。大きなナイフや刀を鞍に挾んであつた。

彼等はメキシコ市から新聞を出したり、代議士を議會に送つたりして「輿論」を起した。然し商人や小政治家や外國人しか彼等の意見を聞いてやらなかつた。勞働者農民の八割五分は、それぞれ外國資本家に使はれてゐたので、彼等の煽動には知らん顏をしてゐた。

カノは國境で大牧場を經營してゐたことがある。大きな腹と長い鬚を持つた男だつた。派手なマントには、三色旗に蛇を掴んだ鷲の模樣の入つたマークをつけてゐた。今では自動車だけにしか乘らなかつたが、ガニ足をしてゐた。

彼は七人の幹部と、國境の牧場から歸つて來た。そこで國際關係と政府軍攻擊の計畫を討議したのだつた。二十二箇所の牧場と鑛山に居た軍隊は編成された。

そして僅かに一晝夜のうちに山脈を越えて、三十哩離れたチワワ市を占領してしまつた。アメリカに接續する鐵橋は爆破された。チワワ市附近に散在する十以上の鑛山は直ちに占領された。騎兵隊は更に七十哩離れたサンタ・ロザリヤ市に殺到した。政府軍は武裝を解除された。大西洋岸に下つた一隊は、馬匹を徵發して、砂漠を橫斷した。馬はサボテンを喰つた。兵隊は其の實を喰つた。銃を鞍に立て、嵐のやうに砂塵をあげながら進んだ。

北部一帶はシエラマドレ軍に占領されてしまつた。「米國の手先を葬れ！」彼等は共產黨のまねをして民衆にさう呼びかけた。米軍は各方面で不利だつた。アメリカ兵は高原を馳驅するのになれなかつた。彼等の新しい武器に充分な能率を發揮させる暇もなかつた。叛軍の騎兵はメキシコの三分の一を占領して、益々勢力を伸して行つた。

ラレドから來た米軍を擊退した叛軍は、東シエラマドレ山脈を突破した。そして口々に叫んだ。

「油田へ！」

「油田を占領しろ！」

九

ホテル・イツルビデの珍客ゴード氏は發狂しさうになつて居た。彼の脂肪肥りのした指はピリピリ震へてゐた。彼は樂天主義から忽ち焦燥のどん底に叩き落されてしまつた。

「大使！ 大使！」

彼は電話を摑んで叫ぶのだつた。

「わしはもう一週間以前から軍艦の派遣を要求してゐる。國境にゐる守備隊なんか、何の役にも立たん！ 阿奴等は買收された鸚鵡と話でもしてゐるのだらう！ わしはチャンとあなたに言明する。油田が山猿共の手に渡るやうなことがあつたら、あなたの給料を拂はんとな」

その時、地下室ではフィッシュ少將が、電報料をポケットから出すところだつた。彼は痩せた白い顏をしてゐた。靜かに鏡を算へた。彼はゴード氏の部屋の前を横目もくれずに通りすぎるのだつた。が、フィッシュ少將の心は、今程愛國の念に燃えてゐることは嘗てなかつたらう。彼はゴード氏を呪つた。いやアメリカを呪つた。彼はホテルでは、世界漫遊客の一員だつた。誰も彼を注意するものはない。だが彼の心は、油田地に向つて進軍しつゝ、ある叛軍と同じやうに、

「油田へ！」

と叫んでゐるのだつた。

ゴード氏は又、

「軍艦を油田へ派遣しろ！」

と兩手と頭とを一緒に打ち振りながら叫んでゐるのだつた。

ニユヨークとロンドンでは、

「油田を守れ！」

と唸つてゐた。

大統領サルモロスは深いソファーに沈んで、禿げあがつた額を押へてゐた。彼はチャプルテペック城から一歩も出なか

つた。守衛が増員された。守衛の中にスパイを入れた。そのスパイを彼自身監視した。電話が彼を悩ました。南部地方の軍隊が續々と輸送された。軍隊は軍樂隊を先頭に行進した。軍樂隊は銀線で縁を飾つた棕梠の大きな帽子をかぶつてゐた。戰線に着くと忽ち猛烈な襲撃にあつて壞滅してしまふのだつた。そこで大統領は

「アメリカの軍艦よ來れ！」

「油田を守れ！」

と叫ばざるを得なかつた。

一〇

義勇兵が募集されはじめた。若い男や女達の間に話題を提供した。

メキシコのブルジョア娘達は、午後の夕立が去るとベランダに表れるのだつた。歐米風の化粧をして、スペインの服を着てゐた。「カルメン」以來有名になつたマキ毛が、彼女達の間に復興した。髮に大きな笄をさして、模樣入りの扇子を持つてゐる。男は窓のところに顏を出してゐる娘達に話しかける習慣があつた。そこでは闘牛の話や、ラ・アルメダ廣場の音樂會の話やオペラの話が交されるのだつた。夜になると窓の下でギターを鳴らして娘を誘ふのだつた。彼等は、それが一番高尚な男女の交遊法だと思ふのだつた。何故なら活動寫眞を通して世界中の若者達が、其の方法にあこがれて居ると思つてゐたから――

同樣に「戰爭」も高尚な悲壯な美しいものだと思つた彼等は、窓の下に寄つて來た若者に、

「何故あなたは志願しないの？」

と迫るのだつた。ブルヂョアの若者達は志願受付所に集まつて行つた。そしてキッスを交しながら戰地に立つた。

表面的には餘り沸き立つて見えなかつたメキシコ市を搖り動かしたのは勞働者の大デモンストレーションだつた。

「內亂に絕對反對！」

「英米帝國主義に反對しろ！」

「メキシコ領土から外國の軍隊及軍艦を追ひ返せ！」

數萬の勞働者は、ラ・アラメダで演說會を開いた。長方形の角々に立てられた四つの銅像は埋まつてゐた。噴水は群集の中に沒した。大統領は代表者と會見しなければならなかつた。勿論、大統領は其の要求の一片すら實行することは出來なかつた。で、勞働者農民は內亂に依る稅金を拂はない、と云つた。大統領はすべて「軍艦の來るまで！」と決心してゐたので默つてゐた。

勞働者の運動は、全國に擴がつて行つた。

ザルモロスはカノから「大統領を辭職しろ！」といふ勸告文を受取つてゐた。

二

シエラマドレ軍は油田地方に迫つてゐた。五十哩も離れない地域で戰鬪が起つてゐた。一氣に肉迫して來た叛軍は、油田に近づくに從つて、疲れを忘れてしまつた。彼等は米艦が到着しない中にタンピコを占領しなければならなかつた。

政府軍は士氣が衰へてゐた。叛軍は大統領が暗殺された、と喧傳した。すると、それは如何にも眞實のやうに思はれた政府軍は崩れ出した。將校達はアメリカ商船に席を求めやうとしてゐた。

叛軍の騎兵隊は、二十哩も迂廻して政府軍の側面から猛襲して來た。驚いた政府軍はパタコ河に沿つて逃走しはじめた。騎兵達はそれを挾んで河畔に追ひ詰めた。多くの政府軍は降伏した。將校達は長靴を履いたまゝ、流れの中に飛びこんだ。

溺死者は水を呑み大きな腹をして浮んで來た。誰もそれに同情する者はなかつた。

「油田へ！」

北部油田は叛軍の手に陷ちた。メキシコ市は三百哩の處にあつた。そこからはコーヒー園の人夫やインデアンやブルヂョアの青年達が武器を持つて進んで行つた。アメリカ人の志願兵は格好のいゝ少年團の制服を着てゐた。雜然として市民兵と政府の軍隊が列車で北部油田に向つて運ばれた。

二

タンピコの沖、三百七十哩のところに四隻の巡洋艦が浮んでゐた。ニューオリヤンスから油田地に向つて白い波を立てゝ進んでゐた。メキシコ灣はアメリカの軍艦にとつては自家の寢臺の上に居るやうなものだつた。もう少し進めばメキシコ市の裏手にあるポポカテペトル火山が見える筈だと、古參將校は言つた。

水兵達は、晝の調練をやられた。機關銃や小銃を打つ放した。それから「陸上に於ける煙幕の效用に就て」講義された。殊に彼等が最もいろ／＼な意味で興味を惹いたのは「毒ガスの用法に就て」の講義だつた。

巡洋艦は急いでゐた。資本家はもう取り返しが付かないと云つてゐる位だ。四隻の軍艦は大きなうねりの上を、飛沫をあげながら進んだ。若し軍艦といふ物が、本當に人間の幸福を保護し得る時が來たら、それこそ「威風堂々たる」ものだ！

三

政府軍の陣形はボロ／＼の齒のやうになつてゐた。市民兵が夜になると陣地から逃亡したからだ。彼等は苦しい行軍や勞働に堪えられなかつた。逃亡した跡には數軒の空隙が出來て連絡が絕たれた。

官軍は全油田を放棄して退却した。勞働者は石油の運搬や仕事を休んでゐた。彼等はさういふ戰爭の結果が、いかに自分達を苦しめるものか知つてゐたのだ。輸送鐵管には用心棒が張番してゐた。役人達は軍隊が居なくなつたのでストライキを壓迫する事は出來ない。勞働者が反抗して來たら靜めて呉れる者が無いのだ。だから會社は用心棒を狩り集めた。石油勞働者は部落を作つて、小屋の中に住んで居た。エリドーや仲間達は、彼等の集會に出席して演說したり報告したりした。勞働者は大統領と資本家の關係は解らない。が、アメリカやイギリスの資本家には深い憎惡を持つてゐた。「外國人を驅逐して、俺達だけでやるやうにしやう！」と話すと贊成し拍手した。委員會や警備隊が出來た。そして油田地方の中心地に集合して示威運動をやつた。

資本家達は別の所に集まつてゐた。「軍隊は妥協しなければならない。」と口では言つた。だが、腹の中では「今に見ろ！お前さんは油井は追拂はれるだらう。」と考へた。其の時が來るまで、彼等は顏を突き合せて、ビフテキを喰ひ酒を呑んでゐるつもりだつた。けれども石油が出なければ、彼等は困るのだ。損害は日々大きくなつて行くのだ。略奪戰爭を續けるか、油を出させるか、二つに一つだ。彼等は矛盾に突き當つたまゝ、數日を過した。

一四

巡洋艦は沖の方に碇を下した。白い水兵服の男達は、彈丸と小さな機關銃とを一人々々持つてあがつて來た。小さな銃は一分間に五十發の彈丸を、アメリカ植民地の人間の胸に打ち込むことが出來るのだつた。半哩ばかり沖に居る巡洋艦は筒口を町に向けてゐた。町の後には荒原がある。其の向ふの油田地に大きな砲彈を落すことは何でもない仕事だつた。水兵を乘せたランチは續いてゐた。

山腹にあつたシエラマドレ軍のテントには大きな唸りをたてながら砲彈が落ちて來た。彈は空氣を掻きまぜ、波を跳は

し、テントや人家を空高く吹きあげた、水兵達は、彈丸を土の中で破裂させない練習に日を送つてゐたのだから、彼等に狙はれた凡ゆる物は粉砕された。砲彈の前には人も獸も財寶もなかつた。シエラマドレ軍が狼狽しはじめると、輕機關銃から小さな彈丸が一分間に五十發の早さで降りはじめたのだ。しかし彈丸は、タンクやオイルパイプを避けて通つた。若しそれ等のどれにでも命中しやうものなら何萬弗の財寶は燃えて終ふのだ。だから彼等はさういふ資本家の所有物を狙はうとしなかつた。

シエラマドレ軍は、町から退いて油田地に陣地を構えた。林のやうに櫓が並んでゐた。丘から谷へ下り、又丘へ櫓は連なつてゐた。その間には網の目のやうに輸送管が張られてあつた。その中には油がひとりでにタンクへ流れてゐた。砲彈はそこには屆かない。騎兵は夜になると勢ひを盛り返し、水兵を町の方へ追ひ返した。彼等は夜中に日本から來た一九〇五年銃の彈丸を打ち込まれた。

大統領は新しい軍隊を送つて來た。彼等は河を渡つて、突然騎兵の横から彈丸を浴びせかけた。騎兵はまた油田地の谷底に退却して援軍の來るのを待つた。シエラマドレ軍の司令官は、

「若し君達がこれ以上追撃するなら、油井に放火する決心だ！」

さう、アメリカ軍に云つてやつた。だがアメリカ軍は默つて答へなかつた。

勞働者達は戰場から去つた。彼等はテントを買つて來て、油田の外に密集した。そこから委員達が兩軍の司令部に決議文を持つて行つた。

兩軍共、互ひに陣地を固守して退かなかつた。應援の軍隊がどちらも輸送された。そして大きな二つの集團は丘を挾んで動かなかつた。其の丘の上には油井が並び、石油がひとりでに流れ出てゐた。タンクに溢れて黑く地面を汚した。小屋やトラックは空のまゝ人の來るのを待つてゐた。

夜になると、アメリカの歩兵は、未だ嘗つてない程、猛烈な夜襲を行つた。軍艦のサーチライトが荒原を照らした。彈丸は閃光を放つて破裂した。煙硝は毒ガスを出した。叛軍は知らないで感覺を失つて行つた。彼等が毒ガスだといふことを氣付いた時には最前線の三分の二が仆れて居た。續いて絶え間なく仆れた。如何にして防禦するか誰も知らなかつた。彼等は、毒ガス彈の届かない位置に却く代りに、馬に乘り銃を右手でさし上げながら突進した。馬は暗の中で躍つた。突喚の叫びと馬蹄の響きがアメリカ軍に殺倒した。アメリカ軍は二つに折れた。眞中を騎兵隊が突貫した。二つに分裂したアメリカ軍は鹿塞（ろくさい）の向ふに隱れた。サーチライトが騎兵を曝露した。彈丸は火の子のやうに彼等を包んでしまつた。シエラマドレ軍は再び退却しなければならなかつた。

全速力で退却した騎兵隊の後ろでは、タンクが爆發してゐた。焔は高く舞ひ上がり、風に連れてアメリカ軍の方へ燃え擴がつた。焔は伸びたり縮んだりした。伸びた時には、大きな舌のやうに觸れたものを舐め、忽ち眞赤にして終ふのだつた。火は油井の一つを爆發さした。オイル・パイプは幾噸かのコンクリートと一緒に空に吹き上げられた。二百五十呎に餘る火柱が四邊を明るくした。それは逃げて行つたシエラマドレ軍の馬の尻まで照して居た。火柱は高い空で吹き散らされ、雨のやうになつて地上に落ちて來た地上には焔の河が出來た。花火だ。數十萬弗を一時に爆發させた花火だ！

一五

戰爭に蹂躙された資本家達は、妥協したくなつた。ロンドンとニユヨークから電報が來た。メキシコに居る英米を除いた各國の大使達は調停を申出た。それは二つの方法に分けられた。

一、内政――大統領ザルモロスは一應辭職し、新しく選擧を行ふこと。

一、外交――米國の出兵は、自國民保護のため已むを得ず。

メキシコ共和國のためには、何にもならない調停だつた。がそれ以上にも、それ以下にも誰が調停する力を持つてゐたらうか。

ホテル・イツルビデで漫遊客を裝ふてゐたフイツシユ少將は、もうゴード氏を訪問してもい丶、スタンダードと英國系石油會社の鬪爭は、一應打切る方がい丶だらう。今後は更に二段の戰ひに入る可きだと思つた。彼は大統領を更迭させるまでに漕ぎつけた自分の手腕をひそかに誇つた。やがてそれは英本國で認められるだらう。ローヤル・ダツチ・シエル會社の株が暴騰するだらう。同時にスタンダードの株が反比例に下つて行くだらう。

ゴード氏は不機嫌だつた。自分の計畫は一分も成功してゐなかつた。だから彼は一室に閉ぢ籠つて誰にも會はなかつた秘書がフイツシユ少將の名刺を持つて來た時も、肩書に、ピアソン及びローヤル・ダツチ・シエル石油會社顧問と書いてなかつたら、面會を謝絶するところだつた。

「あなたいつから御滯在でした？」

ゴード氏は相變らず不機嫌だ。

「丁度、あなたと同じ汽車でした。」

少將は、彫刻のやうに靜かな冷たい態度で云つた。するとゴード氏は亂暴な喧嘩口調で云つた。

「御用は？」

「我々の任務に就てゞす。」

「もうそれは濟みました。あなたはこれ以上何をお求めにならうとするのです。」

「いや……」

少將はスベ〳〵した細い手をあげて、昂奮したゴード氏を制した。

「私は競爭といふもの、本質に就て御考へ願ひたいと思ひます。競爭は妥協なしにはありません。私はメキシコ油田に於てイギリスの權利を代表してゐるのです。」

ゴード氏は、それには答へなかつた。彼の眼の底は、フイツシユ少將に對する敵意で輝いてゐたのだ。然し彼は反面では少將の申出でが順序を踏んだ話として、考慮しない譯には行かなかつた。

「私はかういふことを提議したい。兩者は完全な諒解の上で、メキシコに於ける投資額を決定すること。油田の地區を決定し、同時に石油法の改正を新大統領に遂行させること。鐵道と其の沿線にある鑛區を正當に分割すること――大體以上のやうな條項です。我々は此の協定の上にはじめてメキシコ産業を開拓し得ると思ふのです。」

ゴード氏はやつと口を開いた。

「どういふ機關で、決定するのです？」

「ニユーヨークかロンドンで協議をすゝめませう。」

ゴード氏とフイツシユ氏は一時間半後にやつと手を握り合つた。

「畜生！　古狸にまんまとやられた！」

ゴード氏はいま〱しさうにつぶやいた。

一六

勞働者達は未だ就業してゐなかつた。油田の一部は燃えつゞけて居た。工兵達は油井の口を閉鎖するためにダイナマイトの穴を掘つて居た。

英米に屈服した妥協案に反對する示威運動が全國的に行はれた。油田では、戰線から歸つて來た軍隊が、群集に毒ガス

を浴びせた。そして前衛を逮捕した。アメリカの宣教師は「××主義者」の前に現れて説教した。

「あなた達は神の掟に反いた。そして神に反抗した。しかし神様はあなた達を天國に導いて下さるに違ひない……」

宣教師の去つたあとには、銃を持つた兵隊が現れた。そして彼等に眼隠しをした。

「アーメン……」

宣教師の叫び。銃の發射。

かくてメキシコ共和國は事實上、滅亡の一路を辿つてゐた。帝國主義資本の植民地が屍の上に築きあげられて行つた。

――一九三〇・四・五――



大陸（長篇小說）

谷　讓　次

5

ホテル・ネゴンボの窓からフロイド・ロイドが見下ろしてた。何といふ機嫌のいゝ群集だ。それが街路を埋めてる。まるで健康な眠りの後の高給社員の出勤行列のやうに、禮儀深くて朗かなのだ。お互ひに挨拶し合つて笑つてる。白い歯だ。やつらはこの騷擾を生活してるのだ。××とはこんなにも樂しいものだらうか。ほかの市民がこいつを見たら自分達もやりたくなるに相違ないとロイドは思つた。彼は好意を示したい衝動に驅られて、窓から手を振つた。ところが何うだ。豫期した歡呼は上らないのだ。群集は上を向いたきり冷たい顏を見せて誰も應へようとしない。やつらはやつ

らだけで澤山なのだ。外國人やブルジョア階級からは好意も同情も受けつけないのだ。外國人とブルジョアは、やつらにとつて同じものなのだ。ロイドはそれに氣がついて手を引つこめた。指揮者も旗もないくすんだ色の群集だ。物賣りの聲のやうな叫び聲が時どき立ち昇つてきた。ミイラツト劇場の前は廣場だ。横に兵營のやうな感じの市廳の建物がある。ホテル・ネゴンボの露臺から上半身を乘り出させると通りの向うに兩方が見えた。ロイドは黑いぼちぼちのやうな人が群集から走り出て市廳の階段へ驅け上るのを眺めてた。人は後からあとからと續いた。彼らは二月の間に何度もこんなことを繰り返してゐて飽きないのだ。ロイドはホテルを出て粗らになつてゐる群集の裾のはうを廻つてみた。そしてますます彼らが快活にやつてゐるのに驚いた。印度に特有の樂天家の顏があちこちに笑つてた。一つの果物を二三人で頬張り合つてゐるのだ。誰かゞ冗談を發明するとそれが人から人と傳はつて群集全體が大笑ひした。火事場のやうな熱い風が吹いて太陽は頭のすぐ上にあつた。

ミイラツトは炎天に汚れた白い建物の集團だ。みんな洋傘を忘れないのだ。市廳を取りまいて群集を制してゐる警官達も、濃綠色の制服に洋傘をさしてる。警官は大部分印度人だが上役には白いのもゐた。群集者には代表者がゐないので、警官は近くの男や女と談判してゐた。時間が經つた。日光が空の胃袋に作用しはじめて卒倒者が出て來た。みどり色の顏になつた者が群集の中から擔ぎ出された。みんなはこれで鳥渡眞劍になつたが、水甕を抱へた男が群集の周圍に現れた。水賣りだ。人はその水甕に殺倒して渇を醫した。金と交換にコップの水を渡してやるのだ。水賣りの男はしこたま小錢を集めてロイドを見て笑つた。乞食のやうな服裝をした英吉利人の放浪者がロイドの胸を突いて祈るやうに言つた。

『大將、また何か始まるぜ。今までだつてかうやつてるうちに人が死んで、公共の建物が壞されて來たんだ。』

その男は印度總督府の密偵なのだ。ロイドにホテルへ歸れと言つて、ロイドが歸らないといつたら何處かへ行つてしまつた。空氣が締まつて來て群集は大きく動いた。何をどうしようといふのか判らないのだが、群集の中には解つてゐるや

つもゐるのだ。それが××といふものなのだ。いきなり走り出した。二三人の男だ。彼らが誰であつて何のために走つたのか、それは完全な神秘だ。とにかく二三人の男が顏色を變へて群集を押し分けて駈け出したのだ。ロイドは群集の動搖を感じただけで彼の立つてゐるところからは見えなかつたが、あとでこのことを聞いてそれが×××員であると斷定するに躊躇しなかつた。何の理由もなく何處といふ眼當てもなく、只二三人一齊に血相をかへて走り出したのだ。しかし、目的は判つてるのだ。群集を昂奮させて先づ破壞のための破壞に從事させるためだ。これは卽效を呈した。群集といふものは浪のやうなものだ。力を持つ存在だけで意思はないのだ。意思は他から與へられるのだ。意思が與へられなくても、他の意思通りに動くのだ。浪を漣にするか激浪にするかだ。××黨員は度びたびこれに波紋を投げて激浪にすることに成功してゐる。波紋は小さくていゝのだ。二三人で充分だ。クシヤルガル市の若い果實商パナドユラがその一人だ。彼らは突擊の喇叭を聞いた兵卒のやうに群集の中を我武者羅に突進した。群集は大變なことが起つたのだと思つて何だ何だと訊いたが、彼らは何とも答へなかつた。たゞ群集には關係のないことのやうに人を突き退けて走つた。口を利かないから煽動にはならないのだ。

街路のむかうに黄色い煙りが上つた。二百人の英吉利騎兵が、市廳をさして疾驅して來るのだ。擾亂が群集を捉へた。パナドユラ達に續いて走り出してゐた群集は逃げ場がなかつた。馬の鼻面が彼らの額部に來た。馬の脚が人の血に濡れた。何度も馬蹄にかけられた人は赤い外套のやうになつて敷石の上を引きずられた。群集は廣場を捨てゝ、四散し出した。莫斯科から來てゐる十人ほどの熟練家が其の群集を締め束つて踏みとまらせた。引き返して騎兵隊へ向つて行つたのは二百人足らずの人數だ。拳銃とナイフが渡された。彼らは統卒者を持つてゐた。叫び聲が砂塵をゆるがせた。英吉利人を私刑しろとか兵隊はプロレタリヤの裏切者だとかいふ文句だ。それが××主義パンフレットから拔萃したやうな[illegible]な用語をもつて空へ拋られた。生硬な言葉は人の脊骨を眞直ぐにするものだ。彼らは一時に強くなつた幸福を感じて、うちから

馬の下へ飛び込んだ。殉教者の錯覺が大部分を盲目にしてゐたのだ。薄綠色の制服を着た警官達が最初の犧牲だ。ロイドが博物館の前まで逃げて來た時、眼の前に格闘があつた。五六人の印度人が、英吉利人の警官の上着を剝いで押し倒してゐた。鬚の白い年とつた警官だ。男たちの足が顏を踏んで血が流れてた。一人が薄綠色の上着を街燈の柱にぶら下げた。私刑の見立てだ。逃げてる群集もそれに歡呼を送つた。他の一人は警官の劍を鞘のまゝ振つて背中を毆りつけた。痛くないやうに毆つてるやうに見えた。それでも劍は半月のやうに曲つた。自分の劍で毆られるのだから文句はないのだ。劍は斬り殺すことが出來るのだが印度人は英吉利人を殺しはしなかつた。殺したのは英吉利人だ。馬に蹂躙された印度人の死骸をロイドはハアドルのやうに跳び越えて走つた。激怒した騎兵どもがミイラット全市を飛び交してゐた。彼らは仲間に往き會つても何時ものやうな伊達な挨拶を忘れて、その代り互ひに肩を上げて奮戰を誇つた。洒落た軍服を着せて賣春婦に持てるやうにして置いてくれるのは誰のおかげだ。祖國といふやつはこのためにおれ達を雇つてるのだ。その代償には今印度人を殺さなければならない。殺せば殺すほどいゝのだ。うんと殺した。もつと殺せ。もつと殺せ。何十人何百人殺したつて、本國の新聞は極く不運なやつが二人死んだことにもう組み上つてるのだ。極くごく運のわるいやつが、それも自殺的に馬の通路へ轉がりこんで來て、注意深い騎兵隊が馬をとめようとしても間に合はなかつた。新聞は斯う書くことになつてる。それ以上のことは此處だけの出來事だ。掲載禁止といふ法律があるぢやないか。これは何のために存在するのだ。騎兵どもは安心して暴れろ。これが正義といふものだ。それでいゝのだ。馬は鼻の穴をふくらませて汗をかいた。道路一ぱいに犇めいて黒い塀のやうになつて滅茶苦茶に驅けた。市街を驅け抜けると又引つかへして來た。全速力で急に横丁へ曲つたりした。ミイラットの市街は調馬場だ。騎兵達は大聲に笑ひながら逃げ遲れた女たちの背中などを敷物のやうに押し渡つた。家が群集を吸ひ込んで兵隊のほか街はひつそりしてた。十二三人の××黨員が一かたまりになつて並木のかげから石を投げたり、二階の窓からナイフを落したりした。この一た月ほど何度もあつたことなので、市民はすつかり慣

れて騎兵の引き揚げるのを待つてた。待つてる間に家庭では飲物を圍んで女たちには夕飯の仕度に掛つた。それほど日常的になつてる頑強な抵抗なのだ。夜になると兵隊どもは一そう嬉しがつて馬を走らせた。電氣會社の罷業で軍用線のほか働いてゐないので市街は闇黑に近かつた。騎兵隊は猛烈な速力で駈け廻るため暗いところで衝突して馬が軋み合つた。馬腹に脚を挾まれて悲鳴を上げるやつもあつた。やつらはこの騒ぎを示威運動と稱して必要なものと思ひこんでゐた。銃を取り落す拍子に引金に指がさはつて上官の一人が撃ち殺された。これは勿論卽座に××黨員の仕業といふことになつて、やつらを一層樂しくした。フロイド・ロイドはホテルと晩飯を無視してミイラッド中をほつつき廻つた。家の入口の下から入口の下を傳はつて歩いた。風のやうに騎兵隊が通り過ぎて、砂ぼこりでそこらが明るくなつた。ロイドは手近の一軒の張出し門の下へ逃げこんで立つてゐた。騎兵の一人が遅れて來た。馬が脚を傷めて跛足をひいてるのだ。百人程の人數が兩側の家から出て來た。騎兵は馬から引きずり落されて直ぐ裸かにされた。白い皮膚が黑いうごめきの中に光つて見えて、間もなく動かなくなつた。ロイドはその英吉利の青年が何のために殺されたのか自分で知らないだらうと思つて氣の毒に感じた。出鱈目に歩き出すと非常線に來た。英語を話す白人なので英吉利の警官がホテル・ネゴンボへの途を敎へて通して呉れた。が、ロイドはホテルへ歸る氣はなかつた。横町を選んで歩いて行つた。そこらは場末らしいかつた。蠟燭の燃えてゐる窓から赤いカアテンを寄せて女の顏が覗いた。女は内側から窓硝子を叩いてロイドの注意を引いて笑つた。混血兒の女だ。ロイドが這入つて行かうとすると背後に銃聲がした。それは停止を命ずる、何よりも雄辯な國際語だ。その家の扉のハンドルに手をかけたところでロイドが振り向くと、闇い往來に入亂れた靴音が迫つて來てロイドを取りまいた。靴をはいてるから印度人ではないだらうと思つた。窓から洩れてる赤い光線の中へ這入つて來たのは三人の印度人と四人の白人だ。

彼らは昂奮してロぐちにロイドを怒鳴つて呪つた。窓に眼を押し當てゝゐた混血兒の女が蠟燭を吹き消したので七人の

顔はすぐ見えなくなつた。やつらは皆立派な英語を話した。そして自分達はカルカッタから應援に來てる××黨員だと言つた。

『君は何だ。』

『市伽古の雜誌記者だ。』

『市伽古の雜誌記者が何だつてこんなところを迂路うろしてるんだ。』

『報道の任務で來たのだ。』

『俺達のことを亞米利加へ報道したつて面白可笑しくもないだらう。』

しやべつてるのは學生のやうな若い白人だ。どこの國の人間かロイドには見當がつかないのだ。

『ほんとのことを報道したつて載りやあしないよ。』その男がつゞけた。『載せれば英吉利から文句が出て騷ぎになる。かういふことゝなると英吉利だつて亞米利加だつて何國だつて共同戰線さ。初めつからニユウスにならないと判つてるここへ特派員を寄こす譯がないぢやないか。その嘘はまづい。そんな口を切らずにスパイだと白狀し給へ。』

それから彼らはロイドの知らない國語でがやがや話し合つたのち、いきなり二人が左右からロイドの腕を取つた。ロイドは呆れて默つてゐた。一人が洋袴のバンドを外してロイドの頸へ捲きつけに掛つた。はじめの學生風の青年が燐寸を擦つてロイドの風體を再檢査してゐた。何か言つた。どうもほんとに亞米利加人らしいと言ふやうなことらしかつた。ロイドは紐育で仕立てた服を着て新しい麥藁帽をかぶつてた。そんな晩に麥藁帽子をかぶつて歩くなどといふ莫迦なことをするやつは亞米利加人のほかにあるまいと決つたやうだ。ロイドは許された。その連中が遠ざかつて往くとドアがあいて混血兒の女がロイドに抱きついた。何うなることかと思つたといふのだ。ロイドはその家に泊つて一晩ぢう銃聲を聞きながら褐色の女と×た。

ミイラットの朝は街路の石ころと飾窓の硝子の破片で一ぱいだ。蛇のやうに曲りくねつた博物館の鐵の塀だ。そこにはあの髯の白い警官を毆つて折れた劍も落ちてた。騎兵隊は疲れてゐたが、市民達は一晩休んで暢氣なのだ。夜のうちに大分警察や戒嚴令本部へ引つぱられたけれど、それらは進んで身代りに立つた老人達だけだ。午前中にバナドユラの指揮で今日は組織的に始められた。新しい群衆を率ゐて裁判所を襲つたのだ。裸體の女達が眼を剝いて先頭に立つた。警官たちは裁判所の玄關に陣取つて拳銃を突きつけてゐた。若い女達の裸體が一團になつてそれを左右へ別けた。群集は背ろから怒聲と石をはふつて突破を助けた。警官が建物の内部へ退却するのを追つてバナドユラたちは大きく玄關をひらいた。數千の人間が裁判所の階段を馳け上つた。大急ぎであちこちの窓が開けられた。そこからも這入り込んだ。裁判所は休みだつたが小數の役人が整理に出てゐた。顏を灰色にして地下室へ逃げこんだ。群集は机上の書類を摑んで床に踏み躙つた。裸かの女たちも書類を抱へて夫ぞれ階上のバルコニイに現れた。戸外をうづめてる群集が一齊に拍手した。彼らの頭上に女たちの手を離れた紙片が白い鳥のやうに舞ひ飛んだ。重い綴りになつてるのは眞つ直ぐ落ちたが、一枚一枚のは空氣に乘つて遠くへ流れた。中には斜めになつて昇天して往くのもあつた。群集も女たちも面白がつた。何度も書類を取りに這入つた。出てくる度びに書類を縛つてある赤い紐を切つて次ぎつぎに空中へ撒いた。撒きながら裸の胸を張つて笑つた。群集も笑つた。これは素晴しい遊戲だ。

群集は書類を拾ひ集めて裁判所前の廣場で焚火をはじめてた。色のない炎が日光のなかに立つた。くべる傍から投げ落してよこすので燃料には困らないのだ。厚い書類は子供がてんでに抱へて走り出て來て、火へ投げこんだ。煙りはミイラット中何處からでも見えるやうになつた。火が盛んになると風が起つた。半燃えの一件書類といふやつが思ひ思ひの方面へ飛行をはじめた。空氣はすつかりきな臭いのだ。みんな咳をしながら肩を突つき合つて悅んだ。英吉利の兵隊といふやつさへゐなければミイラットの人々はこんなに平和で愉快なのだ。

火が階段を上つて建物を撫で出したので、今度は一同で消すことになつた。群集は上機嫌でその作業に取りかゝつた。階上の窓には女たちが手を擴げてもう投げる書類のないことを言つてゐた。そのうちに一人二人づつ引つ込んで行つて、仕事を濟ました人の靜かな足どりで正面の玄關からぞろぞろ出て來た。彼らはミイラットの「侮辱され續けて來た印度人の會」の同志だつた。バナドュラを眞ん中に直ぐ群集のなかへ紛れこんだ。裁判所の建物はすつかり火に包まれてもう消せなくなつてた。消さないことにした。そこは廣場で他へ燃え移る心配がないから燒いちまへと言ふのだ。群集の一部が手押し喞筒を持ち出して來てゐたがそのまゝとめられた。群集は靜肅にして火事を見物してた。水甕を抱へた水賣りの男が群集の中を右往左往して昨日よりもいゝ商賣をした。どうしたわけか英吉利兵が來ないので皆は暢氣に火事を享樂することが出來た。「勞農階級の警官」といふ旗を立てた連中が、棒を持つて他の場處から練りこんで來た。群集と微笑を交換して行列をつゞけて去つた。その殿についてゐたモウタア・サイクルが、群集の中を通りながら消魂しい爆音をあげたのだ。二三度後部から煙りを吹いて咆哮した。遠くの群集がそれを間違へたのだ。爆彈と感ちがひしたのだ。混亂が生れた。めいめい肘で人を分けて崩れ出した。水賣りは水甕を落されて割つた。倒れた者は起き上るまへに平たく踏み伸ばされてゐた。群集のヒステリイといふやつは發作が來たが最後何うすることも出來ないのだ。革命といふものは理窟なしにこれを導くだけのことだ。それはバナドュラ達の「侮辱され續けて來た印度人の會」とサウエイトから來てる專門家に任せておいていゝのだ。やつらはこの邊の扱ひ方をよく心得てる。これをうまく持つて行つて何んなにでも見事な××××××にすることが出來るのだ。今は破壞だ。破壞だけだ。そのうちにぽつちり×××といふやつをやり出すのだ。誰も聞いたことのない人間が大變な宣傳で大きな椅子に腰かけるのだ。全然今まで識れてなかつた連中が新しくすることだからみんな期待して何もかもいゝ意味にとる。この町から一歩も出たことのない××××でも、必要があれば、長く外國に亡命してゐたのを呼び戻して迎へたことにしていゝ。それほど偉い人だといふのだ。ミイラットでもこいつをやらう。そのためには地

均しだ。パナドュラは群集の浮足を利用して一層××的なぶちこはしに掛つた。裸かの女達が群集の先頭へ出て警察へと叫んだ。××的にやると恐しいものだ。××はすぐにやられた。市廳もやられた。××と××の死骸が街路に折り重なつた。路傍の小溝に木の葉や紙屑をうかべて血が流れた。どつちが抵抗してもしなくてもどんどん人が死ぬのだ。引つくり返つた自動車の中から呻き聲がしてゐた。傍を走つてゐて誰も自動車を起さうとしなかつた。女たちは子供の手を摑んで市外の野原へ走つた。引つ張られる子供達は足が地面を離れて身體が横ちよに空に流れるやうに見えた。商店からは野菜や玩具がこぼれ出て踏みつけて通つた。市街の八方に新手の英吉利兵が現れてゐた。馬蹄と機關銃が群集の上を歩いた。狹い往來に兩方から挾み撃ちになつた群集はおとなしく殺されて往つた。ロイドは洋袴だけになつてた。上半身はすつかり裸かだ。何處で裸かになつたかさつぱり覺えてないのだ。腕から血が流れてた。小さな怪我だ。これも何うしたのか自分で知らないのだ。麥藁帽子だけはかぶつてた。やつとホテル・ネゴンボへ歸り着いて戶を開けてもらつて這入つた。その晩は一番大きな騷動だ。ミイラットにこんなに多勢住んでたかしらと思ふほど人が出て、英吉利兵を聯隊の建物へ追ひ込んだ。報讐だ。工場勞働者の大群集がやつら以上の××であることを實證したのだ。やつらの武器はすぐ勞働者の武器になつた。××軍の誕生だ。が、この××軍の誕生を見ないで、パナドュラは學校の前の敷石の上で群集の死體のあひだに冷たくなりつゝあつた。

×い制度が確立しさうなのだ。一日でも、一時間でも、確立したものは確立したのだ。ロイドはこの情勢を打電したくて、ホテル・ネゴンボの窓ぎはで足踏みをしてた。凄い群集の精力ぢやないか。ロイドはこんな美しいものを見たことがないと思つた。その美しさが彼を興奮させて報告慾に驅られた。しかしすつかり外部を遮斷されてゝ手も足も出ないのだ。電話も電信もない。汽車も電車もないのだ。たつた一つホテルの車庫に古い自動車が眠つてることを聞いた。彼は支配人に交渉して法外な値段でそれを買つたが、老いぼれの車は三十哩しか出ないといふのだ。ロイドは地圖と亞米利加の

國旗を積んで自分で運轉して出かけた。ミイラットからダンデガムワの町までは百哩近くある。眞夜中に出發した。ミイラットの裏町を選んで走らせた。いたるところで石をぶつけられるのだ。群集が前をふさいで怒鳴り聲が車を圍むのだ。停車すると身體を打ちつけて押し倒さうとするのだ。モトメエタアに亞米利加の旗を結んで通つた。郊外へ出ると尙いけなかつた。武裝の勞働者が一丁毎に誰何して勞働組合軍司令部の命令で今ミイラットから何ものも出ることを許されないから引つ返せといふのだ。ロイドは自分は亞米利加領事であると言つて赤いところに金字のある旅劵をちらと見せた。ミイラットに亞米利加領事がゐないことに誰も氣が付かなかつた。ロイドはそれで暗い田舍道に暖い風を裂いてドライヴして行つた。では、次ぎの町まで許してやるから其處から先へ行つてはならないとその哨兵のすべてが言つた。つぎの町まで行けばい丶。それから先に用はないのだ。何度となく停車させられて同じことを繰り返した。ミイラットを離れるに從つて、自動車をとめて調べるのが勞働者でなくなつた。英吉利の官憲であつたり、親英反動團體の義勇兵であつたりした。それは多く印度人の地主の息子達だつた。瀟洒なボウイ・スカウトの制服で懷中電燈を突きつけたりした。ミイラットの騷音は遠くうしろにあつた。露で草の葉がきらきらしてた。路の上の小石はヘッド・ライトに照らし出されて影が長かつた。薄綠色の服を着た印度人の警官達が焚火をして何か燒いて食べてた。ロイドは段だん周圍が吞氣になつて來てゐるのを知つた。明方になつてダンデガムワの町へ這入つた。郵便局の電信係は徹夜してるのだ。ロイドは窓口へ轉がり込んで賴信紙を摑んだ。何を書いたかよく知らなかつた。通信電報の特別料金といふことが相手に解らないので途法もない費用に上るのだ。幾ら掛つてもい丶が、それだけの金は持つてゐないのだ。カルカッタへ長距離をかけて亞米利加俱樂部を呼び出して、そこから誰かに電報を打つて貰はうと思つた。ところが公衆用の長距離線はホテルに一つあるきりだといふのだ。ロイドは醉漢のやうになつてホテルへ馳け着けた。すると係りの番頭がゐなくて何も判らないのだ。泣き出したくなつて又郵便局へ引つかへした。字數を減らして所持金の範圍内で打たうとすると、彼の前に四萬語も電報がたまつてゐて三四日

待たなければならないといふ。金を摑ませやうとしても、貰つても何うすることも出來ないから取らうとしないのだ。ロイドは狂人のやうに焦つてダンデガムワの町を歩き廻つた。煙草がなくなつてゐるのに氣がついて煙草屋へ這入ると、猶太人の老人が出て來た。こゝらで白人は珍らしいし、ロイドの様子が只事でないので、猶太人のはうから訊いた。ロイドは昨夜ミイラットから來た目的をすつかり話した。同情が猶太人の眼にかゞやいて、彼は直ぐロイドを伴れて郵便局へ行つた。公衆用の長距離線はホテルにあるのだけだが、局には勿論事務用のがあるのだ。彼はロイドのために四時間も局長に嘆願した。あらそつた。哀訴した。最後に、三分間だけカルカッタと通話することを許されたのだ。が、三分間では十五字位しか筆記させられないのだ。殊にむこうが素人だからなほ困難だ。もう三分間負けて貰つた。それから空いてる時を狙つて送話していゝことになつた。ロイドは電話の下で玉蜀黍を嚙つて一日過ごした。何時あくか判らないから離れられないのだ。ミイラットからの政府の傳令がしつきりなしに電話に取りついてゐた。ロイドは一晝夜近くかゝつて廿七回送話した。延べ時間七十三分だ。一語々々句切つて叫ぶので胸が痛くなつた。咽喉は疾うにかすれてゐた。汗が顔中を濡らして湯上りのやうだ。それが眼へ染みて涙が出るのだ。千語餘りを送ることが出來た。それを四日間つゞけた。電話の前に立つ度びに要領の悪い交換手と大喧嘩なのだ。戰時のやうな局の床にごろ寢するだけで眠らずにやつた。一回ごとにカルカッタの亞米利加倶樂部員が義俠的に市俄古評論社へ打電してくれて見たやうな記事になつて雜誌の締切りに間に合つた。新聞より早かつたのだ。おまけに檢閲を經てない。

ボンベイを中心に印度中の都會で××黨員の大檢擧がはじまつてゐた。赤い疑ひのあるやつは嫌應なしに鑵詰めにするのだ。何日も何日もこの風が吹いた。來る印度總督も來る印度總督も狙はれて來たといふのだ。總督なんて看板になつてゐるだけの老爺をやつつければ何うにかなると思つてるのだらうかといつて英吉利人が笑つた。いくら可笑くても人殺しは

取締まらなければならない。ことにその背後に思想といふやつがあるなら猶更だ。政府を乘つ取らうなどといふのだからちやんちやらおかしいと微笑し合つて、警官達はパイプをふかしながら檢擧に掛つた。捕まつたやつは、ミイラットの騒擾がすつかり鎭まるのを待つて其處へ送つて一緒に公判だ。ミイラットいふ町は呆れた町だ。まだ時どきやつてる○印度政廳はミイラット事件を公表して、將來に亘る不愉快な事實が存在するといふのは、この不安の運動の底に或る種の歐羅巴人が關係してゐることである。それが一番不可ないことだと慨嘆した。かういふ邪魔をするやつはびし〳〵やつつけることだと本國の新聞が騒いだ。もしそいつらが勢力を持ち出すやうなら兵隊は幾らでもある。必要と機會があり次第、重い鋲の打つてある靴で踏み潰してしまへと言ふのだ。バアリングトレ・クウパアやオウステン・ソルンベリイ卿達のオックスフオウド同期生倶樂部の輿論もこれに一致した。何うも彼らの標榜する進歩的な若い商業貴族の意見らしくないのだ。が實は、甚だそれらしいのだ。印度のことゝなると英吉利人は躍氣になるのだ。まだ〳〵印度で食つて往かなくてはならない。みんなそれを知つてる。

檢擧された××黨員の中には、先頃ボンベイで百人も死者を出した暴動の嫌疑者がうんとゐる。彼らはミイラットへ護送されることになつてる。まだボンベイの刑務所でごろ〳〵してた。そのうちにチブスが流行つて片つ端から死に出した。監獄醫のウヰグナル博士は鬚をしごいてこれは手の下しやうがないと言つた。そして病死者を前に首を捻つた。その度びに新しい病人が出來て死んで行つた。次ぎは誰の番だか解つてゐる風だつた。當局は狼狽して消毒したり隔離したりした。それでも死んだ。すつかり死ぬまで止まないのだ。これだけ手當をしてる。病氣で死ぬんだから仕方がないのだ。英吉利の新聞は恐慌といふ名で呼んで、早くその恐慌がやまることを祈ると論じた。

××局と××と××の總動員だ。武裝して勞働組合事務所と赤い新聞社と九人の頭株の私宅を襲つた。コミユニストは面白いやうに何處からでも幾らでも出て來た。宣傳文書はトラックで運んで燒いた。コラバとサンタ・クラックの聯隊から深夜極祕のうちに兵隊が輸送された。ボンベイへ着いたのは朝の五時だ。停車場まへに大釜を据えて熱い肉汁を配給した。直ぐ散らばつて全市の部署についた。同時に檢擧が開始されたのだ。みんな寢込みをおそはれて家宅搜索を受けた。逮捕された者は武裝車でチブスの流行つてる刑務所へ收容された。逮捕狀はミイラット地方檢事長の署名あるものだ。ミイラットはボンベイから八百哩離れてるが、英吉利の作つた印度の法律ではボンベイでも有效でさういふことが出來るのだ。罪狀は大英國皇帝に對する事實上の挑戰と叛逆の陰謀といふやゝこしい言ひ廻しだの。裁判は英領印度内ならどこでやつてもいゝのでボンベイでも差閊へないのだが、わざ〳〵ミイラットへ持つて行つた。かうして他の土地の××黨事件をあらゆる機會にみんなミイラットの名へ結びつけて、それによつて、比較にならないほど大變なミイラットそのもの、小革命騷ぎを覆ひ隱さうとした。これは成功した。英吉利の一般人はミイラットといふ町は司法の中心地で實に平和な小都會であらうとの印象を受けた。ちつとやそつと騷ぎがあつたと聞いても大したことゝは思はなかつた。思はせないためにボンベイの檢擧を行つて、それを大きく報道させたので。比較で片つぽを殺したのだ。ボンベイの針小を棒大化して、それでうまくミイラットの棒大を針小した。

　家宅搜査の連中は大きなカンヴアスの袋を持つて行つた。それに眼についた書き物を抛り込んで封印をした。朝の六時にはじまつて直ぐ濟んだ。誰も逃げたり喧嘩腰に出たりしないからだ。それだのに、印度人と英吉利人の兵士が物々しく辻々に立つてそこを寫眞に取つた。ボンベイにはこんな騷動があつたといふので、家宅搜索を受けた家の前に張番してる警官達や、何だか判らないでぼんやり口を開けて見物してる群集なども勿論撮影された。かうしてボンベイ市大××黨事件のニユウスが本國へ飛んだ。その前後バレジヤブ地方のミイラット市もこの餘波を受けて一寸動搖したと小さく出

た。

カルカッタでも檢擧があつた。アムリタ・バザル・パトリカ誌の主筆フイリップ・スプラットも申譯的にやられた。トレイド・ユニオン・コングレスの中央執行委員長ドユンデラ・セガデは出張先のプウナで一週間程入れられた。何のための收監か解つてるのでスプラットもセガデも苦笑した。

第一に、英吉利は何ともないといふのだ。これは果してさうだらうか。彼女は、いま自分が英吉利史といふ本のラストペイヂに近づいて危機に立つてることを意識してる。そして老孃の持つ周到さで、持つてる物を失くしまいと懸命にまはりに注意を拂つてる。それが大體うまく往つてるといふのだ。歐羅巴の人種の中で、自分達ほど現實の變化に敏感に順應して往くものはないと英吉利人がいふのだ。全く笑はせる。やつには只國外の出來事や傾向に撫でるやうに觸れてるやうといふ潛在意識を受けついでるだけだ。それで自分たちを何うしやうといふのでもない。儲けが見えるまでぢつとしてるやうといふやつだ。だから英吉利人は過去に屬する狀態を何でもあんなに大事にしてゐられる。それでゐて、一方には充分近代的にやつてる氣でもゐるのだ。だから何があると、何時もそのことを考へ續けて來たやうに、過去をこわさずに巧妙に立ち廻る。これが英吉利だ。巴里のケエ・ドユ・バッシイの珈琲店で僕がロイドに言つた。

ロイドが答へた。

「君は東洋人が自分の顏を護る時の本能的動作を知つてる筈だ。君自身もそれをやるだらう。兩手で顏を覆ふのだ。それは同時に眼を隱してしまふことで、足許が見えなくて却つて危險ぢやないか。個人と階級が關する限り、いまの英吉利が

同じことをやつてる。大戰前には完全な特權階級といふ社會的一面があつたのだ。丁度羅馬の選ばれた家族のやうな。ところが君、この頃はそれがすつかり變つた。お孃さんが自分の女中を置くなんてことはとても考へられない惡趣味だといふんだ。英吉利のお孃さんがだ。戰爭前に、女中の附かないお孃さんてやつがあつたらうか。ほんとのお孃さんでだ。待ち給へ問題は、女中を置く置かないなんてこつちやあないんだ。もつと先へ往つてる。タイピストに何にでも出て働かないお孃さんは惡趣味だといふんだ。だから、馬鹿ばかしい贅澤と怠惰は戰爭後に出來た後期資本主義のブルジョアに任せといて、元さんのお孃さん階級はみんなタイピストになつて働いてるよ。英吉利も本質的に變つて來てゐるんだ。」

大戰で變つたのは獨逸よりも英吉利だ。殖民地は事實上すつかり一本立ちだ。めいめい自分の國家意識を持ち出してる。まだ英吉利に微かにでも繋がつてたはうが便利だから繋がつてるのだ。英吉利だつて殖民地がそんなに變つたとも殖民地を失ひかけてるともはつきり思つてゐはしない。で、大英帝國といふやつは全體として何ともないといふことになるのだ。僕はほんとにさうだらうかとロイドに訊いた。ロイドは笑つた。

「今にブリテッシユ諸島の代りにニユウ・フアウンドランドかニユウ・ジイランドが英本國といふやつになるさ。それでも大英帝國は大英帝國だからな。中で變る分には何んなに變つても差支へないぢやないか。」

殖民地はさつさと獨立するか亞米利加と結婚するがいゝ。勳章もあまり重くなると厄介なものだ。ところが英吉利人はさうは考へないのだ。

が、何んなことがあつても英吉利は當分金持ちだとロイドが保證した。英吉利といふのは英吉利帝國だ。倫敦のある英吉利は別だと僕が抗辯した。あとの方の英吉利は何うも危機といふやつに面してるらしい。すつかり力が出ちまつてよた

〱してる。それからしつかりやるどころか存在もむづかしいのだ。この力は何うにでもなる政治などゝいふものではない。倫敦のある島の上を五百年潤して來た人間力のことだ。それがもうないのだ。新しい世の中は英吉利の紳士性を要求しなくなつてる。愉快だ。お孃さんはそれを感じて進んでタイピストになるのだ。お孃さんの沒落でなくてなんだらう。英吉利紳士の、そして英吉利そのもの、沒落だ。英吉利の文化は、この紳士道の命ずる役割を演ずるだけの、宗教みたいに受け入れられた概念の上にのみ立つて來た。その風船玉が破裂したのだ。もう何もない。資本主義維持のための道德は英吉利から崩れかけた。僕はケエ・ドユ・パツシイの珈琲店で祝杯をあげた。

ロイドが言つた。

『ところが君、さうなると先刻の過去英吉利が古めかしい衣裳で現れるんだ。倫敦の街を幽靈みたいな影がさつさと足早に歩いてるのを見たことがあるだらう? あれだ。あいつが飛び出して來て英吉利を救ふ。古い英吉利と新しい英吉利はヴァテカンと羅馬法皇のやうに仲よく對立して往くよ。何もないやうで何か殘つてるのが英吉利だ。

待つてるがいゝ。もう直き海峽の下を隧道が走るのだ。それで英吉利へ大陸の風が吹いてくのだ。大西洋は間もなく二日で渡れるやうになるに決つてる。英吉利の亞米利加化が大規模に初まる。これでもこの老孃は僕らを下に見てお高く止まつてゐられるか。他にもまだあるのだ。英吉利の社會は中からぐらついてる。戰爭で痛手を受けたのは佛蘭西ではなくて英吉利だ、革命の前の佛蘭西の貴族の威張りやうはルツソオを出すためだつた。今の英吉利で、時代の水準へ來てる智識人はみんな英吉利嫌ひだ。僕らはこの結論に同意した。

『大英帝國が生きるためには倫敦のある英吉利は死なゝくちやならないのかも知れない。それだけのことだらう。』

夜だ。倫敦のリジエント街をオックスフオウド・サアカスへ向つて左側を賣春婦が行列してた。そのなかの一人がカムグラハムを呼び停めて赤インキのやうな口唇を笑はせた。タム・グラハムはまだ少年なのだ。十八だ。自動車職工で失業してた。ポケットに一磅ばかりあつた。彼は夕刊でバアミンガムのアレン・ブレナン會社の自動車工場に罷業が起つたことを知つて、罷業破りに行かうかと考へながら歩いてたところだ。しかし、バアミンガムへ出かけるにしても、一磅は要らないのだ。それにそんなに急いで行くことはない。このうち幾らかでこの女の部屋へ行つて、朝の汽車で發つてもいゝのだ。グラハムは果物を選ぶ時のやうな眼で女を見た。彼女は其處の毛皮店の横町へ二三歩這入つて行つてこつちに見えるやうにして靴下を直してる。グラハムはランベスの裏に仲間の三人の少年と一緒に小さな家を借りて年上の女を飼つてた。三人共通の妻なのだ。靴下で咬られはしないのだ。莫迦ばかしくなつて歩き出した。女が追ひついて來て腕を組んだ。

『これでいゝの。さ行きませう。』

グラハムは手を上げてバスを停めてた。

（未完）

編輯者雜記

前號「普及版」はたしかに普及の目的を達した。再版辛うじて讀者の要望に應じたのであるが、三版までは時日が許さなかつた。買ひそこれた方もあるかも知れない。偏へに寛恕を俟つ。

だが、廉かつたがためのみで賣れたと思はれては困る。この加速度的讀者層の激增は、より高度へ擴大し行く全民衆的社會意識の動向と完全に一致した證據である。諸賢の熱烈飽くなき支持と歡迎を受くる所以もそこに在る。本號は更に更に增刷しておいた。

前號に優るとも劣らぬ本號の編輯陣を一瞥せられよ。

猪俣津南雄氏の卷頭論文、ブルジョア陣營を闘ひとるための戰略中心問題、重要なる一モメントを示唆した刻下の大文字である、世擧げて經濟恐慌の嵐に狂ふとき、篤學新人橋氏の論文は世界經濟の破局を傳へて鮮明。

失業、失業、失業、濁流に浮ぶこの「失業日本」をどうする？——動亂、動亂、動亂、第二の金融大動亂は招來するや否や？——一は河西阿部野呂三氏によつて失業救濟の鍵を投じ、一は高橋氏の内科的診斷によつて少康を保つてゐる。

謎の王國「滿鐵」の正體、特殊部落「貴族院」の裸形。

「學生製造株式會社論」「博士製造裏面物語」一は徒らに高等遊民を作つて就職難の怒濤に投じ、二は徒らに事大思想に蠢く亡者どもの樂屋をあばいたもの、ともに現代社會の愚劣なる一斷層。

正宗白鳥氏の「文藝時評」は本誌を價値づける定評ものだが、谷崎潤一郎氏も今後毎號特異の形式によつて異色ある隨感隨想を寄せられる筈だ。個性豐かな廣津和郎氏あり、片岡鐵兵氏あり、然り、而して久しく秘められた玉手筐をそつと開いた草人氏の「劇壇秘話」は今度こそ氏の執筆に成るものだ。

チヤツプリン、雪洲、ともに近く吾々の視界に躍らんとする人々。新緑滴らんとして春季スポーツ界動く。中間的興味の高頂に達して讀者を魅了せる「怪奇實話」とともに絶好の讀物たるを信ずる。

創作欄は村山知義氏の「日清戰後」！　百五十枚の大作！　これ一つでも澤山だ。猿之助の春秋座旗上げ興行のために書下した力作。勃興期の我資本主義と軍閥の交錯を主題とした、恐らくは今春文壇劇壇の興味の中心となるであらう。

「文壇アンデパンダン」の提供は、反響實に凄じいものがある、續々たる問合はせの中に一篇二百枚以上と限定したのを窮屈に感ずる向きも多いやうだから、一篇百枚以上といふことに訂正しておいた。ついて見られたい。

中央公論社勞働大衆版第一篇、プロレタリア大衆小說「ゴー・ストップ」を發賣禁止された、一時はこの儘で絶版にしやうと思つたのだが、その後の人氣は絶好だし、註文は殺到するし、惜しい〳〵と言ふものだから、考へ直して改訂版を出さうかと今や種々交渉準備中である。プロレタリア經典として勞資兩面から期待されてゐるらしい。

本誌に連載されて未曾有の文獻として、好評嘖々だつた高橋龜吉氏の「資本王國の財産調べ」は「日本財閥の解剖」と題して本社から出版した。「日本財閥の總體的解剖」の總論的一篇を附加して實に立派な本になつた。これは永久に保存すべき好個の文獻だからである。現代日本の政治機構を傀儡的に操つてゐる偉大なる金權財閥の正體が今ぞ明確に公衆の前に曝け出されたのである。

本社の婦人公論愛讀者大會には、本誌讀者諸賢も、夫人令妹の同伴者としておでかけ下さい。

定價		
冊數	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

每月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

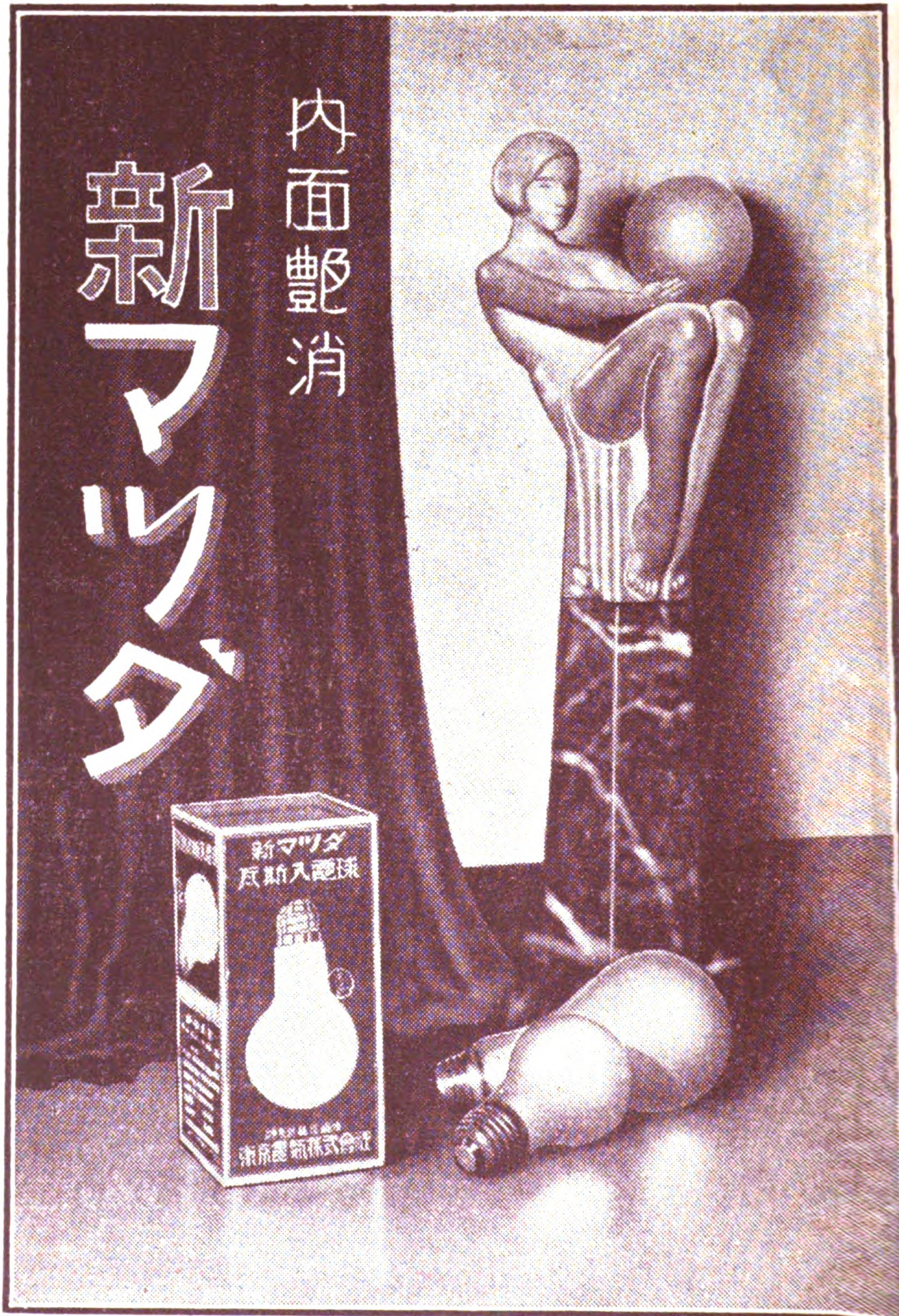
廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和五年四月十八日印刷
昭和五年五月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
東京市牛込區榎町七番地
印刷人　竹內喜太郎
印刷所　東京市丸ノ內ビルヂング五八八區　日清印刷株式會社

中央公論社
電話丸ノ內〇〇〇 五三五・五三六・五三七番
振替東京三四番
同長野三二〇五番


内面艶消
新マツダ
新マツダ
瓦斯入電球
東京電氣株式會社

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

CHUO KORON (*The Central Review.*) **Published Monthly.**

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. TOKYO JAPAN.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.